

ガールズ&パンツァー～黒森峰からやってきた狼～

疾風海軍陸戦隊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

3年前、黒森峰中等部で「黒狼」と呼ばれ恐れられた戦車乗りがいた。修羅さながらに敵戦車を狩り、黒森峰不敗神話の基礎を固めたその者はある日忽然とその姿を消す。彼がいなくなつて3年その名は戦車乗りの中では知らない人はいないほど伝説となつていた。

そしてその黒狼は大洗に静かに暮らしていたが、転校してきた一人の少女に出会い、彼はまた戦車道という戦地へとまた足を踏み出すのだつた。

## 目次

紹介します！	1
プロローグ	7
勧誘です	12
再会です	16
再開です その2	21
決断です	28
地下での出会いです	32
戦車道始めます	37
戦車探します	41
戦車見つけました	45
戦車を洗車します！	50
放課後と食事会のお誘い	56
肉じゃがは男子の好物か否か	62
戦車乗ります	69
練習試合です	75
放課後の出会い	84
練習試合申し込みます	93
個性は人それぞれ	101
練習試合の作戦は大切です	108
試合前の格闘です	115
試合開始です	121
初めての他校試合です	126
決着です	135
試合の終わりと出会いです	145

新たな門出です	151
これからのことです	158
喫茶店での再会です	163
船上での決意	172
サンダースは意外とフレンドリーです	178
オツドボールとブラツキーです	184
訪問と再会	191
水着選びは女子のたしなみです！	199
ウォーター・ウォーです！	206
一回戦始まります！	214
初戦の戦い、地獄のホットライン	220
反撃開始です！	230
白熱戦です！	237
追いかけてここです！	246
一撃必中です	253
一回戦の勝利と道です！	260
お見舞いです	268
お見舞いの後の夜です	274
次はアンツイオです！	279
三年前の黒森峰その1です！	287
三年前の黒森峰その2です！	294
三年前の黒森峰その3です！	301
三年前の黒森峰、ファイナルです	308
みんなで一緒にです！	315
戦車再び探します！	323

501	雪の中の二人	333
493	流離の詩人と黒き狼	343
486	寒さに響くカンテレの音	350
478	もうすぐ準決勝です！	356
472	小さき狼、迷子の子熊の親を探す	365
467	小さき狼と迷子の子熊の出会い	375
461	小さなオオカミと小さなウサギです	381
456	命のタイムリミット	388
449	紅茶が冷めるまでに……	396
442	プラウダでのお茶会です	403
437	小さき義姉弟です	410
431	雪降るプラウダ高校での再会です	416
423	試合後の宴です！	418
416	はげしい激戦です！	423
410	山岳での激闘です！	431
403	試合開始！マカロニ作戦です！！	437
396	二回戦始まります	442
388	二回戦前の日常です	449
381	新たな仲間です！	456
375	カバさんチームの家、訪問します！	461
365	アンツイオの秘密兵器です！	467
356	the・アンツイオ高校です！	472
350	二度目の偵察です	478
343	ノリと勢いのアンツイオです！	486
333	捜索隊です！	493

西住流からの使者

506

呪われた流派

512

準決勝前の家元たち

519

準決勝です！

526

準決勝の暗雲です

532

雪の進軍歌

538

地吹雪の罨と衝撃の告白

544

廃校阻止と時間

554

雪上のタイムリミット

559

雪の中の演奏

565

雪の戦場にあんこうたちは踊る

572

ところでん作戦です

580

絶体絶命です！

588

死神の狂騒曲です

596

赫い雪に沈む狼

601

師弟

608

決勝戦前の準備です！

614

訪問者

620

大洗の試練です

626

試練!! 大洗横断ウルトラクイズです!!

630

大洗横断ウルトラクイズ! 第一の試練です!!

635

大洗横断ウルトラクイズ! 第二の試練! 幕末少女は語ります!

640

大洗横断ウルトラクイズ! 第三の試練! 乙女の戦場です!

645

大洗横断ウルトラクイズ! ファイナルステージです

652

紹介します！

武藤義弘（元の名は高杉義弘）

所属校：黒森峰女学園中等部↓県立大洗学園

学年：2年生（普通二科C組）

所属チーム：Fチーム（黒狼もしくはオオカミさんチーム）

担当：戦車長、副隊長補佐

身長：157cm

出身：熊本県熊本市

現住所：大洗学園寮

家族：師匠（エディータ・ロスマン）

誕生日：3月18日（うお座）

年齢：16歳

血液：AB型

好きな食べ物：カレーライス シベリア 鍋料理など

嫌いな食べ物：特にない

好きな教科：歴史、外来語

嫌いな教科：数学

趣味：読書

日課：戦車戦術の研究

好きな花：ヤエザクラ

好きな戦車：61式戦車

座右の銘：おもしろきこともなき世を面白く

本作の主人公でみほやエリカの幼馴染でポニーテールに纏められた黒髪（のちにショートカットになる）で赤い目が特徴。

かつて中学校時代では「黒狼」と呼ばれ、黒森峰最強神話の基礎を固めたと言われるほどの優秀な戦車乗り。また50両しかもベテラン揃いの相手の戦車を撃破したり、幾度の練習試合でも一度も被弾せず勝利し、それどころか数倍ある敵戦車を総なめにした

。また、強行武力偵察と奇襲による一撃離脱戦法が得意なため戦車道履修者には「ビットマンの西住、カリウスの島田にバルクマンの黒

狼」とも呼ばれた。

顔は女性みたいに中世的な顔立ちで幼く、また平均男性よりも背が低いことから黒森峰の先輩からは「チビ狼」と呼ばれていたこともあった。そして現在も身長は伸びず、そのことを気にしていることがある。

因みに顔については母親譲りだからと特に顔つきにコンプレックスなどは抱いていないとのこと。

幼くして両親を失い、しばらくは祖父とともに暮らしていたのだが祖父が亡くなった後は母の知人であるドイツ人のエディータ・ロスマンに引き取られる。

本名は高杉だったが黒森峰を去った時に祖父の性であった武藤を名乗る。

みほとエリカとは小学校低学年からの仲で中学校までいつも共に行動していたため無二の親友と言っているほどの間柄、またその光景を見て当時、黒森峰のみんなから『黒森峰中等部の三羽鳥』と呼ばれた。

また義弘の母親は戦車道の名選手だった西住しほの友人であったため、西住家、特にまほには弟のように可愛がられていた。

車長としての才能の他、相手を補佐するのが得意で黒森峰時代では後輩の育成や試合の申し込みなんかをまほにすべて任されていた。また副隊長を補佐する「副隊長補佐」も任されていた。

性格は心優しくて面倒見が良いが恋とかそう言うのは鈍感で初心な面がある。またみほ曰く「優しさに境界線が無い」と言われているため、一部の戦車道女子から好意を持たれているが本人はまったく気づいていない。

中学二年の時、謎の不治の肺病「肺血病」に掛かり、それを治すために戦車道の師匠であるエディータ・ロスマンとともにドイツへと行くため戦車道を辞め事情を知っているエリカを除き、皆に別れの言葉を言わず黒森峰を去る。因みに去った表の理由は「海外留学のために黒森峰を辞めた」ということにしている。

師匠がドイツ人なのと病を治すためドイツに行っていたためドイ



ツ語がペラペラ。また戦車道も本場ドイツ流の戦車戦術を習っていて。その荒々しいやり方から師匠であるロスマン先生曰く「ドイツ喧嘩戦法」と呼ばれている。

また戦車道の師匠であるエディータ・ロスマンにはたくさんの弟子がいるため義弘にはいろんな姉弟子がいる。特にドイツにいる姉弟子たちとプラウダ高校にいるカチユーシャとは姉弟同然の仲であり、仲がいい

そしてカチユーシャもまほ同様、弟分である義弘のことを溺愛し可愛がっている。

また趣味は戦車戦術の研究で習った戦車戦術を独自に改良して新しい戦法や作戦案を書いてノートに纏めたりしたりしてる。

「肺血病」は黒森峰を去ってから三年後もいまだに治っておらず、たまに咳が出たり肺が苦しくなったりし、最悪の場合は吐血する時もあるがそのことは大洗や黒森峰を含めた他校の生徒のみんなにはおろか、みほにもいまだに内緒にしている。

### 篠原道子

所属校：黒森峰女学園中等部↓県立大洗学園

学年：2年生

所属チーム：Fチーム（黒狼もしくはオオカミさんチーム）

担当：砲手

身長：168cm

出身：神奈川県

現住所：大洗学園寮

家族：父、母、妹

誕生日：5月31日

年齢：16歳

血液：A型

好きな食べ物：ラーメンとコーヒ

嫌いな食べ物：キムチ

好きな教科：物理、数学

苦手な教科：国語

趣味：歌を歌うこと

義弘の乗るパンターの砲手であり、義弘とは黒森峰時代からのパートナー的存在である短い金髪の少女で、中学時代では『戦車道界最強の砲手』と言われるほどの凄腕の砲手で飛んでいる砲弾を命中させるほどの腕前でその腕は今でも健在。その腕前はナオミやノンナを凌ぐほどでナオミからは「砲手になるきっかけを作った憧れの選手」と言われナオミからは尊敬されている

義弘が黒森峰を去った後、彼女も戦車道から身を引き、数年後大洗女子に転校し、義弘が現れるまで不良たちのボスをしていて、不良たちからは『姐さん』と呼ばれ慕われている。

昔は長髪に黒メガネで風紀委員の委員長だったらしいが大洗に転校した後は風紀委員にならず不良のボスをしていた。なぜ不良のボスになったのか武部に聞かれたときは『一度悪になりたかった』『おかつぱ頭にするくらいなら不良のボスをやって不良たちを閉じた方がまだまし』とのこと、また船底のヨハネスブルグを統治している船舶科のお銀とは顔なじみであり、互いに争わないよう縄張り決めをしている。

聖グロリアーナの幹部であるルクリリは双子の妹であり、姉妹仲は悪くなくたまに電話で会話をするとのこと

性格はとにかく姉御肌な一面が多く、戦車探索で遭難した時不安がっていた一年生を歌を歌って落ち着かせようとしたりと面倒見のいいところがある。また、義弘のことは中学時代からの仲だったので信頼している。また、彼女は3年ぶりにみほに再会した時みほに覚えてもらえなかったときはものすごいショックを受けていた

服部静

所属校：大洗学園

学年：1年生

所属チーム：Fチーム（黒狼もしくはオオカミさんチーム）  
担当：操縦手兼通信手

身長：157 cm

出身：千葉県

現住所：大洗学園寮

家族：父と母

誕生日：8月18日（うお座）

年齢：15歳

血液：B型

好きな食べ物：カレーライス

嫌いな食べ物：特にない

好きな教科：歴史

嫌いな教科：家庭科

趣味：なし

義弘の乗るパンターの操縦手であり、中学時代では知波単学園にいた。砲手の道ことは遠い親戚にあたる子。戦車の操縦の腕は麻子と張り合えるぐらいの腕前。努力家であり、影でパンターの操縦の練習をしている。

性格は物静かで、先輩には敬意をもって話すことが多い

雪風小波

所属校：大洗学園

学年：1年生

所属チーム：Fチーム（黒狼もしくはオオカミさんチーム）

担当：装填手

身長：156 cm

出身：静岡県

現住所：大洗学園寮

家族：父と母

誕生日：8月6日（うお座）

年齢：15歳

血液：A B型

好きな食べ物：ハヤシライス

嫌いな食べ物：特にない

好きな教科：体育

嫌いな教科：数学

趣味：忍術

義弘の乗るパンターの装填手である。ほとんどしゃべらない無口な少女。初代黒狼チームの通信手兼操縦手を務めていた。従兄の赤目の推薦により装填手を務めることになった。戦車道を履修する前は忍道を履修しておりたまに口調が時代劇風のしゃべり方になることがある。

また先祖は彼女曰く代々伊賀の忍の出らしい……

## プロローグ

このガールズ&パンツァーという物語が始まる3年前・・・黒森峰中等部戦車道に「黒狼」と恐れられた戦車乗りがいた。修羅さながらに敵戦車を狩り敵からは「黒森峰の悪魔」とも呼ばれたその戦車乗りは突如その姿を消すのだった・・・だがその者の功績は後の黒森峰無敗神話の歴史の基礎を完全に固めその名を歴史に刻み、戦車道を志す者には伝説的な存在となっていた。

だが、なぜ「黒狼」は忽然と姿を消したのかそれは誰も知らない。

それから3年後の4月・・・

ピピピピピー

とある部屋の中で目覚ましのアラームが鳴る。

「う、うくん・・・」

その音に目覚め布団から少年が起き、アラームのスイッチを切る。そして少年は布団から出て目覚まし時計の時刻を見る

「・・・7時か。まあ、ちょうどいい時間だな」

少年はそう言い、目覚ましを机に置くと、起き上がり、まだ眠たそうにあくびをし洗面所に向かう。

その少年の姿は、まるで女性のように細長く、黒い長い髪を後ろに束その眼はまるで血のように赤かった・・・

ジャブジャブジャブ

彼は洗面所に水をためそして溜めた水で自分の顔を洗う。その時、彼の額には小さな切り傷があった。少年はその傷を眺め

「・・・あれからもう3年たつのか。まあ、もう昔の話だな」

そういうと彼はタオルで自分の顔を拭き、そして、冷蔵庫からパンと牛乳をとりだし、それを食べる。

「この生活も慣れてきたな・・・みんな怒ってるのかな・・・勝手にいなくなつて」

素晴らしい少年は目の前にある写真立ての中にある写真を見る。そ

の写真には黒い戦車服を着た自分と、茶髪で引つ込み思案そうな少女、長い銀髪で目がきりつとしている少女が肩を組んでピースサインしている写真だった。

「おっと、いけね。急がねえと遅刻するな」

そういつて少年は、朝食を終え、学生服へと着替え、自分の向かう学校へと向かう。

大洗学園。もとは女子高だったが、近ごろは男子と共学すべしという学園長の発案により実験的にだが、共学となった学校なのだが……  
「はあくやっぱ男俺一人は結構つらい。」

今、大洗にいる男子生徒は彼だけなのだ。よってクラスにいる女子たちはみんな珍獣を見るような眼で見えてくるので、少年はさすがに堪えるのだった。

すると、誰かにぶつかる

「あ、すいません」

「いえ、こちらこそ……」

少年にぶつかってきたのは自分より少し身長の高い長い髪の女性で何か眠たそうにふらふらとしていた。

「おい。大丈夫か？今にも倒れそうだぞ」

「……辛い」

「はあ？何が？」

「朝、起きるのが辛い……朝なんて来なければいいのに……そうすれば一生夢を見ていられる」

「あくその気持ちわからなくもないな。だけど今は昼だシャンとしないと今度は階段とか落っこちるぞ……あ、そうだ」

「そういう少年はポケットから飲み物を出す

「なんだ。それは？」

「俺も朝に少し弱くてな。眠い時これ飲んで何とか耐えている。やるよ」

「そういう少年は少女に飲み物の瓶を渡すその瓶にはリゲオンと書

かれていた。

「すまない……借りができたな」

「借りつてモノじゃないよ」

「それで：お前ここで何をしているんだ？たしかまだ授業中だぞ」

「そのセリフそのまま返すよ。君も授業中はずだろ？」

「点数取ってるから、大丈夫」

「そうか……俺もだ」

「素晴らしい二人は苦笑しあう。

「実はな、どこかいい昼寝場所を探していたんだ。」

と少女は、また眠たそうに言う。すると少年は腕を組んで何かを考  
えそして……

「昼寝場所か……そうだ。校舎の森にあるつり橋がある広場知っ  
ているか？」

「ああ、知っている。行ったことはないがな」

「そこに大きな切り株がある。あそこは今の時期は夕方まで気持ちい  
い風が吹いて昼寝の場所には最適な場所だ。」

「本当か？」

「ああ。本当だ」

「わかった……また借りができたな。それじゃあ、私はそこに行  
く。ありがとう」

「素晴らしい、彼女はふらふらと歩きだし、その場からいなくなった。

「やれやれ。別に借りとか、そういうのは良いのに、律儀な子だな……」

少年はそうつぶやくと。また、廊下を歩きだそうとすると……  
「ちよつと、君」

急に後ろから声をかけられた。少年は声のするほうへと顔を向け  
るとそこには3人の女子がいた。一人は背の高いポニーテイルな子  
ともう一人はドイツ軍の参謀がかけそうな方眼鏡をした子。そして  
その真ん中には中学生ぐらいの身長の子芋を食べているツイン  
テールの少女がいた。その三人組のことを少年は知っていた。

「これは、これは。誰かと思ったら、生徒会長様と副会長様。それ  
と……誰でしたっけ？」

「なっ！私を忘れるな！広報の河嶋桃だ!!」

「あつ！モモちゃん先輩でしたか。それは失礼しました」

「モモちゃん言うな!!」

「まあまあ河嶋落ち着いて。」

河嶋は少年に名前を忘れられて怒るが、生徒会長である角谷杏に諫められる。

「で、何か御用ですか？もしかして授業さぼりの件でしたら、直ぐに始末書でも書きますが」

「それもそうなんだけどさ。まあ、それは置いといて君に話があるんだよ」

「話？」

「うん。ここじゃあ、何だし。ちよつと生徒会室まで来てくんない？」

「……分かりました」

素晴らしい、少年は素直に3人についていくのだった。

#### 生徒会室

「お茶どうぞ」

「……ありがとうございます」

生徒会室に連れてこられた少年は副会長の小山柚子に出されたお茶を飲んで今ソファアに座っている。

「きみ。もうこの生活とか慣れた？うちの学校元女子学校だったから騒がしかったでしょ？」

「はい。最初は大変でしたが、一年半もいればなれますし、それなりに楽しくやっています。それに女子が騒がしいのは元気な証拠ですから」

「そうか……それはよかった。」

素晴らしい生徒会長の角谷は干し芋をほおぼる

「で……あの要件は何ですか？」



「ああ、そうだったね。単刀直入に言わせてもらっていいかな？」  
「いいですよ。そのほうが俺にとつても都合がいいし、へたに遠回りされた言葉は嫌いなので」

「そうか。じゃあ言うよ。君には戦車道を取ってもらいたいんだよ。武藤義弘君。いや、この場合、元黒森峰中等部戦車道のエース。「黒狼」って呼べばいいのかな？」  
「っ!？」

少年こと義弘は自分のかつて黒森峰でのあだ名を目の前にいる角谷杏に言われて驚くのだった。

## 勧誘です

「君には戦車道を取ってもらいたいんだよ。武藤義弘君?。いや、この場合、元黒森峰中等部戦車道のエース。「黒狼」って呼べばいいのかな?」

「っ!」

義弘は自分のかつて黒森峰でのあだ名を目の前にいる角谷杏に言われて驚くのがだった。

「それにしても驚いたよ。君がああの伝説の戦車乗りだったなんて。調べるの大変だったんだよ。名字も変わっていたし新聞や学園内でも名字で呼ばせていたから名前を調べて知った時は驚いたよ。まさかあの黒狼が男だったんだからね」

と、角谷は淡々と言うが

「失礼ですが、人違いではないでしょうか?私はそのようなもの知りませんし、それに、黒森峰は確か女子高だったはずでしょ?それに俺は男ですよ?なぜ男である俺が黒狼なんですか?」

義弘はとぼける

「なっ! 貴様嘘を言っても無駄だぞ! この写真が何よりの証拠だ!」

と、河嶋は義弘の前に新聞を出す。その一面には「黒森峰最強神話誕生!!」と書かれていた。その見出しの写真にはその隊長である西住まほが写っていた。その後ろに少女と話し合っている自分も写っていた

「この写真が何ですか? この写真に写っている人は私と別人でしょう。いわゆる他人の空似です」

なおもとぼける義弘。その言葉に河嶋は……

「なっ! 貴様。まだとぼけるか!」

「とぼけるも何も。それに仮にその伝説の戦車乗りが俺だとして、戦車道にいれてどうする気ですか? それになぜ、いきなり戦車道を? 会長が祭り好きなのは知っています。なぜ戦車道を復活させるのですか?」

「それは、言えないんだよな。でも君が戦車道に入ってくれたらう

れしんだよね〜」

「なぜですか？戦車道は女性の武道・・・」

「でも、男性がやってはいけないというルールはないんだよね〜それに君がああの伝説の戦車乗り「黒狼」こと「高杉義弘」つという人物が大洗にいるという情報、黒森峰の中学の時の知り合いから聞いているんだよね〜。だからどうとぼけても無駄だよ高杉君。」

この時、義弘はこう思った「この会長・・・何をとぼけても無駄だど」。義弘はため息をつきそして

「・・・確かに会長のおっしやる通り、俺は黒森峰にいました。それとその名字で呼ぶのはやめてください。その名は3年前に捨てたので、今は武藤でお願いします」

「そうか。じゃあ、改めて武藤君。君には戦車道を取ってくれないかな？」

「お断りします」

「なっ！貴様!!」

義弘が角谷の申し出を断り、それを見た河嶋は義弘に怒鳴ろうとしたが・・・

「まあ、まあ、河嶋落ち着いて。ごめんね〜河嶋はちよつと気が短いんだよ」

と、角谷が河嶋を抑える

「・・・で、なんでいやなの？戦車道を取ればいろいろと特典が付くんだよ？」

「その特典当てましようか？干し芋三日分ですか？」

「あれ？君ってエスパ？」

本当に干し芋三日分かよ！

「会長が干し芋好きなのは知っていますから。それに今会長が食べている干し芋は巷ではなかなか食べられない最高級干し芋でしょ？」

「君はシャーロックホームズかな？それはともかく特典は干し芋だけじゃないんだよ。他にも200日間連続で遅刻しても全部パーにしてもらえるし、単位は普通授業の3倍貰えるし、極め付きには学食の食券100枚プレゼントする予定だよ〜」

「随分と無理に出しましたね。会長……何か隠していませんか？あなたともあろう人がこんな無茶な特典を付けてまで戦車道の履修者を集めようとする。これはただ事じゃないと思います。……」

義弘は目を細め角谷を凝視する。

「いや、先ほども言った通りこればかりは言えないんだよね。ここは上の事情ついで、取り敢えずここは、納得してもらえないかな？」

と頬を掻きながら角谷はそう言う。その時、義弘は角谷は笑つてごまかしているがその眼は何か真剣というか何か大事なことを抱え込んでいるというのに気が付く。

「……分かりました。これ以上の詮索はしません。ただ、戦車道を取るか否かももう少し考えさせてくれませんか？こつちもいろいろと混乱していますし」

「うん。いいよ。無理言つてごめんね武藤君」

「いいえ、こちらこそありがとうございました会長。では失礼します。副会長さん。お茶美味しかったです」

そういつて、義弘は部屋を出ようとしたが何か思い出したのか立ち止まる

「どうしたの武藤君？」

副会長である柚子が心配そうに見る。

「あ、あの……すみません。授業さぼりの始末書つてどこですか？」

義弘がそういうと角谷除く2人が少しコケて苦笑する。すると角谷は干し芋を食べながら

「ああ、そのことは良いよ。今回は見逃してあげるから。それじゃあ、武藤君。先生に見つかからないように頑張つてね」

「……感謝します会長」

そういつて義弘は生徒会屋を出たのだった。

「会長。いいんですか？言わなくて。もしいえば彼は協力してくれたかもしれないんですよ？」

「うん。そういう手もあったよ。でもね河嶋。私はそんな手をしてまで彼に戦車道を取つてほしくないし、逆に彼に重い責任を背負わせて

しまう。そんなこと私はさせたくないよ」

「ですが、彼が協力してくれなければ私たちの学校が・・・」

「気持ちわかるよ河嶋。でも彼にはのびのびとやってもらいたいからね」

「でも会長。彼は協力してくれるんでしょうか？」

「大丈夫だよ。小山・・・彼はきつと協力してくれるはずだよ・・・」

そう願う角谷であった。

「・・・・・・戦車道つか・・・」

一方授業も終わり学校から帰ってきた義弘は私服に着替え、机に座り物思いにふけていた。そして、かつて黒森峰時代の写真を見て、「俺なんかが、またあの世界に踏み込んでいいのか・・・」

そう悩むのであった。そして義弘は壁に掛けてある襟に白い文字でs sと書かれたかつて自分が着ていた黒森峰の戦車服を見るのだった。

そしてそれから数日後、彼はこの後思いもよらぬ相手と再会するのだった。

## 再会です

あの勧誘から3日、俺はまだどうするか決まっていなかった。会長からは「1週間待ってあげる」と言われたんだがあれから3日たって俺は悩み続ける。俺にまた戦車道をする資格があるのか……

『まさか、君が伝説の戦車乗りだったなんてね〜』

「ふっ……俺が伝説ね……」

俺は角谷会長が言っていた。伝説つという言葉を思い出し、苦笑した。

「俺は伝説でもなんでもないよ……そんなたいそうな人間じゃない。」

ベツトの上で腕で顔を隠し、そのまま目をつぶるのだった。

翌日……

「結局一睡もできなかった……」

あれから俺は今までの記憶が頭の中でぐるぐると周り、結局眠れず目にクマができ、そのまま登校することになった。朝は嫌いじゃないが、俺は朝の寒さが苦手だ。

「はあく……何やってるんだろ俺……もう3年前……昔のことなのにな」

そんなことを言っていると……俺の前に見覚えがある人がふらふらと歩いていった。確かあいつって……

「おい。ふらふらさん……また寝不足か？」

俺がそう声をかけると少女はきつそうな顔をして眠たそうに眼をこすりながら

「……なんだ。またお前か……お前も目にクマがあるんじゃないか  
いか」

「違う。これはチンピラに殴られた。君にもクマあるんじゃないか」  
「クマじゃない。イメチェンだ」

「どんなイメチェンだよ……ほら肩貸してやる。ふらふらの二人が力合わせていけば2倍の速さで学校につく」

「……すまない。確かお前は……」

「武藤だ。武藤義弘。そういうお前は？」

「……冷泉麻子だ。また借りができたな武藤さん」

「借りなんていらねえよ。俺がしたいからそうしてるだけだ。……」

「そういえば昨日やったドリンクはどうしたんだよ？」

「……飲んだ。だけどあんまり効かなかった」

「そうか……」

あれ結構強めの奴なんだよな……変だな……

「そういえば、前に教えてくれた。あの昼寝場所とつてもよかったぞ」

「そうか……気にいってくれて何よりだ。」

そんなこんなで俺たち二人は何とかギリギリ校門の前につくのだった。

「ほら、ついたぞ冷泉。」

「……すまない」

「遅刻ギリギリよ二人とも」

と、校門の前に立っていたのは風紀委員の腕章をしたおかつぱ頭の少女、園みどり子ことそど子がいた。

「冷泉さん。また遅刻するところだったわよ。いい加減にしないと留年してしまうわよ」

「わかっている……そど子」

「ちよっ！何度も言ってるでしょ！私の名前は園みどり子！何度もあつてるんだからいい加減覚えなさいよ！」

「わかっている……そど子」

「……もういいわよ。……それよりあなた武藤さんだったっけ？次、冷泉さんが来ても無視してくださいね」

「あ……はい」

「……そど子」

「何か言った？」

「別に……」

そど子の言うことに反発するように彼女の名を略して言う冷泉。するとそど子はそのことが聞こえたらしくキツとにらむ。すると冷泉はさつき言ったことをごまかし俺は冷泉を担いで校門の中へと入った。

「……すまない。巻き込んで」

「いや。謝ることはないよ」

「武藤さんにはまた借りができてしまった」

「だから、別に借りとかいって」

「そういうわけにはいかない……借りは借りだ。受けた恩は必ず返すのが私のルールだ」

そう言い、冷泉は自分の教室に向かうのだった。本当に律儀な子だよ。そう思い俺も急いで教室に向かうのだった。

「はあ〜 結局、遅刻か〜」

俺は机の上に伏せてそうつぶやく。そう結局遅刻してしまった。

「まったく……今日はついていないな〜」

「ねえ、ねえ、聞いた？隣のクラスに転校生が入るらしいわよ」

「へ〜どんな子？」

「なんか、引つ込み思案そうな子だったわよ」

「へ〜」

そんなことを言っているとすぐそばにいる女子がそんなことをしゃべっているのが聞こえる。この時期に転校生か……珍しいな。それに引つ込み思案つか……なんかあいつを思い出してしまふ。引つ込み思案だが友のためなら勇気を出すあいつに……俺もあいつみたいに強かつたらな……そんなことを考えていた。

すると……急にスピーカーからアナウンスが聞える。その内容は全生徒は体育館に集合せよとのことだった。



体育館について座っている。

「(やつぱ、男子生徒、俺一人だどうしても浮くな・・・)」

そんなことを考えていると急に室内が暗くなりそしてスクリーンに何かが写るのだった。その題名は

『戦車道』

っと書かれていた。とうとうあの3人組、実行しやがったよ。そして、その戦車道の紹介アナウンスをしているのは小山さんだった。

『戦車道、それは伝統的な文化であり、世界中で女子の嗜みとして受け継がれて来ました。礼節のある、淑やかで慎ましい、そして、凛々しい婦女子を育成する事を目指した武芸でもあります。戦車道を学ぶ事は、女子としての道を極める事でもあります・・・』

小山さんはアイドルとかになっっているんな歌とか歌いそうだな。例えば「お前の母ちゃんxx」とか。え？違う？まあ、どっちでもいいけど。そんなこんなスクリーンには三号戦車j型が写り、女子戦車員が乗って砲撃したり、凱旋したりしている映像が流れだす。そして小山さんのスピーチもクライマックスのところまで来ていた。

「さあ、皆さんも是非とも戦車道を学び、心身ともに健やかで美しい女性になりましょう。来たれ！乙女達!!」

小山さんがスピーチを終えると、急に大きな音と白い煙が上がりいつの間にか中央に生徒会三人がいた。

そして、履修科目に戦車道を入れること、そして戦車道履修者にはこの前俺に行っていた特典のことを話した。干し芋の方でなく後者に言っていたことだ。もし特典が干し芋ならだれも取らないからな。

そして放課後、俺は帰宅する準備をした。周りの女子たちは先ほどの戦車道の話をしている。俺は教科書などをカバンに入れると、教室から出て、そしてその階段を下りて、自分の住む寮へと向かう。赤い夕陽があたり一面を赤く染めそして道のわきにある桜の木から桜の花びらが飛び散り、通路をまるで桜の絨毯のごとくのごとく敷き詰められていた。これも春にしか見られない光景だな。俺はそう思いながらそのまま、桜の景色を楽しみながら寮へと進む。

「(後、数日で決断か・・・)」

俺はいまだに戦車をするか否か悩んでいた。本当に俺がやつてもいいのか?そう考えている。

「あれから3年・・・あいつは元気にしているのだろうか・・・それとも俺を恨んでいるのかな?」

そんなことを考えているうちにいつの間にか自分の寮につく階段を上がり角を曲がる。すると・・・

ドンツ

「うわっ!!」

「きゃあっ!」

誰かにぶつかってしまふのだった。蛍光灯のランプが消えているためか薄暗くて顔はあまり見えなかったが見るとそこにはうちの制服を着た女子生徒がいた。

「あっ!すみません。大丈夫ですか?」

「ごちらこそ、すみません。ボーとして・・・」

そう言い女子生徒が謝る。そして俺とその女子生徒が顔を見合わせると、点滅していたライトが付き二人の顔を照らす。

「っ!」

俺はその女の子の顔を見て驚愕した。向こうも同じく俺の顔を見てびっくりしている。そしてしばらく互いに固まり、そして・・・

「・・・みほ」

「・・・高杉君」

俺の昔の名字を言う彼女。

俺は黒森峰時代の親友であり最愛の人である彼女、西住みほと再会したのだ・・・

## 再開です その2

「……………みほ」

「……………高杉君」

俺とみほは互いの名を言いそのまま立ち尽くしていた。なんで、みほがここにいるんだ…彼女は黒森峰にいるはずだ。それなのになんてこんなところに…………俺はそう思っていた。

最初は他人の空似だと思っていたが彼女が俺の昔の苗字である高杉と、呼んだこと。そしてその顔は三年たっても面影がある。間違いないみほだ。このときそう思った。

聞こえるのは蛍光灯から僅かに聞こえる放電する音。それ以外は静かでしばらく沈黙が続いた。

「……………本当に高杉君……………義弘君なの？」

その沈黙を最初に破ったのはみほだった。その目は涙でたまっていた。それはそうだ。俺はあの時、別れも言わずに黒森峰を去った。

「ひさしぶり……………三年ぶりだな。みほ」

「義弘君っ！」

涙があふれると同時にみほは俺に抱き着いてきた

「どうして……………いきなり居なくなっちゃたの！」

みほは涙を流しながら俺にさういう。

「すまんみほ。急にいなくなったりして……………」

俺は彼女の耳元にささやき、しばらく彼女が落ち着くまで抱きしめていた。

### 数分後

「落ち着いたか？」

「うん。ごめんね。いきなり抱き着いて……………」

「いや。いいんだよ。別に気にしてない」

その後みほは落ち着いたのか俺から離れて少し照れてさういう

「それより……義弘君はなんで、ここにいるの?」

「それはごつちのセリフだみほ。お前こそなんでこんなところにいるんだよ。黒森峰のみんなはどうしたんだ?」

俺がそう言うともみほは黙って下を向く。何か深い理由わけがあるな。

「まあ、それはいいや。それより……ここではなんだ。俺の部屋で旧友同士、話さないか?」

「え?義弘君の部屋って……」

「え?ああ、この部屋だよ」

と俺は自分が住んでいる寮室の扉を指さすとみほは驚いたのか

「えっ!?!ここって私の部屋のすぐ隣だよ!?!」

「え?そうなのか?」

だからみほがここにいたのか……

「まあ、とにかくあがれよ。幸いみほの部屋は隣みたいだからすぐに帰れるし」

「うん……」

そういい俺はみほを自分の部屋に入れるのだった。

「さあ、どうぞ。」

私は昔の友人だった、義弘君の部屋に入る。

「まあ、くつろいでくれ。あ、それと飲み物はなにがいい?紅茶それともコーヒーか?あ、そういえばゼロ・コーラがあったけな……で、みほは何がいい?」

「じゃ、じゃあ……紅茶で」

「わかった。じゃあそこに座って待っていてくれ。すぐに戻るから」

そういうと義弘君は台所の中に入ってしまった。私は座布団の上うへに座り、周りを見る。義弘君の部屋はあまり飾りとかが少ない。あるとしても棚に本があったり壁には掛け軸が飾られていた。書かれていますのはドイツ語だろうかあまり読めなかった。そして壁に一着の軍服があった。それは真黒く襟には白い字で「s s」と書かれていた。「お茶が入ったぞ」

すると、義弘君がお茶を持ってきて座る

「ありがとう。」

「どういたしまして。それにしても本当に久しぶりだったな。かれこれ三年ぶりか。」

「うん。最後にあつたのは中学二年の時だったから」

「そうだったなくいや懐かしいな」

「あ、あの・・・義弘君」

「ん？ああ、俺がいなくなった件か？」

「うん・・・もしかして義弘君がいなくなったのってもしかしてその傷のせい？・・・だとしたら・・・私のせい・・・」

私は3年前に起こったあの出来事を思い出し、彼に言う。もしかしてそのせいで義弘君がいなくなってしまったと思ったから。

「ん？なんでそこでみほが出てくんだよ？あの件なら俺が勝手に首突っ込んで怪我しただけのことじゃないか」

「で、でもあの傷は私を助けるために・・・」

「みほ」

私がそう言うと義弘君が優しく言う。

「俺は何事も悔いの残らない選択を選んだつもりだ。それになその件なら俺は気にしていないよ」

「で、でも・・・じゃあ、なんで義弘君はいなくなっちゃたの？」

そう、私はそれが聞きたかった。なんで義弘君がいなくなっちゃったのかを・・・

「うくん・・・ごめんみほ。それは今はちよつと言えないんだよ」

「・・・どうしても？」

「ああ、たとえ幼馴染でもこればかりは」

「そう・・・わかった。でも」

「わかってる。いつかは話すから」

「うん・・・わかった。」

「そういえばみほは3年たっても変わらないな・・・」

「それを言うなら義弘君もだよ。」

「そうかな。身長はあんまり伸びてないからそうかもな。そういえば

みほ……お前選択科目どうするんだ？」「え？」

急に義弘君の目つきが変わり私は驚く。

「みほ。お前、生徒会の連中に戦車道とれとか言われなかったか？」

その言葉に私は驚く。確かに今日、生徒会の人に戦車道を取るようになって言われた。

「やっぱりか……で、どうするんだ？」

「私は……」

「まあ、どうするかはみほしだいだ。俺は何も言わねえよ」

「……義弘君はどうするの？選択科目……義弘君も生徒会に……」  
「ああ、勧誘されたよ。だけどいったん断ったんだけどな。でも会長さんに『1週間やるからもう一度考え直してくれ』って言われて俺も少し悩んでる」

「そうなの……」

義弘君はそう言う……すると視線があるところに向く。

「あつ……」

「ん？どうしたんだみほ」

義弘君が首をかしげる中私が目に映ったのは一枚の写真だった。

「あの写真……」

「写真？ああ。あれか」

「うん。とつても懐かしいなくって思っ」

その写真に写っていたのは中学二年生だったころ。そう、まだ義弘君がまだ黒森峰にいたころの写真だ。

「そうだな……あの時はみほやエリカといつも一緒にいつの間にか『黒森峰中等部の三羽鳥』くろもりみねちゅうぶ さんばからすって呼ばれてたっけ」

「うん。そうだね……」

私と義弘君はその写真を見つめていた。そして時間は過ぎ

「あ、そろそろ帰らないと」

「そうだな。もうこんな時間か……それじゃあ、みほ。また明日な」

「うん。またね義弘君」

そう言い、私は義弘君の部屋を後にするのだった。

『またね』つか……」

俺もそろそろ、隠居をやめる時が来たのかな……そう思い紅茶を飲みながらかつて来ていた戦車服を見るのだった。

「そろそろ。決断の時だな」

そして翌日俺は朝早く起きた。いつもは早起きがあまりよくない俺だが、今日は清々しい気分だ。俺は制服に着替え学校へと向かう。

そしてお昼……

「はあく早起きはしたがいいが授業中居眠りしてしまうとは……我ながら情けない……」

そう思いながら、一人教室で昼飯を食べながらそう言う俺。そう、実は俺早起きしたがいいが授業中睡魔に襲われ居眠りしてしまい先生に叱られたのだった。でもそういう時ってたまにあるよな！

「あ、あの……」

「ん？」

誰かに声をかけられて後ろを振り向くとそこにはもっさりのふわふわへあへアアの女の子がお弁当を持って立っていた。確かこいつは……

「……秋山？何だ？」

「あ、あの……武藤殿。できれば一緒にお弁当でも食べませんか？」

俺に話しかけたのは俺と同じ教室のクラスメイト。秋山あきやまゆかり優花里だった。秋山さんの実家は俺の行きつけの床屋さんの娘さんだ。今のところほかのクラスや自分のクラスの中では仲のいいほうだ。

「ああ。別にいいぞ」

「ありがとうございます！実は誰かを誘おうにも親しい人は武藤殿だけですから……」

「ふくん……そうか。」

そういえば、秋山は代の戦車好きだったな。

「そういえば。武藤殿は選択科目は何にしたんですか？」

「え？ああ・・・俺はまだ決めてないよ。秋山は？」

「断然戦車道です!!」

と、胸を張ってそういう。まあそうか。戦車好きの彼女にとっては夢のような授業だろう

「そ、そうか・・・」

俺は苦笑しながらそういう。すると・・・

『普通Ⅰ科A組。 西住みほ。 普通ⅠⅠ科C組。 武藤義弘。 至急、生徒会室まで来るように。・・・繰り返す。 普通Ⅰ科A組。 西住みほ。 普通ⅠⅠ科C組。 武藤義弘。 至急、生徒会室まで来るように。 以上。』  
と、校内アナウンスが出る。それは生徒会からの端的な呼び出しであった。

「なんだろうな・・・」

「もしかして武藤殿。 また何かやらかしたんですか？」

「いや、俺この頃、悪さとかしてないぞ」

恐らく、あの広報がしびれ切らして戦車道とるか否か呼んでるんだろう。それはわかるがなんでみほが・・・

「まあ、とにかく行ってくるよ。」

「義弘殿っ！頑張っ！です」

素晴らしい彼女は陸軍式敬礼をし、俺は海軍式敬礼で返礼する。なぜ海軍かって？それはだね。死んだ祖父が海軍だったからだ。まあ、それはさておき俺は生徒会室に向かうため教室を後にする。

そして生徒会室につきノックをしようとしたら・・・

『さつきから聞いてれば勝手な事ばかりじゃん！みほは戦車道とらないからね！』

『そうですよ、西住さんのことは諦めてください!!』

と、生徒会から聞かない声が聞こえる。あの三人の声ではないことは確かだ。まあ、そんなことはさておき俺はノックをする

コンコンコン

『ん？誰だ？』

と、河嶋さんの声がする

「普通ⅠⅠ科C組。 武藤義弘むとうよしひろです。 先ほど放送を聞いてやってきまし



た。」

『あく武藤君？入って、入って』

と、会長の快調な声が聞こえる。会長だけに。そして俺が入るとそこには放送の時に名を聞いてやはりと思っていたが見慣れた人物がいた。

「え？高杉君!？」

そう、そこには昨日会ったばかりの幼馴染である、みほがいたのだった。

## 決断です

「高杉君!？」

俺が生徒会室に入るとみほがいた。そういえばみほも呼ばれていなかった……

「やあ、みほ。昨日ぶりだな。……で、会長。俺を呼んだ用事はなんですか？ 回答期限ならまだ4日ありますよ」

「ああ、今日はそう言うんじゃないんだよ。武藤君」

「……じゃあ、なんで呼んだんですか？ それになぜ彼女を呼んだ？」  
俺は少し怒気を含めそう言う。もし、会長でも幼馴染を苦しめる要件ならただじゃおかない。まあ、みほを呼んだ理由はわかつているのだが。

「大方、みほが戦車道を取らなかつたから、緊急に呼んで戦車道を取るように脅してるんだろ？ それでうまくいかないから俺を呼んで説得させる魂胆だろ？」

俺がそう言うとう会長は苦笑いするどうやら凶星のようだ。俺のことが割れているなら、当然この大洗に引っ越してきたみほの素性も割れているのだから会長は俺にみほに戦車道を取るよう説得させるつもりなんだろう。

だがおかしい。狂奔で傍若無人ではあるが生徒思いで有名なはずの会長がなぜそこまでしてみほに戦車道を強制させる……俺もそうだがみほが戦車道を取らないとまずいことでも起きるのか？

「脅すっていうのはちよつと心外だな武藤君。私たちは彼女に戦車道を取ってほしい。さもないと退学にするぞ」って言うだけだよ」  
「それを脅すって言うんです会長」

俺はジト目で会長を睨む。

「みほ、武藤君のこと知ってるの？」

「うん……義弘君とは幼いころからの幼馴染なの」

「それは意外です」

つと、俺の後ろでみほとその二人の女子生徒。もしかして友達か？

とでひそひそと話していた。

「そうと分かれば。強い味方ができたじゃん。ねえ武藤。あんたからも何か言ってやって！みほとは幼馴染なんですよ？みほの為に、なんか…、こうガツンと言ってあげて!!」

「待て、武藤！西住がお前の幼馴染なら、お前からも西住に戦車道を取るように言ってやれ!!」

やれやれ、面倒なことになったな。だがみほのやつ、いい友人と出会えたな。そう思うと少し安心する。

そして俺は一息ため息をつく

「別にみほの決めた道だ。俺は何も言わないし干渉もしない。みほがどんな道を選ぼうがそれは彼女の自由だ」

「義弘君……」

「なっ！貴様っ！生徒会にたてつく気か!!」

と、河嶋さんは怒鳴るが、そんな西住流家元やその長女の義理姉のオーラに比べたら全然怖くもなんともない。むしろチワワが吠えているみたいで可愛いぐらいだ。俺は河嶋さんの言葉を無視しみほのほうへ顔を向ける。

「……で、みほ。お前はどうしたいんだ？」

「え？」

「ああ、誰の意見でもない。お前の答えはなんだ？さつきも言った通りお前の道だ。自分が後悔しないように好きに選べ」

俺はみほの目を見る。みほも俺の目をじっと見ている。すると、何か決断したように瞳がキラツと光るその目は昔のように純粹で、そして強い信念のようなものを感じた。

「あ、あのー」

みほは一步前に出て、生徒会三人の前に立ちそして

「私！戦車道……やります!!」

それがみほの答えだった。その言葉にみほの友達が驚く。すると生徒会三人も納得したように頷くのだった。

「みほ。それがお前の答えか？」

「うん。義弘君」

「……そうか。では、会長殿。俺の役はないみたいなのでこれにて失礼します」

俺はその場を出ようとしたが

「ああ、武藤君ちよつと待った」

「ん？」

「君は少し残ってくれないかな？」

「？」

みほたちが生徒会室を出た後、残されたのは俺と生徒会三人衆だけだった。

「……で、会長。俺が残った理由は？」

「ああ、それね？ いや、武藤君。ごめんね君の幼馴染をこんな目にあわして。怒ってる？」

「まあ、半分だけです。もし、みほの人生無茶苦茶にするような行為をすれば、たとえあなたでも容赦しませんでしたよ。それにあなたは悪役には向いていない」

「あれ？ あれが演技ってばれていた？ 結構熱演してたんだけどなく悪の幹部っぽく」

そう、あの時会長がみほを脅すときにいろんな脅し文句を言っていたがそれは演技だというのが分かっていった。

「ええ、幼稚園児とかは騙せても、俺は騙されませんよ。もっと演技の上手い人知っているの。それにあなたが人が良すぎることも知っていますし」

と、そう言い俺は副会長さんに出されたお茶を飲む。

「そっか……」

そう言い会長も干し芋を食べる。

「そういえば回答期限は1週間。つまり4日後でしたよね」  
「うん。そうだよ。で、それがどうかしたの武藤君」

「俺も最近、隠居生活にも疲れてきたと思っていました」

と、俺はティーカップを置き不敵な笑みを見せる。

「え？ それって……」

副会長は気づいたようだ

「ええ、期限より早めですが、お答えします。俺も戦車道を取ります」

「そっか・・・でもいいの？」

「ええ、自分の決めた答えです。後悔はしてません」

「そう。わかった。じゃあ、よろしくね武藤君」

こうして彼、高杉・・・いや。武藤義弘はまた戦車道を取ることにになったのだった。そう、これは戦車道界で「黒狼」と恐れられた彼が隠居生活を終え復活したということだった。

## 地下での出会いです

みほや俺が戦車道を取ると決めて翌日の昼。俺は校内のある所に向かう。すると

「ちよつと。君」

誰かに話しかけられ振り向くと、そこには風紀委員の人たちがいた。

「なんででしょうか？パゾミさん。ゴモヨさん……」

「あ、いえ、どこに行くのかなつと思ひまして、それにその先は危険ですよ？」

パゾミさんに言われるちなみにこのパゾミって名前はあだ名で本名は覚えていない。

「大丈夫です。その場所に少し用があるので」

「でも。危ないよ……あそこは」

ゴモヨさんも心配そうに言う。それにしても風紀委員の人たちはみんな同じおかつぱの髪型だからどれが誰だかよく見ないと全くわからない。もし夜中、風紀委員の人たちが歩き回っていたら怖いな。幽霊とか座敷童とかに間違えられそう。もしかしたらこの学校の都市伝説に夜中に出るおかつぱ頭の少女が出るって聞いたことがあったがの正体って……いや、これ以上考えるのはよそう。

「大丈夫です。いざとなったら逃げますから」

「そうですか……気を付けてくださいね」

「ありがとうございます。では……」

そう言い、俺は風紀委員の二人と別れ目的の場所に向かう。その場所とは本校舎から少し離れたべつの校舎の地下通路で壁にはスプレーで書いた落書きや傷跡、そして廊下にはガラスの破片やガラクタなどがあつた。雰囲気的には学園ドラマで出てきそうな不良たちがいる教室っていう感じだった。

「あいつからわず不良のやることは変わらん……」

俺がそう呟きながら前へ進むと目の前にロングスカートをはいた女子生徒が座り込んでいた。そして彼女たちは俺に気付くとゆつく

りと立ち上がり

「おめえ、誰だよくあたいたちに何の用だ？」

「ここは、あたいたちのシマだぞ！」

早速、彼女たちは俺に絡む。

「すまね、実はなある奴と話がしてえんだよ」

「はあ？誰だよ？」

「この先にはおめえのような奴の知り合いなんていねえぞ！」

「………篠原………篠原道子しのはらみちこに用がある」

「っ!？」

俺がその言葉を口にするると不良二人組が驚き目を見開くその顔には冷や汗があった。

「お、おめえ……それ本気か？」

「ああ。」

「わかった……おい！道子の姐さん呼んで来い！来客だとね。おい。その女顔。ついてきな」

そう言い、俺はその少女についていくのだった。そしてついた場所は結構広い空間で周りには椅子やテーブルがありすぐそこにはバーが置いてあった。てか、ここはバー店か？

「ここに座って待ってろ。」

そう言われ俺はバーテーブルにある椅子に座る。しばらくすると、隣にだれか座る。その人物は俺より少し背が低く短い金髪の女性だった。

「久しぶりだな。高杉……いや今は武藤だったっけな」

「ああ、お前も相変わらずだな。元黒森峰中等部戦車道、「黒狼」副車長。篠原道子……」

「昔の話よ今はただの不良グループのリーダーの道子。……で、なんでここに私がいるって知っていた？お前とは3年前に分かれたきり一度もあつていないんだぞ？」

「簡単さ。生徒会の生徒名簿を見た」

「なるほどね……それにしても意外だわ。まさか、お前も大洗に

いたとはね」

「ああ、ほかにもみほもいるぞ。」

「へくみほさんがね……で、私に何の用？」

「お前も知ってるだろ？生徒会の連中のこと」

「戦車道のことね。復活させたみたいだけど……これまた懐かしいことね。マスター例のドリンクを」

彼女がそう言うのとバーテンダーらしき少女が頷き何かを作りそしてグラスに飲み物を入れ、俺と道子の前に置く。というよりなんでマスター？そういえば胸の名札に『益田』って書かれているけどもしかしてそれでマスター？

「安心しなさい。酒じゃないわ。ドデカミンよ。ちなみに私がこのリーダーになってからはたばこかも禁止してるから未成年云々は問題ないわよ。そうじゃないと風紀委員の連中がうるさくてね」

「そういえば、お前は3年前……中学校の時は風紀委員の委員長だったけな。それはありがたいこった。」

「そう言い、俺はそのドリンクを口にする。うん間違いない。これはジューズだ。」

「それにしても生徒会の連中。いつもド派手なことをしていたけど。まさか戦車道にあんな特典を付けるとはね……」

「そう言い道子もそのドリンクを飲む。」

「お前、生徒会のやつらに勧誘されなかった？」

「いいえ、あなたやみほさんが有名すぎて連中は私が戦車道経験者ということに気付いていなかったわ。」

「そうか……」

「……で、あなたは戦車道を？」

「ああ、とったよ……」

「そう……でもいいの？」

「ああ、それにな。みほもその道を選んだ」

「そう……で、私に戦車道をやれと？それよりあなたは本当にこれでいいの？あんなことが起こったのに」

「あんなことが起こったからだよ。それに俺もいい加減隠居生活にも



飽きたしな、そろそろ暴れたいって思ってたんだ。……で、どうするんだ道子。お前はここで日の光見ないままここでくすぶるのか？ 高校生活3年間不良たちのボス猿気取りでいる気なのか？」

俺がそう言うのと周りにいた不良たちは鋭い目線で片手にバットとかもって立ち上がるが道子がそれを片手で制止する。

「面白いことを言うじゃない。私がボス猿ならあなたは差し詰め、野良犬ね」

「ああ、けどなその野良犬もいずれは猛犬……いや狼に変身するかもしれないぞ道子」

そう言い二人は互いに顔を見つめ合う。すると道子はふつと笑う。

「ふっ…相変わらずあなたは変わらないわね。いいわ。わたしも戦車道を取るわ。いい加減戦車に乗りたくてうずうずしていたから。で、どうするの他の3人は？」

「それは後程考えろさ。」

「あなたは相変わらずね……流石『黒狼』つとあったところね。……で、戦車道の授業はいつ？」

「明日だ」

「これまた急ね。でもあのちびっこ会長ならやりそうね……それで武藤。みほさんはどうだったの？ 久しぶりに会えて」

「変わらねえよ。みほは3年前と同じ本当に清々しいくらいさ。」

俺が微笑みながらそう言うのと道子も笑い。

「そうなら安心したわ。みほさんが変わったら、それはもうみほさんじゃないからね。じゃあ、明日ね」

「ああ、明日だ。」

そう言い、俺と道子はそう話すのだった。そしてしばらくして義弘はその場を後にしようとする。そしてその入り口に道子が見送りに来ていた

「それじゃあ、気を付けて帰りなさい」

「ああ、道子もあまり馬鹿な真似をして風紀委員や生徒会に世話になるなよ」

「善処するわ……それにしても。みほさんがここに来たとはね〜こ

れも運命ってことかしら?」

「・・・何がだ?」

「知ってるのよ。あなたとみほさんの関係。あなたとみほは将来……いえ、やめとくわ」

道子は何か言おうとするとすぐにその言葉を取り消す

「・・・賢明な判断だよ篠原。俺とあいつの関係を言うのは野暮だからな。じゃあ、また明日」

そう言うと、義弘はその場を去った。すると道子の後ろに不良の一人が

「姐さん。いいんですか?」

「ええ、あの二人がやるなら、私が出ないわけにはいかないわ。それじゃあ私がない間の留守しっかり頼むよ」

「は、はいっ!任せてください。姐さんも戦車道頑張ってください応援しています。」

「ありがとね・・・」

そう不良少女の言葉に彼女はにこつと笑うのだった。

「はあく結構疲れたな。マジで不良の連中に殴られるかと思っただぜ」

実はあの時普通に話していた俺だが、本当はいつ暴行されるか警戒して結構緊張していた。まあ襲い掛かったとしてもよければいい話だしな。

俺は地下から出るともう夕方であたり一面が真っ赤だった。

「さて・・・今日の夕飯。何、作ろうかな?」

そう言いながら俺は自宅へと帰るのだった。

## 戦車道始めます

翌日、とうとう戦車道の授業が始まる。俺は朝ご飯を食べ、そして学生服へと着替える。するとあるものが目に留まった。それは俺がかつて着ていた漆黒の戦車服だ。

「……一応持っていくか」

そう言い俺は戦車服の上着を鞆に入れて部屋を出るのだった。そして俺は学校へと向かうのだった。

そして学校につくと生徒会から戦車道履修者は校庭に集まるようにと言われ俺はそこに向かう。するとその途中篠原に会う。

「やあ、武藤。」

「おう、昨日ぶり……ん？篠原その子は？」

俺は彼女の隣にいる1年生だろうか？

「ああ、こいつか？この子は私の親戚の子でね。この子も戦車道を取るようになったから連れてきたのよ」

「服部静です。よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ」

「彼女は中学で知波単の戦車道の操縦手をしてたらしいからいい戦力になると思ってね。それと戦車操縦の腕は私が保証するから」

「そ、そうか……よろしくな服部さん」

うちの学校って隠れ戦車道経験者多くないか？

「それよりも今日が戦車道の日ね……3年ぶりの戦車……ふふ」

と、笑う篠原。その体から何か黒いオーラが見えるのは気のせいだろうか、うん。気のせいだ。気のせいでありたい。そんなこんなで俺たちは校庭へと向かう。

そして校庭に行くといろんな人たちが集まっていた。1年生や、バレー服。つといてもダンスのほうじゃないスポーツの方だぞ

。そのバレエ服や体操着を着た子。なんかあの人、「根性っー!!」って叫んでいるな。それとあれは…コスプレ集団なのか？軍服を着た子に戦国時代な少女に竜馬の羽織を着た人、一番まともに見えるのはマフラーをかけた女性だけだな。っといっても俺も黒森峰時代の戦車服羽織っているから人のことは言えないんだけどな。

他には…みほとその友達。それにその後ろにいるのは…秋山か？そういえば確かあいつも戦車道を取るって言ってたっけ。

すると生徒会三羽鳥がやってくる。

「これより戦車道の授業を始める」

「あのくなんで男子がいるんですか？」

1年生？の一人が俺に気付いたのか生徒会に質問する。まあ、いい質問だ。彼女の言い分も最もだな。女性の武道である戦車道に男性がいるんだからな。そう言えば黒森峰にいたときも変な目で見られたな。まほさんやエリカがフォロー入れてくれなかったらどうなっていたことやら…

「ああ、武藤君？まあ彼も戦車道履修者だから」

「え？男なのにですか？それって問題にならないんですか？」

悪かったな男で。彼女に悪気はないと思うが何かグサツと刺さるものがある。

「別に男子がやっちゃいけないっていう規則はないからね、別に問題ないでしょ」

と角谷さんは軽い声で言う。

「それでほかに聞きたいことない？くなんでも答えるよ」

「あ、あの！戦車はティーガーですか？それとも…」

角谷さんの言葉に秋山は手を挙げて三人に質問する。さすが秋山。大の戦車好きだな。

「さあくなんだたっけくまあ、格納庫を見ればわかると思うよ。」

そう言い、生徒会は格納庫を開ける。するとその中は…

「なにこれ…」

「ボロボロ…」

「ありえなーい…」

1年たちは落胆する。確かにこれはひどい。俺が見えたのは倉庫の奥にあつたのはさびれた戦車が一つ。これは錆びれてわかりにくいIV号?型か?

「これはわびさびがあつてよろしいんじゃないか?」

「いやこれただの錆だから…」

ナイス突込みだ。俺は戦車に近づきいろいろとみる、そしてみほも戦車に近づいて

「どう?義弘君」

「ああ、錆びてはいるが問題ない。みほはどう思うんだ?」

「うん。装甲も転輪も大丈夫そう…これでいけるかも」

手慣れた手つきで二人は戦車を点検する。どうやらこの錆びた戦車は動く。これはわかった。だが一つ問題がある。それは戦車の数が少ないことだ。この人数、俺を含めても25人。戦車1両じゃ、どうすることもできない。

「こんなボロボロでなんとかなるの?」

「……たぶん」

みほがそう言う俺は戦車の中に入る。

「どう?義弘君。中の様子」

「これは一からやらないとだめだな。角谷さんこれ最後に動いたのいつだ?」

「え?たしか……20年ぐらい前かな?で、この戦車使えないの?」

「いや、確かにシフトレバーやクラッチも錆びて固まっているが、レストアすれば動きますよ」

たしかに見た目も内部も錆びてはいるが、整備で何とかなるぐらいのレベルだ。

「そっか、じゃあ。1両確保したとして、これだけの人数だとすると……河嶋いくつ必要?」

「全部で6両必要です」

「つとなると、あと5両か……んじゃあ、みんなで戦車探そっか」と、角谷会長は戦車探しを提案する

「して、いったいどこに?」

と、マフラーの人が聞く

「いやー、それがわかんないから探すの」

「なんにも手がかりないんですか？」

「ない！」

と、会長は胸を張って言う

「胸張って言うことじゃないだろ・・・」

俺は小声で突っ込む。まあ、いいか。こうして俺たちは各自別れて戦車を探しに行くのだった。そして俺はあたりを一人探していた。篠原はというと・・・『武藤、私はうちのやつらに戦車がある場所を知ってるかどうか聞いてくる。』つと行って服部とどこかに行ってしまった。まあ、これはこれでいいか。

「まずはどこに行くか・・・とりあえず駐車場に行ってみるか」

まあ、あるとは思わないけど。この世の中何があるかわからない。よく言うだろ？「事实は小説より奇なり」ってもしかしたら1両くらいあるかもしれない俺はそう思い、駐車場へと向かうのだった。

## 戦車探します

俺は戦車を探すため駐車場に向かう。まあもしかしたら豆戦車、軽戦車ぐらい見つかるだろう。すると駐車場入り口辺りにつく。そしてしばらくあたりを歩いて回っていたが動きそうな車両は見つからなかった。

「あれ？義弘君？」

「ん？みほ」

振り向くとそこにはみほとその友達二人、確か……武部さんと五十鈴さんだったっけ？それとその隣にいるのは

「奇遇ですね武藤殿」

「よう、秋山」

クラスメイトの秋山だった

「あれ？義弘君。優花里さんのこと知ってるの？」

「ああ、彼女とはクラスメイトだよ。それでみほたちも戦車探しか？」

「うん。あつ！そういうえば紹介してなかったけど、こちらの二人は私の友達の……」

「私、武部沙織」

「わたくしは五十鈴華と申します。よろしくお願いします」

「俺は武藤、武藤義弘だ」

俺は二人に挨拶する。すると、みほは何か気づいたように首をかしげる

「あれ？そういえば、義弘君。なんで義弘君は名字が武藤になってるの？確か私と初めて会ったときは高杉だったよね？」

みほ……今更それ聞くの？

「ああ、それか。まあ……そのいろいろとあつてな。あまり深く聞かないでくれ」

俺は苦笑しながら言う。

「高杉……どこかで聞いたような……それに武藤殿の羽織っている服どこかで……」

秋山が俺の昔の苗字である高杉っという言葉に反応する

「秋山さん。どうしたの？」

「え？ああ、なんでもありません。それより武藤殿は戦車を見つけることはできたのですか？」

「いいや。さっぱりだ。秋山やみほたちはここいら辺探したのか？」

「うん。でも一両もなかったんだよ」

「さすがに駐車場にはないと思いますよ沙織さん」

「えっだって戦車も車みたいなものじゃん」

武部さんの言葉に五十鈴さんがつつこむ。まあ、俺も似た感覚でここいら辺探していたから人のこと言えないんだけどな。

「そうか……」

「はい。それでこれから校内にある森に行こうと思っていましたんですよ」

「森か……駐車場に比べればもしかしたらあるかもな……」

そんなこんなで俺はみほたちと一緒に森へと向かうのであった。

「うへっ山道って結構きついねっというよりなんでみほや武藤君は平気な顔で歩いているのよー！」

森についた俺たちだが結構急な坂道が多く、武部さんなんか結構しんどい顔をしていた。秋山や五十鈴さんは武部に比べると平気そうな顔をしているのだがでも少しきついという顔をしていた。

「なんでって言われてもな……まあ、慣れかな？」

実際、黒森峰時代、ティーガーIIの砲弾二個背負って坂を走らされたことがあった。無論みほもだ。まあ、みほや女子は3号戦車の砲弾だったけどな。そう言えば他にはつり橋から逆さづりされて精神力を養う訓練とかあったな……マジで虎の穴みたいな訓練やらされたな。よく生きていられたよ……

「あらっ？」

すると、五十鈴さんが何か臭いをかぐしぐさをする。

「どうしたの華？」

「なんか、花の匂いに混じって、ほんのりと鉄と油の匂いが……」



そう言い五十鈴さんはその場所へと向かう

「えっ!?華道やってるとそんなに敏感になるの!？」

「いえ、わたくしだけかもしれないけど……」

そう言い、五十鈴さんはさらに奥へと向かうのであった。

「それではその場所に向かってパンツァー、フォー！」

「パンツのアホっ!？」

秋山の言葉に武部さんは驚いて、聞き返す。

「沙織さん。パンツのアホじゃなくて、『パンツァー・フォー』、ドイツ語で『戦車前進』って意味だよ」

みほが苦笑しながら言う。まあ、初めてその言葉を聞いた人はまずその反応をするだろうな。だって紛らわしいよなあれって……

まあ、そんなこんなで、俺たちは先へと進むとすると茂みの奥に何やら黒い塊が見える。近づいてみるとそれは戦車だった。五十鈴さんの鼻すごいな……

「これは……」

「38tのC型軽戦車だな」

「なんかさっきのより小っちゃい……傷だらけでポツポツしてるし」

「そ、そんなことないです!小さい戦車ですがこれはすごい戦車なんですよ!38tはロンメル将軍が……」

と、秋山が嬉しそうに38tにはおずりしながら熱弁をする。同じ教室だったけど本当に戦車が好きなんだな秋山は、まあ、それはそれで秋山らしくて良いんだけどな。

「あ!因みにですけど、38tの『t』というのは、『チエコスロバキア製』という意味であって、重さの意味ではないんですよ!……はっ!」

そして自分の暴走に気づいたのか、力説した後固まってしまった。

「今、生き生きしてたよ」

「……すいません……」

秋山は我に戻り謝る。

「別に謝るようなことじゃないよ秋山。」

「む、武藤殿?」

「秋山は戦車が大好きなんだよな？」

「え？あ、はい・・・好きです」

「なら、それでいいじゃないかよ。好きなら好きで堂々と言えばいいよ」

「む、武藤殿・・・」

と、秋山が嬉しそうな顔をする若干秋山の顔が赤い気がするんだが気のせいだろうか？

「・・・・・・・・」

みほは秋山と武藤の顔を見て複雑そうな顔をする。

「まあ、とりあえず1輛見つけたな。」

「そうだね。あと5輛だね」

「それじゃあ私、生徒会に連絡するから」

そう言いみほは携帯を取り出して生徒会に報告する。ほかのやつらも見つけているかな？俺はあたりを見てると西の方角に何かを感じる。

「・・・・・・・・」

なんか、俺を呼んでいるようなそんな感じだった。俺は無意識にその気配がする方向へと歩きだしたのだ。

「確かここいら辺だと思っただけだな・・・」

俺は気配を感じた場所へどんどん進んでいく。すると、開けた場所に出る。周りには草木が生い茂っており俺の目の前にはボロボロになった倉庫のようなほったて小屋みたいなのがあった。あの状態を見ると何十年も使われていない感じだった。俺は倉庫に近づくと幸いカギは掛かってない。俺はその倉庫の扉を開ける。すると目の前に一両の戦車があった。車体の色はカーキ色の戦車でにゅつと細長く力強い感じの砲身に傾斜装甲が特徴だった。その戦車とは・・・

「パンター・・・」

俺の目の前にあったのはかつて重戦車並みの攻撃力を誇ったナチスドイツ軍の中戦車、パンターの最終形態のパンターGだった。

## 戦車見つけました

「こいつはパンター・・・それもG型か」

俺がいま目にしたのは走・功・守の三テンプ揃った現代戦車の走りともいえる中戦車パンターしかも最終生産型のG型だった。俺はその戦車に近づき装甲に触れる。鉄のひんやりした感触とともに何か力強いオーラを感じた。俺が目を閉じると本当に何かの気というか闘気が感じられる。すると・・・

「あー！いたいた！」

俺の後ろから武部たちがやってくる。外はもう夕方になっていた。変だなこの小屋に入ったのはまだ昼過ぎくらい。そんな時間まで、俺はここに立ち尽くしていたのか？・・・変だな？

「ここにいたんですか。探したんですよ武藤殿」

「もー勝手にいなくなるんだから心配したじゃん！」

「ああ、悪い悪い。でも戦車は見つかったぞ」

そう言い俺はパンターを指さす

「本当だこんなところにパンターが・・・」

「それにg型ですよこれ！」

秋山はパンターを見て目を輝かせる。

「ああ、これと、38t含めるとあと4輜だな」

ほかの奴ら戦車を見つけているのだろうか・・・俺がそう考えていると

「あ、あのそれがですね武藤殿、武藤殿を探している最中にさつき生徒会からもうほかのメンバーが戦車を見つけてちゃったらしいんですよ」

「え!?まじかそれ?」

あの短時間でよく見つけられたな・・・

「はい。格納庫のIV号とさつき私たちが見つけた38t、そして武藤殿が見つけたパンター以外でまずバレー部の人たちが崖の洞窟にあった八九式中戦車甲型を歴女の皆さんが水中で三号突撃砲F型をそして1年生の皆さんがウサギ小屋でM3中戦車リーを見つけたみたいなんですよ」

ほかの奴らすごいな……水中とかウサギ小屋は納得できたけど、崖の洞窟ってあれだろ？命綱なしではいけないあそこ……なんてあんなところに戦車があったんだ？それ以前に20年前にどうやってあそこに運んだんだ？不思議だ……

「そうか……それにしても名前を聞く限りどれも大戦前期に活躍した戦車ばかりだな」

「ですが、そこもまた味があります。あの38tや八九式のぽつぽつの銃打ち装甲に三突のかくかくしたあの車体。そしてM3リーの2つの砲やIV号？のあの短砲身！どの子もみんな個性があつて素晴らしいと思いませんか武藤殿っ！」

「お、おう……」

秋山の奴本当に幸せそうに言うな……まあ、それが秋山のいいところだ。確かに秋山の言う通り戦車もいろんな個性があるしな。

「ねえ、武藤。」

「ん？何だ武部さん？」

「貸して」

そう言い武部は手を差し伸べてくる。貸すって何をだ？

「え？何を貸すのもしかしてお金？」

「いや、違うから！携帯貸して」

「まあ、いいけど俺の携帯で何をするんだ？」

「何って決まってるでしょ。これからは戦車道をする仲間なんだから連絡先交換しないと不便でしょ？」

「確かにそうですね」

確かに武部の言う通りこれからは仲間なんだし、もしなんかあつた時連絡がないと困るしな。そう言う理由なら別に渡してもいいか。

「なるほど分かった。ほら」

そう言い俺とこの場にいる4人の携帯番号を交換するのだった。まあ、そんなこんなでたった1日で戦車6輛全部揃った。それにしても手がかりもなしでたった1日で全車集まるのはある意味奇跡だな……

その後会長の連絡で見つけた戦車は自動車部の人たちが格納庫ま

で運搬してくれて俺たちは明日、戦車を洗車するため、水に濡れてもいい格好をしてくれとの内容でその後俺たちは解散した。それにしても戦車を洗車つか……。古典的だが結構受けるな。そして俺は荷物をまとめて帰る。すると……

「義弘」

急に誰かに声をかけられ俺は振り向くとそこには道子がいた。

「おう、篠原かどうした？」

「戦車見つかったみたいね。私たちが一生懸命探しても見つからなかったのにあの子たち運がいいわ」

そう言えば道子、服部と不良仲間と一緒に戦車を探していたようだけれど見つからなかったみたいだな。

「そう言えば義弘……。装填手と通信手はどうするのさすがに2つ兼任は難しいわよ」

「ああ、その件なら」

俺がそう言いかけたとき

プルルルル

と、俺の携帯に着信が入る

「おっ！噂をすればメールが入った」

「誰から？」

「え？ああ、赤目だよ。雪風赤目。ほら中学の時通信手兼操縦手をしてた。」

「ああ、赤目ね……。で内容は？」

「えくと……。『ごめん・俺今プラウダにいるから参加できず、代わりに従妹が大洗に在学しているはずだからその子に声かけてみて、戦車の腕は俺が保証するから』……。だってよ」

そうか……。赤目はプラウダにいるのか……。ちなみに赤目は俺と同じ男……といっても外見はほぼ女に見えるんだけどな、で、同じ黒森峰の中等部で俺の乗る戦車の通信手を務めていた、また操縦手が不在の時は操縦手も兼任していた。

「そう、で、その従妹さんはどこにいるの？名前も知らないのに探すのは……」

「呼びましたか？」

「っ!？」

急に後ろから声がして俺と道子はびっくりして後ろを振り向く。そこには忍者っぽい髪型をした銀髪の少女がいた。

「あ…あの…あなたは？」

「はい。私の従兄の雪風赤目の紹介で来ました。1年生の雪風小波つと申します。よしなに」

ああ、赤目がメールで言っていた従妹ってこの人か。てかなんで時代劇風なしやべり方なんだ？

「なんであなた少し忍者っぽい話し方をするの？」

「…不愉快でしたらすみません従兄赤目も含め我が一族は代々伊賀の忍の出でして…それと私、前の中学で忍道をしておりました」

ああ…それでそんな話し方なのか…

「それよりも話は赤目から聞きました。私も戦車道を取ります。以後よろしくお願いします武藤さん」

「ああ、こちらこそよろしく小波さん」

そして小波はそう言うと、家に帰って行った。

「……………それじゃあ義弘私は帰るから。また明日ね」

「ああ、じゃあまた明日な」

そう言い、俺は道子と別れ自宅へと戻り、そして俺はベットに転がり、俺は目を閉じそのまま深い眠りについた。

明日からいろいろと忙しくなりそうだな…………

そして翌日…………

「八九式中戦車甲型、38t軽戦車、M3中戦車リー、三号突撃砲F型、IV号中戦車?型、そしてパンター中戦車G型初期生産型、どう振り分けますか会長？」

「見つけたもんが見つけた戦車に乗ればいいんじゃない？」

「え?そんな適当でいいんですか？」

「いいの、いいの。そのほうがいちいち話し合って決めるよりずっと

効率いいから」

小山先輩の言う通り、そんなんでいいんですか会長さん……その場にいたみんなが内心突っ込んでいた。それはさておきその後の結果戦車とメンバーは見つけたチームのものとなり、俺が乗る戦車はパンターとなった。そう言えばうちにはまだメンバーが一人いなかったんだっけな……まあ、何とかなるか。

そう思い俺たちは戦車を洗車し始めるのだった。戦車だけに

戦車を洗車します！

戦車を洗車することになった俺たち。ほかのメンバーは自分たちの乗る戦車を見ていた。ちなみに来ている服は体操着、これは水に濡れて汚れてもさほど気にしない服装だ。

「がっちりしてますねえ」

「いいアタック出来そうです」

そう言い八九式中戦車を見るバレー部。とうかなぜバレー部がそんなところにいるんだ？そう言えばバレー部は確か部員が足りないから廃部したって聞いたが・・・もしかして会長に戦車道を取ったらバレー部復活させるとかそういう話に乗ってきたのかな？

「砲塔が回らないな」

「象みたいぜよ」

「ぱおーん」

「たわけ！皿突は冬戦争でロシアの猛攻を打ち返した凄い戦車なのだ！！フィンランド人に謝りなさい」

「二つすいません」

そう言い北欧がどこの方角かわからないのに頭を下げる歴女さんたち。それと三突が北欧で活躍したのは冬戦争じゃなくてその次の戦争である継続戦争だ。まあ、これは彼女の為に黙っておいたほうがいいだろう。

「大砲が二つ付いてる」

「大きくて強そう…」

M3リーを見て驚いている一年生チーム。まあ、M3は固定75ミリ砲等が特徴だ。俺もあの二段階砲身、結構気に入っている。そして俺の乗車するパンターもところどころ塗装が剥げていたり、汚れたりしていた。まあ幸い心臓部であるエンジンは死んでいなかったからよかったけどな。

「これは大変そうね義弘」

「そうだな道子。だがこれはこれでやりがいがある」

俺と道子がパンターを見てそう言う。横を見ると服部と小波さん



が互いに挨拶をしていた。俺はパンターの横にあるIV号を見ていたAチームを見る。

「うわっ…ぬめぬめしてる!？」

武部がIV号の装甲を指先でなぞって油汚れの感触を味わい気味悪がっている。まあ20年も放置すればそうなるだろう。するとみほは手慣れたかのようにIV号に登り、キューポラの蓋を開けて中の様子を見ている。するとすぐに鼻をつまむ。どうやらすごい異臭らしいな。

「うっ…、やっぱり、中の水抜きをして、サビ取りもしないと、後古い塗装も剥がして…」

と、清掃する場所を的確に指示する

「さすがみほさんね…あの手慣れた手つき昔と変わっていないわ」「ああ、そうだな…。」

俺と道子がみほの姿を見てそう話し合う、俺も道子もかつてはみほと共に肩を並べて黒森峰中学戦車道をやった戦友だ。みほは中の様子を見終わったのか戦車から降りようとする。しかし…。「あっ!？」

とたんに足を滑らせる。って、まずい!!俺は急いで走り出し…。「ダイビングキャッチ!」

俺はスライディングしてとっさにみほを受け止める。

「西住殿!武藤殿!大丈夫ですかでありますか!？」  
「みほ!?だいじょうぶ!？」

武部たちが心配してみほたちのところに来る

「う、うん私は大丈夫だけど…義弘君は…。」  
「俺は別に大丈夫だ。それよりもみほ。戦車から降りるときはもうちよつと気を付けて降りろ怪我でもしたらどうするんだよ」

「うっ…ごめん義弘君」  
「まあ、怪我がなかったからよかったけどな。じゃあ、次は気をつけろよ」

「うん。ありがとう義弘君」

みほがそう言い俺は元の位置に戻るこうして戦車の清掃が始まっ

たのである。

「ばしやあー!!」

と、みんな一斉にホースで戦車に水をかけ始める

「きやあつー!もう沙織さん!もうくっくめくたくい」

「だ、誰ですか!?!」

武部さんが勢い良く水をかけたのはいいがその水は五十鈴さんにあたり五十鈴さんはまるで四谷怪談に出てきそうな女幽霊みたいに恨めしそうな声で振り向く髪が水に濡れているため前髪で顔が見えず少し怖い雰囲気だ。それを見た秋山も冷や汗をかいて驚いている。隣の三突では……

「高松城を水攻めじゃ!!」

「ルビコンを渡れ!!」

「ペリーの黒船来襲ぜよ」

「戦車と水と言えば、ノルマンディーのDD戦車でしょ」

「「それだ」」

一方で、歴女さんたちは戦車を洗いながらそう言う。

「もうびしょ濡れ」

「恵みの雨だー!!」

「ブラ透けちやうよ」

と、一年生たちはまるで小学生のごとくはしやぎながら戦車の汚れを洗い流していた。最後の言葉は……聞かなかったことにしよう

「武藤。そのスポンジ取ってくれ、ちよつと粗目の奴」

「あいよ〜これでいいか」

「ああ、それぞれありがとう。全く車内も結構こびりついているわね……」

「小波さん。そのマフラー邪魔じゃない?」

「いえ、問題ありません。それにこのマフラーは忍にとって命と同じくらいに大事なものです」

「忍?」

俺たちもパンターを洗車する。俺と道子は内部の清掃。服部と小波は外の装甲を掃除している。

一方会長と、河島さんは体操着なんかに着替えず制服のまま、しかも戦車の装甲は副会長の小山さんがやっているしかも水着姿で……。それにしてもあの二人何もしないとは……。普通の人なら少しは手伝ってくださいと怒るところだが、小山さんはそんなことは言わずただ黙って清掃していた。小山さん……。あんな人良すぎ。俺は小山先輩の人の好きに感心するのだった。それにしてもでかいな……

「武藤……」

「え？あ、いやなんでもない」

道子にジト目で見られ俺は笑ってごまかし作業を続けた。別に俺はやましい考えなんてしてない。ちなみにこの時気づかなかったのだがあの時みほも遠目で俺のことをジト目で見ていたらしい。まあ、そんなこんなで俺たちはひたすら戦車をきれいにするその仕事が終わった時、空はもう茜色だった。

「みんなご苦労だった。あとの整備は自動車部の部員に今晚中にやらせる、今日は早く家に帰ってゆっくり休むがいい」

と河嶋さんの号令でみんなは解散した。ちなみに生徒会の戦車は結局小山さん一人で清掃してブラシを杖にしてフラフラの状態で立っていた。

「やつと終わったか……」

俺は肩をたたきながらそう呟く。ちなみに小波と服部さんは用事があったためか既に下校していた。

「お疲れ、義弘君」

「ああ、みほもな」

俺とみほが話していると……

「お久しぶりねみほさん」

と、篠原がみほに言う。そう言えば篠原とみほってここにいるときあまり会話とかしてなかったつけ……。しかし声をかけられたみほは……

「え、え……。ど……。どなたですか？」

久しぶりの再会っと思いきや道子はみほのその一言に固まってしまっ

「え?・・・みほ?もしかして私のこと忘れたの?」

「違うよ!今思い出すから!え、え・・・と」

と、みほが必死に思い出そうとする。道子はどんどん暗い顔をするその背中には悲しいオーラが溢れていた。まあ確かに道子つて黒森峰時代影薄かったからな・・・

「ま、まあ・・・会うの3年ぶりだし：髪型も変えたからわかりにくいよね・・・」

あ、やばい篠原の目ひかりがない・・・

「髪型?・・・あつ!?もしかして篠原さん!」

ようやく思い出したみたいだ

「ええ、そうよ。というより一目見てわからないなんてひどいじゃない。たったの1年半とはいえ一緒に戦ってきた戦友でしょ?」

「ご、ごめんさい・・・」

「まあ、いいわあの時の私、今と違って長髪だったし眼鏡もかけてたからわからないのも無理はないわね」

「え!?みほ。篠原のこと知ってるの!」

と武部たちがみほに訊く

「うん。篠原さんは中学で同じ戦車道をしていた仲なの」

「黒森峰にですか!」

みほの言葉にその場にいた全員が驚く。

「うん。沙織さんは篠原さんのこと知ってるの?」

「それはもう有名だよ!うちの学校の不良集団のボスだよ!」

「え!?そうなのほんと篠原さん!」

「ええ、その話はほんとよみほさん。だけど安心して私の目の黒いうちはほかの生徒たちに危害を加えさせないから安心して。」

と、武部たちにそう言うとその場にいた武部たちは少し安堵する

「で、でも篠原さんって確か黒森峰では風紀委員の員長だったのになんで・・・」

「私もいろいろとあったのよ。・・・それにしてもあなたは3年前と同じ変わらないわね・・・」

「そうかな?」

「ええそうよ。……そう言えばみほ覚えている？あなたと私そして武藤と逸見と一緒に黒森峰の時お世話になった先輩にお花をプレゼントしたこと」

「うん。覚えている……て、あれ？その時篠原さんいたっけ？」

「いたわよ！一緒に夕食会もしたじゃない！」

と少し涙目で言う篠原……

「可哀そうになってきた。すると……」

「姐さん」

篠原の側近らしきスケバン風な格好の生徒が道子に小声で声をかける

「なんだ？」

と、篠原はさつきまでの顔がいつぺんに変わり、不良の棟梁らしき顔に変わる。

「実は……船舶科のお銀の下っ端の連中がうちのシマ荒らしてるんすよ。うちらだけでは対処できないので急いできてください」

「ちっ！あの海賊娘が……部下のしつけぐらいちゃんとしなさいよ……」

「わかったわすぐに行く。それじゃあ、みほさん。また明日戦車道で」

「そう言うと道子はみほたちに一礼をし、側近の子と一緒に帰って行った。」

「なんだったんでしよう……」

五十鈴さんは首をかしげて言う。

「……それじゃあ、俺も帰るから。みほまた明日な」

「うん。義弘君もまたね……」

そして俺もみほと別れ帰るのだったが、その前に一つやることがあったため、着替えた後、俺は戦車格納庫へと足を運ぶのだった。

## 放課後と食事会のお誘い

「はあくすっかり暗くなっつて来たな……」

俺は鞆を片手に下校していた。ちなみに帰る前に戦車格納庫によつたのは自分が乗りこむパンターをもう一度見るためであった。なんだか知らないけどあの戦車には何か感じたのだ。そして俺は気が済むと俺は格納庫から出て荷物を纏めて学校を出たのだった。

「さて……今日は遅いし飯はどこかで食べるか」

そう思い俺は紅の空、一人で歩きます。そう言えば……

「そう言えばアレ。今日新発売だったな……飯食う前に買うか」

そう言い。俺はアレが売ってある店へと向かうのであった……え？どこの店かって？それはだな……

「おおー！あった！あった！しかも最後の一つ！」

俺が寄つた場所とは戦車のありとあらゆるグッツが置いてある店、戦車倶楽部だ。因みに何を買ったかというと、超合金魂xプラモデルのパンターIIだ。これはどこに市場でも出回らない戦車好きなら喉から手が出るほどの逸品だ結構な値だが買う価値はある。てか超合金のプラモデルってなによ？……まあ、それはともかく、俺はそれを購入した後は戦車道の雑誌を見ていた。ちなみに題名は『全国大会近し、黒森峰今年はリベンジなるか!』と書かれていた。全国大会……そっか、もうそんな時期か……そんなことを考えながら雑誌を読んでいると……

「ここって戦車の店？」

「へーこんな店があつたんだ」

「私初めてです」

おいおいおい。なんかどこかで聞き覚えのある声が聞こえる。それも一人じゃない。……あれってみほたちじゃないかよ。なんでこんなところに……

「実は私、いつも放課後はここに通っているんですよ♪」

秋山が嬉しそうに言うまあそうだろう。ここは戦車好きならだれ

もが寄る店なんだからな。すると偶然にみほと目が合ってしまった。

「あれ？義弘君？」

「お、おう・・・みほ。奇遇だな」

「あれ？武藤。なんであなたがいるの!？」

「俺か？俺はこれを買うためにここによったんだよ。」

そう言い俺は購入したプラモを見せる

「あああー！それは伝説の超合金魂×シリーズのレア戦車じゃないですか!？」

と秋山は目をキラキラさせながら俺に近づく。てか近い近い！

「武藤殿それ！何処にありましたか？」

「えっ？あ、あそこの奥の棚だけど。これ最後の一個だったからもうないよ」

「そ、そうですか・・・」

限定商品が売り切れだと知ると秋山はかなり落ち込んでしまった。な、なんかすごい罪悪感がする。・・・仕方ない

「秋山。だったらこれお前にやろうか？」

「え？で、でもそれ苦労して買ったんじゃないんですか？」

「いんだよ俺は。・・・秋山。確かお前戦車のプラモデル作り得意だったよな」

「はい。自慢じゃないですがプラモ作り暦5年です。あ、あの・・・それが何か？」

「俺さプラモ作り下手でさ。そんな奴が作るよりも。戦車を愛しプラモデル作りの上手い秋山が作ったほうがこれも幸せだろ。ほら」

そう言い俺は秋山にプラモを渡す。ちよつと残念な気がしたが女の子のそういう落ち込んだ顔見るのは見るに堪えないし、事実俺プラモデル作り下手だしな。それならこのプラモはあいつに渡したほうがいいだろう。

「む、武藤殿・・・ありがとうございます／＼」

と、秋山は嬉しそうにそれを受け取る。それになぜか顔が赤い。それほど嬉しかったのか？

「できたら、俺にも見せてくれよな。」

「はいっ!!もちろんです!」

二人のやり取りを見たみほが複雑そうな顔をしていた。その後はみんな店の周りを見ていた。

「それにしても凄い品揃えですね」

「でも戦車つてどれも同じに見える」

武部がそう言う。しかし

「ち、違います!全然違うんですよ!」

と秋山が武部に異議申し立てた。

「どの子もみんな個性つというか特徴があつて、動かす人にも変わるんですよ!」

と熱弁する。確かに戦車つと一言で言えば皆同じに見える。かくいう俺も幼い時、三突を何を間違えたかレオパルドIIつて言つて変な空気になったことがあつた。今思えばなんであんな間違いをしたのか不思議だ。

「華道と同じなんですな。」

五十鈴さんがそう言う。俺は華道をやつたことがないからわからんが彼女がそう言うんならそうなんだろう。それを聞いた武部もなんか納得したようにうんうんつと頷いて

「うんうん。女の子もそれぞれの良さがあるしね。目指せモテ道!」

とグーサインをする武部。モテ道つて、武部つてワンサマーとかのような道を目指す気か?」

「な、なんか話が噛み合っているのかあつてないのか・・・」

「ああ、そうだな」

すっかり蚊帳の外になった俺とみほは苦笑するのだった。

その後、秋山は店の片隅にある戦車のシミュレーションゲームをやり武部たちは後ろからそれを見ていた。ちなみにそのシミュレーターの操縦席はティーガーをモチーフにしている。

「アクティブで楽しそうです」

「でも顔は怪我したくないな」

「大丈夫です。試合では実弾も使いますが、十分に安全に配慮されていますから」



そうは言うけど戦車道の特殊装甲も100%安全でわけじゃない。それに戦車道連盟が決めた安全砲弾でも戦車砲から放たれた砲弾は音速と同じくらいの速さだ。人に当たれば怪我じゃすまされない。

「みんな、楽しそうだね義弘君」

「ああ…それにしてもみほ。いい友達に出会えたな・・・」

「うん・・・」

そう言うみほ。するとみほは店内テレビを見るその内容は・・・

『・・・次は戦車道の話題です。高校生の大会で昨年MVPに選ばれて国際強化選手になった西住まほ選手にインタビューしてみました』  
と画面に出てきたのはまほさんだった。俺の先輩でありみほの姉であり俺にとっても姉貴分みたいな人だ。幼い時は一緒に遊んでくれたこともあった。

「あつ・・・」

画面を見たみほは少し顔色が曇った。どうしたんだ？

『戦車道の勝利の秘訣とはなんですか？』

アナウンサーの人がまほさんにインタビューするとまほさんはカメラのほうを見て

『あきらめないこと、そしてどんな状況でも・・・逃げ出さないことです』

それでそのニュースは終わった。まほさんがそんなことを言うとはな・・・逃げ出さないことそれは大切かもしれないがそれは時と場合による。それにまほさんが言った言葉は、別の意味にも聞こえた。みほはニュースで見た言葉を聞いたせいかな暗い顔をしている。

「みほ・・・」

「大丈夫だよ義弘君・・・」

と、平気そうな顔をしているけどいまだに暗さがあつた。俺がいない三年間あそこで一体何が起きたんだ・・・するとそばにいた武部がみほのその表情を察したのか

「そうだ！　これからみほの家に遊びに行ってもいい？」

「え？」

「わたくしもお邪魔したいです」

「あ、うん！」

嬉しそうに返事をするみほ。

「あのー……」

秋山が恐る恐る手を挙げて訊く。

「秋山さんもどうですか？」

「あ、ありがとうございます！」

「それじゃあ今日はみほのうちで食事会でもしない？」

と、嬉しそうに話し合う女子陣。さて…女の子の女子会に男子は不要だな。邪魔者は消えるか。そう思い俺はその場を立ち去ろうとする。しかし

「あれ？義弘君…帰っちゃうの？」

「ああ、女子会に男は邪魔だろ？それにこれから夕食の材料買おうと思ってたしな」

「でも、今の時間じゃ夕飯できるの真夜中になっちゃうよ。…そうだ。義弘君も一緒にご飯食べる？」

「えっ!？」

いきなりの言葉に俺は驚く。だって女子の夕食会に男子が混じっているのは明らかにまずいだろ？すごい場違いなことだぞ

「あ、あのなみほ。俺、男だぞ。女子会に男が混じってたらおかしくないか？」

俺はそう言うが

「何を言ってるのよ。食事会はみんなで楽しむものだよ。武藤も一緒に食べようよ」

「私も一緒に食べたいです」

「武藤殿と西住殿の関係も詳しく聞きたいですしね」

と武部たちが平気そうな顔でそう言う。ここで断ったらかえって失礼か…仕方ない…それにみほの言う通り今から材料買って料理初めても終わるの結構遅くなりそうだしな

「わかった。じゃあ、お言葉に甘えようかな」

俺はみほの部屋で食事会をすることになった。そう言えばみほって料理できたっけ？…そう言えば中学一年の家庭科の時、逸見と

二人でみほの料理食べたことあつたけど食べたその後の記憶がなかったっけ……まあ、大丈夫……かな？

そんな心配が俺の頭をよぎり俺はみほの後についていくことになったのだった。

そしてみほが住んでいる寮につくと、俺は自分の部屋に行く

「あれ？義弘君どこに行くの？」

「安心しろ。自分の荷物部屋に置くだけだ」

そう言つて義弘は部屋に入る。

「あれ？武藤の部屋つてみほの隣だったんだ」

「うん」

「すごい偶然ですね……」

そう話していると義弘が部屋から出てくる。

「待たせてすまないな」

「ううん。全然待つていないよ。じゃあ入ろうか」

そう言い皆みほの部屋にお邪魔するのだった。

肉じゃがは男子の好物か否か

みほの部屋。

「散らかっているけど、どうぞ・・・」

「お邪魔します。わぁークマのぬいぐるみ可愛い！」

「西住さんらしい部屋ですね」

俺たちはみほの部屋へと案内される。そう言えばみほの部屋は俺の隣だが、一度も部屋を見ていなかったな・・・まあ、当たり前だな。

「みほ・・・これってボコか？」

部屋にボコられグマのボコシリーズのぬいぐるみが置いてあった、そう言えばみほって根っからのボコラーだったけな。

「うん。そうだよ。・・・変かな？」

「いいや、とつてもみほらしい可愛い部屋だよ」

「あ、ありがと・・・／＼／＼」

と、みほが顔を赤らめて言う。あれ？変な事言ったかな？それを見て秋山は複雑そうな顔をするなぜだ？

「ま、まあとにかくご飯作ろうか！華はジャガイモの皮剥いてくれる？」

「あ、はい」

「そ、そうですね。それじゃあ私ご飯炊きます」

秋山はそう言うとき「ジョニーが凱旋するとき」の鼻歌を歌いながらリュックから飯ごうを取り出す

「それ、いつも持ち歩いてるの？」

「はい、どこでも野営出来るように」

と、得意げに言う秋山。てか秋山、野営の心得とかあるのか・・・将来自衛隊員とかになりそうだな。

「きやつー」

するとキッチンの方で五十鈴さんの悲鳴が聞こえる。俺たちがそこに行くとき五十鈴さんが包丁で小さく指を斬っちゃったのだ。

「すいません、花しか切った事がなくて」

「華、大変っ!？」

「うわあ!？ま、待てて。ば、絆創膏!、どこにしまっっちゃたかな?」

自分の部屋にもかかわらず絆創膏を探すみほ。やれやれ・・・俺はポケットから絆創膏を出す。

「ほら、絆創膏。それと黴菌が入るかもしれないからちゃんと治療しとけ、ジャガイモの皮むきなら俺に任せろ」

「ありがとうございます武藤さん」

五十鈴は俺に包丁をわたしみほのところへ行き治療する。俺は五十鈴から受け取った包丁でジャガイモの皮をすすると剥く。

「武藤って料理とかできるんだ」

いつの間にか眼鏡をかけた武部がそこにいて俺に話しかけた。

「まあな。一人暮らしが多かったから自然とな」

実際に俺は祖父さん死んだあととは一人で暮らしてたっけな・・・  
「へくそうなんだ。じゃあ、武藤は皮むきお願い。私は出汁とか取るから」

「あいよ」

まあ、そんなこんなで無事に料理ができた。因みに作ったのは武部の要望で肉じゃがだ。

「「いただきます!!」」

料理がそろい俺たちは肉じゃがを食べる。うん。肉も柔らかくジャガイモは出汁が染み込んでいて美味い。これはいいものだ・・・

「おいしい・・・」

「やっぱり男を落とすのは肉じゃがだからね」

「落とした事・・・あるんですか?」

「何事も練習でしょ!!男子にはやっぱり肉じゃが、この前の雑誌のアンケートにも書いてあったし」

雑誌のアンケートね・・・俺はただ黙って肉じゃがを食べる。すると・・・

「ていうか男子って肉じゃがが本当に好きなんですかねー?」

「都市伝説ではないんですか?」

「そんなことないもん！あつ！そうだ武藤。武藤は肉じやが好きだよ  
ね？」

「え、俺？そうだな・・・味にもよるが好きか嫌いかどっちかと訊か  
れれば肉じやが好きな方かな？」

「ほら、やっぱり男子は肉じやが好きなんだよ」

「あくまで俺の意見だ。ほかの男子は好きかどうかは知らんがな。ま  
あ、武部の料理は美味いからどんな料理でも大丈夫だと思うぞ」

俺がそう言う・・・

「や、やだもー武藤たら／＼／＼」

武部が小声でそう言い武部の顔が真っ赤になる。何か気に障るこ  
とあったのかな？俺がそう思っている中。

「これは・・・」

「西住殿。武藤殿って・・・」

「う、うん・・・義弘君って優しさに境界線無いから・・・」

と、みほたちは苦笑しながらそう言うのだった。そしてその後は食  
事をしながらいろんな話をした。

「それにしても明日楽しみだな」

「なんでですか沙織さん？」

「だって華。明日かっこいい教官が来るんだよ。絶対にイケメンだよ  
」

「教官？なんじゃそりや？」

「あれ？武藤殿聞いていなかったんですか？明日の戦車道の教官が来  
ることになってるんですよ？」

そう言えばそんな話あったな・・・それにしてもかっこいい教官  
か・・・そんな検索ワードに出る人物。俺が知ってる中で三人いる。一  
人は引退し、もう一人はドイツにいる。すると残るはあの人かな？い  
や、かっこいいという単語が入るともうあの人しかない・・・

「ん？どうしたの武藤？」

「え？ああなんでもない」

今のおだやかで楽しい雰囲気壊したくないし、これは言わないほ  
うがいいだろ。

「そう言えばさ、武藤とみほって幼馴染なんだよね？」

「ああ、みほとは小学校低学年からの仲だ」

「うん。今思うと懐かしいね。あつ！義弘君覚えてる？よく戦車で近所を走ったこと」

「ああ、そう言えばよくまほさんが運転してくれたたっけな・・・」

そう言えば逸見とあつた日もその頃だったっけな。

「それで、それで？」

と、武部がぐいぐいと訊いてくる。

「まあ、その後は中学2年まで同じ学校・・・黒森峰中等部でな一緒に戦車道をしていたよ。」

「戦車道をですか？」

と五十鈴さんがそう言った瞬間・・・

「黒森峰・・・それに高杉・・・ああー!!」

と、秋山がいきなり声をあげる

「ど、どうしたの秋山さん!？」

「思い出しましたあ!!武藤殿!もしかして前の名前は高杉義弘じゃなかったんですか？」

「ああ、そうだぞ」

「やっぱり、あなたがあの伝説の戦車乗りの黒狼殿でしたか!?!今まで気付かなかったんですが、まさか武藤殿があの黒狼でしたとは!?!」

と、秋山が興奮いて俺にそう言う

「え?こくろう?秋山さん武藤のこと知ってるの?」

「もちろんです。戦車道を志す者は知らない者はいないと言われる伝説の戦車乗りです!強豪校黒森峰の最強伝説の基礎を築いた人物で聞いた話では幾度の練習試合でも一度も被弾せず勝利し、それどころか数倍ある敵戦車を総なめにしたつと言われています!そして黒狼というあだ名は彼の着る服が黒かったのと彼の乗る戦車のマークが黒い狼のマークだったのでそう呼ばれているんですよ。ですが、3年前に突如戦車道界から消えて、その後の消息不明って言われて、一説では死んだと聞きましたか・・・」

勝手に殺すなよ秋山・・・てか黒い服って黒森峰の戦車服は基

本的に黒だぞ。

「え!?何その最強伝説!?!」

「本当ですか武藤さん!?!」

秋山の話聞き武部と五十鈴さんは驚いて俺に訊く。

「何昔の話してるんだ秋山。俺はそこまで人外じゃないよ・・・」

「いや、でも義弘君。中学1年の時に練習試合の時、50両相手のしかもベテランぞろいの先輩たちの車両。無傷で全部倒したじゃない・・・」

「50両?!?!」

みほがそう言うと、その言葉に三人はまたも驚いたような顔をする。

「何それ、強すぎるでしょ・・・」

「驚きです。でも、なんで武藤さんは戦車道を辞めて、戦車道もない大洗に来たんですか?」

「あ、それ私も気になる。そんなにすごい人がなんで戦車道辞めちゃったの?」

「ああ、それ戦車道界の謎の一つって言われています。武藤殿なぜ戦車道を辞めて大洗に?武藤殿の腕なら全国からスカウトされたのに・・・?」

秋山がそう言うとみんな興味津々な顔でそう言う。しかし・・・

「すまんこればかりは今は言えない。だが時がくれば必ず話す。だから今は聞かないでくれ」

「そうですか・・・でも必ず話してくださいね」

「ああ・・・さて、それじゃあ、ご馳走さん。そろそろ俺は帰るぞ」

「え?武藤君帰っちゃうの?」

「私、もつと武藤殿の武勇伝が訊きたいです!」

「悪いな。明日のこともあるしな。じゃあ、また明日な」

そう言い俺は食器を持ち上げ水で洗った後、部屋を出たのだった。てか秋山は武勇伝って言ってたけど、実はあんまそのこと覚えていないんだよ・・・俺はそう思いながら自分の部屋に入り、明日に備



え寝るのだった。

そして翌日

「やべえ！寝過ぎした!!」

翌日目を覚ますと目覚まし時計が壊れていたらしく時刻を見たらやばい時間に起きてしまった。俺はすぐに学生服に着替え、部屋から出る。すると

「義弘君!？」

「みほ!？」

そこで偶然にみほに出会う。どうやら彼女も俺と同類のようだ。

「はあ、はあ！みほ。早くしないと学校遅刻するぞ！」

「はあ、はあ！待って義弘君！」

俺とみほは走りながら学校へと向かう。どうやらみほも寝過ぎしたようだ。よしっ！このままのペースなら二人とも遅刻を免れる。そう思い俺とみほは走り続ける。すると……

「あ、待って義弘君」

「なんだみほ？」

「あれ……」

とみほが指さしたところにふらふらと歩いている女子生徒がいた。みほはそいつに近づく。……あれ？あいつは確か……

「あ、あの大丈夫ですか？」

「：ツライ……生きてるのが：ツライ」

と、倒れそうになるのを俺が受け止める

「やっぱり冷泉だったか」

「義弘君知ってるの？」

「まあ、たまに会う程度だ。おい、冷泉しっかりしろ！」

「……武藤さんか。なぜここに？」

「そんなことはどうでもいい。ほら、肩貸してやるから。」

「ああ、私も手伝うよ義弘君。」

「……すまない二人とも……」

と、まあ、この後、俺とみほは冷泉を運ぶのだが、結局は遅刻をしてしまい。風紀委員長のそと子さんに怒られるのであった。

そして冷泉は別れ際に『また武藤さんに借りを作ってしまった。それとあなたにも。だからこの借りは必ず返す』といいまたどこかふらふらと歩き行ってしまったのである。

本当に律義な奴だよ冷泉は……

「義弘君！急がないと」

「ああ、そうだったな！それじゃ戦車道の授業で！」

そう言い俺とみほも別れ教室へと向かい走るのだった。

## 戦車乗ります

あれから午後、戦車道の本格的な授業が始まる。そして戦車道履修者は全員戦車格納庫に集まっていた。

「遅かったわね義弘。何かあったのか？」

「ああ篠原。ちよつと朝いろいろあつてな。」

「そう・・・」

「みほさん遅かったので心配しました」

「ちよつと寝過ぎしちゃつてね」

「教官も遅ーい。焦らすなんて大人のテクニクだよー」

と、いらいらしながら言う武部、武部よあんま期待しないほうがいいぞ・・・そう思っているとすごい轟音とともに上空から空自のC2改が飛んできた。きつとあれだな戦車道の教官が乗ってるのは。するとC2改の後部ハッチが開きそこから陸自の最新鋭戦車10式戦車がパラシュート降下してきた。そして10式は無事に着地成功。しかし駐車場でスライディング着陸したため、赤い車に激突した。もちろん40トン以上の巨体に耐えられるはずもなく赤い車はひっくり返る

「学園長の車がつー！」

「あくやっっちゃたね〜」

そんな小山さんの悲鳴が聞こえてきた。あれって学園長の車か・・・しかも学園長の車はこのままでは済まなかった。10式がバツク走行で踏みつけぺしやんこにした。

「あつ、あく〜」

「ポテチ・・・」

河嶋さんの言う通り、学園長の車はポテチのごとく真つ二つにぺしやんこになった。あの車、保険入っているといいけどな。けど戦車に踏みつぶされたって言って保険とか降りるかは不明だ。

「派手にやったね・・・義弘あの戦車の車長つて・・・」

「ああ...あのやり方は間違いないよ」

すると戦車は車を踏み潰したことを気にもせずはこちらに向かい

停車した。そしてキュウーポラから人が出てきた。

「こんにちわ！」

挨拶をしたその人物は確かにかっこいい顔をした女性だった。やっぱり蝶野さんか……。それを見た武部は……

「……騙された」

「でも素敵そうな方ですね」

と落胆していた。甘いよ武部、聞けば角谷さんはかっこいい人とは言ったが男性とは言っていない。つまり武部が勝手に勘違いしただけだ。それと五十鈴さん。ナイスフオロー。

「特別講師の戦車教導隊、蝶野 亜美一尉だ」

「よろしくね！、戦車道は初めての人が多いと聞いていますが一緒に頑張りましょう！」

そう言い皆を見る蝶野さん。すると俺とみほに気付く。

「あれ？西住師範のお嬢様とロスマン先生のお弟子さんじゃありませんか!？」

そう言い俺とみほのほうに近づくと

「師範や先生にはお世話になってるんです！ 先生やお姉様も元気？」

「は、はい……」

「先生はドイツで元気になっていますよ蝶野さん」

俺は返事をするがみほは少し落ち込んで言う。まほさんと何かあったのか？ それにあわせて周りが騒がしくなる。

「西住師範って？」

「ロスマン先生って？」

「有名なの？」

とあたりがそう話すと

「西住流っていうのはね、戦車道の中でももつとも由緒のある流派なの！それとロスマン先生は世界的にも有名な戦車道教官として有名で彼女の指導を受けた人はみんな優秀な成績を残すほど有名な教官なのよ！」

と、蝶野さんがそう説明してくれる。すると武部が手を挙げて

「教官！ 教官はやっぱりモテるんですか!？」

そう言う。おそらく周りの話声でみほが暗い顔になったのを見て話題を変えてくれたのだ。すると蝶野さんはうぐんと首をひねり

「モテる、というより…、狙った獲物を外した事はないわ、撃破率は120%!!」

蝶野さんそれ答えになつてません。というより撃破率って何？狙撃でもするつもりなのか？

「それで教官！今日はどのような訓練を行うのですか？」

と秋山が質問する。普通の教官なら操縦とかの基礎とか教えるんだが蝶野さんの場合じゃ、十中八九。あれだな

「本日は本格戦闘の練習試合、さっそくやってみましょう」

やっぱり……

「え？い、いきなり実戦ですか？」

小山さんが驚いてそう言う。まあ当然だろう

「何事も実戦あるのみよ、大丈夫、戦車なんてバーツと動かしてダーツと操作してダンツと撃てばいいんだから」

みんな不安そうな顔をする。蝶野さんって、言葉で教えるタイプじゃなくて体で覚えさせるタイプの人だからな。俺も初めて会ってそう言われた時は動揺したよ。

「それじゃあ、それぞれのスタート地点に向かつてね」

蝶野さんに指示で皆戦車に向かう。さて俺も行くか、そう思い俺はパンターに向かおうとしたが……

「久しぶりね高杉君。」

蝶野さんが話しかけてきた

「どうも三年前の中学全国大会以来ですな蝶野さん。それと今の苗字は武藤ですのぞ」

「あら？改名したの？」

「ええ、三年前、戦車道を辞めたときにね……」

「三年前のことなら仕方がないわよ。あなたが悪いんじゃない。」

「それはあの事件のことですか？それとも……」

「両方よ。でも意外だわ。あなたがまたこの世界に戻ってきてくれ

て・・・」

「ええ・・・もう戻らないと思つてたんですけどね・・・」

「でも、あなたはまた戻ってきた。そのことに私はとても嬉しいわ。・・・それじゃあ、私は観察所に行つてあなたたちの試合を見てるから。話せてよかつたわ。またね高杉君・・・いや武藤君」

「そう言い蝶野さんは去つていった。俺はしばらく立ち尽くしている」と

「・・・」

「義弘？」

「ん？ああ、篠原か。どうしたんだ？」

「どうしたんだ？ツじやないわよ。うちのチーム準備できたわよ」

「ああ：そうかで、編成は？」

「服部が操縦手兼通信手、小波は装填手。私が砲手。になつたわ。それであなたが車長よ」

「え？俺か？わかつた。・・・それじゃあ、全員乗車して発動機、噴かせるか」

「あいよ」

「そう言い俺はパンターGに乗り込む。一方、他では・・・」

「どうやって乗るのこれ〜？」

「知つてそんな友達に訊いてみようか？」

「ネットで聞いたほうが早くない？」

「戦車なんて触つたことも見ないこともない1年生たちがどう動かせばいいか悩んでいて一人がネットで調べていた。」

「ここで頑張れば、バレー部は復活する！あの廃部を告知された屈辱を忘れるなっ！」

「「はい。キャプテン！」」

「「ファイター！！」」

「「「おおー！！」」」

「八九式のチームは一致団結して士気が高かつた。一方三突では

「初陣だあー！」

「車簿の陣で・・・」

「いや、ここはパンツァーカイルで」

「一両しかないじゃん」

とまあ、こんな感じで練習試合が始まる。

「じゃあ、服部さん。エンジン発動させてくれ。やり方わかるか？」

「大丈夫です。パンターの教本を見ましたがチハと変わらないので」

そう言い服部はエンジンを始動させる。その音はまるで猛獣の吠える音みたいだ

「ご機嫌に吠えているわね義弘」

「ああ、」

俺がそう言うど……

『やつほおー！最高だぜー!!』

「ん？」

「どうしたの？義弘」

「いや、なんか秋山の声が聞こえたような……」

「え？」

「いや、なんでもない」

気のせいだよな。あの秋山があんな声出すわけない……たぶん。

『それでは、全戦車パンツァーフォー!』

と、蝶野さんの号令が始まる。

「そんじやま、集合地点に行きますか。じゃあ、服部、戦車前進！」

「わかりました。」

そして、俺たちの乗るパンターGは動き出し、集合地点へと向かうのであった。

そしてしばらくし、パンター以下戦戦車集合地点に到着した。

『みんな、スタート地点についたわね？それじゃあルールを説明するわよ』

蝶野教官が無線にて呼び掛ける。そして試合のルールを説明する

『ルールは簡単。すべての車両を倒したほうが勝ち。つまりガンガン前進してバンバン撃ってやつつけなければいってわけ。』

「相変わらずぎっくりな説明だな蝶野さんは……」

「そうね・・・」

蝶野さんの説明に俺と篠原は苦笑する。

『戦車道は礼に始まり、礼に終わるの、・・・一同、礼!』

「二」よろしくお願いします」

と、全員あいさつし、試合が始まる

「・・・で、誰を倒すの義弘?」

篠原に訊かれ俺は地図を見る。現在地を見て一番近いチームは向こうにある橋を渡れば出会うのは三突、八九、そしてIV号か・・・とすれば簡単な選択だ。

「まずは、三突を狙う」

「IV号じゃないのか?」

「ああ、砲の威力的に脅威は三突だ。みほも強敵だが、今は長砲身潰さないとみほと戦っている最中に狙撃される可能性がある」

「なるほどね・・・わかったわ。静。頼むわ」

「はい」

服部が操縦桿を握り動かす。こうしてパンターGは戦場へと向かうのであった。



## 練習試合です

戦車道の授業初日で練習試合をすることになった俺たち。俺の乗るパンターGはまず長砲身の三突を倒すために三突がいるエリアに向かうのだった。

「服部、橋まであと何分だ？」

「そうですね……全速力で走ればあと一分半つてところね。あ、見えてきました」

服部がそう言うのと、目の前に吊り橋が見えてきた

「服部、あそこの林あたりに止まれ。待ち伏せして狙撃する」

「了解」

「さすがパンターですね。あつという間につきました」

「まあ、大洗の戦車の中で最速なのはこのパンターだからね……ほかの奴らはまだ到着していないようだけど……」

と、そんな話をし、橋の近くの茂みの中にパンターを止めた。そこは橋の向こうから見えにくい位置だ。無論後ろからでも。戦車を止めて待っていると遠くから砲撃音が聞こえた

「どうやらおっぱじめたようね……あの音からして八九式ね……」

「え？ 篠原さん砲撃音でわかるんですか!？」

「ええ、そうよ。戦車乗りたるもの砲撃音で戦車の種類また敵か味方かわかるようにしないとイケないのよ」

「黒森峰だとそうなんですか？」

「たぶん私か、義弘だけだと思っわよ」

小波や服部の質問に篠原はそう答える。するとまた砲撃音が聞こえた

「これは……三突だな。と、なると八九式と三突が交戦しているのか？」

「待ってください武藤さん。キャタピラの音が聞こえます」

「え？ 俺には聞こえんぞ小波？」

「私は従兄の赤目同様、幼い頃忍術の修行をしてきたので人一倍耳がいいんです」

と、小波はそう言う。何それもはやチートじゃないかよ。俺も忍術とか習おうかな？

「そ、そうか・・・で、小波。履帯の音はいくつだ？」

「はい。音は三つ。一つは追われている感じでもう二つは砲撃をして追われている戦車を撃っています」

と、正確に言う本当にすごいよ・・・

「そうか・・・と、なると砲撃音がしたエリアにいる戦車は三つ。種類は八九式、三突、そしてIV号・・・撃ってきてるのは音からして八九式と三突。で、追われている戦車を考えると・・・IV号か・・・」  
俺は地図を見てそう呟く。おそらくIV号が逃げ来る場所といえはここしかない・・・

「車長。履帯音さらに大きくなりました。こちらに近づいてきます」

と、小波がそう言う。本当にすごい耳をしているな、まるでレーダーかソナーのようだな。

「わかった。攻撃準備。篠原、狙撃準備頼む」

「了解。小波。砲弾装填」

「はっ！」

そう言い小波は弾薬庫から75mm徹甲芯弾を取り装填する。すると予測通りに吊り橋のところにIV号が出てきた。

「出てきた。義弘撃つか？」

俺はキューポラから顔を出してみる。するとIV号からみほが降りてきたどうやら橋がIV号でも渡れるかチェックしているみたいだな。そしてゆっくりと戦車が進みだし橋を渡り始める。みほはそれを誘導している

「義弘？」

「待て、今、IV号の周りにみほがいる。それに乗員が車内から顔を出しているし今撃てば命中した時の破片とかで巻き込んでしまう。砲撃はしばらく待て」

「・・・了解」

そう言い俺たちは様子を見ることになった。

一方みほたちは、八九式と三突に追い回されていた。しかも車内には逃げる際に出会った。冷泉麻子に乗せていた。逃げる中でも二両の戦車の砲弾が彼女たちを襲う。

「もくやだあーどうすればいいのよー!!」

と、武部が取り乱してそう言う。するとみほはハッチをあげて前方を見るするとそこにはつり橋があった。

「停車してください」

みほがそう言うと言っている五十鈴が止める。するとみほは戦車から降りる

「今出たら危ないですよ!」

「大丈夫。二発目まではたぶん時間があるから大丈夫!」

そう言い、みほは橋を渡り戦車が十ても大丈夫か確かめる。そして安全を確かめると

「ゆっくり前へ!」

みほがそう言うと言ったIV号はゆっくりと前に進む。だがしかし吊り橋の揺れでIV号の車体が橋の左側に寄ってしまいワイヤーにあたることでそのまま進んだため摩擦ができワイヤーが切れ橋が大きく揺れる。IV号戦車の車体の重みで橋が傾く。重量が重過ぎる所為で、橋が大きく傾いていく。

「落ちるう〜!嫌だあああ!」

と武部がそう叫ぶ。するとその隙について……

「撃てえー!!!」

三突の長砲身75ミリ砲が火を噴く。そして砲弾がIV号にあたる。しかし不発だったためか撃破判定は出なかった。だが……

「あつ……!」

「五十鈴殿!?!」

秋山と武部が操縦室を見ると五十鈴が気絶していたどうやらさっきの衝撃で気を失ったようだ。

「華ッ! 大丈夫ッ!?!」

「操縦手失神！ 行動不能！」

と、秋山がみほにそう言う。一方発砲した三突では……

「いた、見た、撃った」

「よしっ！ 行けるぞ。このままBチームと協力して撃破するぞ」

装填手のカエサルがそう言い、車長のエルヴィンがそう言う。どうやら戦車道経験者であるみほが乗るIV号を倒すためBチーム言八九式と手を組んだらしい。その証拠に八九式は三突の横に來ても攻撃しなかった。一方それを見ていた武藤たちは……

「おのれ二対一とは卑怯な！ 車長！ 篠原さん。攻撃しないのですか！？」

「まあ、落ち着け静。で、どうするの義弘。IV号は操縦手が気絶して走行が困難……このまま見物するつもり？」

篠原が俺をじつと見る

「見物するつもりはない……篠原、あれはまだできるか？」

「あれ？……ああ、あれね。何年かたってるけど腕はまだ衰えてないわ」

「そうか、……ん？」

「どうしたの？」

「IV号の動きが変わった……」

俺が見たものは停車していたIV号が再び動き出した。それもまるでベテランが操縦するような動きだった。するといきなりバックしたかと思えば急に前進し、三突と八九式の攻撃をかわす。そして停車して砲塔が回転し始めたのだが……

「篠原。三突がIV号より早く撃とうとしている。久しぶりにあれをやってくれ」

俺がそう言うと篠原はにやりと笑い。

「了解だK o m m a n d a n t<sup>長</sup>」

そう言い、篠原は照準を合わせる。

「撃て」

俺がそう言うと篠原はゆっくりと引き金を引くのだった。

一方IV号では、操縦手が失神しているため誰かが操縦しなければならなかった。

「…操縦は苦手だけど、私がやるしか」

みほがそう言った瞬間だった。急にIV号が動き出し橋の真ん中へと動く。車内の皆は操縦席を見るとそこには操縦マニュアルを片手に戦車を操縦している冷泉があった。さながら某機動戦士の主人公がマニュアルを見て操縦するのを連想させるような光景だった。

「麻子！運転出来たんだ!!」

「今覚えた」

「い、今っ!?!」

「さっすが学年主席!!」

冷泉の言葉に秋山はびっくりし、武部が感心して言う。

「とにかく撃てえ!」

「連続アタックっ!!」

「二それ!それ!それえ!!」

すると後方から八九式が副武装である九一式車載軽機関銃の6・5ミリ弾を撃つ。三突は装填手のカエサルが必死に砲弾を持ち上げようとすが重くて持ち上がらなかった。

すると、IV号がバックし始める。

「ちよつと！バックし始めたよ!」

「わかってる。」

そう言う冷泉は一気に操縦桿を前に倒し急発進する。そして三突や八九式の砲撃をかわした。するとその衝撃で気絶していた五十鈴が起きる

「はっ!?!わたしは・・・」

「大丈夫?」

「あ、はい・・・すみません」

「ううん。少し休んでて」

「いいえ、大丈夫です」

そう言うと五十鈴は前を見るのだった。それを見てみほは安心したのか笑みを見せるそして

「……秋山さん。砲塔を回転させて！」

「はっ……了解！」

そう言うと秋山は戦車の砲塔を回転させ三突に照準を合わせようとするが……

「西住殿！敵が砲撃しています！」

「砲塔間に合いそうですか？」

「、まだ照準があつてませんので難しいです！」

そう、言った瞬間。三突が砲撃を始めた。だが三突の放った砲弾はIV号に当たらなかつた。なぜなら……

ドガアーン!!

IV号に当たる手前に爆発したのだ。

「えっ!?何、何が起きたの!?!」

「わ、わかりません。急に三突の砲弾が手前で爆発しました！信管異常かもしれない」

「と、とにかくチャンスです。秋山さんお願いします！」

「わ、わかりました！」

そう言い。秋山はその後三突を撃破し、その後八九式を撃破するのだった。みほは車内であることを考えていた

「(なんで、三突の砲弾が……それに三突の砲撃音に交じってほかの砲撃音も聞こえた……まさか……)」

「有効！Cチーム、Bチーム。走行不能！やるわね。それにあの砲弾迎撃も……」

と、観察所で見えていた蝶野がそう言うのだった。

「よしっ！三突の砲弾迎撃成功！。IV号、三突及び八九式を撃破したな。篠原、やつぱおめえはすげえよ」

「ふんっ見たか。私の手にかかればこんなものよ」

そう、実は三突の砲弾がIV号の手前で爆発したのは篠原が放った砲弾が三突の砲弾を迎撃したのだ。

「す、すごい……飛んでいる砲弾に砲弾を当てるなんて……」

小波が冷や汗をかきながらそう言う。まあそれはそうだろう。普通は不可能なことを篠原がしたんだから、それに世界広しといえどこんな芸当ができるのは篠原しかいないしな。すると……

「車長、後方から38tとM3が来ます」

やつとたどり着いたのか、あの二両……

「よし、わかった。篠原、照準を38tに」

「了解！」

そう言って小波は砲弾を装填する。

「装填完了！」

「撃てっ！」

そう言い篠原は引き金を引く。一方38tはパンターが隠れて狙っているにも気づかず、照準をIV号に向けていた

「ふふふ……ここがお前らの死に場所だあ！」

河嶋そう言った瞬間、側面から、砲弾が飛び出し38tは引き金を引く前に撃破されるのであった。一方、M3は先ほどの戦いを見てすっかり戦意を消失していた。

「やつぱ半端ない！」

「それにあの狙撃も怖い！」

「逃げよ、逃げよ！」

「そうしよ、そうしよ！」

「急げえー!!」

そう言い、逃げようとするが、あまりにも慌てていたせいか履帯が泥沼にはまったあげく、履帯が外れそしてエンジンがエンストを起こし白旗が上がる

『DチームM3、Eチーム38t、CチームⅢ号突撃砲、Bチーム八九』

式、いずれも行動不能!』

と、アナウンスが入る。

「あとは武藤殿のパンターだけですわ西住殿」

「そうだね．．．でもどこにいるんだろう?」

「あ、あれ!」

と、車長である武部がある方向を指さしてそう言う、みほたちがその方角を見ると林の中からカーキ色のパンターが出てきた。

「あんなところに!!」

「あそこで待ち伏せていたんですね」

「じゃあ、やっぱりあの三突の砲弾は．．．義弘君が」

「え!? 西住殿! あの砲弾が爆発したのって．．．」

「うん。たぶん砲手の篠原さんが撃って迎撃したんだよ」

「そんなこと可能なのみほ?」

「普通の人はできないけど、でも、義弘君の戦車の砲手をしてきた篠原さんなら．．．」

そう言つて、みほは冷や汗をかく。

「そんなの! チートじゃん!」

「大変です! パンター砲塔がこちらをロックしています! この不安定な場所では．．．」

秋山がそう言つたとき、パンターのキューポラが開きそこから武藤が出てくる

「あれは．．．武藤君?」

みほがそう言うと、武藤は両手に白と赤の旗を取り出しいろんな方向に振る

「武藤、何をしてるの?」

「旗を振ってるな」

「振ってますね．．．」

「あれは．．．手旗信号?」

「えくと．．．サ、サ、ツ、ト、ハ、シ、ヲ、ワ、タ、レ、ワ、タ、リ、オ、ワ、タ、ラ、イ、ツ、キ、ウ、チ、ダ、．．．」 『さつ



さと橋を渡れ、渡り終わったら一騎打ちだ』つと言ってます」

秋山が義弘の振る手旗信号を解読する。

「義弘君……冷泉さん。このまま橋を渡ってください」

「わかった」

そう言い冷泉は戦車を動かす。わたっている間、パンターは砲撃はしなかった。そして橋を渡り終わり、IV号はパンターの正面に立つ位置に止まる。するとIV号のキューポラのハッチが開き中からみほが出る。一時的に車長が変わってもらったのだ。

「よう、みほ、一對一の勝負久しぶりだな……」

「うん……それとありがとう」

「ん？何がだ？」

「三突の砲撃からまm「おっと、そこまで」……え？」

「勘違いするな、みほ。俺は別にお前を助けるためにしたんじゃない。まあ半分はその気だったがな。それにお前とは中学の時の模擬戦で一度も決着したことがなかったからな。だから、ここで決着をつけよう。みほ」

武藤がそう言う、実はこの二人、中学の時何度も模擬戦で戦ってきたが、一度も勝敗がつかず引き分け終わりで決着が一度もつかなかったのである。それを聞いたみほは頷き

「うん……その勝負受けて立ちます。義弘君」

こうして西住みほと武藤義弘との一騎打ちが始まろうとしていたのである。

## 放課後の出会い

ここまでのあらすじ、戦車道の授業初日で急に模擬戦をやることになった大洗女子学園戦車道チーム。義弘が乗るパンターはまず、驚異の長砲身である三突を倒すために三突がいるエリア近くで待ち伏せしていた。すると、IV号が現れ、三突と八九式を倒す。そして38tやM3リーも倒されると、残るは義弘の乗るパンターとみほの乗るIV号だけとなり二人は一騎打ちすることになったのだ。

しばらく2両は動きを止め、じっとしてた。

「(さて……みほはどう出る?)」

俺はみほの乗るIV号を見る。おそらくみほに小細工は効かない。正面から出て一発で決着をつけなきゃいけない。しかしみほの乗る?型じゃあパンターの正面装甲は抜けない、おそらくみほのことだ。背後に回って撃つだろう。

「おそらく、IV号は俺たちの背後か側面に回る。気をつけろ」

『J a v o r!!』

みんなが返事した瞬間IV号が動き出した。そしていきなり進行を変えてパンターの後ろに回り込もうとする。てかあれってドリフトだよな!?

「車長!!車体変更、間に合いません!てかあれってドリフトですね!」

「砲塔旋回!」

「了解!」

今、車体を動かしても間に合わない。そこで俺は砲塔を旋回させ、IV号を撃つことにした。そして……

「照準よし!」

「装填終わりましたっ!」

「撃てえっ!」

俺がそう言い篠原は引き金を引きパンターの75ミリ砲が火を噴き、この練習試合の結果は……

『aチームIV号?型、FチームパンターG型走行不能!』

俺たちの乗るパンターがIV号を仕留めたのだがそれと同時にエンジンが壊れて、こつちも白旗が上がり、結果は相打ちの引き分けに終わった。

「あくあ・・・また引き分けか・・・」

俺はそう言い車長席に腰を掛ける

「残念だったわね義弘。」

「そうだな・・・」

だが悔いは感じなかった。すると無線から蝶野さんの声が聞こえる

『撃破された戦車は後で回収班が回収するわ、とりあえずみんな、戻ってきてちようだい』

と、聞こえる。

「撃破車両つて全部だけど・・・徒歩で格納庫に戻らなくちやいけなのね・・・」

「そうですね。戦車回収するなら私たち回収するための車送ってほしいですね」

篠原と服部がそう言いながら戦車を出る。俺も戦車から降りて格納庫へと向かうのだった。

「みんな初めてでこれだけガンガン動かせれば上出来よ!!」

何とか日が沈む前に格納庫につき、俺たちは格納庫前にいる蝶野さんの話を聞いていた。出たよあの『グッジョブ!ベリーナイス!』。あれって彼女のことを知っている人たちに一発芸として使われているんだよな・・・例えば眼鏡のお姉さんとか。

「特にAチーム、そしてFチーム、両チーム共に素晴らしい戦いをしていたわね。」

蝶野さんがそう言う。それを聞いた俺たちは嬉しそうな顔をする。そして蝶野さんはみんなに顔を向けて

「皆あとは各々戦車訓練に励むように、何かあったら連絡ちょうだいね」

「それでは、本日の戦車訓練を終了します、一同、礼!!」

「ありがとうございました!!」

一同例をして戦車道の授業は終わったのであった。

「いや〜終わった終わった〜。さあ〜てあいつらの様子でも見に行こうかしらね」

「小波さん。後でアイス食べませんか?」

「ぜひお供させてください」

と、各自自由行動をしていた。俺はというとやることがないためあたりをぶらぶらしてた。すると

「義弘君」

と、みほが来た

「ああ、みほ。お疲れさん。今回の勝負、結局また引き分けだったな」

「うん・・・」

「それにしても驚いたよいきなりドリフトしたんだからよ」

「あれは冷泉さんが・・・」

「冷泉?冷泉って今朝のあいつだろ?」

「うん・・・」

あれ?あの戦車に冷泉乗っていたっけ?っていうよりあいつ戦車の運転上手すぎだろう。

「てか、なんで冷泉が戦車に乗ってるんだ?」

「うん。実は模擬戦の最中に切り株のところまで寝てたところを見つけ、で、巻き込まれそうになったのをIV号に乗せたの」

切り株?.....あゝ俺が昼寝場所に最適だといったあの場所か。

「そうか.....」

「それにしてもやっぱり義弘君。今回は引き分けだったけど次は負けないからね」

「ああ、今回はエンジン不調だったが次こそは決着つけてやるよ。みほ」

「……うん♪」

その後、みほは汗を流しにaチームの皆と風呂に入りに行ったのだった。

「……さて、俺も帰るか」

そう言い、俺は寮へと帰るのだった。

「はあくそれにしても疲れた……寮にいたらシャワー浴びて寝よう……」

そう言いながら俺は鞆を片手に寮へと帰るすると

「ん？」

何やら誰かがもめているような声が聞こえる。俺はそこへ行くとそこには白い服あれは……船舶科か？それを着た不良らしき少女が、あれは……篠原の所の不良仲間か？が、誰かを庇ってその不良と口論していた。その不良の後ろにいるのは

「あれって……？チームの1年生たちか？とにかく行ってみよう」  
そう言い俺はそこに向かうのだった。

#### 数分前

「もう汗だく。シャワー浴びたいな」

「戦車の中って蒸し暑いよね〜クーラーとか入らないのかな？」

「でも私は戦車とかできて楽しかったよ♪」

「……」

「紗季も楽しかったって」

「でも・・・西住流の先輩とあの男の先輩。すごかったね・・・私たちにあんなことできるかな？」

と、一年生チームたちはそう話し合いながら帰宅していた。すると・・・

「おい。あんたら」

と、白いセーラー服にロングスカートの不良少女団が彼女の前に立ちただかる

「な、なんですか？私たち先を急いでいるんです」

一年生の澤梓は危険を感じたのかそう言い避けて通ろうとするが他の不良に囲まれる

「いいじゃんええかよ。あたいらゲームで金使っちゃまってよくあたいら今財布がすかんぴんなんだよくだからさくかね貸してくれねえか？」

「い、いやですよ！そこを通してください！」

「そうだよ！これから私アニメ見るんだから！」

「そーだ！そーだ！」

少し震えながらも勇気を出してそう言う一年生チーム。しかし

「おおおお怖い怖い。威勢のいいのはいいいけどね、そんなのはな相手を見てからいいな！」

「いいから、金貸せって言ってんだよ！出さええなら痛い目に合わせんぞこらあー！」

そう言い、不良たちは1年生にカツアゲしようとするが

「おい待ちな！」

「あゝあん！」

急に誰かに声をかけられ不良たちが振り向くとそこには

「てめえら、またうちのシマ荒らしてんのかあ！この海賊野郎があー！」  
「あんたら、船舶科のお銀の下っ端連中だな！ここらはあたいらの島だぜー！」

そこに現れたのは篠原の部下の不良集団だった。そして不良集団は1年生を庇う形で船舶科の不良に立ちはだかる

「なんだと思えば、陸の山賊連中じゃねえかよ？てめえらには関係ねえことだ。貴様らこそ立つ去れよ！」

「そういうわけにはいかないね〜この子たちはうちの姐さんが履修してる戦車道の後輩なんだ。それによ。うちの島で好き勝手な事させるわけにはいかねえだ」

と、二つの勢力がにらみ合っていると、少し小柄の不良が

「あんたたちここはあたいらたちが引き付けておくからおくから、さっさと帰んな」

そう優しく言う

「あ、ありがとう。ほらみんな今のうちに・・・」

梓がそう言うときみんな頷き、こっさりこの区域を離脱しようとするが・・・

「おっと、そうはいかねえぜ！」

と、船舶科不良の一人が逃げ出そうとする1年生チームを見つけ1年生の一人、丸山紗季を人質に取る。しかもその不良は果物ナイフを持っていた

『紗季!?!』

「動くなあ！この小娘がどうなってもいいのか！この子を無事に返してほしければ、有り金全部渡しな！それとおめえらは裸になって土下座してもらおうかな〜」

「くっ！貴様卑怯だぞ！」

「紗季を返して！」

「返してほしければ言うことを聞けえ！」

万事休す！そう思いきや

「おい、その手を放しなよ」

と、ナイフを持つ不良少女の手をいきなりつかむものがいた。その人物とは

「女の子がそんな危ないものを持つのは物騒だな・・・」

「せ、先輩!?!」

「む、武藤の兄貴!?!」

そう、その少女に腕をつかんだのは義弘だった。因みに篠原の部下

たちからはなぜだか『兄貴』と呼ばれている。武藤はその少女の腕を無理やり引っ張る

「いでいでっー！」

不良少女はいきなりすることに驚き、丸山をつかんでいた手を放してしまふ。そして先はその隙について無事脱出するのだった。

「紗季。大丈夫!？」

「……」

「よかつた〜大丈夫だつて」

紗季は友達である梓たちの所に避難し、義弘もつかんだ手を放し、彼女の前に庇うように立つ。

「てつめえー何しやがるんだ！せつかく小遣い取れると思ったのに邪魔しやがつてー！」

「何つて、人質を助けたただけだが？」

「な、なんだとおー！この男女があー！」

と、船舶科の不良たちが怒ってそう言う。そしてバットやメリケンサックなどの凶器を取り出し

「やっちまええー!!」

そう言い襲い掛かろうとしたが……

「やめなっー！」

と、どこからか声が聞こえ、その声を聞いて船舶科不良少女が動きを止めその声のしたところに顔を向ける。するとそこにはいかにも海賊みたいな黒いコートを着た白い服を書いた少女がいた

『ぎ……銀さん!？』

「あんたら、よそ様の領土でしかもカタギの子たちに何やってるんだ？ここは篠原の土地だぞ？それに私の許しなく何問題を起こそうとしているんだ？」

「え、いやその……」

「私、何度も言っているよね……人様の迷惑になるようなことはするなつて……」

と、銀と呼ばれた少女は目を細め船舶科の部下を睨む。不良少女たちは冷や汗をかいていた。



「とにかくあんたたちはさっさと帰りな！話はその後でじっくりと聴く……」

「わ、わかりました！」

そう言い、不良少女は去っていった。そして銀は俺たちのほうを振り向いて

「うちの若い連中がすまないことをしたわね……この無礼は後日使者を送って謝罪するよ。篠原にも伝えておいてくれ……それにしてもあんた。」

「え？俺？」

「そうあんた。あの鬨気まるで鬨将、山口多門みたいだね……まあ、山口多門にはあったことがないからわからないけどね……じゃあ」

そう言い、彼女は去っていった。なんなんだあいつ？言っている意味が分からん。するとしばらくして篠原の所の奴も

「それじゃあ、武藤の兄貴あつしら、篠原の姐さんにこのことを報告しに行くんで、あたいらはこれで……おい！行くぞおめえら！」

『はいっ！』

そう言い、篠原の部下も帰って行った。そして残るは俺と1年生チームだけになった。

「さて……俺も帰るか」

そう言い、俺も帰ろうとしたが

「あ、あの先輩っ！」

帰ろうとしたら1年生の確か澤だっけか。その子に引き留められた

「ん？なんだ？」

「あ、あの！助けてくれてありがとうございます！」

『ありがとうございます！』

っと頭を下げて礼を言う1年生たち

「別に俺は大したことやってねえよ。それに礼なら、篠原のこの奴らに言えよ。あんたらを庇ってくれたんだから。それと帰り道気を付けて帰ろよ」

「は、はいっ！」

澤が元氣よく返事をし、それを聞いた俺は、寮へと帰るのだった。

「さて、暗くなってきたし、急いで帰るか」

それにしてもあの銀っていう少女・・・また会う気がするな・・・  
そう思う俺だった。

## 練習試合申し込みます

「はあく……疲れた……」

寮の部屋に帰りシャワーを浴びた後、俺はベットに倒れこみそう言う。本当に今日は疲れた。まず久しぶりに戦車で神経集中させすぎたのと帰りに不良と張り合ったことだ……。まあ、それで一年の奴らが助かったからよかったけどな。

プルルルル♪

しばらく寝っ転がっていると、突然携帯電話が鳴った。

「誰だ？」

携帯を手つてみると相手は角谷さんだった。

「……もしもし？」

『ああ、武藤君？』

「会長……何の用ですか？」

電話の相手は角谷さんだった

『いや〜ごめんね〜それでさ武藤君、明日の放課後生徒会に来てくれない？』

「え？なんでですか？」

『実はね、近々練習試合申し込みもうと思つてさ〜で武藤君に協力してほしいんだけどダメかな？』

「……はあくそのくらいならいいですよ。では明日の放課後、生徒会室ですね」

『うん。よろしく頼むね〜』

そう言い俺は電話を切つたのだ。

「はあく明日はいろいろ大変だな……。さて夕飯でも作るか」

そう言い俺は立ち上がるすると……

ピンポン♪

インターホンが鳴る。誰だろう？……。俺はドアを開けるすると

「ご、こんばんわ……。義弘君」

そこにいたのはエプロン姿で両手に鍋を持ったみほだった

「みほか？どうしたんだ？」

「うん．．実は夕食にカレーを作ったんだけど作りすぎちゃって．．．」  
と、もじもじして言う。みほ。そう言えば鍋からカレーのいい匂いが．．．

「だから一緒に食べない義弘君？」

「ああ、ちようど夕飯作ろうかなっと思ってたしな。せつかくだし、あがってけよ」

「うん」

俺がそう言うときみほは嬉しそうに頷いて、俺の部屋に入るのだった。

「．．．．．うん。美味しいな」

「ほんと？よかつた」

「ああ、本当にうまいよ」

俺は今みほと一緒にみほの作ったカレーを食べていた。本当にうまい。中学の時は料理はからっきしのみほがここまで上手くなるなんてな．．．

「義弘君。今私が料理ができるなんて意外だっと思っただでしょ？」

「イヤ、ソナコトナイデスヨ」

ジト目で見えるみほに俺は目をそらして言う。みほって昔から勘が鋭いな．．．

「私だってあれからいろいろ練習とかしたんだよ。逸見さんと赤星さんと一緒に頑張ったんだよ。赤星さんは私の花嫁修業のための練習だとか言ってたけど」

「そうか．．逸見や赤星も一緒か．．あいつらどうしてるのかな．．」

最後にみほが小声で何か言ってたけど気のせいかな？

「じゃあ食事を続けよみほ」

「うん。そうだね」

俺たちは互いに笑いながら食事を続けた。その後、俺は今度はみほの部屋に招かれみほの大好きなボコの映画を見たのだった。やっぱりボコはいい、あれを見ると昔のころの自分を思い出す．．ある意味。そして深夜2時まで鑑賞した後俺は自室に戻り寝たのだった。

翌日の放課後生徒会室

「武藤義弘入ります」

「武藤君？入って入って〜」

会長の言葉に俺は生徒会室に入る。

「お茶どうぞ」

俺と会長そして河嶋さんがソファーに座っていると小山さんがお茶を持ってきてくれた。

「ありがとうございますいます小山さん。……で角谷さん練習試合の件でしたよね」

「うん。そうだよ。武藤君ならツテでどっか練習試合組めないかなっておもってさ〜」

そう言い干し芋をほおぼる角谷さん

「……で、どことがいいんですか？」

「できれば強豪校でお願いできないか？」

「強豪校？なんでまたそんなところ……あくなるほど勝ち負けではなくて経験積ませるためか……」

「そう。さすが武藤君。察しがいいね〜」

確かに今の大洗戦車道チームに必要なのは実戦による経験だ。それを考えると普通の戦車チームより強豪協が相手ならいろいろなことを学べることができるからな。

「と、なると俺が知っている中で強豪校は4つだな」

「4つって言うത്？」

「プラウダ、聖グロリアーナ、サンダース、そして黒森峰だ」

じつは継続もあるのだがあそここの隊長は気まぐれというかひねくれというか多分めんどくさいことになるため言わなかった。

「……で武藤君はどこと対戦したほうがいいと思うの？やっぱり黒森峰？」

「いや、黒森峰は無理だな」

「なんでだ武藤？」

「俺はあそこを抜け出した身だぞ。そんな奴の話なんか聞いてくれる

と思うか？」

「……なるほどね……」

俺の顔を見て察したのか角谷さんは「ごめん失念していた」つという顔でそう言う

「と、なるかとあと三校だが……できるのか？」

河嶋さんにそう言われ俺はうんとうなる。プラウダは……無理。姉弟子が相手にしてくれるとは思えないしケイだったらできそうだが今月は忙しいみたいだしな……となると……

「聖グロリアーナ女学園ですね……あそこならおそらくは……」

「知り合いがいるの？」

「ああ、うちの砲手。篠原の妹がそこにいてな。しかもあいつ聖グロリアーナの幹部だから恐らくは……」

それにあそこの隊長とは顔見知りだからな……電話番号は知らないけど

「じゃあ、そこお願いできる？」

「やれるだけやってみます。ちよつと失礼しますね」

「ほいほい」

俺は角谷さんに言うと、携帯電話を取り出して番号を鳴らす

『はいこちらルクリリですわ』

は？ルクリリ？

「……久しぶりだな。俺だよ覚えてるか？」

『……その声義弘さん!?お久しぶりです!道子姉さん元気?』

「ああ、元気だぞ。つというよりそのルクリリって……今でもその名使っているんだな。というよりお前口調も変わってるし前あった時は男口調だっただろ？」

『え?ああ聖グロリアーナに入るとお嬢様口調しないといけないから……』

なるほどな……

『……で何の用?てか、義弘さん。今までどこに行ってたんですか。心配していたんですよ?ある時は死んだって噂も流れてたし』

「勝手に殺すなよ。まあいろいろな事情があつてな。それで要件つて

「いうのは今、俺大洗にいるんだよ」

『ふくん。それで?』

「ああ、実はなうちの学校戦車道復活させてな。そこで練習試合しようとしてな。聖グロリアーナの幹部のルクリリにお願いできるかなっと思つてさ」

『なるほど。言いたいことはわかりましたわ。たしかに私は幹部だけど決定権は隊長であるダージリン様にありますわ。だから私個人で勝手な了承はちよと…何ならダージリン様に代わりましょうか?』

「ああ、頼む」

そう言うと急に電話からメロディーが鳴り始める。しばらく流れていると

『はい。お電話を代わりました、私が聖グロリアーナの隊長のダージリンです』

と、聞き覚えのある声が聞こえた

「やあ、ダージリン。久しぶりだな」

『あら?その声は…高杉さん。中学の試合以来ですね…で、ルクリリから話は聞きましたわ。練習試合の件お受けしましょう』

「いいのか?」

『ええ、受けた勝負は逃げない主義ですの』

「そうか、それはありがたい。で、場所と日時は?」

『場所はあなたにお任せしますわ。日時はそうですね…日曜日の10時でどうでしょうか?』

俺は角谷さんを見るとその会話を聞いていたのかOkサインをする。まあ、聞こえやすいように音大きくしてたんだがな

「わかった。日曜の10時だな」

『ええ、では試合。楽しみにしてますわ高杉さん。』

「ああ…それと今の苗字は武藤だ」

『あら?改名なされたんですか?』

「まあ、いろいろあつてな」

『そうですか…では武藤さん、試合でお会いしましょう』  
「ええ、こちらも」

俺は電話を切った。

「・・・ということですか角谷さん」

「ご苦労ね武藤君。じゃあ、河島く」

「はっ、直ちに練習試合に向けて準備します」

「そう言い河嶋さんは部屋から出て行った。さてさて・・・日曜は忙しくなりそうだな。」

「では、角谷さん。俺はこの辺でお暇します」

「うん。今日はいろいろと協力してくれてありがとね」

俺は小山さんにお茶のお礼を言い部屋を出たのだった。そして俺は寮へと帰宅している最中・・・

「あつ、そうだそう言えば枕買った」

俺は使っていた枕がボロボロになってたのに気づき、枕を買うためホームセンターに向かうのだった

ホームセンター

俺は枕が売つてある売り場で枕を見ていた。羽毛に綿にソバから・・・いろいろながあつて迷つてしまう。俺はしばらく枕を見て「うん。これがいいな」

俺が取つたのは羽毛の白い枕だった。俺はそれを手に取りレジの方へ向い枕を購入。その後は店内をぶらぶら歩いていると・・・

「あれ？武藤じゃん」

「・・・よう、奇遇だな」

クッション売り場で偶然にみほや武部たち5人と出会ってしまった。

「こんなところで何してるの？」

「見てわかんねえか？枕買いに来たんだよ。武部たちは？」

「うん実はね。戦車乗る時お尻が痛くなちゃって、だからクッションを買おうと思つたの」

「え？戦車にクッション引くつもりなのか？」

「・・・みほと同じこと言ってる。ダメなの？」



「いや、戦車にクッション引く選手見たことが……あるな」

あ、そう言えば一人いたな……地吹雪とか……まあ今はどうしてるかは知らないけど

「え？何か言いましたか武藤殿？」

「いや、なんでもない。ところで、冷泉。お前戦車道をする事になったんだな」

「ああ、最初は書道選択してたんだけど、西住さんや武藤さんには大きな借りがあったし、特に武藤さんは朝、何度も助けてもらったしな……」

借りって今朝のことか？ほんと変なところで律儀だな冷泉は……  
「別に借りとかいいのに」

「くだいようだけど。私は受けた恩は何と言われようが必ず返す。おばあにそう教わった」

本当に律義だ……俺は冷泉の律義さに感心するのだった。

「で、武藤これからどうするの？」

「どうするって、目的の物かったからあとは寮に帰るだけだけど？」

「それじゃあさ、武藤も私たちの買い物に付き合ってよ。予定ないんでしょ？」

「ああ、まあいいけど。」

こうしておれば彼女たちの買い物に付き合うことになった。まあ、買い物といってもクッション買うだけのことだがな。

「あつ、これ可愛くない？」

「これも可愛いです」

武部と五十鈴がハート型や少し和風な感じのクッションをかごに入れてる。確かに可愛い。後ろで秋山が呆れた顔をしているけど……

「あとさー、土足禁止にしない？」

「え！」

「だって汚れちゃうじゃない」

「土禁はやりすぎだ」

「冷泉の言う通りだ武部。素足だと。下手して戦車の機材に足挟まっ

て怪我するぞ」

てか、戦車も一応車だ。車をはだして運転する人なんて聞いたことがないしそれどころか万が一被弾したら危ない。

「そっか・・・じゃあ色とか塗り替えちゃダメ？」

「ダメです！ 戦車はあの迷彩色がいいんですから！」

「まあ、待てよ秋山・・・で、ちなみに何色にするつもり？」

「ピンクっ！ やっぱり女子はピンクでしょ？」

「却下だ」

「え〜」

まあデザートピンクならセーフだけどな・・・さすがに真ピンクは派手すぎだろう。

「でしたら芳香剤とか置きませんか？」

「ああ。それいいね華。それと鏡とか欲しいよね、携帯の充電とか出れないのかな？」

と、武部や五十鈴が楽しそうに話し、秋山はガックシと肩を落としたり冷泉はすぐそのベット売り場で寝ころんで寝ていた・・・て売り物で寝たらダメだろ。俺は冷泉のところに来て揺り起こす。

「ちよっ冷泉！ 売り物で寝るな」

「ベットの誘惑には・・・勝てない・・・」

「あははは・・・」

と、それを見てみほは苦笑するのだった。本当に今日一日はいろんなことがあった。だが翌日の戦車道の授業で俺は信じられないものを見て驚いてしまうのだった。

## 個性は人それぞれ

あれから翌日俺は信じられないものを見た。それは一昨日のうちに修理が終わっているのにも驚いたのだが、何より驚いたのは戦車の塗装が変わっていた。IV号の塗装は変わっていなかったのだが、八九式はバレー部募集つと書かれたスローガンが書かれていて、三突は赤だの黄色だの青だのカラフルな塗装になっていて極めつけは新選組や海援隊、そして真田六文銭や風林火山の旗が刺さっていた。あれって意味あるのか？三突の長所潰しているように見えるが・・・そしてM3リーはピンク色。デザートピンクじゃなくて真ピンク色だった・・・女子ってみんなピンクがいいのか？オレンジじゃダメなの？別にオレンジ色が好きじゃなければ女子っていえばオレンジと考えてしまう自分がいる。なんでだろう？

話を戻そう戦車の塗装で一番目立ったのは38tだった。なぜかというと全体が金ぴか金の金色だったからだ

「・・・ガンダムの百式かよ・・・」

ゴージャスというかなんというか・・・みほも同じ心境なのか啞然としてその戦車を見ていた。

「・・・かっこいいぜよ」

「支配者の風格だな」

「ふむ」

「私はアフリカ軍団仕様が良かったのだが・・・」

「これですぐ自分の戦車がわかるようになった！」

「やっぱピンクだよね」

「かわいい」

と、それぞれ自分の乗る戦車の塗装に満足そうに言う。角谷さんは・・・

「うん。いいね」河嶋。例の件すぐに先方に伝えてくれない？」

「はっ。連絡してまいります」

そう言い河嶋さんは角谷さんにそう言われその場を後にする。おそらく練習試合の場所が決まったんでダージリンに知らせに行くん

だろう。

「む〜」

一方、aチームの武部はまるでフグみたいに頬を膨らませていた。「私たちも色塗り変えればよかったじゃん!」

そう言う。まあ気持ちはわからなくはないけどやっぱりピンクはだめでしょ?

「ああ、38tが! Ⅲ突が! M3や八九式がなにか別の物に〜!!  
あんまりですよね! 西住殿! 武藤殿!」

と、俺とみほにそう呼びかける秋山。まあ、彼女にとって戦車はかけがえのないものだからわかるが...

「まあ: 個性的でいいんじゃない? 大戦期もあんな感じの塗装、資料で見たことあるし...」

旧陸軍の塗装しかり、アメリカの戦闘機のシャークマウスしかり、エーデルワイス号しかり。え? 最後のは違う? まあ細かいことは気にするな

「武藤殿〜」

と秋山がそう言うところ...

「ふふっ、ふふふっ」

みほが突然笑いだした。

「に、西住殿?」

秋山が話しかけてもまだみほは笑い続けている。

「どうしたんだ? みほ。そんなにおかしいか?」

「うん。だって戦車をこんな風を使うなんて考えられないけど...: なんか楽しいね。戦車で楽しいと思ったの初めて!」

と、笑って俺たちにそう言った。なんかみほが戦車のことで笑う姿を見たのは小学校以来だな。やっぱ、みほは笑顔が似合うよ。

「そう言えば武藤殿の戦車は?」

「ああ、パンターならあそこだよ」

俺が指さしたところをみほたちが見るとそこには俺たちFチームが乗るパンターGがあつて篠原たちが砲弾などを積んでいた。幸い

エンジンは完ぺきに直っていた。前ははどうもエンジンの部品の一つが緩んでいたため壊れてしまったそうだが今度は大丈夫そうだ。

「あれ？武藤の戦車の色変わってないじゃん」

「まあな。いちいち塗装全体塗るのは大変だからな。ただちよつとアレンジをしたがな」

「アレンジですか？」

五十鈴がそう言うと、みほは何か気づいたのか

「あ、パンターの砲塔側面・・・」

「本当だ。絵が描かれているあれって狼？」

そう、パンターの砲塔の横に黒い狼の絵を描いたのだその狼は今にもとびかかる寸前のポーズをしている

「これって・・・」

「ああ、黒森峰時代に使っていたマーク「黒狼」だよ」

そう、あのマークは俺が黒森峰時代につけていた黒狼のマークだった。

「そうですか・・・わかりました。はい。では、その場所で日曜の10時に・・・」

一方その頃聖グロリアーナでは大洗からの場所の報告を聞いていた。そしてダージリンはメモを取りながらそう言い、受話器を置いた。

「ダージリン。何か嬉しそうだけど何かあったの？」

と黒い大きなリボンを付けた女性がそう言うと

「そう言えば日曜日は大洗女子との練習試合でしたけどそれが原因ですか？」

と、今度は小柄でダージリンに似た髪型をした少女が訊くとダージリンはにっこりと笑い

「ええ。そうですねよアッサム。オレンジペコ。久しぶりにリベンジマッチができるのですもの」

「はい？リベンジマッチですか？」

「大洗に誰か知り合いでもいるのダージリン」

「ええ、アッサム。高杉さんがいるの」

その言葉を聞いてアッサムは目を丸くし額には小さな汗が出ている  
た

「た、高杉・・・高杉ってあの高杉さんですか？」

「ええ、でも今は武藤と名字を変えているみたいですけど話声や口調のクセですぐにわかりましたわ」

「・・・なるほどそれならダージリンが楽しみにしているのも頷けるね・・・」

と、ダージリンとアッサムはそう納得しあっていたのだが

「あ、あの・・・ダージリン様？アッサム様？私はよく知らないんですけど。その高杉さんって有名な方なんですか？」

と、オレンジペコがそう訊くと

「ペコ。ブラックウルフのことは知っていますわよね？」

「え？ブラックウルフ？・・・ああ黒狼のことですか？はい。戦車道界最強の戦車乗りですよ？数倍いる敵を無被弾で倒したり。また強行武力偵察任務が得意なため『ビットマンの西住。カリウスの島田にバルクマンの黒狼』って呼ばれた・・・」

「あら？そんな二つ名ありましたっけ？」

「はい。確かに「黒森峰の悪魔」とか「黒狼」とかの名が有名でしたが、私がいた学校ではそう呼ばれていました。」

「そうなの・・・」

「はい。それでその黒狼と高杉さん。何の関係が・・・まさか」

と、ペコがそう言うとうと自分でも気づいたのかダージリンの顔を見る

「ええ、そうよペコ。その高杉さんがあの黒狼なのよ」

「え!?!でもその人は3年前に死んだって聞きましたが・・・」

「彼はぴんぴんしているわよ。死んだってというのはただの根も葉もな

いただいたの噂。ただちよつと事情があつて戦車道界から消えたただけですわ」

「そうですか……あれ?彼?」

と、ペコは何か違和感を感じている中ダージリンは窓の外を見て微笑みながら紅茶を飲むのだった。

「今日の訓練ご苦労だった」

『お疲れさまでした!!』

戦車道の練習も終わり空も茜色の中俺たちは生徒会三人組の前に立ち練習の終わりの挨拶をした。それにしても俺ぼチームとみほ以外のみんな初めての練習のためか疲れた顔をしていた。すると

「え、急ではあるが、今度の日曜日に練習試合を行う事になった、相手は聖グロリアーナ女学院!!」

河嶋さんの言葉にみんな騒ぎ出す。すると秋山は何やら難しい顔をしていた。まあ、秋山は戦車はおろか戦車道も好きだから相手の実力のことを知っているのだろう。

「どうしたの?」

「聖グロリアーナ女学院は全国大会で準優勝したことがある強豪です……」

「準優勝!?!」

と、武部たちが驚いている中

「聖グロリアーナか……中学時代の試合を思い出すわね……」  
「聖グロリアーナ……中学の時、私のチハがあいつらのスチュアートに……これは絶好の機会、絶対にリベンジしてやるわ……」

と、篠原はそう言い、服部に関しては何か因縁があるのか少し怖いくらいの笑みをしていた。そう言えば服部って知波単中等部出身だつて言つてたっけ……

「場所は近日寄る港……大洗町で日曜日の10時に試合開始のため朝六時に学校に集合!」

場所は大洗町に決まったのか。それにしても朝6時か……まあ、

黒森峰の時は試合開始前のウォーミングアップとかするから集合は朝の5時集合だったもんな……あれに比べればまだましだ……だが、河島さんの言葉に絶望する人がいた。それは

「……やめる」

「はい？」

「やっぱり戦車道やめる」

「もうですか!？」

「麻子は朝が弱いんだよ……」

そう、冷泉だ。たまに朝、冷泉と会っているからわかるが、冷泉は俺と同じ朝に弱い。朝の弱い人間にとって今の言葉は死刑宣告と同じだ。すると冷泉は夕日に向かい帰ろうとしていくそれを見たみほたちが追いかける。

「ま、待ってください!」

「六時は無理だ!」

「モーニングコールさせていただきます!」

「家までお迎えに行かせてもらいますから」

「朝だぞ? 朝六時に……人間が起きれるか!？」

と、冷泉が真剣な顔でそう言う。だが

「いえ、六時集合ですから起きるのは五時ぐらいじゃないと……」

秋山それは今言わなくていいだろ? 秋山のその言葉に冷泉は倒れそうになるがすぐさま体制を立てて

「人には出来ることと出来ないことがある! 短い間だったが世話になつた!」

そう言い冷泉は立ち去ろうとした

「冷泉……お前それでいいのか?」

「なに?」

俺の言葉に冷泉が振り返る。

「別にお前の決めたことに干渉する気はないがお前はそれで後悔しないのか? 昨日マーケットでみほたちに借りを……恩を返すために入つたんだよな? 恩を返さずお前は戦車道辞める気か?」



「うっ……」

その言葉に冷泉が立ち止まる。その顔は気まずそうな後ろ暗そうな顔だった。律儀な人間にとって約束を破るといふのは耐えがたくそして後悔の残ることだ。

「武藤の言う通りだよ！それに麻子がいなくなったら誰が運転するのよ！ それにいいの？単位!!」

武部の言葉に冷泉はさらに顔を強張る。

「このままじゃ進級できないよ!? 私たちのこと先輩って呼ぶようになつちやうから！ 私のこと沙織先輩って言ってみ!!」

「うっ……さ、さ・お・り……せん……」

と苦しそうに言う冷泉。それを見て武部は深くため息をつき

「それにさ、ちゃんと卒業しないとおばあちゃん物凄く怒るよ?」

「おばあ!」

とその言葉で冷泉の強張った顔は完全に崩れ去り、恐怖する顔に変わった。おばあって冷泉のおばあさんか……冷泉が言うにはその律義さもおばあさんに口酸っぱくして教えられたためそうなったとか……冷泉はしばらく考えた後……

「……わかった……やる」

と、冷泉はしぶしぶ了承するのだった。

「安心しろ。試合の日には武部たちと一緒に俺も起こしに行くから」

「……す、すまない……武藤さん」

こうして冷泉の戦車道脱退は防げたのだった。

## 練習試合の作戦は大切です

練習が終わった後、俺やみほ、それにほかの戦車長は角谷さんたちに急遽生徒会室に集まるように言われた。その理由は今週末に行われる練習試合に向けて対策会議をするというのが理由だった。

「いいか、相手の聖グロリアーナ女学院は強固な装甲と連携力を活かした浸透強襲戦術を得意としている」

河島さんがボードに張られた聖グロリアーナの主力戦車のマチルダ。そしてチャーチル歩兵戦車のスペックや聖グロリアーナの戦法を説明していた。その話を聞いていたのは車長である俺と、みほ、それにM3の車長の澤さんに三突のカエサル。彼女は車長じゃないのだが歴女たちの中ではリーダー格なのでここにいる。また名前の突込みについては諦めた。そして八九式の磯部さん通称「キャプテン」だった。

「とにかく相手の戦車は堅い、主力のマチルダⅡに対して我々の方は100メートル以内でないと通用しないと思え」

まあ、河島さんに言うことは間違いではない。マチルダの最大装甲は75mm以上。三突かうちのパンターじゃないと遠距離からの攻撃は難しい。しかも丸みを帯びた装甲だから弾きやすいしな。その間に河嶋さんは話を続ける。

「そこで一両が囷になってこちらの有利となるキルゾーンに敵を引きずり込み、高低差を利用して残りがこれを叩く！」

その言葉にみんなは頷いたり、勝利を確信した顔になる。なるほど悪くはない作戦だ。悪くはないのだがただここで一つ問題がある。みほもそれがわかっていのか不安そうな顔をしていた。

「西住ちゃん。武藤君どうかした？」

と、角谷さんは俺とみほに気付いたのかそう訊く。みほは遠慮して言うが

「いいから言ってみよ」

と、優しく促す。するとみほは静かにこう言った

「……聖グロリアーナ当然こちらが囷を仕掛けてくることは想定

すると思います。裏をかかれ逆包围される可能性があるのです……」  
「あく確かに！」

と、みほの言葉にみんなが納得する。すると  
「うるさい！私の作戦に口を挟むな！そんなに言うならお前が隊長をやれ！」

「……すみません」

と、みほに怒鳴った。あれ、まほさんがいたら河嶋さん確実に戦車の的にされてたな。

「いや、みほが謝る必要はないよ」

「なんだと！武藤！きさま西住の肩を持つ気か！」

と、河嶋さんは今度は俺に怒鳴る。前から思っていたんだが河嶋さんはクールビューティーな見た目と違い意外と短気なんだな……  
「まあ、まあ、河嶋落ち着きなよ。……で武藤君はどう思ってるの？この作戦じゃあ不満？」

と、角谷さんが河嶋さんをなだめて、俺にそう訊く

「まあ、河嶋さんの作戦自体は悪くはない……素人にしては」

「何か言ったか、武藤？」

「いえ、なんでもありません。とにかく最初の作戦はそれで問題ないでしょう。ただ相手は準優勝の経験のある強豪。その作戦だけでは失敗する可能性があります。念のため2つか3つ予備の作戦を立てる必要があります」

「なるほどね〜でも隊長は経験豊富な西住ちゃんがやるといいよ。」

「えっ？」

まあ、予想はしてたんだが角谷さんの言葉にみほが驚く

「西住ちゃんがうちのチームを引っ張ってね。それと武藤君。」

「はい？」

「副隊長は河嶋がやることになったんだけどね。武藤君はその補佐である副隊長補佐官を務めてくれないかな〜河嶋だけだといろいろ心配だから」

と、干し芋を食べながらそう言う。副隊長補佐か……黒森峰でも同じ役割だったな……

「・・・ということでもよろしくね二人とも」

とそう言うと笑顔で手をたたく。するとほかの子たちもにっこりと笑って手をたたく。

「頑張つてよー、勝ったら素晴らしい商品をあげるから」

「え？何ですか？」

「私がこよなく愛するこの最高級干し芋三日分!!」

と3本の指を突き出し、嬉しそうに言う。それを聞いてみんな呆れた顔をする。干し芋三日分って・・・どんだけ干し芋好きなんだよ角谷さんは・・・

「あ、あの・・・もし負けたら？」

と、磯部がそう言う・・・

「うーん。大納涼祭りでアンコウ踊りをやってもらおうかな。武藤君は伴奏の太鼓をお願いね♪」

なんだと・・・角谷さんのその言葉にみんな固まってしまい中には顔を青ざめていた。みほは転校したばかりなのでアンコウ踊りがどんなのかわからず首をかしげていた。俺は抗議しようと思ったがあの会長はいったん言い出したことは引かない頑固な面があるからアンコウ踊り撤回は不可能だろう。

「じゃあ、河嶋の作戦が失敗した時のための作戦。西住ちゃんと武藤君そのところよろしくね」

っということで作戦会議はこれにてお開きとなった。

「あはは・・・アンコウ踊りね・・・あのちびっこ会長もとんでもないことを言い出したわね。義弘これは勝たなきゃいけないわよ。みほさんのためにもね」

「ああ、わかってるよ篠原」

その後俺は篠原と一緒に帰宅していた。

「・・・そう言えば義弘」

「ん？なんだ？」

「お前、高校一年の時から大洗こじにいたんだよな？」

「ああ。そうだよ」

「じゃあ、あなたがいなくなった中学二年と3年の時はどこにいたのよ？」

「……あの時は先生のいるドイツにいた」

「先生……ああ、エディータ先生のことね。」

「ああ、そこで修行のやり直しをしていた。あの時は俺が弱かったからあんなことになったんだからな……」

「義弘……」

そう俺たちが話し合っていると……

「やっと思つけたよ」

「さんざん探したのよ。全くよ」

と、俺たちの前にこの前一年生をカツアゲしようとしたあの船舶科の不良のうちの二人が俺たちの前に立ちはだかった。

「お前たち何の用だ？」

と、篠原が警戒してそう言う

「落ち着けよ。陸の山賊のお頭さんよ。私たちは親分の使いとしてきたのよ……」

とんがった頭の少女がそう言う

「お銀の？」

「ええ、この前のこと謝りたいから。ある場所に来てくれつと言われてね……」

今度はスポーツヘアの金髪少女がそう言う。あれ？そう言えばこの声どこかで聞き覚えが……気のせいかな？

「そう……で、場所はどこ？まさかバードンゾ？」

「お前行ったことあんのか？」

「ええ、あんたらの大将と縄張り決めをするときにね……」

「へーそうかよ。でも場所はおそこじゃないわ。場所は陸よ」

「へーあいつがおそこから出るなんて珍しいわね」

と、篠原は鼻で笑いながらそう言う、不良はむっとした顔を見せるが、すぐに冷静な顔を見せて

「ええ、親分もせっかくこのためにわざわざ陸にあがってくれたんだ。

「もしも断つたら・・・」

「断つたら？・どうするのよ」

「少しだけ痛い目に合わせなきゃいけないわね」

と、互いににらみ合っていたが

「ふっ！安心しな。せつかく上がってくれたんだ。それに私もあいつと話をしなきゃっと思ってたしね。案内してくれる？」

「わかった。ついてきな。それとその男女もだ。あんたもうちの親分が会いたいって言ってるしね」

「・・・わかった」

「そう言い俺と篠原はその不良についていくのだった。」

「すまない義弘。巻き込んで・・・」

「いや、別にいいよ。この後予定もなかったしな・・・」

「まあ、あの不良の雰囲気からしてお礼参りとかそう言うのじゃないのはすぐにわかったしな。」

「すまない」

「ついたぜ」

「そう言いついたその場所はなんか「カラオケ喫茶テルピッツ」と書かれていたちよつとクラシックな小さな喫茶店だった。俺たちは喫茶店へ入ると中は少し薄暗く、その店には二人しかいなかった。なんか中世の海賊のようなそんな感じの曲が流れていた。そんな中、銀髪の綺麗な人がマイク片手に歌っていた。そしてBar席に当たるところに見慣れたというか先日黒いコートの女性が何か飲んでいたのでして先ほどの二人組がその人に近づき

「お銀の親分。例の二人を連れてきました・・・」

「ご苦労。トカタ、ババ。後は私とプリントだけで大丈夫だよ。おまえ達は帰りな。」

「へい！」

「そう言い、不良二人組は喫茶店から出て行ったのだった。するとするとお銀と呼ばれた少女が

「・・・やあ、篠原。とこの前の少年。遠慮するな。まあ座りなよ」

と、お銀はふつと笑ってこっちに手招きをする。俺たちはバーの席

に座る。

「久しぶりねお銀。最後に会ったのは半年前の縄張り決めの時ね……そう言えば他の3人は見当たらないけどお供はカラオケ嬢だけ？」

「ああ、ムラカミとラムは燻製用の桜のチップや材料を買いに、カトラスは留守番さ、今いるのはあそこで歌っているプリントだけよ」

「そうか……」

「ふくん……」

なるほど、あそこで歌っている人って船舶科の人か。それにしてもいい声だ……。お銀さんはグラスの中に入った飲み物をグイッと飲む。あれ酒じゃねえよな？

「篠原。先日は私の仲間が迷惑をかけてすまなかつたわね」

「ええ、ちゃんと仲間の手綱くらいしつかり握つときなさい。お銀」

「すまないね……。あんたらはうちのシマ荒らさないのに、それなのに私たちはあんたにちよっかいを出してしまった……」

「気にするなよお銀。あれはお前の意思じゃないことは知っているんだからな」

と篠原とお銀はしばらく不良の棟梁同士話合いをしていて俺はコーヒーを飲みながらゆったりとしていた。するとお銀と呼ばれた少女は俺の方へ顔を向け

「……ところでまた会ったわね少年。あの時、絡まれていた一年生は無事だったか？」

「ああ、一年の連中は無事だよ。それとあの時は不良たち止めてくれてありがとな」

「いいや、ただ単にやんちゃなあいつらを止めただけだよお礼を言われることはない」

「そっか……でもお礼を言わせてくれ、ありがとうな。それと俺はもう行くよ」

「もう行くのか？」

「ああ、そろそろ戻んねえとな」

練習試合とかの対策考えなきゃいけないから……。今までうつかり忘れてたけど。

「そうか……そう言えば名前を聞いていなかったわね。あんた名は？」

「そう言えばそうだったな。俺の名は武藤義弘だ」

「そう……武藤ね。覚えておくわ。私は竜巻のお銀よ。」

竜巻のお銀つて……まるで水戸黄門のかげろうのお銀みたいなネーミングだな……

「ああ、じゃあな。それとあそこで歌っている人に良い歌をありがとうって伝えておいてくれ」

篠原がお銀と話している中、俺はカラオケで歌っている人の歌に耳を傾けていたが、本当にいい歌声だ。将来は歌手とかになりそうだよ。てかあの人、夢中で歌ってるよ。たまにお銀さんのことちらちらと見ていたけど。

「ああ、言つとくよ」

お銀の言葉に俺は頷くと店を後にするのだった。そして二人は武藤が出て行ったドアをじつと見て

「不思議な奴だな……あの男は」

「ええ、それがあいつ、武藤義弘つて男よ。さて……お銀。今日は遅くまで語ろうか？」

篠原がふつと微笑み、お銀にそう言うのだった。そして篠原は懐から酒瓶を取り出す。

「そうだな。……篠原なんだそれは？」

「これか？これは私特製のノンアルコールデスソースウオツカ Heaven and Hell<sup>天 地 獄</sup>よ。この前のノンアルコールハバナラム酒「ハバネロクラブ」のお礼。あんた辛い物好きだろ？」

「ああ、いただきょう。今日は潰れるまで飲もう」

「ああ、望むところよ」

そう言い二人は店が閉まるまで、そして二日酔い？になるまで二人は飲み続けるのだった。



## 試合前の格闘です

朝……それはすべての始まりであり、夜が終わりを告げるときである。俺は朝の4時半に目が覚めた。まあ、寝た時間が早かったからそうなんだけどな。まあ、とにかく俺はベッドから降りてコーヒーを飲む。インスタントだが本物に負けないくらいのコクだ。まあ、それはともかく俺はコーヒーを飲み終え、制服に着替えて寮を出る。

「まだ少し暗いが……まあ、いいか」

俺はそう呟き、ある場所へと向かったのだった。

「ここか……」

ついた先は、赤い壁が特徴の家だった。実はこの家。冷泉が住んでいる家だ。あと10分で起床時間だが、この時間ならもう起きている頃かな？俺はそう思い、インターホンを鳴らすが返事どころか足音すら聞こえない……もしかしてまだ寝ているのかな？そう思ってる

と

「あ、武藤も来てたんだ」

と、武部が走りながら俺のところへやってくる

「ああ、昨日冷泉と約束したからな。「起こしに行く」ってだから違いは無しだ」

「そう、武藤って案外律儀だね。……で、麻子起きてる？」

「いや、インターホン鳴らしたが全然。あれは完全に寝てるな」

「はあくやっぱりか……」

と、武部が肩を落としてそう言う。

「とにかく中に入らないと……」

「中につて鍵かかっているんだぞ？どうやって入るつもり……まさか武部、お前、窓ガラス割って侵入する気じゃ!？」

「違う違う！それじゃあ強盗じゃん。こういう時のこともあつて麻子から合鍵渡されているの」

「あくなるほどな……」

俺が納得して、武部はポケットから合鍵を取り出し、鍵を開ける。

「さ、入って。たぶん麻子なら寝室にいると思うから」

「お、おう……」

俺と武部は冷泉の家に入り、武部を先頭についていくとある部屋に入る。そしてその部屋には布団にくるまった冷泉の姿があった。あくやっぱり寝てる。武部は麻子の姿を見るとすぐさま布団を引っぱがして起こそうとする

「もく！麻子起きてよく！試合なんだから!!」

「ねむい……」

「単位はいいの!?!」

「よくない……」

「だったら起きてよー!!」

「不可能なものは無理……」

武部が思いつきり布団を引っ張ても冷泉を包んだ布団はびくともせず冷泉は眠そうに言う。てか、あんなに力強く引っ張ても剥がせないって冷泉って結構、力持ちなのかそれとも武部が力弱いのか……やれやれ……俺は冷泉の傍に近付き腰を下ろす。

「冷泉……起床時間だぞ。起きろ」

「……ん？」

俺がそう言うのと冷泉は布団から少し顔を出し眠たそうに目をこする……そして俺と目が合った。

「おう、起きたか？」

俺がそう言うのと冷泉は俺の顔を見て突然顔を赤くし目を大きく見開いて

「うわあっ!?!」

「え?きやあ?」

大声を出し飛び起きて、沙織はその声に尻もちをつく、だが幸い尻もちついた場所は座布団だったのでけがはなかった。

「な、なんで武藤さんがここにいるんだ!?!」

「ん?昨日言ったじゃないか。起こしに行くって?そんなに驚くことか?」

「そ、そう言えばそうだったな……で、でも……確かに起こしに行くのは知ってたからわかったけど……顔が近かったから驚い

たぞ／＼／＼」

と、ぜーはーと息をつき胸を押さえながらそう言う。其れに顔が赤い。怒らせちゃったかな？

「そっか・・・それは悪かったよ」

俺が頭をかきながらそう言う

「謝らなくていい。その代わりにこのまま寝させてくれ」

「それはだめだ。」

「・・・けち」

「武藤の言う通りダメだよ麻子。今日は試合なんだから」

「むく」

と、冷泉がうなると突然ラツパの音が鳴り響く。なんだろうと俺と武部が窓を開けてみるとそこには秋山がラツパを吹いていた。外も日が上がって明るくなっていた。

「おはようございます・・・て、あれ？武藤殿？」

「おう、秋山おはよう。起床ラツパご苦労さん」

俺がそう言うのと履帯音が聞こえたかと思うとIV号戦車が現れた。

「・・・IV号？ということのみほか？」

「うん、私が携帯で呼んだんだ。たぶんでこずると思ってたから」

なるほど：大体わかったが、戦車で何する気なんだ？俺がそう思うとIV号の短砲身が上を向きそして

どおーん!!!

いきなりの発砲。砲身から白い煙が上がる。空砲か・・・確かに朝に弱い冷泉相手なら置きそうだが・・・

「なんだ!？」

「どうしたの!？」

と、近所の人たちが騒ぎ始めた。まあそりやそうだろう。

「すいませんー！空砲ですー!」

と、キューポラからみほが顔を出して近所の人にそう言う。すると俺の後ろから

「やれやれ・・・武藤さんに起こされた拳句、ラツパに砲撃・・・これは起きざるを得ないな・・・」

「おつ、冷泉起きたか……」

「約束だからな……」

と、目をこすりながらそう言う。

「冷泉さん。おはようございます。」

「おはようございます!!」

みほたちは冷泉に気付き挨拶する。そして冷泉は着替えをもってパジャマのままIV号に乗る。

「あ、義弘君。義弘君も一緒に乗っていく?」

みほがそう言うが俺は首を振って

「そんな必要はなか。こういう時のために篠原たちを呼んである」「え?」

みほが首をかしげると。IV号の後ろからパンターがやってくる。そしてキューポラから篠原が顔をのぞかせる

「おう義弘。来たわよ」

「おう。朝からお疲れ篠原。」

「良いつてことよ。それとおはよう。みほさん」

「あ、おはようございます道子さん」

と、みほと篠原は互いに挨拶をし俺はパンターによじ登り、操縦席の服部さんに

「さてと……そんなじゃま服部。試合会場まで頼むよ」

「はい。任せてください」

服部さんにそう頼むと俺はパンターに乗り、IV号を先頭に試合会場へと向かうのであった。

「なにになに?」

「どうしたの?」

朝から戦車の騒音で近所の人たちは顔を出す

「す、すみません」

と、みほが謝ると花の水やりをしていたのかおばあさんが二両の戦車を見ると

「あらく4号にパンター久しぶりに動いているの見たわね」

と、感心したような何か懐かしそうな声でそう言い、

「うわあゝ戦車だゝ」

「戦車道復活させたの本当だったのねゝ」

と小さな子供と母親がそう言い隣では

「試合か頑張れよゝゝ」

と、応援してくれた

「はい。ありがとうございます！頑張ります！」

と、みほが元気よく返事をし、車内では

「歯みがいてください」

「顔も洗ってくださいね」

「終わったら制服着替えて。あ、朝ご飯あるからね。おにぎり作つていたから」

と、IV号の中では冷泉が着替えをしたり、おにぎりを食べたりしていてみほがその様子を見て微笑む。一方パンターの中では

「zzzz……」

「車長……寝てますね。篠原さん……」

「ええ、寝てるね」

「この振動の中、良く寝ていられますね」

「それが彼よ小波」

そう。今、義弘はパンターの中で戦車帽らしき帽子を深くかぶり寝ていた。

「こいつ朝が弱いのに無理をして起きたからね……」

「どうします？起こしたほうがいいですか？」

「いいえ小波。今は起こさないほうがいいわよ。彼無意味に起こされるの嫌うから。港に着いたら起こしてあげて」

「あ、はい。」

じつは篠原は中学……黒森峰時代、義弘が昼寝している時無理やり起こしたことがあつて、その時は半日以上口を聞いてもらえなかったことがあつた。まあ、翌日になったら義弘は全然気にしなかったが、あの時以来、黒森峰では義弘が寝ている時は用事がない時は絶対に起こすなど、暗黙のルールができたりしていた。

「それにしても篠原さんその格好は……」

「ああこれ？中学の時のだけだね。まだ着れるなんて夢のようだね」

今篠原が来ていたのは制服の上に黒いパンツァージャケットで襟に白文字のSSマークがあった。そう、これは篠原が武藤同様に中等黒森峰時代に着ていた「黒狼」を意味するパンツァージャケットだった。

「その言い方まるでおばさんみたいですよ」

「何か言った？」

「いいえ。なんでもありません」

「それにしてもあの子元気にしているのかな？」

「あの子って。もしかして彼氏さんですか？」

「違うわよ。今度の対戦相手の聖グロに私の妹がいるから、それでね」  
「なるほど。そう言うわけですか」

そんな話をしている中、戦車は進む。そして、しばらくして港に着いた。そして対戦相手の聖グロリアーナも到着した。その時、聖グロの学園艦を見たとき、自分たちの学園艦より二倍大きいことに武部たちが驚いたのは言うまでもなかったのだった。

## 試合開始です

「ピンポンパ〜ン！本日戦車道の親善試合が午前10時に開催されます。競技が行われる場所は立ち入り禁止区域となっておりますので皆様ご協力をお願いします。なお、アウトレットの他見学席を……」  
「地元チームの試合なんて久しぶりね〜」

大洗町で試合が開始されるアナウンスが鳴り、観客席には地元の人たちが楽しそうに話していた。

そして試合会場ではみほたち車長たちが整列していた。すると向こう側から戦車が来た。間違いない聖グロリアーナの戦車隊だ。チャーチル一両にマチルダが5輜。どれも防御力の高い戦車ばかりだ。そしてチャーチルから一人の女性が降りてきた。なんだろう……戦車が来た時になぜか「ブリティッシュ・グレナディアーズ」が流れてきたような気がしたんだが……。

まあ、そんなことはさておき、チャーチルから降りてきた女性が俺たちの前に出る。そして河嶋さんも

「聖グロリアーナの隊長のダーズリンですわ」

「大洗学園生徒会広報の河嶋だ。本日は急な申し込みにも関わらず、試合を受けていただき感謝する」

「構いませんことよ……。それより、個性的な戦車ですわね」

ダーズリンさんが口を抑えて言う。まあ、彼女から見ればカラフルな戦車に真ピンクの戦車に金色の戦車。初めてその戦車を見た人からすれば当然だろう。河嶋さんも痛いところをつかれて返す言葉もない。

「ですが、ご安心ください。ライオンはウサギを狩るときも全力を尽くすと申しますの……我々も全力で戦わせていただきますわ」

そう自信に満ちて言うダーズリンに。俺は一步前に出て

「それは助かるぜ……」

「義弘君？」

みほが首をかしげているのをよそに俺は腕を組んでダーズリンにこう言った

「俺たちが鷹かヒヨコかこの試合で見極めていただこうかな？ダーズリン」

ダーズリンは俺の目をじっと見る。そしてふっと笑うと

「我々はサンダースやプラウダみたいな下品な戦い方はいたしませんわ。騎士道精神でお互い頑張りましょう」

「残念だが俺は騎士道のことはよくわからない。こっちは武士道精神でやるよ」

「ふふふ・・・そうですか」

そう言うのだった。そして審判の人がやってきて

「それではこれより聖グロリアーナ女学院対大洗学園の試合を始める。一同、礼！」

『よろしくお願いします!!』

試合の挨拶も終わり俺は自分の戦車に向かおうとするが

「ちよっとお待ちになってくださる武藤さん？」

と、ダーズリンが俺に声をかける。さすがに無視するのは失礼だと思ひ俺は振り返り

「・・・お久しぶりですダーズリンさん。」

「ええ、かれこれ3年ぶりですね・・・」

「そうですね最後に戦ったのは中学の時だったもんな・・・」

「ええ、そうですね・・・それにしても高杉：いえ、武藤さんは3年たっても変わりませんね。特に身長が・・・」

「余計なお世話だ。それを言うならダーズリンさんもですよ。3年たっても相変わらず奇麗なままだ」

「ふふ・・・本当に変わらないわね武藤さんは／／／」

と、ダーズリンさんは顔を赤くし妖艶な笑みでそう言う。何か変な事言ったかな？

「とにかく今日の試合。お互いに頑張りましょう。・・・それと武藤さん」

「ん？なんだダーズリンさん」

「おかえりなさい黒狼・・・」

「・・・ああ、戻ったよ俺は。戦車道の道に・・・」



「そう言い、俺は戦車に戻るのだった。」

一方、別の所では篠原がパンターの最終チェックをしていた。すると……

「姉さん……」

「ん？」

篠原が振り返ると、そこには聖グロの制服を着た三つ編みの女性がいた

「……みつk……」

「本名は呼ばないで姉さん。今はルクリリって言う名前だから……」

「そう……で、ルクリリあなた何しに来たの？」

「何って？久しぶりに会った妹に言う言葉がそれ？『会いたかったわ』お姉ちゃん感激っ！」とかそう言う言葉はないの？」

「あ”？#」

「ごめん冗談。だから睨まないで、すごく怖いから……でもよかった。元気みたいで……」

「ええ、ルクリリもね……ご飯ちゃんと食べている？」

「大丈夫よ姉さん。ちゃんと食べてるわ。」

「そう……良かったわ」

「あ、やっと笑ってくれた。」

「そう言い二人は笑いながら話をする。」

「ルクリリ。もうすぐ試合が始まるから、あなたは戻りなさい。久しぶりに話せてよかったわ。試合お互いに頑張りましょうね」

「ええ、姉さんもね」

「そう言い、ルクリリは篠原の前を去っていった。それと同時に義弘がやって来た」

「おかえり義弘。いつでも行けるよ」

「おう、ご苦労さん篠原。……で、さっき話してたのってルクリリか？」

「ええ、そうよ」

「……で、どうだった？久しぶりに妹と話しできて？」

「ええ、とっても楽しかったわ。」

「そうか……そろそろだな。」

そして試合開始の時間。両校の戦車はスタート地点で今待機して  
いて審判の合図を待っていた。

『用意はいいか隊長？すべては貴様にかかっている、しっかり頼むぞ』  
河嶋さんがみほに無線でそう言う。みほは少し緊張した声で返事  
をした。そして

『試合開始！』

と、アナウンスが入り全車両が一斉に動き出した。

「いよいよ始まりましたね！」

「うん……」

IV号の中で秋山が目キラキラさせながらみほ言う。ようやく始  
まった本格的な練習試合で彼女は嬉しくてたまらないだろう。す  
るとM3リーに乗っている一年生たちから無線が入る。

『あの一、それでどうするんですしたっけー？』

「えっと、先程説明した通り、今回は殲滅戦ルールが適応されるのでど  
ちらかが全部やられたら負けとなります」

『そうなんだー』

一年生たちの質問にみほはわかりやすく教え一年生たちは納得し  
たように答えた。

「まず我々Aチームが偵察にでますので他のチームは100メートル  
ほど前進したところで待機してください」

『『わかりました！』』』

『『『は〜い!!』』』』

『『御意!』』』

『なんか作戦名はないの?』』

と角谷がみほにそう訊く。すると、みほはしばらく考えて、

「『こっそり作戦です!』こっそり隠れて相手の出方を見て、こっそりそ  
攻撃を仕掛けたいと思います」

『ふん。姑息な作戦だな』

つと河嶋さんがそう言う。姑息ってあんたが考えたんだろうが……、無線を聞いた武藤は内心そう呟いていると

『義弘君。義弘君……』

急にみほから無線が入る

「ん？なんだ？」

『さっきの作戦名だけど変じやないかな？』

「別にいいんじゃないか？みほらしくて可愛いネーミングセンスだと思っけど？」

実際にみほが立てた作戦名って意外と可愛らしいものが多い。堅物ばかりの黒森峰の先輩たちはしかめた顔をしていたが同学年や下級生たちには結構受けたりしていた。まあ、まほさんは顔はいつもしかめた顔をしていたが、一人になると「グツジョブ！ナイスネーミングみほちゃん！」つと大声で叫んでいたりもした。え？なんでそんなこと知ってるかって？細かいことは気にするな。

『そ、そう……ありがとう／＼／』

みほは嬉しそうな声で返事をする。そしてみほの乗るIV号は敵を誘き出すべく本隊と離れるのであった。

一方、聖グロリアーナの方ではダーズリンがチャールから身を乗り出し優雅にお茶を飲んでいた。その光景はまさに気品のあるお嬢様の姿であった。そしてしばらくお茶を飲むとペコと目が合う。そしてダーズリンは戦車の中へと入り

「全車、前進」

彼女の号令で聖グロリアーナの戦車は一斉に動き出した。ついに大洗にとって初の練習試合が今始まったのであった。

## 初めての他校試合です

「マチルダⅡ五両、チャーチル一両、前進中……」

「さすが、きれいな隊列を組んでいますね！」

「うん！ あれだけ速度を出して隊列を乱さないなんてすごい」

岩陰の中、グロリアーナの戦車を誘き出すべく向かったⅣ号は岩山のところで止まり、みほと秋山は双眼鏡で敵の様子をうかがっていた  
「こちらの徹甲弾では相手の正面装甲を抜けません」

「そこは戦術と腕かな？」

と、みほは秋山の顔を見てそう言う。秋山は最初はきよんととしていたがすぐに笑顔で

「はい！」

というのだった。そして二人はⅣ号へと向かった。

「麻子さん起きて！エンジン音を響かせないよう注意しつつ、旋回してください」

と、操縦席で寝ていた冷泉を優しく揺り起こして言う。すると冷泉は眠たい目をこすりながら頷き、みほたちが車内に入ると、エンジンが始動しみほたちの乗るⅣ号は敵を誘き出すべく射撃地点へと向かうのであった。そして射撃ポイントにつきみほは双眼鏡で敵戦車隊を捉えた。

「敵、前方より接近中、砲撃準備」

「装填完了！」

「チャーチルの幅は……」

「3．25メートル」

「4シュトリヒだから……距離810メートル」

「撃て！」

みほがそう言いⅣ号の方針から75mm徹甲弾が放たれる。そしてその徹甲弾はマチルダの一手手前で着弾した。

「仕掛けてきましたわね」

「こちらもお相手してさしあげましょうか」

そう言い聖グロリアーナの車両は発砲してきた場所へと向かう。

囀作戦がここで発動した。

「すいません」

「大丈夫、目的は撃破じゃないから」

外したことを謝る五十鈴さんだが、みほは問題ないと彼女にそう言いキルゾーンへと撤退する。

「あれは……IV号。となると武藤さんのパンターは別のところに？全車両、パンターの狙撃に注意しつつ前方IV号へ攻撃開始」

と、ダージリンは全車両にそう指示しIV号を追う

「ダージリン様。なぜあそこまでパンターを警戒なさるのですか？確かにパンターは攻撃力が上ですが……」

「確かに普通のパンターならそんなに警戒することはありませんが、彼の乗るパンターは他のとは別格ですから……」

「彼つという武藤さんのことですか？」

とペコは首をかしげて言うと言とアッサムが

「そう言えばダージリン。初めて彼と戦ったとき、彼にコテンパンにされましたわね」

「えっ!?そうなんですか？」

「ええ、あれは中学の時の黒森峰の練習試合の時。10対10の殲滅戦の時でしたわ。最初は善戦して黒森峰の車両を9両撃破し大して私たちは3両しか撃破されなかった。その時は勝ったと思っただわ。ねえダージリン？」

「ええ。その時はわたくしたちの勝利と確信していましたわ。なんとって残った車両は相手は1両大してこちらは7両でしたからね……ですが。その一両を探している中次々と仲間が撃破されたの。無線で確認したら『狼にやられた』って言ってたわ」

「狼……とすると武藤さんのことですか？」

「ええ。そしていつの間にか残った味方は私たちだけになってしまったわ。そして最後には一対一の勝負をしたのですが……」

「撃破されてしまったと？」

「ええ、しかもパンターではありえない機動力でね……だってドリフトとかありえないでしょ？ペコ？」

「え!?!ドリフトですか!?!」

と、ダージリンは昔のことを思い出しながらふつと笑う。

「ダージリン隊長! 砲弾が敵に当たりません」

と、操縦手の子がそう言う

「思っていたよりやるわね、速度を上げて……追うわよ!」

と、全車両に言う

「どんな走りをしようとも……我が校の戦車は一滴たりとも紅茶を零したりはしませんわ」

と、彼女たちはティーカップを持ちながら少し警戒はしているが余裕の顔を見せているのだった……

一方IV号は聖グロの砲撃を躲しつつキルゾーンへと敵を誘導していた

「なるべくジグザグに走行してください、こっちは装甲が薄いからまともにくらったらお終いです」

「了解……」

と、冷泉の巧みな手腕でIV号はひよいひよいと敵の砲弾を躲すまれで後ろに目がついているかのようだ。すると一発の砲弾がIV号の横をギリギリ通っていき着弾する。

「ふう……」

みほは砲弾が外れたことに安堵する。すると通信室ハッチから武部が顔を出した

「みほりん危ないって!」

と、彼女は心配そうに言う

「え? ああ、戦車の車中はカーボンでコーティングされているから大丈夫だよ」

とみほは武部にそう言う

「そういうんじゃない、そんなに身を乗り出して当たったらどうするの!」

「まあ、めつたに当たるものじゃないし、それにこうしていた方が状況

「がわかりやすいから」

「でもみぽりんにもしものことがあつたら大変でしょ!? もっと中に入って!」

と、武部はみほのことを心配してそう言う。みほは彼女のやさしさに嬉しさを感じ

「心配してくれてありがとね、じゃあお言葉に甘えて」

そう言い車内に入りIV号はキルゾーンへと進み続けるのだった。

一方その頃、他のチームは例のキルゾーンで敵が来るのを待っていた。

「革命〜」

「嘘〜!」

「しまったどうしよ〜!?!」

一年生チームは戦車の上でランプの大富豪をしていて

「いつも心にバレーボール!」

「そ〜れ!」

バレー部チームはバレーのトスの練習をしていた。一方、武藤たちはそのキルゾーンから1・5キロ離れていたところの草むらに上手い具合で隠れ待機していた。狙撃するためだ。そしてその車体の上では

「これでどうだ? 義弘?」

「む? そう来たか・・・なあ、篠原」

「待ったは無しだよ義弘」

「そんなつれないことをくお前と俺の仲じゃないかよ」

「いくら車長でもこれはできないよ」

「そうか・・・じゃあ、これで」

「ふむやるな・・・」

と、武藤と篠原は将棋をし、服部と小波は車内で少し仮眠をとっていた。一方生徒会チームでは角谷さんはイスに寝そべって日光浴。河嶋さんはなかなか来ないIV号にいらだっていた。

「遅い!」

「待つのも作戦のうちだよ」

いらだっている河嶋さんに角谷さんがなだめる

「いやしかし……」

と、河嶋さんが言いかけた時

『こちらAチーム、敵を引きつけつつ待機地点にあと3分で到着します』

みほたちから無線が入る。来たか……

「Aチームが戻ってきたぞ、全員急いで戦車に乗り込め！」

「えー、ウソー」

「せっかく革命起こしたのに」

と一年生チームは残念そうな顔をし

「そろそろ来るか……義弘。将棋の決着はまた後日に」

「いやその必要はないぞ。篠原。3一金、詰みだ。車内に戻るぞ」

「なっ!?ま。負けた……」

優勢だったはずの自分が負けたことに篠原は驚くのだった。

『あと600メートルで敵車両、射程内です!!』

みほからの無線を聞き、武藤たちを覗いてみんな緊張し敵が来るのを待ち構える。そしてその緊張と焦りの結果。

「撃て撃てー!!」

河嶋さんは誘導していたIV号を敵と勘違いし砲撃し始めるそしてそれにつられ他の車両も撃ってしまった。

『あ、ちよつと待ってくださいー!』

と、みほが焦っているが砲撃が止まらない

「おい!全車撃つなっ!落ち着け!あれは味方だ!」

俺は双眼鏡で向こうの状態を確認し無線で今来たのが味方だと言うと砲撃が止まる。

「味方を撃つてどうすんのよー!!」

武部が無線で怒鳴る。まあ味方に撃破されるのは嫌だしそう言いなくなるか……さて敵の姿が見えた果たしてこの作戦、どうなるやら……その後はみんな砲撃をしているみたいだがやっぱり練度不足のせいかなかなか当たらない。河嶋さんが何か叫んでいるみ



たいだがそれは無視しよう。

「そんなバラバラに攻撃してもダメです、履帯を狙ってください！」  
みほがそう言った瞬間。聖グロの車両が左右に分かれ始めるのだった。

一方聖グロチームは、崖の上にいる大洗チームの戦車を見て、彼女らが立てた作戦がなんなのか理解しそして

「こんな安直な自作戦、わたくしたちには通用しませんわ」

ほくそ笑んでいた。そして大洗チームは砲撃をするが一向に当たらない。そんな中ダージリンは

「アッサム。パンターの姿は？」

「今のところ見えません」

「そうですか……」

と、ダージリンはあたりを見渡して安全を確認すると

「全車両……前進」

彼女の言葉でマチルダやチャーチルが右左に別れ大洗チームを包囲する形に進む。そして……

「……攻撃」

と、彼女の言葉でマチルダの40mm砲やチャーチルの75mm砲が火を噴くのがあった。そしてその弾は彼女たちを動揺させるかの如く履帯元に着弾する

「すごいアタック……!?!」

「ありえない!」

はじめて相手側からの攻撃にみんな動揺をし始めた

「落ち着いてください……攻撃をやめないで!」

みほがそう言って落ち着かせようとしているが

「無理です!」

「もういやー!」

「あゝ逃げちやだめだよー!」

あまりの恐怖に一年生たちは戦車を降りて逃げ出してしまった。

まあ一人はそれを止めようとしていたが……その瞬間無人となったM3リーに40ミリ砲弾が側面に命中し白旗が上がる。

一方、他では

「あれ？あれれ？」

攻撃を受けていた38tは相手の砲弾が着弾した時、車体が浮きそして、操縦ができなくなってしまう。恐らくさっきの砲撃でが原因なのか履帯が外れてしまったのだ。

「あー、履帯外れちゃったねー。38？は外れやすいからなく」

角谷さんが他人事みたいに言い38tは少しくぼんだ所に落ちてしまうのだった。まずいな……これ。俺は双眼鏡で遠くで乱戦しているのを見ていた。すると篠原が

「どうする武藤。乱戦に入るか？」

「いや篠原。今乱戦すれば、確実に敵さんを殲滅することができる。しかし……」

「あいつらの為にならないっか？」

篠原の言葉に俺は頷く。そう今回の試合は試合に勝つことが目的ではなく戦車道を始めてする奴に少しでも経験をしてもらうための試合だ。俺たちが乱戦に入り込めば勝てるんだがそれでは意味がない。俺の役目はあくまで検分役。まあ、多少は助けるがな

『獅子は我が子を千尋の谷に落とす』ってやつね……あ、みほさんたちが動いたわね。第二作戦開始かしら？』

『ああ……わかった。任せろみほ。あそこでおち合おう』……そうだな。今、無線でみほと確認した。聖グロの連中も追いかけているな……』

「でも一両残ってるわ。動けない38tにとどめを刺すみたいだね。義弘」

「ああ、篠原。照準をあのマチルダにロックしろ」

「そう言いパンターは一キロ先にいるマチルダに狙いをつけるのであった。」

「私たちどうしたら？』

「隊長殿、指示を！」

「撃って撃って撃ちまくれー!!」

少し戻って、大洗チームは各車の状況確認を終えた後、この後どうするか話し合っていた。河嶋さんに関してはもはや敵を撃って撃破することしか頭にないようだ。

「このままいてもやられるだけ……」

「隊長は西住さんです」

「私たちみほの言う通りにする！」

「どこへだつて行ってやる」

「西住殿、命令してください！」

五十鈴さん。武部さん。冷泉さんそして秋山さんがみほにそう言う。それを見てみほは頷き

『B、Cチーム、私たちのあとについて来てください！移動します！義弘君。例の作戦発動です。お願いします！』

『わかりました！』

『心得た！』

『わかった。任せろみほ。あそこでおち合おう』

『なに!? 許さんぞー!』

と、他の車長は頷き（河嶋さんを除き）、昨日の夜、みほが義弘とともに徹夜で話し合つて決めた第二作戦を執行するのだった。

『もつとこそそ作戦を開始します!!』

そう言いみほたちの車両はとあるところへ向かうのだった。それを見たダージリンは

「逃げだしたの？追撃するわよ！それと一両は残つて38tを撃破しなさい」

『了解！』

そう言いダージリンは一両をその場に残し、みほたちを追撃するのだった。そして残されたマチルダ一両は履帯が外れくぼみにはまつて動けない38tに向かっていた

「会長！マチルダがこっちに来ます!?!」

「撃て撃てっー!!」

河嶋さんはトリガーハッピーになって砲弾を撃つがマチルダには全然効かなく弾かれるだけであった

「弾かれちゃってるよ桃ちゃん!？」

「モモちゃん言うなっ!」

「やっぱ38tの37ミリ砲じゃあ豆鉄砲か」

と、生徒会三人は会長を除きうろたえていた。

「ふっ……38tの豆鉄砲ではうちのマチルダは抜けませんことよ」

と、マチルダの車長がそう言いマチルダの砲身は完全に身動きできない38tをとらえた。そして2ポンド砲を撃とうとした瞬間。

ドガアーン!!

急にマチルダが爆発。ついには白旗が上がった。そして車内では何が起きたかわかんないって言う顔でマチルダの車長は慌てていた

「な、なんですか!?!エンジントラブルですか!？」

「ち、違います車長。敵の狙撃です!」

「狙撃……あ!」

マチルダの車長はキューポラから顔を出し。当たりを見渡すと一両の戦車がいた。その戦車は少し暗いカーキ色をしたパンターだ。しかもその砲塔側面には黒い狼の絵が描かれていた……マチルダの車長はそのマークに見覚えがあった。

「……黒狼」

撃破されたマチルダの車長はそう顔を青ざめて、その場から立ち去るそのパンターを見るのだった。

決着です

「いや〜助かったよ武藤君。」

と、角谷さんは履帯を修理しながら俺に言う。

「いえ、いいんですよ。それよりも履帯どうですか？」

「うん。ただ単に外れたただけだから直すのに時間はかかると思うけど、試合はできるよ」

小山さんがそう言う。すると河嶋さんは

「武藤！お前なんで撤退した！あそこで撃ちまくれば勝てたんだぞっ！！」

いまだパニック状態で叫んでいた。本当にこの人クールそうに見える。実はメンタルが弱かったりするのかな・・・？

「河嶋くうるさい〜」

と、角谷さんが河嶋さんにそう言う。

「まつ！とにかく武藤君。私たちは履帯直してから合流するから、先に行つてて」

「わかりました。では市街地で」

そう言い俺の乗るパンターは市街地へと向かった。みほと俺が考えた「もつとこそこそ作戦」とは、簡単に言ってしまったえば市街地に出てゲリラ戦をやるといふ単純な作戦だ。狭い町でのゲリラ戦。これはその街のことを良く知っていればかなりの武器になる。そのうえここは大洗町。つまり大洗出身の奴らにとっては庭みたいなものだ。

だからゲリラもしやすくなる。

一方西住率いる大洗チームは、市街地の入り口付近につき、みほが無線で

「今から市街地に入ります、地形を最大限に活かしてください！」

『Bei Gott!』

『大洗は庭です！任せてください！』

そう言い各分散した。

「消えた・・・？」

一方ダージリンは市街地へと撤退した大洗女子を追撃して市街地

の入り口に着いたのだが、大洗女子の戦車は消えていた。すると……  
『こちら、6号車！』

ダージリンのインカムから38tにとどめを刺しに行つたマチルダⅡから無線が入った。

「どうしたの？38tは撃破できたの？」

と、ダージリンがそう訊く。するとその無線から信じられない言葉が出た

『すみません！38tを撃破する前に『黒狼』にやられましたっ!!』

「っ!？」

ダージリンはその言葉を聞き驚く

「黒狼……やっぱり武藤さんどこかで狙っていたのね……これから先いつ、どこから彼に狙撃されるかはわからないけど狭い市街地に入らなければ狙撃はされない。彼の戦車が空を飛べなければね」

「ダージリン？大丈夫？」

「あ、いいえ。大丈夫よアツサム。全車、各分散して追いなさい！あとパンターの狙撃には用心なさい」

『了解！』

そう指示するのだった。

「くっ……どこに行つたのかしら？」

5両うちの1両は通りを進んでいた。そして薬局の前を通る。その時マチルダの乗員は薬局の旗に交じって歴女チームが3突につけていた旗があったことに気付かなかつた。そしてマチルダⅡはその旗に気づかずそのまま進むと……

ドガアーン!!

裏路地に隠れていた三突に側面から攻撃され白旗が出てマチルダⅡは走行不能となつた。一方、別の場所ではもう1両のマチルダは駐車場の前に通りかかつた。

「ん？」

「どうかしましたのルクリリ様？」

砲手の子が車長であるルクリリに訊いた。

「車庫のランプが点滅している・・・」

ルクリリが指さすと駐車場のブザーが鳴っていてランプが点滅していた。

「おそらく敵戦車はあそこにいる向かえ！」

「かしこまりました。」

彼女は即座に、その中に敵戦車がいると判断し、彼女達はすぐさま、マチルダを扉の前に移動させた。そして車庫の扉が開き始めた。

「ふっ・・・馬鹿め」

ルクリリはそう言うが、正面の車庫が開き始めたのと同時にすぐ後ろの昇降機が上がり始めその中には八九式中戦車がいた。そう、これはフェイク。わざと前の車庫にいると見せかけ身動きの取れない狭い駐車場の中へ誘い込みそして後ろにある昇降機の中に隠れ敵が中に入ったら背後から撃つて撃破するというバレー部の作戦なのだ。

そしてルクリリは正面の車庫に敵戦車がないのに気づきそしてその車庫のミラーで敵戦車が背後にいることに気付いた。

「・・・はっ!? 後ろだあ！」

ルクリリが車内に入りそう言った瞬間。

「そーれえー！」

「「そーれっ!!」」

磯部の掛け声と共に八九式中戦車の五七ミリ砲が火を噴き。放たれた五七mm砲弾がマチルダⅡに炸裂した。マチルダⅡから爆炎が上がる。そして

「こちらCチーム。一輛撃破！」

「Bチーム。一輛撃破！」

と、2チームは無線でみほたちに連絡する。それを聞いた義弘たちも

「やったわね義弘。あの子たちやるわね」

「ああ、そうだな。服部。例の場所は？」

「はい。もうすぐ着きます。」

そう言い義弘が乗るパンターはとある場所へと向かうのであった。一方撃破されたマチルダⅡ2輛はダーズリンに報告をしていた。

『攻撃受け走行不能!』

『こちら被弾につき現在確認中!』

「なっ!？」

ダーズリンはその報告を聞いて驚愕し、思わずお気に入り टीーカップ を落としてしまう

「なかなかやりますわね大洗……けどここまでよ!」

一方、歴女チームは……

「あははっ!」

車長のエルヴィンとリーダーのカエサルが高笑いしていると正面からマチルダⅡが現れる。それを見たエルヴィンは

「路地裏に逃げ込め!」

と、操縦者のおりように指示しおりようは路地裏に入り込む。

「入り組んだ道に入ってしまったえばよい。三突は車高が低いからな」

塀に隠れながら進みエルヴィンがそう言うが、頭かくしてなんとやら、三突につけていた旗竿が仇となり、敵に場所がばれて側面から撃たれ撃破されてしまった。

一方、駐車場にいるBチームことバレー部たちは……

「Bクイック大成功!」

磯部たちは歓喜の声をあげる。炎上するマチルダⅡ。一見撃破したかのように見えたのだが……

「あれ?」

火が消えるとそこには無傷しかも砲塔をこちらに向けたマチルダⅡの姿があった。実は八九式が撃つたのはただの予備燃料タンクだったのだ。

「うわあ!嘘!生きてた!!」

「これでもくらえ!!」

素晴らしい八九式中戦車はマチルダⅡに向けて発砲するが、彼女たちが乗る八九式はもともと歩兵支援のために開発されていたため、戦車戦では不向きな戦車である。放った弾丸は弾かれ、敵の戦車は弾痕は



ついても撃破することはできなかつた。

「サブ権取られた」

「お返しだ!」

ルクリリがそう言い、マチルダⅡが発砲し、八九式はもろに攻撃を受けて撃破されるのであつた。

『Cチーム走行不能!』

『Bチーム敵車両撃破失敗!走行不能!すいません!!』

みほの車両からC、Bチームがやられたという報告を聞く

「残つてるのは我々の車両だけです!」

「向こうは何両?」

「四両です」

すると後ろから二両のマチルダ戦車が現れた。このままだと包囲される危険がある

「来た……!困まれたらまずい!」

「どうする?」

冷泉が冷静に言う

「とにかく敵を振り切つて!」

「了解」

そう言い、みほたちの乗るIV号は聖グロリアーナの戦車に追い回されることになつた。いわゆるカーチェイスならぬタンクチェイスとなつた。そしてIV号は街中の緩やかな坂を下りカーブを曲がつた時、一両のマチルダが曲がり切れずとある宿屋に突っ込んでしまった。後に来た話ではその時の宿屋の店主は絶叫の声をあげたがそれが絶望ではなく歓喜の声だつたらしい。

話を戻そう。ひたすら逃げるIV号だったが、運悪く彼女たちの息着いた場所行き止まりであつた。そしてその後ろからマチルダⅡ4輛、チャーチル一輛が迫つて来た。そして5輛はIV号の前に止まりそしてチャーチルからダージリンが顔を出し

「こんな格言を知つてる? イギリス人は恋愛と戦争では……手段を選ばない」

彼女がそう言うのと相手の砲台がゆつくりとこちらに照準を合わせ

てくる。もはや万事休す。しかし・・・

『参上〜!!』

「生徒会チーム!?」

「履帯直したんですね!」

さすがに聖グロリアーナもいきなりの登場に攻撃の手が止まった。そして

『発射!!』

河嶋さんがゼロ距離から発砲するが、砲弾は相手の戦車に掠りもせず、むなしい空音が鳴るだけだった。

『あ……』

『桃ちゃん、ここで外す?』

河嶋さんのノーコンぶりに小山さんがつつこみをする。そしてその瞬間、聖グロリアーナの戦車隊はお返しとばかりに一斉射撃し、38tを撃破するのだった。

『や〜ら〜れ〜た〜!』

「前進!一撃で離脱して、路地左折!!」

そう言いみほは前にいたマチルダを撃破し小道へと逃げた。それを見たダージリンは

「回り込みなさい!至急!!」

と、全車にそう言いグロリアーナ戦車は迂回してIV号を追いかけろべくチャーチルとマチルダⅡ3輜は二手に分かれ攻撃をし始めるのだった。

『みほ。第3作戦発動だ。俺はマチルダⅡを相手するからみほは手はず通りに頼むな』

「うん。義弘君も気を付けて。」

『ああ、運が良ければ合流しよう』

みほが武藤との通信を終えると

「みほりん。武藤と何を話してたの?」

武部がみほに訊く

「うん。昨日義弘君とね」

と、みほは義弘と打ち合わせした作戦を言う。

「なるほど……ですが大丈夫ですか？武藤殿だけでマチルダⅡ3輜を相手にするなんて……」

秋山が心配そうに言うともほは首を横に振り

「大丈夫……義弘君ならきつと……」

「急げ！急いで回り込んでIV号を仕留めるぞ！」

ルクリリ率いる3輜のマチルダⅡはIV号を仕留めるべく回り込んでいた。

「IV号は恐らく大通りに出るはずだわ！」

『ええ、そうですわねルクリリス……』

と一輜のマチルダⅡの車長が無線でそう言いかけた時  
ドガアーン!!

「!?」

急にルクリリの傍にいたマチルダⅡが爆発し白旗が上がった。

「な、なんだ!?!」

『何が起こったのですの!?!』

いきなりのことにマチルダ隊は動揺し始める。すると彼女らの目の前にカーキ色のパンターが現れた。しかも砲塔側面に黒い狼のマーク。

「あ、あれはパンター!?!」

「いいや、あれはただのパンターじゃないわ……」

と、ルクリリは冷や汗をかきながら他のマチルダⅡの車長たちにそう言う。ルクリリは知っている。あの戦車には自分の姉が乗っていることを……そして中学生のころお世話になった人のことを……そしてあの二人が操る戦車の実力を……

「(姉さん……)」

『ど、どうしますか!?ルクリリ様っ!?!』

「慌てないで。相手は一輜。こっちはまだ三輜。数で押すわよっ!」  
『了解!』

そう言い、マチルダ3輜はパンター目掛けて攻撃を仕掛けた。

「来るぞ。服部さん。なるべく相手に側面をとらせないように！小波さんは装填を。篠原！」

「あいよ！一撃必中必ず当ててるよ！」

「任せてください！相手が背後に回る前に逆に回り込んで見せます！」

そう言い、武藤たちの乗るパンターも前進し始めた。そしてパンターは急回転した。いわゆるドリフトだ。そしてマチルダの側面に撃ち一両を撃破。

「なっ!?ドリフトだと！」

ルクリリが驚く中、パンターは次々とマチルダを撃破する。しかも走行しながら正確に敵のウィークポイントを撃ち抜き撃破していた。

「やっぱり、姉さんと義弘さんはすごいわね……でも義弘さん。いいえ『黒狼』をダーズリン様のもとに行かせるわけにわいかないわ。戦車前進。優雅な勝ち方とは言えないけどこれもダーズリン様に近づかせないため！体当たりし相打ち覚悟で行くわよ！」

「了解！」

そう言いルクリリのマチルダⅡは前進し、武藤の戦車の側面に体当たりする。そしてマチルダⅡの2ポンド砲はパンターに向けて発砲した。しかしパンターは急回転し前面の傾斜装甲で弾いた。

「なっ!?」

いきなりのパンターの動きにルクリリは目を丸くする。そしてパンターは砲塔を旋回しルクリリの乗るマチルダⅡを撃破しその場を離脱するのだった。そしてルクリリはその光景をパンターが見えなくなるまで見て、

「……ふっ……やっぱり姉さんたちは強いわ」

そう言いふつと悔しさと満足さの入り混じった笑みをするのであった。

「あ、危なかった……」

「ええ、まさか体当たりするなんてね……静の運転技術がなければ撃破されていたわ……ありがとね静……」

「い、いえ……結構無理しましたけど……しかしさっきの運転と体当たりでエンジンの調子が……油圧も下がってますし、いつエンジンが爆発して走行不能になってもおかしくありませんよ」

「そうか……でどのくらい持ちそうか？」

「そうですね……もつてあと10分くらいです」

「そうか……それならそれまでに決着つけないとな……」

一方、みほたちは見通しの良い広場でチャールと鉢合わせしていた。そしてIV号はチャールの砲撃を躲していた

「後退してください、ジグザグにー」

みほの指示でIV号はジグザグに後退する。

「路地行くっ！」

「いえ、ここで決着を着けます。回り込んでください、そのまま突撃をします」

そしてIV号は一旦逃げるように後退そしてUターンからの突撃をするが。

「と、みせかけて合図で相手の右側方部に回り込みますー！」

みほの指示でIV号戦車はチャールへと向かっていき

「はいー！」

みほの合図でIV号は急ブレーキを市ドリフトをしてチャールの側面に回り込み

「撃て!!」

「はいー！」

みほの言葉に五十鈴さんは引き金を引き、そしてIV号とチャールの攻撃が同時に発砲。そしてみほたちIV号の放った砲弾はチャールの履帯部分に当たりチャールの履帯が切れる。そしてチャールの砲弾は

IV号の装甲の薄いとところに当たりIV号に白旗が上がる。

「あとは武藤さんの車両ですね……」

ダーズリンがそう言う

「ですがダーズリン様。私たちの車輛は履帯をやられて行動不能です。なぜIV号は装甲の薄いところではなく履帯を……」

「そう言えばそうですね……それに……まさか!」

ダーズリンは何かに気付くと目をまるくし動揺し始める

「どうしたの?ダーズリン」

「アツサム。なんでIV号が広いところに誘いだし、そして履帯を切ったのか……」

「まさか!?!」

ダーズリンの言葉にアツサムも何か気づいたのか驚いて目を丸くする。すると突如、凄まじい轟音と衝撃が彼女達を襲いすぐさま判定装置が作動し、チャーチルに白旗が上がった。ダーズリンはキューポラから覗くとそこにはパンターがいた。

「や、やっぱり……IV号がこの広場に誘い出したのは……このため」

彼女がそう言うのとパンターが突如、黒煙を出しそして白旗が上がった。

『大洗学園、聖グロリアーナ女学園。全車両行動不能……ただし、聖グロリアーナ女学園の戦車が先に全車走行不能になったためこの試合大洗学園の勝利!』

と、アナウンスが鳴り響くのだった。こうして大洗学園戦車道部の初陣は初勝利という白星という形で終わったのであった。

## 試合の終わりと出会いです

練習試合が終わり、みほたちの戦車がレッカー車によって運ばれているのを放心状態で見ていた。その間秋山は

「あの聖グロリアーナに勝てるなんて・・・」

歓喜の声を漏らしていた。まあ、戦車道初心者が強豪校の一角に勝ったんだからそれはそうか・・・すると

「あなたが隊長さんですわね?」

ダーズリンたちがみほたちのところにやって来た。

「あ、はい」

「あなた、お名前は?」

「あ……、西住 みほです」

みほがそう言うとダーズリンは最初驚いた顔をしてそれと同時に納得したように頷いた。

「もしかして西住流の?・・・随分、まほさんと違うのね・・・それにあなたが噂に聞いたみほさんだったのね・・・」

「え?」

「いいえなんでもありませんわ。」

と、彼女が言う

「いや〜参った。参った〜」

と、そう言い俺がみほたちのもとに出てくる

「うわっ!?武藤。一体どうしたの!?顔中真っ黒じゃん!」

と、武部が俺たちにそう言うそう今の俺たちの姿は煤煙で真っ黒の状態だった

「いやさあ。パンターのエンジンが急に爆発してよ・・・」

「爆発!?」

俺の言葉にみんなが驚き

「義弘君!?大丈夫!?怪我とかは!?」

と、みほが焦って俺に言う

「大丈夫だよ落ち着けて。幸い出火とかはなかったんだけどさ代わりに黒煙とかが車内に充満してもう真っ黒。今、服部と小波と篠原が

顔を洗いに行ってるよ」

「武藤は顔洗いに行かないの?」

「あいにく満席みたいでさ……」

「あら。それはいけませんね……」

そう言うときダージリンは手拭いを出し俺の顔を拭いた。

「なっ!?!」

「あ……」

その光景にみほとちは驚き

「これできれいになったでしょ?武藤さん?」

「あ……ああ。ありがとうダージリン」

俺がお礼を言うとダージリンは微笑むその光景を見たみほと秋山と武部は複雑そうな顔をするのだった。

「それにしても今日こそリベンジができると思っただけですが、また負けてしまいましたね……」

と、ダージリンはそう言い苦笑する

「それにしても武藤さんたちはまったく腕が衰えていないようですね。マチルダ3両相手に勝ってしまうなんて。」

「いや、……最後のマチルダの攻撃は意外ときつかったよ。下手をすればやられていたのは俺たちだったよ」

俺がそう言うとき

「あなたは今も昔も変わらず謙虚なのですね……それがあなたらしいところですが」

と、微笑んでそう言い俺も彼女に微笑んだ。するとアツサムが

「隊長、そろそろお時間です」

「あら、もうそんな時間ですか?では、私達はこれで……今回の試合とても楽しかったですわ。みほさん。武藤さん。ではまたお会いしましょう……」

そう言い、ダージリン達は去っていった。すると……

「「むっ!?!」」

「おろっ!?!」

頬を膨らませて俺を睨んでいた。なんでっ!?!俺何か悪いことした



のか!?

「あ、あの・・・三人とも?なんでそんなに怒ってるの?」

「怒ってないよ、義弘君」

「別に、何もありませんよ?」

「武藤は優しいけど、女心わかっているよね!」

と、三人はそう言う、みほは怒っていないって言うけど目が笑ってないしその顔は絶対に怒ってるだろう!

「えっ!?な、なんの話!?俺何か悪いことした?」

「二自分の胸に聞いてください!武藤! (殿) (義弘君!)」

「お、おろ!」

三人の剣幕に俺が驚いていると

「いや、西住ちゃんと武藤君。・・・てあれ、どうしたの?」

その声に振り向くと、生徒会チームがやってた。

「二いいえ、なんでもありません」

みほたち三人は急に笑顔になり角谷さんにそう言った。女ってよくわからない・・・

「そ、そう?それよりも初めての他校試合お疲れ様ね。二人とも」

「ああ、角谷さん。これでみほたちはアンコウ踊り話はなしでいいよな?」

「うん。アンコウ踊りは試合に負けたらつという約束だったからね。だから西住ちゃん達には最高級干し芋三日分後で送るよ」

と、二つと笑ってそう言う。てか干し芋の褒美って本気だったのかよ・・・角谷さんたちはそれだけ言うところかへ去ってしまったのだった。いや、去ったって言うかなぜか逃げていたように見えたが・・・気のせいかな?

その後、俺たちは自由行動となった篠原はなんか『妹と積もる話があるからっ』と言って行ってしまった。服部と小波さんは買い物に出かけた。そして俺はどうしようかと考えていたところ

「武藤も一緒に買い物に行こうよお!大洗の街は初めてなんでしょ?」

と、武部たちに誘われて今一緒に買い物に行くことになった。

「まずどこに行きましようか？」

「アウトレットに行こ〜♪」

と、武部たちがそう話していると冷泉がどこかへ行こうとする

「あれ？ 麻子、どこ行くの？」

「おばあの所に顔出さないと殺される。」

「ああ……。麻子のお婆ちゃん、めっちゃ怖いもんね。」

どうやら麻子は一人、祖母に会いに行くようだ。 沙織がなんだか

納得したように呟いた。 冷泉のおばあさんってそんなに怖いのか？

そして冷泉と別れて俺たちはアウトレットのほうへと向かった。

「アウトレットっていろんな店があるんだな……」

「そうだね義弘君……」

「可愛いお店いっぱいあるね〜」

「あとで戦車ショップ行きましようね！」

と、アウトレット内を歩いているとそこに一台の人力車が現れた。

武部は、その人力車を牽引している男に注目しそしてその人力車の男と目があってしまう

「あつ！ 目が合っちゃった！」

その男は武部達の方へ向くと、微笑み、こちらへ歩いてくる。

「ちよつ…ヤダ／＼」

武部がなにか悶えてるけど……。でもあの格好どこかで見たことが……。その時、五十鈴さんが口を開いた。

「新三郎!？」

「え、何！知り合い!？」

驚く沙織。 そんな彼女をよそに、彼は五十鈴さんの前まで来る、

「は、初めまして…。私は華さんの……」

武部は挨拶しようとするが男性は素通りして五十鈴さんのところの前に立つ

「お嬢。お久しぶりです。 お元気そうで何より……。」

「何!?!聞いてないわよ!?!」

「紹介します。 うちに奉公に来てくれている、新三郎よ。」

「初めまして。 新三郎です。 お嬢がいつもお世話になっておりま

す。」

やっぱり奉公人か・・・あの格好といい喋り方といいまさしく明治時代とかの奉公人の言い方だ。つというより五十鈴さんてどこかのお嬢様かな・・・そんなことを考えていると人力車に乗っていた人が和傘を持って降りてきた。その人は着物を身に纏った女性である。

「華さん・・・」

「お母さま」

「良かった。元気そうね。」

なるほど五十鈴さんのお母さんか：言われてみれば似ている。

「そちらの方達は？」

五十鈴さんのお母さんは華に尋ねる。

「こちらは私のクラスメートです。」

「初めまして。」

みほと沙織が挨拶をする。すると五十鈴のお母さんは俺の方を見た。

「華さん？こちらの方は？」

「お母さまこの人は武藤義弘さんといって同じ学校の生徒さんです」

「そうですか・・・」

五十鈴のお母さんは最初は疑いの目をしていたのだが秋山が・・・

「私はクラスが違うけど、五十鈴殿とは戦車道と一緒に・・・」

その時だった。優花里の口から戦車道という言葉が出てきた

時・・・

「戦車道・・・？」

途端に五十鈴さんのお母さんの表情が険しくなった。そんなことは気づかず秋山は

「はい。今日、試合だったんです!!」

「おい、秋山・・・」

「ん？何ですか武藤殿？」

「華さん・・・、どういうこと？」

「お母様・・・」

と、五十鈴さんが気まずそうな顔を見て秋山もことの重要さに気付いたのか慌てて口をふさぐがもう遅い。すると五十鈴のお母さんは五十鈴さんのの手を取って、においを嗅いだ。

「……鉄と油の臭い！ あなた、まさか戦車道を!？」

五十鈴さんのお母さんはその鋭い嗅覚で、五十鈴さんの手についていた微かな臭いを嗅ぎ取り彼女にそう訊くすると五十鈴さんは気まずそうに答えた。

「……はい」

「花を活けるための繊細な手で、戦車なんかに触れるなんて……はうっ……」

すると彼女の目はだんだんと光を失いしまいには白目をむいて気絶してしまった。

「お母様っ!!」

突然の事で、新三郎さんも五十鈴さんも狼狽していた。それは俺やもちろん武部達も同様である。

「お母さま!？」

と、五十鈴がそばに行き俺は五十鈴さんのお母さんに近寄ると

「外傷はないがこのままにしては置けない。新三郎さん！何処か安全な場所へ運んでくれませんか？」

「は、はい！」

俺がそう言うと新三郎は頷き五十鈴さんのお母さんを人力車へと乗せて、俺たちは彼女自宅へと運んでいくのだった。

## 新たな門出です

あの後、みんなはショックで倒れた五十鈴さんのお母さんを自宅へと運び、いまみんなその家の客間で座って待っていた。それにしても五十鈴さんって言葉遣いもそうなんだが家もまさにお嬢様つというような豪華な家だった。俺はあまりの豪華さにあたりをきよろきよろと見ていて、みほは掛け軸とともに置いてある生け花を見ていた。「すいません、私が口を滑らせたばかりに……」

と、秋山が申し訳なさそうに言うのと五十鈴さんは首を横に振り「いいえ。秋山さんのせいではありません。わたくしがちゃんと母に話してなかったのがいけないんです」

と、秋山にそう言うのと五十鈴さんは何か思いつめたような顔をする。すると襖から奉公人の新三郎さんが入って来た。

「お嬢、奥様が目を覚まされました。……お話があるそうです」

と、新三郎さんが言うが五十鈴さんは首を振って

「わたくし、もう戻らないと……」

「ですがお嬢!」

「お母さまには申し訳ないけれど……」

「お嬢……差し出がましい事を申しますが、お嬢の気持ちは……:……ちやんと奥様に伝えた方が、よろしいと思うのです!」

新三郎さんは真剣な目で五十鈴さんにそう言うが五十鈴さんはどうすればよいのか悩んでいた。

「五十鈴さん。俺も新三郎さんの言う通りだと思っぞ」

「武藤さん……」

「五十鈴さん。こういう時はお母さんとしっかり話し合うべきだよ。人って言うのは不器用な生き物だ。言いたいことを言えなければ今後もなかなか言えなくなる。そしてそれは人との関係に深い溝ができてしまう。五十鈴さん。あんたこのままお母さんと本音をぶつけないでそのまま帰って後悔しないのか?」

俺はじつと五十鈴さんの目を見る。すると五十鈴さんはふっと笑い

「そうですね……確かに武藤さんの言う通りかもしれませんが。わかりました。わたくしお母さまのところに行って話してきます」

そう言い五十鈴さんは新三郎さんのところに行きお母さんと話をするべく部屋に向かったのだった。

「いいのかな？」

「偵察よ、偵察！」

今現在俺たちは五十鈴さんのお母さんがいる部屋の襖の前にいた。理由は五十鈴さんのことが心配なのが一番の理由だ。さてさて襖の向こうでは一体、どんな会話をされているのか。俺はそつと聞き耳を立てるのであった。一方、部屋の中ではというと……

「申し訳ありません……」

「どうしたの？華道が嫌になったの？」

「そんなことは……」

「じゃあ、なにか不満でも？」

「そうじゃないんです……」

「だつたらどうして!？」

「わたくし活けても活けても……なにかが、足りない気がするんです」  
「そんなことないわ、あなたの花は可憐で清楚、五十鈴流そのものよ」  
「でも、わたくしはもっと、力強い花を活けたいんです……!」

と、その時、襖の外で聞いていた俺は五十鈴さんの本音……彼女の強い意志を聞いた。力強い花つか……なるほどな……するとその言葉を聞いてまたショックを受けたのか五十鈴さんのお母さんはまた倒れそうになる

「ああ……」

「お母さま!？」

五十鈴さんは驚くがお母さんは何とか耐えるそして悲しい声で

「素直で優しいあなたはどこへ行ってしまったの？ これも戦車道の所為なの？ 戦車なんて……ただ野蛮で不恰好でうるさいだけじゃ

ない！……戦車なんて……戦車なんて全部、鉄くずになってしまえばいいんだわ！」

「て、鉄くず#！」

「落ち着け。秋山」

俺は戦車が鉄くずだと聞いて眉間に青筋を立てる秋山を落ち着かせた。確かに戦車好きにとってはその言葉は聞き捨てならない言葉なのだろう。だが俺にはその言葉の中に何かの感情があると感じた。なんていうか、ただ単に戦車が嫌いとかそう言うのではなく昔戦車を通じて何か辛いことがあった。そう言うような感情が入り混じった声にも聞こえた。

「……ごめんなさいお母様。でもわたくし……戦車道はやめません！」

と、五十鈴さんは強い信念を持った目でお母さんにそう言うときと五十鈴さんのお母さんの目の色が変わった。そして……

「わかりました。だったらうちの敷居を跨がないで頂戴」

と、彼女勘当宣言をした。

「奥様、それは……！」

「新三郎はお黙り！」

新三郎さんが何か言おうとしたがいす五十鈴さんのお母さんにぴしやりと言われ黙ってしまふ。襖の向こうでみほたちがいきなりすることに慌てている。

「(このままじゃだめだな……)」

そう思い俺はゆつくりと立ち上がり、そして襖をあけて部屋に入る

「よ、義弘君？」

「む、武藤殿!？」

「ちよ!?何してるの!？」

みほたちは俺のいきなりの行動に驚くがそんなのを気にせず俺は歩き始める

「む、武藤さん!？」

五十鈴さんが驚く中俺はかまわず、ずんずんと五十鈴さんのお母さんの前が出る。

「あ、あなたは……」

いきなりのことに五十鈴さんのお母さんは驚く。そして俺はゆつくりと腰を下ろし正座する

「母娘の大事な話、いきなりの乱入して申し訳ございません。ただ今の話に納得がいかなかったのであえて首を突っ込ませていただきませす。一つお聞きします。今の言葉は母親としての言葉ですか？それとも華道家元としての言葉ですか？」

「そ、それは……」

「確かに家元として厳しく言わなければならぬ時があります。それも家元の娘が相手ならなおさらです。ですがそれは家元としての話。なら母親であるあなたの言葉はなんですか？五十鈴さんの華道は母娘の縁を切るほどそんなにいけないことなのですか？」

「で、ですが五十鈴流の華道は……」

「五十鈴流華道の歴史は正直言って私にはよくわかりません。ただ……五十鈴さんは……彼女はその歴史つという古木に新たな花を咲かせようとしているのです。今までとは違う新しい花をね……もう一度言います。今の言葉は母親としての言葉ですか？それとも華道家元としての言葉ですか？」

俺の言葉に五十鈴さんのお母さんはじつと俺の顔を見る。すると

「あなた名は？」

「……武藤義弘」

と、俺が名乗ると五十鈴さんのお母さんはしばらく黙っていたのだが、五十鈴さんの方へ顔を向けて

「華さん。どうやらない殿方と出会ったようですね」

「え？」

お母さんの言葉に五十鈴さんは少し驚きそしてお母さんは体を動かして彼女に向き合うと

「華さん。さっきの言葉取り消すつもりはありません。どうしても敷居を跨ぎたいとおっしゃるのならあなたの言う道を探し歩みなさい。そしてその道を見つけ綺麗な花を咲かせることができれば帰ってきなさい。私は貴女がそれを出来る日をずっと待っていますよ」



「お母さま……」

と優しい笑みをし、そして五十鈴さんは目に涙をためていた。その後、五十鈴さんはお母さんに一礼して部屋を出る。俺の彼女を追うように部屋を出ようとすると

「ちよつとお待ちになつてくださる？」

と、五十鈴さんのお母さんに呼び止められた。

「少しだけよろしいですか？」

「え？あ、はい……」

俺はそう言い、俺は五十鈴さんたちを先に玄関に行くように言いその部屋に残った。

「なんですか？」

「あなた……たしか武藤さんでしたっけ？つかぬことを訊きますがあなたのお母さんの名前つてもしかして高杉翔子ではないのですか？」

「っ!？」

俺はその名を聞いて驚く。なんで母の名を知っているんだ？

「……はい」

俺はただ返事をするしかできなかった

「そう……その顔。翔子さんに似ていたからもしかしたらつと思つていたのですがやはりそうでしたか……で、翔子さんはお元気かしら？」

と、五十鈴さんのお母さんはどこか懐かしむ顔でそう訊く。しかし……

「私の母、高杉翔子は……俺を産んで3か月後に病にかかつて亡くなりました……」

その言葉を聞いて五十鈴さんのお母さんは驚いた顔をする。

「そうですか……翔子さんが……」

俺の言葉を聞いて五十鈴さんのお母さんは悲しい顔をした

「あ、あの……母をご存じなのですか？」

俺がそう言うと五十鈴さんのお母さんは頷き

「……ええ。彼女とは私と同じ高校の同級生であり親友でした。

明るく元気で：そして彼女は大の戦車好きでした……」

そう言うのと五十鈴さんのお母さんはその時の思い出を思い出したのか、ふふつと笑っていた。

「そうですか……」

俺がそう言うのと五十鈴さんのお母さんは

「武藤さん……これも何かの縁です。少し頑固な子だと思うのですがどうか華さんをどうかよろしくお願いします」

そう言い頭を下げた。俺は立ち上がり

「無論。そのつもりです。ですから娘さんの新たな門出応援してやってください。では俺はこれで……」

「はい。陰ながら応援していますわ」

そう言い俺は五十鈴さんのお母さんに一礼をし部屋を出るのであった。そして部屋を出て玄関につくと、外はもう暗くなっていた。そしてその先には人力車に乗って待っていたみほたちの姿があった。……もしかしてあれで帰るつもりなのか？そう思い俺はみほたちのほうへと向かいそして……

「いつまでもまっています、お嬢様く!!」

と、男涙を流しながら5人乗せた人力車を引つ張り走る新三郎さん。男涙はよかったのだが鼻水がなければかっこよかったのだ。……つというよりこの人高校生5人が乗った人力車を走って引つ張るなんてもしかして新三郎さんは見かけによらずかなりの力持ちなのかな？

「顔はいいんだけどな……」

武部が小声でそう言い、俺たちの乗る人力車はそのまま学園艦が待つ港に向かうのであった。

一方、一人残された五十鈴さんのお母さんは自室の棚から一枚の写真を取り出した。その写真には若き日の自分と武藤にそっくりな女性。そして天然パーマな少女と黒髪でどこか眠たそうな目をしている少女に少し目が吊り上がって厳しそうな眼をした髪の長い少女が

カーキ色のパンター戦車をバックに写っていた……  
「新しい門出ですか……」

五十鈴さんのお母さんはその写真を見てふふつと笑うのであった。

これからのことです

五十鈴さんのお母さんの家を出て、俺たちは奉公人の新三郎さんに港まで送ってもらった。そして港につくと

「……遅い」

と、冷泉が待っていた。しかも映画でよく見る港にいる男のポーズで……何気に似合ってるな冷泉の奴……

「もう、夜は元気なんだからー!」

「おう、冷泉。待つててくれたのか。ありがとな」

「別に……武藤のためじゃない……」

武部が冷泉に言う中俺は冷泉に待つててくれたことに礼を言うところにはおかつぱ頭印の風紀員の中のトップ風紀委員長の園さんがいた

「て、武藤。急いで!!」

「ああ、悪い悪い」

と、武部の声に俺は急いで階段を上がった。そして階段を上がるとそこにはおかつぱ頭印の風紀員の中のトップ風紀委員長の園さんがいた

「出港ギリギリよ。」

「ああ、悪い悪い」

「すみません」

「すまんなそど子」

「その名前で呼ばないでつて言ってるでしょう!?!」

と、俺たちは遅れたことを園さんに謝るが園さんは冷泉が言ったあだ名に不満の声を出す。そど子か……違和感がないからそっちの方が本名に聞こえてしまうのは俺だけだろうか?そして俺たちはさらに上の階段を上がる。すると……

「武藤さん」

と、五十鈴が俺に話しかけてきた

「ん?なんだ五十鈴さん」

「先ほどはありがとうございました」

「いいや、別に礼を言われることはしてないよ。俺はただ首を突っ込んで言いたいことを言っただけだよ。それよりも五十鈴さん」

「はい」

「頑張れな。お前の進む新しい華道を・・・そして応援してるぜ五十鈴さんが目指す『力強い花』って言うのをな」

と、俺が不適の笑みでそう言うのと五十鈴さんは顔を赤くし

「はいー!」

と、嬉しそうにそう返事した。その時みほたちは複雑そうな顔をしていたのだが、俺、変な事言ったのかな? まあ、そんなことはさておき俺たちは長い階段を登りきるとそこには先ほどの一年生チームがいた。すると車長であった澤が一步前に出て

「西住隊長・・・戦車を放り出して逃げたりして、すみませんでした!!」

『『すみませんでした!!』』』

と、彼女が謝ると、後ろにいた一年生たちも謝った。そして俺は一年生のところに歩みよる

「よ、義弘君・・・」

「大丈夫だみほ」

みほが心配して言うが俺は笑ってそう言い澤たちの前に出て手をそつと出す。怒られると思っただのか澤たちは目をぐつとつぶるが、俺は彼女の頭にポンつと手を置く

「お前たち・・・よく、頑張ったな・・・」

「・・・え?」

と、俺の言葉が予想外の言葉だったのか一年生たちが目を丸くする

「あ、あの・・・先輩怒ってないんですか?」

「怒る?なぜ怒る必要があるんだ?」

「なぜって。私たち戦車を放り出して逃げたんですよ!」

「それは仕方ないよ。今回お前たちにとっては初めての他校との戦車道の試合だったんだからな。それに逃げることは恥じやないよ。俺だって戦車道を始めた時から強かったわけじゃない。初めて戦車道をしたときはビビッて逃げ出したもんだよ」

「先輩がですか?」

「ああ。初めて見る本格的な砲撃。あの時の恐怖は今でも忘れたことはねえよ。だから逃げても別にいいんだ。これは殺し合いとかの戦争じゃない。それでも逃げるは卑怯というやつは俺がとっ捕まえて説教してやる。それになお前たちは逃げちまったことをみほにちゃんと謝りに来た。それだけでもお前たちは立派だよ」

「せ、先輩……」

「次は頑張れな」

『はいっ!!』

俺がそう言うのと一年生たちは元気よく答える。すると後ろで

「武藤って年下の扱い上手くない？」

「そうですね……なんて言うか手慣れていると言いますか……」

「西住殿？武藤殿って昔からあんな感じなのですか？」

「う、うん……義弘君、面倒見がいいから、なぜか年下の子とかに好かれることがよくあるの。本人は自覚ないんだけど……」

「天然なうえ厄介なんだな武藤さんは……」

と、みほたちが何やら後ろでこそそそと話していた。するとそこへ角谷さんがやって来た。

「これから作戦は西住ちゃんにまかせるよ。で……これ」

そう言い、角谷さんはティーカップと紅茶の葉が箱をみほに渡した。そしてその箱には *to friend* 書かれている手紙が入っていたのだ。そしてみほはその手紙を読む。

『今日はありがとう。あなたのお姉様との試合より面白かったですわ。また公式戦で戦いましょう。』

と書かれていた。

「すごいです！聖グロリアーナは好敵手と認めた相手にしか紅茶を送らないとか」

と、秋山は嬉しそうに言う。どうやらダージリンはみほのことを気に入ってライバルと認めてくれたみたいだな。

「へくそうなんだ」

「昨日の敵は今日の友ってやつだな……て、みほその手紙の下のところ何か書いてあるぞ？」

「えっ？」

俺の言葉にみほは手紙の下のあたりを見ると何か書かれてあった。それは

『追伸。みほさん。きつきも言ったようにイギリス人は恋愛と戦争では手段は選びませんので、その所心の隅に入れといてください』

と、書いてあった。しかも恋愛の文字の所だけ太字になっていた。どういう意味だろうか……と、俺がそう言い首をひねっている

「（もしかして……ダーズリンさん）」

と、女子陣は何か気付いていたようだった。

「どうしたんだ？」

「いや、武藤君は知らなくていいことだよ。それよりも公式戦は勝たないとね〜」

「は、はい！次は勝ちたいです！」

「公式戦？何それ？」

と、武部がそう言う

「戦車道の全国大会です！」

と、秋山が嬉しそうに答えたのであった。そう、公式戦とは秋山の言った通り戦車道の全国大会。いわば野球の甲子園大会みたいなものだ。

そして数日後、とある場所の会館で公式戦のトーナメントを決める抽選会が始まった。そして……

『大洗女子学園、8番！』

みほが番号の書かれたくじを引くとアナウンスが入るそしてそれを聞いたサンダース大学附属高校の生徒達が喜ぶ。まあ、彼女らにしてみれば無名の高校だからそれもそうか……

「サンダースね……少し厄介だわ……」

「篠原さん。サンダースって強いのか？」

「はい。優勝候補のひとつです」

と、武部が篠原に訊くと秋山が答えた。すると、武部は心配そうな顔で

「え〜？大丈夫？」

と、そう言うのであった。そんな中、生徒会は

「初戦から強豪ですね…」

「負けられない…負けてしまったら私たちは…」

と、何か意味を含めた言葉でそういうのであった。一方、俺はとうとずつと後ろのところ壁によってみほの方を見ていた。

「サンダースか…はてさて…どうなるかな…こほっこほっ」

と、俺は咳をする。その際、俺は肺のある方へそつと手を置いた。

「ふっ…まだもう少し持つてくれよ…」

と、俺はそう聞こえない声でつぶやく。そして俺は外に出て抽選会が終わるまでどこかをふらふらと歩いているのだった。



## 喫茶店での再会です

抽選会が終わり俺は今戦車喫茶「ルクレール」にいた。店の中を見ると同じく抽選会にいた多くの他校の戦車道部の女子たちがお茶会なんかをしてくつろいでいた。で、俺はというと……

「いいのか？俺なんかみほたちと相席で？」

「いいの。いいの。武藤なら別に相席になってもかまわないよ」

と、武部がそう言う。そう今俺はみほたちと相席の状態で席に座っている。事の発端は数分前、久しぶりにうまいコーヒーでも飲もうかと、この喫茶に入った。この店はケーキもうまいが何よりコーヒーもうまいって評判の店だからな。しかし、あいにく席は満員だったので相席つという事になった。で、その相席場所がみほたちの席だった。俺は断ろうとしたがみほたちがいいって言うてくれたので、今こうして座っている。そしてみんな注文の品が決まると秋山が注文呼び出しボタンを押す。すると

ドォーン

戦車砲の音がして、店員さんがやってつ来た。

「ご注文はお決まりですか？」

「はい。ケーキセットでチョコレートケーキ2つとイチゴタルト、レモンパイにニューヨークチーズケーキひとつづつお願いします」

「後、俺は特製コーヒーセットを頼む」

と、注文すると店員さんはメモ帳にすらすらと注文の品をかき

「承りました。少々お待ちください」

と、敬礼して厨房へと行った。

「このボタン。主砲の音になってるんだ」

「この音は90式ですね」

さすが秋山。砲の音だけで種類がわかるとは……

「さすが戦車喫茶ですね」

と、五十鈴さんがそう言った時あっちこちから主砲の音がする。どの音も似ているようだが一つずつ微妙に違う。

「あくもはやこの音を聞くと快感になっている自分が怖い♪」

と、顔を赤くしてそういう武部、その言葉を聞くとどここの機関銃を持ったセーラ服少女を連想してしまう。そしてしばらくしてラジコントラックが荷台に乗ったケーキを運んでやって来た。

「あっ!?なにこれ?」

「これ、ドラゴンワゴンですよ」

「かわいい〜」

「ケーキも可愛いですね〜」

とみんな運ばれてきたケーキを取り始める。俺のはまだ来てないか。まあ、良いか。品が来るのを楽しむ時間って言うのも悪くない。そう思い俺は席を立つ

「あれ?義弘君どこに行くの?」

「ん?ああ、まだ注文の品が来てないから、その間に少しね」

といいトイレの方をくいつと指さし、俺はトイレの方へと向かったのだった。そして俺がいない間みほたちはケーキを食べ始める。すると……

「ごめんね……、一回戦から強いとこと当たっちゃって」

と、みほが申し訳なさそうに言う。

「サンダース大付属ってそんなに強いんですか?」

「強いっていうかすぐくrittちな学校で、戦車保有台数が全国一なんです!チーム数も一軍から三軍まであって」

「公式戦の一回戦は戦車の数は10両までって決まってるから、砲弾の総数も決まってるし」

そう、今大会では戦車道の数は一回〜二回戦までは10両、準決勝では15、決勝では20輜で勝敗決めは指定された相手チームのフラッグ車を先に撃破した方が勝利のフラッグ戦となっている。つまり弱将校でも強豪校相手に勝てるチャンスがあるって言うことだ。

「でも十両って……うちの倍じゃん!それって勝てないんじゃない?」  
「単位は?」

「負けたらもらえないんじゃない?」

と、冷泉がそう言い武部がそう返すと冷泉は少し不機嫌になり手に持っていたフォークを思いつきりケーキにぶっさす。そしてそれを

見たみほは少しびびくりするのであった。

「それより全国大会はテレビ中継されるんでしょう？　ファンレターとか来たらどうしよう〜」

「生中継は決勝だけですよ？」

「うんじゃあ、決勝に行けるようガンバロ〜ほら、みほも食べて食べて！」

「あ、うん」

そう言い、みほがケーキを食べ始めた時

「み……副隊長？」

と、誰かがみほを呼ぶ声が聞こえ、振り返るとそこにはジャーマングレーの制服を着た銀髪の少女と目のきりつとした少女がいた

「……お姉ちゃん」

と、みほがそう言うのと武部たちの視線がみほの方へ向く。そう。この二人のうち一人の目が吊り上がった人がみほの姉、まほさんだ。すると……

「まだ戦車道をしているとは思わなかった……」

と、無表情でそう答える。すると秋山が立ち上がり

「お言葉ですが！あの試合でのみほさんの判断は間違ってますんでした!!」

声をあげる。すると

「部外者は口を出さないで欲しいわね」

「……すみません」

と、銀髪少女が鋭い目つきでそう言うのと秋山はその目を見て戦意を消失し、大人しく座る。すると……

「おっ!?!お前エリカじゃないかよ」

「っ!?!」

と、そこへトイレから戻った俺がそう言う。そしてエリカとまほさんは俺の顔を見て目を見開く

「よ、義弘?！」

「お久しぶりです。かれこれ3年ぶりでしょうかまほさん」

「あ、ああ……」

と、まほさんは相変わらず無表情な顔でそう言うが若干動揺しているようにも見えた。

「あ、あんた本当に義弘なの!？」

と、逸見が驚いてそう言う

「ああ、久しぶりエリカ。元気にしてたか？」

「ええ……て、そうじゃなくて。なんであんたがここにいるのよ!？」

「なんでって、ここでお茶を飲みを決まってるじゃないかよ」

「そんなことわかってるわ!なんであんたが大洗学園の連中といえるのよ」

と、興奮して言うエリカに対し俺は

「まあ、成り行きだよ。成り行きくそれに細かいことは気にするなよ」

と、笑いながら言う。するとエリカは……

「……まったくあんたは昔から変わらないのね……もう怒る気が失せたわ……」

と、ため息をつく。すると

「エリカ……行くぞ」

「は、はい隊長……」

と、二人はその場から離れようとするするとエリカが

「そうそう、一回戦はサンダース大付属と当たるんでしょ?無様な戦いをして、西住流の名を汚さない事ね」

と、皮肉を込めた言葉をみほに言う俺はため息をつく。すると

「何よその言い方!!」

「あまりにも失礼じゃ……」

武部と五十鈴さんが立ち上がって抗議するが、エリカが冷たい目で「あなた達こそ、戦車道に対して失礼じゃない?まだ無名校なのに。

この大会はね、戦車道のイメージダウンになるような学校は参加しないのが暗黙のルールよ」

と、そう言うが、

「強豪校が有利になるように、示し合わせて作った暗黙のルールとやらで負けたら恥ずかしいな」

と、冷泉がケーキを食べながら静かにそう反論する。

「もし、あんたたちと戦ったら絶対に負けないんだから！」

と、武部がそう言う

「ふっ・・・頑張りなさい」

エリカはそう言い立ち去ろうとするが

「あと、サンダースが一回戦でファイアフライを出してくるかどうかは分からないけど、可能性は十分に有り得るわ気を引き締めなさい。みほ」

「え？」

みほはエリカの言った言葉にきよとんとする。

「ただの独り言よ。じゃあね」

と、そう言いエリカはまほさんを追って店を出たのであった。まったくあいつは素直じゃないな・・・俺がそう思っていると

「何あれ、ものすごい失礼なやつね！」

「嫌な感じですね・・・」

と、武部と五十鈴さんが言う中、秋山が説明した。

「あの、今の黒森峰は去年の準優勝校ですよ、それまでは九連覇してて・・・」

「えっ!? そうなの!? そう言えば武藤。あいつと知り合いなの!？」

「ああ、あいつは逸見エリカ。同じ釜の飯を食べた親友だよ。なあ、みほ」

「う、うん・・・」

「逸見って・・・さっきのあの人があの逸見エリカ殿ですか!? 黒森峰中等部の三羽鳥の一人の!？」

「ああ、その逸見エリカだ。」

「ゆかりん。何その三羽鳥って?」

と、秋山の言葉に武部が首をかしげる

「黒森峰中等部の三羽鳥って言うのは3年前に黒森峰戦車道部の中で仲が良く、西住まほ殿を除いた中でトップクラスだった三人組がそう呼ばれていたんです。その一人がさっきの逸見エリカ殿ですよ」

「へ〜で、ほかの二人は誰なの?」

「俺と、みほだ。あいつとは小学生のころからの仲でな中学でもよく

三人で遊んだり、ショッピングしたりしたな」

「えっ!? ほんとなのみほ!?!」

「う、うん……」

と、武部が驚いてみほにそう訊くとみほは頷く。

「でもさ、いくら友人だったみほにあの言い方はひどくない?」

「ああ、あの言い方か……まあ、気にするな。あいつああ見えて根は優しいんだ。けどその優しさがちよつと不器用でついあんな言い方になつちまうんだよ。だからさここは俺に免じて許してくれないか? ケーキ奢るからさ」

「むくわかった。武藤がそう言うんなら」

「みほ……わかつてると思うけど……」

「うん。私も逸見さんのことはよく知ってるから気にしてないよ義弘君」

その後俺たちはケーキを楽しんだ因みに俺のコーヒーは冷泉がケーキのお代わりをしたときに来た。そして武部たちの頼んだケーキの代金を俺が支払い財布が軽くなつたのは言うまでもなかった。

そして帰る際、みほと別れた後……

「さて……まだ時間あるな。ゲーセンでも行こうかな?」

と、そう言った時

「義弘」

と、後ろから声がして振り向くとそこにはエリカがいた

「おう、エリカか3年ぶり」

「……ええ、そうね。3年ぶりね」

と、いつもとは違った雰囲気ですういう

「それよりもすまないな」

「何がよ」

「お前がみほたちに言った言葉。あれ演技だろ?」

「……何を根拠に?」

「簡単さ。お前の言葉には思いがなくてただ用意していたセリフを読むような言い方だっからな。だからあの言葉は本心じゃないってわかったのさ」

「……よくわかったわね」

「あれを言った理由はやっぱりまほさんか？」

「ええ……隊長は誤解されやすい人だから……」

俺がそう言うのとエリカは頷くやっぱりな……まほさんって昔から無表情で怖そうな感じだからよくみんなに変な誤解と化されていたもんな。その時は俺とエリカがフォローしていたけど。

「なるほどな……だから矛先をまほさんではなく自分に向けるためにあんなこと言ったと？」

「ええ。でもみほにはわかってたみたいだね……」

「相変わらず相手をフォローとかするの得意だなフォロ見フォローカ」

「そのあだ名はやめなさいよ……というより統一しなさい。それよりも義弘」

エリカがそう言うのと急に頭を下げる

「ごめんなさい……みほを守れなくて3年前約束したのに……」  
「……エリカ……俺がいない3年間……何があったんだよ？」

と、俺がそう言訊くと、エリカは悲しい顔をしながら俺がいない間の3年間、黒森峰がどうなったか教えてくれた。そしてみほがなぜ黒森峰を去ったことも……

「……なるほど……俺がなくなって黒森峰はそんなことがあったのか」

「ええ。あなたが去った後の黒森峰は大きく曲がり変わってしまったわ……私と隊長がいながら、みほを追い詰めた挙句、苦しめてしまった……情けない話ね……」

「そうか……」

それで、みほは戦車道のない大洗こいに来たってことか……

「ごめんなさい義弘」

「いいや。お前が謝ることなんてないよ……立場上大変だったんだろ？」

そう言うのと、エリカは頷く。するとエリカは何か思い出したような

顔をし、

「……それよりも義弘。あなた……大洗で戦車道をしているらしいわね……篠原からメールで聞いたわ」

「ああ。そうだよ」

「じゃあ、もうあれは大丈夫なのよね?」

「っ!?!」

エリカの言葉に俺はおどろき目をそらす。するとエリカは俺の襟をグイッと引っ張り

「大丈夫なのよね?」

「あはは……」

と、ジーと俺の目を見る。すると俺はさらに目をそらし笑って誤魔化す

「目をそらさないで義弘!……まさか。まだ治つてないの!?!」

「……ああ……残念ながら」

と、俺は苦笑して答えると……

「なら、なんで戦車道を始めたのよ!?! 3年前あなたが戦車道を辞めたのはそれを治すためにやめたんじゃないの!!それを治して大好きだった戦車道をもう一度始めるんじゃないの!?!」

と、エリカがすごい剣幕でそういう。そう言えばこの話をしたのはエリカと蝶野さんだけだったけな……

「じ、実はな……エリカ。それなんだが、もう無理なんだと……もう手の施しようがないって言われてな……」

「っ!?!」

「だから俺はこの3年間、ひっそり静かに大洗で暮らしてたんだけどな……どうも運命ってやつは俺に戦車道をさせたいらしい」

「……あとどれくらいなの?」

「そうだね……聞いた話では長くて3年くらいだよ。だからさ。本当に残り時間が短いんなら静かに暮らすのを止めて好きなことをしようと思ったのさ。じゃあそろそろ行くぜ」

そう言い俺は後ろを向き歩き始める。すると……  
「待つて義弘……」



「ん？なんだエリカ？」

「・・・・・・・・・・みほのこと頼むわよ。それと無茶はしないでね・・・・・・・・  
黒狼」

エリカがそう言うとなんか軽い笑みをし

「ああ、任せとけ。じゃあエリカ。公式戦でまた会おうな」

とそう言い俺はその場を去りエリカは・・・・・・・・

「・・・・・・・・バカ」

と、少し涙をためて立ち尽くしているのがあった。

## 船上での決意

あれから数時間後、俺は今、学園艦に向かう連絡船の手すりのところに立って夕日を眺めていた。すると・・・

「あれ？義弘君？」

と、みほがやって来た。

「ああ、みほか。ただ夕日を眺めていただけだよ。そう言うみほも夕日を見に来たのか？」

「え？う、うん・・・」

と、なにやら悩みを抱えた顔でそう言う。もしかしてさつき喫茶店でこのことを気にしているのか？

「綺麗な夕日だな・・・陸じゃ見られねえなっこの景色は」

「うん・・・」

と俺とみほは夕日を眺めた。

「みほ・・・エリカのことだがあいつさつきあんなこと言ってたが・・・」

「うん・・・わかってるよ義弘君。あれが逸見さんの本心じゃないってこと・・・」

「そうか・・・」

と、みほが苦笑してそう言う。やっぱりみほもわかっていたのか。「なあ、覚えているかみほ。俺たちとエリカが出会った時のこと。たしかであったのは小学生のとき、田んぼで出会ったよな？」

「うん。あの時ってお姉ちゃん操縦する2号戦車でドライブしていた時にあったんだよね？」

「そうそう。今思うと懐かしいよな・・・」

と、そんな話をしていた。あの時のことは俺もよく覚えている。あの時まほさんの運転する2号戦車の砲塔に乗っている時、いきなり白ゴス少女が突っかかってきて喧嘩になりそうだったんだけど、なんか話していくうちに意気投合しちゃって気が付けが夕暮れまで遊んでいるっという結果になったんだよな。今思えばあの時がエリカと俺たちの出会いだったな。その後彼女と俺たちは同じ小学校だったこ

とを知りそれ以来俺が黒森峰を去るまでいつもみほと一緒に行動を共にし親友つと言っていいほどの間柄になつていたんだよな……今思うと本当に懐かしい。

俺が昔のことを思い出していると……

「寒くありませんか？西住殿。武藤殿？」

そこへ秋山がやってきて俺たちにそう訊く。

「ううん…、大丈夫」

「俺も大丈夫だよ」

と、俺とみほがそう言うのと秋山はみほの隣に立ち。

「全国大会、私は出場出来るだけで充分です、他校の戦車も見れますし……大切なのはベストを尽くす事です、例えそれで負けたとしても……」

と、秋山はいきなりそう言いだした。その顔はどことなく嬉しそうだった。まあ、戦車好きである秋山からすれば他校の戦車を見れることは夢のようなもんだしな。それはそうなんだろう。まあ、確かに今の大洗は素人の集まりだ。俺から見れば怪我しないで楽しくできればそれでいいっと思っている。俺に戦車道を教えてくれた師匠曰く

『戦車道は戦車を使うが戦争にあらず。戦車道とはみんな力で力を合わせ、そして楽しくやるのが戦車道の楽しさ』と言ってたな。師匠は戦車道の指導の時は厳しかったけど、それ以外では陽気な享樂家で、毎日を楽しく生きるための努力を惜しまない人なんだよな。元気にしているかな……そう俺が思っている

「それじゃあ困るんだよね〜」

「え？」

後ろから声が思、俺たち三人は振り返るとそこにはいつからいたのか生徒会三人組がいた。そして

「絶対に勝て！我々は絶対に優勝しなければならんだ」

「それまたどうですか？」

と、秋山が首をかしげてそう言う

「そ、それがね……負けたら我が校は……」

「し〜!!」

小山さんが何か言おうとしたとき角谷さんが指を立てて小山さんの言葉を遮った

「角谷さん?」

「いや、なんでもないよ武藤君。それよりも全ては西住ちゃんや武藤君の肩にかかっているからね〜もし、負けたらアンコウ踊りだからね〜」

と、そう言っただけで角谷さんたちは船内に戻っていった。先ほどから気になるが角谷さんは何を隠しているんだ? やけに勝利にこだわっている。俺やみほを戦車道に勧誘していた時もそうだが、角谷さんたち生徒会は何かを隠している。

「だ、大丈夫ですよ、西住殿! 頑張りましょう!!」

と、秋山はみほを元気づけるようにそう言うが

「まだ初戦だからファイヤフライは出してこないと思う。でも逸見さんの言う通り出す可能性もあるし……せめて、チームの編成がわかれば……」

みほが不安そうにそう呟いているのを見て秋山は何か決心した顔をするのであった。

あれから翌日の日曜日、俺はある所へと向かった。その場所とは床屋であったそして俺はその扉を開けるとそこには夫婦らしきエプロンをした二人がいた。そして二人は俺の顔を見る

「お邪魔します……」

「ん? おおーっ! 武藤君じゃないか。また散髪かい? それとも優花里に用かい?」

と、パンチパーマをした男の人がそう言う

「どうも秋山さん。まあ、両方です」

と、俺がそう答える。すると女の人が

「ごめんなさいね。優花里、今買い物頼んで今いないのよ。もうすぐ戻ると思うんだけど……」

「そうですか……じゃあ、散髪をお願いします。結構髪も伸びたので」

「そうかい。それじゃあ、席に座ってくれ。すぐに準備するから。で、今回の髪型は？」

「ああ、髪型はいつものカットでお願いします」

「あいよ。えつとハサミは・・・」

と、そう言い俺は椅子に座る。そう、実はこの床屋さん。秋山の実家だ。それでこの二人は秋山のお父さんとお母さんである。そして秋山の親父さんはハサミを手に俺の背中まで伸びた髪をカットする。因みに俺はこのお得意さんで髪を切るときには必ずここを通うと決めているのだ。そしてなぜか秋山のお母さんにはものすごい好意を持たれたり秋山の親父さんなんかたまに『跡取りが来た・・・』とか、なにやらぶつぶつ呟いていることがあった。そしてしばらくして「はい。終わつたよ武藤君」

と、秋山の親父さんは手鏡を俺に渡す。俺は鏡に映った自分を見ると、俺の髪型は肩までとなっていて少しバサバサとした感じになっていた。うん。やっぱり黒森峰時代からのこの髪型が落ち着くな俺としては・・・

「どうだい？いいかんじだろう？」

「ええ、ありがとうございます」

と、俺が礼を言った瞬間に秋山が帰って来た。

「ただいま帰りました」

「おかえりなさい優花里。あなたにお客さんが来ているわよ」

と、秋山のお母さんが何やら意味を含めた感じの言い方で秋山にそう言う

「お客？・・・あつ!?む、武藤殿!?あれ？髪を切ったのですか？」

「ああ、今さつきな・・・」

「そうなんですか・・・あつ！そうだ武藤殿。丁度良かったです！。」

「・・・へ？」

「ぎ、狭いところですがどうぞ。あ、あとこれお茶です」  
「い、いただきます」

俺は今秋山の部屋の中で茶を飲んでいた。当たりを見渡すとそこには戦車のプラモデルやら、ポスター中には戦車の転輪までもが飾ってあった。本当に戦車が好きなんだな……。秋山つて

「……………で、俺に何か用？」

と、俺がそう言うのと秋山は急にもじもじし始めた。どうしたんだ？

「あ、いえ…その……………非常に言いにくいのですが……………」

「なんだ？俺にできることなら協力するぞ」

俺がそう言うのと秋山は俺の顔を見て

「武藤殿！私と…付き合って下さい!!」

「……………えっ!?!」

俺は秋山の言葉に驚く。つ、付き合う?……………い、いったい何を言っているんだ?そのまんまの意味なのか?それとも別の意味の……………例えば買い物とかの付き合うとかそう言うのか?

「あ、あの……………秋山。付き合うって何をだ?か、買い物とかか?」

「いいえ!違います!サンダーズ大付属への潜入偵察の手伝いをお願いしたいのです!!」

ああ。なるほどっそつちの意味での手伝いか……………一瞬驚いたよ。てか必ず会話には主語つけないと誤解されるぞ。

「なるほど。潜入捜査に付き合えってか」

「はい。少しでも西住殿の力になればと思います……………あの……………ダメですか?」

と、秋山は上目遣いで俺にそう言う。秋山は優しいな……………こは協力しないとな。秋山のためにもみほの為にもな!……………よしっ!

「いいや。ダメじゃないよ。むしろ大歓迎さ。……………で、いつ行くんだ?」

「明日の予定です。ですから今日私は明日に備えていろいろと買ってきましたんですよ」

と、秋山はリュックからいろいろと出してきた。

「え……と……コンビニ店員の制服にサンダース大付属の制服。ビデオカメラにロープに段ボール……秋山。最後のこの段ボール何に使う気だ？」

「はい。隠れるための物ですよ」

何処のメタルギアだ秋山は……

「……まあ、良いや。それでそうやっていくつもりだ？……まさか」

「はい、そのまさかです。明日コンビニの定期船に潜り込んでいきます」

「なるほど……だからコンビニ店員の制服があるわけか……というより秋山。この制服どっから持ってきたんだ？」

「ああ、それは秘密です。武藤殿」

「そうか……それは残念だ。それとなんだが秋山。お前、その後サンダースの生徒に成りすましていく気か？」

「はい。もちろんです」

と、秋山はまるでピクニックの日の前夜のようにはしゃぐ子供みたくにうきうきしていた。だが

「あ、あのな……秋山。別にそんなことしなくてもものすごく簡単にサンダース大付属に入れる方法はあるぞ」

「……え？」

「ちよっと待ってろ」

その後、俺は携帯を取り出し、あるところに電話をかけるのであった。

## サンダースは意外とフレンドリーです

あれから翌日、俺と秋山は今、コンビニ定期船に乗って今、とある場所にいる。その場所とは……

「うわあ〜ここがサンダース大付属の学園艦ですか!!」

「さすが金持ち学校のサンダース。大きい学園艦だな……」

そう、俺たちは今サンダース大学付属高校にいるのだ。因みに今日俺たちは学校はあるのだが今回はさぼってここにいる。

「……で、秋山。結局サンダースの制服に着替えたのかよ?」

俺は秋山を見ると秋山はコンビニ店員の格好からサンダース大付属の制服に着替えていた。いつの間に着替えたんだよ……

「はい!せっかく持ってきたので着てみました!」

「そ、そうなのか」

「そう言う武藤殿だつて。『黒狼』のパンツァージャケットを来ているじゃないですか!」

「まあ、それは……その。俺にとってこれ正装みたいなもんだからな……」

秋山にそう言われ俺は苦笑して頬をかく。そうかく言う俺もコンビニ店員の格好から今黒狼マークの黒いパンツァージャケットを着ていたのだ。なんていうかこの格好を着ているとなんか落ち着くのだ。すると……

「へい!ブラツキー!!」

と、そこへ金髪の少女こと。サンダース戦車道隊長であるケイがやってくる

「おう!ケイ!久しぶり!」

「ええ!本当に久しぶりね4年前の全国中学戦車道大会以来かしら? それにしてもまさかブラツキーが大洗にいるなんてね。電話でそのことを聞いた時は驚いちゃったわ!」

ケイははしゃいでそう言う。そう実は秋山の部屋にお邪魔していた時、俺は携帯でケイさんに電話をしていたのであった。まあ、偵察じゃなくてサンダース大付属を見てみたいとだけしか言わなかった



んだけどな。それを聞いたケイさんはOkの二文字で承諾してくれて今ここにいます。するとケイさんは秋山の方をじつと見る

「あれ？ブラツキー。その子は？もしかして彼女さん？」

「か、彼女／＼／!?」

ケイは秋山を見てそう言う。てか、秋山の変装早速ばれてる。ケイさんって結構勘が鋭いからな……。するとその言葉を聞いた秋山は顔を赤くする。

「違うよ。こいつは俺のクラスメイトの秋山だよ。それに俺のような戦車バカに秋山のような美人じゃ釣り合わないだろ？それに俺なんかより秋山にはもつといい男がいるんじゃないか？」

「え？」

俺がそう言うのと秋山は少し驚いた顔をし複雑そうな顔をした。するとケイは苦笑して

「あはは……。もうブラツキーたら。相変わらず自分を過小評価するわね。まあ、良いわ。それよりも昨日、電話で聞いたわ。今日はここの偵察に来たんでしょう？存分に見てって！」

「え、いいんですか？そんなことをして!？」

秋山が驚いてそう言う。まあ、当然の反応だろう。

「大丈夫。大丈夫！うちは見られて困ることはないからいつでも私たちはオーブンよ！」

ケイは笑ってそう言う。なんというかフレンドリーというか人が良すぎというか……。まあ、そこがケイのいいところだ。

「じゃあ、私はこの後、書類とかやんなきゃいけないから自由に見て行ってね♪」

と、そう言いケイはどこかに行ってしまった。

「……。さて。行くか秋山」

「そ、そうですね！まずは戦車倉庫に行きましょう！」

と、そう言い俺たちはまず最初に戦車倉庫に行くことになった。そして廊下を歩いている時、秋山が俺にこういった。

「それよりも武藤殿。先ほどの会話と言い武藤殿はサンダーズのケイさんとお知り合いなのですか？」

「ん〜知り合いつていいつちや知り合いかな？昔お互い砲を交えた仲だしつと言つても交えたのは中学一年の時の一回きりだったからな……」

「そうなんですか……武藤殿そう言えば先ほどケイさんが武藤殿のことをブラツキーつてあれつて黒狼の黒を取つてブラツキーなのですか？」

「まあなく」

と、そんなことを言いながら俺たちは戦車格納庫に向かい進むすると向こうにいる女子生徒が

「ハイー！」

「ハイー！」

と、手を振つてあいさつし俺や秋山も手を振つて返事する

「フレンドリーですね武藤殿」

「ああ、そこがサンダースのいいところだ」

と、そんなこんなで俺たちは戦車格納庫に到着し、戦車を見た秋山が目をキラキラさせてはしゃぐ

「すごいです！こんなにくさんの戦車初めて見ました！武藤殿。ビデオはちゃんととっていますよね？」

「ああ、ばつちり撮つてるよ」

「すごい…：シャーマンがずらり。あれはM4A1型！あつちはM4無印……おお!!あれはわずか75両しか作られなかったA6があります!!」

「おい、秋山あつちなんかM4A3E2があるぞ」

「おおおー!!ジャンボまであるんですか!?!すごいです！ここは宝の山ですか!?!」

と、ものすごくうれしそうに言う秋山。かくいう俺もこんなに大量のシャーマンが見れて結構喜んでたりもする

「はあくまことに感激です。私もうここで死んでも悔いはありません！」

「おい落ち着け秋山。気持ちはわかるがここで死ぬんじゃない」

「あつ！そうでした。すいませんつい場酔いしてしまいました」

場酔いつてなんだよ……

「ま、まあ、とにかく。秋山。次はどこに行くんだ？」

「そうですね……先ほど戦車道の生徒から聞いたんですけど午後からブリーフィングルームで公式戦に向けてのブリーフィングが始まるみたいなんです」

秋山がそう言うのと俺は腕時計を見る

「午後か……まだかなり時間があるし、秋山はその時間までに何をやるんだ？」

「私ですか？そうですね……私は戦車道の縁の下の力持ちである整備科を見てみたいと思います。武藤殿はどうするんですか？」

「そうだな……俺はとりあえず時間になるまでふらついているよ」

「わかりました。それじゃあ、午後にブリーフィングルームに集合ですすね」

「そうだな。じゃあ、そこで会おう。場所わかるか？」

「大丈夫です！そうれじゃあ武藤殿。午後にまたお会いしましょう！」

と、そう言い。俺と秋山は分かれて行動することになったのだった。そして俺はただ一人、廊下を歩く。するとあるものに目が留まる。それは少し防音対策のドアがあつたそしてそのドアに名札が付けられてあつた。それは……

「射撃ルーム……か。なんか面白そうだな。入ってみるか」

そう言い、俺はそこに入るのであつた。するとそこには広い空間でアメリカにあるような拳銃の射撃場みたいな場所であつた。……あれ？ここって一応、高校なんだよね？なんでこんなのがあるんだ？俺がそう不思議がつっていると、受付人らしき金髪の少女が俺を見ていた。そして

「……射撃するの？しないの？」

「え？ああ……すまん。せっかく来たし、やろうかな」

「そう……で、何にする？」

「ここには何が置いてあるんだい？」

「ここは唯一日本政府に許可された射撃場。ライフル、拳銃、機関銃なんでもあるわ。……で何にするの?」

「そうだな……じゃあ、拳銃を」

「……種類は?」

「ドイツのワルサーP38をお願いできるかな?」

「わかったわ。ワルサーね。すぐに用意するから6番で書かれているところで待っててくれる?」

「わかった」

そう言い、俺はその少女が言っていた6番とかかれた射撃場で待っている。先ほどの少女が拳銃とその弾薬を持ってきた。

「お待たせしました。一応注意しますがこの弾丸はゴム弾だけどあまり人には向けないでね。それじゃあ楽しんでください」

と、そう言うとその受付の人は元の場所へと戻って行くのであった。そして俺は渡されたワルサーP38を手に取り弾丸の入ったマガジンを装填する。そして50メートルくらい離れた的に向かって撃つのであった。

義弘がしばらく打っているとドアが開きそこからショートヘアの身長の高くガムをかんだ少女が入って来た

「ナオミさん。いらっしやい。使うのはいつもの奴かしら?」

「ああ、いつもの奴だよ」

と、先ほどの受付の人がそう言うとそのナオミと言われた少女が頷く。

「わかったわ。じゃあ、7番のところまで待っててくれる?すぐに持ってくるから」

「ああ、わかった……ん?今日は男性の客が来ているのか?」

「ん?ええ。珍しいことにね。……あ、あった。はいこれ。

コルトM1911」

「ああ、サンキュー」

とそう言い少女は受付嬢から拳銃を受け取り7番とかかれた射撃場へ向かう。すると先ほど6番とかかれた射撃場を通過するときふつとその中を覗く。するとそこには彼女にとって見慣れた顔で

あつた。鹿のその人物は真黒いパンツァージャケットを着ていたそれを見てナオミは驚くのであつた。

「(っ!?!・・・高杉?)」

「うくん・・・持ち弾10発撃つて的に当たったのは5発、真ん中に当たったのは2発か・・・やっぱ篠原みたいに一撃必中までとはいかないな・・・」

と、そんなことを呟いていると・・・

「Hands up!!」

と急に後ろから流暢な英語が聞こえ、何か冷たい感触が俺の頭に伝わる。しかしこの声・・・どつかで聞き覚えが。すると

「Drop your weapon, Black wolf?」

と、またも流暢な英語が聞こえた。その言葉に俺はふっと笑い俺は拳銃を後ろにいる人物に向けた(むろん安全装置をかけて)すると、そこには短い髪の少女がにっこりと笑って俺に拳銃を向けていた。

「ほお・・・私の英語が通じないなんてあなたはサンダースの生徒じゃないわね・・・それとまさかここで会うなんてね。久しぶりだね高杉義弘・・・いや伝説の戦車兵の黒狼さん?」

「ああ、そうだな。サンダース大付属戦車道のの名砲手でケイの右腕の一人のナオミさん」

そう、俺の目の前にいる少女はサンダース大付属戦車道部の副隊長の一人であるナオミであつた。

## オツドボールとブラツキーです

「……………久しぶりだな高杉」

「ああ、3年ぶりだなナオミ」

俺に銃を突き付けていたのはサンダースのエースで歴代きつての砲手と言われているナオミだった。

「まさかお前がここにいるなんてな……………お前がいなくなったときは毎日お前の写真を見て泣いたのだぞ？まったく恋人である私を置いて消えるなど薄情な奴だ」

「あほか。勝手に消えたのは謝るが恋人関係になった覚えはないぞナオミ」

「ハツハツハ！冗談さ。君にはもう先約がいたしね。しかしお前がいなくなつて泣いたのは事実だぞ」

とそう言いながらナオミは銃を置き苦笑してそう言う。

「そうか……………それはすまない」

「いや、いいさ。こうして再びお前の顔を見ることができたのだからな」

俺の言葉にナオミは微笑んでそう言う。

「そうか……………あ、そうだなオミ。月刊戦車道で見たぞプラウダの砲手ノンナと同じ戦車道名誉砲手の称号をもらったらしいな」

俺がそう言うとなオミはアハハと笑い

「私にあんな称号は似合わないよ。あの称号は道子に与えられるべきだ。彼女こそあの称号がふさわしい人物だからな」

「えらく篠原のこと買っているんだな」

「ああ、彼女は私が砲手の道を行ききつかけとなった憧れの選手だからな。それで道子は元気か？」

「ああ、元気になっているぞ」

「そうか。じゃあ、試合で相まみえるのがなお楽しみになって来たな……………それよりも高杉」

「すまんナオミ。今俺の苗字は高杉じゃなくて武藤つてなっているんだ。だから武藤で頼むよ」

「そうか名字を変えたのか・・・で、武藤。お前はなんでここにいるんだ？まあ、大体想像がつくがな。・・・で、ここにきて楽しんでるかい？」

「まあな。それにしてもここには驚いたよ。まさかここに射撃場があつたなんてな」

「ああ、この射撃室は日本の学園艦の中では唯一実弾が撃てる場所だからな。私も暇なときには足を運んでいる・・・おっとそろそろ私は午後のミーティングの準備をケイと一緒にやらなくてはな・・・武藤もブリーフィングルームに行くか？」

「いいのか？俺は次の対戦相手の選手の一人だぞ？」

「ケイならOKというだろうし、それに作戦を見られたぐらいでやられるような私たちじゃないさ。だから私は別にかまわないよ」

「そうか。それじゃあお言葉に甘えようかな？」

「そう。じゃあついてきて。ブリーフィングルームまで案内するからさ」

「ああ、ありがとなナオミ」

そう言い俺とナオミは射撃場の受付の人に拳銃を返し、その部屋を後にしたのだった。そしてブリーフィングルームの前につくと

「武藤この部屋の中がブリーフィングルームだ。席は好きなどころに座ってくれ。じゃあな武藤」

「ああ、ありがとなナオミ」

「どういたしまして。後15分くらいで始まると思うから。ゆっくりしてくれ」

俺はナオミにお礼を言うとナオミはそう言いその場を去り俺はブリーフィングルームに入った。そこにはたくさんの生徒がいた。さりと・・・開いている席はどこかな？俺はきよろきよろと見ているとそこに一席開いていた。俺はその席に近づき隣に座っていた女子生徒に声をかける

「すみません隣いいですか？」

「え？ああすみませんここには先約が・・・て、武藤殿!」

「あ、あれ？秋山？」

と、そこには秋山がいた。そう言えば集合場所はここだったんだよな。そう思い俺は秋山の席に座る。すると、それと同時に正面のステージからケイやナオミと、あれは……誰かな？まあ、そばにいるのだから恐らく幹部クラスの子だろう。すると秋山はビデオカメラを取り出しスイッチをONにした

「どうやら全体ブリーフィングが始まるようです……」

と、まるでレポーターのように小声で話す秋山。すると小さいポニーテイルの子が

「では、一回戦出場車両を発表する」

と、手に持っていたメモらしき紙を見ながらそう言う。

「ファイアフライ一輛。シャーマンA1、76ミリ搭載型1輛、75ミリ砲搭載8両……」

「容赦ないようですね武藤殿」

「ああ、そうだな」

その子が、そう出場車輛を発表する。初戦でいきなりファイアフライか……これは俺の乗るパンターに対抗するために編成させたんだろう。となるとファイアフライに乗るのは恐らくナオミだな。ファイアフライは命中率が悪い。しかしナオミの腕にかかればどんな命中率の悪い戦車もたちまちに命中率がグンと上がる。これは少し厄介なことになったな……するとケイが一步前に出て

「じゃあ、次はフラッグ車を決めるよ。OK？」

『イエエーイ!!!』

ケイが腕を天井に伸ばして言うのと観客席にいた生徒たちもノリよく腕をあげてそう答えた。まさにアメリカン流の返事だな。

「随分ノリがいいですねここでもアメリカ流ですね。武藤殿」

「ああ、まあこの学校はピンからキリまでアメリカ色に染まった学校だからな。食堂の飯もみんなアメリカもといジャンボサイズだからな」

「そうなんですか……」

と、俺たちがそう話していると何やら歓声が上がった。どうやらフラッグ車が決まったらしいな……



「どうやら決まったようですね」

「ああ」

俺と秋山が小声で話していると

「何か質問は？」

と、ナオミがそう言うのと秋山が手をあげて

「はい！小隊編成はどうしますか？」

と、言うのと、ケイはにっこりと笑い

「お〜いい質問ね。今回は完全な二個小隊が組めないから3両で1小隊の一個中隊にするわ！」

「フラッグ車のデイフェンスは？」

「ナツシング！」

「敵には三突とパンターがいると思いますが？」

「大丈夫！1両でも全滅させられるわ！」

と、そう言うのと観客の生徒たちはおくと声をあげる。いや、ケイ教えてくれるのはありがたいがお前、その質問した子の正体、知っているよな？本当に人が良すぎるよあんたは……するとナオミはじつと秋山を鷹のように鋭い目で見る。あかんこれはバレたかな？

「……見慣れない顔ね？」

やっぱりバレてる。そう言えばナオミって昔から勘とかが鋭かったけな。これはお暇する準備しといたほうがいいな。

「所属と階級は？で、その隣にいる黒服の奴も見ない顔ね？あんたどこ所属？」

あ、ツインテールの子に気付かれた。てか今までケイとナオミは見てもみぬふりをしてきていた（ナオミは秋山のことは知らない）みただがさすがにいつまでもそう言うわけにはいかないか……すると焦った秋山は

「あ、あの！六機甲師団オッドボール三等軍曹であります！」

とそう言い、俺も

「はい！俺はその付き添いのブラツキーです!!」

と、そう言うのとステージにいるツインテールの子は驚いた顔をしケイは笑いだしナオミは少し笑うのを我慢しながら

「に、偽物だー！ぷつくくく・・・」

とそう言う、そして俺は秋山の手を取り

「行くぞ！秋山！ケイ！ナオミ！世話になった！じゃあ、試合でな!!」

と、そう言い、俺は秋山の手を握りながら部屋を走り出たのだった。そしてそれを見たツインテールの子は

「あつ！逃げた！追いなさい！」

と、そう言い、自分も追いかけてようとしたが

「その必要はないわアリサ」

「え？でもあの二人は大洗のスパイですよ!?!」

「いいのよ。あの二人は私が招待したお客だったんだから構わないわ」

「ああ、それに今追いかけてももう、逃げられているしな」

アリサと呼ばれた少女の言葉にケイとナオミはそう答えた。

「それにしてもオットボールね・・・面白かったわねあの秋山って子。また招待しようかしら。それとブラツキーも」

「え？隊長あの黒服の男と知り合いなのですか？」

「ええ、アリサ。あなた黒狼のうわさはもう聞いたわよね？」

「え？ええ、確かかつては黒森峰中等部で戦車道界最強と言われた戦車乗りですよ？で、三年前に突然失踪したかと思ったら、今年の春あたりに突然、大洗学園の方に姿を現したって奴ですか？あの・・・それが何か？」

「あのブラツキーこと武藤義弘がああの伝説の戦車乗りの黒狼なのさ」

「え!?!あのチビ男が!?!でも・・・確か黒狼は・・・え?」

と、アリサが驚いて混乱している中ナオミは

「・・・で、どうするケイ。戦車の編成変えるか?」

「うくんそうね・・・いいえ、戦車の編成や作戦はそのままでもいいわ。なんか面白くなりそうだしね。それでいいナオミ?」

「・・・ふっ。イエスマム」

一方、俺たちは廊下を走り抜け今、校庭あたりを走ってコンビニ船へと向かっていた

「やりましたね！武藤殿！有力な情報を入手しました！」

「ああ、これで対サンダーズ戦の対策が練りやすくなったな。後はそのビデオに撮った映像を編集しないとな」

「あ、そうですね！カッコいいBGMもつけちゃいましょう！」

「おっ！それいいなロックな感じの音楽とカリパブリック讃歌とか！」

「おお！ナイスアイデアです！武藤殿！」

と、そんな話をしながら俺たちは何とかコンビニ船にたどり着き、そして大洗につくまでの間、秋山の録画した映像を編集するのであった。するとポケットに入れていたスマホから着メロがなりそれを取り出すとメールが入っていた宛先にはケイだった。俺はそのメールを確認すると

『今日は楽しかったわブラッキー。あなたは昔と変わらずとてもエキサイティングなボーイね！また遊びに来てね、今度は友達もたくさん連れてうちはいつでも歓迎するからそれじゃあ、試合で会いましょう！』

byケイより

追伸

あ、それと戦車の編成と作戦は変えないからね。お互いにフェアプレイで戦おうね』

と、書かれていた

「ケイさん……あんた本当に人類で稀に見るほどのお人好しだね……本当に尊敬するよ」

人類がみんなケイさんみたいな人だったら戦争とか起きず平和になっただろうな……俺はふつとそんなことを考えていた

「ん？どうかしたんですか武藤殿？」

「あ、いやなんでもないさ。また行きたいなサンダーズに」

「はい！私も今度はじっくり見てみたいです！」

と、俺と秋山はビデオの編集をしつつ、もう、姿が見えなくなったサンダースの学園艦をじっと眺めているのであった。

## 訪問と再会

秋山と義弘がサンダースから上手く脱出し、コンビニ連絡船でビデオに撮った映像を編集していたころ、みほたちは学校や戦車道の練習が終わり下校していた。

「結局、秋山さん練習に来ませんでしたね。それと武藤さんも」

「うん。篠原が言うにはなんか外せない用事があるって言っていたらしいよ」

「外せない用事ってなんだ？」

「さあ？あ、メールは返ってきた？」

「全然、電話かけても二人共圏外だし……みほ、武藤から何か聞いている？」

「ううん……義弘君とは朝から会ってないから……」

「そうなんだ……」

と、そう言い4人は歩く。すると武部は何を思ったのか、ハツとしたような顔をし

「もしかしたらあの二人デートしているんじゃない？」

「「え？」」

いきなりの言葉に3人はポカーンと口を開ける

「だつてさ、あの二人って同じクラスじゃん。聞けば1年生の時から、だからさ、二人とも実は付き合っているんだよ！だから今日学校に来なかったのも納得できるじゃないの！」

「沙織、いくらなんでもそれはない。恋愛小説の見すぎだ」

「確かに辻妻は会いますがさすがに二人が付き合っている証拠もありませんしたまたま二人とも同じタイミングで用事ができたんじゃない……ねえ、みほさん？」

「よ……義弘君が……優花里さんと……つ、つき……」

と、みほはそうぶつぶつと呟きながら歩く。顔を赤くしその目はぐるぐると回っていた。

「み、みほ？」

「え!?ああ……大丈夫ちよつとびつくりしただけだから……」

「そう?・・・まあ、とにかく今日はゆかりんの家、行ってみよ。その後、武藤の家に」

「そ、そうだね」

と、4人はそう話し合い、とりあえずは秋山の家を訪問することにした。そして歩いて数分後、4人は秋山の自宅に着くのだった。

「あれ?ゆかりんの家、床屋さんだったんだ」

沙織がそう呟き、4人は入るのだった。

「いらっしやいませ」

店の中には一人は椅子に座り新聞を読んでいるパンチパーマがいた男性とそのそばにいる女性がいた。

「あ、あの・・・優花里さんはいますか?」

「あなたたちは・・・?」

「友達です」

「友達……。と、と友達いい!」

「お父さん落ち着いて!」

「だつてお前! 優花里の友達だぞ?!あの武藤君以外にも友達が!!」

「わかってますよ、いつも優花里がお世話になってます」

「お、お世話になっております!」

母親が丁寧にお辞儀し、父親は慌てて土下座する。その姿に4人は苦笑していた。すると秋山のお母さんがにつこりと笑い

「優花里、朝早くうちを出てまだ帰ってきてないんですよ、どうぞ二階へ」

と、そう言い秋山のお母さんはみほたち4人を秋山の部屋へ案内した。すると秋山の部屋の中はいろんな戦車グッズがたくさん置かれていてその部屋を初めて見た4人は興味深く見ていた。すると

「どうぞー、ゆっくりして頂戴」

秋山のお母さんは4人に麦茶を持ってきた。するとその隣で秋山のお父さんがハサミと櫛をもって

「あのく良かったら待ってる間に散髪しましょうか?」

「お父さんはいいから!」

「……はい」

と、散髪するか聞いたたら、お母さんにぴしやりと言われしよぼんとした感じで部屋を出る

「すいません……。優花里のお友達が来るなんて、この店のお得意さんの武藤君以外、初めてなもので。なんせいつも戦車、戦車で気の合う友達がなかなかできなかつたみたいで、戦車道の友達ができたつてすごく喜んでいたんですよ」

「そうなんですか……」

「じゃあ、ごゆっくり」

そういつてお母さんは部屋を出ていった。

「武藤……この床屋のお得意さんだったんだ……」  
「意外だな……」

「それにしても秋山さんの両親。いいご両親ですね」

「うん。そうだね……」

五十鈴さんがそういうなか、冷泉は秋山の机に置かれた家族写真を見て複雑な顔を顔をするのだった。すると突然部屋の窓が開いたと思つたらそこから

「あれ？皆さんどうしたんですか？」

と、そこから秋山が入って来た。しかもコンビニ店員の格好で、それを見た4人は驚き

「優花里さんこそ……」

「連絡がないので心配しましたよ……」

「すいません、電源を切つてましたので」

「つか！なんで玄関から入つて来ないのよ!!」

「この格好だと父が心配すると思つて」

「「ああ〜」」

となぜか、4人は納得したような声を出すと、部屋のドアが開き

「おう、秋山お待たせ……て、あれ？みほ？」

「よ、義弘君!？」

と、いきなり俺が入つてきてみほたちがビククリする。

「武藤!?!どうやって入つたの!?!」

「どうやって……普通に玄関から入つて秋山のご両親に秋山

はいるかって尋ねたら部屋で待っててツていわれて来たんだよ」

「いや、そう言うんじゃないよ……武藤もゆかりも今朝からどこ行ってたのよ?」

「ああ、そのことか……秋山」

「はい!そのことでぜひ見てもらいたいものがあるんです!」

そう言い秋山はUSBメモリーを取り出し、サンダースで撮った映像を見せる。因みにカメラマンはブリーフィンググループが始まるまで俺がやっていた。そして最初に映ったのはサンダース大付属戦車道隊長であるケイが俺と仲良く話している姿、そして次にケイと別れ、戦車格納庫の映像やサンダース大付属の校舎の中などを写した。因みにBGMは俺のリクエストでちょっとロックな感じの音楽だ。そして次に映し出されたのは午後のブリーフィンググループでの作戦会議であった。因みにBGMは秋山の好きな曲の一つ『リパブリック讃歌』となっている。そしてナオミが秋山の正体を見破り、俺が秋山の手を引いてブリーフィンググループから逃げ出したところで映像は終わった

「なんと言う無茶を……」

「でも頑張りました!!」

「でもいいの?こんな事して」

「試合前の偵察行動は承認されています」

秋山がそう言う。すると武部が

「そう言えば武藤、あんたサンダースの隊長と仲良かったみたいだけど、知り合いなの?」

「まあ、中学のころ試合とか、練習試合の申し込みとかでちょっとな」

「あ、そう言えば義弘君。試合の申し込みとかそう言うのお姉ちゃんに任されていたっけ」

「ああ、ケイとはその時に知り合った」

と、武藤がそう言う。秋山はビデオから取り出したUSBメモリーをみほに渡す。

「西住殿、オフラインレベルの仮編集ですが、参考になさって下さい」  
「ありがとう……、優花里さんのおかげでフラッグ車もわかったし、頑



張って戦術立ててみる!!」

みほはUSBメモリーを受け取りそう言う

「でも、ゆかりんよかった」

「怪我はないか?」

みんなが心配そうにそう言う

「……心配していただいて恐縮です。わざわざ家にまで来てもらって……」

「いいえ、おかげで秋山さんのお部屋も見れましたし」

「あの、部屋に来てくれたのはみなさんが初めてです、私ずっと戦車が友達だったんで……」

と、秋山がそう言う和高部はいつの間にか秋山のアルバムを見て

「本当だ、アルバムの中ほとんど戦車の写真」

「ん?どれどれ?」

俺は武部の見ているアルバムを見る。するとその写真には秋山には似合わないパンチパーマの髪型をした秋山が写っていた

「なんでパンチパーマ?」

「くせ毛が嫌だったのと、父がしてるのを見てかっこいい! と思って、中学からはパーマ禁止だったんですけど」

「いや、友達が出来なかったの戦車の所為じゃなくてこの髪型の所為じゃ……」

「え?」

「そうだよ。それに秋山はその髪型のほうが可愛いんだからさ」

「ふえ／＼!?」

俺がそう言うとき秋山の顔が赤くなり、それを見たみんながジト目で俺を見る。え!?俺なんか変な事言ったか?俺秋山を褒めただけだぜど…….すると冷泉が「ホンと咳をし

「ま、なんにせよ、一回戦を突破せねば」

「頑張りましょう!」

「一番頑張らないといけないのは麻子でしょ?」

「なんで?」

「明日から、朝練始まるよ」

「……………え？」

武部の言葉を聞いて冷泉は固まったのであった。ああ、そう言えば冷泉って朝が苦手なんだっけな……………

そしてその後、みんなはしばらく秋山の家で話をし、その後解散した。そして俺は、戦車倶楽部で少し用があったため今そこに向かっていった。すると携帯が鳴る。俺は携帯を取り出した。

「メールか……………相手は……………?!」

メールの差出人を見るとそこには『西住まほ』と書かれていた。俺はそのメールの内容を見ると

『今、大洗にいる。ちよつと顔を出せ』

と、書かれていた。相変わらず誤解を生むような内容を……………本当にメールうつの苦手だなまほさんは……………まほさんが大洗ここに？お忍びで来てるのか？だとすると何か大事なようがあった……………とにかく会ってみるか。とにかく会う場所はどこかの喫茶の方がいいだろう。寮だとみほに会う可能性はある。俺はまほさんにメールで会う場所を教える。そしてメールの送信が終わると俺はその喫茶に向かうのであった。

そして、俺は喫茶につくとまだまほさんは来ていなかった。すると店員がやってきて

「いらっしやいませ。お一人様でしょうか？」

「いや、あともう一人くるよ」

「そうですかではお二人様ですね。ではあそこのお席にどうぞ」

店員に案内され、俺は席に座る。そしてしばらく座っていると喫茶店のドアが開きクールビューティーさを感じる女性が入って来た。そして俺を見るとそこに近づく。そして

「久しぶりだな……………義弘」

と、俺に微笑むと、席に座る

「ええ……久しぶりです。まほさん」

「……もう、昔みたいにお姉ちゃんとは呼んでくれないのだな  
義弘……」

と、少し寂しそうな顔をした。確かに俺は幼い頃西住姉妹とは本当に家族のような関係だった。俺もまほさんを姉さんと呼んでいた。

「……ええ、さすがにこの状況じゃ……恥ずかしいので……」  
「そうか……」

そう言うつまほさんは、

「……で、義弘。みほは元気か？」

「え？ああ……元気だよ」

「そうか……」

「……なあ、まほさん。三年前、俺がいなくなったこと……」  
「別に怒ってはいない……あれは何か事情があったの？だからお前を責めるつもりはない。ただ……少しだけ失望した」  
「そうですか……」

そう言うお互いに黙ってしまう……何とかまほさんも俺もあまりしやべらないほうだから……すると

「義弘……一つ頼みがある」

「何？」

俺がそう訊くとまほさんは頭を下げ

「……みほのことを頼む……あの子を守ってくれ」

「え？」

「お前のごとだ。あの子の黒森峰のことエリカから聞いているのだから？」

「ああ……」

「みほをあそこまで追い詰めてしまったのは私のせいだ。あいつの判断は一切間違っていない……だが」

「西住流としてそして後継者として、表立ってみほを庇うようなことができなかった。そしてその後もできにくいと……？」

「ああ……恥ずかしことだが」

「そうか……わかった。まほさん。みほのことは任せてくれ。で

もまほさんもできる限りのことはお願いします」

「ああ、わかった……できる限りのことはする」

そう言うとなんは立ち上がる

「行くのか？」

「ええ、明日も朝練なんでね……久しぶりに話せて楽しかったです……まほ姉さん」

俺はそう言つて店を出た。そして喫茶店に残されたまほは注文したコーヒを一口飲み

「ああ……私も久しぶりに話せてよかった。……義弘……みほのことを……妹をよろしく頼むぞ」

そう言い、まほはまた一口コーヒを飲むのであった。

水着選びは女子のたしなみです！

戦車道全国大会第一回戦まであと一週間。俺たちは朝練やら休日を使つての練習やらにいそしんだ。冷泉も朝が苦手なのに頑張つて早起きしている。そして試合が近づくにつれ大洗女子戦車道部にもパンツァージャケットが作られた。紺色服に白のスカートのシンブルなデザインだ。俺はというと男物に作られた大洗のパンツァージャケットの上に黒森峰時代に着ていた黒狼のパンツァージャケットを羽織っている

そしてある時みんなが戦車格納庫に集まっていた。なぜなら急に角谷さんと呼ぶ出されたのだ。そして角谷さんはIV号の上に乗りに干し芋を頬張ると

「・・・というわけで第一回戦は南の島が会場だー!!」

「「おおー!!」」

と角谷会長の言葉にみんなが声をあげる。南の島か・・・こりゃあ、熱くなるな・・・特に戦車の中は空調なんてないからまさにオーブンの中へ入れられたのような暑さになる・・・すると隣で篠原が「義弘・・・後で水大量に買わないといけないわね。あと日焼け止めも。」

「そうだな・・・パシフィック杯の試合の二の舞いは御免だからな・・・」

「あの時は地獄だったからね・・・」

あれはマジでやばかった。初めての砂漠での暑い場所での試合で俺たちは水不足で大変な目にあつたことがあつた。しかも日差しが強いためにと水不足で熱中症になったり日焼けして試合の後みんな風呂になかなか入れないつというこまで起きたのだ。

俺がそう思っていると

「ねえ、せっかくビーチがあるんだから泳ごうよ」

「それはいいですね」

「賛成、賛成〜!!」

と、みんながそう言う中みほは困つたような顔をしておろおろとし

ていた。

「ん？どうしたんだよみほ？」

「よ、義弘君……わたし……水着持ってないんだ」

「そうなのか……それは困ったな」

俺がそう言うのとそれを聞いた秋山が

「それじゃあ、3日後大洗に寄港する予定ですし、アウトレットで水着を買いに行きませんか？いい店を知っているんですよ！」

そう、秋山が言うのとそれを聞いていたのか角谷さんが、

「おう〜いいねそれ！じゃあ、三日後にアウトレットで水着を買いに行くぞー!!」

『おおおー!!』

「お、おう……」

そんなこんなで角谷さんに発案で3日後、大洗に寄港した後、アウトレットで水着を買いに行くことになったのであったのだが……「……で、なんで俺も水着売り場になくちやなんのだ……」

そう……俺は今女性の水着売り場にいる。しかもお客がみんな女性だから、視線が痛い。まるで珍しい動物を見ているような目で俺を見る。夢なら冷めてほしい、そう思った。俺がなぜここにいるかというと、最初は大洗の街をぶらぶらしようかと思っていたのだが、そこで武部たちに捕まった。なんでかという……

「だってさくやっぱ、男の意見とか訊きたいじゃん？」

と、武部がそう言う。なるほど第三者の意見が欲しいってことか……

「いや、そんなこと言われてもさ、俺そういう服とか水着のセンス持ってないぞ？」

「いいから、いいから、あと荷物運ぶのに便利だし」

「本命はそっちかよ!？」

俺の呼んだ本当の理由はそれか……まあ、別にかまわないけどどっちみちアウトレットの中ぶらぶらしているだけだしな。ま、その後、俺たちは気を取り直して水着を探すことにしたのだった。(俺は荷物運びだけ)

「それにしてもいっぱいあるな」

「はい、武藤殿！この店にはありとあらゆる水着が売られているのです！例えば！ボンペイの壁画をイメージした最古のツーピースに、19世紀のスィムスーツ！お約束の縞水着！古今東西の映画俳優デザイナーズブランドや、グラビアアイドル用に至るまであるんですよ！」

『おっ!!』

と、秋山がいろんな水着を着てそう説明する。てか秋山着替えるの速いな…1秒もかかってないぞ。

「どうですか武藤殿？いろんな水着を着て説明しましたけど…変じゃありませんでしたか？」

と、秋山は何やらもじもじしながら俺に言う。

「いや、全然変じゃないよ。むしろ秋山らしくてとっても可愛かったよ」

「そ、そうでありますか／＼」

俺が不適の笑みでそう言うとき秋山は嬉しそうな顔をした。すると冷泉が一枚の水着を取り出し

「…ナニコレ？」

と、手に持っていたのは真っ赤な水着であったのだが、…なんだろむしろあれ紐にしか見えないのだが、そう言えば秋山さつき水着の説明中にグラビアアイドル用の水着もあるって言ってたが…それもそうかな？するとそれを見た武部が

「おっ！それは幻のモテ水着!!」

「えっ!!嘘！これが!!」

と、武部の言葉にみほは顔を真っ赤にしてそう言う

「違うでしょう」

「みほ…それ絶対に違うから。絶対に着るんじゃないぞ」

「き、着ないよ義弘君／＼!!」

俺と五十鈴さんがそう、みほや武部につっこむ中、武部は別の水着コーナーへと行き目をキラキラ輝かせてさせてそれを見る

「おおっ！これは女子の嗜みのフラワーね！こっちはガーリー!?やつ

ばたままないよね。やっぱこれでしょ！ゴス!?一度は着てみたい！  
そしてピースリー！これで私も大人の女！」

と、楽しそうにそう言うすると武部は俺たちに振り向き

「でもやっぱり、今年はパンツァーが来ると思うな！」

「パンツァー？」

パンツァーってあのパンツァーか？すると五十鈴さんが

「ああ、ヒョウ柄ですね」

「それはパンサー!!」

と、五十鈴さんの言葉に武部がつっこむ。ヒョウ柄水着か・・・  
エリカがよく着ていたっけ。すると秋山が

「そう言えば武藤殿の乗るパンター戦車は昔はパンサー戦車って呼ば  
れてました！」

「お、懐かしいなく。そう言えばヤークトパンターなんかはロンメル  
戦車って呼ばれてたよな？」

「そう言えばそうですね。ロンメル將軍は乗ったことのないのに変で  
すね?・・・で、武部殿。さっき言ってたパンツァーてそのこと  
ですか？」

「そうそれ戦車！」

「意味不明・・・・・・・・・・」

「いや、だから麻子・・・」

そう言い武部は試着室に入り、そしてカーテンを開けるとそこには  
水着姿の武部がいた

「大胆に転輪をあしらったコレとか！パレオにメッシュを使うって  
・・・・・・・・・・えっと、シウル、シウル・・・・・・・・・・えっと・・・何だっけ  
？」

「シウルツェンですね！外装式の補助装甲板です！あとこんなのもあ  
りますよー！」

と、秋山も負けずに水着に着替えるその姿は南国風のかっこいい水  
着であった。

「南国風でかわいいですわね」

「あれ？その水着って？」



「はい！アフリカ軍団仕様です！」

「そうそう！それ！あとこれも!!」

そう言い武部がカーテンを開けるとそこには可愛いピンク色の水着を着た冷泉であった。冷泉は少しだけだるそうな顔で

「なんで私まで・・・」

「お、それイギリスのデザートラッツのマークだな！」

「そう、そう言うのだよ。今年はそう言うのが絶対来るよ！」

「ね〜」

と、仲良くそうに言う秋山と武部それを見た俺たちは

「くるのかな？」

「来ないと思いますが・・・」

「学校指定の水着でいいのに・・・」

「まあ、戦車は置いといてデザイン的には可愛いと思うけど・・・」  
俺たちはそう苦笑しながらそう言うのを再び、水着探しをするのであった。

「本当にいろんな水着があるんだね・・・」

「そうだな・・・本当にいろんなもんがある。こんなに多くの水着見たの初めてだ」

と、俺とみほは一緒に水着探しをしていると

「もういいかい？」

と、武部が試着室の前でそう言うのと

「もういいですわ〜」

と、そう言うのと試着室のカーテンが開きそこから五十鈴さんが出てきた。しかも来ていたのは水色で背中全開のハイレグタイプの水着であった

「どうでしょうか？」

と、五十鈴さんがぐるりと背なかを向ける

「うわあ〜、可愛い可愛い可愛い〜ッ!!」

と、武部が可愛いを連呼する。

「・・・背中全開・・・」

「じゃあ、こんなのはどうですか？」

冷泉の言葉に五十鈴さんは再び加点を閉め3秒くらいにまた開けると今度は黒い水着しかもお腹には網のような布が巻いていたのを着ていた。

「……後方注意」

と、冷泉がそう言う。後方注意って何が？俺がそう思っていると

「そう言えば麻子、水着買わないの？」

「学校指定の水着があるからいい……」

「でもせっかく水着売り場に来たんだから一着ぐらい買いなよ。フリフリとか花柄とか？」

「フリフリ……フリフリって？」

武部の言葉に冷泉が首をかしげると秋山が

「こんなのでしょよ！」

と、試着室からエプロン風の水着姿を着た秋山が出てきた

「おくまさにフリフリ!!」

「フリフリだね」

「フリフリだね」

と、みんながそう言うなか冷泉が一着の水着を取り着替える

「……じゃあ、これでいい」

と、冷泉が着替えたのは学校の指定水着であった

「いや、冷泉。それは学校の水着だろ!？」

「麻子それ違う！話聞いてた？」

俺と武部がそう突っ込む中

「それだったもつとマニアックなのがいいんじゃないですか？この旧型スクール水着略して旧スクは何とも奥が深い一品なんです！」

と、そこに現れたのは何ともレトロな水スクを着た秋山だった。……なぜだろうか秋山の背後にいぬ耳をした旧スクの少女と眼帯をした女性が立っているのが見えるのだが気のせいかな？すると冷泉は

「……やっぱり学校指定の水着でいいのに……」

と、小声でそう言う武部が

「ねえ、麻子。武藤に可愛い水着とか見せたいとか思わないの？」

「なんでそこで武藤さんが出てくる沙織？」

「可愛い水着を着て武藤に見せればモテ度あがるよ」

「……………水着選び手伝ってくれ」

「モチのロンよ！。華！」

「はいですわ！」

そう言い三人は試着室の入りいろんな水着を試着するのであった。そして秋山はまた珍しい水着を見つけたのかどこかへ行ってしまった。残されたのはみほと俺だけとなった。

「さてと……………ほかの皆はどうしているかな……………みほ、一緒に行くか？」

「うん」

と、そう言い俺たちはその場をいったん後にし、ほかの皆がどんな水着を選んでいるのか見に行くことにしたのであった。

ウォーター・ウォーです！

公式戦の第一回戦が始まる四日前、俺たちはなぜか知らないが角谷さんの発案で水着を買いに行くことになった。そして現在、俺とみほはほかの皆がどんな水着を選んでいるか見て回っていた。すると

「赤ふん、赤ふん！歴史は赤ふん！やはり六文銭の赤ふんで！」

「いやいや、此処はアフリカ軍団仕様のヤシの木柄で」

「ローマ軍団は甲冑！そして赤マント!!」

「海援隊の紅白縞模様で」

「ん?」

その声を聞いて俺とみほはその声のする方へ行くところそこには晒姿に真つ赤なふんどしのような水着を着てかっこいいポーズを取った左衛門佐、そしてサマーベッドに寝ころんで黄色いヤシの木柄のブイネットを着たエルヴィン。そしてローマの騎士を思わせる水着を着るカエサル。そして紅白模様の水着を着て椅子に座っているおりよう。そしてさらに

「うくん。赤フンもいいがやっぱり真田紐も捨てがたい」

「此処はドイツが開発した、水に溶ける水着を」

と、真田紐の格好の水着で同じポーズをとる左衛門佐。つというよりあれ水着じゃねえだろ。それにエルヴィンが勧めるその水に溶ける水着ってなんであんなもんが売っているんだ？するとおりようが

「この家紋入り腹掛け風水着で決まりぜよ」

「「それだあつ!!」」

真黒い腹掛け風の水着を着てそう言うと、3人は納得した？かのよううに声をそろえて言う

「な、なんかすごいことになってる・・・」

「そ、そうだな・・・つ、次行ってみるか？」

「うん・・・」

そう言い俺とみほは他のところを見に行くことにしたのだ。そして向かった先にはバレー部の人たちがいた。大きなバレーボールを二つ胸の前に持つ釣り目がちの子に網に身体を巻きつかせている

金髪が特徴の佐々木あけびや車輪付きのボールカゴを被る赤いバナナが特徴な子。そして何より俺とみほが目に留まったのがバレーボールのキャラクターの着ぐるみを着た磯部さんがいた

「義弘君……何かすごいことになってるね」

「あ、ああ……あれで泳げるのかな磯部さん」

「というよりあれって水着なのかな？」

と俺たちが苦笑してそう言う。確かにみほの言う通りあれが水着っというにはおかしい。どちらかというところコスプレ衣装だな

「……次行ってみるか」

「うん」

そう言い俺たちはそこを後にし次の場所へと行ってみるとそこには一年生チームがいた。しかもその格好は先ほどの歴女チームとバレー部チーム同様少し変わっていた。サメの浮き輪だったり防毒マスクを被ったりチェンソーをイメージしたビート板や以下の被り物など様々なものを身に着けていた。まともに見えるのは澤くらいだろうか

「なんか怖いことになってる……」

「まあ、個性的でいいんじゃないか？」

俺とみほがそう話し次の場所に行く

「それにしてもみんないるんな水着を買ったりしているな」

「そうだね〜黒森峰じゃあなかなかそう言うのはなかったね」

「そう言えばそうだったな。みんな学校指定のドイツ製の水着をしていたしな……あ、でもエリカやまほさんはmy水着を持っていたっけ」

と、そんなことを話しているとそこへ……

「あ、武藤さん。西住隊長も」

「車長、隊長。どうも」

そこへ水着を大量に買い大きい袋を持った服部と小波が現れた

「ああ、小波に服部か……あれ？そう言えば篠原は一緒じゃ何のか？」

「ああ、篠原さんならあそこにいますよ」

と、そう言い服部が指を指す。俺とみほはそこを見ると……

「姐さん。この水着はいかがですか！」

「いいや！姐さんにはこの水着が絶対に似合います！」

「何言ってるのよ！姐さんにはこの南国風の水着が一番に決まってるじゃないの!!」

と、そこには水着の試着室の前に篠原がいてその周りには道子の仲間である不良少女軍団が篠原に水着を勧めていた。

「どうつすか！姐さん！」

「そうねくなかないわね」

と、楽しそうに水着を見ている篠原。それを見たみほが

「道子さん・・・楽しそうだね」

「そうだな・・・」

と、みほの言葉に俺は頷く。確かに篠原の顔は本当にうれしそうな顔をしていた。そしてしばらくして俺とみほは秋山たちのいるコーナーへと戻ると

「あ、みほ戻ったんだ！ねえねえみほ。こっちとこっちどっちが可愛いかな？」

と、武部が二着の水着を持ってきてそう言う五十鈴さんも二着水着を持ってきてそれと同時に秋山や冷泉もやってきて

「それより、コレとコレのどちらが似合うでしょうか？」

「SEALs仕様と英国SBSとフランス海軍コマンドとスペツナズ！何れを選びますか!？」

「金と銀じゃ何れが良い？」

「ええっ!?あ、あの・・・その」

「「「ねえ、どくれ?」」」

「あう」

極め付きには4人一斉に聞かれ言い詰められて困惑するみほ。

「おいお前ら・・・そんなに詰め寄るとみほが・・・」

俺がそう言おうとした瞬間

「どいつもコイツも弛んでる!!恥を知れ、恥を!!」

と、どこからか怒声が聞こえそこに顔を向けるとそこには河嶋さんがいた。だが・・・

「あ、あの・・・河嶋さん」

「どうした武藤？」

と河嶋さんが首をかしげるのだったが

「桃ちゃん、説得力無さすぎ……………」

白のビキニを着た柚子にそう言われていた。そう河嶋さんの今の格好は少しアダルト系な黒い水着に浮き輪を持った姿だ。たしかにその格好じゃ説得力がない。すると角谷さんが

「まあ、まあ、良いじゃないか。こんな時くらい楽しまなきゃね」

角谷さんがそう言い河嶋さんをなだめる。彼女も赤いビキニを着て干し芋を頬張っていた。すると角谷さんは大洗の生徒たちに顔を向けて

「皆、楽しんでる〜!？」

『オオーツ!!』

「もう一丁!」

『オオーツ!!』

と、角谷さんの号令でみほと俺を除いてみんなが腕をあげて声をあげるのであった。なんだろうな…この風景どつかで見たことが…：俺はみほの方を見ると

「お、おー……………」

と、みほが苦笑しながらみんなと一緒に腕をあげて声をあげるのであった。まあ、それはそれでいいか…：そう思い俺もみほたちとともに腕をあげて声をあげるのであった。

「今日は楽しかったね」

「あんなにいろいろな水着があるですね」

「たまには戦車以外もいいですね!」

「…学校指定の水着でいいのに」

「またまた、麻子だったらそう言う割には結構気合が入ってたじゃん。

しかも武藤の言葉が入った瞬間」

「武藤さんは……………関係ない」

と、4人はそう言いながら学園艦に向かい俺はというと・・・

「お、重い・・・」

「義弘君：大丈夫？手伝おうか？」

「だ、大丈夫だ・・・けど前が見えねえ」

みほが心配そうに言う。俺は四人の買った大量の水着の入った箱だとか袋だとかそう言うのをもって俺は今にも倒れそうな状態だった。てか、買いすぎだろう・・・俺がそう思うと

「あっ！・・・」

みほが何か思い出したかのように声をあげみんながみほを見る

「みほどうしたの？」

「わたし・・・水着買い忘れた・・・」

と、みほが気まずそうに言う。すると・・・

「大丈夫です！そうだと思って私が買っておきました！」

と、秋山がそう言う。え？いつの間にかあったのか秋山は？でもここで一つ問題があるそれは

「え？ゆかりんいつの間にみぽりん買ったの？でもサイズは？」

俺の疑問に武部が代わりに答えた。すると秋山が

「見ただけでサイズがわかります！サイズは・・・」

「あ、秋山ちよつと待て！」

俺がそう言うのだが既に遅し

「まずバスト82！」

「ふあっ!？」

「ウエスト56！」

「ちよっ!？」

「ヒップ84！」

「いやあ！」

と、秋山がみほのスリーサイズを言いみほは顔を赤くして胸や尻なんかを隠す。すると秋山はヒヒおやじのように笑う

「すごいです」

「身体測定・・・」

と、五十鈴さんや冷泉が感心たように言う。そして秋山はみほの水



着の入った袋を手渡す

「どうぞ！」

「あ……ありがとう」

そう言いみほがそう言う。するとみほは俺の方を見て

「……義弘君。今の聞いちやった？」

と、顔を赤くしてそう言うみほ

「な、なにが？てか今俺荷物抱えているのに集中していたから聞こえなかったぞ？」

「本当に？」

「ああ、本当だよ。黒狼の服に誓って」

「そう……」

俺がそう必死にそう言う。実は本当は聞こえていたのだがここはハイと答えないほうがいいだろう。自身の体ためにも。すると

「あら？みほ。義弘」

とそこに偶然篠原がやって来た。

「あ、篠原さん」

「おう、篠原。買い物楽しかった？」

「ええ、で、みほ。水着買ったのかしら？」

「うん」

と、みほがそう言うとき篠原はみほの胸をじくと見る

「みほ……あなた少し胸が大きくなった？前はバスト80だったけど？」

「ふえ／＼／!?」

篠原のいきなりの言葉にみほは赤くすると秋山が

「はい！今の西住殿のバストは82なんですよ！ねっ！武藤殿！」

「えっ!?」

「なっ／＼／!?」

あ、秋山ここは少し空気読んでくれ！俺はそう思った瞬間みほは俺の顔を真っ赤な顔で

「義弘君！」

「は、はい!?!」

俺はおどろいてそう言うど、みほは

「今の絶対に聞いちやったよね？」

「いや、俺は…」

「聞いちやったよね？」

と、みほはグイッと俺の襟をつかんでそう言う。今度ばかりは誤魔化せないそう思った俺は眼を背け

「すまない……ばつちり聞いちやったよ。……ごめん」

俺はそう申し訳なさそうに言う。するとみほは顔を真っ赤にして少し涙目になり右手を振り上げ

「義弘君のバアカアアアアー!!」

と、そう言い思いつきり顔をビンタされた。そしてその瞬間俺の意識は飛んでしまった。昔も今もみほのビンタは強烈に効くな……。俺はそう思うのであった。

「う……うくん」

しばらくして目が覚め気が付けばそこは自宅の寮であった。そして

「義弘君。目が覚めた？」

「みほか……ここは？」

「義弘君の部屋。義弘君気絶しちやったからみんなで運んだの」

「そうか……」

俺がそう言い体を起こすとみほが

「あ、あの……ごめんね。いきなりビンタして……」

と、下を向いて言うみほ。

「ああ、あれは偶然そこにいた俺が悪いよ。だからさっきのことは互いになかったことにしよう」

「……うん。そうだねそれがいいかもね」

そう言い俺とみほは互いに苦笑してそう言うのであった。確かにあれは俺が悪い。あそこは無理をしてでも誤魔化すべきだった。だ

けどあの剣幕で言われたらなく俺はそう内心苦笑していたのであった。

そしてその後、俺とみほは共に夕食を取りいつものボコのアニメを見て過ごすのであった……

一回戦始まりです！

水着の買い物から数日後、ついに戦車道全国大会が始まった。一回戦の試合会場は南に位置する狐島が会場だ。そんな中、試合会場はもはやお祭り騒ぎ、いろんな屋台とか来ていて、観客席を見るといろんな人たちが来ていた。中にはチアリーダとかの集団も来ている。

「うーん！いい天気だな。今日は戦車試合日和だぜ」

俺は背を伸ばして南国島の新鮮な空気を吸ってそう言う。今日の天気は快晴でしかも海からくる風がとて面白い。まさに戦車道日和だ。するとそこへ河嶋さんがやってきて

「整備終わったかー」

『はい!!』

と、河嶋さんがそう言いみんなが返事をする

「準備完了!」

「私たちも大丈夫です!」

「IV号も完了です!」

「パンターも準備いいぞ」

河嶋さんの言葉にみんながそう言う。因みになんだが大洗学園の戦車はあの練習試合後少し変わった。とそうとかもそうなんだが、戦車の車体か砲塔に動物のマークが描かれていたのだ。みほの乗るIV号がアンコウのマーク。38tが亀、八九式はアヒル、三突がカバ、そして一年生たちが乗るM3リーはウサギのマークが描かれていた。なんでも俺たちの乗るパンターの黒狼のマークがかっこいいからという理由のと、アルファベット名だと呼びにくいからという理由でみほが考えだしたらしい。

「よし!それでは試合開始まで待機!」

河嶋さんがそう指示すると、一年生の一人が何かを思い出したのか「あつ!砲弾忘れちゃった!」

「ちよつ、それ一番大切なヤツじゃん!」

「ゴメン」

と、そう言い無邪気に笑いあう。砲弾を忘れるなんて笑い事ではな

いと思うのだが…俺がそう思うと

「呑気なものね」

「それで良くノコノコと全国大会に出て来れたわね」

と、誰かの声が聞こえみんなが振り向くとそこにはサンダースの選手であるナオミとアリサがいた。

「あー！」

秋山は二人を見ると俺の後ろに隠れた。偵察での出来事を思い出したんだろう。だがあれは別に問題ない。あの偵察は事前に隊長であるケイの許可ももらっているし、あの偵察の後、偵察に来た時の抗議の電話はなかった。つまり秋山をどうこうするつもりはない。……ではなぜ彼女たちが来たのか？

「貴様ら、何しに来た！」

「試合前の交流を兼ねて食事でもどうかと思って」

河嶋さんは警戒した目でそう言うとなオミは不適の笑みを浮かべてそう言うするとその言葉を聞いた角谷さんはにやりと笑い

「お〜いいね〜」

と、そう言う。するとナオミは俺の方を見て

「伝説の戦車乗りである黒狼さんもいかがですか？」

「……ふ、お招きとあらば参上しないわけにはいかないな」

と、言うわけで俺たちはナオミの招待を受けて、その場を離れる。そして俺たちがサンダース陣営につくとそこには信じられないものがあった。それはいろんな屋台車がたくさんあってそこから食事をしたるするサンダースの生徒の姿があった。そしてそれを見たみほたちは啞然としていた。

「すごっ！」

「救護車にシャワー車、ヘアースロン車まで!!」

「本当にリッチな学校なんですね……」

と、秋山と五十鈴さんが感心したように声を漏らすと……

「ハイ、アンジー!!」

そこへ、ケイたちが大きく手を振って角谷さんに挨拶をする。てかアンジーってなに？

「角谷杏だから、アンジー?」

「なれなれしい奴だ」

へく角谷さんって杏って名前なんだ…初めて知ったな。てか、あの二人って話から聞いていると、どうやら知り合いだったんだな

「やあ、やあ、ケイ。お招きどうも」

「良いのよ別に。そんなことよりも、何でも好きなの食べていってね!OK?」

「オーケーオーケー………おケイ!だけにね!」

「アハハハ!ナイスジョーク!!」

と、どや顔で角谷さんがそう言うのとケイは腹を掲げて笑い出す。そんなに笑えるジョークかな?俺がそう思っただけで首をかしげているとケイは秋山と俺に気付く。

「あ、HEY!オットボール三等軍曹!ブラツキー!!」

そう言い俺たちの方へ近づいてくるケイ。それを見た武部たちは

「あ、見つかつちやっただ!」

「お、怒られるかな?」

と、秋山や武部が心配そうに言う

「やあ、やあ、ケイ。この前はありがとうな。学校案内してくれて」

「どういたしまして。私もこの前はあなたが来てくれて本当に楽しかったわ……で、オットボール。あの時は大丈夫だった?怪我とかかしていない?」

「え?ああ、大丈夫です」

「そう。それは良かったわ。またいつでも遊びに来てね。ウチは何時でもオープンだから!今度は友達と一緒に来てね歓迎するから♪」

「は、はい!」

と、ケイはウイソクをし秋山は嬉しそうに返事をする。するとケイは黒狼の黒いパンツァーを着た義弘の方を見ると

「まさか三年ぶりにその格好を見るなんてね義弘。いえ、黒狼。……」

そのパンツァージャケットってあの時のままなの?」

「ああ……3年たっても背は大きくならなかったからね……本当にみんな背が大きくなるのになんで俺だけ……」

「え〜いいじゃん。そのまま。ブラツキーはそのままでもキュートだよ。」

「アハハ・・・ありがとなケイ」

と、義弘とケイが話している中、みほと秋山それに五十鈴さんや武部などが複雑な表情を見せる。すると・・・

「まあ、背のことは別にいいわ。それよりもブラツキー。3年前はやられっぱなしだったけど今度こそあなたにリベンジするわよ。今日は正々堂々勝負ね」

「ああ、互いの道を汚さぬ戦いをしようケイ」

「ええ、そうね。あ、そろそろ行かなくちゃ。じゃあねブラツキー。試合で会おうね」

そう言いケイは戻っていった。それを見た武部たちは・・・

「良かった〜隊長はいい人そうで・・・」

「フレンドリーだな」

「まあ、それがケイだ・・・」

と、まあ、その後俺たちはサンダースにある屋台料理を楽しむのであった。一方その頃義弘の砲手である篠原も屋台料理を楽しんでいた。

「いろんな屋台があるわね・・・てか、このバーガーでかすぎる・・・スーパーサイズスミーカー？」

と、そう言いつつハンバーガーをかぶりつく篠原。すると・・・  
「あんたが篠原道子か？」

と、誰かの声が聞こえ、振り返るとそこにはナオミがいた。

「・・・そうだけど。あんたサンダースのエースガンナーのナオミか・・・雑誌で見たわ」

と、篠原がそう言うとなオミは不敵の笑みを浮かべて

「伝説の砲手に覚えてもらえるなんて光栄だ」  
「なんの話かしら？」

「とぼけないでくれ。3年前黒森峰不敗神話を作った黒狼こと高杉・・・いや、今は武藤だったけか？その武藤義弘を影で支え、百発百中のスナイパーにして飛んでくる砲弾を砲弾で迎撃する凄腕に





義弘と篠原がパンターの上に乗りそう話すそして試合開始の合図である花火が上がりだし

『試合、開始！』

と、アナウンスとともに両方の戦車が一気に前進するのであった。こうしてついに戦車道全国大会第一回戦の火蓋が切って落とされたのであった。

## 初戦の戦い、地獄のホットライン

試合開始の合図とともに両校の戦車は動き出した。そしてそれを観客席で見ている者たちがいた。普通観客席の後ろにある丘の上にジャーマングレーの制服を着た二人の少女が試合画面のモニターを見ていた。その二人とは黒森峰隊長でありみほの姉である西住まほと義弘とみほの親友であり現代黒森峰副隊長である逸見エリカであった。

「始まりましたね……………」

「ああ、そうだな……………」

エリカの言葉にまほは頷く

「どちらが勝つと思いますか?」

「わからない……………勝負とはいつどんな事が起きるかわからない。自分より数の多い相手が絶対に勝つとは限らない。それはお前自身がよく知っているはずだ」

「はい……………」

そう言い二人はモニターを再び見る。そこにはみほとそしてその隣にいるパンターのキューポラから体を乗り出している義弘の姿があった

「(みほ……………義弘……………)」

その様子をエリカは複雑そうなそして心配そうな目で見るのであった。そしてまほもモニターに映っている自分の妹の姿を見て無表情ながらも心配そうな顔で見るのであった。

一方、まほたちがいる丘とは別の所では

「始まりましたねダージリン様」

「ええ、そうねペコ」

と、ダージリンとペコが紅茶を飲んでモニター画面を見る

「さて……………義弘さん。みほさん……………どんな戦いをしてくれるのでしょうか……………」

と、ダージリンは紅茶を一口飲み試合を写すモニター画面を見るのであった。

とうとうこの時が来た。戦車道全国大会一回戦。相手はサンダース大付属のケイ率いるシャーマン軍団だ。シャーマンは第二次大戦の時で連合軍を支えた故障率の少ない信頼性の高い戦車で戦後でも改良され中東戦争まで戦い抜いたまさに名戦車の一つだ。いくら攻撃力の高い三突やパンターがいてもまともに真正面で戦えばまず勝てない。しかも相手は10輜。大してこちらは6輜。数や性能的バランスはサンダースの方が勝っている。

だが、勝負って言うのは数や戦車の性能で決まるものではない。勝敗の決め手は指揮官の能力もそうだがやはり戦車を操る技量と何よりみんなで連携するチームワークだ。一人だけ技術の高いものがないでもチームワークが取れてなければ絶対に試合には勝てないしそれどころかかえって大きなミスをしたり士気が下がったりするときがある。

まあ、とにかく勝負の勝敗は数や性能だけじゃないってことだ。

『説明した通り、相手のフラッグ車を戦闘不能にした方が勝ちです。サンダースの戦車は攻守共に私たちより上ですが落ち着いて戦いましょう！ 機能性を活かして常に動き続け敵を分散させてカバさんチームⅢ突またはオオカミさんチームのパンターの前に引きずり込んでください』

『はいっ!!』

と、みほが無線でそう言いみんなが元気よく返事をする。因みにオオカミさんチームって言うのは俺たち黒狼のことだ。てか、みほもだんだん昔のように凜々しい感じになって来たな・・・なんか久しぶりを見る。そして俺は黒狼の基ドイツ式軍帽を深くかぶり

「さて・・・敵さん。どう動くかな?」

「前進前進!ガンツガン行くよ!でもパンターの狙撃には気を付けてね」

一方その頃ケイ率いる10両のシャーマン軍団は荒野地帯を文字通りガンガン進んで敵の索敵をしていた。そして別の場所で前進する大洗女子も同じく相手の動きを探っている。するとみほが

「ウサギさんチームは、右方向の偵察をお願いします。アヒルさんチームは左方向を」

『了解しました!』

『此方も了解!』

みほが言うと、澤や磯部さんが返事をする

「我々あんこうとカバさんチームそしてオオカミさんチームはフラッグ車であるカメさんチームを守りながら前進します!」

「了解!」

「あのチーム名は何とかならなかったのか?」

そう言いみんなが返事をする中カメさんチーム言38tに乗っている河嶋さんはどこか不満げだった。どうやらみほの名付けたチーム名が気に入らないらしい。俺はというとみほらしくて可愛いと思う。すると角谷さんが

「良いじゃん、可愛いし」

とそう言ってフォローする。そして……

「それではみなさん。パンツァー・フォー!!」

みほの号令によりアヒルさんとウサギさんが左右に分かれ相手の斥候に行った。果たしてうまく相手を見つげられるか……

八九式が左方向を偵察している中、右方向の偵察に行っとうさぎさんチームの乗るM3は森の中を進んでいた

「ムシムシするう〜」

「暑い〜クーラー欲しいよ〜」

と、優季と坂口がそう言う。まあ二人がそう言うのもわかる。ここ会の会場の気温は真夏と同じ、しかも湿度が高いからまるでサウナに入っているような感覚だ。だが、もちろん戦車の中には空調なんて便利な代物はない。現代の戦車はどうだかは知らないがな。まあとにかく、真夏同様の暑い気候の上に鉄の装甲に覆われた戦車の中はサウ

ナ風呂と同じだ。そんな中、車長である澤はキューポラから顔を出してあたりを見渡す。すると……

「静かに！」

と、沙和がそう言うのとM3は止まり、双眼鏡で周囲を見回す。すると森の向こうから二両のシャーマンがいた。それを見た梓は無線で連絡する

「此方、B085S地点にて、シャーマン2輜を発見。これから誘き出します」

そう言い誘いだそうと動き出した瞬間、すぐ真横の砲弾が着弾する。梓が慌てて砲弾が飛んできた方を見るとそこには4両のシャーマンがこちらに迫って来た。それを見た澤はすぐに無線を取り

「シャーマン6輜に包囲されました！」

と、そう叫ぶと無線からみほがまず澤を落ち着かせ、そして指示を出す。

『ウサギさんチーム、南西から援軍を送ります！ アヒルさんチーム、オオカミさんチーム！ついてきてください！』

「はい。了解しました！桂里奈！」

「あいつ！」

梓の指示で、坂口がM3を急発進させその場を脱出しようとするのであった。

『シャーマン6輜に包囲されました!!』

『わかりました。ウサギさんチーム、南西から援軍を送ります！ ア

ヒルさんチーム、オオカミさんチームついてきてください！』

『はい！了解しました！桂里奈！』

『あいつ！』

そう言うのと梓からの無線が切れた。すると……

「ねえ、義弘。これちよつとおかしいと思わない？」

「篠原もそう思うか？」

「ええ、いくら何でも澤が見つけてすぐに相手の車輛4両来るのはいくらなんでも早すぎる。まさか相手の斥候が先に私たちを見つけていて待ち構えてたのかしら?」

「わからない。とにかくウサギさんチームが危ない。服部さん!」  
「はい。わかりました!」

俺の言葉に操縦手の服部さんが頷き俺とみほとアヒルさんチームはウサギさんチームのいるエリアへと向かうのであった。一方6両のシャーマンに追いかけられているウサギさんチームは必死に逃げていた。そして37mm砲塔を相手側に回転させた

「ちよつと!付いてこないでよー!」

「エツチ!」

「ストーカー!」

「これでも喰らえ!」

そう言い37ミリ砲弾を放つが砲弾はシャーマンに当たらず大きく離れた。まあ仮に当たったとしても37ミリ砲弾じゃあ、シャーマンの前面装甲は抜けない。そして先頭のシャーマンに乗っていたケイは

「アハハハッ!全然当たらないよー!」

と、両手を大きく振り笑いながらそう言う。すると6両のシャーマンがさつきのお返しとばかりに一斉砲撃をする。

一方、陸の上で見ていた。聖グロリアーナ女学園のダージリンとオレンジペコは

「さすがはサンダース、数にものを言わせた戦い方をしていますね」

と、ペコが真剣な顔でそう言うのと紅茶を飲んでいたダージリンが「ペコ。こんなジョークを知っている?アメリカ大統領が自慢したそうよ、我が国には何でもあるって、そうしたら、外国の記者が質問したんですって」

「……なんて質問したのですか?」

「ええ、その記者はこう言ったのよ。……『地獄のホットラインもですか?』ってね」

「は、はい?」

ペコが首をかしげる中ダージリンはまた紅茶を飲み、

「(さて、みほさんと義弘さんはサンダースの怪しい行動に気付くのか……見ものですね……いえ、絶対に気付くでしょうね。狼の嗅覚は鋭いですから……)」

そう言いダージリンは再び画面を見る。一方、黒森峰側もその様子を見ていた。

「……………」

「どうかしたんですか隊長?」

映像を見てまほは真剣ながらも少し険しい顔をしていた

「エリカ……サンダースの動き、どう見る?」

「え?サンダースの動きですか?そうですね……少し動きが変だと思えます。まるで大洗の動きを知っていたかのような……まさか隊長!」

「ああ、そのまさかだと思う。それにエリカ。あそここの方向を見てみる」

ツそう言いまほはある方向を指さす。逸見はまほが指さした方向を見る。するとそこには何かがあった。それを見た逸見は

「隊長……あれは……」

「ああ、おそらくあれがサンダースの動きのもとだろう……これを見破れなければ大洗に勝機はない……」

と、そう言いまほは画面に映る自分の妹であるみほを見守るのであった。そして逸見も画面に映る幼馴染二人の姿を見て

「(……みほ。義弘……頑張りなさい)」

そう心でつぶやき彼女もまほと同じくこの試合を見守るのであった。

ダージリンたちやまほや逸見が見守る中、みほや義弘たちの援軍は周囲を警戒しながらウサギさんチームのいる場へと急いで向かう。しかし、義弘たちが救援に向かう最中、森の奥から3面のシャーマンが現れ、義弘たちも追われる形となっていた。義弘は地図を見て

「北東から6輛、南南西から3輛……この森だけで10輛中9輛を投入か……ケイも大胆な手に出たな。このまま進むと包围されるな……」

と、俺は地図を見ながらそう呟く。すると服部さんが味方の通信を聞き目を丸くし、

「武藤さん！先ほどウサギさんチームから6輛から集中砲火を浴びてるとのことです」

「回避は？」

「包围されているから停車することも回避することもできないそうです」

「と、なるとますますやばいな……」

今の状況、フラッグ車と護衛である38tと三突を除き今の俺たちは敵に包围されつつある。このままだと本当にまずい。すると

『もうすぐうさぎさんチームと合流します！合流した後は南東に向かってください！』

「了解！服部さん。南東方向へ進路を変えてくれ！」

「了解！」

俺がそう指示すると服部さんは頷き進路を南東方向に変えた。そして俺たちは進路を変えて進む。そしてしばらくすると正面にうさぎさんチームのM3の姿が見える。そして向こうも俺たちを見つけると

「あつ、せんぱーいー！」

「はい！落ち着いて!!」

梓がみほたちにそう言うのみほは彼女を安心させるようにそう言う。そして俺たちはすぐさまこのエリアを脱出するべく左方向へと進路を変えた。すると、戦車を操縦していた服部が

「武藤さん！左方向に敵戦車二輛接近!!」

「なに?」

俺は服部さんの言葉を聞いてその方角を見ると向こう側から2輛のシャーマンが向かってきていた。

「回り込んできました！」



「どうする!?!」

「撃っちゃおう?」

と、梓たち一年生たちやバレー部チームの磯部さんたちがそう驚く  
中、俺は四方左右囲まれた状態に少し慌てた

「おい、おい……嘘だろ?サンダースの連中いつの間……  
いいや、考えるのはあとだ……今はこの状況を何とかするのが先決  
だな」

俺がそう呟くとみほから無線が入る

『このまま全力で進んでください! 敵戦車と混ざって!!』

と、みほがそう言う。つまり敵の砲弾を躲しつつ、敵中突破するっ  
という下手をすれば敵の集中砲火を受けるというリスクもあるが今  
の状況この方法しか突破口はない。

『まじですか!?!』

『了解です! リベロ並みのフットワークで……!!』

それを聞いた坂口は驚きの声をあげたがアヒルさんチーム操縦手  
の河西は覚悟を決めたのか冷静にそう言う。そして俺は

「服部!全速力!!あんこうを守る形で進め!」

「はい!」

「篠原!機銃掃射で、弾幕を張れ!」

「了解!パンターの7・92ミリ弾を喰らえ!!」

俺の言葉に篠原と服部は頷き、俺の乗るパンターはみほたちの乗る  
IV号の楯になる形で前が出る。パンターの前面装甲は中戦車ながら  
もティーガー重戦車と同じ100mm装甲。しかもT34と同じ傾斜  
装甲のため無印しかも初期型のシャーマンの75mm砲じゃあ、そう簡  
単に貫けない。そして篠原が砲塔についていた機銃を撃って相手の  
砲撃されないように弾幕を張る。そしてその機銃攻撃で相手が少し  
驚いたのをみほや俺は見逃さずその隙についてなんとか相手の包囲  
網を抜けることが出来た。

「何とか抜け出せたね。義弘」

「ああ……それにしてもサンダースの行動……やっぱりおか  
しい。あの動き斥候とかでの知らせで動いているにしては早すぎる。

まるで初めから俺たちの動きを知っていたみたいなき動きだったな……」

「そう言えば確かに変ね……どこかで盗み聞きでも……」

俺と篠原がそう言うのと二人の脳裏にあることが浮かぶ……

「おい、篠原まさかと思うが……」

「そのまさかと思うわね……」

そう言い俺はパンターのキューポラから顔をのぞかせ上空を見渡す。すると空の上に小型の気球が浮かんでいた。それを見た俺はキューポラから顔を戻し席に座る

「どうだった？」

「ああ、予想通りだ。通りでこっちの動きがわかるわけだよ……」

「ケイの指示かしら？」

「いや、あのフェアプレー精神の塊の彼女がこんな卑劣な指示を出すわけがない。恐らく誰かの独断の行動だろう」

「そう……確かににそうね……で、どうする？このことをケイに抗議する？」

「いや……まずこのことをみほに報告しよう。いいことを思いついた」

そう言い俺は無線機ではなく携帯電話を取りみほの携帯番号をかける。すると

『もしもし？』

「ああ、みほ。聞こえるか？」

『え？義弘君。どうかしたの？もしかしてサンダースの動きに気付いたの？』

「ああ、さつきまでは向こうの斥候が優秀だと思っていたが、あまりにも動きが速すぎるから変だと思ってな。それで上を見たら案の定無線傍受機が打ち上げているのに気が付いてな……で、そのことについてだが、ちよつと作戦会議できないか？」

「え？うん。いいけど』

と、その後、俺の乗るパンターとみほの乗るIV号はすぐそばにあった茂みの中に入りサンダースが打ち上げた傍受機についての対策会

議をするのであった。

反撃開始です！

「うくん……」

「どうだ秋山？」

「……確かに武藤殿の言う通り調べてみましたが戦車道ルールブックには通信傍受機を打ち上げちゃいけない、なんて事は書いていませんね」

と、戦車道ルールブックを読む秋山がそう言う。まあ、確かにルールブックでは盗聴器による盗聴は反則ではないが、スポーツマンシップとしてはいただけないな……。するとそれを聞いた武部たちは「そんなの酷い！いくらお金持ちだからって！」

「抗議しましょう！」

「武部先輩の言う通りです。こんなの正々堂々とはあ言えません！ここは抗議するべきです！」

「私も武部さんや服部さんに賛成です。盗聴器で盗み聞きなんて卑怯だと思えます！」

と、そう言い服部や小波も武部たちの言葉に同意する。

「まあ、良いじゃないかよ盗聴くらい。好きなだけ聞かせればいいさ」

「む、武藤殿!？」

「なっ?!武藤あんた何言ってるの!？」

「車長!？」

「武藤さん!？」

俺の言葉に武部たちは驚き目を丸くする。そんなことを無視し俺はこう言う

「まあ、落ち着いて聞けよ。向こうさんが盗聴するならそれを逆手に利用すればいい。」

「とうとうっ。」

「つまりだ。相手の使っている通信傍受機を利用する。対策内容はすでに考えているんだろ?みほ」

俺がそう言うときみほは頷く。そしてみほは武部の方へ顔を向け

「沙織さん。頼みがあるんだけど」

「なにみほ?」

「携帯にみんなのアドレス入っている?」

「……え?」

一方その頃、別の場所では一両のシャーマンがいた。そしてその車内ではそのM4a1の車長でありサンダースの副隊長の一人であるアリサが通信傍受のチャンネルの周波数を合わせながら聞き耳を立てていた。すると

「いいんですかアリサさん。こんなことをして?」

と、装填手の子がアリサに言う

「何よ。通信傍受のことはあんたも賛成していたじゃないの」

「でもやっぱりこれは卑怯じゃ……」

「残念だけどルールブックのどこにも無線傍受機を使ってはならないというルールはないわよ?」

「でも、このやり方はケイさんのフェアプレー精神に違反するんじゃない……もしばれたら……」

「反省会……」

と、砲手の子がぽつりとつぶやくと車内全員の顔が青くなり震える。するとアリサが

「大丈夫よ!バレなければいいのよバレなければ!幸い隊長にはまだバレていないんだし」

と、そう言い無線傍受のチャンネルをいじると、大洗女子の無線を拾ったのであった。

『全車、0985の道路を南進、ジャンクションまで移動して!敵はジャンクションを北上してくる筈なので、通り過ぎたところを左右から包囲!』

その無線内容を聞いてアリサはにやりと笑い

「ふふ……無線傍受されているのに気がづかないなんて……この試合やっぱり私たちの勝ちね」

と、余裕たつぷりの顔でそう言う無線を取り隊長者であるケイの



『見つかった！皆バラバラになって待避！38tは、C1024R地点に隠れてください！』

一方アリサは車内でまたも無線傍受をし、みほたちの無線内容を盗み聞きしていた。そしてその内容を聞くや否かにやりと笑い

「38t、敵のフラッグ車ね……貫ったわ！チャーリー、ドック、C1024R地点に急行！敵を見つけ次第攻撃！」

『了解！』

アリサの指示で二両のシャーマンがその場へと向かう。

「ふふ……これでこの試合は私たちの勝ちよ。」

「でもアリサさん。確か大洗にはあの黒狼がいたはずですよね？チャーリーやドッグたちがその地点に向かう最中に狙撃されるってツことないですか？ここはもっと用心したほうが……」

「そうですね。それに噂では黒狼って昔、数倍いる敵戦車を一人で倒したり、飛んでいる砲弾を砲で撃って迎撃したなんて話があるんですよ？」

と、砲手と装填手の子が心配そうに言うがアリサは鼻で笑い

「黒狼の強さなんて、所詮、戦場伝説による噂でしょ？隊長はあの男女を黒狼だと言っていたけど。そんなの信じられないわね」

と、そう言いアリサは二人の言葉に耳を傾けようとしなかった。彼女は無線傍受機の性能に頼りすぎていて自分の中にある勘を無視していた。本当は自分でも少しだけ不安を感じていたが無線傍受機をして相手の戦法が丸裸な以上もはやこの試合、勝ったも同然だこの時アリサは確信したからである。だがその確信が後に大きな痛手を受けることはこの時彼女は知らなかった。

一方、アリサからの指示を受けた二両のシャーマンはアリサに言われた地点へと辿り着き停車しあたりを見渡す

「こちらチャーリー。ドック敵戦車の姿は見えた？」

「いいえ、見えないわ。もしかしてアリサさん……場所を言い間違えた？」

と、二人の車長はそう言いながらあたりを見渡す。

「ねえ、これアリサさんやケイさんに報告したほうが……」

「そうね。その方が……ん？」

砲塔を回転させてあたりを見渡していたチャーリーが何かを見つめる

「どうしたのチャーリー？」

「いや、あの茂みに何かが光ったような……」

と、そう言い二人は目を凝らしてみるとその茂みの中にカバさんチームのⅢ号突撃砲の砲口がこちらに狙いを定めていたのだ。それを見たチャーリーは目を大きく見開き

「Jesus!？」

「撃てえええい!!」

と、大声でそう叫ぶのと同時にエルヴィンが発射命令を出し、そしてそれと同時に左右に潜んでいたM3やIV号が発砲しそのうちの一発がドッグチームのM4の装甲を貫き白旗が上がった。それを見たチャーリーが無線を取り

『こちら、チャーリー！ド、ドッグチームが敵の奇襲によって撃破されました！』

「ええっ!？」

「何!？」

「ホワイ!？」

その無線を聞いてケイたちは驚きの声をあげる。なぜ、大洗が奇襲作戦に成功したかという。実はあの無線伝作戦は欺瞞工作で、本当の指示は武部が携帯のメールで知らせていたのだ。まさに相手の作戦を利用した臨機応変の大作戦である。

「ドッグがやられた!?急いで撤退しろ!」

「はい!」

そう言いチャーリー号はすぐにその場から退避しようとしたがその瞬間ものすごい衝撃が彼女を襲いシャーマンは倒れ、白旗が上がる。その砲撃はIV号でもM3でもましては三突の砲撃ではなかった。チャーリー号の車長はキューポラを開けてその砲撃した戦車を見た。



その戦車はカーキ色のパンターで砲塔の側面には黒い狼の印があった。それを見た車長は……

「あれが……戦車道最強の戦車乗り黒狼か……」

と、そう言い悔しそうにその戦車を見るのであった。そしてその姿をスクリーンで見たまほたちは

「大洗がサンダースより先に2両撃破しましたね隊長」

「ああ、どうやらみほや義弘は気づいたようだな。それに義弘の狙撃も衰えていないみたいだな」

「そうですね……」

と、そう言い試合を眺めダーズリンたちは

「やりましたね」

「ええ、相手の作戦を利用した作戦……みほさん達らしいですね。それに武藤さんのあの狙撃もなかなかでしたわね」

と二人は紅茶を飲みながらそう言うのであった。

「さて、みほ。上手く言ったな。で、次の手はどうするんだ？この試合はフラッグ戦。敵のフラッグ車を潰さなきゃ勝てない。まあ探せばいい話だがどうする？」

そう、義弘の言う通りこの試合は相手のフラッグ車を倒したほうが勝利となる。だが大洗は試合が始まって以降相手のフラッグ車を見つけてはいなかった。そしてみほは頷き

「うん。義弘君。次の手は……」

と、みほは義弘に指示を出し

「了解。偵察し相手を攪乱するのなら俺ら黒狼の十八番だ。任せときな。その代わりそっちの方は頼むぞ」

『うん。お願いね』

と、そう言い義弘の乗るパンターはみほたちのチームから離れ単独でどこかへ行くのであった。そして義弘は篠原に

「篠原、聞いたな？」

「ええ、これは楽しくなりそうね義弘。」

と、篠原がそう言うとき義弘は軍帽を深くかぶり

「さて……ここからは Pay<sup>仕</sup> back<sup>返</sup> time<sup>し</sup>だな」

とそう言いパンターを走らせるのであった。

白熱戦です！

相手の無線傍受を逆手にとってサンダースの戦車を二両撃破した大洗チーム。そしてみほは義弘に何かを言おうと義弘の乗るパンターは単独へどこかへと向かうのであった。

「やりましたね西住殿！」

「まさか私たちが先に相手の戦車を撃破できるなんて」

と、秋山と五十鈴さんが興奮してそう言う。すると

「でもみほ。さつき武藤が言ってたようにこの試合では相手のフラッグ車を叩かないと勝ちなんですよ？」

「うん」

武部の言葉にみほは頷く。すると冷泉が操縦手のハッチから顔を出して

「で、西住さん。さつき武藤さんと何か話していたみたいだけど。次の作戦決まったのか？」

「そう言えばあの後武藤殿たちどこかへ行きましたね？それと何か関係があるんですか西住殿？」

冷泉や秋山の言葉にみほにそう言っていると、みほはまたも頷き

「うん。次は……」

一方こちらは竹林の中一両のM4シャーマンがいた。そしてその車内では

「くそ……いい気に乗るなよ」

と、アリサがいらだつた口調でそう言う。すると

「ねえ、アリサ。やっぱり無線傍受なんて止めなよ。ここはぼろが出る前に辞めてフェアプレーで戦った方が……」

と、砲手の子がそう言うが

「うるさいわね。ここまで来て止められるわけないでしょ？こうなったら意地でも奴らに一泡吹かせてやるわ」

そう言い彼女は無線傍受機のダイヤルを回し相手の声を聞く。それを見た仲間は深いため息をつき一人が

「これで私たちは反省会室ね」

と、ボソツとそう呟く。すると傍受機が相手の声を拾う。その声を聞いた瞬間アリサはじつと聞き耳を立てる

『全車両、128高地に集合してください。ファイアフライがいる限りこちらに勝ち目はありません。危険ではありますが、先に128高地に陣取って、上からファイアフライを一気に叩きます！』

みほの無線を聞くや否やアリサはにやりと笑ったかと思うと

「あーははは!!」

「!!?!」

とまるで悪党が笑っているような声で大笑いする。その声を聞いて車内にいる乗員は驚く。そんなことは気にせずアリサは

「とうとう捨て身の戦法に出たわね!!……でも丘に上がったらしい的になるだけよ……128高地に向かってください」

とアリサは無線でケイに報告する。するとそれを聞いたケイは

「アリサ。どういうこと?」

『敵の全車両がそこに集結する模様です』

「ちよつとそれ本当?アリサくどくしてわかつちやうわけえ?」

ケイはアリサを疑うようにそう言う。今まで勘だと言っていたアリサだが、あまりにも内容が的確過ぎるそのことにさすがのケイも疑うのであった。すると

「安心してください。私の情報は完璧です。」

自信満々にアリサはそう言う。そしてその言葉を聞いたケイは目を置きくみ開く。そして……

「……………OK!アリサ。あなたを信じてみるわ!」

そう言いケイは

「みんな。アリサの言葉聞いたわね!それじゃあその地点に向かって全車Go ahead!!」

『ラジャー』

ケイの言葉にシャーマンに乗っていた乗員は勢いよく返事をしそ

の地点へ向かうのであった。それを聞いたアリサはほっと安心して、そして

「隊長。私はどんな手を使ってでもあなたを勝たせます」

と、小声でそう呟くのであった。

一方、みほたちは……

「おそらくフラッグ車はここかここ。そしてその辺りに潜んでいると思います」

と、みほが地図を見ながらそう言う。そして双眼鏡であたりを見渡していた秋山が

「まだ視認できません」

と、みほにそう言うのと武部の携帯から着メロが鳴る。

「あ、メール」

「誰から？」

「武藤……オオカミさんチームからだ」

と、武部のははメールの内容を見て読む

「ええと『敵本隊を見ゆ。これより陽動攻撃を開始する』だった」

と、そう言う。それを聞いたみほは真剣な顔をするのであった。一方、義弘たちの乗るパンターは森の中を進む。すると操縦手の服部が「武藤さん。もうすぐ128高地近くにつきます」

「よし。服部さん。あそこの茂みに隠れてくれ。もうすぐお客が来ると思うから」

「了解」

そう言うのと服部さんはパンターを森の出口近くにある茂みに隠す。そして、しばらくすると無数のM4戦車がやって来た。それを見た小波が

「車長。敵本隊がやってきました。」

「ああ、先頭はケイか……フラッグ車は一緒じゃないとするとどこかに隠れているな？」

「で、どうするの?」

と篠原がそう言うのと

「ああ、今回の俺たちの任務は囷だ。敵の本隊をフラッグ車を探すみほたちから引き離す。まずは篠原。狙撃頼む」

「あいよ。任せて」

「それと服部さん。篠原が発砲した後すぐにここを離脱。それと携帯でみほに伝達。『敵本隊を見ゆ。これより陽動攻撃を開始する』とね」  
「わかりました」

そう言い、服部さんは携帯を取り出しメールをうつ。そして小波はパンターの砲身に砲弾を装填し、篠原が照準を一両のM4戦車に合わせる。そして……

「撃て」

義弘の言葉に篠原は引き金を引くのであった。

そして少し前、サンダースの本隊はアリサに言われた通りの場所についたのだが……

「………何も無いよ!!」

そうケイは叫ぶ。そうその地点には何もなくもぬけの殻であった。それを聞いたアリサは

「そ、そんなはずはありません!!」

と動揺した声でそう答える。すると、無線の奥から砲撃音が聞こえる、そして遠くから爆発音が聞こえる

『ベティー被弾し、撃破されました!!』

『ホワイ!? 気をつけて! 狙撃よ!!』

『いたわ! あそこにパンターがいるわ! 追いかけて!!……きゃあ!!』  
『どうしたの!?!』

『オスカー被弾。白旗はあがっていませんが履帯が切れて行動不能です!』

『気を付けて! 相手はあの黒狼よ!!』

『あ、逃げた!!』

『CQ!CQ!本隊、パンターと交戦!これより追撃する!!ナオミついてきて!!』

『イエス。ママ』

と、いきなり、無線の向こうで騒ぎ声が聞こえたかと思うと砲撃の音が鳴り響く。そして最後にケイやナオミの声が聞こえたかと思うと無線は切れるのであった。

「隊長?隊長!・・・いったいどうなっているのよ?それにあの地点に大洗の車両がないってまさか嵌められた?・・・それじゃあ大洗の戦車はどこに?」

と先ほどの無線で混乱しつつアリサはそう言い考え込む。すると急に履帯の音がし始める。アリサはその音を聞いてあたりをきよろきよろ見渡すとすぐ目の前にあった竹柵が倒れそこから八九式中戦車が現れる。

「・・・え?」

「・・・あ」

いきなりのことに二人は驚き固まる。そして二人はまるで時間が止まったかのように互いの顔を見て動かない。そしてしばらく静寂が続く風で笹が揺れる。すると、先ほどまで固まっていた磯部が八九式の砲塔をコンコンと叩き、そして・・・

「右に転換!急げえーっ!」

とそう言うとうと八九式は急発進し、それを見たアリサは、はっとした顔になりすぐに

「蹂躪してやりなさい!!砲塔回転急げ!!」

「あ、あの。本隊に報告は・・・」

「するまでもないわ!とにかく撃てえ!撃てええーっ!!」

と、自棄になったアリサがそう言い、まだ照準が定まってもなく撃つたため、砲弾は大きくそれ八九式の隣の竹林の当たる。そして磯部は無線を取り

「此方アヒルさんチーム!敵フラッグ車を0765地点にて発見しました!ですが此方も発見され、現在撤退中です!」

その無線を聞いたみほは驚いたような顔をし

「わかりました0765地点ですね。アヒルさんはできるだけ逃げ回って敵を引き付けてください。そして0615地点へ、全車前進！ 武部さん、携帯で各チームに連絡を！」

「分かった！」

みほの言葉に沙織は相手に無線傍受されないように無線ではなく携帯でみんなにメールを打つ。一方フラッグ車を見つけそしてアヒルさんチームは相手のフラッグ車をキルポイントである0615地点へと誘導する。そんな言を知らずにアリサたちはアヒルさんチームを発砲しながら追いかける。するとそこへ磯部さんが発煙筒を手にとるとそれを上にあげると得意のサーブを繰り出す。そして発煙筒はM4戦車の目の前で炸裂し、辺りが真っ白になる。それでも発砲するが煙幕のせいで八九式には当たらなかった。それを見たアリサはイラつき

「何をやっている相手はあの八九式軽戦車だぞ！」

「あ、あの：八九式は軽戦車じゃなくて中戦車では？」

「そんなことはどうでもいいわよ！早く撃ち倒しなさい！！」

「で、ですがアリサさん。煙幕のせいで視界が！」

「良いから撃て！」

そうアリサがそう言い、M4戦車は砲撃するが煙幕が邪魔で当たらず八九式の脇に着弾しその衝撃で八九式の車内は大きく揺れる。

「キャプテン！激しいスパイクの連続です！」

磯部に発煙筒を投げ渡しながら、あけびは言う「磯部は

「相手のスパイクを絶対に受けないで！逆リベロよ！」

「あのキャプテン……………意味が分かりません」

磯部の言葉にあけびは苦笑してそう言うのであった。一方、八九式を追いかけているM4戦車の車内では…………

「装填まだなの？早くしなさい！」

と、アリサがイラつきながら足踏みをし装填手の子にそう言うのと、装填手の子はしゃがんでいて



「すみません。砲弾が遠くて……………」

と、装填手の子がそう言う。そう砲弾は無線傍受機を取り付けたために砲塔内が狭くなり下の方へ置いてあるのだ

「砲弾を使わなくても機銃があるでしょ。それで撃ちなさい。何のためにもそれがあるのよ」

「でも、機銃で撃つなんてかつこ悪いじゃないですか!？」

「戦いにカツコ良いも悪いもあるか! 手段を選ばな!」

そうアリサが怒鳴ると砲手の子は渋々砲塔についている機銃を撃ち始めるのであった。しかし機銃弾は八九式の装甲は貫けず弾きされる。そんな中、八九式はキルゾーンである0615地点につく。それを○六一五地点に待機して双眼鏡でその様子を見たみほは

「八九式来ました突撃します! 但し、カメさんはウサギさんとカバさんで守ってください! それとオオカミさんチームは陽動を辞めて相手から離脱しこちらに合流してください」

と、そう言うときみほの乗るIV号は前進するのであった。

一方、八九式がアリサの乗るM4a1をキルゾーンへ誘導している中、義弘たちもケイの率いる本隊をみほのいるところから引き離すために囷として相手を引き付けていた。すると操縦手兼通信手である服部が

「武藤さん。たった今アンコウチームより相手のフラッグ車をキルゾーンへ引きずり出すことに成功した模様です。それと陽動作戦を中止してこちらに合流せよとのことですよ」

「ここらで潮時か……まあみほのいる地点からかなり離れたし任務は成功ということでもいいだろう。それじゃあ、俺たちもアンコウの所へ戻るぞ煙幕用意!」

「はー!」

と、そう言い篠原は何かのスイッチみたいなのを押す。するとパンターの車体の後ろから煙幕が出るのであった。そしてそれを見たケイたちは驚く。そして煙幕が晴れるとパンターの姿は消えていたのであった。

「消えた？」

「わお。ブラツキーたら煙幕を使つて消えるなんてまるで忍者みたいね。でも逃がさないわよー！」

と、そう言いケイは再び武藤を追いかけるように指示しようとする  
とナオミが無線で

『なあケイ。少しおかしいと思わないか？』

「え？何が？」

『高杉の動きだ。まるで私たちをどこかへ誘導しているような動きだった。それに他の大洗の車両の姿もない』

「そう言えばそうね。もしかしてわたしたちをどこかへ狙っているとか？」

『そうかもしれないが、それに最後に見た武藤の手信号を見たか？』

「手信号？ブラツキーそんなことをしていた？」

『ああ、煙幕に包まれる直前に手信号で『策士策に溺れる』とそう言つてたぞ』

「それって……」

ケイが不思議に首をかしげていると急にアリサから無線が入った。

『大洗学園、残り全車両こちらに向かつて来ます!!』

と、慌ただしい声が聞こえ、ケイは

「ちよつとちよつと、アリサ。さつきと話が違うじゃない、何で？」

『はい、お、おそらく…無線傍受を、逆手に取られたのかと』

アリサは恐る恐るそう言う……

「ばっかもーん!!」

と、某警察官の部長のように雷を落とすケイ。それを聞いたアリサはびくつと体を震わせ

「も、申し訳ございません……」

「アリサ。戦いはいつもフェアプレイでっていつも言っているでしょ

う!!」

ケイがそう叱る中無線では砲撃音が鳴り響く

「とにかく。さっさと逃げなさい! Hurry up!!」

『い、Yes, ma, am!!』

そう言いアリサの乗るM4a1はケイの指示で逃げるのであった。そしてケイは

「うくん。ブラツキーの手信号の意味そう意味だったのかくブラツキーに正々堂々と戦おうていたのにな。なんか悪いことしたわ……………よし!」

と、そう考えこみなにかを決断する。ケイにとっての戦車道は常に正々堂々と戦うのが彼女自身のルール。無線傍受をした上に残り全車両で相手と戦うのは自身の道に外れることだ。そして無線機を取り

「相手はブラツキーを含めて6輜。1輜は残って他4輜は私についてきてそれとナオミ。あなたの狙撃の腕が出番よ!」

「Yes, ma, am」

ケイの言葉にナオミは頷き、そしてケイを含めた5両はアリサや大洗のいるポイントへと向かうのであった

「(さて、……………これからが面白くなりそうね。ブラツキー)」

追いかけてっここです！

ケイたちがアリサの所に向かっていている最中、アリサたちの乗るM4 A1戦車はみほとたちの乗る大洗チーム本隊に追われていた。そして激しい砲撃音の中、その様子を観客席で見っていたまほとエリカは「どうやら状況が変わったな」

「はい。いろんな意味で予想外です。それに、義弘の陽動に攻撃の腕、昔のまんまです」

「ああ、義弘は隠密奇襲戦法が得意だったからな……」

とエリカとまほは無表情で試合を見ていた。

まほたちが試合を見る中、別の観客席では

「はい。まさかこんなことになるなんて。これはある意味、予想外の展開ですねダージリン様？」

「ええ、そうねペコ。ふふ……それにしてもまるで鬼ごっこね……でもこれが勝負の面白い所ね」

と、紅茶を飲み微笑むダージリン。そしてまた別の場所では

「アツハハハハハッ！新鮮で良いわ！こんな追いかけてっここは初めて見るわね！」

と、戦車道大会運営会場の広場で日本陸上自衛隊最新鋭戦車10式戦車のキューボラの上で胡座をかいて座る蝶野が、豪快に笑いながら言った。そして

「それにしても武藤君と篠原さん。腕は昔と変わらないわね。……」  
と、微笑んでその試合を見るのであった。

一方、大洗本隊に追われるサンダースフラッグ車であるM4a1の車内では……

「こ、このタフなシャーマンがやられる訳がないわ！」

と激しい砲撃音と揺れの中アリサがそう言い

「な、何せ！5万輛も造られたと言う大ベストセラーよ！丈夫で壊れにくいし、おまけに居住性も高い！馬鹿でも扱える程操縦が簡単で、馬鹿でも分かるマニュアル付きよ！そして戦後でも使い続けられてきたまさに名戦車なのよ!!」

と、完全にパニクってなぜだか自分の乗る戦車のプロフィールをしゃべり始める。確かにM4は戦後しばらく使われた戦車だが、今は試合とはなんも関係ない

「あ、あのアリサさん！お言葉ですがそれ自慢になっていません!!」

「うるさいわよ！ちよつとあなた！早く装填して!!」

「は、はい!」

と、砲手の子がそう突っ込むがアリサが怒鳴り返し、そして装填手の子に装填を急がせるように言う。そしてアリサはスコープで追いかけてくる大洗の戦車を睨み

「なんで私たちがあんなド素人集団に追いかけれなければならぬのよ！其所、右！私達の学校は、アンタ達のような連中とは格が違うのよ！撃てえ!!」

と、そう指示しM4から砲弾が放たれるがあっさりと躲かれてしまう。それを見たアリサは

「なんなのよ、あの戦車！的にすらならないじゃない！当たればイチコロなのに！修正、右に3度!!それと装填急いで!!」

と、砲手の子に指示し装填手の子は何やら落ち込みため息をつきながら砲弾を取る。

「ホントに何なのよあの子達は!?!こんな場所にノコノコやって来て、どうせ直ぐ廃校になる癖に！さっさと潰れちゃえば良いのよ！それに何なのよ！あの男女！あいつが黒狼って黒狼でもう過去の戦車道伝説に出てくる人間でしょ!?!過去の人間なら過去の人間らしく、復活しないで隠居生活を楽しみなさいよ!!」

と、まるで子供みたいに喚き散らすアリサに車内の乗員は深いため息をするのであった。そしてアリサの乗るシャーマンを追いかけるみほたちは、M4A1の砲塔のハッチから、アリサが自分達に向かって何かを叫んでいるのを見ていた。

「何か喚きながら逃げます?」

「う、うん……沙織さん。オオカミさんチームの方はどうですか?」

「うん。さつき静ちゃんからメール来たけど。相手の車両を1両撃破したって。それで相手を振り切って今こっちに向かっているそうだよ」  
「わかりました」

と、そう言いみほは無線を取り

「敵フラッグ車との距離、徐々に縮まっています!現在の距離は、約600メートルです!60秒後、順次発砲を許可します!前方に上り坂。迂回しながら目標に接近してください」

と、そうみんなに指示すると無線から返事が聞こえ、全車フラッグ車であるM4に狙いを定めるのであった。

そして、アリスの方は……

「なんでタカシはあの子が好きなの?どうして私の気持ちに、気づかないのよおーっ!!」

と、完全に精神崩壊を起こし、試合とは関係のないことを口走っていた。そして車内でも乗員たちは最早諦めムードとなっていた。すると、その時試合会場である野原に激しい砲撃音が鳴り響いた。それはアリスたちを追いかけている大洗の車両の砲撃音ではない。その音を聞いたみほは

「この音……もしかして」

「はい、ファイアフライの17ポンド砲の音です!」

秋山の言葉にみほは頷きキューポラから顔を出して、小高い丘の上で砲口から白煙を上げているファイアフライと、此方に向かってくる5輦のシャーマンの姿があった。

「なんかやばい音だったけど大丈夫なの?」

「大丈夫、距離は約5000メートル。ファイアフライの有効射程は3000メートル、まだ余裕があります!」

と、みんなにそう無線で言うが、サンダーズ1の狙撃手が到着した

ことにより大洗はこれから苦戦することになるのであった。そして味方が到着したことを知ったアリサは

「来たあああー！ーッ!!」

と、歓喜の声をあげそして今まで落ち込んでいた砲手や装填手の子たちとハイタッチをする。そして

「よおーし!!こうなったら百倍返しで反撃よ!!」

味方の到着によりアリサたちは元気を取り戻し大洗へ砲撃を始める。そして後ろではサンダース本隊も砲撃し挟まれた状態になっていた

「どうする?みぽりん!」

武部が声を上げるとみほは他のチームへと指示を飛ばした。

「ウサギさんとアヒルさんチームは、カメさんを守りながら後方の相手をお願いします!我々あんこうとカバさんでフラッグ車を狙います!」

その指示を受け、カメさんチームの38tを中心とし他の4両が守る輪形陣の形となる

「今度は逃げないから!」

「!」「うん!」「!」

M3車長の梓が言うと、他のメンバーも一斉に返事を返す。そして三突ことカバさんチームでは

「この戦いは、まるでアラスの戦いに似ている!」

「いやいや、甲州勝沼の戦いだろう」

「いや、天王寺の戦いで決まりだな」

「!」「それだあッ!!」

と歴史上有名な戦いをたとえ話をしている。そしてフラッグ車である38tことカメさんチームでは

「ここで負けるわけにはいかんだ!」

と、砲手の河嶋さんがそう言い発砲するが砲弾は大きくそれて着弾する

「モモちゃん・・・当たってないよ」

「うるさい!!」

小山さんが苦笑してそう突っ込むが河嶋さんはそう言う。そして角谷さんは

「いや〜壮絶な撃ち合いだね〜」

と、干し芋を頬張りながら呑気にそう言うのであった。

そして義弘たちはというと

「車長！サンダーズの本隊が味方本隊に合流した模様です！」

「まずいな……相手に進路をばれないように迂回しすぎたのが仇になったか。服部さん。本体とあと何分で着ける？」

「はい。今の速度だと10分くらいで着きます」

「全速力だとどのくらいだ？」

「はい。大体5分くらいかと。でもエンジンが……」

「かまわない。責任は俺が取るからエンジンぶっ壊れる覚悟で全速力で頼む！」

「了解しました！」

と、そう言い義弘の乗るパンターは全速力で大洗の皆のいる地点へと向かうのであった。

そして一方、試合勘席では

「大洗ピンチですね。黒狼がいてもきついかもしれません」

とペコが真剣そうにそう言うのとダージリンが

「ねえ、ペコ知っているかしら？サンドイッチはね、パンよりもキュウリの方が美味しいの」

「はい？それはどういう意味ですか？」

「挟まれている方が、良い味出すのよ。それにまだ彼女たちは終わっていないわ。彼女ならきつとこのピンチを乗り切ることが出来ますわ。それに大洗にはまだ狼が遠吠えの声をあげていませんし」

「え？それは……」

と、ダージリンの言葉にペコは首をかしげるのであった。



一方、大洗女子ではナオミの乗るファイアフライの狙撃によりフラッグ車の防衛に当たっていた八九式とM3リーが撃破されていた。そして、だんだんとサンダースの砲撃が激しくなり、大洗が全滅するのはもはや時間の問題となっていた。それを見たアリサは「ほくらやっぱりみなさい！あんたたちは蟻よ蟻!! あっさりと像に踏みつぶされるのが運命なのよ!!」

と、完全に調子づいてそう言うアリサ。そして大洗チームはこの状況の中あきらめムードとなっていて三突では

「まるで、弁慶の立ち往生だな……………」

「どんなに足掻いても、最早これまでか……………」

「蜂の巣に、されてボコボコ、さようなら」

「辞世の句を詠むな！」

と、そう言いすっかり織り込みそしてフラッグ車である38tでは「もう、ダメだ……………何もかもが終わりだ……………」

と、河嶋さんが顔を青くし絶望した表情でそう言う。激しい砲撃音と衝撃が大洗の士気をどんどん落としていく。そんな中、IV号の中にいる無意識のうちに震えていた左手を右手で握る。そして……………

「(どうすればこの状況を打開できるの……………どうすれば……………)」

みほがそう考えている中

「もらったー！」

と、ナオミの乗るファイアフライが38tに向かって17ポンド砲を発射した。そして砲弾はどんどん38tに迫ってくる

「しまっ!？」

それを見たみほは目を見開いた。これで38tが撃破され試合は終わった。その場にいたみんながそう思った時、ファイアフライの砲弾は38tに当たる前につんざくような音とともに爆発を起こした。そして38tは砲弾が当たることもなく無事に走るのだった。

「なっ!？」

「ホワイッ!？」

砲弾が空中爆発を起こしそれを見たケイはもちろん17ポンド砲

を発射したナオミも驚いていた。そしてみほたちも

「あの風を斬り裂くような砲撃音は………」

「はい！この音はパンターです!!」

と秋山がそう言った瞬間、通信が入ってきた。

『どうやら間に合ったみたいだな』

「義弘君！」

と、その声とともに義弘の乗るパンターが現れるのであった。

## 一撃必中です

みほたちは相手のフラッグ車であるアリサの乗るM4を見つけ追撃をしていたのだがそこへサンダーズ本隊がアリサたちと合流し、ナオミの乗るファイアフライの狙撃で次々と仲間の車両が撃破され、そして38tにもナオミの放つ17ポンド砲砲弾の餌食になりそうになった時その砲弾38tの手前で爆発しそしてそこから義弘の乗るパンターが現れるのであった。

「義君!」

みほが驚くと無線から

『——ザザ…ほ…ろザー……応答ザザツ…しろ』

ノイズがかかっているせいで声がよく聞こえない

「よ、義君?」

『は……ザザツみ……無事ザザー……ええいつ ガンツ!!……うん、やっぱりこの手に限るな』

何かを打ち付けたような音がした途端、義弘の声が明瞭になった。直後に篠原の声が聞こえた。

『ちよつと義弘。それ壊さないでよね。高いんだから』

『少しへこんだだけだ。 問題ない』

『いや、くつきり拳の痕がついているわよ』

篠原の話から察するに、義弘が通信機を叩いてノイズを解消させたらしい。

その光景を想像したみほは思わず吹き出しそうになった。

『それよりみほ、大丈夫か?』

「あ、うん…」

『そうか…それは良かった。…で、みほ。いや、隊長。指示がないけどどうしたんだ?』

「…」

『それに無線で話を聞いたが何みんな諦めたような声を出しているんだよ。まだ試合が終わったわけじゃないんだぞ?』

「で、でも…今の状況じゃ…」

と、みほがそう言うのと義弘は

『問題ねえよ。連中、走りながら撃っているだろ？現代の戦車ならともかく大戦時の戦車ならそんな簡単には当たらないよ』

「でも……」

『みほ。何弱気になっっているんだ。お前らしくもない。諦めちまったらそれで試合は終わりなんだぞ？』

「っ!？」

みほは義弘の声にはっとした表情になる。そして義弘は

『隊長はみほ、お前だ。俺らは黙ってお前の指示に従う。だからお前は自信をもってお前の戦い方をすればいい』

と、そう言い義弘は無線を切る。そしてみほは

「義弘君……そうだよ。諦めたらそれで終わりなんだよね……」

と、そう呟き、そして無線を取ると

「みなさん落ち着いてくださいー!」

と、みほが無線でそう言うのと先ほどまでうろたえていたカメさんカバさんの乗員は驚く、そしてみほは

「落ち着いて……攻撃を続けて下さい!敵も走りながら撃ってきますから、当たる確率は低いです!今はフラッグ車を叩く事だけに専念します!!今がチャンスなんです!当てさえすれば勝つんです、諦めたら……負けなんです!!」

と、みほがそうみんなに言うのとそれを聞いたみんなは

「諦めたら……」

「負け……」

みほの言葉にエルヴィンは帽子を深くかぶり小山さんは自信を取り戻したのかそう呟くのだが……

「いや、もうダメだよ柚子ちゃん!!」

「モモちゃん。大丈夫、大丈夫だから……」

と、河嶋さんはいまだに泣きわめき、小山さんと角谷さんは泣いている河嶋さんをなだめる。そしてIV号では……

「……………西住殿の、言う通りですね!」

「そうですね。確かに西住さんの言う通りです。諦めたら負けなんで

すね!」

と、秋山と五十鈴がそう言い

「そうだよね・・・諦めたら負けなんだよね・・・華!撃って撃って撃ちまくって!!下手な鉄砲数撃ちやあたるって!恋愛だってそうだもん!!」

と、武部が自信を持っていうが

「いいえ、一発でいいはずですよ」

「・・・え?」

と、五十鈴さんの冷静なつつこみに武部は首をかしげる。すると五十鈴さんが覗いていた砲の照準器に小高い丘が見える。それを見た五十鈴さんが

「冷泉さん。丘の上へ」

と冷泉にそう言い五十鈴さんは顔をみほに向け

「上から狙います」

五十鈴さんの言葉にみほは頷きそしてその丘を見て

「丘からの稜線射撃は危険だけど有利に立てる。賭けてみましょう」

「はい」

「じゃあ、行くぞ」

そう言い冷泉はIV号の速度を上げてほかの皆がフラッグ車を追いかける中、丘に登る。それを見たケイは無線機を取り

「上から来るわよアリサ」

と、その言葉にアリサは驚き、そしてケイは

「ナオミ。あなたはブラツキーをお願いします」

「・・・え?」

意外な言葉にナオミは少し驚く。いつものケイならIV号を仕留めるように指示すると思ったからだ。するとケイは

「敵のフラッグ車を追撃中にブラツキーの砲撃でフラッグ車を仕留められる可能性があるし、それにナオミ。あなたさつきからブラツキーのパンターと戦いたくてうずうずしているでしょ?」

「・・・」

そう、ナオミは表面には出さなかったが実はさつきから武藤や篠原

の乗るパンターと戦いたくてうずうずしていたのだ。かつて戦車道界最強と言われた『黒狼』そしてその『黒狼』の砲手である篠原道子の砲手としての腕は伝説的で黒森峰時代では日本一と言われていた。そんな凄腕砲手が目の前にいて一騎打ちしたくはないという感情はナオミにはなかった。むしろ戦いたいという感情が先ほどから高まっていたのだ。

「どうナオミ。IV号は私がやるからその間にブラッキーを引き留めてくれる?」

と、その言葉を聞いてナオミは嬉しそうにふつと笑い

「……ふつ、Yes, ma'am」

と、そう言いナオミは義弘のいるパンターに向かってファイアフライの17ポンド砲の照準を合わせる。そしてケイは他の車両に38tを追いかけるように指示した後、みほを追いかけるのであった。そして義弘はみほが乗るIV号が丘の上にあがるのを見る。

「なるほど……丘の上にあがって狙撃をするつもりか」

「車長、IV号の背後にシャーマンが追ってきています。追いますか?」

「ああ……(おかしい……さっきまでいたファイアフライの姿がない)……んっ!? 停車っ!!」

と、急に義弘は何かを感じ服部に停車を指示する。それを聞いた服部はパンターを急停車させた。するとパンターの一歩手前で砲弾がすり抜ける。義弘はその飛んできた方を見るとそこにはまるでみほたちの行く手を阻むようにファイアフライがいた。それを見た義弘はふつと笑い

「ここを通りたければ倒せてか……おもしれえ。……ファイアフライが次の弾を撃ってくるまでに勝負を決めるぞ! 服部、合図したら食事時の角度!」

「はい!」

「篠原! 少し動くが大丈夫か?」

「jawoh! 問題ないわ。どんな揺れでも一撃で仕留めるわ。小波! 徹甲芯弾装填!!」

「了解!」

そう言い、小波は徹甲芯弾を取り出し装填するのであった。そして篠原はまるで氷のような瞳で照準に捕らえたファイアフライを見て

「……正しい姿勢、正しい照準……そして」

と、そう言い指を引き金に引っ掛け

「月夜に霜の落ちる如く引き金を引く……」

と、そう言いながらゆつくりと引き金を引く。一方、その頃ナオミは

「ブラックウルフのパンターか……だがこのファイアフライのAPDSならどんな戦車でも抜ける。だが相手は伝説の戦車乗りブラックウルフ、二度目の砲撃は通用しない……一発勝負！」

と、そう言い引き金を引く。それと同時に双方の戦車から物凄い砲撃音が鳴り響き砲撃による黒煙と砂埃が蔓延するのであった。そして白旗が上がったのはナオミの乗るファイアフライでパンターは無傷であった。それを見たナオミは

「砲弾を撃った直後に車体を斜めにして私の砲弾を躲したのか……流石、伝説の黒狼。そして飛んでいる砲弾を命中させる篠原の腕……流石、最強の「rb：砲手」>ガンナー」強いな……」  
と、舌打ちをするがその顔はどこか満足そうな顔をしていたのであった。すると急にアナウンスが入る。

『大洗女子学園の勝利!!』

一方、みほはサンダースのフラッグ車を狙撃するため丘に上がっていた。すると急に背後から砲弾がみほの乗るIV号の約1メートル横あたりを通り抜けた。

「っ!？」

みほは驚き後ろを見るとそこには一両のシャーマンが追いかけているのが見えた。そしてその間みほたちの乗るIV号は丘の張譲へと辿り着こうとしていた。

「シャーマンが次の弾を撃ってくるまでの間が勝負です！」  
「はい」

と、みほの指示で五十鈴さんは頷き。そしてIV号は丘の頂上へたどり着く。IV号は砲塔を旋回させてフラッグ車に照準を合わせようとするが、砲塔旋回だけでは間に合わないため車体ごと旋回させる。そうしている間に四号の背後からケイの乗るシャーマンがやってくる  
「花を生ける時のように集中して……………」

そう呟きながら、華はスコープを覗いてフラッグ車へと狙いを定める。そして……………」

「隊長、砲弾の装填終わりました！」

「Okももらったわー！」

と、そう言いケイはIV号を見る。そして……………」

「発射」

そう言うのと同時に二両の戦車の砲手が引き金を引く。そして、IV号から放たれた砲弾が相手のフラッグ車であるaM4A1のエンジン部分に被弾し爆発する。そしてその直後にケイの乗るシャーマンの砲弾もIV号のエンジン部分に被弾し爆発する。そしてその後はまるで時間が止まったかのように静かになる。そして、その沈黙を破るかのようにアリサの乗るM4A1から白旗が飛び出したのだった。

『大洗女子学園の勝利!!』

と、大洗女子学園の勝利を告げるアナウンスが響き渡るのであった。そしてそのアナウンスが響き渡った後、観客席から歓声が響き渡るのであった。

「やったですね武藤さん」

「ああ、そうだな……………」

服部の言葉に義弘はそう返事した瞬間、彼は急に咳を出す  
「ん？大丈夫か武藤？」

「え？ああ……………」

「そう……………」

「……………」



その時篠原は見ていた。義弘が咳をした時、彼の左手が肺の部分を抑えていたのを……



しそして一致団結してやった結果だ。だから俺はお礼を言われることは一つもしてねえし、フラッグ車を撃破したのはみほ。お前たちだ。だからお前はいつも胸を張れよ」

「義弘君………ありがとう」

と、みほは顔を赤くし嬉しそうに微笑む。すると……

「へい！ブラツキー!!」

と、そこへケイさんが手を振ってやって来た。

「よお、ケイ」

と、俺も手を振るとケイはみほの方を見て

「ねえ、ブラツキー？この子が大洗の隊長さん？」

「ああ、こいつが大洗学園戦車道隊長の西住みほだ」

「どうも初めまして……」

と、みほは挨拶するとケイは目を丸くし

「みほ………ねえ、ブラツキー。もしかして昔、私に話していたみほって……」

「ああ、あのみほだよ」

「Howett!?!この子が!?!」

「えっと………あの?」

ケイが驚き、みほは何が何だかわからないという顔を見るとケイが「あなたの話は黒森峰時代のブラツキーからよく聞いたわよ！そっかゝあなたがブラツキーのフィア……」

「あわわ／＼／!」

「ケ、ケイさん!!」

と、ケイさんが何か言おうとしたとき俺とみほは慌ててケイの口をふさぎ

「ケイさん。それはしく!!それにもう昔の話なんで」

「そ、そうですよ！よ、義弘君とは友達ですから!!」

と、顔を真っ赤にしてそういう二人にケイさんは

「おっと、ソーリ。確かにあまり相手の過去のことを話すのはルール違反ね。……こほん。さて、みほ、ブラツキー。さっきの戦いのことなんだけど……」

と、そう言うときケイさんは二つと笑い

「エキサイティングッ!!」

「はわわっ!!」

「おろっ!!」

そう言いきなり抱き着き俺とみほは驚いて目を点にし驚く。

「こんな試合が出来るとは思わなかったわくくっ!!」

と、嬉しそうに声をあげ、さらに強く俺たちを抱きしめる。しばらく俺たちを抱きしめた後ケイさんは腕を離しみほの肩をポンポン叩く。するとさつきまで目を点にしていたみほは我に返りそして……

「あ、あの……」

「なに?」

「あ、あの……何で6輛残っていたのに5輛で来たんですか?」

「ああ、あれね一つは残り一両がブラツキーの砲撃で履帯が切れちゃったからそれを直していたからよ。でも、たとえ履帯がやられてなくても私は貴女達と同じ車両数の戦車だけ使っていたでしょうね」  
「え?ど、どうして……?」

みほがそう言うとき、ケイは微笑み、そして両腕を天高く上げて

「That's 戦車道!これは戦争じゃない。道を外れたら、戦車が泣くでしょう?」

と、そう言うときみほは嬉しそうな顔をし、そしてケイは少しばつそうな顔をし

「無線傍受で盗み聞きなんて卑怯な手を使って悪かったわね。ごめんね」

そう言いケイさんは頭を掻きながら俺たちに謝る。するとみほはい、いえ。もし全車両で来られたら、間違いなく負けてました」

そう言うときケイは手を差し出し

「でも勝ったのはあなた達よ」

「あ……ありがとうございます!!」

ケイが差し出した右手を、みほは両手で取って握手を交わす。そして手を離すと、ケイは俺のほうにも握手を求め、

「ブラツキー、今回も負けちゃったけど、次こそは必ずリベンジする

わ

「ああ、その時はまた返り討ちにするよ」

と、そう言い二人は笑いそして握手を交わす。

「あ、あのさ、ケイ」

「何ブラッキー？」

「通信傍受をした子のことなんだけどさ」

「アリサのこと？」

「ああ、できればあまりきつく叱らないでやってくれ。やり方は間違っていたけど、彼女は彼女なりにお前を勝たせたかったんだからさ」

と、そう言うときケイは

「まったく、ブラッキーは本当にお人好しね。まあ、そこがあなたのいい所なんだけどね。OKわかったわ」

いや、いや、人がいいってあなたほどじゃないと思うんだけど……俺がそう思っているとケイは二つと笑い

「えいつ♪」

「え？うわっ！」

と、いきなり引つ張られ義弘は態勢を崩すとケイは義弘の頬にキスをするのであった

「おろろ!？」

「なっ!？」

「「あー!!」」

そのことに俺は目を丸くし、その場にいたみほやアンコウチームの皆は顔を赤くする。え？何？何が起きたんだ？俺が混乱していると「じゃあねブラッキー♪また会いましょうね」

と、そう言いケイは仲間のもとへ帰るのであった。

「い、いったいなんだ。なあ、みほ？」

と俺がみほの方を向くと

「知らない」

と、なぜは頬を少し膨らましてプイツと顔を背けるのであった。あれ？なんか俺怒らせるようなことしたかな？

そして一方、ケイはしょげているアリサの肩に手を置き

「アリサ……今回はたっぷり反省会つといたいけどブラツキに免じて30分だけするからね」

と、そう言い先ほどまで青ざめていたアリサの顔は若干和らいだが、まだ顔を青ざめていた。そして隣にいたナオミは

「まあ、自業自得だアリサ……」

と呆れたように溜め息をつきながら彼女の頭をポンポンと励ますかのように叩くのであった。するとアリサはナオミを見て

「ナオミ……その手に持っているのは？」

「ああ、これか？サインだよ。篠原道子の」

「篠原って……あの黒狼の砲手の？」

「ああ、私の憧れの砲手だ」

「あんたあいつに負けて悔しくないの？」

「悔しいさ。上には上がいるって言うのを改めて思ったよ、だがその時はまた努力して彼女より強くなつてリベンジすればいいだけさ」

と、そう言いナオミはそのサインを大事そうに持ち

「(道子……そしてブラツキーまた会おう)」

そう呟くのであった。

その後の夕方、俺たちは学園艦へ帰っていくサンダーズのM4シャーマンを見ていた。夕日に輝く戦車・・・うんやっぱりロマンだな。秋山も俺と同じ思いなのか写真を取りながら幸せそうな顔をしていた。そして武部が

「さあて、此方も引き上げるよ！記念にパフエでも食べに行く？武藤のおごりで」

「行く」

「え!?俺が奢るの!?!」

「当たり前でしょ!ここは男を見せないと、それに武藤、さつきいい思いましたんだからパフエ奢るぐらい安いでしょ?」

「え?いい思いつて何が?」

「それは自分の心に聞きなさいよ」

と武部がそう言う。そしてその場にいたみんなもうんうんと頷く。先ほどから思うのだがケイさんと話した後、妙にみんな冷たいような・・・気のせいかな?うん気のせいだ。気のせいでありたい。

「・・・はあ、ま、いいか。財布のお金、足りるかな・・・」

と、俺は財布の中をチェックする。みほが

「大丈夫、義弘君?やっぱり私も一緒に払おうか?」

「い、いや、だ、大丈夫だ。質素にすれば何とか・・・」

と、そんな会話をしている時、突然猫の鳴き声が聞こえ始めた。それは冷泉の携帯の着信音だった。

「麻子電話が鳴っているよ?」

「うん・・・」

そう言い冷泉は携帯を取る

「誰からだ?」

「・・・知らない番号だな。誰だろう?」

と、そう言い冷泉は通話ボタンを押す。

「はい、もしもし……………えっ?……………あ、はい」

と、冷泉は誰かと話す。すると急に顔色を変えて動揺した表情を見せる。そして冷泉は電話を切ると武部が

「麻子、どうしたの？」

「いや……なんでもない」

と冷泉はそう言うがその手は震えそして携帯を落とす

「大丈夫なわけではないじゃない！」

と武部が心配そうな顔でそう言うと言冷泉は悲しい顔で

「……おばあが倒れて……病院に」

「「「!?」」」

その言葉にみんなが驚き

「麻子大丈夫!？」

「早く病院へ！」

「でもどうやって大洗に……」

「学園艦に寄港してもらうしか……」

「撤収まで時間が掛かりすぎます」

と、みんながそう言うと言冷泉が制服を脱ぎ始めた。それを見たアン

コウチームは必死に止める

「ちよつと麻子!?!何をしているの!?!」

「泳いでいく!!」

「バカ言うな冷泉!ここから大洗まで百キロ以上離れているんだぞ!

体力尽きて溺れ死ぬが席の山だ!!」

「でも、早くいかないとおばあが!」

と、俺の言葉に冷泉が涙目でそういう。すると……

「私達が乗ってきたヘリを使って」

と、後ろから声がし振り向くとそこにはまほさんやエリカがいた。

そしてまほさんはエリカの方へ顔を向け

「エリカ……」

「はい。ほら貴女。時間がないんでしょ?急いで!」

と、エリカがそう言うと言冷泉は頷きエリカは冷泉を連れてヘリポ―

トへ連れて行く。そしてヘリポ―トでは黒森峰が所有するフォック・

アハゲリスFa223 ドラツヘがありエリカが操縦席に乗っってい

た。エリカ、いつの間にもヘリの操縦及び免許を取ったんだ?

「エリカ操縦頼むぞ」



「はい隊長。ほら、あなたも早く乗りなさい！」

と、エリカがそう言うのと冷泉は二人に頭を下げて、ドラツへに乗る、すると……

「私も行く！」

と、幼馴染が心配なのか武部も付き添いとして乗り込む。そしてそれを見届けたまほさんは後ろを向きそしてそのまま無言で立ち去ろうとする。そしてちょうどみほとすれ違いそうになった時、

「お姉ちゃん……ありがとう」

と、そう言うのだったが、まほさんは無言でその場を離れる。だのみほの言葉を聞いた時まほさんは口元だけ少しだけ微笑んでいた。そしてまほさんが俺の所へ来た時、

「ありがとう。まほ姉……」

と、そう礼を言うともほさんは

「……これも戦車道だ」

と、そう言いその場を立ち去り、それと同時に冷泉や武部を乗せたドラツへは上昇し病院のある大洗へと向い、俺やみほたちはドラツへがみえなくなるまでその様子を見守るのであった。

## お見舞いです

サンダーズ戦から翌日、俺とみほたちは今とある大きな病院の中を歩いていた。目的は冷泉のおばあさんのお見舞いだ。

「えつと・・・冷泉さんのおばあさまの病室ってどこでしょう?」

と、きれいな花を持ち奇麗なワンピースを着た五十鈴さんがそう訊くと秋山が

「確か武部殿のメールでは1029号室と書いていましたが・・・」

と、ボーイッシュな服を着た秋山がそう言う1029号室って確か・・・

「ああ、あの部屋ならそこを曲がってエレベーターの乗って5階ぐらい上がったところにあるぞ」

「え?義弘君。なんでそんなこと知っているの?」

と、みほが不思議そうに俺を見る無論みほだけじゃない。秋山や五十鈴さんも意外そうな顔をしていた

「まあ、この病院には去年世話になったからな・・・」

と俺は去年のことを思い出してそう言う秋山が

「そう言えば武藤殿、去年1週間ぐらい学園休んでいましたけど、もしかしてその時に?」

「まあな」

「え!?大丈夫なの義弘君!どこか怪我をしたの!」

と、みほがすごい剣幕でそういう中、五十鈴さんも

「武藤さん。なぜ病院に?まさかどこかの波止場の銃撃戦に巻き込まれたとか?もしくは二股をして女性に刺されたとか?」

「いや、違うから。どこのヤクザ者とスクー○デイ○だ。」

五十鈴さんて、家元のお嬢様のせいなのか、たまに天然っていうかなんとというか・・・ありえない発想を言うな。たまに・・・

「じゃあ、なんで病院に?」

とみほがそう訊くと俺は両手を頭につけ

「去年の健康診断にちよつと引つ掛かった。それで検査のやり直しに一時、学校を休んで通院していた。それだけの話だ」

「…………え?」

俺の言葉が意外だったのか三人は目を丸くする。

「なんだよ?俺が重病だったらよかったのか?」

「い、いや別にそんなわけでは……………」

「義弘君。それで検査は?」

「ああ、無事に問題なくなつたよ」

「そう。よかつた……………」

と、みほは安心してそう言う。そんな話をする中、俺たちは冷泉のおばあさんの病室につく

「ここですね……………」

と、五十鈴さんがそう言いドアをノックしようとした瞬間

『もういいから帰りな!!』

「!?!?!」

と、ドアの向こうでもものすごい怒鳴り声が聞こえる。その言葉に俺はおろかみほたちもびっくりする

『いつまでも病人扱いするんじゃないよ!あたしの事はいいから学校行きな!遅刻なんてしたら許さないよ!!』

とまたドアの向こうから怒鳴り声が聞こえみんなうろたえる秋山に関して是完全にビビっている。そんな中、怒鳴り声はまだ続く

『なんだいその顔?人の話ちゃんと聞いてんのかい!全くお前はいつも返事も愛想もなさすぎなんだよ!!』

『そんなに怒鳴つてるとまた血圧上がるから…』

怒鳴り声が聞こえる中、今度は冷泉の声が聞こえた。どうやらエリカは無事に冷泉を送り届けてくれたんだな。後で礼を言わないと……………」

「あ、あの……………帰ります?」

いつまでもドアの前でたちつくししている秋山がそう提案する。どうやらあの怒鳴り声で完全に負けて入る勇気がないらしい。

「秋山……………それじゃあ見舞いに来た意味ないだろ?」

「武藤さんの言う通りですここは突撃です!」

と、五十鈴さんが拳をぎゅつと握りそう言う。

「五十鈴殿つて肝が据わっていますね……」

と秋山が感心してそう言うのと五十鈴さんはドアを開けてそれに続いて俺たちも入る

「失礼します」

「あ、華！みぽりんにゆかりん、そして武藤も入って入って」

と、そこには武部がいて俺たちを招く。そして冷泉のばあさんが

「なんだい？あんた達は？」

「一緒に戦車道をやっている友達」

「戦車道？あんたがかい？」

と、不思議そうな顔を見ると冷泉がそれに答える。そして麻子のばあさんは意外そうな疑うようなまなざしでそう訊くと冷泉は頷く。すると武部が

「わたしたち全国大会の一回戦に勝ったんだよ！」

「一回戦くらい勝てなくてどうするんだい」

そう自慢気に話すが冷泉のおばあさんは呆れたような顔でそういう。まあ、彼女の言葉には一理ある。そんな中冷泉のおばあさんは「で、戦車さんたちが……ん？あんた、去年もこの病院にいたね。なんだい。また体を悪くしたのかい？」

俺を見て冷泉のおばあさんがそう言う。そう言えば去年、少しの間入院していた時、よくこの病院でもものすごく元気なおばあさんと同室だったような気がしたんだが、まさかあの人が冷泉のおばあさんだったとは……でも言われてみれば目が冷泉にそっくりだ。

「いや、この通り健康そのものだよ」

と、そう言うのと冷泉のおばあさんがジーと俺を見る

「あ、あの……俺の顔に何かついてますか？」

「……似ている」

「え？」

「いや、なんでもない。ただ以前に比べてやつれたように見えたんだが気のせいかね？……で、戦車さんたちがどうしたんだい？」

「試合の後、おばあが倒れたって連絡が、それで心配になってお見舞いに……」

「あたしじゃなくてあんたを心配してくれたんだろ!!」

「…わかってるよ」

と、おばあさんの怒鳴り声に冷泉はたじたじになりそう言う。あのおばあさん。怒ったロスマン先生並みに怖いな……

「だつたらちゃんとお礼言いな」

と、おばあさんの言葉に冷泉は恥ずかしいのか少し顔を赤く染め

「わざわざ…ありがとう」

「少しは愛想よく言いな!!」

「…ありがとう」

「さつきと同じだよ!!」

「だから、また怒鳴ったら血圧あがるって……」

と、冷泉が心配顔でそういうとおばあさんがまた反論をする。まあ、おばあさんも本気で怒っているわけじゃないのはわかる。すると五十鈴さんが

「あの？花瓶ありますか？」

「ここにはないけどナスセンターにならあるかもよ？」

と、そう言い武部と五十鈴さんは部屋を出る。すると冷泉のおばあさんが『はあ〜』とため息をつき

「それよりもあんた達もこんな所で油売ってないで戦車に油を注したらどうだい?」

「え?」

意外な言葉にみほは首をかしげると、おばあさんは冷泉の方へ向き「お前もさつきと帰りな、どうせ皆さんの足引つ張ってるだけだろうけどさ」

「そんな…、麻子さん、試合の時いつも冷静で助かってます」

「それに戦車の操縦がとても上手で、憧れてます!!」

おばあさんの言葉にみほや秋山がフオローするがおばあさんの眉が少しぴくツとなり

「戦車の操縦が上手いだけじゃ、おまんま食べらんないだろう?」

と、何やら意味を含めた言葉でそういう。なんだろう、このおばあさん戦車の操縦のことを良く知っているような……しばらくし

て武部たちが戻ってきて花瓶にきれいな花を添え終えると

「……………じゃあおばあ、また来るよ」

冷泉はおばさんにそう言うのと部屋を出る。そしてそれに続きみほたちも出ようとすると

「…あんな愛想のない子だけどね、よろしく」

と、静かにそう呟く冷泉のおばあさん。なんだかんだでやつぱり孫である冷泉のことが大好きなんだな。その言葉にみほと俺は

「はいー」

「ああ、任しておけ」

笑顔で返事をし、俺とみほは部屋を出るのであった。そして病院を出た後、街の中を歩いていると冷泉は急にうとうとし始める。今にも倒れそうだ。

「ちよっ!? 麻子大丈夫!?!」

「おい、大丈夫か冷泉?」

俺と武部がそう訊くと冷泉は……………

「すまない……………武藤、沙織……………悪いが……………もう、限……………界……………だ」

と、そう言い目をつむると冷泉は急に倒れる。俺は間一髪のところ  
で彼女をキャッチする

「冷泉さん!?!」

「麻子さん!?!」

「冷泉殿!?!」

いきなりのことにみほたちは慌てるが俺は冷泉を見ると

「すう……………すう……………」

「……………寝てる」

そう、冷泉は可愛い寝息を立てて眠っていた。どうやらおばあさんが無事で安心したのだろう。だがここで眠ってもらっては困る。か  
といってここに置き去りにするわけにもいかないし

「仕方がないな……………」

と、俺は冷泉を背中に担ぐ。すると武部が

「ごめんね武藤」

「いや、いいさ。これくらい」

と、そう言うのと俺たちは大洗港へ向かう駅まで歩くのであった。

一方、その頃病室にただ一人残った冷泉のおばあさんは机から何かの写真を取り出す。その写真には少し若い自分とそして冷泉に似た大洗の学生服を着た少女が写っていた

「……まさかあんたの親友である高杉翔子のせがれと西住しほの娘がうちの麻子と戦車道をしているなんてこれも何かの縁かしらね……そうだろ。朝子？」

そう独り言を言うのであった。

## お見舞いの後の夜です

冷泉のおばあさんのお見舞いが終わった後、俺たちは電車に乗って連絡船がいる大洗港へ向かっていた。空は日が落ちオレンジ色に染まる。そんな中、冷泉は武部の膝の上でまるで子猫のように寝ていた。

「麻子さんのおばあさん思っていたより元気でよかったね」

「ええ」

「そうだな」

俺も一年ぶりとはいえあのおばあさんが元気でほっとしていた。すると秋山が

「なんか、冷泉殿が単位が欲しい、落第できないって言う気持ちわかった気がしました」

「おばあ様を安心させたんですね」

「うん。卒業して早くそばにいてあげたいみたい」

「家族思いだな冷泉は・・・」

俺がそう言うのと武部は頷いて膝の上で寝ている冷泉の頭をそっと撫でる。

「実は麻子、昨日からあまり寝てないんだ、お婆ちゃん、もう何度も倒れてて」

「おばあさまがご無事で安心したのかもしれないね」

五十鈴さんの言葉に俺は冷泉を見る。冷泉の顔は安心しきったかのように清々しい寝顔であった。そんな顔を見るとこつちも安らかな気持ちになる。

「でも、昨日は凄く動揺してましたね、あんな冷泉殿を見たのは初めてです・・・」

「たった一人の家族だから」

「・・・え？(´▽`)両親は」

そう言えば去年もそして今日も冷泉のおばあさんの見舞いに来たのは冷泉以外誰もいなかった。すると武部は少し暗い顔をし

「麻子が小学生の時、事故で・・・」



「そうだったんですか……」

俺は武部の言葉に無言で驚く。因みになんだが俺が冷泉の両親について驚く中、みほはじつと俺のほうを見ていた。

そして日が落ち暗くなった時、電車は大洗駅につき、現在俺たちは学園艦に向かう連絡船に乗っていた。そしてさすがに疲れたのか秋山や五十鈴たちはベンチの上で冷泉と寝ていた。そして俺は星を眺めていると

「義弘君？」

「ん？ああ、みほか。どうかしたのか？」

「うん。ちよつと水平線を見ようかなって、義弘君は？」

「俺か？俺は星空を見ていたのさ。こんなきれいな星、都会や陸じゃなかなか見られないからな」

「うん。そうだねまるでプラネタリウムみたいだね……」

と、そう言いみほは俺の隣につく。

「ねえ、義弘君。覚えている？」

「ん？何をだ？」

「よく熊本の実家で逸見さんとよく星を眺めていたのを」

「ああ、そう言えばそんなときもあったな。三人一緒にテントを張って星を眺めて、そう言えばみほ、こぐま座を見つけた時『ボコ座』って言うってはいやいでいたよな？」

「うっ……だって、本当にボコに見えたんだもん」

と、みほは恥ずかしそうに顔を赤くしそう言う。すると

「けほ……けほ……」

「義弘君大丈夫？」

急に咳が出る俺にみほは心配そうに訊くと俺は少し笑みを見せ

「大丈夫だよ。ちよつと咽ただけだから」

「でも、義弘君、顔色が少し悪いよ？やっぱりどこか悪いんじゃない？」

「だから大丈夫だって、少し疲れただけだから……さて、俺は自販機でソーダを買ってくるけど。みほは何かいるか？」

「え？わたし？私は……私はいいや」

「そうか。わかった」

と、そう言い俺は自販機に向かう。そして俺は財布から小銭を出し、ソーダを買う。そして俺はみほのいる場へ戻ろうとしたが、そこには武部がいて、みほと何か話していた。これは会話に入らないほうがよさそうだな。俺はそう思い、船の船尾辺りに行く。そしてそこから見た光景は星空とともに明るく光る本土の街の明かりであった。まるで地上でも星が輝いているようで奇麗だった。俺はその光景を見ながらソーダを飲む。すると……

「そんなところで何をしているんだ武藤さん」

と、声が思振り向くとそこには冷泉がいた

「ああ、冷泉、起きてたのか。寝てなくていいのか？」

「十分寝たから大丈夫だ。で、何をしているんだ武藤さん？」

「ん？ああ、最後に本土を見ておこうと思っただけこの後いつ入港するかわからないしな」

「そうか……じゃあ、私も最後に見ておこう」

と、そう言い冷泉は俺の隣につき一緒に街を見る。すると冷泉が「今日は……ありがとう。おばあの見舞いに来てくれて」

「礼なら、俺にじゃなくてみほたちやお前をここまで送ってくれたエリカに言ってくれ。俺は何もしていない」

「謙虚なんだな、武藤さんは……」

「そうじゃねえよ。事実を言ったまでだ」

と、そう言い俺はソーダを飲む。すると冷泉が俺の飲むソーダを物欲しそうに見る。俺はその視線に気づき俺はもう一本のソーダを出す。基本俺は缶ジュースを買う時は二本買う。

「ほら、これやるよ」

「いいのか？」

「ああ、こういう夜景にはソーダを飲むのが一番だからな、ほら」  
「すまない」

俺がそう言いソーダを出すと冷泉はソーダを受け取りふたを開けて俺と一緒に飲む。すると

「武藤さんの言う通り、きれいな景色を見ながら飲むソーダは格別だ

な」

「だろ？」

そう言い俺と冷泉はソーダを飲む。すると冷泉が

「武藤さん、武藤さんの両親は今どうしている？」

「ん？なんだよいきなり」

「武藤さん、一人で大洗こいに来ただろ？親が心配しているんじゃないのか？」

と、そう心配そうな顔でそう言う俺は無言になる

「……………武藤さん？」

「……………死んじゃったよ」

「……………え？」

と、その言葉に冷泉は目を丸くする

「俺が幼い頃、病気や事故でな……………しばらくは祖父と一緒に暮らしていたんだがな、その祖父も13の時にな……………今思えば、親孝行とかができなかったのが唯一の心残りだな……………」

「それから武藤さんは一人でくらしていたのか？」

「いや、高校に入るまでは、母親の師匠って言うか、まあ、知り合いに引き取られたよ。今は別々に暮らしているがな」

俺は母と父の顔を知らない。写真では見たことがあるが直接話したことは一度もない。祖父によればとても心の優しい人物だったと聞いた。もし生きていれば、俺の人生は変わっていたのだろうか……もし生きていたら俺は二人に目一杯親孝行していただろうな。それができないのが俺の唯一の後悔であった……そんなことを考えていた。すると冷泉は

「そうか……………」

そう言う冷泉は何も言わなくなった。そして俺たちは学園艦につくまで黙ってソーダを飲むのであった。

「すっかり暗くなっちゃったな」

「うん。そうだね」

と、学園艦についた後、みんな各自家に帰り、そして俺とみほも同じく寮へと戻っていた

「……………」

「どうしたんだみほ？」

「うん。みんないろいろあるんだなって……………」

と、何やら深く考えてそう言う。恐らく冷泉のことだろう。俺はみほの言葉に頷き

「そうだな……………みんないろんな人生を送っているんだな」

と、そう言い俺は空を見上げそう言うのであった。その後、俺は、みほと別れ自分の部屋に戻りそしてベットに転がる。そして俺はそのまま目を閉じて眠りにつくのであった

次はアンツイオです！

冷泉のおばあさんのお見舞いから翌日、俺はいつものように目を覚まし、朝食を食べた後、制服に着替えて、部屋を出ると隣の部屋のドアが開く。そしてその部屋から幼馴染であるみほが出てきた。そしてみほは俺の顔を見て

「あ、義弘君。おはようー！」

と、にっこり笑い俺に挨拶をする

「ああ、みほ。おはよう」

俺はみほにそう言い俺とみほは一緒に学校へと向かう。するとみほの顔が少し暗い。何かあったのか？

「みほ？」

「え？何義弘君？」

「どうしたんだ？暗い顔をして？どこか具合でも悪いのか？」

俺が心配してそう言うと、みほは

「ううん。なんでもないよ」

「そうか・・・それならよかった・・・」

俺がそう言った瞬間

「ミポリーン。武藤」

「ん？」

後ろから聞きなれた声だし、俺とみほは後ろを振り向くと

「おははくよ」

「沙織さん!？」

と、そこへ武部がやって来たのだが、なぜかいびきをかいて寝ている冷泉を背負って辛そうな顔をしていた。

「沙織さん大丈夫!？」

「な、なんとか・・・」

そう言うものの武部は今にも倒れそうになる。それを見た俺は

「仕方がないな・・・武部、代わりに俺が背負ってやるよ」

「あ、ありがとう・・・武藤」

と俺は武部から冷泉を受け取り彼女を負ぶる。そしてそのまま学

校へ向かうのだが学校の校門で

「寝ながら、しかも男子生徒に負ぶってもらってと登校とはいい御身分ね冷泉さん」

と、校門の前には風紀委員の委員長の園さんがいた。すると冷泉が目覚まして

「おおくそくどく子。私はちゃんと起きているぞく」

とふらふらしながら彼女に歩みよりしがみつく。

「ちよつと冷泉さん！そのソド子はやめてっていつも言っているでしよ！園みどり子って……」

と彼女らはいつものようにじゃれ合う中、みほと武部が校内を見る。校舎を見るとそこには『祝戦車道全国大会一回戦突破!!』と書かれそして屋上には大きな戦車のアドバルーンが上がっていた

「すごい……、まるで甲子園……」

「本当だ！私たち注目の的になっちゃうかな？」

「生徒会がやっただけだから。それより冷泉さんを何とかしてよ!!」

俺たちが個人個人の感想を言う中、そど子は引っ付いている冷泉を引き離しながらそう叫ぶのであった。

休み時間、みんなが教室や食堂や屋上でご飯を食べたり楽しく話をする中みほはお弁当を持って戦車格納庫へ向かっていた。そしてみほは格納庫の扉を開けその中にあるIV号戦車を見て

「2回戦、この戦車で勝てるのかな……あのサンダースとの試合だつて義弘君たちのおかげで何とか勝てたけど、次は……」

と、みほが不安そうにつぶやく。そうあの時の試合は武藤たちが相手を狙撃して数を減らしたり相手を押しとどめてくれたから何とか勝てたのだ。次の試合でも同じような事が起きるとは限らない。そう不安に思っていると

「あれ？みほ？」

と、IV号の隣にいるパンターのキューポラから義弘がひよっこりと顔を出す

「義弘君?どうしたのこんなところで?」

「どうしてって・・・俺は昼休み前はいつもここで飯を食べるんだよ。まあ戦車道が始まる前は教室で食べていたんだがな」

「そうなんだ。そう言えば義弘君、中学の時でもいつも戦車と一緒にお弁当を食べてたね」

「ああ、で、みほもここで昼食か?」

「う、うん……………」

と、そう返事した瞬間

「あれ?西住殿に武藤殿?」

「優花里さん?」

すると其所へ、弁当箱を持った優香里が姿を現した。

「おお、秋山。秋山もここで昼食か?」

「はい!今日は戦車と一緒に食べたいと思いましたが。武藤殿ですか?」

「ああ、こんない日は戦車の上で食うのも悪くないと思ってな」

と、俺がそう言うのと秋山の後ろから武部と五十鈴さんが入ってきた。

「あ、いたいた。なんだ武藤もいたんだ」

「教室にも食堂にもいないんできつとここだと思って……………」

「あ、パン買ってきたよ」

「ありがとう」

「秋山さんと武藤さんはお弁当ですか?」

「はい」

「まあな」

「じゃあ、一緒に食べようよ」

と、武部がそう言うのと

「私にも分けてくれ……………」

と、後ろから声がし振り向くと、そこにはIV号のキューポラから冷泉が出てきて眠たそうに目をこする

「あれ？冷泉。いつからそこにいたんだ？」

「……武藤さんが格納庫に来る前から……」

「麻子、授業をさぼったでしょ？」

「違う。自主的に休養した。だからこれはさぼりではない」

「もく屁理屈言つて。おばあに言いつけるよ？」

と、武部がそう言うのと冷泉は顔を青ざめ

「それは……困る」

とそう言うのであった。まあ、確かにあのおばあさんじゃ、しようがないか……その後、みほたちアンコウチームはIV号の上で、俺はパンターの砲塔によりかかり、静かに弁当に弁当箱を開けると「あれ？武藤も一緒に食べないの？こつちに来なよ」

「そうですよ。せつかくだから一緒に食べましょうよ」

と、俺を誘うのだが、

「いや、俺はパンターの上でいいよ。それに定員オーバーだろ？」

「そんなのつめればいいじゃないの」

「そうですね。少しつめれば一人くらいは入れます」

「武藤殿も一緒に食べましょう！」

と、三人がそう言うのと俺はちらつとみほの方を見ると

「武藤君もこつちに来て食べよ。みんなでご飯食べるの楽しいよ？」

と、不適の笑みでそういう。やれやれ……みほにはかなわん。

「そうか……ならお言葉に甘えるかな」

と、そう言い俺はパンターから降り、みほたちのいるIV号のエンジン部分に座る。それを見たみほたちは嬉しそうな笑みをするのであった。そしてみななどお昼ご飯を食べていると隣で秋山が

「実は母がこれ、戦車だつて言い張るんですよ」

とご飯の上に海苔で戦車が描かれてある弁当箱を見せながら嬉しそうに言う。

「すごい！キャラ弁だ！」

「これは、食べるのが勿体無いですね」

と、それを見た武部が携帯でその弁当の写真を撮り、五十鈴さんもその弁当を見て嬉しそうに言う。すると秋山が



「あ、そうだ。そう言えば見ましたか？生徒会新聞の号外！」

「う、うん・・・」

「え？なにになに？号外って？」

「ほら、生徒会新聞のあの記事ですよ！」

と、秋山はそう言いながら、ポケットから小さく折り畳まれた新聞を取り出し、広げて見せる。その記事の表面には『大勝利！大洗学園強豪校を倒し一回戦突破!!』と大きく書かれた文字にその下には戦車道チームをべた褒めする記事とみほたちアンコウチームの写真と同時にその下では『復活!!戦車道最強伝説だったあの黒狼が帰って来た!!』と俺たちのことが書かれていた

「凄かったよね……………」

「ええ。何せあの、サンダース大学附属高校に勝ったんですからね」

『勝った』と言うより、『何とか勝てた』の方が正しいと思うけどね……………」

「でも勝利は勝利です!!」

と秋山が胸を張ってそう言う

「そう、だよね……………」

『『『『?』』』』』

突然、沈んだように顔を俯けるみほ。その顔は今朝見せたあの顔であつた。そしてみほは

「勝たなきゃ、意味がないんだもんね……………」

と、暗い表情で言う

「それはどうかなみほ？」

「え？」

「少なくとも俺はそうは思わないぜ。それに戦車道はただ勝つとかそういうのだけじゃないと思うぞ？」

「そうです。武藤殿の言う通りです。楽しかったじゃありませんか？」

と秋山の言葉に武部たちが頷く。その言葉にみほは顔を上げる。

秋山が

「サンダースとの試合も。その前の聖グロリアーナ戦もそれから練習

も戦車の整備も練習帰りの寄り道もみんな！」

「うんうん。最初は狭くてお尻が痛かったけど何か戦車乗るのが楽しくなったよ！」

と、秋山の言葉に武部が頷きながらそう言うときみほは

「そう言えば、私も楽しいって思った。前はずつと『勝たなきゃ』って思ってたから……だから負けた時に戦車から逃げたくなくて……」

「私、あの試合をテレビで見ました！」

「!？」

突然声を張り上げた秋山に、みほは顔を上げ、そしてみほは静かに語る。秋山の言ったあの試合とは今から一年前の全国大会決勝で黒森峰はプラウダ高校相手に10連勝を賭けた戦いをしていった。

そして荒れ狂う雨の中断崖絶壁の道を走っていたみほたちは突如プラウダ高校の奇襲に会う。

そしてみほが車長を務めていたフラッグ車の前を走っていたⅢ号戦車が、プラウダの砲撃でバランスを崩して、川に滑り落ちる。その下は濁流で三号戦車は濁流に飲み込まれそうになっていた。

それを見たみほはその戦車の乗員を助けにくくために、フラッグ車から降りそれで川に潜って、Ⅲ号戦車のハッチを押し開けて、中の人達を引っ張り出し救出することに成功したのだが、その隙についてプラウダ高校は車長不在のフラッグ車を仕留め結果は黒森峰の敗北となった。

俺はその話をエリカから詳しく聞いていたが改めて訊くとやはり問題がある。まず最初に悪天候の仲断崖絶壁で身動きの取れにくい道を通ったこと。普通悪天候の仲そんなことをすれば大事故に繋がったり相手に奇襲攻撃をしかれられ全滅する可能性がある。普通はそんな危ない橋は絶対にしない。第二にフラッグ車の車長が不在だったときに寮車は何も行動をしなかったことだ。万が一、車長や隊長が不在の時は臨機応変に独自の判断でフラッグ車を守るのが鉄則だ。

それは黒森峰中等部では当たり前にやっていたことだ。だが俺が思ったのはその試合前に俺は改めて自分が黒森峰を去ったことを後



と、そう言うと俺はふうくとため息をつく。もうここらで潮時かな……

「みほが話したのに俺が話さないのは筋が通らないよな……いいぜ。訳を話すよ……」

と、俺は静かに語りだした。三年前、俺は黒森峰を去らなければならなかったあの出来事のことを……

三年前の黒森峰その1です！

時は遡ること三年前、黒森峰の学園艦の校舎の中で一人の女子生徒が歩いていた。彼女の名は逸見エリカ、義弘やみほと同じく戦車道を履修している生徒で二人の幼馴染でもあった。

「早く隊長に頼まれたこの書類学園長に届けないと」

と、逸見はまほに頼まれた戦車道に関連する書類を学園長に届けるべく学園長室に向かっていた。

「急いで届けないとね。今日はみほや義弘と約束あるしね……」

と、ポツリと呟く。そうエリカはその後、義弘と一緒にみほのいる寮へ行き、最近、上映されDVDとなった劇場版ボコを鑑賞する約束をしていたのだ

「まったく。みほったらボコのどこがいいのよ。それに義弘も……まあ、あの二人が面白いと思うのなら別にいいけど」

と、そう独り言を言っている間にエリカは学園長室につきノックをしようとしたとき、ドアの向こうから声が聞こえた

「(この声って……学園長と……ロスマン先生?)」

盗み聞きする気はなかったのだが、エリカはそつとドアに聞き耳を立てるのであった。

### 学園長室

「なるほど……君はドイツに帰国するのかロスマン先生？」

「はい。もうしばらくここに滞在したかったです……」

と、学園長室の中では、初老の男と、そして小柄で一見すれば中学生にも見えてしまう銀髪の女性が話をしていた。初老の男性はこの黒森峰女学院中等部の学園長で銀髪の女性はドイツからやって来た黒森峰中等部戦車道の教官をしているエディータ・ロスマンであった「仕方がない。事情が事情だ。で、出発はいつになるのかね？」

「三日後になります学園長。それと彼も一緒に連れて行きます。彼の体は最早時間の問題なので……」

「そうか……彼は承諾したのかね？」

「はい。最初はあの子はここを去りたくないとは反対していましたが、事情を説明したら彼も納得してくれました」

「そうか……我が黒森峰学園、戦車道に大きく貢献してくれたのにまさか彼も母親と同じ運命を……」

「それはまだ、それはわかりません学園長。もしかしたらドイツに行けば何とかなるかもしれません」

「そうか……だが二代続いてアレにかかってしまうとは……」

「はい。ある意味悲劇的です……」

「それでロスマン先生。彼がここを転校するのを戦車道の生徒たちには知らせているのか？」

「いいえ、彼の意見を尊重して知らせていません。どうもあの子は別れを言うのは嫌いみたいなので……」

「そうか……事情は分かった。今まで戦車道の教官ご苦労だったな……」

「はい。短い間でしたがお世話になりました」

ロスマン先生は学園長に頭を下げると、ドアの向こうで誰かが走り去る音が聞こえた。その音を聞いた二人は

「……誰かに聞かれたようだね？」

「そうですね……ですが問題ないでしょう。いつかはわかってしまうことですから。ところで学園長。例の脅迫文のことです」

「ああ、黒森峰戦車道履修者に恨みを持つ者の脅迫文のことか。全く逆恨みもいとこだ……今のところ警察に報告して学園の警備を強化したり下校する生徒にはなるべく一人で下校しないように言っている」

「そうですか……何も起きなきやいいんですが……」

学園長とロスマン先生が話している間、黒森峰戦車道部では……

「今日の練習もきつかったわね」

「そうね」

放課後の戦車道の練習も終わり、みんなは更衣室で学生服に着替え  
て家に帰る準備をしていた。みほも同じく着替えていた。すると

「みほさんお疲れ様」

「みほさんお疲れ〜やつと練習終わったわね〜」

と、隣のロッカーでみほの同僚である赤星や小島がそう言うときみほ  
は

「あ、赤星さん、エミさん。お疲れ。今日も練習きつかったね」

と、そう言いみほが言うとき赤星の隣にいる飛驒エマとパンターの車  
長であるゲシ子こと圭子が

「そうね。特に三号の砲弾を抱えてランニングなんて結構つらいわよ  
ね。あ、あと吊り橋の下で逆さに吊るされるのも、正直言って黒森峰  
が虎の穴に見えたわよ」

「もしかしたら本当に虎の穴だったりして」

「そうよね〜。でもうちらは反則専門の養成機関じゃないから……  
て、あれ？そう言えば篠原はゲシ子？」

「ゲシ子言うな。圭子って名前があるんだから。篠原さんなら風紀委  
員の集まりがあるとか何とかで練習が終わった後、すぐに着替えて  
行っちゃったわよ？」

「そうなんだ。そう言えば道子さんって風紀委員長だったよね？」

「そうよね〜人は見かけじゃわからないわよね……。で、ところ  
でみほさん。高杉のことなんだけどさ」

「義弘君？義弘君がどうかしたの？」

「いやね。最近みほさんと高杉君って結構仲がいいじゃんもしかし  
て付き合ってるんじゃないかな〜てさ」

「ふえ／＼／!?」

エミの言葉にみほの顔が赤くなる。すると圭子が

「あくそう言えばそうね〜最近みほさん高杉といい雰囲気だし、実は  
二人は付き合っているって言う噂が出ているんだよね〜」

「あ、それ私も聞いた」

と、エマとメグがみほに聞く

「そ、そんな付き合ってるって、私と義弘君はただの幼馴染だよ！」

「またまたくみほさんってば。本当はどうなのよ〜」

「ほれ、ほかの皆には内緒にするからさ私たちに言うてみ？」

「えっと・・・その・・・」

と、みほが困っていると・・・

「ほら、ほら。あなた達、出歯亀　するんじゃないの」

と、高身長 of 髪 of 長い女性がぐいぐいと迫るエミと圭子の首筋をくいッと掴み持ち上げる

「あ、樫村先輩。お疲れ様です」

「ええ、お疲れ様みほさん。赤星さん」

と、二人が挨拶すると、樫村と呼ばれた女性は返事を返す。彼女の名は樫村寛奈。黒森峰中等部三年生であり、義弘の乗るパンターの装填手を務めていた。樫村は二人に

「二人ともあんまり人の恋路とかそう言うのに首突っ込んでんじゃないけないでしょ？　みほちゃんも初心なんだから」

「ちよつ!? 樫村さん／＼／!!」

「アハハ。冗談よ。みほさんはお姉さんのまほさんと違ってからかい易いわね〜」

と、豪快に笑う樫村にみほは顔を赤くすると樫村は

「あれ？　そう言えばエリカの姿は見えないけど、彼女はどうしたの？　まさか、またいつものようにまほさんの所に？」

「あ、いえ。エリカさんなら。隊長に頼まれて学園長に種類を届けに行きました」

「あら、そうなの。あ、そう言えばこの頃不審者がこの学園をうろついているらしいから、帰り道は気をつけなさい」

「あ、はい。」

「よろしい。それじゃあね」

と、そう言い樫村は去るのであった。そしてみほたちも着替え終わり更衣室を後にして、寮へ帰るのであった。一方、義弘たちも着替え終わり更衣室を出ていた。そして義弘の隣には短い銀髪の少年がいた。こいつは同じ戦車道を履修し俺に乗るパンターの操縦手兼通



信手をしている雪風赤目だった

「いや、今日の練習もきつかったな赤目」

「そうだな……だがそれよりも俺は女性の目線が結構堪えたよ」

「まあ、女子中なのに男子生徒がここにいるんだ。みんなまるで珍しいパンダを見る目だったな」

「ああ、近々、共学にするために実験とはいえ男子生徒二人って言うのは流石にな……まあもう慣れたからいいけどさ」

「ああ、俺も最初は緊張したが今では、もう慣れちゃった。本当に人の慣れって言うのは恐ろしいもんだな」

「そうだな。ところで義弘」

「なんだ？」

「この頃お前、みほ副隊長と仲がいいみたいだけどよくもしかして付き合っているのか？もしかしてもう……」

「バ、バカ言ってるじゃねえ!!俺とみほはただの幼馴染だよ//!!」

「ほくお前、見た目によらず奥の手なんだなもう、告っちゃまえよ」

「だから、そう言うんじゃない……」

と、俺が困ってそう言うと……

「何やら楽しそうな話をしているな二人とも？」

「っ!?!」

急に後ろから声がし、俺と赤目が振り向くと

「ま、まほさん!?!」

「隊長!?!」

振り向くとそこにはまほさんがいた。するとまほさんは赤目の肩をガシツと掴み

「……ところで雪風……私の妹が義弘とどうしたって？」

と、いつもの無表情でそう訊くがその顔はどことなく怒っているように見えた

「あ……いえ、その……ああ、そう言えば今日、俺の寮に妹が遊びに来るんだっけなす、すみません隊長!俺はこれで!!義弘、じゃ!」

「あ、!てめえだけ逃げるなんてずるいぞ!!」

俺がそう言うが赤目の姿は見えなかった。あいつめ逃げ足だけは速いな……。これは俺も逃げないと。そう思い俺もその場を後にしようとしたが

「待て義弘。お前は残れ」

と、まほさんに肩をぐつとつかまれてしまった。こういう状態になってしまったらもう誰も逃げることはできない。

「義弘……」

「あ、はい……。何でしょうか？まほ隊長？」

俺は冷や汗をかきながらそう言うまほさんは

「何を固くなっているんだお前は？安心しろ。別に先ほどのことを叱るわけじゃない。あれは男子同士のただのじゃれ合いなんだろう？それと二人つきりの時は隊長と呼ばなくていい」

と、少し笑って言う

「義弘。お前を呼び止めたのは別の要件だ。実はみほのことなんだがな……」

「みほ？みほがどうしたんだ？」

「ああ、来年、私は卒業して高校に行く。その時の中等部戦車道の隊長の後釜が私の妹であり同じ西住流ということでみほという風に決められている。ただ、みほは私やお母さまとは違う。あの子の戦い方は西住流とは違う自由な戦い方だ。だが、もしあの子は西住流とは違う戦い方を見て、みんなから特に西住流の人たちに変な目で見られ、みほに重いプレッシャーを背負わせてしまうかもしれない。もしそうなったらみほは……。だから義弘。みほが一人ぼっちにならないようにエリカと一緒に副隊長としてみほを支えてくれないか？」

と、俺に頼む。いつもは無表情でクールビューティーなまほさんだが、今の彼女は西住流の時期後継者でもましてや黒森峰戦車道隊長、西住まほでもなく、今、この時のまほさん顔は戦車道をしている時のあの顔ではなく一人の姉としてみほのことを心配する西住まほの顔であった。正直言って俺もみほのことを放っておけない。できれば彼女の傍にいて支えてあげたい。だが……。俺はもうすぐ……。いや。今すぐに答えなくていい。心に整理がついたら聞かせてく

れ」

まほさんは俺の肩をポンッと叩きその場を離れようとする俺は

「待ってくれ、まほ姉。実は……」

「ん？どうした義弘？」

俺は呼び止めまほ姉は振り向くと

「あ……いや。なんでもない」

「そうか……じゃあまた明日」

と、そう言い俺はまほ姉に言いたいことが言えず、まほ姉はその場を去ってしまった。そしてしばらくして俺は近くにあつたベンチに座り

「はあ〜」

と、ため息を一つ。結局言うことができなかつた……そんな後悔を抱き顔を下に向けている。しばらくすると誰かの足音が聞こえ

「やっと見つけたわよ。義弘……」

と、聞きなれた声がし俺は顔を見上げると

「エ、エリカ？」

顔を見上げ俺の目に写つたのは、みほと同じ幼馴染である逸見エリカであつた。しかしその目はどこか怒気を含めていた。そしてエリカは静かに俺にこう言う

「……ちゃんと説明してもらおうわよ義弘」

三年前の黒森峰その2です！

「・・・・・・・・ちゃんと言明してもらおうわよ義弘」

エリカは静かにそして力強く俺に言う。そしてその目はどこか怒りや悲しみを含めた目で俺を見ていた

「説明って・・・・・・・・何を説明するんだよエリカ？」

「とぼけないでよーあんた黒森峰こくもりを去ってロスマン先生と一緒にドイツに行くんだってね！」

「っ!？」

俺はエリカの言葉に目を見開く。なぜエリカがそれを知っているんだ？その話はロスマン先生や学園長しか知らないはずなのに・・・・・・・・「お、おい・・・・・・・・エリカ。その話どこで聞いたんだ？」

「さつき学園長に書類を届けるために学園長室へ行ったら部屋の中から、ロスマン先生と学園長の声が聞こえてね。聞けばあんたが三日後にここを去るって言うじゃないのよ」

と、エリカがそう言う。そうか・・・・・・・・そう言うことか。エリカも盗み聞きするつもりはなかったんだろうが俺がここを去るという言葉を書いて聞かずにいられなかったんだろう。そう思っているとエリカは

「義弘・・・・・・・・なんで、ここを去るのよ・・・・・・・・黒森峰が・・・・・・・・戦車道が・・・・・・・・私たちのことが嫌いになったの？」

エリカはこぶしを握りわなわなと震わせそういう。そしてその顔は悲しみに満ちていた

「違うー！そうじゃない!!黒森峰をいや、戦車道を嫌いになるわけないじゃないかー！」

「じゃあ、なんでみんなに黙ってここを去ろうとするのよ!!私たちのことが信用できないの!?!それに幼馴染である私やみほ。それにあなたを弟のように接してあなたを信頼する隊長に黙って!!」

「それは・・・・・・・・」

エリカの言葉に俺は言葉が出ない。どうするべきかここで言うべきなのか、だが本当のことと言ってあいつらに心配させたくない・・・・・・・・

そんな葛藤を抱えているとエリカは

「……ねえ、義弘。どうしても理由を言ってくれないの？幼馴染である私やみほにも言えないことなの？それほどあなたは私たちのことを信用できないの？」

と、そう言われ、俺はエリカの顔を見るとエリカの目には一筋の涙が通っていた。俺はエリカの目を見てそしてため息をつく

「……はあ……できればこのことは墓場まで持っていくつもりだったんだが仕方がない。わかったよエリカ、わけを話すよ」

と、そう言うときエリカは俺の隣に座る

「……で、なんで去るのよ義弘。海外留学にしてはロスマン先生も学園長も深刻な話をしていたけど？」

と、そう訊くと

「……エリカ。実は俺。病持ちなんだよ……それもかなり質の悪い病」

「……え？」

俺の言葉にエリカは驚き目を見開く

「病気って……あんた何の病気にかかっているって言うのよ……あんた見た見た通り元気そうじゃない。どう見たって病持ちには見えないわよ」

と、俺が冗談を言っていると思っているのか。少しふざけて言うが俺の真剣な顔を見てエリカは……

「……まさか、本当なの義弘」

と、俺がまじめに言っているのに築きそう訊くと俺は頷くと

「……もしかして癌とかいうんじゃないわよね？」

「……『肺血病』」

「肺血病？何それ聞いたことないんだけど？」

「ああ、病的には肺がんや肺結核とかに似たような病で、身体がだんだんと衰弱し血反吐を吐いて死ぬって言う病気みたいなんだけど、実際詳しいことはあまりよく知られていない幻の不治の病って言われている病気みたいなんだ……」

「そんな病あるわけが……」

「ある。これは先生や小さい頃祖父ちゃんから聞いた話なんだが事実、俺の母もその肺血病で命を落としたりしい……………」

「義弘のお母さんが!？」

「ああ……………それで俺がこの病気にかかったのは約半月前だ」

と、俺は遠目で空を見る。俺がその病を知ったのは今から半月前の休日。急に胸が苦しくなったと思ったら急に咳が出始めハンカチで口を押えると何かが口から何か生暖かいものが流れ、それを見たらそれは自分の血だった。その後、俺は当時、唯一の保護者であった祖父が亡くなり代わりに保護者になってくれていたロスマン先生に連れられ有名な病院に見てもらった結果、その病気は肺血病。そう、かつて俺が幼い頃母の命を奪ったあの病気だ。その病気に自分が母と同じ病に侵されたと聞いた時はショックを受けたのをはつきり覚えている

「……………どうにか治すことはできないの義弘」

「残念だが日本中の医者を探しても肺血病を直せる医者は一人もいなかった。何せ有るか無いかの正体不明な病気な上、対抗策も見つかっていない幻の病なんだからな……………」

「……………それで、ドイツに?」

「ああ、なんでもドイツじゃその正体不明の病を研究している病院があるらしい。もしかしたらそこに行けば治せる方法が見つかるかもしれない。そう思って俺はロスマン先生とドイツに行くことになったのさ」

「……………それで黒森峰を去るというの義弘……………」

「ああ、俺だって黒森峰を去るのは嫌さ。できることならここにいてみんなと一緒に戦車道をしたい。だが今の体ではそうすることはできない。だから俺はその病を治すために黒森峰を……………戦車道を辞めなきゃいけない」

「……………」

エリカは義弘の言葉に黙る。義弘が黒森峰を去らなければいけない理由。それは彼自身が望んだことではなかった。それがわかつて少しは安心したのだが、事実を聞いてエリカは複雑な思いを抱いた。

「義弘。あなたの病のこと知っている人って私以外に誰がいるの？」

「先生と学園長。それと蝶野さんだ。エリカも知っているだろ？」

「ええ、幼いことよくみほの家で遊んでくれたあの人でしょ？」

「ああ。その蝶野さんだ」

「じゃあ、みほは知らないの？」

エリカがそう言うのと義弘は黙りそして

「そのことなただけだなエリカ。俺が病気にかかっていることやドイツに行くって話、みほたちには内緒にしてくれねえか？」

「え？・・・どうしてよ！みほに内緒ってあんた・・・」

「その方がいいんだ。今、黒森峰は国内無敗の道への軌道に乗っていて、今が一番大切な時期なんだ。そんな中、チームメイトの一人が病に倒れ国外へ行ってしまうって知ったら。きつとみんなは心配して集中力を失うかもしれない。だから俺はみほたちにいらぬ心配かけたくないんだよ・・・」

「でも、あんたがいなくなったと知ったら。どの道、同じ結果じゃないの？」

「いいや。今の黒森峰は俺無しでも大丈夫だ。それに俺は男だ。戦車道はもともと女子の嗜みのスポーツ。イレギュラーで男である俺が抜けても、大して問題にはならないだろう」

そう、俺は男だ。戦車道は本来、女子のスポーツとして知られている。そのスポーツに男性が戦車道をすれば戦車道は女性の嗜みのためのスポーツではなくなったあの野蛮な戦争ごっこという世間の評判が広がり、戦車道のイメージダウンになる可能性がある。事実、俺は文部省のあのムスカみたいなあの眼鏡に何度もそう言われていた。いい頃合いだろう

「義弘・・・本当にあんたはそれでいいの？」

と、エリカは静かにそう言うのと俺は無言で頷く。するとエリカは「・・・」また、戻ってくる義弘？」

「ああ。当たり前だエリカ。そのためにドイツに行くんだ。ドイツに行つてこの病気を治して、またみんなと一緒に大好きな戦車道をしたいから・・・だからエリカ・・・」

「……………わかったわ義弘。その代わりに、私もあなたに約束するわ。あなたがいない分、私のみほたちを支えるって……………」

「すまないな。こんなわがまま言って……………」

「いいわ。だって私たち親友でしょ?」

「ああ、親友だ今も昔も……………さて、そろそろ寮に行こうか。今日はみほと一緒にボコの映画見る約束だったもんな」

「ええ、そうね。確か題名は……………」

「確か。「ボコ・ファイナルウォーズ」だったけ?」

「ええ、でも確か前に見たボコの映画の題名って『さらば、ボコよ。おいらは旅立ちます!!』じゃなかったけ?なんでそう同じようなタイトルなのかしら?」

「さあ?まあ、でもいいんじゃないか?面白ければ。それに俺ボコ好きだし」

「はあく私。あんたとみほとは長い付き合いだけどいまだにボコのことがおもしろいのかよくわからないわ……………」

「まあまあ、良いじゃないかよ。さて。そろそろ寮に戻るか。みほの奴きつと寮で待っていると思うから」

「そうね」

と、そう言い俺とエリカは学園を出て寮へ向かおうとするが…………

「あ、エリカさん!義弘さん!!」

と、寮の近くまで来るとそこで赤星が慌てた感じで走ってやって来た。しかも少し服が汚れていた

「小梅?どうしたのよその格好?」

「それにどうしたんだそんなに慌てて?」

俺とエリカがそう訊くと

「た、大変なんです……………大変なんです!!」

「おい、落ち着けて赤星。どうしたんだ?」

と、俺は赤星を落ち着かせながらそう言うと赤星が…………

「みほさんが……………みほさんが攫われたんです!!」

「っ!?!」

赤星の言葉に俺とエリカは驚く。そしてエリカは



「みほが攫われたって……小梅どうしたことよ！ちゃんと説明して！」

「あ、あの実は……」

エリカの剣幕に赤星は事情を話す。戦車道の練習後。みほは赤星と一緒に寮へ戻ろうとしたのだがその帰り道、不審な男性集団が現れ、二人を連れ去ろうと襲い掛かって来て、みほを連れ去ったのだという。赤星も連れ去られそうになったのだが、みほが庇ったため、なんとか振り切って逃げる事ができたという

「なるほど……だから服がボロボロだったのか……」

「何のんきに言っているのよ！そんな場合じゃないわよ義弘！小梅、みほを攫った連中、どこに行ったか分からない？」

「はい……ごめんなさいエリカさん……」

「と、とにかく先生……いや、警察に連絡を……で、どこに行くのよ義弘？」

と、エリカが携帯を取り出し中、義弘はどこかへ行こうとする

「ん？何って決まっているだろ？みほを助けに行くんだよ」

「え!?でも場所がわからないでしょ!？」

「場所はこの学園艦の……恐らく人目のつきにくい隅あたりだろう。広いだろうが幸い陸と違って学園艦じゃあ、遠くへは逃げられないからな」

「そ、それじゃあ、私も」

「いいや、エリカと赤星は、すぐに先生や警察を呼べ。事が大きくなったら遅いしな」

と、頭を掻きながら義弘がそう言うのとエリカは

「でも、あんた……体が」

「今は大丈夫だ安心しろよ。それに別にこれが今生の別れじゃないんだ……今はな」

義弘は不敵の笑みでエリカにそう言うのと走り出したのであった。

「え、エリカさん……」

「と。とにかく今は義弘の言う通り先生や警察に知らせるわよ」

「は、はい！」

と、そう言う中エリカは義弘が走り去った方角を見て

「無事でいなさいよ。義弘、みほ・・・」

と、心でそう呟くのであった。一方、義弘は

「みほ！無事でいてくれえ!!」

と叫びながら走るのであった。

### 三年前の黒森峰その3です！

突如、赤星にみほが何者かにさらわれたと聞いた義弘はエリカや赤星に警察や教師に知らせるように言い、自分は一人でみほを助けるべく走り出す。そして義弘は走りながらみほが誘拐された場所を考える

「場所は恐らく人目のつきにくい学園艦の端っこ当たりのエリア。だけど、この学園艦は10万人以上が住んでいるほどの巨大艦。一つずつ端から探しては時間が掛かりすぎる……どうする)」

俺がそう考えていると、ふっとあることを思い出す。そう言えば、南の外れの方に使われなくなった戦車格納庫があったはずだ。しかもあそこは最早廃墟みたいで幽霊が出るという噂もあるため誰も近寄らない。もしみほを攫った連中がそこに潜伏し攫われたみほがそこに監禁されたとしたら……

「当たりは4分の1……ここはイチかバチか南の方へ賭けて見るか……」

「なんですって、みほさんが攫われた!？」

一方、エリカたちはすぐにロスマン先生やその時、傍にいたみほの姉であるまほにみほが攫われたと報告した。そしてロスマン先生はすぐに他の教師たちに連絡を取りすぐに警察に通報するように指示した後、ロスマン先生はエリカたちの方へ顔を向け

「それで、あなた達。みほさんはどこにさらわれたの?」

「はい。赤星が言うにはあつという間の出来事でどこに連れ去られたのか……ですけど義弘がこう言っていました」

「高杉が?」

「はい。高杉が言うには誘拐者は恐らく、人気のない学園艦の隅の方だと言っていました」

「そう……で、高杉君はどうしたの?あなた達一緒ではなかった

の?」

とロスマン先生がそう訊くとエリカは

「じ、実は義弘は。みほが攫われたと聞いてすぐに『みほを助けに行く』と言って一人で走り去ってしまつて……」

「っ!?!」

と、その言葉を聞くや否やまほは戦車の方へ走り出す

「どこへ行くのまほさん!」

「決まつている。義弘やみほを助けに行く!!あいつ一人だけでは危ない!!」

「待ちなさい!!」

「止めないでください先生!!」

「いいから落ち着きなさい!!気持ちにはわかるけど、正確な場所もわからずにむやみに走り出してどうするの!!」

「っ!?!……すみません」

と、ロスマン先生の言葉にまほは冷静になりそう言うと、ロスマン先生は学園艦の地図を広げその隅あたりを見る

「恐らくみほさんを攫つた連中は、高杉君の言つた通り人気の少ない隅の方に潜伏している可能性があるわ。問題なのはこの4つの隅っこの内どこにみほさんが監禁されているかよ」

と、ロスマン先生がそう言うつまほは

「西と北は住宅街があつて潜伏できそうなところが無い。けど東と南は住宅地が少なく使われなくなった倉庫や建物が多い。つまりみほが監禁されている場所は……」

「東か南つてところでしょうね……」

「先生。警察を待つていては手遅れになる可能性があります。ここは急いでその二つの地点に行くべきでは……?」

「そうね……わかつたわ。では二手に別れましょ。私と逸見さんは南にまほさんと赤星さんは東に言つてちようだい。そしてみほさんを見つけたらすぐに私と警察に連絡するのよ。みほさんを誘拐した相手が複数の可能性もあるから、くれぐれも警察が来るまで勝手な行動はしないように。いいわね?」

『はいー!』

と、そう言いロスマンやまほたちは二手に分かれてみほを探しに行くのだった。そして南に向かうロスマンは

「まったく、あの馬鹿弟子は一人で無茶をして!!」

「(みほ、義弘。無事でいて!!)」

## 南区域

「ここだな……」

一方、義弘は学園艦の南の端にある。古い戦車格納庫に着く。そして義弘はその倉庫に向かうと、その倉庫の前にいたガラの悪い男性が義弘のもとへやってくる

「おい、小僧。こんな夜中に何の用だ?ここはガキのくるところじゃねえぞ?」

「いや、少し人を探していましたね。お兄さんたち知りませんか?」

「人だあ?知らねえなそんなの」

「いやいや、知っているはずさ……茶色の髪をした黒森峰の女学生、ここに監禁しているんだろ?誘拐犯」

「……」

と鋭い目で男を見る義弘に男は目を細めるとその後ろから

「どうかしたんですかい?」

「ん?なんだこいつ?」

と、取り巻きらしき男二人が現れ先ほどの男はニヤツと笑う

「ああ、どうやら招かれざるお客さんのようだ。てめえら。丁重に歓迎しろよ」

そう言う男たちは義弘を囲む。そして義弘はふっと笑い

「どうやらあたりのようだな……」

格納庫の中では手足をロープで拘束され、口にガムテープを張られてたみほがいた。そしてその周りには数人の男性が囲っていた。

「おい、兄貴。こいつはとんだ大物だぜ」

「ああ、もう一人いた少女には逃げられたが、代わりに捕まえた奴があるの西住流の娘だからな。これはいいぜ。西住まほじゃないのは残念だが、こいつを使つて西住流を脅せばいい大金が手に入る。てめえらも黒公にはいい思い出はねえよな？」

「ああ、こいつら黒森峰は戦車道の名門だからって威張りやがって、それに俺が金を賭けた学校が戦車道の試合で負けたのもこいつらが勝ったせいだな。おかげでこっちは文無しになっちゃったぜ」

「なあ、兄貴。黒公に対する憂さ晴らすのと大金手に入れる前にこいつで楽しみませんか？」

「おお、それもいいな。見るからにいい体しているし、西住流の女がどんな表情を見せるか見ものだな」

と、薄気味悪い笑い声を出誘拐犯たちはみほに近づく

「いや．．．だれか．．．誰か助けて．．．お母さん。お姉ちゃん。逸見さん．．．義弘君!!」

と涙を流し助けを求めらるみほ。すると背後から誰かが来る。それに気づいたのか兄貴と呼ばれた男は振り向くとそこには先ほど格納庫の入り口に立っていたあの男であった。

「なんだ、てめえか。おい見張りはどうしたんだよ？」

と、そう訊くが

「つ．．．強え．．．」

と、そう言いその男が倒れるとその背後に真黒いドイツ風の軍服を着た少年が立っていた。

「(義弘君．．．)」

「なんだてめえは!!」

「高杉義弘．．．見ての通り戦車好きの中学生だよ」

「中学生!?おい表の連中は何をしていた!!」

「あ?ああ、表の連中ならなかなか中へ入れてくれないから、少しだけ眠ってもらったよ。それよりもみほは返してもらおうぞ」

とそう言い静かにみほのいる所へ向かうと

「ぎけんなわれえ!!」

と、誘拐犯の一人が殴りかかろうとするが

「邪魔だ……」

「へばあ!!」

義弘はその男の攻撃を躲すとその男を殴り飛ばし気絶させた。そして義弘はみほの方へ着くとロープを解き、口に張られていたガムテープをはがした

「みほ。大丈夫か?あいつらに変な事されてないか?」

「う、うん……大丈夫だよ義弘君」

「そうか……じゃあ、帰ろう。みんなきつと心配しているからな」

と、そう言いが

「おい、ただで帰れるとは思うなよガキが」

「そうだぜ。俺等の計画を邪魔してくれやがって……生きて帰れると思ってるじゃねえぞ!」

と、今にも襲い掛かろうとする誘拐犯に対し義弘は

「は?ただじゃすまねえのはてめえらの方だ。てめえらこそ、みほにこんなことしてただで済むと思ってるじゃねえぞ!!」

と、殺気を込めた目で誘拐犯たちを睨む。睨まれた誘拐犯たちはその殺気に震え上がったが兄貴と呼ばれたリーダー格の男が

「てめえら、ビビってるんじゃねえ!おい、集団で掛かれ!タコ殴りにしてぶっ殺せ!!」

『おおおー!!』

と、そう言い誘拐犯たちは義弘に向かってくると義弘はみほの方をちらつと見て

「みほ。柱の陰の方に隠れてろ。こいつらは俺が何とかするから」

「で、でも義弘君……」

「大丈夫。大丈夫。俺を信じろって」

そう言うと義弘は拳を鳴らし、そしてみほが柱の陰の方に隠れるのを確認するとその誘拐犯たちに向かつて行くのであった。そして誘拐犯の最初の一人の攻撃を躲し、その男の腹にボディブローをして倒し気絶させた後、すぐさま真っ正面から向かつてくる2人の男に向かいそのうちの一人のあご目掛けて飛び膝蹴りを喰らわす。膝蹴りを喰らった男は悲鳴も出る間もなく白目をむいて気絶し倒れる。そしてもう一人は鉄パイプで義弘を攻撃したのだが、義弘は見事な回避術でその攻撃を避け、まるで弓矢のごとき速さでその男の腹を殴り気絶させた。

「ひっ！な、なんだこいつ?! 本当に中学生のガキか!？」

と、誘拐犯の一人が震えてそう言うと、義弘はギリリとその男を睨み

「あ? 見てわかんないのか? どう見てもあんたらの言うただの中学生ガキだよ!!」

と、そう言うと義弘はその男の腕をつかみ一本背負いをして相手を放り投げる放り投げられた男は受け身も取れずにもろに床にたたきつけられ泡を吹いて気絶する。そして周りにはリーダー格の男を除き全員が気絶し倒れていた。

「残るはてめえだけだな……」

「そのようだな……まさかてめえみたいな女みてえなガキに、こうまでやられるとわな……」

「で、どうする? 逃げるなら見逃す……」

と、義弘がそう言いかけた時

「ゴホッ!ゴホッ!!」

と急に苦しそうに咳をする

「(くそっ!こんな時に!!)」

と、義弘が口を押えた瞬間

「隙ありだ小僧!!」

と、そう言いリーダー格の男は懐に隠していたナイフで義弘を斬りつけた。義弘はすぐに躲そうとしたが少し遅かったため男の持っているナイフが義弘の額に傷をつけ、額からは血が流れ出す



「義弘君!!」

みほはその様子を見て声を出すが義弘は

「大丈夫だみほ。ただの切り傷だよ」

と、そう言うのと義弘はナイフで切りつけた男を睨みつける。

「つくづく救えない奴だな．．．．．貴様は」

と、殺気を含めた赤い瞳がギラギラと光る。その目に男は

「な、なんだ貴様!?!なぜ斬りつけられたのに平気でいる!?!貴様痛みを感じないのか!?!」

と、義弘の姿に驚きそして震えながらそう言うのと義弘は

「そりゃあ、痛えよ。血がだらだら出てるし頭もズキズキする．．．．だがな」

義弘はそう言うて、左手で男の胸倉を掴み上げると

「こんな切り傷の痛み。誘拐されたみほの気持ちに比べれば大したことねえんだよ!!!」

と、そう言い義弘はその男の顔面を思いつきり殴り殴られた男は吹っ飛ばされ壁に激突。そのまま項垂れるように倒れ気絶するのであつた。そしてその廃墟の中に残っていたのは柱の陰に隠れていたみほと、額から血を流した義弘。そして地面に伏せて気絶していた誘拐犯たちだけになつていた。

「ふう．．．．．やっと終わったぜ．．．．みほ。もう大丈夫．．．だぞ」

「義弘君!!」

と、そう言うのと義弘は倒れ、柱の陰に隠れていたみほは慌てて義弘のもとへ駆けつけるのであつた。そしてその後、その廃墟にロスマン先生とエリカ、そして警察が着き、そこでのびていた誘拐犯を全員逮捕、一方義弘とみほも保護されたのだが、義弘は傷を負って気絶していたため、すぐに近くの病院へ運ばれるのであつた。

### 三年前の黒森峰、ファイナルです

みほを誘拐犯から無事救い出した義弘は、みほを救う際、額に怪我をし、そして持病である肺血病の症状が出て、今現在、近くの病院へ運ばれた。

「……………」

義弘のいる病室ではロスマン先生が寝ている彼の看病をしていた。すると……………」

「失礼します」

「あら、逸見さん。義弘の見舞い？」

「はい……………あの、これお見舞いの花束です」

「ああ、ありがとうございます。その花束ならその花瓶に入れといて」

と、そこには私服姿のエリカが花束を持って入って来たのだ。そしてエリカは花束をそばに当た花瓶に移し返していると、病室の机には千羽鶴や果物が置いてあった、

「あ、あの……………先生。私以外にも見舞いの人とか来たんですか？」

「ええ、あなたが来る前に黒狼メンバーや赤星さんたちやまほさんが来ていたわよ。それよりもみほさんの様子はどうかしら？」

「はい。幸い怪我とか無いようです。今、警察の人に今回の誘拐事件の事情を聞かれています」

「そう……………でも良かったわ。みほさんに怪我が無くて……………」  
「……………それよりも先生。義弘は……………」

「彼なら大丈夫よ。医者に診てもらったら、大した深さの傷ではないみたいだったから。全くいくらかみほさんを助けるためとはいえたつた一人で数十人いる誘拐犯を相手に……………」

「いえ、先生。切り傷のことではありません……………義弘の肺血病についてです」

エリカがそう言うロスマン先生は目を見開き

「あなた……………なぜそのことを」

「義弘から、聞きました」

「そう……………なら話は早いわね。なら知っているわね義弘がドイ

ツに行くことを……」

と、そう言うのとエリカは静かに頷く。そしてエリカは

「先生。義弘の病氣、なんとかならないんですか?」

「それは私にもわからないわ。ただ、一つ言えることはもう、彼に時間が残されていないということよ」

「っ!?どういう意味ですか先生?」

「さつき、医師の先生に診てもらったんだけど。肺血病の症状が少し悪化していたのよ。だから予定よりは早いけど明日、出発することにしたわ」

「そんな……」

エリカが驚く。すると看護婦さんが入ってきて

「エディータ先生。すみませんが黒森峰女学園の学園長からお電話が来ております」

「わかったわ」

と、そう言いロスマン先生が立ち上がり、そしてエリカの方にポンと手を置くと

「こういうときこそ、親友であるあなたがそばに居てあげなさい」

と、そう言い部屋を出るのであった。そしてエリカはベットの横にある椅子に座り義弘の顔をジーンと見て

「……起きているんでしょ義弘?」

と、そう言うのと、寝ているはずの義弘の目がうつすらと開いて

「なんだ……気付いていたのかエリカ」

「当たり前よ。あんたとは付き合い長いのよ。あなたの狸寝入りを見抜けないでどうするのよ」

「はは……さすがだな」

と、笑ってそう言うのとエリカは

「義弘……あんた昔から本当に馬鹿よ……いくらみほを助けるためとはいえ病持ちのあんたがたった一人で犯罪者相手に戦って、それで病気を悪化させるなんて本当にどうしようもない馬鹿よ……」

と、悲しそうにそう言うのが義弘は

「すまん……俺って馬鹿だからさ。こういうことしかできないんだ。だから俺はいつも後悔しない道を選んで進んできた。たとえ持病の病が悪化してもな……。だから俺はみほを助けに行つたことを後悔していない。むしろ助けに行かずにみほを見捨てる方が一番、後悔するよ……」

「義弘……」

と、義弘の言葉にエリカは言葉が出なかった。すると……  
コンコン

と、誰かが戸をノックする

「誰だろう？先生かな？開いてるぞ？」

と、そう言うのとドアが開き、そこから二人が良く知っている子が入って来た

「よ、義弘君。お見舞いに来たよ……。て、あれ？エリカさん？エリカさんも義弘君のお見舞い？」

「ええ、見てわかるでしょ、みほ。それよりもあなた警察の事情聴取。終わったの？」

「うん。何とかね……。それよりも義弘君。頭の傷、大丈夫？」

「ああ、大した傷じゃないよ。先生が言うには数日ここで安静にすれば退院できるってさ」

「そう、良かった……」

と、みほは安心したのかそうほっと息をつく中、エリカはどこか複雑そうな顔をしていた。そんな中、みほは

「義弘君……。ありがとう。助けてくれて」

「ああ、別に大し……でも……でも？」

「いくら私を助けるためとはいえ、もうあんな無茶、やめて……。もし、義弘君が大怪我をして死んじゃったら。私も逸見さんもお姉ちゃんやみんなもきつと悲しむから……。だからお願い」

と、みほは先ほどのエリカと同じことを言い、そして俺の手を握り震えながらそう言う。みほにとっては誘拐された恐怖よりも俺が怪我をして倒れた時の恐怖が大きかったのだろう。俺はそっとみほの手を取り

「・・・わかったよ。みほ。なるべく無茶はしないようにする」

「じゃあ約束だよ。義弘君」

「ああ、約束だ・・・。エリカにも約束するよ」

「ほんとかしら？あんたのことだから、事と次第によつてはすぐに約束破りそうなんだけど？」

「あれ？バレちゃった？」

「よくしくひろくくん？」

「あ、いや！破らない!!破らないって!!ボコに誓って約束するからみほさん!」

エリカの言葉に俺はそう言うともみほが少し黒い笑みを浮かべてそう言う俺は焦っておろおろしながら訂正する。

「プププ・・・あははは!!」

。俺のそのしぐさと言うかやり取りがなんか二人のツボの入ったのか二人は笑いだし、二人の笑う姿を見て俺も笑いが込み上げ気が付いたら俺とエリカとみほの三人は笑っていた。そしてその後は、普通に世間話をしたり、ボコ談義をしたりした。

「ねえ、義弘君。義弘君が退院して元気になったら、エリカさんと三人一緒にまたどこかへ出かけない？エリカさんもどう？」

「え？そうね・・・。」

と、エリカはみほの言葉に少し言葉が詰まりそして俺の方をちらつて見る。みほはそのことに気付かず俺の方を見て

「ねえ、義弘君はどこへ行きたい？」

「え？そうだな・・・もう春だし、そろそろ桜が見れる季節だから、桜でも見に行こうか？」

「でも、義弘。黒森峰の学園艦には桜はないわよ？あったとしても花見ができるような数はないし・・・。」

「それなら、学園艦が熊本に寄港する時に桜名所へ行かない？あそこなら桜がたくさん見れるよ」

「それ、ナイスだなみほ。よし、それじゃあ熊本に行ったら、その名所へ行こうか。なっ！エリカ！」

「ええ・・・そうね。その時は三人で行きましょう・・・。」

と、俺たちはそんな話をした後、

「じゃあ、義弘君。また来るからね」

と、みほは笑顔でそう言うのと部屋から出て行った。そして残ったエリカも

「それじゃあ、私もそろそろ帰るから……」

「そうか」

エリカは椅子から立ち上がり部屋を出ようとする際、ピタツと立ち止まり

「……義弘。みほに例のアレ。本当に言わなくてよかったの？」

「ああ、みほには本当に悪いけど。無駄に心配させたくないからな……エリカ」

「わかってるわ。最後まで秘密にする……でも、なるべく早く。体を治して帰ってきてね。そしてまた一緒に戦車道をしましょう。それにみほと一緒に桜を見に行く約束もあるんだから」

「ああ……そうだな」

と、そう言うのとエリカは少し寂しそうな笑みを見せ部屋を出るのであった。そしてその時俺は見たエリカの頬から一筋の涙が通っていたことを。そしてエリカが部屋を出てから入れ違うようにロスマン先生が入って来た

「……二人に別れは言ったの義弘？」

そう言うのと俺は首を横に振り

「いいや……言っていないよ。別れの言葉は俺が一番嫌いな言葉だからな。それにこれが最後の別れじゃない。いつかまた、みほたちにまた会えて一緒に戦車道をするような気がする。そんな気がするんだよ先生」

「そう……」

その翌日、俺は持病である肺血病を治すためにロスマン先生とともに黒森峰を去りドイツへと向かった。黒森峰の皆には内緒で……一様、学園長は俺はドイツへ留学したと説明してくれたらしいが、俺

が去った後、黒狼チームは解散した。なんでも俺がいなければやる意味がないということ、解散したらしい。そして俺がドイツにいる間、黒狼の名は解散してもその名は轟き、そしてこんな伝説ができたという

かつて森峰中等部戦車道に「黒狼」と呼ばれ恐れられた戦車乗りがいた。修羅さながらに敵戦車を狩り敵からは「黒森峰の悪魔」とも呼ばれ、黒森峰最強神話の基礎を固めたその戦車乗りは突如その姿を消すのだった……

現在

「……と、言うわけさ」

「……つまり、武藤殿が黒森峰を去ったのは海外へ留学する話があったからですか……確かにドイツは戦車道が盛んで有名ですが……」

「ああ。まあな。みほ……ごめんな黙って出て行って。ただ俺、お前に別れの言葉を言いたくなかったんだ」

「ううん。別にいいよ義弘君。義弘君にもいろいろ事情があったことがわかったから、私は気にしてないよ」

「そうか……」

と、そう言うときチャイムが鳴る

「あ、そろそろ授業が始まります」

「そうですね。急いで戻りませんと……」

「うん。じゃあ、武藤。戦車道の授業だね。ほら麻子行くよ」

「は〜い」

と、そう言い、みんなは弁当を片付け、戦車から降りる

「ほら、武藤殿も急がないと遅刻しちゃいますよ?」

「ああ、そうだな。じゃあ、みほ。放課後でまた会おうな」

「うん」

と、そう言い俺たちはわかれる。だが、俺はみほたちに俺が黒森峰を去った本当の理由、そう肺血病については話さなかった。あくまで

黒森峰を去った理由は表の理由である海外留学と説明したのだ。なぜ、この期に及んで本当の理由を説明しなかったのかは俺自身もわからない。ただ、これだけはたとえみほでも言っただけとはいけないような気がする。そんな感じがしたのだ。そして俺は別れ際にみほの方を見て

「(ごめんな・・・みほ)」

と、心の中でつぶやき、秋山とともに教室へと向かうのであった。



みんなで一緒にです！

戦車道の練習も終わり、皆が自分の時間を楽しんでいる頃、生徒会室では、お馴染みの生徒会三人組が何かの資料を見ていた。

「一回戦は武藤さんたちのおかげで勝てたけど、二回戦は今の戦力で勝てるかな？」

「絶対に勝たねばならんだ！」

小山が不安げにそう言うと、河嶋が握り拳で机を叩き、勝つ事への執念を見せる。

「でも、二回戦の相手はアンツイオ高校だよ？」

「う〜ん乗りと勢いは・・・あるからね〜」

角谷会長が椅子を滑らせてそう言うと河嶋は頷き、小山が

「調子が出ると手強い相手です。武藤さんや西住さんたちのおかげでチームもまとまって来て、みんなのやる気も高まっているけど、今のままの数では少し厳しいかもしれません」

「そっか・・・じゃあ、その点の解決策を考えないとね〜」

と、小山の言葉に角谷は少し考えるそぶりを見せるのであった。

翌日の戦車道の授業時間の日戦車格納庫に集まった俺たちは河嶋さんの前にいた。そして河嶋さんは

「一回戦に勝ったからといって気を抜いてはいかん！ 次も絶対に勝ちぬくのだ！ いいな腰抜けども！」

「二はいー！」

「頑張りまーす」

「勝って兜の緒を締めよ、だあー！」

「二おオーー！」

「えいえいおー！」

と、そう言うみんなは一回戦に勝った影響かみんなの士気は高く元気に返事をする。そして俺たちは二回戦に向けて激しい練習をした。隊列で並びながら走ることも、射撃で遠く離れた的に当てる時も

初めて練習した時に比べて徐々に練習の成果が出始めているのがわかる。そして時間はあつという間に過ぎ日が暮れたころ練習は終わった

「あく今日も結構やったな」

「そうね。こんなに充実した練習は久しぶりね」

背伸びしてそう言う俺に篠原が髪を掻きながらそう言う。パンターから降りると

「ご苦労様です武藤先輩。道子さん」

「お疲れ様です車長、篠原先輩」

と、パンターの装填手である小波と操縦手である服部が元気よく俺たちに声をかける

「おう、お疲れ様二人とも。二人ともだいぶ上手くなったな。小波の装填の速さも前に比べて早くなってるし」

「そうね。それに静も操縦技術が上がって良くなってたわよ」

「そ、そうですか？ありがとうございます!!」

「感謝の極みです。車長」

と、俺と篠原がそう言うのと二人は笑顔で嬉しそうに言う。確かに二人の腕はかなり上がってきている。その腕は前の黒狼の操縦手だったアイツや装填手だった檜村先輩にも負けず劣らずの腕前に育ってきている。

え？操縦手のあいつって誰だ？赤目じゃないかって？いや、赤目は基本、通信手で操縦手は別の人がしていた。それが誰かのかはまた別の日に話そう。

「それでは車長。私はこの後、友人と約束がありますので」

「私もクラスの皆と勉強会があるから、武藤先輩、篠姉さん。じゃあ、また明日」

と、そう言い二人は一礼して去って行った。なんか戦車道だと凄腕の二人だが、それ以外になるとマイペースだな。あの二人、まあ別にいいけど……。俺がそう思っていると

「義弘君。篠原さん。練習お疲れ様」

と、そこへみほ達あんこうチームの面々が声をかけてきた。

「ああ、みほ。お疲れ」

「お疲れ様、みほさん……あれ？武部さん。少しやせた？」

「えくわかるの！そんなのよ私、戦車に乗り始めてからやせたんだ！」  
と篠原の言葉に武部が嬉しそうな顔をする。すると冷泉も

「そう言えば私も少しだけ低血圧が改善された気がする……」  
「血行が良くなったのでは？」

「血の気が増えたのかも。戦車乗りって頭に血が上る人が多いから」  
「それ関係ある？」

みほの言葉に武部が首をかしげると

「いや、あながち間違っていないんじゃない？黒森峰でも低血圧な子がいたけど、戦車に乗ってたら低血圧が改善されたって聞いたわよ。後、性格も変わったし」

「え!?!性格?」

篠原の言葉に武部が驚く。まあ確かに俺もそいつのことは覚えて  
いる確か眼鏡をかけた子で確か名前は……そう思った時

「西住、武藤。生徒会室で次の試合に向けた戦術会議をするぞ」

「それと交換した方がいい部品のリストを作るの手伝ってほしいんだ  
けど」

小山さんと河嶋さんが西住や俺に声をかける

「了解した」

「はい。わかりました」

と、そう返事をし生徒会室へ向かおうとしたとき

「先輩、照準をもっと早く合わせるにはどうしたらいいんですか？」

「どうしてもカーブが上手く回れないんですけど」

と、そこへアヒルさんチームことバレー部の佐々木と河西がみほの  
所へやってきてそう訊く

「え、えつと……、待ってね、今順番に……」

「隊長、躍進射撃の射撃時間短縮について」

「ずっと乗っていると臀部がこすれていたんだけどどうすれば」

「隊長、戦車の中にクーラーってつけられないんですか？」

「せんぱーい、戦車の話をすると男友達がひいちゃうんです」

「私は彼氏に逃げられました」

と、今度はカバさんチームの面々がやってくる。そしてそれに続き今度はうさぎさんチームもやってきてみほにそう訊く。と言うより一年の質問に関しては最早、戦車とは関係なく個人の質問になっている……

「えっと……その……」

みほは完全に困った顔をしてうろたえている。すると

「あの、メカニカルな事なら多少私がわかりますので」

「書類の整理くらいなら私でも出来ると思いますけど」

「…操縦関連は私が」

「恋愛関係なら任せて!!」

「砲撃や照準については私に任せなさい」

その姿を見て篠原や秋山たちが手を挙げてそう言う。

「…みんな」

「みんなで分担してやりましょう」

「みほりん、一人で頑張らなくてもいいんだからね」

「そうよ。黒森峰でもそうだけど、たまには仲間を頼りなさいみほ」

「…ありがとう」

そう言うのと、みほは微笑んで礼を言うのであった。

「グリスは1ダースで良いですか？」

「うん、お願いね」

生徒会室では五十鈴さんと小山さんが書類仕事をしていた。因みに冷泉はバレー部に操縦の仕方を、秋山はカバさんチームに、武部は一年生を、そして篠原は一部の砲手の子に砲撃指南をしていた。そして俺とみほと五十鈴さんは生徒会の三人とともに書類整理をしていた。

「そちらの書類は？」

「戦車関係の古い資料、ここで一緒に整理しようかと思つて」

「お手伝いします」

「本当？ 助かるよ」

と、笑顔でそう言う小山さん。すると机の上に置いてある五十鈴が置いた花に気付く

「あ、やっぱりお花があるといいね。私も華道やってみたいな」

「小山先輩、お花の名前がっていますよね？ たしか、桃さん……」

「私は柚子。桃ちゃんはね……。桃ちゃん！」

「言うな！」

手を振る小山さんに河嶋さんがすぐに反応する。そんなに名前と呼ばれるのが嫌いなのか河嶋さんは？ そんな中角谷さんはいつものように干し芋を頬張り

「武藤君。西住ちゃん。チームもいい感じにまとまって来たんじゃない？ 二人のおかげだよ。ありがとね」

と、ニコツと笑いお礼を言う

「いえ、礼を言われるようなことはしていません。俺はやるべきことをやっているだけですから」

「私もお礼を言いたいのは私の方で……。最初はどうかと思いましたが。でも私、今までとは違う自分だけの戦車道が見つかるような気がしています」

まあ、確かにここでは黒森峰と比べて、珍しいというかいつもと違う体験ができる。斯くいう俺もここに来ていろいろと楽しんでいる

「それは結構だが、だが次も絶対に勝つぞ」

「勝てるかね？」

「チームはまとまって来て、みんなのやる気も高まってきていますけど……」

「問題は戦車かみほ？」

「うん。正直言つて今の戦力だと……」

確かにみほの言う通り、チームの練度は上がってきている。しかし戦車の性能はいくら練度を上げてても変わらない。さすがに今の人数や数ではこの先の強豪相手に戦うのは厳しい。対抗するためには新

たなチームと戦車が必要不可欠だ。そんな話をしている中、五十鈴さんたちは戦車道についての書類を整理していた。

「戦車道てずいぶん昔からやっているんですね？」

「うん。そうね大体1920年頃から始まっているね」

「大洗が戦車道を始めたのは確か・・・」

「20年前、特にその最終期での大洗って全国大会準優勝をしたって書いてあるわ」

「へーすごいですね」

「うん。なんでもその隊長と副隊長がチームに大きく貢献したって書いてあるわ・・・名前が・・・苗字の所はかすれて読めないけど。名前が隊長がしほさんで副隊長が翔子さんって書いてあるわ・・・」

「すごいですね・・・あら？」

五十鈴は書類を見て何かに気付くぞとしてみほたちの方へ振り向き

「あの、お話し中すみません」

「ん？どうしたんだ五十鈴さん？」

「えっと、さっきこの書類を見たのですがどうやら書類上では他にも戦車があった形跡が……」

「・・・え？」

と、言うことで翌日俺たちは新たな戦車を探すことになったのだ。た。

一方、対戦相手であるアンツイオ高校では

「ふふふっ・・・西住流の西住みほ、貴様の戦車道は弱い！戦車道に背いた君に我々は負けない。覚悟しておくんだな！アーハハハハ!!」

と、隊長室でアンツイオ高校戦車道部の隊長であるアンチヨビが壁に貼られているみほの写真を鞭でたたきそう高笑いするのだが・・・

「あははは・・・てだめだく!!」

と、急に頭を抱える

「かつこいいと思つて言つてみたけど。このセリフだと私、完全に悪者じゃないかー!!」

とそう言いたため息をつき、椅子に座る

「私もあの試合見たけどあいつ何一つ悪いことしてない。むしろ仲間を助けようとしたのにあんな酷い台詞を言うのもな……でも、言つてみてなぜかしつくりしたけど、なぜだ?」

と、そう言い彼女は公式戦の対戦相手を見る

「はあく一回戦は何とか作戦勝ちで何とか切り抜けたが二回戦の相手はあの西住流に伝説と言われたあの黒狼か……そんな二人が相手だからこそ少し威厳と言うか統帥らしい所見せないとな。さて……ほかにいいセリフないかな?」

と、エスプレッソを飲みながらそう呟く。すると

「アンチョビ姐さん。いるっすか?」

「統帥。失礼します」

と、そこへ副隊長の一人であるペパロニとカルパッチョが入る

「ん?どうしたんだペパロニ、カルパッチョ?」

「ついに!遂に手に入れたっすよ!!」

と、ペパロニが興奮してそう言う

「落ち着け。何を手に入れたんだ?パスタ鍋か?それともピザ窯か?」

「それもあるのですが違いますドウーチェ。新型の戦車を購入できたんです!しかも二輜!!」

「何!?本当か二人とも!」

「そうすつよ!鉄板ナポリタンがかなり受けて。おかげで資金がぐうーんと上がったんですよ!!」

「ほんとうかあ!?やったな二人とも!!」

と、アンチョビは大喜びする。それを見た二人は

「アンチョビ姐さん。喜んでいるっすね」

「今までc v 3 3 が主力でしたからね」

「セモヴェンテもあつたっすけど数が少なかったからなく」

と二人は喜ぶアンチョビの姿に微笑んでいた。そしてアンチョビ

は

「よおーし、お前ら新型戦車を手に入れた記念に、今日は宴会をするぞ  
!!」

「はい、ドゥーチエ!!」

と、そう言うのであった。



## 戦車再び探します！

五十鈴さんたちの言葉で再び戦車を探すことになった俺たち戦車道チーム。書類上、戦車を処分したっていう書類がないためまだどこかに戦車が眠っている可能性はあるのだが、どこにあるのかは不明だ。

それで戦車探索チームの班はA班では俺とみほ、バレー部、冷泉。B班は武部と篠原と一年生。そしてC班が秋山と小波と歴女チームで残りは生徒会室で待機となっている。

さて、俺たちA班は今、旧部室棟の方を探索していた。建物は朽ち果てところどころ穴が開いていてまるでゴーストタウンみたいな感じになっていた。

「戦車なんだから、直ぐに見つかりますよねッ！」

「だと思っただけど……………」

自信満々に言う磯部さんに、みほは自信無さげに返す。まあ確かに磯部の言う通り戦車は大きいからすぐに見つかると思うが、みほの言葉にも一理ある。もしそうだったら最初の探索の時に見つかったりする。

「手掛かりはないのか？」

「確かに、学園艦は広いしな。しらみつぶしに探しても時間が掛かるし、見つかるモンも見つからねえよ」

「冷泉先輩に武藤先輩、刑事みたいですよ」

「ごもつともな事を言う麻子と俺に、忍はウキウキしてそう言う刑事見たいって。俺、刑事ドラマとかあんまり見ないが刑事ってそんなこと言うのか？」

「それが、部室が移動しちやっただみみたいでよく分からないんだって」

「そうか…………まあ20年前だし、そりゃそうか…………」

と、そう言いながら俺たちは旧部室棟内を歩くのであった。そして別の場所では秋山たちC班が屋上において

「……………はっ！」

カエサルがそう掛け声をかけるのと同時に指で支えていた棒を離

すと

八卦と太極盤のようなものの上に立てられていた杖らしき棒が倒れ、東の方向を指す。

「フム、東が吉と出たぜよ」

「コレで分かるんですか。先輩？」

と、占いで戦車のある場所を特定するカエサルに小波は疑問の声を出すと

「心配ない。カエサルの卦はよく当たるんだ。前も宝くじで卦で出た番号をかいたら。見事に当たったぞ。一万円だったけど」

「は……はあ……」

エルヴィンの言葉に秋山は苦笑するのであった

また別の場所では武部と篠原たちBチームが学園艦の深部へと入って探索をしていた

「へく篠原さんって黒森峰では風紀委員だったんだ。意外」

「え、こう見えても私は黒森峰で学校の風紀を取り締まっていたのよ」

「じゃあ、なんで今は不良集団のボスになったの？前みたいに風紀委員とか入ればよかったじゃない？」

「まあそれはそうだけど。少し憧れてたのよワルになるって言うのも。それと風紀委員にならなかった一番の理由は……」

「ならなかったのは？」

「あのおかっぱの髪型にするくらいなら不良をやって不良たちを統治したほうがまだマシって思ったからよ」

「あくなるほど……」

篠原の説明で武部は納得したような顔をする。そんな中、ウサギさんチームは

「何なの此処、何処なの〜？」

「凄い、船の中っぽい」

「いや、此処って『中っぽい』とか言う以前に船の中だし」

その後ろでは、優季、坂口、あやがそんな会話を交わしながら船内を見渡してそう言うのと梓が

「そう言えば先輩。なんで学校が船なんでしょ？」

「え？それは前にゆかりんが言っていたっけ。確か……」

武部は前に秋山に学園艦について教えられたことを思い出そうとすると、篠原が代わりに答えた

「大きく世界に羽ばたく人材を育てるためと、生徒の自立独立心を養うために、学園艦が造られた……らしいわよ」

「へくそうなんだ」

「無策な教育政策の反動ってやつなんですかね？」

と一年生チームは納得したように頷くと……

「お疲れ様です」

そこへ学園艦の運航係なのであろう船舶科の生徒達に会う。

「あ、あの！戦車知りませんか？」

擦れ違いかけていた生徒に、武部が声を掛けると船舶科の生徒は首を傾げ。

「戦車かどうかは分からないけど、何かソレっぽいのあったよね？何処だっけ？」

「ああ、それなら、もつと奥の方じゃないかな？でもあそこらへんは船底よりは少し治安はいいけど、たまに不良がたむろしているからちよつと危ないから気を付けてね」

と、そう言い行ってしまうのであった。

「じゃあ、行こうか」

「え？でもあつちには不良とかいるんでしょ？」

「大丈夫、大丈夫。私とその不良のボスだし。それにあつちて言うのと西地区だし、あそこなら、お銀たちのシマじゃないしね。問題ないわよ」

「お銀って誰？水戸黄門？」

と、武部がそう言いながらB班は西の奥へと進むのであった。

一方、生徒会室では、生徒会チームと書類整理を手伝う五十鈴さんと服部が待機していた。

「まだか！まだ見つからないのか!!」

と、戦車の発見の報告を待ちいらだつ河嶋。するとまるで社長が座つていそうな椅子に寝つ転がる角谷さんは

「まあ、まあ河嶋。果報は寝て待てだよ」

と、呑気に言う中、戦車の資料を調べる三人は

「先輩。戦車に関する資料が少ないですね」

「そうですね・・・それにしても昔の大洗の戦車って武藤先輩たちが乗っているパンター以外にも強そうな車両を持っていたんですね」  
「うん。20年前の大洗戦車道部の評判って中堅クラスだったみたいだったから・・・うくん……………でも見つからないってことは捨てられちゃったかなあ？でも、処分したらその書類もあるはずなんだけど」

「大丈夫でしょうか？この学校で戦車道が行われたのは20年も前ですから・・・」

と、三人は戦車に関する書類を一生懸命に探すのであった。

そして場所は戻り旧部室棟ではいまだに俺たちA班が戦車探しに来ていた。そして

「ここが最後の旧部室だけど何も無いな……………」

と、現在俺たちは最後の部室の中を搜索していた。因みに最後の部室は最初から数えて100室目である。結構大変だった。ある時はドアがさびれてなかなか開かなかったし、まあ、それは俺がドアを蹴破ったから解決したけど。その時、河西の奴「先輩！刑事みたいでかつこいいです！」とかそう言い寄られた。河西って刑事ドラマとか好きなのかな？

まあ、それはいいとして他の部屋では大量の黒いナニカの住処になっていて、開けた瞬間その黒い何かの軍団がこちらへ押し寄せてきた時は女性陣が大パニックを起こしていた。冷泉はいつものように

冷静な顔をしていたと思っていたが立っただけのまま失神していた。

いろんな困難に遭って今最後の部屋を見たのだが、あったのは埃まみれの棚とその部屋で使われていたであろう部室の資料が置いてあるだけで肝心の戦車についての情報はなかった。

「そうですね手掛かりになりそうな物は………出てきませんね」

「コレはもう、御手上げかなあ?」

と、困る中、冷泉は窓の方へ行き窓を開ける

「おい、冷泉………」

「空気の入替えだ。埃が溜まる場所は肺に悪い………」

とチラツと俺を見た瞬間、俺はドキツとした。もしかして俺は肺血病のこと知っているのか?そう思ってしまった。すると冷泉は

「埃はアレルギーのもつだし、美容に悪い。武藤さんも西住さんの幼馴染だったらそういう気配りぐらいしろ」

と、そう言い俺は一瞬ほっとする。よかった。バレてない。そう思っていると冷泉は窓の外を見て

「………何処の部だ?こんな所に洗濯物干したのは?」

と、そうぼやきそれを聞いた俺とみんなは窓の方へ行くと確かにどこかの部下は知らないがシャツとかタオルとかが干してあった。だが俺たちが目に入ったのは洗濯ものではなく物干し竿の方であった。それは物干し竿と言うにはあまりにも大きく、分厚く、そして大雑把すぎる物であった。その正体は

「あれって………もしかしてこれは戦車の砲身?」

そう、それは物干し竿ではなく戦車の砲身であった。一方、その頃の場所では

「見つけました!ルノーBlibisです!」

と沼地で秋山たちことC班が沼地の泥で埋もれていたフランスの重戦車ルノーBlibisを発見する。

「さすがはモントゴメリーだ」

「えっと……それはちよっと」

とカエサルがそう言うのと秋山は複雑そうな顔をしてそう言うのとでは、グデーリアンでどうかかな?」

「おおっ!!」

エルヴィンの言葉に秋山が嬉しそうに言うのであった。そして戦車発見はすぐに生徒会室に知らされた

「了解……ルノーB1bisだそうだ」

と河嶋さんがそう言うのと小山さんが資料を取り

「えつと……最大装甲60mm、75mm砲と47mm砲を搭載した戦車だそうです」

「まあ、八九式よりはましか」

「新しいチームもできますしね」

小山さんの言葉に干し芋を頬張りながら角谷さんがそう言い、小山さんもそう言うのであった。すると……

「あれ?この戦車って……」

「どうかしたのですか服部さん?」

五十鈴さんが一枚の書類を見て首をかしげる服部を見てそう訊くと

「あ、いえ、ただこの戦車。前に篠原さんの仲間の不良基地で見かけたような気がして……」

「本当ですか?」

「いえ、私の気のせいかもしれませんが……」

と、そう言うのと角谷さんが

「でも、もしかしたらあるかもしれないから。探しに行かせた方がいいよ。で、場所は篠原ちゃんたちの不良集団の溜まり場なんだよね?」

「あ、はい……」

「あそこの近くにいる班は……ちようど西住ちゃんの所か。ちよつと連絡するか。河嶋」

「はっ!直ちに西住たちをそこに行かせます」

「でも大丈夫かな?西住さんたちだけで行かせるのはちよつと危険じゃないですか?」

「大丈夫、大丈夫。あそこの集団、篠原ちゃんの仲間だし、それにその副官をしている子しっかりしているから」

「会長。その生徒のこと知っているのですか？」

「知っているっていうか、まあ、プロフィールや言葉を聞いても記憶に残る子だしね、その子なら別に大丈夫だと思うよ」

と、いつものようにお気楽にそう言うのであった。そしてその後、西住と武藤のいるA班は河嶋さんにそのことを知らされて、その場所へと向かうのであった。

「ここが、そうか……」

陽が落ち辺りが夕焼けになったところ俺たちA班は会長の言っていた場所につく。まあ、俺は前にも来たことがあるから知っているけど。改めて見るとやはりその場所は荒れていていかにも不良の縄張りと言うにはぴったりの場所であった。

「な、なんか今にも出てきそうですね」

「もし襲われたらどうするんですか？キャプテン？」

と、近藤と佐々木が心配そうにそう言うのと磯部さんは

「大丈夫。そんなの根性とバレーで乗り切ればいいんだ！だろ？」

「二はい！キャプテン!!」

と磯部の言葉にバレー三人組はそう頷く

「バレーと根性で何とかなるのかな義弘君？」

「さあ？でもアヒルさんチームならできそうな気がするな……」

と、俺とみほが苦笑してそう話し合うと、建物の陰からロングスカートでいかにも不良って感じの女子生徒が現れる。そして

「ちよつと待ちな。あんたら。何断りもなくうちの姐さんのシマに入ってきているんだ？」

と、どすの効いた声でそう言うと、その言葉と同時に大勢の不良が俺たちを囲むように現れる。するとみほが

「あ、あの私たち戦車を探して……」

そう、言うのと先頭にいる不良が

「戦車あ？そんなもん知らないわね。それよりもあんたら、あたいらの縄張りに勝手に入ってきてただで済むと思うなよ」

と、そう言うのと周りの不良がバットやらメリケンサックやらを取り出し、じわりじわりと俺たちを包囲する。

「おい、落ち着けよ。俺たちは篠原の知り合いだ。それにここに来たのはさつきみほの言った通り戦車を探しに来ただけだ。別にあんたらの縄張りを荒らしに来たんじゃない」

「はっ!?信じられないわね!あんたみたいな優男が道子の姐さんの知り合いなわけがないだろ!おいあんたら!こいつらぼこぼこにちしまえ!!」

『おおー!!』

と、そう言い襲い掛かろうとした瞬間

「Останови это!」

と、そう怒鳴り声が響くとあたりの不良たちがぴたりと止まった

「この声って、ロシア語か?」

俺がそう言った瞬間。目の前にいた不良たちが左右に分かれるすと。中央から短い銀髪をした外国人らしき子と、その周りには篠原の不良仲間で前にうさぎさんチームを他の不良から庇って助けようとした子たちがいた。そして銀髪の子が

「Прости。ごめんなさい驚かせちゃって。あなた達、武藤さんと西住さんですね。話は道子から聞きました」

と、頭を深々と下げて謝罪する子に他の不良たちは

「エレーナの姉貴!なんでこいつらに頭下げるんだよ!」

「そうですぜ!」

慌てて言うのとエレーナと呼ばれた人の傍にいた子が

「バカヤロ!あんたらこの人たちがどなたか知らねえのかよ!この人たちはな武藤の兄貴と道子の姐さんが履修している戦車道の仲間です。うちの一人が道子姉さんの友人で戦車道の隊長をしておられる西住の姐さんだよ!!」

『っ!?!』

と、その言葉を聞き周りにいた不良たちは固まり冷や汗をかく。そ



して

「え!?嘘あの人が武藤の兄貴?思ってたのと違う」

「私もそれに西住の姐さんも私が想像していたのと違う・・・もつと軍神みたいな感じだと思っていたわ・・・」

とひそひそ声で話しているとエレーナがその不良たちをじつと睨み

「Молчи!あんたら、ちゃんと謝りなさい。もし道子の友達に手を出したと聞いたら道子がどう思うかわかっているでしょ?」

と、そう言うのと、不良たちは

『すみませんでしたあ!!』

と謝る。そしてエレーナは俺たちの方へ向き、礼儀正しく頭を下げ

「Приятно познакомиться. 始めまして私は道子の副官をしているエレーナと申します。先ほどは私たちの仲間が大変失礼しアシタ。・・・それで西住さんたちはどのような件で私たちの方へ来たのですか?」

と、そう訊くと西住が

「あ、あの。ここいらへんで戦車を見ませんでした?」

「戦車?」

「ああ、さつき服部さんが道子の基地で戦車らしきものを見たって言うていたんで調べに来たんだ。何か知っているか?」

と、そう訊くと周りの不良たちが考えエレーナも

「戦車ですか・・・もしあつたら、道子さんがとづくに持っていったと思いますが・・・」

と首をかしげると

「あ、エレーナさん!もしかしてあれじゃないですか!」

と、小柄な不良がそう言うのと

「アレ?・・・ああ!もしかしてあれですか!」

「知っているのですか!」

「Да。たぶんあれだと思います」

と、心当たりがあるのかエレーナは頷き。そして俺たちはある場所

へ連れてこられる。そこは少し開けた広場だった

「あの・・・ここは」

「ここはよく集会をするときに使う広場よ。えっと・・・確か。あ、あったわ。あれよ。集会に使う台とか椅子とかの置き場になっていたけど」

と、そう言いエレーナさんが指を指したところには材木や台とかが置いてあるが、その木材に掛けられているのは、少し小柄な戦車であった。

「これって・・・BT7?」

と、そこにあったのはソ連の快速戦車であったBT7であった

搜索隊です！

日もすっかり沈み、戦車の搜索を終えた一行は、格納庫の前に集まっていた。そして核のこの前に置かれたのはみほたちA班が旧部室棟で見つけた長砲身75ミリ砲である《7.5cm kwk40》と、篠原たちの不良グループの集会場で見つけた快速戦車BT7。そして秋山たちC班が沼地で見つけたルノーB1bisを発見した。資料も満足にないのにわずか一日で二両と砲を一門発見できるなんて奇跡としか言いようがない。

「それにしてもBT7か・・・これまた足の速い戦車が見つかったな」と、俺がそう呟くと秋山が

「はい。最大装甲20ミリで主砲は45ミリ砲。そして何よりBTの特徴は履帯が外れても72キロと言う快速で走行できるという利点です。まあ、代わりの防御はあまりよくないんですが、それでも快速戦車の名に恥じない戦車ですよ！」

と、目をキラキラさせてBT7をほれぼれするほど眺める秋山がそう言う。いつものことながら秋山が戦車を見て喜ぶ姿は大変微笑ましい姿だな。

「秋山さん。嬉しそうだね義弘君」

「ああ、そうだな。なんか見ていると俺たちも頑張った甲斐があったなって思っただ嬉しくなってくるな」

俺とみほがそう言い微笑んでいると

「そう言えば、武部と一年生チームの姿が見えないな？」

「そう言えばそうですね？もうそろそろ戻ってもいい頃なんですけど？」

俺の言葉に五十鈴さんが首をかしげると、冷泉のポケットから携帯の着信音が鳴り、冷泉はポケットから携帯を取り出すと

「・・・遭難・・・遭難・・・したそうだな」

携帯の画面を暫く眺め、画面を閉じた冷泉が言う

「え？遭難？どこで？」

「学園艦の船底だそうだな」

「それじゃあ、すぐに探さない」と

と冷泉の言葉にみほがそう言う

「何か目印になるものがある筈だ。それを探して伝えろと言え」

「ん……………」

頭を掻きながらそう言う河嶋さんに、冷泉は頷きメールを打つ。すると

「西住ちゃん。はいこれ」

と、角谷さんがどこから取り出したのか筒状の紙をみほに渡す

「これ、艦内の地図だから、捜索隊に行つてきて」

「わ、分かりました」

と、角谷さんがそう言いいみほがそう言うとき角谷さんは俺の方に顔を向けると

「ほら、武藤君もボケくとしてないで一緒に捜索隊に行つてきてねく何かあった時、か弱い女子を守るのは武藤君だけなんだからさく」

と、いたずらっぽい笑みでそう言う角谷さんに俺は軽くため息をつき

「言われなくても一緒に行きますよ」

と、そう言う

「私たちも一緒に行きます道子さんのこと心配です。それに船底は船舶不良団の領土もありますから、万が一絡まれても不良同士なら何かあっても対処できますし」

と、エレーナさんも一緒に行くと言い、俺たちは迷子になった武部たちを探しに行くのであった

それから学園艦内部にて迷子になった武部たちを探す俺たちは今、薄暗い艦内を歩いていて懐中電灯を装着したヘルメットをかぶった秋山を先頭に探索していた。と言うより秋山の奴前にみほの部屋で出した飯盒もそうだが、いろんな便利グッズを持っているな。もしかして彼女未来から来た猫型ロボットの知り合いかな？

「それよりも暗いな……………」

「Нет。ここはまだましな方です。さらに下にあるお銀たちがたむろっているシマに比べればまだ、明るい方です」

とエレーナさんがそう言う。お銀って前にあった、あの海賊の船長みたいな人か……。あの人たちのいる場所ってここよりも下にいるんだ。

「でも、やっぱり暗いですね。何だがお化け屋敷に来たような気分です……………」

「そうだね」

と、そう言う秋山とみほ。するとエレーナさんが

「ЭТО ВЕРНО!それでしたら、ほん怖のBGMでも流してよ  
り本格的なお化け屋敷にしましょうか?」

「いいえ、結構です(であります)」

「ЭТО Так……それは残念です」

みほと秋山が全力否定すると、エレーナさんは少し残念そうな顔をする。すると突然、金属製の何かが床に落ちる音が、甲高く廊下に響き渡った。

「きやあああああつ!!」

「うわっ!」

その音にびつくりして秋山とみほが俺の両腕に抱き着き悲鳴を上げる俺はその行動に驚く。と言うよりきつく抱きしめられているためなんか変な感触が俺の腕に伝わってくる……。いや、いや!今はそんなことじゃなくて!

「お、おい。二人とも落ち着けよ。ただ物が落ちただけじゃないかよ!お化けとかじゃないから安心しろ!!」

俺は顔を赤くし慌てて二人にそう言うと、その一言に安心したのか、みほと秋山は安堵の溜め息をつきながら

「そう?よかつたあゝ」

「はあくびつくりしました……………」

とそう言う中

「大丈夫ですよ。さ、早く沙織さんたちを探しましょう」

と五十鈴さんは何もなかったかのように涼しい顔をして通り過ぎ

る。その姿に俺たちは唾然とし

「い、五十鈴殿。本当に肝が据わっています」

「う、うん……」

「本当にそうだな……」

「Ha……ぜひ、うちのグループに欲しい人材ですね……」

と、そう言うのであった。そして五十鈴さんは

「ちよつと羨ましいです。みほさんと秋山さん……」

と少し羨ましそうな声でそう呟くのであった。そしてみほたちは

「さて、確かに五十鈴さんの言ったように早く、武部たちを探さないと  
な」

「う、うん……あれ？冷泉さんどうしたんですか？」

みほがそう言い俺たちは冷泉の顔を見ると、そこには顔を真っ青に  
した冷泉の姿があった。そして

「お……」

「「お？」」

「お化けは……早起き以上に無理……」

と、怯えながらそう言う冷泉に俺は

「冷泉……その気持ちはわかる。俺もスタンドは怖い」

「む、武藤さんもお化け駄目なのか？」

「ああ、あれだけはな……」

とうんうんと頷きながらそう言う。するとみほは

「そう言えば、義弘君って、怪談話とかお化けと幽霊とかのオカルト系  
が苦手だったよね？」

「ああ、生きている奴なら素手とかで対抗できるけど、アレは無理だか  
らな。それとみほ。お化けとか幽霊とか言うなスタンドって言うて  
くれ」

俺は苦笑してそう言う。俺はそういう系が苦手でお化けとかそう  
言うのも『スタンド』って言うて誤魔化したりしている。すると、冷  
泉が

「む、武藤……」

と、そう言う俺の手をガシツて掴み

「そ、そうだよな普通そうだよな!! スタンドは普通無理だ!!」

と、そう言い俺もその手を握り

「同志よ!!」

とそういう姿を見てみほと秋山は苦笑するのであった。そして……

「なあ、冷泉。なんで俺の腕をつかんでいるんだ？」

「べ、別にいいだろう? こうしていると落ち着くんだ」

と、そう言う冷泉。確かに先ほどに比べて少し落ち着いた顔になっている。と言うより少し顔が赤いような気がするんだが、気のせいかな?

そう思う義弘だが、その光景を見た秋山とみほは複雑そうな顔をするのであった。

一方、その頃、武部と道子たちはどこかの倉庫らしきところでじつとしていた。

「武部。さっき義弘からメールが来たけど。今みほさんたちがこちらに向かつてきてくれるそうよ」

「そう。よかった……」

と、二人がそう言う中、一年生たちは

「お腹、空いたね……………」

「うん……………」

「今夜は、此処で過ごすのかな……………」

不安になり、泣きだしそうになるとそれを見た二人は

「だ、大丈夫! あ、そうだ! 私チョコ持つてるから、皆で食べようよ!」  
「そうよ。それにさっき義弘から救助隊が来るってメールが来たからもう少しの我慢よ。あ、そうだこんな暗いところだからみんな不安になるのよ歌でも歌えば不安な気持ちも吹き飛ばわよ」

と、泣きだしそうになっている一年生たちを落ち着かせようと武部と道子は笑顔で励ます。そして武部は一年生たちにチョコを配り、篠

原は一年生を落ち着かせるため歌を歌って場の雰囲気と和ませようとするのであった

場所は戻り、みほたちは

「あ、あの……皆さん？なんで俺にくつついているのかな？」

と俺が苦笑してそう言う。そう今、みほたち（エレーナさんを除く）は今俺に引っ付いて歩いている。

「別に意味はないのですが、その……」

「先ほども言ったように暗いのが怖くてですすね」

「私さつきも言ったように落ち着くからだ」

と五十鈴さんと秋山、そして冷泉がそう言いみほも

「義弘君。くつついて歩くのだから？」

と、まるで捨てられた子犬のような目でそう言うが、俺は

「べ、別にだめなわけじゃないけど。なんていうか、歩きにくい。できれば少し離れてくれないかな？」

と苦笑でそう言うと、みほたちは少しだけ離れてくれた。だけど陣形がまるで俺を取り囲むかのような陣形であった。なにこれ？まるで俺、警護されている気分だな……そう思っているとみほが

「たしか第17地区予備倉庫って言っていたけど……」

みほは先ほど武部から来たメールを見て角谷さんに渡された地図を見るのだが

「たしかこの辺りだと思っただけ……」

と首をかしげながらそう言うのと突然砲撃音が鳴り響く。

「ふえっ!？」

突然の砲撃音に冷泉が驚くが、

「あ、カエサル殿からだ」

秋山は平然とした表情で携帯を取り出す。というより先ほどの砲撃音、秋山の携帯の着メロだったのか……そんな中、秋山は通話ボタンを押す。するとケイタイからカエサルの声が聞こえる。冷泉の奴心臓を押さえて顔を青くしている。確かに暗い中、特にスタンド



が苦手な人間にいきなりそんな音が聞こえたらだれだつてびっくりする。

『西を探せ、グデーリアン』

「西武戦線ですね。了解です！」

と、そう言い電話を切る。すると冷泉が

「誰なんだその名前？」

「魂の名前を付けてもらったんですよ」

「グデーリアン：：確かドイツ機甲科の父と言われた將軍の名前か？」

「はい！そうなんですよ武藤殿！」

と嬉しそうに言う秋山に五十鈴さんは

「西つて言ってもどちらを探せば……」

「ああ、それなら私、知っています。西地区はよくうちの仲間がたむろしたりする場所なので……あとはコンパスがあれば」

「あ、それ私を持っております」

秋山はそう言いコンパスを出す。すると冷泉は

「そもそも、なんで西なんだ？」

「卦だそうです」

『え？』

秋山の言葉にみんな疑問の声を出すと

「当たるも八卦、当たらぬも八卦ですね……」

五十鈴さんがそう言い。俺たちは西の方へと向かうのであった。そして、しばらく歩いてみると冷泉が

「な、なんか声が聞こえないか？」

と顔を青くしそう言うとはかの皆も耳を澄ませる

「あ、本当です。これは……歌声でしょうか？」

「もしかして幽霊が歌っているのか!？」

「違うでしょ冷泉さん？」

「この声、日本語じゃないですね？どこかの国の言葉みたいですか？」

秋山と五十鈴さんが首をかしげるとみほは

「これって、『ラインの護り』？」

「ああ、ラインの護りだなこの歌は……」

そう聞こえたのはドイツの歌であるラインの護りであった。そして俺たちがそこへ行くと

「あ、いたー！」

そこには、一年生チームと武部たちがいた。そして一年生チームが俺たちを見ると花が咲いたような笑みを見せて

「救助隊だあー！」

「私達、助かったんだ!!」

とうれし泣きをし武部に抱き着く。

「よしよし：もう大丈夫だからね」

と、頭を撫でて優しく言う武部。それを見た秋山は

「武部殿、モテモテですね」

「本当ですね、希望していたモテかたとは違うようですが」

と、そう言う中、篠原がやってきて

「信じて待った甲斐があったよコマンダー」

「ああ、待たせたな篠原。それよりもさっきの歌は・・・」

「ああ、あれね。私が歌っていたのよ一年生たちを不安を少しでも軽減させるためにね」

頭を掻きながら言う篠原すると

「篠原さん。無事でよかったです」

「あら、エレーナ。あんたも一緒にいたの？すまないね心配かけて。それといつもすまないわね。いつも留守を任せて」

「Da。いいえとんでもないです。それに留守番も副官として当然のことですから」

「そう、頼りになる副官だわ」

と、笑いながらそう話し合う二人。本当に仲がいいなこの二人は・・・そう思っていると武部が俺の方へやってきて

「武藤も探しに来てくれたんだね。ありがとう」

顔を赤くしそう言う俺は少し頭を掻き

「別に礼を言われることはしてないよ。で、戦車は見つけたのか？」

「うん。ほらあれ」

「え？」

武部があるところを指さし、俺とみほがそこを向くとそこには暗がり姿が見えにくくなっているながらも、重厚感溢れる戦車があったのであった。

戦車探索と救助作戦が終わり、戦車道チームの女子陣は今、大浴場にて汗を流している。俺はと言うと軽くシャワーを浴びた後ある場所に向かっていた。その場所は戦車格納庫であった。

「失礼します自動車部の皆さん」

「ああ、武藤君。お疲れ様」

格納庫にいたのは自動車部の人たちであった。そしてその自動車部の部長であるナカジマさんが俺に気付いて声をかける。

「夜間整備お疲れ様です。これ差し入れのコーヒーとコーヒーに合うお菓子です」

「いつもごめんね」

「いいえ、いつも戦車を万全の状態に整備してもらっているんです。これはほんのお礼ですよ」

俺はそう言いコーヒーと菓子が入った袋をナカジマさんに渡す。

「……で見つかった戦車と砲身の方はどうですか？」

「うーん、BT戦車は二回戦には間に合いそうだけれどルノーはちよつと二回戦までには間に合いそうにないね。砲身も取り付けるのに時間が掛かるからこれも二回戦までにはちよつと無理かな」

「じゃあ、船底で見つけた奴もですか？」

「うん。見た所いろいろ部品が欠如したりしているからじつくり時間をかけて直さないとね。ごめんね」

「いいえ、ナカジマさんが謝ることはないですよ。むしろ徹夜で整備してもらっている皆さんに謝られたら罰が当たりそうですよ」

と頬を掻き不適を笑みでそう言う

「あはは！面白いね武藤君は。で武藤君も戦車の整備？」

「まあね。やっぱり自分の戦車の面倒はちゃんと見ないとね」

「そうか。整備道具はあそこにあるから、好きに使ってよ」  
「ありがとうございます」

と、俺はナカジマさんに礼を言い、そして自動車部の人と一緒に戦車の整備をするのであった

ノリと勢いのアンツイオです！

義弘たちが新たな戦車を見つけたその頃、二回戦の相手であるアンツイオ高校では、アンツイオ高校の名所のひとつ、スペインぽい階段でアンツイオ高校の戦車道部員が集合していた。

「全員、気を付け！」

とある女子生徒の掛け声により、アンツイオ高校戦車道チームのメンバー全員が、一斉に気を付けをして、自分達の目の前の階段の上に立つ他の生徒とは違い制服に黒いマントを羽織った薄緑色のツインドイルの髪型をした少女、アンチョビが鞭を振り上げ

「きつと奴らは言っている。ノリと勢いがある。調子に乗れば手強い！」

力強くそう言うと、生徒たちから歓喜の声が上がる。

「おおおー！強いって!!」

「照れるなく」

「でも、姐さん。だけってどう意味ですか？」

他の生徒が喜ぶ中、一人の生徒が疑問の声を上げるとアンチョビは「つまりこうだ。ノリと勢いはあるが、調子が出なければなんも役に立たなくただ総崩れする烏合の衆って意味だ」

と、堂々と言うとその言葉を聞いて生徒たちの額に青筋が立ち怒りの声を出す

「なんだと〜!!!」

「なめやがって!!」

「言わせておいていいんすか?」

「姐さん達！戦車でカチコミに行きましょう!!」

と、そう言う中、アンチョビの副官らしき金髪の少女が

「皆、落ち着いて?実際に言われた訳じゃないんだから」

と、そう言うと、隣似た同じく副官らしき黒髪でショートヘアでくせつ毛左もみあげを三つ編みが特徴の子が

「あくまでも、ドワーチェ総師による冷静な分析だ」

とそう言うとアンチョビは頷き

「そうだ。二人の言う通り、私の想像だ」

「なんだ〜」

「あくびつくりした」

と、アンチヨビがそう言うのと生徒たちは、ほっとした顔になる。そしてアンチヨビは

「いいか。お前たち。根も葉もない噂にいちいち惑わされるな。私たちはあの防御の強いと言われたマジノ女学園にかつたんだぞ!!」

「おおおー! そうだった!」

「そう言えばそうだったね!!」

アンチヨビの言葉にみんなは嬉しそうにそう言うのとアンチヨビの傍にいる二人は

「苦戦しましたけどね・・・」

「カルパッチョ。確かに苦戦したけど勝ちも勝ちだ」

「うん。その通りだペパロニ。なにもノリと勢いは悪い意味だけではない。この勢いを二回戦までもつていくぞ! 二回戦の相手はあの西住流が率い、かつて日本最強と言われた伝説の戦車乗り、黒狼がいる大洗学園だ!」

アンチヨビは高らかに言うが、メンバーの反応はいまいちな顔をしていた

「西住流とか黒狼とかやばくないっすか?」

「それに最強伝説って・・・」

「勝てる気しないっす」

不安な声を上げるが、アンチヨビは

「心配するな。いや、ちよつとしろ。何のために三度のおやつを二度にし、パスタを質素にペペロンチーノにしたんだ?」

アンチヨビがそう訊く。因みにペペロンチーノはイタリア料理では質素な料理である。そんなことはさておき、アンチヨビの質問にメンバーたちは

「あれ?なんででしたっけ統帥?」

「前に話しただろ!それは秘密兵器を買うためだ!!」

『おおおー!』



少しは、戦車道に回してほしいものだなあ……………」

とため息をつきながらペパロニとカルパッチョとつ所に階段を上  
がるとさつき広場に残っていた女子生徒がアンチョビに近づきポン  
と背中を叩くと

「まあ、仕方がないじゃないの千代美。こういうのはゆっくりとやれ  
ばいいんだから、そう焦らないの」

「ああ、すまないフェルナンディア……て、千代美って言うな。アン  
チョビと呼べ」

「悪い悪い。ごめんねアンチョビ」

と、謝るフェルナンディア。彼女の名はフェルナンディア・マル  
ヴェツツイ。イタリヤからやって来た留学生でありアンチョビと同  
学年である。アンチョビを励ますフェルナンディアを見てカルパッ  
チョたちは

「フェル姐さん。流石っすね……………」

「ええ、そうね」

と、感心した顔で見っていた。実はフェルナンディアの実力はアン  
チョビと同等かそれ以上といわれるほどで、先代だったドゥーチェや  
卒業した先輩からは彼女がドゥーチェになってもおかしくないと  
言われたほどであったが彼女は『私は統帥とか相手を指揮する器じゃな  
い。指揮官に向いているのはアンツイオでは千代美しかいないわ』  
と、そう言い、その後アンチョビがドゥーチェとなり彼女はアンチョ  
ビを支える立場となっていて、今いる副隊長である二人の相談役とい  
う立場になっている。

そして、食堂で4人はランチの Pasta を食べていた

「それで、アンチョビ姐さん。秘密兵器の公開いつにするんすか？」

「そうだな……………明日は学校休みだし明後日になるかな」

「そうなんですか……………統帥ドゥーチェ戦車の編成はどうしますか？」

「そうだな……………大型秘密兵器は私が乗るとして、c v はペパロニ。  
セモベンテはカルパッチョ……………後は……………」

と、Pasta を食べながら編成を考えるアンチョビにフェルナンディ  
アは



「アンチヨビ。中型秘密兵器は私が乗るわ。それに乗ってフラッグ車の護衛をするわ。他の護衛はカルパツチヨの乗るセモヴェンテでやる」

「え？私ですかフェルさん」

「え？マジっすかフェル姐さん。護衛がセモヴェンテならわかるけど、いつものc vじゃダメなんすか？」

「ダメとはいかないけど、c vの8mmじゃ護衛をするには厳しいわ。その代わりにc v軍団には別の役目をしてもらうわ」

「なんだその役目って？」

「それはアンチヨビが良く知っているんじゃないの？でしょアンチヨビ？」

そう言うフェルナンディアにアンチヨビがふふんと笑い

「もちろんだフェル。もう私の頭には画期的な作戦がある。この作戦と秘密兵器があれば大洗や黒狼など一捻りだ」

嬉しそうに笑うアンチヨビに

「でも、ドゥーチエ統帥。相手にはパンターがいるんですよ。それもあの黒狼の？秘密兵器で倒すことができるんでしょうか？」

「うっ……」

カルパツチヨの言葉にアンチヨビの表情が固まる

「そうなんだよなくいくら秘密兵器でもあの黒狼がな……」

「大丈夫よ。殲滅戦ならともかくフラッグ戦ならまだ勝機があるわ。相手より先にフラッグ車を仕留めれば勝ちなんだからな。マジノ戦の時だってそうだったでしょ？」

「おおっ！そうだったなフェル！そうだな相手のフラッグ車を仕留めれば勝ちなんだ！」

「そうっすよアンチヨビ姐さん！」

元気になったアンチヨビにペパロニが相槌を打つのだが

「……て、ペパロニお前何を読んでいるんだ？それ以前にお前食べながら雑誌を読むな行儀が悪いだろ!？」

と隣でパスタを食べながら雑誌を読むペパロニに注意するとペパロニが

「いや、ごめんす姐さん。実はこの雑誌。うちの後輩に流行つて……」

「ん？どれどれ？」

と、そう言いアンチョビはペパロニの見ている雑誌を見るとそこに書かれていたのは……

「恋愛占い？」

「はい。自分の誕生日で恋愛を占うものなんすけど、あたいには興味ないすつけどね」

なら、なんで読んでいるんだつとつっこみたいアンチョビだったが、カルパッチョが

「そう言えば統帥ドワーチエの誕生日はいつでしたっけ？」

「え、なにを言っているんだカルパッチョ。私は恋愛など……」

「アンチョビの誕生日は9月23日よ」

「ちよつとフェル!？」

「まあまあ、これも一興でいいじゃないの。ペパロニ九月のページ開いてくれる？」

「はいっす！えくと九月、九月……あ、あつたつす！」

フェルの言葉にペパロニはページをめくり、それを見たフェルが

「えくと何々？『あなたは恋愛運はとて素晴らしいです。あなたは明後日、まるで恋愛小説のように素敵な殿方に出会えるでしょう。しかしその人の心を射止められるのはあなたの勇気次第です』……ですつて!!」

「良かったですドワーチエね統帥」

「え？ちよつとお前ら／＼／＼べ、別に私は彼氏なんか……」

二人の言葉にアンチョビは顔をまるで赤信号みたいに真っ赤にする。するとフェルは

「ま、占いが当たるかどうかは明後日のお楽しみね。でしょ二人とも？」

「そうですねフェルさん」

「よくわからないすつけど。そうっすね」

と、そう言うアンチョビは

「だからそうじゃないって！わ、私は先に行くからな／＼／＼ご馳走さん！」

と恥ずかしさのあまりアンチヨビは顔を真っ赤にしたままお盆を持ち上げてその場を去る。それを見た三人は

「姐さん恥ずかしがってるっすね〜」

「そうねペパロニ」

「初心だねアンチヨビも」

と、少しだけ微笑んで言う中、アンチヨビはお皿を食堂へ戻し、先ほどの占いのことを思い出す

『あなた恋愛運はとていいです。あなたは明後日、まるで恋愛小説のように素敵な殿方に出会えるでしょう。しかしその人の心を射止められるのはあなたの勇気次第です』

「（明後日か・・・もしその占いが本当なら、素敵な相手が来てくれるといいな）」

と、また顔を赤らめてそう言うのであった……………

## 二度目の偵察です

「ふわあ〜」

俺は今、あくびをしながら学校の廊下を一人歩いてきた。今は授業中なのだがいかんせん、男子生徒は俺一人だし、授業中に見られる女子生徒の視線が正直言って痛い。ワンサマーの気持ちも少しはわかるような気がする。え？授業はどうしたって？もちろん自主的に休養しただけさ。別にさぼりではない。まあ武部たちが見たらうるさいけどな。それにちゃんとテストの点数は平均以上取っているのでプライマイゼロで大丈夫だ。

「BTに88mm・・・一日だけですごい戦車が見つかったものだ・・・」

俺は先日の戦車捜索の時に発見されたあの戦車を思い出す。BT戦車はロシアの誇る快速戦車でありその速度は52キロ。ぱんたーやt34並みにはやい。しかもBTの最大の特徴は履帯が外れてもそのまま走行でき、しかもその速さは72キロ10式並みの速さだ。まさに天下のクリステイ式というやつだ。そう言えば、あいつの愛車もBTシリーズの奴だったっけな。あいつ、今何をしているのだろうか。また借りると称してどっかから戦車を盗んでいるのかな・・・そんなことを考えていると

トントン

「ん？」

誰かに背中をつつかれ俺は背後を見るが誰もいない。すると・・・トントン

今度は別の肩をつつかれる。一体誰だろう？そう思い、反対側の方へ振り返ると誰かの指が俺の頬をつついて・・・

「引っ掛かったね〜武藤君」

「か、会長？」

俺の頬を突っついたのは干し芋を片手にいたずらな笑みをする角谷会長であった。すると角谷さんは

「ところで武藤君。こんなところで何をしているのかな？確か今は授

業中のはずだよ?」

「そのセリフそっくりそのまま返しますよ角谷さん。あなたこそこんなところで何をしているんですか?」

「私のクラスは早めに授業が終わったんだよ。それよりも武藤君の所はまだ授業中だよね?もしかしてさぼりかな?」

「違います。自主的に休養しただけです」

「なるほど、なるほど、物は言いようだねくまあ、それはいいんだ。とりあえず武藤君今日の放課後生徒会室に来てねく」

「は・・・はあ・・・」

角谷さんはそれだけ言うと、どこかへ去ってしまった。放課後に一体何があるのだろうか・・・

放課後、俺は生徒会室に向かい

「武藤。入りますよ」

と、そう言いドアをノックし部屋に入ると

「あれ!?武藤殿!」

「あれ?秋山?」

生徒会室に入るとそこにはいつものように生徒会三人組の他、なぜだか秋山がいた。あれ?なんでこんなところにいるんだ?俺が不思議に思っていると

「遅いぞ!武藤。貴様で最後だ!!」

と、河嶋さんが怒鳴る。いや最後って部屋にいるの秋山だけだろ?

「まあまあ、河嶋そう目くじらを立てないで。武藤君まつてたよく」

角谷さんが生徒会長専用の椅子に座り、干し芋を頬張りながらニコニコと笑ってそう言う。

「で、何か用ですか?もしかして二回戦に向けての作戦会議とかですか?」

「それだったら西住やほかの車長を呼んでいる。今回は作戦会議ではないぞ武藤」

「そう言えばそうですね……そう言えば今日で一回戦の試合は全て終了されたんですね。誰が残ったんですか？」

「確か……黒森峰とプラウダとグロリアーナ……だったかな」  
どれも強豪か……まあ当然と言えば当然だな。黒森峰は去年は優勝はできなかったものの9連勝したという実力はまだまだに健在だ。またプラウダやグロリアーナもそれは同じことだ。

「そうですね……ところで角谷会長。作戦会議でないんならなぜ俺と秋山を呼んだんですか？ただ単に呼んだわけじゃないですよね？」  
と、俺がそう訊くと角谷さんは意味ありげな笑みを見せる。あの笑顔……何か企んでいる時の笑顔だな……

「いや〜武藤君は本当に感が良くて助かるよ〜この前のお疲れ会で秋山ちゃんと一緒にサンダースに潜入偵察に行ったって言っていたよね？」

「いや、潜入っていうか、向こうの隊長と知り合いだったからアポ取って自由に見学させてもらっただけなんだけどね」

「はい！武藤殿のおかげで隅々まで情報を得ることができました」

「でき、今回も武藤君や秋山ちゃんたちにもう一度潜入偵察に行ってきた欲しいんだよね〜アンツイオ高校に」

やっぱりか……

「はい！偵察任務ならこの不肖、秋山優花里にお任せ下さい!!」

秋山の奴は相変わらずやる気充分みたいだが、まあ他校の戦車が見れるんだから戦車好きの秋山にとっては願ったりかなったりの依頼なのだろう。そして秋山は俺のほうへ顔を向けて

「武藤殿も一緒に行きますよね？」

と、期待を込めた目で俺にそういうと俺は少し頭を掻き

「まあ、良いか……俺もアンツイオがどんな戦車を保有しているか見てみたいしな」

そう言うとき秋山は嬉しそうな顔をする。すると、河嶋さんは

「よし、なら決まったな。武藤。お前、アンツイオ高校に知り合いはいるか？」

「いや、あいにくだがアンツイオに知り合いはいないよ。だから今回は本格的なアポなし潜入偵察だな」

「武藤君・・・なんか楽しんでる？」

「ええ、まあこんな本格的な潜入調査は中学以来なので」

昔はよくみほと一緒にエリカを巻き込んで相手の学校の潜入偵察とかしたっけな・・・あの時のみほは今の大人しい性格ではなく、子供の頃みたいなやんちゃさが少し残っていたっけな。よく相手の学校連中に見つかって三人で必死に逃げたり、学校に戻ったら戻つたで俺たち三人はロスマン先生に拳骨を喰らって怒られたりと今思えば楽しい思い出だ。まあその時エリカは「偵察なんて二度とごめんだわ！」って怒っていたけどな。

「まあ、とにかく、二人ともアンツイオの潜入偵察よろしくね」

と、笑顔で頼まれるのであった。その後、学校を出た俺と秋山は潜入捜査の準備のためとある場所にいた

「またいつもの戦車倶楽部か・・・」

「いいじゃないですか武藤殿。ここにはありとあらゆるグッズがあるんですよ」

「それはそうだけど・・・まあ、良いか」

今俺たちのいる場所は戦車倶楽部まあ秋山が行く場所とくればここ以外にはかはない。確かにこの店なら潜入捜査に必要なものがたくさんある。因みに秋山がサンダースに潜入する際来ていたサンダースの制服もここで買ったみたいだ。なんで他校の制服なんか売っているのが不思議だ。

「そう言えば、秋山。アンツイオって確かイタリア風の学校だったよな？」

「ええ、なんでも創始者がイタリア人でイタリア文化を日本に伝えようとした、イタリア風の学校らしいですよ」

「イタリア風・・・とすると使用する戦車も」

「はい。イタリア戦車だと思います。先の一回戦ではCV33とセモヴェンテM41を使用していたこの月刊戦車道に書かれています」

秋山はそう言い俺は彼女の持っている月刊戦車道の内容を見ると

一回戦についての内容が書かれていて、その記事には『大洗に続き、またも番狂わせ！アンツイオが防御の強いマジノ女学園を破る!!』と書かれていた。そして下の記事には記者がアンツイオの選手Pさんにインタビューしている記事があった。その内容は

『二回戦は大洗との戦いですが何か意気込みはありますか?』

『応さ！聞いて驚け！我がアンツイオ高校に新型秘密兵器が2輛投入されたんだぜ！これさえあれば大洗なんて目じゃないぜ!!』

『はあ……はあ……で、その秘密兵器とは……』

『え？確か……イタリアの……』

『ちよーッとまったあー!!ペパロニ。これ以上は駄目よ！記者の皆さますみませんけど、取材はここまでにします』

(突如現れたイタリヤ人少女の乱入により取材はここまでになります)

と、書かれていた……何やってんのアンツイオの人……

「秘密兵器って何でしょうね？武藤殿？」

「さあな……まあ、大体は想像できるな。イタリア戦車を保有し、さらにセモベンテより上の秘密兵器とくれば……」

「重戦車……P40ですか？」

「恐らくな……まあそれは明日の潜入偵察でわかるだろう。」

「そうですね！あ、武藤殿！これ購入してきますね！」

と、そう言い彼女が持っていたのはアンツイオの生徒服なのだが……

「なんで二着あるんだ？」

「それは武藤殿が着るんですよ」

「ちよつと待てアンツイオは女子高だぞ。俺に女装しろってか？」

「え？結構似合うと思ったのですが？だめですか？」

「すまない秋山それだけは勘弁してくれ……」

「そうですね……じゃあ、これは予備として買いますね」

とそう言い秋山は会計所に向かうのであった。確かにイタリア風だけあってアンツイオの制服はなかなかいいデザインだが女物はさすがに駄目だ……。俺ははあくため息をつき雑誌にもう一度目



を通すと隣の記事に黒森峰のことが書かれていた。そして取材記事には『新副隊長、逸見エリカさんにインタビュー!!』と書かれていて見出しにはこう書かれていた

『ついに私たちの時代がやって来たわに!』

「………わに?」

俺はその見出しを見て首をかしげる。わにって……エリカの奴また中二病がぶり返したのかな?確か中学初めのころ逸見の奴敵戦車を見つけた瞬間、なんか長い名前の必殺技とか叫んでいたな。確か………

「黒森峰最大技敵戦車撃滅木っ端微塵砲撃……だったけか……」

### 黒森峰女学園

「それを言わないでえええー／＼／＼!!」

「い、逸見さんどうしたの?」

一方、黒森峰ではエリカが突如顔を真っ赤にして叫び傍にいた赤星が苦笑してそう言おうと

「だ、誰かが私の黒歴史の一部をしゃべったような気がしたのよ……もしかしてロスマン先生?」

「はい?」

と、こんな会話がされていたとかないとか………

the・アンツイオ高校です!

俺と秋山は今、コンビニ定期船に乗って二回戦の相手であるアンツイオ高校の学園艦に向かっていた。因みに格好はいつもと同じようにコンビニ店員の格好になって目立たないようにしている。そしてしばらくして俺たちの乗る定期船は目的地であるアンツイオ高校に到着する

「は〜ここがアンツイオ高校ですか〜」

「すごいな・・・まるでイタリアだな」

俺と秋山が船から降りまず目にしたのは、まさにイタリア!というような世界であった。どこを見てもイタリア風の噴水に建物、しかも地面を見れば欧州では当たり前なレンガの道。そしてところどころ流れるイタリア風の音楽。もはやどう見ても日本もとい日本の高校という感じじゃなかった。

「え?武藤殿イタリアに行ったことがあるんですか?」

「いや、ないけど、雑誌とかで見るイタリアの観光地に瓜二つだなくって思ってたさ」

「はあくそうですか・・・確かに写真で見たイタリアの街にそっくりですね」

と、秋山はアンツイオ高校の風景を見てそう言う俺は

「それじゃあ、さっそく見ましよう武藤殿!」

「ああ、そうだな・・・て、秋山!」

「ん?どうかしたんですか武藤殿?」

「いや、どうかしたって、お前いつアンツイオ高校の制服に着替えたんだ!?!」

そう、俺は秋山の服装が先ほどまでのコンビニ店員の姿からアンツイオ高校の生徒の服に変わっていることに気付き驚く。すると秋山はきよとんとした顔で

「え?ついさっきですけど?」

「え?」

俺は秋山の言葉に絶句する。俺が秋山から目を離れた時間はわず

か3秒。その間に着替えたというのか？だとすると最早神業といえるな・・・俺がそう思っている」と

「ほら、早くいきましょ武藤殿!」

「あ、ちよい、秋山!」

秋山に引つ張られ俺は秋山とともにアンツイオ高校の潜入偵察を始めるのであった。そしてまず最初に俺たちが目にしたものは・・・「すごい数の屋台だな・・・今日は祭りでもあるのか?」

「そうですね・・・大洗でもこんな数の屋台は学園祭くらいしか見ませんから・・・あ、武藤殿カメラ回ってますか?」

「おう!ばっちりよ!」

俺はカメラをもつて笑う。すると秋山はジェラートを売っている生徒に近づき

「あのくすみません」

「ん?なに?」

話しかけられたジェラートを売っている女子生徒に声をかけると女子生徒二人はこちらを向くと秋山が

「あの、私ここに転校したばかりなんですけど。今日は学園祭かなんかですか?」

「ん?いつもの日だよ?」

「それにしては出店が多い気がするんですが?」

「うちらはいつもこんなだって!いろんな部や同好会がこうして店だしているのよ私たちの学校で貧乏だからこうやって屋台出して少しでも部費の足しにしないとね」

「なるほど。ありがとうございました!」

「いいってことよ・・・とこころで」

秋山が二人にお礼を言うとその二人は俺のほうを見る

「その男は誰?もしかして彼氏?」

「いや・・・おれは・・・はいそうです!」あ、秋山!」

〔武藤殿ここは話しを合わせてください〕

俺は秋山の突然の言葉に驚く。え!?秋山何を言っているんだ!?

「へく彼氏ねうちの学校女子高だけどわざわざ連れてきたの?」

「はいそんなんですよ！今日はわざわざ遠くから遊びに来てくれて。それで私の学校を案内しようと思ひまして、そうですよね〜？」

秋山がそう言い俺の顔を見る。すると秋山は俺にウィンクする。それを見た俺は秋山が何を言いたいのかわかり

「え？・・・ああ！そんなだよ！彼女とは久しぶりに会ってさ！だから思い出作りとして彼女の母校を観光しようかと思つてな」

俺は秋山に合わせてそう言うと言つてジェラート売りの生徒二人は

「へ〜そんなだ〜じゃあ、今回はその熱いお二人さんにジェラートをプレゼントするよ！しかもトリプルでね！しかも200円の所を今回サービスでタダであげちゃうよ〜!!」

「え？いや、それは悪いよ」

「言いて、良いつて。せっかく彼氏とのデートなんだ！今日ぐらいジェラートの一個や二個ぐらいただで提供してもバチは当たらないわよ！ほら」

「あ、ありがとう・・・」

俺はジェラートを受け取ると生徒二人は

「で、あんたら、この後どこに行くんだい？デートスポットならアンツイオ名物トレビーノの泉が有名だよ？」

トレビーノ・・・トレビの泉みたいなものか？俺がそう思つていと

「あ、いえ。私と彼が戦車好きなんで、戦車道チームの練習が見たいんですよ」

「そうかい？でも今は戦車道部は練習してないよ？」

「え？そんなんですか？」

「ええ、なんでも燃料が足りないってね。でもなんか午後にイベントがあるらしいわよ」

「イベント？」

「ええ、ここより先の方に戦車道部の連中も屋台やっているから詳しい話はその子から聞きなよ」

「ありがとうございます！」

「すまない感謝する」

俺と秋山は二人に礼を言い、その場を後にした。そして今俺と秋山はその二人からもらったジェラートを食べながら歩いていった。

「この学校の人たちはいい人ですね武藤殿」

「ああ、サンダースのようにフレンドリーだな……というより秋山。さつき俺のこと彼氏といった時は驚いたぞ？」

「アハハ、すみません。その方がいろいろと都合がいいと思ひまして。あ、あの迷惑でしたか？」

「いや、迷惑なわけないだろ？でもさ秋山には俺よりも、もっといい男の方がいいと思うぞ？秋山可愛いんだからさ」

「か、かわ／＼／っ!？」

義弘の言葉に秋山は耳まで顔を真っ赤にしてしまう。すると義弘は

「ん？どうしたんだ秋山？顔赤いぞ？」

と、心配そうに顔を覗き込むと優花里はさらに顔を赤くし

「な、なんでもありません！……あ、武藤殿あその屋台戦車の形をしていますよ！きつとさつき言っていた戦車道部の屋台だと思います。行きましよう!!」

「お、おう……（どうしたんだ秋山の奴？）」

顔を真っ赤にしながら慌てて屋台の方へ行く秋山に義弘は自分のした行動に気付かず首をかしげるのであった。そしてすぐ秋山の後を追ひ、戦車の形をした屋台につくと……

「アンツイオ名物鉄板ナポリタンだよ〜美味しいパスタだよ〜」

と黒いショートヘアのコック服を着ている子が料理をしながら元気にそう言うとその子は俺たちに気が付き

「あ、そのカップルも食べてきな〜」

と愛想よく笑いウィンクすると

「まず、オリーブオイルはケチケチしなくい。具は肉から火を通して、今朝取れた卵をトロトロになるくらい……そして最後にアンツイオ秘伝のトマトペーストを混ぜて、パスタのゆであがるとタイミングを合わせて……はい！アンツイオ名物鉄板ナポリタンの完成だ！」

と、彼女は見事手際であつたという間にパスタ料理を作り上げた。その時間なんと15秒！三分クッキングも真つ青なスピードであつた。そして彼女は俺と秋山に鉄板ナポリタンを出して

「はい。一つで300万リラね」

「はっ!?!」

「えっ!?!いつの時代の為替レートですか!?!」

俺と秋山はその少女の言葉にびっくりする。そりやそうだろ?リラって言ったら、昔のイタリアの通貨の単位だぞ、て、この学校。売っている商品すべて円じゃなくてリラなのか!?!

「む、武藤殿どうしましょう。私、イタリアのお金持っていますせん。．．．．．武藤殿はイタリアのお金持っていますか?」

「すまない秋山。あいにく円とドイツの金しか持ってない。．．．」

俺と秋山が困っていると、先ほどの子が

「あ、あの。．．．お二人さん。三百円って意味なんすけど?」

「え?」

俺と秋山はその子の言葉にまた言葉を失う。そうなら、そうと素直に三百円と言ってほしかった。そう思いつつ俺と秋山はパスタの料金である三百円を支払いパスタを食べると

「美味い!!」

その味は絶品であつた。このポリウムと味で三百円!これは夢のような料理だ。この味なら千円以上払ってもいいくらいだ。それを聞いた子は

「だろ」

と嬉しそうに言うと、秋山が

「そう言えばこの屋台って戦車道部の人が開いているんですよ?」

「そうだけ。あ、私この部の副隊長のペパロニって言うんだよろしく」

と、気さくに言う副長のペパロニさん。すると秋山は

「あ、戦車って言えば最近新型が入ったって聞いたんですけど?．．．．．」

秋山はさりげなく今回の任務である新型戦車のことを聞きだそうとするのだが。．．．

「何〜どこで聞いた!」

「あ．．．すみません」

と怪しむように秋山を睨み、秋山は委縮して謝るのだが．．．．．  
「おめえたち通だね〜ここだけの話っていうか超秘密なんだけどさ〜」

笑顔でこそそ話するしぐさを取って俺たちにそういう。てか超秘密なら話さないほうがいいんじゃないか?もしかしてこの副長さんおつむ弱いのかな?そんなことをよそにペパロニさんは

「重戦車と中戦車を手に入れたんだ!聞いて驚け!イタリアの．．．．．なんだっけ?」

「え、え．．．．．とイタリアの重戦車と言えばP40ですか?」

「そう、それぞれ!P40をそれは爪に火を点すくらい稼いであたいらの代でちょうど買えたんだ!それにその余った金額でフラッグ車を護衛するために中戦車も購入できたんだよえ．．．．．と確かM15だったけ?それでアンチヨビ姐さんやフェル姐さん．．．．．あ、うちの隊長と先輩なんすけど。特に隊長のアンチヨビ姐さん喜んじやって毎日コロッセオの周り走り回っているんすよ。燃料あんま無いからフェル姐さんに注意されているのによ〜」

「あ．．．．．はあ．．．．．」

。俺たちの任務はこれで達成したが、ペラペラ極秘情報をしゃべるペパロニさんに俺たちは苦笑してしまう。するとペパロニさんは

「あ、そうだあんたらP40見たければ午後にはコロッセオで公開されるから見に行った方がいいすよ!」

「ありがとうございます!!」

「感謝する」

「いいってことよくそれよりもお二人さん観光楽しんで来いよ!!」

と笑顔で見送られて、俺たちは屋台を後にするのであった。そしてペパロニは

「いや〜いい二人組だったなくもしかしてデート中だったのかな?宋だったらもうちよつとパスタのポリウム上げればよかったかな?」

鉄板ナポリタンを作りながらそう言う

「どう？ペパロニちゃん。パスタの売り上げの様子は？」

「あ、フェル姐さん！」

と、そこへ先ほど話していたフェルがやってきてそう言う。ペパロニは

「それがもう大繁盛ですよ！先ほどもカップルがやってきてパスタ買ってくれたんですよ？」

「カップル？うちの学校は女子高だけど？男がいるのはおかしいじゃない？」

「たぶんうちの生徒が彼氏連れて学校案内しているんじゃないですか？それにそのカップル戦車に興味があるらしくて特にP40のことが知りたがってたつすよ」

「なんですって？……ペパロニ……もしかしてそれ話したの？」

「はい。そうすっけど？」

その言葉を聞いてフェルはため息をついてしまい

「……まあいいわ。この前の取材雑誌でどの道知られるのだから……で、その二人組ってどんな子だったの？」

「はい。一人はもさもさ髪の大人しそうな子でもう一人は黒い服着た女性のような顔立ちの男でしたよ？」

「もさもさ髪に女のような男？……もしかして？」

と、フェルは懐から一枚の髪を出す。その紙には『サンダースよりこの二人には要注意』と書かれていてその写真には先ほどの二人組の特徴と一致する二人の写真が貼られていた。それを見たフェルは「ペパロニ？その二人はどこに行ったか分かる？」

「はい。確か午後のコロッセオで開かれるイベントを見に行くって言っていたつす」

「そう、ありがと」

とそう言いフェルはコロッセオの方へ行くのであった。



一方、義弘たちは……

「ふわあ〜」

俺は一人であくびをしている。秋山と俺はコロッセオのイベントまで時間があるためサンダースの時と同様、今自由行動をとっている。そして俺は一人でアンツイオ高校を回っている。学校内には生徒以外にも観光だろうか他校の生徒もちらほらと見える。聞けばこの学校はイタリア文化を広げるため、学園長が他校の生徒も出入りOKにしているんだとか……そんな中、俺はいろんなところを回る。スペイン風階段やトレビーノの泉。そしてイタリアのポンペイ遺跡から発掘され送られた古い神殿の柱とかな。そして集合時間が使っていて俺はコロッセオに向かっていた。すると

「ちよつとやめてくれ!!」

「ん?」

何処からか声がし、そこを見ると、おさげをして眼鏡をかけた女の子が変な男というか他校の不良学生に絡まれている

「いいじゃないかよ。俺たちここの観光に来ているんだけど道わからなくてよ」

「そう、そう。そこで君にここの案内をしてほしいんだよ」

「だから、私は今急いでいるんだ!」

「いいじゃないかよそんな用事放っておけばいいじゃないか」

強引に彼女の腕を引っ張る不良二人組に俺はため息をつきその二人に近づいて

「おい、止めなよ。その子、嫌がっているじゃないかよ」

俺がそう言うとその二人組は俺を見て睨み

「ああ!?なんだよチビがお前にはかんけないことだ!」

「そうだぜチビ。おら、さっさと去れよ。これからこの子とデートなんだ」

「……チビで悪かったな。それと俺はな嫌がっている女の子に無

理やり連れて行くこうとする輩を見ていると放っておけない質だな」  
「うるさい、さっさと行かねえんなら!!」

不良の一人が俺に殴りかかろうとするが俺はそれをひよいつとよけ腹に膝蹴りを喰らわせた後奴の両足を掴みブンブンとジャイアントスウィングしてもう一人の不良の方へ投げ二人は倒れ、投げた不良は目不良は目を回して気絶し、ぶつけられた不良は

「こ、こいつ・・・チビのくせに強い・・・」

「チビ、チビ、うるせえよ・・・さて・・・まだやるか?」

俺は威圧を込めた目でそう言う

「ひっ!?!す、すみませんでした!!」

と不良は顔を青ざめて気絶した仲間を抱えて逃げ出すのであった。そして俺は

「やれやれ・・・で、あんた大丈夫か?」

「え?・・・ああ、ありがとう」

俺がそう言うとなんかお礼を言う園間彼女の顔が若干赤い気がするのだが気のせいだろうか?するとその子は

「あ、あの・・・あんたは?」

「俺か?御覧の通りのただの観光客さ。それより怪我はないか?」

「ああ、大丈夫だ。助けてくれて本当にありがとう・・・」

「言いてことだよ。じゃ、俺。これから行くところがあるから、それじゃあな」

「あ、ちよつと待て、せめて名前は・・・」

彼女は呼び止めようとしたのだが、義弘は聞こえなかったのかそのまま走り去って行ってしまったのだった。そして残されたその子は

「・・・」  
顔を真っ赤にしながらその場にただ一人、ポツンと立っていたのだった

「あ、いけない早くコロッセオに行かないとイベントに遅れる!ドーチェが遅れたらみんなに示しがつかない!」

と、そう言い彼女も走り出すのであった

アンツイオの秘密兵器です！

「はあく誰だったんだろうな……」

先ほど義弘に助けられたおさげ眼鏡の少女はコロッセオにある更衣室で眼鏡をコンタクトに変えおさげ髪をツインテールの髪型に変えながらそう呟く

「まるで恋愛小説のような出来事だったな……ん？　そう言え  
ば……」

少女は雑誌を取り、恋愛占いコーナを読み

「ペパロニが渡した、あの恋占い……当たっている。もしかしてあいつが私の運命の……／／」

そう呟いた瞬間、彼女の顔は真っ赤に染まる。すると……  
「ドゥーチェ。準備はできましたか？　そろそろ出番ですよ？」

金髪の少女が部屋に入ってそう言うと、少女は慌てて髪にリボンをつけて

「そ、そうか！　すぐに行くカルパッチョ！」

と、そう言うと気合を入れるため両手で頬を叩き

「よし！　ドゥーチェアンチヨビー！　行くぞ!!」

そう言い部屋を出るのであった

「随分と人が集まっていますね武藤殿。皆さん戦車道部の秘密兵器を見に来たんでしょうか？」

「コロッセオの中央に何か布で隠されたのがあるし、みんなの視線もそれに向けているから、そうだろうな」

秋山の言葉に俺は頷き、そしてコロッセオの中央を見る。そこには二つのなにかが置かれていて二つとも大きな布で包まれていた。そして周りの生徒たちが

「ドゥーチェ遅いな」

「まさか寝坊かな？」

「何のお披露目だろうね？」

と、ざわついていると急にコロッセオから音楽が流れ出し

「諸君！待たせたな！このアンツイオの統帥、アンチヨビの登場だ!!」

と、コロッセオの舞台上になっているところから軍服姿でツインドリルをした少女が現れる。どうやら彼女がアンツイオ高校戦車道部の隊長らしい。確かにカリスマ性というか統帥って感じがする。鞭持っているし……

「あ！ドゥーチェ!!」

「いつの間!?」

「ドゥーチェだ!」

「ドゥーチェ!!ドゥーチェ!!ドゥーチェ!!ドゥーチェ!!」

と、生徒たちはアンチヨビさんにドゥーチェコールをする。すごい声援だ。空気がびりびり震えているのがわかる

「すごい盛り上がりですね武藤殿……」

「あ、ああ……」

俺と秋山はあまりの気迫に驚いていると、アンチヨビさんはコホンと咳ばらいをし代から降りると

「さて、諸君。貴殿らも知っている通り、我がアンツイオ高校戦車道部は二回戦に向けて新型戦車を投入した！しかも二両もだ!!さて、それではお披露目しよう！これがアンツイオの必殺秘密兵器だ!!」

鞭を振りかざしそう言うと言布がおろされ隠されていた秘密兵器が姿を現す。その車両はイタリア軍の重戦車P40と同じくイタリアの中戦車M15/42であった。それを見た秋山は

「すごいです!!P40を生でしかも本物を見れるなんて、それにM15中戦車も!」

「ああ、俺も信じられん」

秋山は興奮してそう言い、俺もスマホでP40の写真を撮る。いや、P40って言ったらかなりレアな戦車だぞ?そんなレアな戦車を見て写真を撮らない戦車好きはいないだろ?秋山だって写真を撮りまくっているし。そして隊長であるアンチヨビさんはP40の砲塔に昇り、びしっとポーズを取り

「はっ！これで大洗なんぞ一捻りだ！」

「さすがドゥーチエー！」

「ドゥーチエ。こっち向いて〜」

生徒たちが呼びかけるとアンチヨビさんはこつと笑いその生徒たちにポーズをする

「現場は大変な盛り上がりです」

『『ドゥーチエ！ドゥーチエ！ドゥーチエ！ドゥーチエ！』』

と、また生徒たちがドゥーチエコールをし始める。ノリと勢いのア  
ンツイオ校と言われるだけあつてこれはすさまじいものだな。そし  
てドゥーチエコールは15分も続いた

「いつになったら終わるんでしょうか？」

「さあ・・・それにしてもよく飽きないな・・・」

俺と秋山が引きつった顔をしていると

「よおーし！いつまでこうしているのもあれだ・・・」

おっ、やつとアンチヨビさんが止めた。

「あ、ようやく終わりみたいだな・・・」

「次は戦車練習でしようか？」

俺と秋山はため息をつくのだが、詰めが甘かった。

「よおーし！！このままここで戦勝祈願を宴会だー！！湯を沸かせ釜を炊  
けー！！」

「『おおおー！！！！』」

「（ええーっまだ騒ぐのか!?!）」

俺と秋山はアンチヨビさんの言葉に驚く。いや、戦勝祈願の宴会も  
大事だけど、練習しろよ・・・

「あ、秋山・・・帰るか？重要な情報も手に入ったし、長居は無  
用だ」

「そ、そうですね・・・」

俺たちはそのままこの騒ぎに紛れて、帰ろうとしようとしたのだ  
が・・・

「あら？あなた達。今日は新型車両が入ったお祝いよ。パスタを食べ  
て行かないなんて〜よっほど忙しいのかしら？」

「っ!?」

急に背後から誰かが俺と秋山に抱き着き耳元で

「それとも……早く大洗に情報を持ち帰りたいのかしら? オット  
ボールちゃんにブラツキーちゃん?」

「っ!?」

俺と秋山はまるでさび付いて動きの悪いロボットのようになら  
を向くと……

「我がアンツイオへようこそ。大洗のスパイさんたち♪」

イタリア人? なのか外国人らしき茶髪の子がとびつきの笑顔で  
俺たちに言う。逃げたいが両肩をがっちりつかまれているうえ、同じ  
く白髪と黒髪の外国人らしき少女に囲まれて逃げ道を失った。

「さて、お二人さん。あなたたちをこのまま帰すわけにはいかないわ  
よ」

「あ、あははは……」

俺と秋山は苦笑するしかなかった。こうして俺たちは掴まってし  
まった。そして

「姐さん。敵のスパイを捕まえましたよ! 捕まえたのはフェル姐さん  
ですけど」

「よくやったペパロニ。フェル……ん!? お前は?」

「え?」

アンチヨビさんは俺の顔を見て驚いた顔をする。え? 俺の顔に何  
かっついてるのか?

「あ……あの俺の顔に何か?」

「い、いや……何でもない。コホン。さて……我がアンツイオに潜  
入するなんて大胆なことをしてくれる……」

「ドゥーチエ。この二人をどうしますか?」

「ふふふ……もちろん我々のやり方でもてなすに決まっているじや  
ないか……」

鞭をパンパンと叩きいたずらな笑みで笑う。一体何をされるのだ  
? もしかして試合が終わるまで拘束されるのか? そう思ったのだった  
のだが……

「アンチヨビ姐さん。パスタ料理できました!!」

「よし!よくやったペパロニ。カルパッチョ」

「はい。ラザーニャ完成しました!」

「よろしい!フェルたちは?」

「Ok Ok。ドルチエの準備はもうできているわよ」

「よろしく!完璧だ」

捕まった後、俺たちはなぜか豪華なテーブルに座らせ、アンチヨビさんたちは何か料理を作っている……え?何がなんだ?

「む、武藤殿……こ、これは……」

「俺にもわからん……」

秋山は何が起きているのかわからない顔をし俺に言う。すると

「ホイ、お二人さんお待ちどう様。わが名物鉄板ナポリタン以下豪華イタリ안의フルコースだ!!」

「どんどん食べてくださいっすよ!!」

「とても美味しいですよ?」

「そうよ。せっかくアンツイオに来たんだからアンツイオの料理を食べないで帰すわけにはいかないわ」

「えっと……つまりどういうこと?」

「つまりだ。客が来ているのにもてなさないのはアンツイオの恥ということだ!まあとにかくパスタ食っていけ!うちのパスタは絶品なんだぞ!」

「アンツイオの大事な伝統なんですよ」

「は……はああ」

まあとにかく俺と秋山はアンチヨビさんたちが作ってくれた料理を食べると

「美味い!!」

屋台の時もそうだが、ここの料理は本当に美味しい。

「だろ!どんどん食べてくれ!!」

俺と秋山の言葉にアンチヨビさんは笑顔で言う。まあ自分の作った料理を褒められてうれしくない人はいない。すると俺は一つ疑問に思うことがあった

「なあ、俺たちどうなるんだ？」

「ん？どうなるって？」

「いや、俺たち他校のスパイだぞ？拘束されるんじや・・・」

「ああ、最初はそのつもりだったけど、パーティーが終わったら別に帰っても問題ないぞ。助けてもらった礼もあるしな」

「え？」

「いや、なんでもない！」

「それに私たちの高校は女子高ですからね・・・」

「そうっすね」

とアンチヨビさんは顔を赤くしそう言う。すると先ほどの茶髪の子が

「ねえ？あなた・・・あの黒狼こと高杉義弘でしょ？」

「ああ。後今の名は武藤義弘だけだな。えっと・・・あなたは？」

「ああ、紹介が遅れたわ。私はフェルナンディア・マルヴェツエ。ア  
ンツイオ高校戦車道部副隊長補佐をしているわ。気軽にフェルと呼  
んで。それよりあなたのことは我が祖国イタリアはおろかヨーロッパ  
でも知られているわよ。それにあなたドイツでも派手にやったら  
しいわね。さすがは『東洋のバルクマン』ね」

「よくご存じで・・・」

「え！マジっすか！お兄さんがあの黒狼なんすか!?!」  
とフェルさんの言葉にペパロニが目をキラキラさせて俺に迫る。  
てか近いです。

「あ・・・ああ、まあ一応そう呼ばれてる」

「マジで!?!スゲー!!伝説の戦車乗りに会えるなんて夢のようっす!な  
あサインくれ!あ!それと兄貴って呼んでいいすか!?!」

「お、おい落ち着けよ・・・それに顔が近い」

「ああ、すまないっす。対興奮しちやつて。あ、私副長のペパロニっ  
て言うんだよろしく武藤の兄貴!」

無邪気に笑うペパロニに、隣にいる秋山は少し複雑そうな顔をして  
いた。すると金髪の少女が

「あ、あの・・・ちよつと訊いてもいいですか？」



「えつと……あなたは誰ですか？」

秋山が首をかしげると

「あ、私は同じ副長のカルパッチョと言います。えつと……」

「あ、私、秋山優花里と言います！」

「ふふ、よろしく秋山さん武藤さん。それで聞きたいことがあるんです」

「なんですか？」

「大洗には私の親友も通つて、最近戦車道始めたんですけど、たかちゃん、鈴木 貴子つて子を知ってますか？」

「…たかちゃん？」

俺と秋山は首を傾げ考える。戦車道メンバーで鈴木のみづの人はいない……いや一チームだけ本名が不明な人たちがいたな……  
〔武藤殿恐らくカバさんチームの人たちの誰かと思います〕

「ああ、それ俺も思った……でも誰だろう？）あ、あの…その子の特徴わかりますか？」

「え？えつと……確かローマの歴史が好きで小さい頃から赤いマフラーをしているんですが……」

「ああ〜」

カルパッチョさんの言葉に俺と秋山は貴ちゃんとは誰かというのがはつきりわかった

「カエサル殿のことですね……」

「そうだな……と、言うよりあいつ鈴木貴子つて言うんだ初めて知ってたな……」

「あ、あの〜」

「ああ、カエサル……たかちゃんなら元気にしているぞ学校でも友達いるし」

歴女だということは黙っていてあげよう……ややこしいことになると思うし

「そうですね、良かった」

彼女が安心したような笑みをする。するとフェルが俺のところに来て

「そう言えばあなた、ロスマン先生の弟子ですってね〜」

「先生知っているの？」

「当たり前よ。ロスマン先生は有名な教官でありヨーロッパ戦車道協会の委員長でもあるからね。それに彼女の弟子は皆優秀な成績を残しているわ。あなただっつてその一人でしょ？」

「アハハ・・・買い被りですよ」

俺よりも優秀な先輩弟子いっぱいいるしな。特にまほ姉もそうだし、何よりもプラウダにいる姉弟子も俺より優秀だしな・・・子供みたいな態度を除けば、いい姉弟子なんだけどな・・・

その後俺たちはアンチヨビさんが出してくれた料理を堪能した。すると秋山が腕時計を見て

「あ！武藤殿！そろそろコンビニ船に乗らないと乗り遅れてしまいますー！」

「まじか！急いで戻らないと！」

俺と秋山が焦るとアンチヨビが

「心配するな。連絡船まで私たちが車で送ってやる」

「え!?いいのわ！」

「いいつすよ。困った時はお互い様って言うし。ちよつと待つててくださいいすぐに取つてきます」

と、そう言いペパロニさんは走り出したかと思つたらすぐに戻つて来たしかも車・・・いや豆戦車c v 3 3でそれを見た秋山が

「まさか快速と呼ばれるカルロベローチエに乗れるなんて夢のようです!!」

秋山の目がキラキラ輝いてそう言う

「さあさあ、早く乗りなさい。船出ちやうわよ。ペパロニお願いね」

「おう！任せてくださいフェル姐さん！」

「でもこれ二人乗りだぞ？」

「あ、これ輸送用にエンジンルームの上にシートを乗せてあるのでここに乗ってくださいい」

「すまない」

俺と秋山はc v 3 3の乗る秋山は助手席で俺はエンジンルームの席に座った。そしてアンチヨビが

「じゃあな武藤。また試合でな。武藤・・・いや黒狼次の試合は我がアンツイオは負けない・・・じゃなくて勝つ！」

「ああ、じゃあ試合でな」

「う、うむ・・・じゃあ試合で／＼／」

と俺は不敵の笑みで答え手を差し出すとアンチヨビさんが顔を赤めて俺の手を握る。

「・・・・・・・・・・」

秋山はそれを見てまた複雑そうな顔をするのだが義弘は気づかなかった

「じゃあ、行くつすよ客人」

と、そう言い俺と秋山はc v 3 3に乗せられコンビニ船へと向かった。それを見送ったアンチヨビは

「試合でか・・・・・・・・」

顔を赤くし先ほど彼の手を握った手を見つめる。するとフェルは

「チヨビく良かったわね。初恋の相手が見つかった」

「な、なにを言っているんだフェル!!わ、私は別に」

「もう隠さないの。で、告白はいつするの？」

「え!?!告白って!?!」

「占いで言ってたじゃない『その人の心を射止められるのはあなたの勇気次第です』で、いつするの?」

「な／＼だから私は別に・・・て、フェルそれとチヨビ言うな!まったく角谷と言いなんて皆チヨビって言うんだ?」

「さあ?言いやすいからじゃないの?それに可愛いじゃないねくチヨビちゃん?」

「アンチヨビって呼べフェル!!はあくまあいいか・・・・・・・・」

「あははくで、アンチヨビ。対大洗戦についての作戦はどう?」

「ああ、もちろんその点について抜かりないよ。フェルとカルパツチヨのおかげだよ」

「どういたしました。で、肝心の作戦名は?」

「ふふ、聞いて驚け！作戦は3つだ、【マカロニ作戦】、【分度器作戦】、そして最後の決め手である作戦は『三種のチーズピザ作戦』だ！」  
と、かなり自信に満ちた顔でそう言うのであった。

一方、義弘たちは……

「なあ、秋山。なんでそんなに不機嫌なんだよ？」

「べつにくなんでもないですよ」  
「？」

無事にコンビニ船に乗った秋山と義弘だったが。なぜか不機嫌だった秋山に義弘は疑問に思うのであった。



も……でも無理はしないでね。身体の具合が悪かったらすぐに言ってね」

「わーてる、わーてるってば。お母さんか、みほは」

俺はみほの心配症に呆れる。まあそこがみほらしくていいんだけどな。心配してくれるのは嬉しいんだが、俺が肺血病を患っていることをみほに知られるわけにはいかないし俺は適当なことをいって誤魔化したのだった。すると、

「そう言えばカバさんチームでシェアハウスで4人とも暮しているみたいだな？」

「うん。そうみたいだね、なんだか黒森峰の寮でやった親睦会みたいでとつても楽しそう！」

「いや、シェアハウスと寮の親睦会は全然違うぞ、みほ。まあ確かに寮で赤星や逸見たちと一緒にどんちゃん騒ぎのパーティーをしたのは楽しかったけど」

確かに黒森峰時代ではよく戦車道の仲間たちと一緒に食事会やら談笑したり最後の締めにはボコの映画のDVDを鑑賞したりなんかで楽しかったけどな。お堅いイメージの黒森峰だがそれは練習や試合の時だけでプライベートになるとサンダースのようにフランクな感じになることもある。

「でしよ？きつと友達同士で生活するのもきつと楽しいよ！」

と、そんな会話をしていると、どこからか金属をぶつけたような大きな音が聞こえた

「なんの音だろう？」

「あそこから聞こえるな？あそこは確か……」

と、そう言い俺とみほは音のする方へ行くとそこには和風の家があり表札を見るとカバさんチームのソウルネームが書かれていた。間違いないこの家だ

「ここだな……」

「うん。ここもソウルネームなんだ」

そう言い俺とみほは玄関まで行き

「ごめんくださいーい。どなたかいますか？」

そう呼びかけるのだが返事がない

「留守かな？」

「いや？人の気配がするし、それはないよ」

みほの言葉に俺が言うのと玄関が開き、そこから私服姿のカバさんチームのエルヴィン、左衛門佐、おりようの三人が出てきて

「「いらっしやい」」

笑顔で出迎えられるのであった。そして俺とみほは家にあがり居間に座っていると

「お待たせ」

「お茶が入ったぞ」

と、そこへカエサルがお茶を持ってきてくれた。よく見るとどれも個性的な湯飲みであった。

「どうもありがとうございます」

「かたじけない」

俺とみほがお礼を言うとエルヴィンが大量の本を持ってきた

「P40の資料はあまりないが……」

「こんなにくさん」

「英語じゃないぜよ……」

エルヴィンが持ってきた資料は日本語ではなくかといって英語でもなかった

「これって……イタリア語？」

みほが首をかしげる中、俺とそしてそばにいたカエサルがその資料に書かれている文字を見て

「Le Forze armate italiane」

「「えっ!!」」

俺とカエサルがすらすらと本の題名を読んだことにみんなが驚き

「イタリア語読めたんだ!」

「びっくりぜよ」

「イタリア語とラテン語は読めて常識だろ？」

「常識じゃない!!」

カエサルがあっさり答えると左衛門佐がつっこむ。するとエル

ヴインが

「それよりも武藤がイタリア語を読めたなんて知らなかったぞ?」

「うん。私もびっくり」

エルヴインの言葉にみほも驚いた顔をする。俺は少し頭を掻き

「俺、少しの間までヨーロッパに留学していたから」

「あ、そっか、義弘君ドイツに留学してたんだね?」

「ああ、その時ロスマン先生にドイツ語だけじゃなく他の国の言葉も覚えなさいと言われてな。だから英語はもちろんドイツ語とかロシア語とかそしてイタリア語、ラテン語も習ってたんだよ。まあ、フランス語は覚えることできなかったけど」

「そうだったんだ・・・ロスマン先生らしいね」

みんなが驚いた顔でそういう。実際俺はドイツに言った時、保護者であるロスマン先生に『外国の言葉も覚えたほうがあなたのためよ』と、そう言われロシア、イタリアなどの言葉を覚えさせられた。まあ今になって思えば楽しい思い出。因みに俺はドイツに留学していたためドイツ語がペラペラだ。

するとエルヴインが俺の耳元に小声で

「なあ、武藤」

「なんだ?」

「暇な時でいいからドイツ語を教えちゃっていいか?」

「別にかまわないけど、なんでだ?」

「ほら、私はドイツ軍の格好なうえにソウルネームがロンメル元帥だろ?ドイツ好きの私がドイツ語を話せないのはちよつとな・・・」

「なるほど、わかった。俺にらせてくれ元帥殿」

「すまない武藤」

と、ここそこそと話してる中、他のカバさんチームは「何をこそこそ話しているんだ?」というような表情を見せみほは複雑そうな顔をしていた

「図面やスペックはわかるから、コンビニコピーにしよう」

カエサルはそう言いスラスラとノートにP40のスペックを翻訳して書き写してくれる



「キリがないけど、だいたいこんな所かな」

「ありがとう」

P40の基本的なスペック、情報の書かれた資料をみほが受け取る。

「本当は私の知り合いがアンツイオ校に居るから、聞いてみる方が早いんだけどな」

「そんな奴居たのか？」

「初耳ぜよ」

「どんな友達なんですか？」

「小学生からの友達で、ずっと戦車道やってる子だ」

カエサルが自慢げに言うとなんか俺はふいにアンツイオの副隊長さんに言われたことを思い出した

「ああ、やっぱりお前が鈴木貴子か」

「なっ!?!ちよつと待て、なんで武藤が私の本名を知っているんだ!?!」

俺がカエサルの本名を言うとカエサルは顔を真っ赤にしてそう言う。やっぱりカエサルのことだったんだな

「ああ、実は前にアンツイオに偵察に言った時にカルパッチョって名乗った子が鈴木貴子て子が戦車道をしているかって聞かれてな。君のことだろ?」

「間違いない。ひなちゃんだ。」

カエサルは思い当たる節があるのか納得した表情をすると

「ひなちゃんなんか言っていたのか?」

「ああ、『貴ちゃんによろしく』て言ってたぞ?」

「「たかちゃん?」」

「わあー!武藤それは言うな!」

カエサルが真っ赤になつてそう言う。え?俺ただ言伝を言っただけだぞ?不思議に思っているとエルヴィンが咳ばらいをし

「コホンツ……まあ、しかし、そんな情報源があるなら最初から聞けば良かったのに」

「いや、敵が友達だからこそ正々堂々と情報を集めたいな、私は」

「なるほど…、友情は友情、試合は試合ぜよ」

エルヴィンの言葉にカエサルがそう答えるとお領は納得したように言うともほが

「ライバルですか。羨ましいです」

みほがうらやましそうに言う。確かにみほには友人はいてもライバルと呼べるような人はいないからな。基本的にみほは敵を作るよりも友を作ることが多いからな

「じゃあ坂本龍馬と武市半平太!!」

「ロンメルとモントゴメリ!!」

「武田信玄と上杉謙信!!」

「ミハエルヴェイットマンとジョンエイキース」

「ハンナ・マルセイユとエーリカ・ハルトマン」

「」「それだツ!!」「」

俺ともほがそう言うとかバさんチームが指を指しそう言うが

「……で、最後の人誰?特に武藤が言った人物は?」

「俺のドイツでの姉弟子だ……」

おりようが首をかしげると俺はそう答えるのであった。

新たな仲間です！

「え、それでは二回戦に向けての練習を始めろ！」

河嶋さんが勢いよく言う。そうこれから二回戦に向けての練習を始めるところだ。そして車長である俺たちは机の上に集まり、のちに対戦するアンツイオ高校の車両スペックの書かれた

「んで、向こうの装甲はどんな感じ？」

「P40の前面はカバさんチームやオオカミさんチームなら相手の有効距離の外から貫通可能です」

「心得た」

「んじゃあ、びよびよの相手はカバさんチームとオオカミさんチームだね」

「びよびよっ..」

「P40のことですか？」

「そうそう、びよびよ」

「ピヨピヨって、もっと他にいいいい方はなかったんですか角谷さん？」

「いいじゃん武藤君、P40よりピヨピヨの方が親しみやすいしそれに可愛いじゃん。んじゃあ、ちよつと敵味方にわかれて練習してみよつか。びよびよ役はどれがいい？」

「P40に比較的近いのはIV号かパンターですね」

「じゃあ、あんこうとおおかみがびよびよ、アヒルさんがカルロベローチエってことで、で最後にM15/42はだれがやるの？」

すると角谷会長がみほや俺のほうへ顔を向けそう訊くと

「ああ、それなら...もうそろそろ来るかな？」

そう言い俺は腕時計を見るとどこから履帯とエンジンの音が鳴り響く

「おっ、来たみたいだな」

そう言ったのと同時に少し丘になっているところからダークグリーンで、砲塔横に特攻服を着てサングラスをかけたキツツキの絵が描かれた快速戦車BT戦車が勢いよく飛び出してきた。そしてその

戦車はこちらの方へ猛スピードでスラロームしながら向かってくる  
「うわっ!? あぶなっ!?」

「こっちにつっこんでくる!?!」

みんなが驚いた瞬間、B tは俺たちの目の前でドリフトをしパン  
ターの横に急停車した

「せ、戦車がドリフトをした……………」

「まったくあいつらは……………荒っぽい運転をして……………」

「何あれ暴走族!?!」

みんながそう言う中B T戦車のハッチが開きそこから三人の生徒  
が降りてくる。その姿は車長らしき少女はきちんとした身なりだっ  
たがその他の二人はしわがあつたりネクタイが寄っていたりと、まさ  
しく不良といった感じの服装をしていて、一人は戦闘機乗りが来てそ  
うな茶色のジャケットを着て、もう一人は暴走族が来てそんな特攻服  
を着ていた

「ちよつと天野、もう少し優しく運転しなよ! 危うく人を撥ねるとこ  
ろだったじゃない!」

「うっせーよ。まあ俺も初めての運転で焦っちゃったからな。次から  
は気を付けるよ」

と、小柄な少女二人がそう言う中、車長室からでた少女は篠原の不  
良集團の副官であるロシア人のエレーナさんだった

「Очень приятно。皆さんお待ちいたしました」

エレーナはにこつと笑い頭を下げるとみほが紹介する

「新しく参加してくれるキツツキさんチームの皆さんです」

「Очень приятно。始めまして私はエレーナと言いま  
す」

「俺は天野アキラ」

「あたいは樋口清。よろしくね」

と、そう挨拶をする。そう、b t戦車に搭乗していたのは篠原の不  
良仲間であるエレーナさんたちであった。B Tが見つかった直後、そ  
う武部や一年生チームが遭難したあの後、エレーナが『この戦車、私  
が乗る』と言い、そしてエレーナ以下、篠原率いる不良集團の幹部で

ある二人も参加し、キッツキさんチームとして大洗戦車道チームに加わったのだ。因みにキッツキという名をつけたのは紛れもなくみほで、彼女曰く『なんとなくキッツキに似ているから』だそうだ

キッツキさんチームのメンバーが自己紹介をする中、ウサギさんチームが

「なんかやばそう……」

「暴走族みたい」

「賊だ賊」

「ちよつとみんな聞こえちゃうよ」

山郷たちが小声でそう言う中、梓は注意するがアキラがうさぎさんチームの方をぎろつと睨むように見る。そして

「おい、お前ら！」

「ひっ!?!」

アキラはぎろつと睨みずんずんとウサギさんたちに近づく、そして睨まれたうさぎさんチームは蛇に睨まれた蛙のように固まっていた。そして彼女たちの前についたアキラはジーと彼女を見るとやがてニヤツと笑い

「おめーら、前にお銀の下っ端連中に絡まれてた連中じゃなかよく元気か〜?」

「え?」

急に笑顔でそう訊かれたうさぎさんたちはきよんとした顔をすると、樋口が

「あ、本当だ。ほら覚えてる?あたいたちのこと?」

「え?……あ!あの時の!?!」

樋口がそう訊くと梓は思い出したのかそう言う。そうこの二人は以前船舶科の不良に絡まれたうさぎさんチームを庇ったメンバーだった

「おう、やっと思い出したか。なああの後またあいつらに絡まれたりしてねえか?」

「は、はい……大丈夫です。あ、あの子の前は助けてくれて、ありがとうございます」

「いいのよ。またあいつらに絡まれたりしたら遠慮なく言っ  
てね。守ってあげるから。ほら、行くよアキラ。練習始まるよ」

「おう、そうだな。じゃあこれから仲間なんだしよろしくなバカヤロ  
ー！」

「バ、バカヤロウ?」

「あ、バカヤロウはアキラの口癖だから気にしないで。じゃあね」

そう言い二人はBT戦車に戻っていくと山郷たちは

「なんかいい人そうだね?」

「そうだね」

「怖そうな顔だけど?」

と、個人個人の感想を言っていると会長が両手を叩き

「さて、挨拶も澄んだことだし、練習始めよつか」

そう言い、二回戦に向けての練習が始まったのであった。そして始  
まったのはP40とカルロベローチェ、そしてM15/42の役であ  
るアンコウ、オオカミ、アヒル、そしてキツツキが逃げ、残りの車両  
が追撃するという形になった。アンコウとオオカミはカバこと三突  
が追いかけて、アヒルこと八九式を追いかけるのは生徒会の乗るカメさ  
んチーム。そしてBTことキツツキを追いかけているのがうさぎさ  
んチームなのだが、btが速すぎて追いつけず、逆に道に迷っていた  
り八九式が、蛇行運転をしながら亀さんチームに向かって機銃で攻撃  
しそれに煽られてカメさんチームが隊列から飛び出し、そのまま追  
いかける。

そして俺とみほのチームは三突に遠距離での射撃方法を教えてい  
た。まあ狙撃のテクニクのほとんどは篠原が教えていたけど、まあ  
彼女が遠距離射撃の指導なら別に問題とかないだろう。そして八九  
式を追いかけていた38tはぐるぐると旋回していた。まるで戦闘  
機の巴戦のようだ。そしてキツツキとウサギの方はいまだに追いか  
けっこをしてうさぎさんが追いつきそうになっているのだが、やはり  
BT戦車の方が速くまた引き離されてしまう

『へへ〜ん！悔しかったら追い越してみ〜』

『ちよつと速すぎですよ〜』

そう言いうさぎさんがキツツキを追いかける中、ウサギさんチームの乗るM3は

『また、逃げられちゃった』

『あの戦車速すぎ・・・』

澤と山郷がそう言うのと偶然、八九式と38tが巴戦をしている場へと迷い込んでしまう

『ま〜て〜!』

『いやです!』

『止めたければ力づくで止めればいいじゃないですか! ……なんちゃって』

『言ったな! こいつ!』

『なにやってんですか? 先輩?』

『バターになっちゃいますよお〜♪』

ぐるぐる回っている二両にそう言うのであった。そしてその後、練習は続き気が付けば陽が落ち始め空は赤く染まっていた。

『よし! 練習終わり! 解散!』

『「お疲れさまでした!」』

河嶋さんの言葉に皆がそう言い解散した。そして俺は一息つき、腰を下ろして汗をぬぐうと

「お疲れさん義弘。はいスポーツドリンク。水分補給は大切よ」

「ああ、ありがとう道子」

そこへ篠原がスポーツドリンクを手に持ち俺のほうへ行き俺にスポーツドリンクを渡すと俺はそれを手に取り礼を言う。するとそこへ服部と小波、そしてキツツキさんチームのメンバーがやってくる

「あ、車長。篠原さん。お疲れ様です」

「武藤先輩お疲れ様です」

「姐さんお疲れ様です」

「お疲れ道子、武藤さん」

小波、静、アキラと清、そしてエレーナが挨拶をすると篠原が

「義弘。今日これから新黒狼メンバーとエレーナたちキツツキさんチームと一緒に私たちのアジトで勝利祈願の食事会をするけどあな

「たも来る?」

「ああ、もちろんだチームの親睦も大切だしな」

「そっか。じゃあ決まりね」

「そう言い、俺は篠原たちと一緒に篠原の不良集団のアジトで食事会をした。その場にいた不良たちも俺や小波たちのことを歓迎してくれて会場は最早どんちゃん騒ぎであった。その様子を見るとまるであの時、秋山と一緒に偵察で見たアンツィオ高校とどこか雰囲気似ていた。」

「出た料理もとても美味しく話によるとエレーナさんが作ってくれたものらしい。」

「どう? 義弘楽しんでる?」

「料理を食べている俺に篠原がそう訊く」

「ああ、とても楽しいよ」

「そう。よかったわ。さ、遠慮しないでじゃんじゃん食べてね」

「ああ・・・ん?」

俺は食事を続けようとしたとき、急に携帯が鳴る。それはポケットから携帯を取り出し宛名を見る

「誰から?」

「ああ、エリカからだ。ごめんちよつと外すよ」

「そう言い俺はその場を離れ、人気のないところに出て電話に出る」

「もしもし、エリカか?」

『あ、やっと出たわね。元気、義弘?』

「ああ、今のところ元気だよ。それよりもエリカ一回戦突破おめでとう」

『ええ、まあ相手は知波単学園だったから苦勞せずに勝てたけどね』

「まさか、あの学校またいつもの突撃か?」

『ええ、3年前と変わらないただ直進するだけの戦法しか使っていないなかったわ。少しは戦術も変わって苦戦すると思っていただけだね』

「アハハ・・・で、エリカ。今日電話を掛けた要件はなんだ?」

『そう言えば要件を言っていなかったわね。まあ別に大した要件じゃないけど、みほはどう? 向こうの学校で馴染めてる?』



「え？ああ、大丈夫だ心配ないよさつきカフエでも見たろ？いい友人に囲まれて学生生活を楽しんでいるよ」

『そう、それならよかったわ』

「エリカ、そんなに心配なら、本人に直接確かめればいいじゃないかよ」

『うつ．．．それはそうなんだけど、みほが黒森峰を去る前ちよつとあったから声を掛けようにもかけられなくて．．．．』

どこか後ろめたい声でそういうエリカ。エリカの奴、さてはみほと口喧嘩でもしたのかな？そう思っているとエリカは咳ばらいをし

『それよりも義弘。次の相手はアンツイオ高校とでしょ？大丈夫？』

「え？ああ、大丈夫だ。そこはみほたちと作戦を．．．．」

『そうじゃなくてあなたの体のことよ。あなたまだ肺血病治っていないでしょ？』

心配そうに言う彼女に俺は

「ああ、大丈夫だよ。まあたまに咳とかは出るけどそんなに深刻な発作は起きていないよ」

『そう．．．でも本当に無茶するのはやめなさいよ。あなたが倒れて一番悲しむのはみほなんだから』

「ああ、わかっているよエリカ。なるべく激しい戦闘は控えるようにするよ。それじゃあそろそろ切るよ。二回戦頑張れな」

『ええ、そっちも頑張つてね義弘。決勝で会いましょうね』

そう言い俺は電話を切ると、

「さて、戻つてゆつくりと食事会を楽しむ．．．．」

俺がそう言おうとした瞬間、

「ゴホッ！ゴホッ！ゴホッ!!」

急に激しい咳が俺を襲い、俺は口を抑えてしやがみ込む。すると．．．

ビチャツ．．．

急に手に生暖かい感触がした。俺は抑えていた自分の手を見て

「．．．．．どうやらゆつくり食事会をしている暇なさそうだな」

そう小さく呟くのであった

## 二回戦前の日常です

戦車道全国大会二回戦まで後、数日。新しく加わったエレーナさんたちキツツキさんチームを含め二回戦に向けて練習をする俺たち。そして試合開始前日。その日はリフレツシユも兼ねて練習は休みとなつて、皆それぞれの時間を過ごしていた。授業もすべて終わり、俺は何もすることなくブラブラと廊下を歩いていると、廊下の向こうに何やら金髪で猫耳のカチューシャを付けた眼鏡の生徒がボーと三人の生徒を見ていた。その三人は……みほたちか。そしてみほと沙織、華がその生徒に気付かず何か話していた

「へ〜継続高校ってそんなに強いんですか？」

「うん。前にお姉ちゃんたちと一緒に練習試合したけど苦戦しちゃつて」

「黒森峰なのにな？」

「そうなの」

「うちとどつちが強いんだろう？」

「わからないけど、あそこの隊長と副隊長がすごく優秀な人で……」  
と、そんな話をしているのが聞こえた。というより、黒森峰。あの継続と試合したのか……。その頃俺は、ここ大洗にいたから知らなかったが、あの黒森峰が苦戦したということは継続の隊長は恐らくあのトウコさんか……。もしくはあのカンテレか……。今となってはわからない。

まあそれはともかく眼鏡を掛けた少女はみほたちに声を掛けようとしたが、みほたちはその少女に気付かずそのまま通り過ぎていき、少女もまた声を掛けられずにただボーと立ち尽くしていた。そして……

「ま、また声を掛けられなかった……。もうダメだチキンハートな僕……。次はもつと頑張るんだ、ねこにやー!!」

「何やってるの？」

「うわっ!?!」

急に声かして驚くねこにやーそして振り向くとそこには義弘がい

た

「えつと・・・き、君は・・・」

「武藤だ。武藤義弘・・・でみほになんか用なのか・・・えつと・・・」

「あ、僕、ねこにやーです」

「すまない。できれば本名も教えてくれるか？」

「え？あ、猫田です。西住さんと同じクラスなんです」

「あ、そうなの・・・それで猫田さんはみほに何か用？もしかして戦車道についてか？」

「あ：うん。僕も戦車道をやろうかなって思って・・・」

「なるほど、だからみほに声を掛けたのか・・・ところで猫田さん。戦車の経験は？」

「り、リアルでの操縦はしたことないけど、ネットなら何度もやってるから動かし方はわかるよ」

「ネットゲームか・・・もしかして○○○○か？」

「いや、○○○○の方」

「ああ、そっちな。確かにあれも面白い。俺はどちらかというところ○○○○の方かいいと思うが」

「武藤さん。マニアックですね？」

「だろ？・・・まあともかく戦車道に参加するなら歓迎するよ猫田さん」

「ボ、ボクが戦車道に入ってもいいの？」

「ああ、ただし」

「た、ただし？」

「少し体力をつけてからな。聞いたところゲームでしか戦車の経験がないんだろ？リアルでの戦車はゲームとは違って操縦桿とか砲弾が重いし体力も使うからな。それと戦車に乗る仲間も必要だぞ最低でも三人は必要だ」

「わ、わかった。ボクと同じような人がいないかネット仲間聞いてみるね」

「じゃあ、メンバーが揃ったら声を掛けてくれ」

「うん。ありがとう・・・武藤君。それと次の試合頑張つてね」

「ああ、ありがとな。じゃあ」

そう言い俺は猫田さんと別れるのであった。そしてしばらく歩き校舎を出て。学校のすぐそばにある森の中、そう前に初めてこの学校で練習試合をしたときのあの森だ。そこで俺は昼寝の場を探した。こういう何も無い時には昼寝をするのが一番だ。さて場所はどうか・・・

「・・・・・・・・いつもの切り株のところに行くか」

そう言い、俺は切り株へ行く。あそこは今の季節日差しがいいし、今日は心地よい風も吹いているから丁度いいだろう。俺はそう思いながら、その場へ向かう。そして、その切り株に到着し、俺はそこに寝っ転がる。うん。ちようどいい・・・冷泉もたまに来るらしいが。今日は来ていないみたいだ。俺はそのまま目をつぶり潮風を浴びながら寝ている。

「・・・・・・・・」

どれくらい時間がたったのだろうか？昼寝をする中、俺は何かの気配を感じ目が覚める。俺はあたりをきよろきよろと見ると誰かが俺の袖を引っ張る感じがし、そこを見てみると

「・・・・・・・・」

一年生だろうか、女子生徒が俺の傍で寝ていた。あれ？確かこいつうさぎさんチームの丸山紗希さん？だったか？まあともかく

「おい、起きろ。こんなところで、風邪ひくぞ」

そう言い、俺は丸山を揺り起こすと、彼女を目を開けて瞬きすると俺のほうを見る

「やあ、おはよう・・・・・・・・えっと・・・丸山紗希ちゃん合っているよなっ」

そう訊くと丸山はコクコクと頷く。そしてジーと俺を見る

「それで・・・その丸山はなんでここに？」

「・・・・・・・・」

「え？前に冷泉が勧めてくれた昼寝に適したこの場所に来たら、偶然俺を見つけて。俺が気持ちよさそうに寝ていたから、一緒に寝てみた

？」

「……」コクコク

周りから見ても丸山は何もしゃべっていないのだが、俺の場合、丸山の言いたいことが理解できる。なんだろう、俺ってニュータイプかなんかだろうか？それとも髑髏島の先住民みたいに意思疎通出来る体質なのか。まあ、それよりも冷泉がね……。確かに冷泉にこの昼寝場所を教えたのは俺だが、あいつ丸山と仲がいいのか？

「あのな、丸山。仮にも俺は男だぞ？いきなり隣で寝るのはちよつと不謹慎っていうか……。危ないっていうか」

「……」

「え？『武藤先輩は優しいから、そんなことしない』？いやいや。そういう問題じゃなくてだな」

「……」

「はぁ……。とにかく。無闇に男性に対してこういうことするなよ？変な男に誤解でもされたら危ないだろう？」

「……」コクコク

どうやら納得はしてくれたみたいだが、なんか残念そうな寂しそうな表情をしていた。なんだろう、なんか罪悪感が沸くような感じがした。

「はぁ……。まあ、いいよ。昼寝邪魔して悪かったな丸山」

「……」フルフル

「ん？『気にしていない』？でもな……。そうだ。昼寝を邪魔したお詫びに74アイスで特大パフェでも奢るよ」

「……」

「え？『いいんですか？』別にそのくらいかまわないよ」

俺がそう言うのと丸山はにこっと笑う。すると

「あ、紗季ちゃんいたよー！」

「あ、紗季。どこにいったの！」

と、そこへ残りのウサギさんメンバーがやって来た

「あ、武藤先輩。どうも」

「おう、みんなお揃いで。丸山を探してたのか？」

「はい。急にいなくなっちゃったので…それで武藤先輩は？」  
うさぎさんチームのリーダーである澤がそう説明すると俺は

「ああ、その切り株で昼寝していたんだけど、なぜか丸山がそばにいたんだよ」

「え!?!そんなんですか？すみません紗季が何か迷惑を掛けていませんか？」

「いいや、何もしちやいないよ。まあちよつと驚いたけどな」

「そうですか…あ、あの先輩ちよつとお聞きしたいことが…」  
「ん？なに？」

俺と澤が話す中、丸山の傍にいた宇津木が

「紗季。武藤先輩と何をしてたの〜？」

「……………」

「え？武藤先輩がパフエを奢ってくれるって？」

「えー！紗季ちゃんだけ、ずるい！」

「なんで私たちも誘ってくれないんですか、先輩！」

「そうです。私たちもパフエ食べたいです！」

と、紗希のテレパシー？みたいなので知ったのか他の一年生が俺によくと澤が

「ちよつとみんな、そんなに言ったら武藤先輩が困るでしょ？」

「いや、別にいいぞ」

「えっ!?!いいんですか先輩!？」

「ああ、一回戦で頑張ったご褒美つということで。それに澤は何か俺に訊きたいことがあったんだろ？」

「あ、はい……………」

「じゃあ決まりだな」

#### 74アイス

「あ、あの…すみません先輩。パフエ奢ってもらって」

「いいよ。別にたまには先輩風吹かせてくれ。それに行っただろこれ

は一回戦で頑張ったご褒美だつて」

その後、俺と一年生たちは74アイスにいて、一年生たちはこの店の名物メニューである特大パフェを嬉しそうに食べていた。おかげで俺の財布は軽くはなったがそれでも一年たちが喜んでくれるんなら、まあ大した損害じゃない

「それで澤、俺に訊きたいことつて？」

「ああ、はい。実は……先輩に訊きたいことがあるんです。先輩はどうやって強くなったんですか？」

「え？」

「実は前に武藤先輩のことをネットで調べたんです。それで先輩や西住隊長の戦歴を見てどうやってたら先輩たちみたいに強くなれるかなつて……」

「そうだな……俺は全然強くないぞ？たぶんみほに同じことを訊いても同じことを言うと思うぞ？」

「え？強くないんですか先輩？でも先輩って一度も負けないで勝ち続けたつて」

「あれはチームの皆と協力し合つて成せたことだよ。人間一人だけじゃ強くなれないし何も為せない。やっぱりチームワークが大切なんだよ」

「戦術や作戦とかもですか？」

「ああ、よく言うだろ三人寄れば文殊の知恵つて。まあ他には過去の戦術や戦争映画なんか見て作戦立てたりすることもあるな。過去から学ぶことはたくさんあるし。俺も黒森峰時代の時はよく先輩に頭を下げてアドバイスを聞いたりみほたちと相談したり、図書館や図書室で昔の資料を見て勉強したりしたよ」

「そうなんですか。やっぱり先輩はすごいんですね！」

と、なぜか澤にキラキラと尊敬を見る目で見てそう言う。別に尊敬されるようなことしていないんだけどな？そう思っていると

「せんぱーい。武藤先輩は彼女とかいないんですか？」

と、先ほどまでパフェを食べていた大野が突然そんな質問をしてきた

「ん？彼女か・・・いないな」

「え？いないんですか？」

「いないよ。第一、こんな俺を好いてくれる物好きなんていないだろ？」

「そうですかあ？確かに武藤先輩って背が小さいし、顔も子供っぽいですけど〜？」

「余計なお世話だ」

さりげなく毒吐いたよこの子は・・・確かに俺は背は小さいし、顔も童顔だよ。でもこうはつきり言われるとなんか傷つく。すると坂口が

「でも先輩。それはそれで可愛いんですから別にいいじゃないですか？」

「おい、それフォローになってないぞ坂口。まあいいか俺がチビで童顔なのは事実だしな。さてと俺はそろそろ行くぞ」

「え？先輩帰っちゃうんですか？」

「もつとお話したいです」

「すまないな。まあ、また何かあったら声かけてくれできる限りの相談は乗るからさ」

そう言い俺は席を立ち店を出ようとする。誰かが俺の袖を引っ張る。俺が袖を引っ張る正体を見るとそこには丸山が終えの袖を引っ張っていた

「どうしたんだ丸山？」

「・・・ありがとうございます・・・ございました」

聞き取れるか聞き取れないかのレベルでボソツとそうつぶやいた「そうか。どういたしまして」

俺がそう言い頭を撫でると丸山は少し顔を赤くする。無表情だけど。そして俺は店を出るのであった

「・・・」

義弘が出た後、丸山は先ほど義弘に撫でられた頭をさすり、みんなにはわからないよう嬉しそうに微笑んでいたのであった。



「ただいま……」

学生寮に戻った義弘は荷物を置いて普段着に着替える。そして冷蔵庫からサンドイッチ、そして戸棚からカップ麺を取り出す。そして義弘はカップ麺にお湯を注いで三分経った後、カップ麺とサンドイッチを食べる

「明日から二回戦か……どんな勝負になるか楽しみ……」

そう言いかけた瞬間突如義弘は目を見開き

「ゴホッ！ゴホッ！！ゴホオッ！！」

義弘は口と胸を抑える。そして義弘は立ち上がり戸棚から瓶入りの薬みたいなのを取り出し、それを飲む。

「くそ……またかよ。前よりもひどくなってるな」

薬を飲んだ後義弘は椅子に座り

「……これはタイムリミットが近づいているのかもな……」

若干、不安と悲しみの入り混じった表情でそういうのであった。そんなこんなで明日はとうとう二回戦であるアンツイオ高校との試合が始まるのであった

## 二回戦始まります

ピピピピ

「ん?・・・朝か」

義弘は目を覚ます。そしてベットから起き上がり頭を軽く搔くと、冷蔵庫からパンとハムとチーズを取り、それをサンドして牛乳と一緒に食べた後、服装に着替えて、そして壁に掛けてある黒森峰時代黒狼のパンツァージャケットを羽織って部屋を出ようとする・・・

「おっと。忘れてた」  
そう言い義弘は机に掛けてある亡き母の写真を見る。そして敬礼をし

「行つてきます母さん。試合頑張つてくるよ」

そう言い部屋を出ると、ちょうど隣に部屋に住んでいるみほも出てきた

「あ、義弘君。おはよう」

「ああ、おはようみほ。とうとう今日だな二回戦」

「うん。頑張ろうね」

と、そう言い義弘とみほは学校へと向かう。そう今日は全国戦車道大会二回戦の日なのだ。するとみほは俺の顔を見ていた

「ん?どうしたんだみほ。俺の顔に何かついてるか?」

「え?いや・・・義弘君。ちゃんとご飯を食べてる?」

「え?食べているけど。どうしたんだよみほ急に?」

「いや・・・なんか義弘君の顔少しやつれたような気がしたから・・・」

「そうか?・・・あくそういえば昨日夜更かししたな。たぶんそれが原因かな?」

「もうダメだよ義弘君。ちゃんと睡眠取らないと。体壊しちゃうよ」

「すまん、すまん。心配性だなみほ。それにしてもみほの少し変わったな」

「そう・・・かな?私そんなに変わったのかな?」

「ああ、なんかお淑やかになった」

「むゝそれだと以前の私がお淑やかじゃないみたい……」

「アハハ、悪い悪い。ほら、みほって子供の時はやんちゃで活発だったじゃないか。覚えてるか？俺とみほが小学生の頃エリカと一緒に近所の森とか池で遊んで泥だらけになって家に帰った時、しほさんに思いつきり拳骨されてこっぴどく怒られたことを」

「うっ……それは……」

みほが昔のことを思い出したのか頭を軽くさする。

そう小さい頃のみほは昔みたいにお淑やかではなく、とてもやんちゃで活発な少女だった。俺もエリカもみほに連れられ近所の池でザリガニ釣りとかお花を摘んだりとかしてたんだが、途中田んぼに立ち寄った時なぜか泥んこプロレスになって遊んでいたんだよな……まあ、始めたのはみほなんだけど。結果俺たち三人は泥だらけになってエリカは服が汚れて泣いちゃって、家に戻ったら俺とみほはしほさんに思いつきり拳骨を喰らわされてこっぴどく怒られ、俺は家に戻ったら戻ったで祖父さんにも怒られ。さんざんな目にあつたのを覚えている。まあ途中でやめなかつた俺にも責任があるから仕方ないけど……て、それより！

「あ、のんびりしている暇なかつた。みほ、急ごう。たぶんみんな待っていると思うから」

「ああ、そうだった。行こう義弘君！」

そう言い俺とみほは慌てて学園へと走るのであった。そして俺たちの乗る学園艦は二回戦の会場である山岳地帯のある会場へと向かうのであった

『これより…戦車道全国大会二回戦。第四試合アンツイ才高校対大洗学園の試合を始めます』

アナウンスが鳴り、試合会場には多くの観客も集まっていた。その

中には後で聞いた話では聖グロのダーズリンやサンダースのケイも見に来ていたということだ。

まあ、それはさておき二回戦の試合ステージは山岳と荒地と森。不整地が多く道が狭いこの会場では小回りの利く豆戦車を所有するアンツイオが有利であるが勝敗は指揮官の決断力と作戦力。俺個人の感想だが、みほとアンチヨビさんは指揮官としての才が十分ある。そして数的にも両方互角。この試合。どちらが勝手もおかしくない勝負だ。まあ簡単に負けるつもりはないんだけどな

「義弘。準備終わったわよ」

「ああ、篠原お疲れ。忘れはないか？」

「そう言うと思って二度チェックしといたわよ。後エンジンもまた爆発されたらたまらないからね」

「そうか。ご苦労さん」

「あとのことは私たちがやっておくから、あんたはみほさんと作戦の最終チェックでもしときな副長補佐官殿」

「ああ。すまない。じゃあ行ってくるよ」

そう言い俺はみほたちの元へ向かうのであった。一方みほたちは一足先に図を広げて最終確認を行っている

「ここがポイントです」

そう確認を取る中、1台のAS42サハリアーナが近づいてくる。カルパッチョが運転する横で腕を組んで立ち乗りしているアンチヨビの姿があった

「たのもおーー!!」

大声を出してそう言う彼女に角谷さんは

「おーチヨビ子。久しぶり〜」

干し芋を頬張りながらそう言うがアンチヨビは不服な顔をしてAS42サハリアーナから降りると

「何度も言わせるな角谷！チヨビ子と呼ぶな。アンチヨビと呼べ！」

「それで、なんの用だ安齋？」

「アンチヨビ!!試合前の挨拶に決まっているだろ！」

そう言いコホンと咳払いすると

「私はアンツイオの統帥ドゥーチェアンチョビ。そっちの隊長は？」

ビシイッ！と言う擬音語が付かんばかりに指を指しながらアンチョビが言うくと河嶋は

「おい、西住」

「あ、はい」

河嶋に呼ばれみほはアンチョビのところに行くくとアンチョビが

「ほくあんたが西住流の？」

「はい。西住みほです」

「ふん！相手が西住流だろうが島田流であろうが高杉流だろうが、絶対に負けない………じゃなかった、勝つ！と、言うわけで今日は正々堂々と勝負だ」

「は、はい！」

そう言ったアンチョビから求められた握手を、みほは快く受ける。その後、アンチョビは大洗の陣営を見回していた。

「ところで……伝説の戦車乗りの黒狼はどこだ？彼にもあいさつしたいんだが？」

「え？義弘君？えつと義弘君は……」

アンチョビに訊かれみほはあたりを見ると

「ああ、みほ、すまない遅れた」

と、そこへ義弘がやって来た。

「ああ、ううん別に大丈夫だよ義弘君。それよりアンチョビさんが、義弘君に挨拶したいって」

「アンチョビって……アンツイオ高校の隊長の？」

「うん」

みほがそう言うくとアンチョビが義弘の前に出て

「おお武藤。久しぶりだな。私の学校に偵察しに来て以来か？」

「ああ、先日のおもてなしはどうも。あの時は楽しかったよ」

「いいっていいって。また美味しい料理振舞ってやるからいつでも遊びに来い！……て、そうじゃなかった。コホン。武藤……いや黒狼

！改めて名乗ろう私はアンツイオ高校戦車道部の統帥ドゥーチェアンチョビだ。よろしく」

「こちらを改めて、武藤義弘。昔は黒狼と呼ばれたただの戦車乗りだよ。よろしく」

あらためて二人は名乗り握手する二人

「それにしてもあの後フェルから詳しく聞いてな。私も過去の戦車道月刊なんかを読み漁っていたが、お前が本当に中学時代強かったらしいんだ。でも不思議なんだ。なぜ武藤ほどの実力の持ち主が中学二年あたりで急に戦車道からいなくなったんだ？ある時は死んだって噂も出たんだぞ？」

「えつと……まあいろいろとあつてな。留学でドイツに行つた」「ドイツ……そう言えば前にフェルが武藤は欧州でも活躍したつて言っていたな……なるほどそう言うことか。まあ、あまり深くは訊かないさ。何にせよ、こうして戦えるのは嬉しいからな。けど私たちアンツィオは絶対に負けないからな」

「ああ、お互いに全力でそして楽しく試合をしようなアンチヨビ」「お、おう／＼／＼」

アンチヨビは義弘に不敵の笑みでそう言われて顔を赤くする。そしてその様子を遠目で見ていたみほたちは複雑そうな顔で見て、同じく篠原も

「はあくまた、あいつ無自覚に……質が悪いわね、あの天然女つたらしが……」

「道子さん。武藤車長つていつもああなんですか？」

「ええ、中学時代から優しさに境界線が無くてね。それでいつも歳関係なく誰かに好意持たれちゃうのよ。でも本人にはそのことに全く自覚なくて……たまにこのハーレム野郎！って怒鳴りたくなる時が何度もあつたわ」

「なるほど……確かに質が悪いですね」

「でしょ？それにあいつもみほさんの気持ちにいい加減に気付いてほしいものだわ……」

「え？道子さんそれってどういう……」

あきれ顔でそういう篠原に服部と小波は首をかしげるのであつた。そしてみほたちが楽しくアンチヨビと話している義弘に複雑な感情

で見ている中、カバさんチームでは……

「ん？ひなちゃん!？」

「たかちゃん！久しぶりー!!」

先ほどからキョロキョロと誰かを探していたカルパッチョがカエサルを見つけると嬉しそうに駆け寄った。

「ひなちゃんも！久しぶりー!!」

カエサルもそれに気付くとすぐにカルパッチョの元に行き、二人して手を繋ぎ互いに嬉しそうに笑い合う

「たかちゃん、本当に戦車道始めたんだね、びっくりー、ね、どの戦車に乗ってるの?」

「えへへ、ひみつー」

「えー、まあそうだよねえ、敵同士だもんね」

と、話し合うち、他のカバさんチームはそれを見て

「たかちゃんって誰ぜよ?」

「カエサルの事だろう」

「いつもとキャラが違う…」

いつもクールな表情で堂々としたカエサルを見てきた他の三人は、無邪気な笑顔で話すカエサルを見て啞然とする。そんな三人に気付かずカエサルこと貴ちゃんは

「でも、今日は敵でも、私達の友情は不滅だかね」

「うん、今日は正々堂々戦おうね」

「試合の前に会えて良かった、もう行くね、ばいばい」

「うん、ばいばい」

お互いにこやかに笑い合って手を振っている、嬉しそうな表情のカエサルだが、後ろを振り返ると……

「たーかちゃん♪」

「カエサルの知られざる一面を発見だな」

「ひゅーひゅー」

カエサルの後ろには他の歴女メンバーがニヤニヤした表情で見てカエサルを茶化していた。それを見たカエサルは

「なっ…、なんだ！なにがおかしい!!」

顔を真っ赤にさせてそう叫ぶカエサルであった……

そして大洗学園二回戦がついに始まるのであった



試合開始！マカロニ作戦です！！

「Panzer Vor！」

「Avanti！」

試合開始のアナウンスが鳴ると、両隊長の掛け声とともにアンツイオ、大洗の戦車が一斉に動き出す。

「行け行け！何処までも進め！勝利を持ちうる者こそが、パスタを持ち帰る！」

「最ツ高ですよアンチョビ姉さん！」

フラッグ車であるP40のキューポラからアンチョビが無線でそう言う隣を走るcv33に乗るペパロニが興奮してそう言うトペパロニは無線を取り

「聞いたかお前ら！モタモタしてんじゃねえぞ！このペパロニに続けえ！地獄の果てまで進めえ！」

『おおーっ！！』

ペパロニの言葉にカルロベローチエの乗員たちは声を上げ、そしてカルロベローチエ隊はP40を追い越しあたかも暴走族のような走りで行先する

「よし、このまま『マカロニ作戦』及び『三種のチーズピザ作戦』を実行する！」

「カルロベローチエ各車、マカロニを展開してください！」

「抜かりなく頼むわよ！」

アンチョビ、カルパッチョ、そしてフェルが無線でペパロニに言うトペパロニは

「了解っす！マカロニ特盛でいくぜっ！！」

そう言い森の中に入ったカルロベローチエ隊はある程度進んだところで停車し、そして乗員が下りると車体後部にあるエンジンルームの上に積んでいた看板を下ろしてどこかへ運ぶのであった

「先行しているアヒルさん。状況を教えてください」

一方、大洗チームは山を登っていた。そしてアヒルさんチームは偵察として先行をしていた。そして八九式は急斜面を上つていると磯部がキューポラから顔を出しあたりを警戒しながら見る。そしてインカムで

「十字路まで後一キロ程です。今のところ、敵戦車の姿は見当たりません」

『十分に注意しながら、街道の様子を報告してください。開けた場所に出ないよう、気を付けて!』

「了解! ずっとコート外を行くよ!」

「はい!」

磯部の言葉に川西が頷き八九式は十字路へと向かっていきそして街道手前へと着いた八九式は停車して磯部は双眼鏡を取り出す

「街道手前につきました。偵察を続けます」

そう言い双眼鏡を覗きあたりを見渡すと、十字路にはすでにアンツイオの戦車が停車していた。それを見た磯部は少し驚くと無線でみほたちに知らせる

『敵戦車発見。カルロベローチェ3輜とセモヴェンテ2輜。既に十字路に配置しています!』

「十字路の北側だね? 了解」

無線を聞いた沙織はそう聞くとBT戦車に乗るエレーナは

「流石、豆戦車。あつという間に陣取るなんて流石ね・・・BTも足が速い方だけど、こう入り組んだ地形じゃ向こうの戦車のほうが上ね」

少しため息交じりに言うエレーナ。そしてパンターでも

「それにしても試合開始からもうそこまでの陣取りなんて、アンツイオとは思えない動きね・・・ねえ、義弘?」

篠原はそう言い義弘のほうへ顔を向けると、義弘は少しぐったりした表情を見せていた

「義弘? 大丈夫?」

「・・・え?」

「え? じゃないわよ。あなた少し顔色が悪いみたいだけど大丈夫? も

しかして具合でも悪いの？」

「ああ：大丈夫だよこの揺れで少し車酔いしただけだ・・・」

「車酔いって・・・あんたこんな揺れいつもは大したことなかったじゃない。ちよつと気が緩んでいるんじゃないの？後、酔い止めの薬持っているからこれ飲みなさい」

「ああ。すまない・・・」

そう言い義弘は篠原から酔い止めの薬をもらいそれを飲む。すると十字路の状況を聞いた桃は

「なら、南から突撃だ！」

『でも全集警戒の可能性もあります』

「あいてはあのアンツイオだぞ!!ここは直行だ！」

「突撃いいね〜」

桃の言葉に杏は頷くとみほは

「分かりました、十字路に向かいます。ただし、進出ルートは今のままで行きます」

「西住殿。直行はしないんですか？」

「ウサギさんチームのみ、ショートカットで先行してもらいます。まだP-40の所在も分かりませんから、我々はフィールドを抑えつつ、十字路へ向かいます」

みほがそう言っているのを聞いたウサギさんチームが、大洗戦車隊の列から外れて斜面を登る。

「ウサギさん、十分気を付けてください」

『はい、任せてください頑張ります！』

そう返事をし、うさぎさんチームは十字路へと向かうのであった。一方先に十字路にいるアヒルさんチームはそのまま動かないアンツイオチームを見張っていた。そして磯部は無線でみほに連絡を取っていた

『此方、アヒルさんチーム。今のところは敵の状態に変化がありません、指示をください』

「本隊がそちらへ向かうので、そのまま待機をお願いします」「了解しました！」

「そう言い磯部は無線を切ると、再びアンツイオを見張っていた

「うくん……動きがないな……」

「エンジンを切っていますね？」

「双眼鏡で見ていた磯部と佐々木がそう呟く。そして援軍に向かったうさぎさんチームは……」

「おー、速い速い！特訓の成果だね」

坂口の運転するM3が、かなりの速度で上り坂を上っていた

「きゃくもつとばして〜♪」

「あいく！まかせてバカヤロ!!」

「ちよつと桂里奈、天野さんの口癖がうつっているよ!?それにスピードが出すぎーもう街道だよ!!」

澤が慌てて言うが車もとい戦車は一度走り出したらなかなか止まらない。坂口が急ブレーキを踏んでもスピードが出ていたため、?3は勢いよく街道に飛び出してしまう。そしてその瞬間澤は、十字路で待機しているアンツイオの戦車を発見した

「まずい!?後退!後退!!」

発見されたと思いい澤は急いで交代するように言い、?3は急いで後退する

『街道南側で敵発見!すみません、見られたかもしれません』

「敵からの発砲は?」

『まだありません』

「くれぐれも交戦は避けてください!」

ウサギさんチームからの通信を受けたみほは、直ぐに指示を出し、秋山は

「ノリと勢いを封印し、一番の要所を完全に押さえるなんて、流石はアンツイオです」

「感心したようにそう言うとパンターに乗る義弘は地図を広げて篠原と話をしていた

「これは……持久戦に持ち込むということか義弘?」

「それか、わざと中央突破させて、自慢の足で包囲と言う手段もある。まあともかく今は相手の車両の確認が必要だ。そうでなければ対策

のしようがない。ウサギチーム。敵戦車の数はどのくらいだ?」  
『は、はい。ええつと……』

義弘が澤に聞くと、戦車から降りて茂みに隠れていた澤と丸山は双眼鏡で確認すると

『カルロベローチエ4輛と、セモヴェンテ2輛が陣取っています』

「ん?ちよつと待て。カルロベローチエとセモベンテ?M42とP40は?それにその数で間違いないのか?」

『は、はい。間違いありません』

澤の報告に違和感を感じる義弘。そして義弘はみほに連絡を取った

「なあ、みほ。確かこの試合は10両までだよな?」

『うん。試合場のルールではそうだよ義弘君』

「もしかしてインチキ?いや、あのアンチヨビが卑怯な手を使うとは考えられない……それにエンジンを切っているうえ、ウサギさんチームが街道に出ても発砲しない……もしかするとあれだな。みほ!」

『うん。やっぱり義弘君もそう思う?』

「ああ、ここは試しにやるか」

『わかった。ウサギさん、アヒルさん、退路を確保しつつ、撃つてください。反撃されたら直ぐに下がって!』

『了解』

そうして、アヒルさんチームとウサギさんチームは、其々の前方に居る敵に向かって機銃や砲弾を発砲するが放たれた砲弾と弾丸はアソツイオの戦車を撃破することはできたが、白旗は上がらず、代わりに粉々となったり、爆風で倒れる。そしてよく見るとそれは木の板に描かれたセモベンテの絵であった

「なっ!?!」

「看板!?!」

「板だ!?!」

「にせものだー!?!?!」

今まで見張っていた敵戦車の正体がただの看板だと知り、アヒル、

ウサギチームは驚く。

「やはり欺瞞だったか……爪は甘かったがな。やはりアンツイオはノリと勢いを封印していない。恐らく奴らの作戦はあの看板で釘付けになっている俺たちを三方面から包囲して一気に叩く戦法だな。敵の隊長さん。なかなかの策士だな」

「それって中学時代に義弘が三年の先輩たちをフルボッコにするときに建てた作戦だよな？もしかしてそれを参考に？」

「いいや。俺じゃなくても誰でも立てられるよ」

篠原の言葉に義弘がそう言うと言おうと服部が

「すごいです武藤先輩。まるで軍師みたいですね？」

「そうですね西住隊長が武将なら武藤さんはまさに軍師みたいですね？」

服部と小波が感心したように言う

「まあ確かに義弘は黒森峰中等部では『黒森峰の軍師』なんて呼ばれていたけど」

「そんな異名、呼ばれたことないぞ篠原？」

「女子だけでしかも仲間内でそう言っていただけだからね」

「そうか？まあどっちでもいいけど？」

義弘は首をかしげると無線で

「で、みほ。これからどうする？」

「相手の戦法はわかりました。なら次の行動はこれでいきます。ウサギさん、アヒルさん！」

と、みほは澤と磯部に何かを言うのであった

一方、アンツイオ本陣では……

「ねえ、アンチヨビ？」

「なんだフェル？」

「なんかさ。私、肝心なことを忘れているような気がするんだけど？」

「肝心なこと？看板なら上手く描けているから、問題ないと思うぞ？」  
「いいえ、そうじゃなくてもつと重要なことよ」  
「重要？……言われてみればなんか大切なことを忘れているよう  
な……」

と、何か忘れてはいけない重要なことを思い出そうと首をかしげ考  
えるアンチヨビとフェルがいたのであった

## 山岳での激闘です！

みほたちにマカロニ作戦がばれているのにも気づかずペパロニ率いるc v 33部隊は軽快な動きで荒れた山岳道を走っていた

「アハハハ!! あいつら今頃十字路で偽のデコイを見てビビッて立ち往生しているぜ! 戦いは火力じゃない。おつむの使い方さく」

自信満々に言うペパロニ

「それよりも早く武藤の兄貴の乗るパンターと戦いたいぜ」

「それ本気ですかペパロニ姐さん? パンターとc v じゃ像と蟻ですよ。すぐにプチツと踏まれてお終いです」

「それを言うなよアマレット……」

ペパロニの言葉にアマレットがそう突っ込むと、別のc vから通信が入った

『ペパロニ姐さん!』

「おう、なんだ?」

『大変です。t i p o 8 9 が!!』

「なんだと!?!」

仲間の釣真にペパロニが振り向くと確かに大洗の八九式中戦車が追いかけてくるのが見えた

「なんでバレたんだ!?! ……まあいいや」

「報告します?」

そのひつようはねえ。八九式なんかにびいつてんじやねえ! アンツイオの機動力に、大洗の連中がついて来れつつの! 気にすんな、シカトしとけ!」

『s・s』

ペパロニの言葉にc v部隊は返事をし、そのまま作戦を続行するため進軍したのだが、この時の無報告が後に大失態の引き金になると思ひもしなかった。

一方、うさぎさんチームは森の中を走っていると。



「あつ！一時に敵影!!」

車長である澤が森の向こうで待機するセモヴェンテ二輦を発見する。それをスコープで見っていた副砲砲手である、あやは

「またセモヴェンテ。さっきと同じだ騙されるもんか!」

「あつ!?ちよつと待って!」

またデコイだと思つたあやは梓が止めるにも聞かずに機銃を発射し、そして37ミリ砲を放つ。しかし……

カキンツ!!

硬い金属音とともにあやの放つた37ミリ砲ははじかれる。そしてM3の存在に気づいたセモヴェンテ二輦はM3に向かつて砲撃をするのだった

「ええっ!?本物!!」

「もう!!」

驚くあやに澤はそう言うと、

「桂里奈ちゃん、全速力で飛ばして!何としてもあの2輦を振り切つて!」

「あいーっ!!まかせてバカヤロ!!」

「桂里奈ちゃん。本当に天野さんの口癖うつちやたんだね……」

あゆみが苦笑して言う中、桂里奈はギアを入れてアクセルを思い切り踏み込み、M3を急発進させ。そして梓は敵を発見したことをみほたちに知らせるのであった

一方……

「ブエエクシヨオン!!」

「大丈夫天野?」

「いや、なんか俺の口癖をだれかが言つたような……」

BTの中で天野がそう言う中、みほたちのところに一本の無線が入った

『こ、此方ウサギさんチーム!セモヴェンテ2輦発見、今度は本物です!』

「おつうさちゃんたちが敵見つけたみたいですよエレーナさん？」  
「そうですね？」

天野の言葉にエレーナがそう言う。そしてその無線はみほや義弘にも聞いていた

「大丈夫か？もしかして……撃つちやったか？」

『は……はい。すみません先輩勝手に攻撃しちゃいました。すみません交戦始まってます!!』

義弘の言葉に梓は申し訳なさそうに言うともみほが

「大丈夫。敵の作戦はわかりました。セモヴェンテとは、付かず離れずで交戦してください。もし2輜が西の方へと行動を始めたら、それは合流を意味します。その際には全力で阻止してください」

『は、はい!』

みほの指示に梓は返事をし、みほはほかの車両に指示を出した

「我々あんこうとカバさん、そしてオオカミさんチームとキツツキさんチームは、カメさんを守りつつ進撃します。主力が居ない間に、敵のフラッグ車を叩きましょう。当然ながら、その際には此方のフラッグ車は勿論ですが、火力が高いオオカミさんチームのパンターも警戒されるでしょうが、逆に囷として、上手く敵を引き付けてください!」

『了解。任せてくれ』

『∩。任せてください』

みほの指示に義弘とエレーナは返事をする。そしてみほの話す作戦は実行されたのだった。

一方、アヒルさんチームは広い荒野でカルロベローチェ隊を追いかけていた。アヒルさんチームが激しい砲撃や機銃掃射をする中、カルロベローチェ隊はまるで暴走族のごとくジグザク走行で攻撃をよける。そしてカルロベローチェ隊長のペパロニは

「くそっ!しゃらくせっ!!おい!反撃だ!!」

「Sii!」

ペパロニが車内後部の窓を覗きながら、操縦手のアマレットに支持するとアマレットは頷き返事をする。すると、2輜のカルロベロー

チエは八九式の前に、残りの3輦は後ろにつく

「バックアタック！」

「はい！」

背後に回ったのを見た磯部はあけびに背後の敵を撃つように指示し、あけびは背後にいる3輦のカルロベローチエに向けて車載機銃を撃つが、カルロベローチエはその弾丸をよける。そしてペパロニ率いる。前を走っていた2輦が反転してバック走行を始め

「Sparrare！」

そしてペパロニの指示で、5輦のカルロベローチエは一斉に機関銃を乱射する。

「イッテテテテテテ!?」

カルロベローチエの8ミリ機銃弾は八九式の装甲を貫けずはじいてしまうが、なぜか車内にいる磯部とあけびは痛いと言う。すると通信手の妙子が

「痛いのは戦車ですから、兎に角落ち着いて攻撃してください！」

そう言い、磯部たちはカルロベローチエに向けて砲撃する。すると一発の砲弾がカルロヴェローチエに命中する

「よっしゃーバレー部の時代来てるぞー！」

「「おーっ!!」」

そう言い彼女たちはカルロベローチエに向けて砲撃をするのであった

一方、その頃、セノヴェンテに追われているM3こと、うさぎさんチームは……

「梓、反撃できないの？」

「2輦相手じゃ……」

「回り込んじやいなよ」

「逃げるので精いっぱい！」

と、梓たちは逃げながら反撃するかを話し合っていた。すると優希が

「そうだ。考え方次第だよ。向こうが2輦で一つの砲。こっちは二つで会いこじゃん♪」

「なるほどー」

「なるほどじゃない!!」

優希の言葉にあゆみは納得するが澤がそれを突っ込み、そしてM3は森の中を走り逃げるのであった

とどこで激しい戦闘が行われている中、とある地点の草影には、アンチョビのP-40に護衛のセモヴェンテにそしてM15中戦車にカルロベローチェが待機していた。そしてP40重戦車の車上で待つアンチョビはペパロニが敵を包囲したという報告を待っていたが一向に報告してこないことに疑問を感じ、アンチョビは無線のスイッチを入れる

「おい、ペパロニ隊！マカロニ作戦の方はどうなっている？」

と、呼びかけるのだが……

『すみません姐さん。今それどころじゃないんで後にしてください!!』

ペパロニの言葉にアンチョビとそして同じく無線を聞いていた、副長補佐及び相談役であるフェルが首をかしげた。そしてアンチョビが

「後って……なんで？」

『今、<sup>ティ</sup>tip<sup>ポ</sup>089と交戦中なんです！なんでバレちゃったのかな？』

「ちゃんと十字路にデコイ置いたんだろうな!？」

『はい！起きましたよっ全部!!』

「全部っ!？」

ペパロニの報告にアンチョビとフェルが驚きの声終わげる。するとアンチョビは

「お前、何考えているんだ!!デコイ全部置いちゃったら数あかないから即バレるだろうが!!」

「それにあんたなんですぐに交戦したって報告しなかったの!!それじゃあ対策できないでしょ!？」

と、アンチョビとフェルがペパロニに注意すると

『ああ、そつかく姐さんたち賢いっすね〜』

と、お気楽に言うペパロニに対し二人は

「お前（あんたが）がアホな（抜けている）だけだっ!!!」

と、強烈な突っ込みを入れ、アンチョビは無線を切る

「二枚は予備だつて言ったのに何で忘れちゃうかな〜」

「あの子は才能はあるんだけどいまいちそれを開花できないのが悩みね・・・それにしてもハウレンソウができないなんて・・・あの時の嫌な予感は何だったのね・・・」

二人はため息をつきアンチョビが

「カルパッチョ、フェル。出撃だ。敵はすぐそこまで来ている!!」

「了解!」

と、そう言いアンチョビたちは出撃したのだが、突如前方からやって来るみほ達の戦車と擦れ違う。それを見たアンチョビたちは

「全車停止!敵フラッグ車と隊長車発見!」

アンチョビが声を張り上げると、4輜は急停車する。大洗の戦車も同じくであり、義弘の駆るパンターは、速度を落としながら信地転回し、スライドしながら向きを180度後ろへ向ける。

「あのパーソナルマーク……………まさか、タカちゃんか!？」

その時、セモヴェンテのハッチから様子を窺っていたカルパッチョは、ゆっくりと向きを変える皿突の側面に描かれているカバさんチームのマークを見て何かを感じ取ったのか、皿突に狙いを定める。そして同じくフェルもBT7を見て

「（あのBT：足が速いから追いつかれると厄介ね……………ここで足止めする必要があるわ）隊長!私はBTを止めるわ!!あんたは先に行って!」

「総師、私もあの三号75mm長砲身を止めます!」

『ああ、頼んだ!』

そう言いセモヴェンテとM15中戦車は足止めのためBTと三突に向かう。そして残ったP40とcv33は坂を下り始めた。

そしてこの戦いは長期戦へと突入するのであった

はげしい激戦です！

両軍のフラッグ車、隊長車が遭遇し、IV号とP40は激しい砲撃戦を繰り広げていた。同じころ三突、BT7を止めるためセモベンテとカルロアルマートは激しい一騎打ちをしていた。

「敵に背後を取られないで！BTの速度は尋常じゃないわよ！」

「了解ですフェルさん！」

「天野！相手の背後に回り込んでBTの機動力なら回り込める！」

「あいよ任せなバカヤロ！」

BTとあるマートは激しい旋回をしながら攻撃し、そして三突とセモベンテは激しくぶつかり合い、そして至近距離から砲撃をしていた。

「向こうは側面は晒さない筈、正面なら防循を狙って！」

「何処でも良いから、兎に角当てろ！三突の主砲なら何処でも抜ける！」

互いに装填手であるセモヴェンテのカルパッチョと三突のカエサルは、其々の砲手に言う。

2輻の車体や砲身が何度もぶつかり合い、激しい金属音と火花を散らす。

そして互いに撃ち合うが、ぶつけ合っている時に砲身が別方向を向き、そのまま砲弾が放たれ、其々の天板を掠れていくだけに終わる。

履帯同士も接触させ、それで切れないのが不思議なぐらいに、何度も車体のあちこちをぶつけ合い、撃ち合うのであった。

そしてアヒルさんチームの八九式は、迫ってくる数輻のc v 3 3と交戦していた。そして迫りくるc v 3 3を57ミリ砲で撃破していくのだが、次々と現れて

襲ってくる

「なんかどんどん増えているんですけど!?!」

「泣き言を言うな！」

そう言い、典子は砲弾を装填し、あけびはc v 3 3を砲撃して次々に当てていくが、それでもカルロベローチェの数は全く減らず、また

次々と復活して襲い掛かってくる。

「うわっ!? また出てきた!!」

「西住隊長、これじゃキリがありません!」

「豆タンクが不死身です!」

磯部と忍とあけびが、何度でも復活してくるカルロベローチエに悲鳴を上げる。そしてそれを聞いたみほは無線でこう言った

『大丈夫です。カルロベローチエは不死身な訳ではありません。白旗判定が出ていない車両を立て直してくるだけなんです!』

「へ〜車体の軽さで衝撃を緩和してるんですね?」

「回転レシーブ……」

「要するに根性だ!」

みほの説明に三人は納得すると今度は義弘からアヒルさんチームに無線が入る

『あと、豆戦車の弱点は車体後部のエンジン冷却部だ。車体に当たっても、またさっきのように復活してくる。確実に撃破するならそこを狙え』

「わかりました!」

磯部は義弘とみほに礼を言い通信を切る

「よし! じゃあ皆、1からやり直しだ! 根性で攻めまくるぞ! バレー部ファイトオーツ!」

「二! そおーれっ!!」

メンバー全員の掛け声と共に、カルロベローチエを追う八九式は上り坂を越え、勢い良く飛び出し、まるでカリオストロの大泥棒のカーチェイスを連想させるようにc v 3 3とチェイスをしていた。

「よし佐々木! さっき武藤さんが言ったことを思い出せ。砲が揺れても照準を安定させて狙い撃て!」

「はい!」

あけびは片手で引き金部分を押しさえ、スコープ越しに前方を走る1輻のc v 3 3のエンジン部分に狙いをつける

「ウィークポイントは、エンジン冷却部」

「撃てえ!!」

典子がそう言った瞬間だった。突然前方を走る2輛のc v 3 3が左右に分かれ、その間からセモヴェンテに追われているウサギさんチームのM 3が現れる！

「うわあっ!?!」

突然現れた味方の戦車に驚くのも束の間、M 3と八九式のシャーシ部分が擦れ合い、それを避けようとした八九式が片輪走行を始め、典子が慌てて体制を戻す。そして八九式はc v 3 3を追いかけ、そして「撃て!!」

「はい!!」

あけびは引き金を引く。すると、その砲弾は見事にエンジン部分に叩き込まれ、砲撃を受けたc v 3 3は土手に乗り上げ、そのまま横転して止まり、車体側面から撃破を示す白旗が飛び出す。

「よし、次! バックライト!」

「はい!」

「フロントライト!」

「ここもウィークポイント!」

あけびが引き金を引き、薬莖が排出される度に、典子は次々に砲弾を放り込んでいく。

砲弾が当たる度に、あるc v 3 3はスリップして止まり、またあるc v 3 3は横向きにゴロゴロと転がって止まる。そして瞬く間に、残ったc v 3 3はc v 3 3隊リーダーのペパロニだけとなった。

「調子に乗りやがって!」

車内後部の窓から八九式を睨みながら、ペパロニはそう言う。

《カルロベローチエ4輛、走行不能!》

「な、何だって!?!」

一方、c v 3 3が撃破されたことはアンチヨビの乗るP 4 0にも伝わっていた

「包囲戦は中止だ!.....とか言ってる内にC V がやられた!?!」

包囲戦を中止するように言うアンチヨビだったがその直後、パン



ターから放たれた砲弾が護衛のc v 33に命中する。これによってこの場にいるのはアンチョビの乗るフラッグ車だけであった

「い、一同！フラッグの元に集まれ！戦力の立て直しを図るぞ！これより分度器作戦を発動する！」

「了解!!」

アンチョビの号令の下、激しい一騎打ちをしているカルパッチョのセモベンテとフェルのカルロアルマートを除く、ペパロニのc v 33とM3を追う二輦のセモベンテがアンチョビの元へと向かった

「あゝところでペパロニ姐さん。分度器作戦ってなんでしたっけ？」

「さあ？知らん」

と、どうやらペパロニたちは作戦の内容を理解していなかったようだ。そしてP40が単独になったのを見たみほは

「P40が単独になりました。援軍が来る前に決着をつけましょう！」

「あいよ〜どうするの？」

みほの指示に杏がそう訊くと

「義弘君。お願いできる？」

「ああ。任せてくれ」

みほの言葉に義弘は返事をする。と義弘の乗るパンターは離れていくのであった。

一方、M3は先ほど追いかけていたセモベンテ二輦を追いかけていた。それはP40と合流させないためだ

「向こうが合流する前に、2輦共やっつけるよ！」

「やつと撃てる！」

梓の命令にあゆみは嬉しそうに言い坂を上るセモベンテに37ミリと75ミリ砲を撃つが、砲弾は二輦に当らずすぐそばに着弾してしまふ

「あーもうー！」

「なんで当たらないのよ〜？て、腕だよね・・・」

「やっぱり停車して撃とう。急がば回れだよ。桂里奈ちゃん」

「あい！停車！」

「そう言いM3は停車する」

「せつかく砲が二門あるから、これで誤差を修正するの」

「どうやって?」

「綾、撃って」

「オーケー!」

「素晴らしい綾は37ミリ砲を撃つが、砲弾は当たらずセモベンテのすぐそばに落ちた」

「やっぱりはずれた!?!」

「えつと・・・右に1メートル、上に50センチ修正して」

「うん!」

梓の言葉にあゆみは誤差を修正する

「撃て!」

明日座の言葉にあゆみは引き金を引くと放たれた砲弾は見事セモベンテに命中し撃破した

「当たった!」

「すごい!」

命中したことに桂里奈と優季は喜ぶ

「次を狙うよ。綾、あゆみ」

「わかった」

「そう言い二人は残ったセモベンテを狙おうとしたがセモベンテは丘の向こうへと行ってしまった」

「あ!逃げられた!」

「追うよ。落ち着いて冷静に!」

「梓。西住隊長みたい」

「そしてM3は急発進させ、取り逃がしたセモヴェンテを追い始めた。」

「そして一騎打ちをしている三突とセモベンテは」

「次で決着着けてやる!正面で撃ち合った直後に!」

「後ろに回り込む・・・装填の速さで決まる!」

と激しい打ち合いをし、同じく激しい一騎打ちをしているBT7とカルロアルマートも

「決着付けるよ!」一気に背後に回り込みなさい!」

「おっす!!姐さん!!」

「次の旋回で勝負が決まる。ルチアナ!!相手が旋回した瞬間砲塔を回して撃ちなさい!」

「了解フェルさん!!」

両車とも激しい戦闘をする中、そして、その瞬間。二つの地点から爆音と黒煙が舞い上がるのであった

一方、アンチョビの乗るP40は相手のフラッグ車である38tを見つけ。ほかに伏兵がないか警戒しながら追っていた

「待ち伏せらしきIV号とパンターの姿が見当たりません」

「囷かと思っていたが・・・考えすぎか?」

アンチョビは38tが囷じゃないかと警戒していたが周辺にIV号とパンターがないことに自分の考えすぎかと警戒を一時解いた

良いか、見せ付けてやれ!アンツイオは弱くない……じゃなかった、強いと言う事を!目指せ、悲願のベスト4!って、それでもない!優勝だあーッ!

そう叫び38tに向けて砲撃するが当らなかった

「外れ〜」

「たまには当ててよ桃ちゃん」

「今は挑発行動中だから良いんだ!」

相変わらずのノーコンに柚子が突っ込むと桃はそう言い返す

「で、西住ちゃん。そっちはどう?」

「はい。オオカミさんチームと合流してもうすぐ到着します。キルゾーンへの誘導、よろしくお願いします」

「あいよ〜」

そう言い杏たちはP40をキルゾーンへと誘導する。誘導に乗っかってきたアンチョビのP40が目的地に到着し

「よし、崖に追い詰めたぞ!!」

「そう言い砲弾を撃つが躲される

「あ、クッソ！装填急げ！」

「はい！」

装填手にそう言うのとアンチョビは不意に崖の上を見る。するとそこには砲をこちらに向けたIV号とパンターがいた。

「え!?!...これはまずい」

さすがにやばいと思ったアンチョビすると

『総師、遅れてすみませつ、痛あ!?!』

その時、運良くウサギさんチームから逃げてきたセモヴェンテが崖の上から現れるが、其所からガラガラと音を立てながら、派手に落下して地面に叩きつけられる。

「くらー！無茶をするな怪我をしたらどうする！」

そう言いアンチョビの乗るP40は後退して墜ちたセモベンテの盾になろうとするがそこへ到着したM3の砲撃でセモベンテは撃破されてしまう

「アンチョビ姐さん！姐さあーん!!」

その直後、ペパロニのcv33が到着したのだが、追ってきたアヒルさんチームの八九式中戦車の57ミリ砲がcv33のエンジンに向けてはなたれ砲弾はエンジンに命中し、cv33はそのまま吹き飛ばされ、車体のあちこちを派手に地面に打ち付けながら飛んでいき、最終的には撃破されたセモヴェンテにぶつかって止まる。

そしてP40は4号に向けて砲弾を放つが砲弾は外れ、代わりにIV号とパンターからの砲撃を受け、撃破される結果となった。

《アンツイオ高校、フラッグ車、P40走行不能!!よって大洗学園の勝利!!》

こうして第二回戦車道の勝者はみほたち大洗学園となったのだつた.....

試合後の宴です！

第二回戦、アンツイオ高校と大洗学園の勝敗は大洗女子へと軍配が上がった。

「勝ちましたね道子さん」

「ええ。でも私たちの出番は少なかったけどね」

小波の言葉に道子は苦笑してそう言う

「ねえ、義弘。勝ってよかったわね」

道子は振り返り義弘にそう言うが……

「……………」

義弘はぐったりした表情で壁に寄りかかっていた

「義弘？ねえ、あんた大丈夫？」

そう言い道子は義弘の体を揺らすと、目を閉じていた義弘の目がゆっくりと開き

「……………え？篠原。試合はもう終わったのか？」

「え？あんた何を言っているの？もう終わったじゃん。私たちの勝ちよ」

「え？……………ああ、そうだったな。すまんキルゾーンへ向かう途中で寝てた」

「ねえ、あんた顔色悪いわよ？車酔いとかそういうレベルじゃないわよ？本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だ……………久しぶりの激戦でちよつと疲れただけだよ」

「激戦って……………あんたからすれば大した戦いじゃないじゃない。本当にあんたこの頃様子が変よ？まさかどこか具合でも悪いの？なら病院に行った方が……………」

「大丈夫だつて……………やれやれこれぐらいで疲れるなんて、俺も腕が落ちたつてことだな」

「そんな年寄りみたいなことを……………」

「とにかく降りよう。みんなのところに行かないとな」

そう言い義弘はハッチを開けて外に出るそれを道子が疑いのまなざしで見ているのであった。

義弘たちが下りた後、義弘はみほと合流した

「お疲れみほ」

「うん。義弘君もお疲れさん」

「次はどうとう準決勝だな」

「うん」

と話し合っていると

「いやー惜しかったな。今年こそは勝てると思ったのに。でもいい勝負だった」

とそこへアンチョビがやってきて、みほと義弘の手を握り握手をする。そしてみほにハグをし

「決勝まで行けよ？ 我々も全力で応援するから！ だよなあ！」

「「おおおー！！！！」」

アンチョビが仲間になんと呼びかけるとアンツイオの仲間たちは元気いっぱい声を上げる

「ほら笑って！もつと手を振って！」

「あ、アハハハ…ありがとうございます」

もはやどつちが勝者かわからない。みほは苦笑しながらアンツイオに人たちにお礼を言う。するとアンツイオの生徒たちがテーブルや椅子。そして大きな鍋を用意し始めた

「なにが始まるんですか？」

みほがアンチョビになんか訊くとアンチョビはふつと笑い

「諸君！ 試合だけが戦車道じゃないぞ！ 勝負を終えたら試合に関わった選手、スタッフを労う！ これがアンツイオの流儀だあー！！」

そう言った瞬間。アンツイオの生徒たちが宴の準備や料理を作り始める

「すごい物量と機動力……」

「まさに電撃戦……」

みほと義弘がポツリとと呟く

「我が校は食事のためならどんな労力をも惜しまない！ ……この、この子たちのやる気が少しでも試合に活かせるといいんだけどなあ

……。まあ、それはおいおいやるとして！　せーのっ！

「いたただきまーす!!」

そう言い、宴が始まった。みんな美味しくパスタやピッツアを食べうさぎさんチームは同じ一年生であるアンツイオの子たちと仲良く交流をしていた。そして秋山はアンツイオのパンツァージャケットを見て興奮して質問をする中、聞かれた子は困惑した表情をして答えていた

そして互いに一騎打ちをしていたフェルとエレーナも

「今回は相打ちだったけど。次は私が勝つからね」

「ㇿ。それはこっちのセリフです。次は負けませんよ」

とパスタを食べながらそう話していた。そんな中……

「……………」

義弘がパスタを食べた瞬間、顔色が変わった

「義弘君。どうしたの?」

みほが訊く中、義弘の表情は少し動揺した表情をしていた

「ん?どうしたんすか兄貴?」

そこへペパロニがやってきて義弘にそういう。そう言いながら義

弘はまた一口パスタを食べるが、また動揺した表情になる

「義弘君?」

「本当にどうしたんすか?もしかして兄貴の口に合わなかったすか?」

「え?いいや。違うよ。あまりにも美味しかったからちよつと言葉が出なかったんだよ」

「そうだったんすか?よかった兄貴の口に合って」

ペパロニが嬉しそうにそう言うと

「ねえ、先輩」

「ん?どうした?」

と、うさぎさんチームのあやが義弘に声をかける

「すみません。その香辛料取ってくれませんか?その赤い奴」

ちよつど義弘の席の前には、同種の容器に入った香辛料が複数置かれていた

「ん？ああ。いいぞ……」

素晴らしい香辛料を取ろうとしたが急に手がピタツと止まる。

「……」

そして義弘は目をぱちぱちさせ目をこすって香辛料を見る

「どうしたんですか先輩？その香辛料ですよ？」

「え？ああ。ほら」

「先輩。それ胡椒ですよ？私が言ってるのはその赤いパウダーのやつですよ」

「あ、赤……？」

なぜか義弘は綾の言った香辛料を取らない。それどころか。目を丸くして、瞬きを繰り返している

「はい。これだな」

と、そこへアンチョビがやってきて赤いパウダーの入った容器を取り綾に渡す

「あ、ありがとうございます」

「義弘君？どうしたの样子が変だよ？」

「……」

みほが心配そうに訊くが義弘は答ええない。気の抜けた顔でひたすら瞬きを繰り返して、目を擦る

「義弘君？」

「おい。武藤。大丈夫か？」

「え？ああ……大丈夫だよ。すまないちよつと席を外すよ」

そう言い義弘は席を立ちその場を去る。みほは先ほどの義弘の表情を思い出していた

「(義弘君……どうしたんだろ？いつもの義弘君じゃない)」

そう思う中、アンチョビは……

「どうしたんだろ？あいつ？」

不思議そうに首をかしげると

「ちよつと千代美」

「なんだ？フェル？ていうか千代美じゃないアンチョビと呼べ」

「わかった。わかったわよ……で、あの男にいつ告白するの？」



「え／＼／＼!?!」

フェルの言葉にアンチョビは顔を真っ赤にする

「ほら、雑誌に書いていたじゃない。『その人の心を射止められるのはあなたの勇気次第です』って。こんなきれいな夕焼けに今行かずにいつ行くのよ!」

「え．．．えっと．．．その今度にしないか?」

「ダメ。まごまごしてると誰かに先取りされるわよ。ほら、さっさと行った!!」

「うわあっ!?!」

そうフェルはアンチョビの背中を強くたたき彼女を激励する。

「フェル．．．．．すまないありがとう!」

そう言いアンチョビは武藤を追いかけるのだった

「(さっきのは、一体．．．．．気のせい、じゃないよな．．．．．)」

義弘は人気のないところでそう何かを考えていた

「はあ．．．．．」

軽くため息をついた瞬間だった

「っ!?!」

急に肺や心臓に激痛が走る

「ゴホッ!・ゴホッ!・ゴホッ!!!」

血が吐き出そうなくらいの咳と心臓が締め付けられるような激痛が義弘を襲う

「ごっちもか!・糞．．．!」

顔を歪めながら義弘は胸ポケットから錠剤の薬を取り出し一粒呑む。やがて激痛はだんだんとおさまり義弘は息を切らしながらしがみ込む

「(薬の効き目も．．．．．あまり効かなくなってきたな。これはますますやばいかもしれないな)」

義弘がそう思い。立ち上がると

「ここにいたのか武藤義弘」

「アンチョビさん?」

そこへアンチョビがやってくる

「どうしたんですか？こんなところに？」

「そ、その、お、お前にいつときたいことがあつてな……」

「俺に？」

「ああ……」

アンチヨビはもじもじしながらそう言う。

「あ……あのな。お前には以前助けられたことがあるんだ。だからそのお礼を言いたくて」

「助けた？」

「ああ。私のことを覚えているか？ほら」

そう言いアンチヨビは眼鏡を取り出してかけると、義弘はじつとアンチヨビさんを見て

「うくん……あつ！あの時変な奴らに絡まれてた。へーアンチヨビさんだったのか」

「あ、ああ。本当にありがとうな」

「いや、お礼を言われるようなことじゃないって」

「でも言わせてくれ。本当に本当にありがとう。だから……そのあの、良かったら……その……わたしと……」

「ん？」

顔を赤くしもじもじするアンチヨビ。

「どうしたの？」

「その……わたしと……わたしと……携帯のメールアドレス、交換しないか？」

「え？」

告白するつもりがメアド交換しないかと言ってしまふ。アンチヨビ。彼女はまだ告白する勇気がまだなかったみたいだ。そんな彼女の気持ちを知らない義弘は首をかしげて

「え？そんなんで良ければ別にいいですよ？」

「ほ、ほんとうかつ！やったあー!!」

と、義弘の言葉にアンチヨビは嬉しそうに飛び跳ねた。告白は出来なかったが、その一歩としてメアドを交換できたことに彼女は嬉しかったみたいだ

そして義弘とアンチヨビはアドレス交換をするのだった。そしてしばらくして二人は宴へと戻り、その後、二校のチームは派手にどんちゃん騒ぎをするのであった。

しかし、その宴の中、先ほどの義弘の様子をみほと道子だけは不穩に思っていたのであった。

一方、その頃

「ええ、こちらは無事に勝ちましたわカチューシャ。次は準決勝よ」

『そう。さすがダーズリンね』

ダーズリンが誰かと電話をしていた

『ま、カチューシャでも勝てたんだから、たぶんあなたでも勝てるでしょうね』

「ふふ。勝負は時の運と言うものよ。まあ簡単に負けるつもりはありませんが、それよりあなたの次の相手みましたか？」

『ええ。見たわよ。でもあれなら練習しなくてもいいわね。相手は聞いた事も無い弱小校なのよ？』

「でも、相手は家元の子よ？それも、西住流のね」

『えっ!?!』

電話越しからカチューシャと呼ばれた少女が驚きの声を出す

『ちよっとノンナ。そんな大事な事を、なんで早く言わないのよ!?!』

『先日から、何度も言ってます』

『聞いてないわよ!』

電話の向こうでカチューシャともう一人の女性が聞こえた。だがダーズリンは落ち着いた表情で

「落ち着いてかチューシャ。西住流といっても妹の方よ」

『え？妹？なくんだ………よかったゲソ』

「ゲソ？」

『な、なんでもないわよ!』

「黒森峰から転校してきて、無名の学校をこの舞台にまで引つ張り上げてきたんですって」

『ふくん………それで？そんな事を言うために、電話してきたの？』

「まさか。ただあなたとお話したかっただけですわ。あ、そうそう彼女だけじゃないわ。彼もそこにいるわ」

『彼？』

「あら？あなた知らないんですの？三年前に黒森峰から消えた黒いオカミのことですわ」

『ヨシーシヤがっ!?!』

ダージリンの言葉にカチューシヤは驚いた声を出す

「あら？彼のことを知っているのね？」

そうダージリンがそう言う

『ダージリン。次に来るのはいつ？』

「え？そうですわね？準決勝が終わった後ならいいでしょうか？」

『そう………ならその時は彼も連れてきて』

「あら？彼に会いたいですかカチューシヤ？」

『ええ、ダージリン。それにたぶんヨシーシヤも私に会いたいと思うわ』

「あら？どうしてですか？」

『だった、あいつはこのカチューシヤの………』

………弟なんだから』

## 雪降るプラウダ高校での再会です

ここはプラウダ高校……雪の降る冬の学校というのがまさに似合う学校であり、ロシア風の黒森峰などに並ぶ名門の実業系の学校であった。

そんな雪の降る寒い場に行くプラウダ高校の学園艦の路上にあるとある小さな戦車道の店の中に一人の少年が店員と話をしていた

「三年ぶりだな。義弘。あいも変わらず背が小さいな」

「余計なお世話だ。お前こそな赤目。元気そうで何よりだ」

そう、店員と話していたのは大洗にいるはずの義弘であった。そして今、義弘と話しているのはかつての元黒森峰中等部の黒狼メンバーであり、現在オオカミさんチームの装填手の小波の従兄である。赤目であった

「まあ、中学卒業した後は実家を次いで、今ではその実家の支店である戦車ショッププラウダ店で何とかやっているよ」

「また戻るっていう気持ちは？」

「すまないな。実家継いだ以上、家族を助けなくちゃいけない。だから俺の代わりに小波を送ったんだ。で小波のほうはどうだ？」

「ああ、いい装填手だよ。道子やほかの連中とも仲良くやってる」

「そうか。それはよかった……でだ。お前なんでこんな寒い学校に来ているんだよ？ 確かメールでは大洗にいるはずだろ？」

「それなんだが、聖グロのダーズリンに拉致られた」

「はい？」

「正確には試合が終わった二日後に学園艦が燃料補給のためある港に停泊したんだ。その時に偶然聖グロの学園艦と鉢合わせしてな。その時にダーズリンさんに呼ばれてな『美味しいお茶会があるから来ない？』って誘われてきたら……」

「プラウダってわけか……」

「そう言うことだ。じゃあ、俺はそろそろ行くよ。あんまり待たせるとダーズリンに悪いからな……あ、それと注文した例のあれ、ちや

んと届けてくれよ」

「任せとけ……なあ義弘？」

「なんだよ？」

「お前少しやつれたか？顔色が悪いぞ？まるで亡霊のようだ」

「ははは……何言ってるんだよ。俺はいつも通りさ。じゃあな」

そう言い義弘は店を出るのであった。そして店の外では

「ご用は済んだかしら？義弘さん？」

コートとマフラーを着たダーズリンが待っていた

「ああ。終わったすまないな。勝手な寄り道をして」

「いいんですのよ。少し早く来すぎましたし。構わなくてよ」

「そうですか。それでは行きましょう……コホコホッ」

ダーズリンと話していると急に義弘がせき込む

「義弘さん。大丈夫ですか？それに顔色も……もしかして風邪では？」

「いいや。大丈夫だ。少しこの学校の寒さに答えたただけだ。いや〜肺

まで凍りそうだ」

「あら？それはいけませんね。それでは急いでいきましょう。恐らく

彼女も待っていると思いますしね」

「そうですね……それよりも準決勝は惜しかったですね？」

「あら？見てたんですか義弘さん？」

「ええ。すこし、あと一步のところでしたよね？」

「ええそうですね。公式戦、あなた達と戦えないのが残念ね」

「ですが、まだ来年があります。いや、公式戦じゃなくても他の大会で

相まみえることもあるかもしれません」

「そうですね。その時はあの時のリベンジ必ず果たしますわ」

「ええ、こちらこそ。その時を楽しみにしていますよ……その

時に俺がいるかどうかはわかりませんが……」

「……え？」

「いいや。何でもありません。さ、行きましょう」

「え……ええ。そうですね」

そう言い二人はプラウダ高校へと向かうのであった。そして校門の前に着くと二人を出迎えたのは長身の黒髪の女性でまるで雪女の

ような綺麗な顔をした人だった

「プラウダ高校にようこそ、お久しぶりです、ダーズリンさんとそのお客様」

と礼儀正しく挨拶をする。そしてその人は義弘を見ると

「あなたが噂の黒狼ですね？」

「昔の仇名だ。今の俺はただの戦車道をやっているただの男子だ。プラウダの副長のノンナさん？」

「あら？知っていたのですか私の名前を？」

「ええ、サンダースのナオミと並ぶ凄腕の砲手だとか」

「いえいえ、私なんてあの篠原道子の腕に比べたら、まだまだです。あの人の砲手としての伝説は私の目標でもありますから。是非一度手合わせしてみたいです」

「そうか。それは道子が訊いたら喜ぶな。あいつは凄腕の砲手と戦うのが好きだからな」

「そうですか。それは楽しみです」

と無表情でそう言うノンナだが若干嬉しそうな表情をする。

「こほん！」

とそこへダーズリンが咳ばらいをすると

「ノンナ・・・そろそろ・・・」

「そうでした。では案内します。こちらへどうぞ」

ノンナに連れられてお茶会の会場であろう扉の前まで連れて来られた。扉をあけると部屋にはもうすでにお茶会の用意が出来てるのか、ティーセットが置いてあった。そしてなぜか部屋の隅にベッドが置かれており、そのベッドには

「:Z z z」

小学生ぐらいの身長少女が枕をぐぎゅッと抱きしめ寝ていた

「あらあら・・・」

ダーズリンはそれを見て微笑ましく見て隣にいるノンナも同じっというより今まで見たこともないたまげた表情をしていた。そんな中、義弘は

「・・・はあ・・・あいつも変わらずこの人は」

軽くため息をついて寝ている彼女へと近づく。そして義弘は彼女の肩に手を置き少し揺さぶり始める

「あなた、何を・・・」

少しむつとした表情のノンナがそう言うが義弘は気にせず揺さぶる、

「起きないか・・・なら!」

義弘はそう言うと、彼女の耳元で・・・

「・・・あつ!ロスマン先生」

「先生つ???!」

「っ?!」

義弘がそう言った瞬間、彼女は飛び起き。驚いた表情になる。そしてそれはダーズリンやノンナも同じだった

「せ、せせせせ先生!?カチユーシヤは・・・いえ!私は起きてます!!起きてますから!黒歴史を暴露しない・・・で?てあれ?」

慌てた表情でそう言う中、あたりをきよろきよろと見渡すと

「うそですよ。先生は今ドイツにいていませんよ」

「え?」

義弘の言葉に少女は、義弘の顔を見ると

「よ・・・ヨシーシヤ?」

「どうも、お久しぶりです。カチユ姉・・・」

義弘は彼女の前で頭を下げ挨拶をすると・・・

「本当に・・・本当にヨシーシヤなの?」

「はい。かれこれ4年か5年ぶりでしょうか?最後にあつたのは?」

と、義弘は不敵の笑みでそう言う

「ヨシーシヤ!!もう本当に久しぶりなんだからあ!!」

「わぶっ!!」

といきなり少女が義弘に飛びつきぎゅつと抱きしめる。その眼には少し涙が出ていた

「本当にヨシーシヤね!わあー!あなた何にも変わってないわね彼方!特に身長が!!」

「落ち着いてください。それに身長ならカチユ姉も変わっていない



「じゃないか？」

「なんですって！よくもカチューシャの身長のことを言ったわね！そういう生意気な子はこうしてやるんだから！」

「痛ででで！頬を引つ張らないでください!!」

「姉である私を侮辱したからよ覚悟なさい!!」

と他人から見ればじゃれ合っているように見える二人にダーズリンとノンナは啞然としていたがノンナは

「……………」

絶対零度のような冷たい目で義弘を見ていた。それはもうスナイパーが相手をしとめようとする目と同じくらいの鋭い目だった。

するとダーズリンは

「カチューシャ？この前の電話もそうだけど。義弘さんのことを知ってるの？それに義弘さんも？それにさつきから弟とか姉とかって……………もしかして二人は兄妹なんですか？」

ごもつともな質問に二人は

「いや、実の姉弟じゃないよ？」

と、きつぱりと言う。

「え？じゃあ……………二人はどういう関係で？」

「私もそれが知りたいです……………カチューシャ？」

「ノ、ノンナ……………顔が怖いぞ？」

と、ダーズリンとノンナが怪訝そうな表情で質問をすると義弘が

「俺が説明します。俺とカチュー姉……………カチューシャは、かつてロスマン先生のもとで戦車道の指導を受けた……………まあ、要するに姉弟弟子です」

「…で、このカチューシャがヨシーシャより先に弟子入りしてたから私がヨシーシャのお姉さん弟子ってわけよ」

「だから、先ほど弟って言ったのね……………」

義弘とカチューシャの説明にダーズリンは納得するがノンナはただじつと義弘を怪訝の目で見ていた。すると

「ねえ、ノンナ？」

「なんででしょう。ダーズリンさん？」

「あの二人を見て私気が付いたことがあるの……あの二人まるで……」

「偶然ですね私もです」

そう言い二人は楽しく話す義弘とカチューシャを見て

「まるでクララとハイジみたいですね？」

こうしてプラウダの紅茶パーティーは始まるのであった……

## 小さき義姉弟です

昔のことを思い出す

私は戦車道でもっといろんな戦術を学びたいと思い、ヨーロッパ戦車道でその名を轟かせ、そして世界一の戦車道の講師と言われる。ドイツ人のエディータ・ロスマン先生に弟子入りした。

初めて会ったときは中学生？と思ったが、実はかなり年上の……ゲフンゲフン。

それで私は先生の弟子では一番の末っ子だった。ほかの先輩弟子には私はいつもこの身長で子ども扱いされた。確かに私は小学校三年生から身長は伸びてないけど、子ども扱いされるのは、ちよつと嫌だ。こう見えても頭はいいほうなんだから……

そんな時、先生のもとに新しい子が入ってきた。そう、それがヨシーシャよ。当時は高杉義弘って名前みただったけど、話によれば改名しちやつたらしい

ヨシーシャは先生の後輩の子らしく、熊本からやって来たらしい。今まで後輩のいなかった私に初めてできた弟弟子、私とヨシーシャはすぐに打ち解けた。仲良くなったきっかけは互いに背が小さいことだった。小さいと言ってもヨシーシャはカチューシャよりは大きかったけど、それでもほかの男に比べれば小さかったからだ。

だが、戦車道にはそんな事、関係がなかった。

ヨシーシャは人懐っこくよく年上の人に対しさん付けじゃなく姉と呼ぶことが多かった。何でも一人っ子だから姉とか兄とかに憧れがあったという理由みたいだ。聞けば地元にも私と同じ年の姉貴分がいるらしい。

「ねえ、ヨシーシャ」

「なに？姉ちゃん？」

「この戦術だけど……」

私はよくヨシーシャに戦術について相談することが多かった。私も戦術を練ることに長けていると思ってたけど、ヨシーシャだけはほかの先輩たちよりも非常に戦術を練るのに長けていた。さながら軍

師のような感じだったと正直私は思ったわ。そんなヨシーシヤはいつも私と一緒に戦術所を練り、いつの間にか私たちは先輩弟子から『小さき戦術家、高杉、カチューシヤの名コンビ』なんて呼ばれていた、だが私は背の低いことから、良くほかの先輩弟子に馬鹿にされることが多かった。その時、ヨシーシヤがいい考えがあると言い出し私を持ち上げ肩に乗せる。いわゆる肩車だ

「ヨシーシヤ。これが名案なの?」

「そうさ。一人だけだったら背が小さいけど、こうして力を合わせれば誰よりも背が高くなる!大きくなるんだよ」

「でも、今肩車しても先輩の背に届か届かないかぐらいじゃない」

「それは、僕たちがまだ子供だからだよ。でもいずれは大人になる。

その時もこうして肩車をすれば誰よりも大きくなるよ」

「誰よりも・・・」

「そう!それに姉ちゃんは威張れ!」

「え?威張る?」

「そうだよ!姉ちゃんはまるで王者のように胸を張ればいいんだよ!」

「王者・・・」

「うん!姉ちゃんならすごい隊長になるよ。まさに王者と言われるぐらいの!」

「王者・・・そうよ!!このカチューシヤは王者の道を進むのよ!シベリア平原のように心が広くバイカル湖のように深い知識を持つ王者にね。ヨシーシヤ!ヨシーシヤは私の参謀軍師として、そして相棒として一緒に戦車道をやりましょ!私たち二人ならきつと全国!いえ、世界一になれるわ!!」

「あはは!いいね!俺と姉弟子と一緒に、いうのも悪くないね」

ヨシーシヤに肩車をされながら私とヨシーシヤは笑い合った。こうして気の弱かったカチューシヤではなく、今のプラウダのカチューシヤが誕生したの・・・

「……と、まあ、そういうわけよ。私とヨシーシヤの出会いわね……」  
プラウダの客間でカチューシヤは義弘と初めて会った出来事を話していた

「あら？二人はそう言う関係でしたの…羨ましいですわね……ねえ、義弘さん？」

「き、記憶にごいません……」

ダージリンさんは悪戯っぽい笑みで義弘を見ると、義弘は顔を少し赤くしそっぽを向きながら紅茶を飲む。そしてカチューシヤのそばにいたノンナが

「そうですねか……ではカチューシヤがよく自慢の弟だとおっしゃっていたのは武藤さんのことでしたか……それにしても……」

と、ノンナは義弘をじろつと見る

「あの……なにか？」

義弘がノンナに訊くと

「いえいえ……まさか偉大なるカチューシヤを肩車した人が私より先にいらしたことに少し驚きまして……」

「そ、そうですねか……(なんだこの絶対零度的な威圧感は……)」  
「(私以外の物がカチューシヤを肩車するなんて……許すまじ。これはいろいろと策を練ればいけないわね)」

ノンナの冷ややかな目に義弘は少し寒気を感じ、そしてノンナは崇拜するカチューシヤに近寄るこの男をどう始末するか算段していた。そんなことも知らずにダージリンとカチューシヤは紅茶を飲む。そして

「でも、ヨシーシヤが私の元を離れた時はとても寂しかったわ。てつきり私と同じプラウダに来るのかと思ったんだけど」

「そう言えば武藤さんは黒森峰でしたわよね？」

「ええ、あの時はヨシーシヤを恨んだわ。なんで私のそばにいてくれないんだって。ずっと一緒に戦車道をやるって……」

そう言いじろつとカチューシヤが義弘を見て同じくダージリンも義弘を見ると

「あの時の俺は、最初は一緒にプラウダに行こうと考えた。けどカ

「チュ姉と一緒にじゃ、カチユ姉を超えられないと思っただよ」

「超えられないって……戦車戦じゃあ、彼方が上じゃない」

「確かに実戦では……だが、戦略や戦術は姉さんの方が上だった。いつも卓上の戦車戦の戦略の問答では姉さんに負けっぱなしだったよ」

「え？あの義弘さんが？」

「ダージリンが今まで無敗の伝説を作った義弘がカチユーシャに負けたことに驚いていると、カチユーシャは」

「それは……ヨシーシャに負けないう勉強しただけで……それに勝ったのは最初の一回で、あとは引き分けだったじゃない」

「でも、あそこまで追い詰められたのは生まれて初めてだったんだよ。だからあの時感じた。もつと姉さんを超えられるようになって」

「ヨシーシャ……でもそれだけじゃないんでしょ？本当は友達がいる黒森峰に行きたかったんだよね？……いえ、友達というか。ヨシーシャのファイ……」

「カチユーシャ。それ以上は義弘さんが困ってしまいますわ……」

「そう……そうだったわね。ごめんねヨシーシャ」

「いえ、もう過ぎたことなんで……それよりお茶会を楽しみましょう」

「そうね……ノンナ」

「はい。わかってます」

カチユーシャの言葉にノンナは頷き、紅茶を温めなおす。そしてその間、小話をしていた。するとダージリンが

「そう言えば、私、義弘さんとは中学、カチユーシャとは高校一年からの付き合いですけど、本当に身長が変わっていませんわね？」

「やめてください。ダージリンさん。少し気にしているので……」

「余計なお世話よ。ダージリン。まあ、なんで私たちの身長が伸びないのかはだいたい想像つくけど……」

「あら？なんですか？」

ダージリンがそう訊くと二人は顔を見合わせ頷きこう言った

「ロスマン先生の呪いね（だな）」

「え？呪い？」

ダージリンは訳が分からず首をかしげるのであった

一方、ドイツでは……

「へくしよっ!？」

「あら、エディータ先生。風邪かしら？」

「いえ……体調には気を付けているのだけれど、誰か噂でもしているのかしら？」

「そうなの？それよりも行くの日本に？」

赤髪のドイツ人の女性が、黒いジャケットを着て中学生ぐらいの銀髪の女性に訊くと彼女は頷き

「ええ、ミーナ。少し会って話さなければならぬ教え子がいるから」

そう彼女にそう言い、空港のある所へと向かうのであった

## プラウダでのお茶会です

それから後に義弘たちは本来の目的である。お茶会を始めていた「話がかなりそれてしまいました。準決勝進出、おめでとうございませす。カチキューシャ」

「フンツ！まあ、このカチキューシャにかかれば、そんなの朝飯前ね！」

「勝負は時の運と言うものでしょう？」

「運を味方につけるのも勝利の秘訣って奴よ」

ダージリンの言葉にカチキューシャはそう帰し義弘は無言で紅茶を飲んでいた。なぜ、彼は話さないかというと……

「（気：気まずい）」

姉弟子との再会で少しばかりはしゃいでいた義弘だったが、今ではすっかり冷静になり、そして今この空間で男子は自分だけで結構気まずい感じがしていたのだ

「それにしてもダージリン。まさかあなたが去年カチキューシャに負けた高校に負けるなんてね……あ」

皮肉そうに言うかチキューシャ。だがすぐにすぐそばにかつて黒森峰に所属していた義弘を見て気まずそうな顔になると義弘は

「去年の試合を私はテレビで見ましたが、あれは悪天候と悪路で行った黒森峰の失策です。それに先ほどダージリンさんが言ったように勝負は時の運。強者が常に勝ち続けるわけではない。弱者が強者を打ち負かすことだって不可能じゃないからな……」

「ヨシーシャ？それはこのカチキューシャのプラウダが弱者って言いたいわけ？」

「物の例えです。他意はないです」

義弘の言葉にカチキューシャは目を細めてそう言うと言いつつ義弘は軽くため息をつきそう返すのだった。三人が話している間、ノンナさんは紅茶、そしてジャムとお菓子を配ってくれた。

「どうぞ」

「ありがとう。ノンナ」



「いいえ……………」

ノンナと呼ばれた少女は、淡々と返事を返し、再びカチューシャの傍らへと戻る。

その光景を見て軽く微笑んだダージリンは、ジャムをスプーンで掬い、紅茶に入れようとする。

「違うのー！」

だが、それを見たカチューシャが突然、ダージリンの行動に待ったをかけた。

「本場のロシアンティーわね。ジャムは中に入れるんじゃないの！  
舐めながら紅茶を飲むのよ」

そう言いながら、カチューシャはスプーンで掬ったジャムを口に含み、続けて紅茶を飲む。しかし口の周りがジャムだらけであった

「付いてますよ」

「余計な事言わないで！」

ノンナは、カチューシャの口の周りにジャムが付いている事を指摘するが、カチューシャはそう言い返す。

子供っぽさを思わせるカチューシャの姿に、ノンナは微笑む。すると

「はあ…………カチユ姉。そのまま…………」

そう言い義弘はハンカチを取り出すとカチューシャの口周りを拭く。

カチューシャはカチューシャでいうと。一旦呆けた顔をしたかと思えば、すぐに義弘に微笑み

「あら、気が利いているじゃないのヨシーシャ。どう？何ならこつちに転校して私の執事にでもなる？」

「遠慮させていただきます。今の学校生活も気に入っているの」

「そつ、残念ね。もしかしたらノンナと良いコンビになると思ったのに」

二人のやり取りを見たダージリンは複雑そうな表情をし、そしてノンナはというと…………

「私ですらカチューシャの口を拭いたことがないのに、この男

は………」

いつものように表情は変わっていないのだが、まるでその瞳は絶対零度といっても過言ではなく、まるで怪談話の幽霊のような恨めしそうな目で義弘を見ていた

「(?!?な、なんか寒気が……それに殺気を感じるんだけど?)」

急な殺気に義弘は身震いすると。ダージリンが

「次は準決勝なのに余裕ですわね。この前電話で話したように練習はしなくていいんですの？相手は義弘さんのいる学校ですよ？」

「練習を使用がしないかはこっちで決めるわ。ただね相手がヨシーシャなら、私は一切の手加減はしないつもりだから。ねえ、ヨシーシャ？」

「ええ、俺もカチュ姉に……姉弟子に手を抜いてもらおうなんてこれっぽっちも思っていないよ。戦いは全力で手を抜けば相手側にも失礼だからな。俺たち大洗も全力であなたを倒しにかかりますよ」  
「そう……楽しみね」

二人は静かに睨み合う。今の二人はプラウダの地吹雪のカチューシャ、大洗学園の黒狼、武藤義弘ではなく、エディータ・ロスマンの教え子であり姉弟子のカチューシャと義弘として信念をぶつけていた。

そしてしばらく二人はにらみ合うとカチューシャはため息をつき

「さ、次の試合での話はこれでお終い。お茶の時間を楽しみましょう。ねえダージリン？」

「え……ええそうね」

二人の威圧に先ほどまで黙っていたダージリンが頷くとノンナがいつの間にか恐らくクツキーか何かなのであろう菓子が乗せられた皿を置く。

「ピロージナエ・カトルーシカとペチーネもどうぞ」

ノンナは流暢なロシア語で言いうと、カチューシャが

「ねえ、ヨシーシャ。一つ訊いてもいいかしら？」

「なんででしょう？」

義弘がお菓子を食べながらそう返事をするとかチューシャは真剣

な表情で

「・・・あなた。やつれたかしら？ちゃんと睡眠とか食事はとってるの？」

「そう言えば義弘さん。前に会ったときに比べて、疲れ顔みたいですけど・・・」

カチューシャの言葉にダージリンは義弘の顔を見てそう言う。確かに今の義弘の顔は以前に比べて少しやつれており肌の色も少し青白かった

「ええ：最近戦術を練るのに徹夜をすることが多くなったのでね・・・」

「それはよくないわよ。睡眠はちゃんととらないと体にも影響する品によりいい作戦を練ることはできないわよ。ノンナもそう言ってたし。ねえ？」

「はい」

カチューシャの言葉にノンナは頷く。そしてダージリンも

「カチューシャの言う通りですわよ。義弘さんもつと自分の体を大切にしませんと・・・」

「アハハ・・・大丈夫ですよ。あ、すまない。俺少し席を外します」

二人が心配そうに言う中義弘は席を立つ、

「どこに行く気？」

「ちよつと・・・用足しにね？」

「なるほど・・・ノンナ。案内してあげて」

「・・・はい」

義弘の言葉にカチューシャは軽いため息をつくとノンナにトイレのある所へ案内させるのであった

「・・・こちらです」

「すみません・・・」

ノンナにトイレのある場所へ連れてってもらい、義弘は男子用トイレに入る。そして個室に入ると・・・

「コホッ！コホッ！コホッ!!」

口を手で押さえ咳をする義弘。そして……

ピチャリ……

何かが垂れ落ちる音がし、義弘は自分の手に名何か生暖かいものを感じた。そして自分の手を見る

「……………」

その手は真っ赤に染まっていた。そして義弘は

「さっきのアンツイオの宴会の時は気のせいかと思っただけど、やっぱり：それだけじゃない今この咳もどんどん悪くなっている……………」

義弘は真剣な表情をするがやがて個室を出て赤く染まった手を洗い、トイレを出ると。ノンナがロシア人の生徒と何か真剣な話をしていた

「……………」

「……………」

義弘はただ黙ってその話を聞いて終わるのを待っていた。そしてノンナは

「では、クララ。お願いします」

「㊦」

そう言いクララと呼ばれた少女は去りそしてノンナは

「お待たせしました。用事は終わりましたか武藤さん？」

「ええ、おかげですつきりしました」

「そうですか……では戻りましょう」

そう言い義弘はノンナに連れられカチューシャやダージリンのいる応接間へと向かう。その中ノンナは

「武藤さん。一つ訊いてもいいですか？」

「なんででしょう？」

「あなたは、同志カチューシャのことをどうお考えですか？」

冷たい目でそう言うノンナに義弘は

「いい姉貴分だと思っています。確かに子供っぽいところがありますが、ですが、それでも自分の信念を曲げない強い心を持っています。それに少し安心しているんです」

「……安心？」

「はい。俺と別れた後、カチユ姉が一人じゃないかと思っただけ心配していましたが、ノンナさん。どうやら姉弟子はあなたという最高のパートナーに巡り合えたようですね」

「おだてても何も出ませんよ。あまり調子に乗られるとたとえばカチユシヤの弟分でもタダではすみませんよ……」

少し殺気じみた目でそう言うノンナに義弘は

「世辞じゃありません。本心でそう言っているんですよ。恐らく俺では彼女を最後まで支えていくのは無理でしょう。無論違う学校っていうのもありますが、彼女には俺ではなく、あなたが最適だ。あなたたち二人を見て俺はこれで安心だと、そう感じました」

「……」

「ですから、彼女の弟弟子である武藤義弘として言わせてください。ありがとうございます……そして今後も姉弟子のことをお願いします」

「言われなくてもそのつもりです。それと武藤さん……まるで遺言のような言い方ですね？何か後ろ暗いことでも？」

「いいえ、ただあなたにお礼が言いたかった……それだけです」  
「……そうですか」

ノンナは義弘の言葉に違和感を感じながら二人で部屋へと戻るのがだった

そして時は経ち

「では、カチユシヤ。私たちはこれで」

「そうね。ヨシーシヤ。またいつでもカチユシヤのプラウダに来なさい。いつでも歓迎するから」

「ええ、その時は友人と一緒に来ます。では準決勝で……」

義弘とダージリンはそう言い、プラウダ高校を後にしようとしたとき

「ああ、そうだノンナさん」

「はい。なんででしょう？」

義弘に声をかけられノンナは返事をすると……

「(先ほどのクララさんという方の会話。全部わかってますよ。何か俺を抹殺する計画を企てるなら本人がいないところで話すことをお勧めしますよ)」

「っ!？」

流暢なロシア語で不適の笑みでそう言う義弘にノンナは驚く。

「ちよ、ちよっとヨシーシヤ何を言っているの!?!の、ノンナ?」

ロシア語が分からないカチューシヤは慌ててノンナに通訳を求めるが、ノンナは啞然としていた

「では…また」

そう言い、義弘はダーズリンとともに去っていった。

「ねえ!ノンナってば!ヨシーシヤはなんて言ったの?」

と、そう言う中ノンナは

「(まさか。彼がロシア語が話せるなんて予想がいでした……武藤義弘。悔りがたし……それにしても)」

ノンナは先ほど、義弘との会話を思い出してた

「(彼は何であんなことを……それにあの表情……まるでもうすぐ死期が近い。そう言う覚悟をしていたような……私の気のせいだといのだけれど)」

ノンナは彼の言った言葉の不審に思うのであった。だが、彼女の考えたことが実はそれほど間違っていないことは誰にもわかるはずがなかつた……

紅茶が冷めるまでに……

プラウダで昔世話になった姉弟子であるカチューシャと再会し、楽しくお茶会をしたのち、俺は今、グロリアーナの学園艦にいる。なぜここにいるかというと、単純に大洗の学園艦の迎えが遅くなるという理由だ。

そこで迎えが来るまでの間、ダーズリンさんと一緒にいるのだ

「おかえりなさいませ、ダーズリン様、お茶の用意は出来てますがいかがですか?」

「いただくわ、あなたも貰うでしょう?」

「ええ。いただくよダーズリン」

「では、何がいいかしら?」

「そうだな……じゃあ、アールグレイで」

「アールグレイですか……」

俺の言葉にダーズリンは少し思いつめた顔をする。え?もしかしてアールグレイが嫌いなのか?

「すまん。なんか変なこと言っちゃたか?」

「いいえ。実は私とアッサムが世話係をしていた方の名前もアールグレイだったのよ」

先輩ですか……どんな方だったんですか?」

「才色兼備で家も名家のお嬢様だった方よ、立ち振舞いもお淑やかで……学園内でも有名だったわ。でもその裏では映画の影響を受けて妙なコスプレしたり、時間にルーズで時間通りに来た試しがなかったり、まったく、私やアッサムがどれだけ苦勞をかけさせられたか……」

今まで見たこともないような表情で愚痴るダーズリン……それにしてもなんかその人に聞き覚えが……

「それにおまけに事あるごとに教育と言って私のスカートをめくって……」

「スカート?」

「あ……いいえ。なんでもありませんのよ」

恥ずかしそうに顔を赤く染めてダーズリンさんは言う。お嬢様風で映画の影響を受けてコスプレしかもセクハラまがいなことをする人……

やっぱりどこかで聞いたことのあるような……

「す、すまんダーズリン。失礼を聞くよう悪いけど、そのアールグレイさんて、金髪の長髪で、そして本名が×××でしたか？」

「え？なんであの人の本名を知っているの？×××もしかして義弘さんあの人のことをご存じなのですか？」

ダーズリンが驚いた表情で聞くと俺はやっぱりと頭を抱え

「ええ。聖グロ出身で、ダーズリンさんの言っていた特徴を照らし合わせたらもうあの人しかいませんので。あの人のうちの師匠……ロスマン先生の弟子なんですよ……」

「え？そんなんですか？」

「ええ、俺も数回あったことがあって戦車道について指導されましたが……しかし！それは指導という名のセクハラで、いつもメイド服着せようとしたり、あつちこつち触ったりと酷い目にあいました……」

「ご心中お察しします……義弘さんのメイド服姿は見てみたいですけど」

「ん？何か言いました？」

「いいえ。なんでもないわよ義弘さん」

そう言い澄ました表情で紅茶を飲む、ダーズリンさん。いや聞こえてはいたのだが……もうあの服を着せられるのは勘弁だぞ……いや、ダーズリンならやりかねないな……まあ、拒否するけど

「それでどうかしら？プラウダを訪問した感想は？」

紅茶を飲みつつそう聞くダーズリンに俺は紅茶を少し飲み

「久しぶりに姉弟子に会えて嬉しい……と、言いたいところですが、準決勝は苦戦しますね。あの時の表情のカチューシャ姉は本気で相手するっていう顔でしたから……で、わざわざ準決勝前に俺をプラウダに連れて何か目的でもあったんですか？俺とカチューシャ姉が姉弟子というのは知らないはずだったでしょ？」



「私はただカチューシャとの約束を守っただけよ、カチューシャにはあなたを紹介するように頼まれていたし、まあ、あなたとカチューシャが知り合いだったとは驚きました、しかもかなり仲がよろしいのですね?」

「まあ、文字通り姉弟みたいな関係だったからな……」

「そうなんですの……少しノンナの気持ちかわかる気がしますわね」

「え?」

「いいや何でもありませんわよ」

そう言いましたも紅茶を飲むダーズリン。いったい何回飲んでるんだ?もしかして朝から晩まで飲んでるんじゃない?……

俺はそう思い紅茶を飲む

「それより……」

「ん?なんですか?」

「武藤さん……いま彼女とかいるのかしら?」

「ぶふつ!」

ダーズリンさんの言葉の思わず紅茶を吹き出してしまう

「ちよつ!?!何を言っているんですかダーズリン!?!」

「あら?あなたのことですから、もう彼女がいると思いましたが?それともまた、みほさん?」

ダーズリンさんがからかうように言う。俺は軽いため息をつき、紅茶を飲み

「いいや……俺には彼女はいませんよ。それ以前に俺のようなやつを好きになるようなもの好きなんていませんよ」

「あら?私は好きよあなたのこと?」

「お戯れを……それは友人としての意味ですよ?」

「さあ?どうでしょうね……そうですか義弘さんは今はフリーなのね……だったら私にもチャンスがあるつということですかね?」

とダーズリンがなにやらボソボソと独り言を言っている。何を言っているのだろうか?

まあ、それよりも俺は彼女を作る気はない……いや、昔だったら作

ろうとは思ってはいたが。今の俺にはそんなのではない。今の俺は肺血病にかかっていつ死んでもおかしくない体だ。

そんな俺が彼女を持って、死んだなら、残された女性はいったいどんな気持ちになるだろうか……そんな気持ちにさせるくらいなら、恋人なんて持たないほうがいい。俺はそう思っていた

「それにしても……紅茶って不思議なものだな」「え？」

俺の言葉にダージリンは不思議そうな顔をする

「いろんな香りに味まるで人と同じだ。どれも個性がある。そしてこの温もりも。はじめは熱いのに時が経てば冷たくなる。まるで人の人生のようだ……」

「義弘さん……あなたは何を言ってる……」

「いや、ただ単純にそう思っただけです。戦車も紅茶も人も……どれも個性があり、いろんな味を出す。そしていつかは終わりを迎える。ただそう思ってる……」

そういう俺にダージリンさんは

「義弘さん……まるで年寄りですわよ？」

「自分で言うのもあれだが、確かにそうだな。なんでだろうな？」

そう言い俺は静かに紅茶を飲む中ダージリンさんは疑問を浮かべた顔をしていた。俺自身もなぜこんな言葉が出たのかは正直言ってもわからない。ただ……いや、もうわかりきったことか。俺には時間がないことを……

「ダージリン様。武藤さんのお迎えの船が来ました」

「あら？そうなんですの？」

オレンジペコがやってきて、迎えが来たことを知らせる

「それじゃあ、迎えが来たみたいだし、俺はそろそろ行くよ」

「あら？もうですか……もう少しお話がしたかったですのに」

「まあ、また気が向けば来ますよ。じゃあ、次のお茶会で」

少し残念そうに言うダージリンさんに俺は素晴らしい席を立つ。

「ええ……またいつでもお待ちしておりますわ。義弘さん」

「ええ。その時を待ってますよ」

そう言い俺は、ダージリンと別れ大洗の学園艦へ行く連絡船へと向かうのであった

「それにしても……」

「どうしたんですかダージリン様？」

ダージリンの言葉にオレンジペコが聞くとダージリンはまた一口紅茶を飲み

「いえ、義弘さんがさっき言った言葉……」

「紅茶のことですか？」

「ええ……最後に言った彼の言葉……まるで……」

そう言いダージリンはさっきの義弘の姿を思い出し

「まるで、もうすぐ自分の命が消える……そういうような感じでしたわえ？まあ、私の気のせいだと思うけど……」

「はい？」

ダージリンの言葉にペコは首を傾げ、ダージリンが再び紅茶を飲もうとしたとき……

ピキッ!!

「っ!？」

その瞬間ダージリンの持っていたカップにひびが入る

「こ、これは……」

ダージリンはカップがひび割れたことに何か不吉な予感がしたのであった。

俺が、学園艦に付いたのは夕暮れの時だった。俺は自分の住む寮に向かおうとしたのだが……

「はあ……はあ……はあ……」

息が切れ、まるで心臓が握りつぶされそうな痛みが来る。ダージリンさんやカチユ姉の前では平気なふりをしていたが、先ほどから激しい痛みがずっと続いていたのだ。

そして壁に寄り添い息を切らす俺の額から冷たい汗が流れる。

「まづいな……」

俺はそう呟く。もらった薬も効かなくなっている。もうこれはやばいのかもな……

「あら？あなたは……」

「え？」

急に誰かに声を掛けられ俺は振り向くとそこには長い銀髪を三つ編みにし前髪は真ん中分けた女性が立っていた

「あなた……高杉君？高杉義弘君？」

昔の俺の名前を言う女性。俺にはその人を知っていた

「八意先生……八意永琳先生」

その人はかつて俺の肺血病を観てくれた医者である八意永琳先生だった。

「まさか、先生が大洗で病院を開いていたなんて驚きです」

「ええ。黒森峰や欧州よりもこういった静かなところが落ち着くからね」

俺は今永琳先生が営んでいる診療所に入り、そして今先生に自分の体を見てもらっていた

そして永琳先生は俺の鼓動や熱などを測りファイルに書く

「先生…俺の体はどうなんですか？」

「うくん……脈拍360……血圧400……体温が90近くまであるわね……」

「マジですか？」

え？俺そんなに体の状態が悪いの？いや、危ない状況なのは分かっていたけど……てか俺ってどこぞの恒点観測員だったっけ？

「冗談よ。そんな状態だったら死んでいるわ」

「先生……」

「ごめんなさいね。場の雰囲気や和らげようとしたんだけど……やっぱり診察結果を話しても意味はないわね」

「・・・すると?」

俺の言葉に少しだけ笑っていた永琳先生の顔が変わり、真剣な表情をする

「医者としてはつきり言うわ高杉君。あなたはもう長くは生きられない。最悪…春を迎える前にあなたの命は尽きるわ」

「っ!?!」

わかっていたことだが、俺は永琳先生の言葉に衝撃を受けたのだ。た。

## 命のタイムリミット

「医者としてはつきり言うわ高杉君。あなたは長くは生きられない。最悪…春を迎える前にあなたの命は尽きるわ。」

永琳先生に言われた俺は

「やっぱり…そうか」

自分の体のことは自分で分かっているつもりだった。俺の予想ではもつと早くかと思ってたがまさかそんなにまでとはな

「わかってたの？自分の状況？」

「ええ。自分の体のことですから何となく……やっぱり桜は見れないか……」

「桜？」

「ええ、昔、みほとエリカと約束したんですよ。今度の春一緒に桜見をしよう……てね」

「そう……」

俺の言葉に永琳先生はじつと見て考え込む。正直言って花見をしようとして約束したのは3年前。こんなこと知ってれば肺血病にかかる前に一緒に行けばよかったと珍しく後悔しているよ。

すると先生は

「高杉君……あなた。戦車道をしているわよね？」

急に俺が戦車道をしていることを聞く永琳先生。

「え？ええ……していませんが？」

「さつき言った診断結果は戦車道をしないで生活することを前提に行ったことなの」

「……つまり」

「戦車道をやれば、余命は縮むことになるわ。激しい振動に大きな砲撃音、そして脈を上げるような興奮感。それはスポーツとしてはいいものよ。でもね。あなたの体のことを考えるとそれはあなたの体に激しい負担がかかるの。だから……」

「戦車道をやめろ……そう言いたいのですか？」

俺はそう言うと永琳先生は

「戦車道が好きなあなたにこういうことを言うのは酷だけど。はつきり言うわ。ええそうよ。医者として命の危機に瀕している患者にスポーツをやらせるわけにはいかないわ」

「ドクターストップってやつですか？」

「ふざけないで。私は真剣に言っているのよ」

真剣な表情をしそういう永琳先生。やっぱり永琳先生は筋金入りの医者だよ。いつも患者のことを大事に思ってる。だからこうして俺に戦車道をやめるように言ってくれている。

少しでも俺に生きてもらいたいと……でも

「先生……お心遣いはありがたいです。でも俺はこのまま続けたいと思います」

「っ!?!馬鹿なこと言わないで!!」

パンツと机をたたきそういう先生

「あなたの体の状況、本当にわかっているの!あなたは今に死んでもおかしくない状況なのよ!いいえ!今こうして話して普通に生活できるのが不思議なくらいなのよ!あなたの体はもう限界なのよ!」

「わかってます。あなたからもらった薬……肺血病の痛みを和らぐ為の薬を飲んでもあまり効かなくなっていたことから……俺の体はもう薬でもどうしようもないほど危険な状態。そうなんですよ?」

「だったらなんで!!」

そういう永琳先生に俺は

「はつきりとは言えないけどさ……なんだか大洗で何か大変なことが起きる予感がするんだよ。しかも戦車道と関係があるような何かかね……そんな予感がしちやったら放っておくことなんてできないよ」

「それは予感なんですよ?」

「ああ……予感。だけどさ。今回ばかりは本当に起こりそうな気がするんだ。この大洗にとって何かが大きく変わりだすというか……何というかね。上手く説明できないことがちよつと悔しいけどね」

正直、俺は嫌な予感がしていた。何か大洗が危機に瀕している。そんな予感が。だから俺がこうして戦車道ができてるのは何か使命

があるからじゃないのかなっと思って仕方がない

「それであなたは戦車道を続けるの？あなたは自分の母親と同じ運命をたどる。そういうの？」

「母をぐ存じなのですか？」

「ええ。私もあなたのお母さんと同じ、大洗女子：いまは共学の学園だけどその時の彼女の先輩だったのよ。あなたのお母さんのことは昔から知っているわ。そして医者になった私の元に来たのは肺血病を患っていたあなたのお母さんだったのよ」

そういうと昔のことを思い出しているのか先生はこう続けた

「彼女を診察した当時の私は肺血病のことは少しだけ知っていた。だが今現在でも直す方法がないといわれるあの病を治すことができなかった。だから私は翔子……あなたのお母さんに解決方法が出るまで戦車道はしないでと言った。でもあの人は聞き入れなかった。そして最後は……」

「……」

「私は激しく後悔した。後輩を……まだ幼かったあなたのお母さんを助けることができなかつたことを……そして今その息子であるあなたも母親と同じ道を歩もうとしている。だから私は同じ道を繰り返したくない。だからね義弘君……戦車道は……」

そういうと俺は立ち上がり、先生にこう言った

「戦車道は……やめませんよ永琳先生」

「っ!?!どうして!!」

そう言い俺は出口のドアのドアノブをつかみ

「俺はもう助からない。そしてじつとしても来年を迎えてすぐにポツクリだ。解決方法が見つかるまではまだ先が長い。正直言ってそんな方法が見つかるまでじつとして苦しみながら死ぬなんてまっぴらごめんさ。永琳先生が俺のことを気遣ってくれるのは心の底から嬉しい。でもねやつぱり……」

そう言い俺は永琳先生に振り返り

「最期くらい好きな戦車道を思う存分にやって死にたいよ……」  
「っ!?!」



その言葉に永琳先生は目を見開く。そして俺は

「先生……こんな遅くまで俺の体を診てもらってありがとうございます。でも先生の言うとおりにまでとはいきませんが、戦車戦では無茶しない程度にやりますよ……じゃあ」

そう言い俺はドアを開き、診療所を出ていくのであった。

そして一人残った永琳先生は義弘のカルテを手に取り先ほどの言葉を思い出す

「最期くらい好きな戦車道を思う存分にやって死にたいよ……か」  
永琳先生は先ほど義弘の言った言葉をつぶやきある言葉を思い出す。それは彼の母親である翔子に病が完治するまで戦車道をしないでほしいといった時であった。

『先輩……あの子を置いていくのは辛いけど、私の命はもうすぐ尽きる。だから最期くらい好きな戦車道を思う存分にやって死にたいわ。あの子に私は元氣つていうのを伝えるためにね』

「……親子二代そろって大馬鹿ね……翔子。もしあなたが生きていたらあなたは止めたかしら？あの子のことをどう思ってたのかしらね？」

悲しい口調で、永琳はそう言うのであった。

「諦めるのはまだ早い……私のとれる最善策をしないとね」

そう言い彼女はある書類を出すそれは肺血病について研究していた資料だった。そして永琳は電話を出し

「それと、彼女にも連絡をしないとね。あの人なら多分、あの子を止められると思うから」

そう言い永琳先生はとある人物に電話をかけるのであった

一方、義弘は自分の寮に帰っていた。そしてドアを開けようとする  
と……

「あれ？義弘君？」

「みほ？」

隣の部屋のドアから、幼馴染であるみほが顔を出した。

「今帰ったの？」

「うん。ちよつと用事で遅くなった」

「じゃあ、ご飯は食べてないの？」

「そう言えば…食べてなかったな」

「じゃあ、一緒に食べない？今日はクリームシチューを作ったんだけど。少し多く作りすぎちゃって……」

「じゃあ、お言葉に甘えようかな？」

「うん。じゃあ、入って入って」

そういう美穂に義弘はニコツと笑って彼女の部屋に入る。義弘は美穂に自分の病について話していない。いや、話すことができないのだ。

「(言えねえよな……言えるわけねえよ。だってみほは俺にとって……)」

「ん？どうしたの義弘君？」

「いいや。なんでもないよ。皿出すの手伝うよ」

「うん。ありがとう」

義弘はそう言い、その後、みほと二人で食事をした。

二人がこうして食べている間にも彼の命のタイムリミットがどんどん近づいていることにこの時、みほは知る由もなかった

## 小さなオオカミと小さなウサギです

準決勝まであと一週間で切った。え？なんでそんなに時間がかかるんだ？それは試合会場とか練習する時間だとか？まあ、いろいろ大人の事情があるんだろうな。

まあ、それはさておき準決勝まで時間ができた。その間、みんなは戦車の練習やらで忙しい毎日を送っていた。だが、そのおかげで皆の練度は上がり準決勝に向けての支度は徐々に整っていた。

そして、今日は練習は休みとなり、皆それぞれの時間を過ごしている。

そして俺はというと……

「……………」

「と、いうわけでこの戦法は……………」

俺は今、図書室で丸山に戦車戦の戦法や戦術論を教えている。なぜこうなったかというそれは数日前に遡る

### 数日前

「……………」スウ……スウ

俺はいつものように学校の森の切り株で昼寝をしていた。あそこが戦車の中で寝ると同じくらい一番落ち着くからだ。

そして風を感じながらすやすや眠っているとまた何か腕に違和感を感じる

「……………ん？」

目が覚め、俺はちらつと違和感の原因である自分の右腕を見ると……………」

「……………」

「(またか……………」

俺が見たものは俺の右腕をぎゅっと抱きしめて眠っている少女が

いた。それはうさぎさんチームの丸山紗希だった。

「やれやれ・・・しょうがないな。おい。丸山。起きろ」

彼女を寝顔を見てそのまま寝かしてあげたいところだが、ずっと俺の腕を掴まれても困るし、俺は彼女の肩を軽くゆすり声をかける。

すると丸山はゆっくりと瞼を開け目をこする

「おう、起きたか?」

俺が少し笑ってそう言うのと丸山はいつもと同じ無表情ではあるが少し顔を赤くする

「・・・で?どうしたんだ?また昼寝に来たのか?」

俺がそう訊くと、彼女は首を横に振る。え?どうやら違うらしい

「・・・」

「え?」先輩に用があつて探してたらここで寝ているのを見つけて、起こそうと思ったけど悪いと思って起きるまで待つたら寝てしまった?」

「・・・」コクコク

いつもの無言で俺を見ているんだが、不思議に俺は彼女の言いたいことはわかってしまう。そう言えば他のうさぎさんたちも会話していたけど、それが普通なのか、俺が異常なのかわからない。

まあ、ともかく丸山は俺に用があつて俺を探して見つけたはいいの。俺が寝ていたため起きるまで待ててくれたみたいだがそのまま寝てしまったらしい。

これは少し悪いことしてしまったな・・・

「すまない丸山。俺が起きるまで待ててくれて」

「・・・」フルフル

俺が丸山に謝ると丸山は『気にしないでください』と言いたげに首を横に振る

「そうか・・・それで丸山。なんでさつき俺の腕に抱き着いていたんだ?」

「・・・」

「え?」ダメですか?』って?別にダメじゃないけどさ。そう言うのはもつと恋人とかな?好きな人ができてからにしなさい・・・て、何

お父さんのことを言っているんだ俺は」

「……」

なんか、寂しそうな表情になった。俺、彼女とあまり接点はないが、もしかして先輩として慕ってくれているのか？でも、なんか懐かれるようなことした覚えはないんだがな……。まあ、それは置いといて本題に入らないと

「ま、とにかくだ。取りあえず本題に入ろうか。丸山。俺に用があるって言ったよな？」

「……」コクコク

「俺に用って何？」

俺がそう言うのと丸山は俺の真正面に立つように正座し、そして俺に頭を下げる。いわゆる土下座である

「え!?ちよつと。どうしたんだいきなり!？」

いきなりの彼女の行動に俺は驚く

「……」

「え!?『弟子にしてくれ?』」

「……」コクコク

俺の言葉に丸山は頷く。その後彼女の説明を訊くと。自分もかつて俺がみほたちを支えたように自分も友達である澤たちを支えたい。だから戦車の戦術や戦法を教えてほしい。だから弟子にしてください。とのことだった

「う……ん」

俺は丸山の言葉に頭を悩ませる。確かに丸山が言いたいことは理解できるし。気持ちもわかる。だが、俺はまだまだ学ぶ立場の人間だ。戦術だって俺はまだどんな戦法があるか勉強の最中で、はっきり言って、彼女にすべてを教えられることはできない

「……」

でも、こんな必死に頭を下げて頼み込む彼女の願いを無下にできないし。困った……。それに俺はいつ死ぬかどうかもわからない身だしな

まあ、確かに自分の後継者はいつかは作りたとは思っている。だ

けど、急に弟子にしてくださいと言われて……困った。本当に困った

「わかった……分かったから。頭を上げてくれ丸山。これじゃあまるで俺がいじめているみたいじゃないか」

俺が慌ててそう言うのと丸山は頭を上げて。そしてキラキラと期待を込めた目で俺の目を見る

「う……ん。悪いな丸山。今のところ俺は弟子をとるつもりはないよ」  
「……」

そんなこの世の終わりみたいな顔をしないでくれ丸山よ……  
「まあ、話を最後まで聞けよ。俺もまだ勉強の最中だ、だから師なんて言われるほど徳は高くないよ……まあ、でも俺から戦法や戦術を盗むのなら別にいいけど。後、一緒に勉強会とかな？勉強会なら俺も大体は教えられる」

「……」 パアア!!

俺がそう言うのと丸山は花が咲いたような笑みをする。無表情な子だと思ってたけど結構、表情豊かな子なんだな。

そして俺は立ち上がり

「さて……そろそろ行こうか」

「……」

『どこに?』って……図書室だよ。戦術の勉強するんだろ?手伝うよ」

「……」

俺がそう言うともたも丸山の表情は明るくなり、俺と丸山は図書室へと行くのであった。

そして現在

「うん……前に比べてよくなってきたな丸山。後は戦車の特徴をつかみ攻撃戦法を編み出すかだ」

「……」

そして今、俺は丸山の戦車の戦いの戦法を聞いていた。お題は市街

地での戦い方だ。そして丸山は重戦車についてどう対処すべきか訊いてきた

「重戦車は火力、防御が強い反面、速度は遅い。しかも市街戦だと町は迷路のようになっており、足の遅い戦車はすぐに足の速いやつに先回りされて包囲される。例えば……だ」

そう言い俺は一枚の写真を見せ、市街地を描いた絵を見せる

「こいつはエレフアントというドイツの重駆逐戦車だ。こいつの攻撃力はティーガー以上で防御もティーガー並みだ。まともに戦えばM3リーは勝てない。だが市街戦で戦うとしたらどうする？」

「……」

俺の質問に、丸山は指でなぞり、市街地の陰になる場所、もしくは一方通行の場合は速度を生かして回り込んで背後をとるようなジェスチャーをする

「そうだ。重戦車にとって市街地はもっとも動きにくい場所だ。しかも自走砲や駆逐戦車らの固定砲塔は砲塔が旋回できないから狭い道で背後を取られたら、反撃はできない。そこが撃破のチャンスだ。さて丸山。エレフアントの背後をとっても装甲は固く撃破できない。その時はどう対処する？」

俺がそう訊くと丸山はジーと写真を見て考えるがわからないと言いたげに首を振る

「正解は……」

「……」  
「正しい。俺が指したのはエレフアントの後面にある丸いハッチだ」

「ここは薬莖を捨てるハッチでな。ここだけ通常のと比べて薄い。そこを集中攻撃すれば撃破することが可能だ。どんなに強力な戦車で人の作ったものだ。どこかしら弱点があるし、人の指示でもまた性能が行かされるかどうかが決まるってことだ」

「……」

すごい尊敬のまなざしで見られている。悪い気分ではないが少し小恥ずかしい。ロスマン先生も俺に戦車戦術を教えていた時もこんな気持ちだったのかな……

「さて……きょうの勉強会はここまでにしようか」

「……」

俺がそう言うのと丸山は少し残念そうな表情をする

「まあ、名残惜しいけど。後は自分で考えるのも大切だよ。また時間があればやろう」

俺がそう言うのと丸山は

「……ありがとう……ごさいました……せん……ぱい」

「ん？……うん。どういたしまして」

かすかに聞こえた彼女の言葉に俺は彼女の頭をなでる。すると丸山は嬉しそうな表情になった。なんとというか妹みたいで可愛い。

「じゃあ、解散。丸山。気を付けて帰れよ」

俺は自分の後継者になるかもしれない彼女にそう言い、図書室を出るのであった。そして丸山は

「………せん……ぱい／＼／」

顔を赤くしたまま嬉しそうな表情で、ぽつりとつぶやくのであった。

「さてと……明日もまた練習も学校も休みだし……どうしようかな」

俺は帰り道そう呟く。だが明日、俺はある人物と出会うことをこの時まだ知らなかった



## 小さき狼と迷子の子熊の出会い

翌日の休日。俺たちの乗る学園艦は久々に母港である大洗港につき、皆それぞれ本土におり思い出の街へと買い物に出たり、実家に帰ったりとしていた。

そして俺はというと町の中をぶらついていて。最初はみほたちと一緒に買い物に行かない・と誘われたんだが、今日は一人でいたい気分だったし丁重に断った。

え？女の子に囲まれながら買い物に行くハーレムチャンスだぞ？

アハハハ・・・何を言っているのかわからないね。確かに、みほたちは可愛いけど、俺なんかと一緒にやせつかくの女子の買い物のお邪魔になっちゃうからな

まあ、そんなわけで今俺は単独でこの大洗の商店街を歩いている。

「商店街に来ては見たものの休日だからあまり店やっていないな」

俺はあくびをしながら髪を掻き、そう言う。いつも賑やかな商店街は今回はあまり人は少ない。休日っていうのもあれだが、もっと別の理由があるだろう。

あ、みんなも手洗い、うがいはこまめに大切にな

街を歩いて約30分くらい歩いたであろうか、しばらく歩いていると・・・

「おろっ？」

急に何かが目に留まる。それはゲームセンターであった。出入口口としてのドアが無い吹き抜けとなっており、店の外にも、クレールゲームの機械が3台程置かれている。

「去年はなかったけど、最近できたのか？」

俺は好奇心でその店に立ち寄った。入り口付近では太○の達○やマ○カとかもあるし、外のヤツの他にもクレールゲームが置かれている。そして何より俺の目に留まったのは

「おっ！懐かしい。○ストワー○ド・○エラシ○クパークのシューティングゲームか。まだこれあったんだな？」

そこにあったのは昔懐かしい恐竜のシューティングゲームだった。

小さい頃はみほやまほ姉とやったものだ

「よし、これをやるか。腕落ちてなきやいいんだけど」

そう言い俺はゲームを始める。久しぶりだが、何とか楽しめたし、懐かしいゲームをやれて少しだけ嬉しかった。

え？スコアはどれくらいだった？ハイスコアまではいかなかったが2位まではいけた。

「さて、次は何を……ん？」

次は何のゲームで遊ぼうかと思ったとき、室内に流れる無数のゲーム音の中から聞きなれた曲が流れていた

「この曲って……」

俺は誘われるがまま、その曲が聞こえる方へと歩く。すると出口の陰によった人気のない場所に少し古びたクレーンゲームがあった。そのクレーンゲームには訪台の巻かれたクマの絵とその中にさまざまなバリエーションの包帯を巻いた熊のぬいぐるみが景品として置かれていた

「やっぱりこれって……ボコだ」

そう俺が見つけたのはみほの大好きなボコられグマのボコだった。

そして俺が訊いた曲もボコの主題歌であった

「そうだな。みほの土産として取ってみるか」

俺はそう言いクレーンゲームに近づくがそのゲームの前に張り付くように立っている、黒いカチューシャのようなりボンで左側の髪を結わえ、サイドアップにしている少女がジーンとボコを見ていた。しかも、硬貨投入口の直ぐ前に居るため、硬貨を入れられない状態にあった。

「(この子もボコが好きなのかな?) ああ? ちょっといいか?」

「っ!」

急に声をかけられてびつくりしたのか、その子は驚いた表情で俺を見る

「えっと……俺、そのゲームをやろうと思ってるんで、悪いんだけど、退いてくれないかな?」

「……………(コクリ)」

少女は無言のまま頷き、その場を空けた。しかし実際にはゲーム機の正面から側面に移動しただけで変わらずその子は景品を見つめて  
いる

「一回100円か、ちょうど良いや」

そう呟き、俺は100円玉を取り出して投入口に入れる。さて：：うまく取れるかな？そう思いながら俺はボコの主題歌が流れるクレーンゲームのームを動かすレバーと、アームを下ろすボタンが光り出す。

目標は、超レアな負傷兵姿のボコ。え？なぜ超レアかわかるのかわつて？フフツ・・・伊達にみほと一緒にボコを見てきたわけじゃないのさ。アニメだけじゃないグッツや景品なんかもどれがレアかみほの好みかもすでに検証済みさ。

「よし！やってやるぜ！」

レバーを操作し、アームを狙った位置へと動かす。そして狙った位置へと到達した瞬間、俺はレバーから手を離し、アームを下ろすボタンを勢い良く押した。

アームはゆっくりと下りながら爪を広げ、ボコの下へと潜り込む。普通のクレーンゲームなら、景品を簡単には取れないように、アームは微妙な力加減に調整されている。だが今回はあっさりと取れてしまった。

「(うくん・・・とれたのは嬉しいんだが、なんだ？このあつけなさ・・・)」

少し虚しさを感じた俺だが、景品の取り出し口へと落とされた縫いぐるみを取り出しゲームセンターを後にしようとしたんだが：：：：「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっきの子がずっと俺を：いや、正確には俺の取った景品のボコを物欲しそうに見ていた。まるで小動物のようなかわいらしい目でじっと見ている彼女に俺は試しにボコの縫いぐるみを左へ移動させると、その少女の視線も、ボコを追い掛けるかのように左の方を向く。右へやっても同じ反応だ。

「(かわおもしろい・・・・・・・・)」

可愛さと面白さの入り混じった感じに俺はそう思った。しかし、いつまでそれをやるのは流石に悪いと思い俺は帰ろうとしたんだが……

「あ……」

俺がその場を去ろうとするとその子は少し悲しそうな目と小さな声を聴いた俺は立ち止まりその子を見る。

「……」

「……」

「……（まあ、みほも許してくれるか）」

俺はその子に近づき屈むと

「はい。どうぞ」

「……え？」

「君。これが欲しいんだろ？だからあげるよ」

「……いいの？」

「ああ。君ボコが好きなんだろ？はい」

もし、みほがいたらきつと同じことをするし、訳を話してもきつと許してくれるさ。だから俺はこのボコをこの子にプレゼントすることにした。は、暫くボコの縫いぐるみと義弘を見ると、ゆっくりとボコの腹へと手を回し、自分の方へと抱き寄せた。

「……ありがとう」

「どういたしました」

恥ずかしいのか、ボコに顔を埋めながら、少女は礼を言い、俺はにっこりと笑ってそう返事をした

「それで、君。ここに一人で来たのかい？親は一緒じゃないのか？」

俺がそう訊くと彼女は気恥ずかしそうに顔を背け

「……………はぐれた」

「そうか……迷子か。ここは広いしな。交番とかに行つた？」

「交番がどこかわからない……初めてここに来たから……どうしよう……」

困った表情でうつむくその子を俺は放っておくことができなかつた。ロスマン先生も『困った人がいたら救いの手を差し伸べなさい』

と教えられてたからな……よし！

「じゃあ、俺も一緒に探してあげるよ」

「いいの？」

「ああ。一人でウロチヨロして人さらいにあつたら大変だしな」

「ありがとう……お兄ちゃん」

こうして俺は迷子になったこの子の親を探すため、一緒に行動することになった。

## 小さき狼、迷子の子熊の親を探す

義弘は大洗の街のゲームセンターで迷子の女の子と出会い。そしてその子の親を探すべく町中を歩き回っていた

「そう言えば君の名前、なんていうの？」

「？」

「いや、いつまでも君とかお嬢ちゃんとかだとさ。名前がないと困るだろ？できればいいんだけど教えてくれないかな？」

「……」

義弘の言葉に彼女は無言になる。それはそうだ。親を探してもらっているとはいえ、知らない男の人に名を名乗っていいのか悩んでしまうだろう。

「あ、別に無理に名乗らなくてもいいから」

義弘は少し笑って、そう言うとき彼女は

「愛里寿……」

「え？」

「………島田 愛里寿それが私の名前……」

「島田……なあ、ちよつと変なこと聞いてもいいか？君に……」

愛里寿ちゃんにお姉さんとかいたか？」

「……うん。お母さまとお父様だけ……」

「そっか。すまない少し知り合いに似てたから。ごめんね」

そう言い謝る義弘の脳裏にはカンテレを引く流離人、気取りの女性を思い出す。その女性と今いる愛里寿は少し似ていたのだった。

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったな……俺は」

「知ってる。武藤義弘お兄ちゃん……昔は高杉義弘って名前で、黒狼と呼ばれて無敵の戦車乗りって言われてた人……」

「あれ？なんで知ってるの？」

「昔の資料を読んだ……それに大洗での試合も見た」

「そうか。昔のこと知ってて光栄だ」

と義弘は少し笑うとき愛里寿は

「義弘お兄ちゃん。昔も今もすごく強い。たった一両で数十台の戦車

相手に撃破されずに勝っていた……特に戦術や戦法なんかも、だれにも思いつかない戦法ばかり……多分、私のチームとお兄ちゃんが対決したら、たぶん私たちのチーム。一時間も経たずに負ける」「買い被りだよ。今ではなんも力もないただの戦車乗りさ。それにこれは俺個人でなしえたんじゃない。チームと力を合わせてできたから勝ってたんだ」

「チームと力を合わせて?」

「そうだよ。どんなに戦術や力が強い人だってな一人だけじゃできることが限られてしまうもんさ。それに戦車は一台で多くて5人は入る。一人の能力がすごくたってチームワークが取れていなくては強敵には勝てない物さ」

「そうなんだ……勉強になる」

「そう言えば愛里寿ちゃんはチームとか言っていたけど、愛里寿ちゃんって戦車道チームの隊長してんのか」

「うん………センチュリオンの車長もしてる」

「ほお……センチュリオンか……これまた強豪だな……(センチュリオンって戦後の戦車だが……もしかして戦時中に作られた試作型のことかな?)」

そう思いながら義弘と愛里寿は町の中を歩くと

「こほっ……こほっ……」

「お兄ちゃん。大丈夫? 苦しいの?」

急に席をし少し苦しそうな表情をする義弘に愛里寿は心配そうに背中をさすりながらそう訊くと

「大丈夫だよ。俺ちよつとせき込みやすい体質だね。愛里寿ちゃんが背中をさすってくれたおかげで少し楽になったよ。ありがと」

「う……うん。よかった」

義弘が微笑んでそう言うのと愛里寿は少し顔を赤くし顔を下に向けてしまった。

「(ん? どうしたんだらう愛里寿ちゃん?)」

そんな表情に義弘は首をかしげる。すると愛里寿は

「ねえ、義弘お兄ちゃんは何で三年前に戦車道から姿を消したの?」

「え？」

「お兄ちゃん。すごく強い。義弘お兄ちゃんくらいの腕だったら大学選抜に抜擢されてもおかしくらい……でも三年前に突然消えちゃった……なんでなの？」

と、そう言つて、愛里寿は義弘を見上げる。暫く悩むような仕草を見せる義弘、さすがに愛里寿に自分の持つ肺血病が原因とははつきり言えない。

「ん……そうだな。ちよつとだけ疲れてたのかもしれないな」

「疲れた？」

「ああ、あの時の俺は少々戦車道に打ち込みすぎたむろんそれは悪いことじゃない。でも俺はまだ10代くらいだ。もつと他に何かできるのがあるんじゃないかってね……」

「それで辞めちやつたの戦車道？」

「辞めたというか、ちよつと長い休憩をしてただけかな？」

「それで義弘お兄ちゃんは戦車道以外で何か見つけたの？」

そう言つと義弘は軽く笑つて、両手を後頭部に組みながら言つた

「全然だめだった。何をしてても戦車のことばかり考えちまつてな。やっぱり俺には戦車しかないって思つたんだよ。まあ今更気づいたつてところかな」

「それで、戦車道をまた始めたの？」

「まあ、そんなところかな？」

義弘が戦車道を辞めたのは肺血病を治すためドイツに行つていたためだ。むろんドイツに行つた後、義弘は戦車道以外にもいろんなことを試した。茶道、チェス、芸術など……だが、彼はいつも戦車ばかり考えていた。ドイツの病院のベッドにいるとき窓の外に見えたドイツの戦車を見て彼は速く戦車道をしたくてたまらなかつた。リハビリとして戦車道の練習に参加したことがあつたがそれでも体の具合を考えて、数回程度しかさせてもらえなかつた。でも義弘はもつと戦車に乗りたかつた。戦車に乗つて試合をしたかつた

そして義弘は気が付いた。自分には戦車道しかないのだと、

だからなおさら早くこの病気を治したかつた……だが、肺血病



は治るどころか悪化するばかりで、もしかしたら二度と戦車道をする  
ことができずに命を落とす危険があると診断された

その診断を聞いた義弘は師であり義母であるエディータ・ロスマン  
に戦車道をしない代わりに日本に戻りたいと頼み、苗字もは母方の名  
字である高杉から、祖父の名字である武藤と名を変えて今に至るのだ  
「(だけど俺は先生の約束破って、戦車道をしている・・・そして  
俺の命も・・・これも運命ってやつなのかな?)」

「義弘お兄ちゃん?どうしたの?」

「え?いいやなんでもないよ・・・あ、あそこに交番があるから  
おまわりさんに訊いてみよう。もしかしたら他の交番にお母さんが  
いて聞いているかもしれない」

「うん・・・でも私、大学生なのに情けない」

「え?愛里寿ちゃん。大学生なの?」

「うん。でも飛び級だから、お兄ちゃんよりかは年下」

「はあ・・・まあ、日本にもアメリカと同じ飛び級制度があつたん  
だな・・・」

義弘がそう言うと、交番の前で女の人が警官と話をしているのが見  
えた。すると愛里寿は

「お母様」

「え?」

愛里寿の言葉に義弘は少し驚くとその声が聞こえたのか、女性は、  
警官との話を止めて愛里寿の方を向いた。

「お母様!」

その女性の顔を視界に捉えた愛里寿は、そのまま女性に飛び込ん  
だ。

「愛里寿!」

飛び込んできた愛里寿を、その女性は受け止め、キツく抱きしめた。  
「何処行ってたのよ!心配かけて!」

そう言いつつも、その女性は愛里寿を抱き締めていた。それから警  
官が愛里寿の母親に話しかけ、その迷子が愛里寿なのかを確認してい  
る。

そしてその様子を見た義弘は母娘の二人の様子を見て少し羨ましそうに笑みをする

「さて……お邪魔虫はここで去るかな」

そう言い、背を向けてその場を去るのだった……

「それで愛里寿、今まで何処に居たの？」

「ゲームセンター……ボコの縫いぐるみがあったから」

義弘が交番を立ち去り、警官との話を終えた島田家の2人は、帰宅する準備をしていた。愛里寿の母親である島田 千代は椅子の後ろにかけていた上着を取り、愛里寿と話している。

「それで……そのボコの縫いぐるみはどうしたの？」

「うん、其所に居る義弘お兄ちゃんに……あれ？」

愛里寿は後ろを向いて、千代に義弘を紹介しようとしたが、既に彼は居なくなっていた。

「義弘お兄ちゃん……何処にいったの？」

愛里寿はそう言いながら、交番の外に出て大通りを見回すが誰もいなかった。そして千代は

「ねえ、愛里寿。義弘って、もしかして高杉義弘君のこと？三年前に黒森峰で活躍していた？」

「うん。今は武藤って名乗っていたけど……」

千代の言葉に愛里寿は頷いてそう言う

「翔子の……高杉流の子が……立派に成長したのね」

そう言い千代は、友人であった彼女の葬式にいた小さな赤ん坊のことを思い出す。

「……あの子もあの忌まわしい病にかかっていないといいんだけど」

何かを心配するようにそう言う千代に愛里寿は

「お母様？」

「え？ああ、ごめんね愛里寿。そろそろ帰りましょうか。態々へりまで飛ばしてきたんだから、あまり長くは待たせられないわ」

そう言われ、愛里寿は義弘にお礼が言えなく残念そうに頷くと、歩き出した千代に続いて交番を後にするのであった。

へりポートまで歩いている間、愛里寿は義弘から貰ったボコの縫い

ぐるみを大事そうに抱き締めしており、千代には、義弘と会った時の事や、千代を探すのを手伝ってもらっている時の話について嬉しそうに語っていたのだった。

そして、義弘は路地裏の壁に寄りかかっていた

「くっ・・・またかよ・・・今度は視界がぼやけてきたか・・・」

額から流れる汗をぬぐい苦しそうに心臓を掴みそう言う彼、そして彼は大洗の街の中をただ一人寂しく歩く。その時彼の背中に黒い靄が見えた。

それはさながら死神が死期が近い彼に付きまどっているかのよう  
に・・・

もうすぐ準決勝です！

準決勝まであと三日。みんな二回戦突破でにぎわい学校中お祭り状態となっていた。それはそうだろう。戦車道では無名でしかも始めたばかりの学校が準決勝まで登ったんだ。それは盛り上がるのも無理はない。

それは戦車道部のみんなもそうだった。

そして現在、戦車格納庫では以前搜索して発見したルノーのレストアが終わり、今ナカジマさんたちが再修整備に入っている。

「うちのパンターも外装が変わったわね義弘？」

「ああ。砲塔の防循に顎が付いて、車体にはシウルツェンが付けられて。車輪もスチールホイルに変わったな」

道子の言葉に俺は自分の乗るパンターを見る。以前はなかった砲塔の防循に顎上の出っ張りが付き、側面にシウルツェンが取り付けられ、そして車輪は今までゴムが付いていた車輪からゴムの装着が少ないスチールホイルに変わっていた。それは正直言って助かった。試合が終わった後、ゴムが剥離した車輪を交換するのはいちいち大変だったからな。だが、戦車が変わったのは俺たちのパンターだけじゃない。

みほたちの乗るIV号も先の搜索で見つけた75ミリ長砲身を着け、見た目的にf2型のようにバージョンアップしていた。

「長砲身を着けたついでに外観も変えておきました」

「F2ぽく見えますね！」

「そうでしょ？」

「ありがとうございます自動車部の皆さん」

秋山の言葉にIV号の改装をしてくれた自動車部のナカジマさんがそう言うと、みほはナカジマさんたちに礼を言うとナカジマさんは「いえいえ、まあ、大変だったけど、すごくやりがいがありました」

と、ニッコリと笑ってそう言うと、改装されたIV号を見た河嶋さんと小山さんは

「砲身が変わって、新しい戦車も一輛、参加できたけど……」

「そこそこは戦力が上がったな……」

と、そう言うときみほが

「あ、あの……ルノーに乗るチームは？」

そう訊くと、しばらくしておかっぱ三人娘がやってきた。そう生徒会のメンバーだ。

「今日から参加することになった園 みどり子と風紀委員です。よろしく願います」

風紀委員チームの三人はぺこりとお辞儀をする。挨拶をした園さんは、いつも校門にいて遅刻しそうな冷泉を注意していた、あの風紀員だった。

そして角谷さんが三人のそばに立ち

「略してそど子だ。いろいろ教えてやってね」

「会長！ 名前を略さないでください！」

角谷さんに名前を略されたのが筋肉分かったのか、そど子：いや園さんは角谷さんにそう言うのだが……

「何チームにしようか。隊長？」

園さんの言葉をあつさり無視して角谷さんはみほにそう訊くと、みほはルノーを見て

「ルノーってカモっぽくないですか？」

みほの言葉に俺はルノーを見る。確かに言われてみれば鴨に似ているかも？

「じゃあ、カモにけつてーい」

「カモですか!？」

角谷さんの言葉に園さんが声を上げる。まあ、ガチヨウとか名付けられるよりはましだと思っただけだな

「戦車の操縦は冷泉さん、指導してあげてね」

小山さんが冷泉に言う。まあ、冷泉がこの中で一番適任だろうな。運転上手いし。

「私が冷泉さんに!？」

「わかった」

冷泉は嫌なそぶりを見せずに

「成績がいいからっていい気にならないでよね！」

「じゃあ自分で教本を見て練習するんだな」

「なに無責任なこと言ってるの！　ちゃんとわかりやすく懇切丁寧に教えなさいよー！」

「はいはい」

「はいは一回でいいのよー！」

「はーい」

と、なんか言い争っているように見えるけど、俺から見たら、なんかトムとジェリーみたいなコンビができそうな予感がした。

「次はいよいよ準決勝！　しかも相手は去年の優勝校、プラウダ高校だ。絶対に勝つぞ、負けたら終わりなんだからな！」

河嶋さんが次の試合に向けて、そう言うのだが

「どうしてですか？」

「負けても次があるじゃないですか」

「相手は去年の優勝校だし」

「そうそう胸を借りるつもりで」

ウサギさんチームの一年たちがそう言う。彼女たちの言葉にも一理ある、確かに勝つことも大切だ。だが、負けてこそ成長につながることもある

「それではダメなんだっ!!!」

河嶋さんの一言で全体が静まり返る。それはただ勝ちたいという感情ではなく勝たなくてはならない。負ければ後がない……そんな風に俺は聞こえた。

「河嶋の言う通り、勝たなきゃダメなんだよね」

そしていつも飄々としていた角谷さんもいつもと違って真面目な顔で静かにそう言う。そして、その格納庫内を静寂が支配する。

「西住、指揮！」

そしてその静寂さを変えるかのように河嶋さんがみほに声をかける

「あ……はい！　練習開始します！」

西住の号令によって本日の練習が始まる。すると……

「西住ちゃん。武藤君」

急に角谷さんが俺とみほに声をかける

「なんですか?」

「実は二人に話したいことがあるから、生徒会室に来て」

「……………?別に良いですよ」

俺とみほは顔を見合わせると、頷き了承する。

その後、練習が終わった後、俺とみほは雪の降る空の中、生徒会室に連れてこられ、部屋の真ん中に置かれた炬燵に入り、生徒会メンバーの3人と彼等5人で、角谷さんが作ったと言うあんこう鍋を囲んでいた。

ガスコンロの火を受けて、鍋の中身がグツグツと音を立てている「いやゝ寒くなってきたね〓やっぱりこういう寒い日には鍋料理は格別だよ」

羽織を着て袖をフリフリと揺らして言う角谷さん

「まあ、北緯50度を超えましたからね」

「次の会場は北だからね」

「まったく、ランダムで試合会場を決めるのはやめてほしい」

河嶋さんがそう言う。今回の試合会場は北の雪原ステージ。そのため学園艦は試合会場の寒い北の地へと向かっているのだ

「あの…………それで話というのは?」

みほは呼ばれた理由を聞こうとするが

「まあ、まあ、まずはアンコウ鍋でも食べて体を温めようよ」

「会長の作るアンコウ鍋は絶品なのよ」

「そうですか…じゃあ、いただこうかな?」

「え?義君?」

みほは驚いて小さい頃の俺の仇名を呼ぶ

「まあ、みほ。まずは角谷さんが用意してくれた料理を食べよう。俺

も呼ばれた理由は気になるけどさ。まずは食べて体が温まってから話を聞いても別に遅くはないよ」

「う……うん」

俺が無邪気な笑みを浮かべた。

そう言われたみほは、取り敢えずはこうや俺の言う事に従おうと、具を口に運んでいく。

そして俺たちが鍋料理を楽しんでいると

「そう言えばさ、武藤君」

急に角谷さんが声をかけた

「武藤君と西住ちゃんって幼馴染なんだよね？」

「はい。小学校低学年からの仲ですよ。いつもみほと一緒に遊んだりしていました」

「へ〜どんなことをして遊んでいたの？」

「そうですね？田んぼとか山に行って虫取りをしに行ったり、川で遊んだり……あ、そう言えばみほ。お前。大きなシマヘビを素手で捕まえてきたことあったよな？エリカの奴、腰抜かしてたぞ？今思えばあのやんちゃで活発だったみほがここまでお淑やかになっているなんて思わなかったよ」

「へ〜西住ちゃんの小さい頃ってそんなだったんだ？」

「ちよつ!?義くん!?それは子供頃の話でしょ!?今は違うよ!」

みほが恥ずかしそうに顔を赤くしそう言う

「あはは……ごめんごめん」

俺はそう言うのと、俺とみほの姿を見て角谷さんは微笑ましく見て

「本当に仲がいいんだね。二人はちよつと羨ましいよ……あ、そうだ。珍しいものがあるんだ!」

「私たち一年のころから生徒会をしているの」

と、そう言い角谷さんは何か取り出そうとごそごそとし始める中、小山さんがそう言うのと、

沢山の写真が入ったアルバムを持ってきて広げた。

最初のページには、生徒会メンバーの3人が、笑ってピースサインを向けながら校門の前で写っている写真があった。



「おお、コレ見てよ！河嶋が笑ってる！」

「か、会長！そんなもの見せないでください！」

普段は見せない意外な表情を見られたのか恥ずかしいのか、河嶋さんは赤面しながら言う。

「他にもあるんだよ。これは学園祭のときやカレー大会なんかの写真で……」

と角谷さんが楽しそうに思い出を語る。写真には校外学習、学園祭、合唱コンクール、修学旅行、はたまた何かの行事なのか、泥んこプロレス大会と言う競技で角谷さんに技を決められている河嶋さんや、海に遊びに行ったのか、バズーカ砲のような特大水鉄砲で、角谷さんや小山さんに大量の水を浴びせ、その後ろでは大波で吹っ飛ばされている河嶋さんが写っている写真が続々と出てきた。

様々な表情が写っていたが、全員楽しそうな雰囲気が伝わってきていた。

「楽しそうですね？」

みほは写真を見てそう言う

「うん楽しかった……」

「本当に……」

「あの頃は……」

ととても懐かしむような顔でそう言う三人。そしてその表情はまるで別れを惜しむような表情でもあった。

その後、俺たちは生徒会の三人組とともに食事を楽しみ、その場は解散となった。だが、俺たちが呼ばれた理由は最後まで彼女たちが語ることはなかった。

「結局何だったんだろう……話して？」

「さあな？角谷さんには角谷さんの都合でもあったんじゃないかな？」

学校の下駄箱で俺とみほは先ほどのことを話す。なぜ俺たちが呼ばれたのだろうか？……あ、そう言えば携帯あの部屋に置き忘れた

「あ、俺、生徒会室に忘れ物した。俺戻るから、みほは先に帰っててく

れるか？」

「え？・・・うん」

そう言いうと俺はみほを残して生徒会室に戻るのであった・・・

「けほっ・・・けほっ・・・気温が低くなったせいか、寒さで肺がい  
つも以上に痛く感じるな・・・」

咳を込み、俺は生徒会室につき、ドアを開けようとする・・・  
『結局言えなかったじゃないですか・・・』

ん？河嶋さんの声が聞こえる。

『これで良いんだよ、河嶋。西住ちゃんや武藤君には頑張ってもらっ  
ているし、これ以上重荷を背負わせるわけにはいかないよ』

今度は角谷さんの声が聞こえた

『ですが、会長・・・』

『二人には事実を聞いて萎縮するより、あのまま……………のびのび  
と戦車道をやってほしいからさ……………』

深刻そうに言う角谷さん。真実・・・恐らく俺とみほに言いたかつ  
たことだろうか？しかもその内容は、恐らく今後俺たちにかかわる大  
事なことなんだろう。なら俺のやることは一つしかない

俺はドアをノックする

『誰？』

「武藤です。すみません。忘れ物を取りに戻りました。入ります」

そう言い、俺は部屋に入ると、小山さんが

「武藤君。今の話・・・聞いてた？」

「話？何をです？」

「ああ、いいんだよ。こっちの話」

俺はあのお話を聞かなかつたふりをし、忘れた携帯をとり、部屋を出  
ようとすると俺は立ち止まり

「角谷さん。先ほど俺やみほに何を伝えたかったのはわかりませんで

したが、俺は絶対にこの学校を・・・あなたたちを優勝させて見せます・・・この命に代えても・・・ね」

「え?」

「独り言です。それではお疲れさまでした。アンコウ鍋美味しかったです」

そう言い俺は、呆けた三人の元を後にしたのだった。だが、俺は角谷さんが話す事実を試合で聞くことになること・・・そして自分の体が崩壊する・・・死への序曲が盛大に演奏されたことを知る由もしなかった・・・

## 寒さに響くカンテレの音

義弘とみほが生徒会に呼ばれているのと同時刻。

熊本県のとある家。

『西住』と書かれた表札がある、古い流派の家を思わせる大きな家こそが、みほとまほの実家である。

そんな一室にて、黒森峰の制服を着たまほと、黒いスーツ姿の女性が居た。

鋭い目や座る姿が凛々しさを醸し出すその女性の名は、西住 しほ。みほとまほの母である。

2人が囲む机の上には、とある新聞紙が広げられていた。

その項目には、この準決勝で、大洗女子学園とプラウダ高校が対決すると言う事が書かれており、両チームの隊長名もが書かれている。

そしてその記事には他にも義弘についてのことが書かれており

その項目には、『三年前に突如消えた最強の戦車乗りが再び現れる!?!今後の伝説的な活躍をまた見せるのか!?!』

と、書かれていた。

そしてその記事を見たしほは

「まほ……あなたは知っていたの？あの子が未だ、戦車道が続けていると言う事を……そしてあの子が再び現れたことも……」  
「はい……」

しほのなんも感情のない声に彼女は下を向き静かにそう言う

「西住の看板を背負っているとはいえ、勝手なことばかりをして……それにあの子も三年前にあんなことがあったのに……」

「お母様……三年前に義弘がいなくなった理由を知っているんですか？」

「……」

まほの言葉にしほはただ黙る。そして

「……あの子のこと……義弘について話すことはないわ。ただ、みほはこれ以上西住のこととしていき恥をさらすことはできないわ。討てば必中、守りは固く、進む姿は乱れ無し。鉄の掟、鋼の心……」

それが西住流よ。わかっているわね……まほ?」

しほがそう言うとうつぶむいていたまほは顔を上げ

「私はお母様と同じで西住流そのものです……ですがみほは」  
「もうこれ以上言わなくていいわ。今度の大洗の試合。私も見に行く……あの子に西住流の師範として勘当を言い渡すために」

と、そう言うのと、まほを残してしほは部屋を出るのであった。そして廊下を歩くしほ

「(みほが戦車道を再び始めたのはともかく……まさか高杉流の……翔子の息子まで大洗にいるなんて、何かの運命なのかしら……)」  
そう言い彼女は自室に入る。そしてクローゼットを開けると、そこには二着の服が合った。それはしほがかつて学生時代に来ていた黒森峰の制服……そしてもう一つは大洗学園と同じ制服だった。しほはその大洗の制服をそつと撫でると、厳しい表情から少しだけ懐かしさを入り混じった表情になり、そしてしほはクローゼットにあるタンスから一枚の古びた写真を取り出す。その写真は戦車を背にしてピースサインをする5人の少女がいた。その5人のうち一人は若き頃のしほの姿であった

そしてしほは隣に移っている短い黒髪の少女の写真をそつと撫で  
「……翔子……なぜあなたは先に逝ってしまったの?」

悲しい顔をしてそう言うと、彼女のポケットの携帯が鳴り出す。  
そして彼女は携帯を取り出し宛名を見ると少し驚いた顔をした  
その宛名の人物はこう書かれていた

『エディータ・ロスマン』

翌日、戦車倉庫では試合会場が雪上の場所ということになり防寒対

策として戦車道の面々はいろいろと準備をしている。

「カイロまでいるんですか？」

「戦車の中には暖房がないから、できるだけ準備しとかないと」

段ボールいっぱいのカイロを見た五十鈴さんはみほにそう言うのと、みほは戦車は暖房がないためと答えた。確かにみほの言う通り戦車に空調はおろか暖房が一切ない。しかも鉄でできているためとても寒い。はつきり言って冷凍庫の中に入るようなものだ

「道子……」

「はいはい」

「大鍋と鍋の材料。買っておくか？」

「長期戦になると？」

「相手は雪上戦の本場の戦車を使うし戦法もそうだ。用意に越したことはないよ」

「了解。わかったわ。私の部下に水産科と農業科の奴がいたから、そこから分けてもらおうわ」

「すまない。頼む」

俺と道子が寒さ対策の話をしている中、他のみんなはというと

「タイツ二枚重ねにしよっか？」

「ネックウォーマーも、したほうがいいよね」

「それより、リップ色のついたやつしたほうがよくない？」

「準決勝って、ギャラリー多いだろうしね」

「チークとかいれちゃう？」

「楽しそうに話す一年たち

「どうだ」

そういつて時代劇のカツラを装着する左衛門佐。

「私はこれだ」

月桂樹の冠を被るカエサル。もうカエサルたちにいたっては防寒対策ですらない。

「冬の戦いなら、私たちのロシア戦車の活躍ができるわね！」

「そうっすねエレーナの姉貴！」

「あれ？姉貴、日本語流ちようになっしてやしませんか。バカヤロ？」

「練習した。それより天野。その特攻服で大丈夫?」

「大丈夫だぜ!」

BT7の前で話すエレーナ達キツツキさんチーム

「あなたたち、メイクは禁止! 仮装は禁止! そしてそこ! 特攻服も禁止!!」

「いちいちうるさいぜよ……」

風紀員としてなのかそど子がみんなを注意するとおりようが嫌そうに言う

「これは授業の一環なのよ! 校則は守りなさい!」

と、注意するのだが、エルヴィンが彼女の肩を掴み自分の前に振り向かせると

「自分の人生は、自分で演出する」

「なに言ってるのよ?! それと!!」

なぜかドヤ顔でロンメル將軍の名言を言う彼女にそど子は突っ込む。するとそど子は今度は道子の方に行き

「あんた、ここでも面倒な騒ぎはしないでよね?」

と、そう言う。そど子は道子が不良グループのリーダーってことは知っている。知っているからこそ問題を起こさないように注意するのだった。道子は目を細め

「あら? 園風紀委員長? また私の部下が面倒なこと起こしたのかしら? この頃は静かだったと思うけど?」

と、そう反論すると、そど子は

「確かに、あなたがリーダーになってからは問題がかなり減って治安も風紀もよくなったけど、船底では……」

「船底は船舶不良集団の管轄よ。私が首突っ込んでいいことじゃないわ。船底に関してはお銀に言いなさい。どうしてもというのなら私が伝えておくけど?」

「なら、いいわ。あんた成績もいいのに何で不良のリーダーなんかやっているのよ」

「たまにはそう言うワルなところもいい者よ。私は予言するわ。あんたもいずれはそう言う傾向になるわ。しかもウサギ小屋の中でキユ

ウリをかじって胡坐をかいているでしょうね」

「ならないわよ!!」

と、言い争っている間。他のチームでは

「今度は結構みんな見に来るみたいですよ」

「戦車にバレーボール部員募集って貼っておこうよ!」

「いいね!」

とバレー部はどうかやら部員集めに燃えているようだ。

「アンツイオ校に勝ってから、みんな盛り上がってますね!」

「クラスのみんなも期待してるし、頑張らないと!」

「次は新三郎も母を連れて見に来ると言ってます」

と、みんな盛り上がってそう言う。それはいいことだ連戦連勝で士気が上がる。それ自体は言い。だが、それは下手をすれば奈落の底に落ちるきっかけにもなりかねない。

自分たちは勝ち続けるから次もまた勝てる。だが過去の歴史を見る限り、そう言う慢心や油断を起こしたものは決定的な致命傷を起す。

そうミッドウエーのような……

「(ここは言うべきか?……いや)」

雁に行つたとしてもそれは今の彼女らには伝わらないだろう。この場合は自分自身で身をもつて学ばなければならぬ。

俺の役目は共に戦うこともそうだが、彼女らに戦いのことを教えなければいけない。

それがたとえ嫌われるような結果になっても、教える側は……経験者は未経験者に対しそれをやらなければならぬ

「(とにもかくにも今回の戦いは今まで通りに……っ!?)」

俺がそう思ったとき、何か締め付けられるような痛みがし、そして視界が歪んで見えるのであった



「じゃあ、今日の練習を始めます！」

みほの言葉に皆は戦車に向かう

「やれやれ……あのおかつぱは話が長いわ。お待たせ義弘……  
義弘？」

道子はその子から解放されパンターに向かうと、そこにはパンタに寄り添ってしやがみ込み荒息を立てて自身の肺を掴む義弘の姿があった

「ちよつと大丈夫。義弘？」

「あ……ああ。大丈夫だ」

と、義弘は道子の顔を見るが、その表情はやつれ青ざめていた  
「顔色が悪いじゃない。どこか具合でも悪いの？」

「大丈夫だ。心配するな」

「大丈夫な者か……ちよつとじつとしてろ」

そう言い道子は義弘の額に手を乗せる

「っ!? 熱があるじゃないか!? 今日は休め」

「大丈夫だ。ちよつとだるいけど……」

「アウトだ! 早く保健室に行け。みほには私が説明するから」

「だが……車長がいないと」

「私たちは今回車長がいなくなった時の訓練という形でやるから。もうすぐ準決勝よ。その日にあんたが不在だと大変なのよ。だから早めに休んで体調を回復させなさい」

「だが……」

「たまには仲間を頼れ。一人で抱え込むのあんたの悪い癖よ」

「……わかった。行ってくる」

そう言い彼はふらつきながら保健室へと向かうのであった

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

肺を掴み苦しそうに息をする俺……道子に言われたように俺は雪がかすかに降る中、校庭を歩き保健室に向かっている。だが、俺のこれは風邪なんかじゃない……

俺は胸ポケットにしまっただけある薬の瓶を出し一錠飲む。しかしあまり効果が見られない

「あははは……もう。まずいかもしれない……視界も歪んでまともに見れやしない……」

眩く俺の耳に何か妙な音が……弦楽器の音色が聞こえてくる。この音色はどこか懐かしい音色だ。その瞬間、俺の意識は途絶えた

どれくらいたったのか目を覚ますと

「おや……目が覚めたかい？」

と、女性の声が聞こえ、よく見ると俺は誰かの膝の上に寝ていた。そう誰かが膝枕をしてくれていたのだ。そして俺はその膝枕をしてくれた人物を見ると、胸元の大きな『継』の文字が目立つのでつい目がいつてしまうジャージに茶髪のストレートロングヘアーにチューリップハットをかぶった女性が見ていた

「やあ……久しぶりだね。義弘」

優しい笑みでそう言う彼女。俺は彼女を知っている

「ああ……お前に会うなんて二度とないと思っただけだな。島田ミカ……」

彼女の笑みに俺も笑みで返す。彼女は島田ミカ……

俺に唯一、戦車道の勝負で黒星を付けた女だ

## 流離の詩人と黒き狼

島田ミカ……忘れもしない。三年前の練習試合で彼女のいたチームと対戦した時、彼女の作戦に引っかけり、そして敗れたことをだが、彼女にあったのはそれつきりで、それ以降は会っていない。噂では継続高校に行つたと言っていたが電話番号を交換していなかったため話すこともできず。そのままだった。

出来ればまた会い、負けた悔しさを返すべく再び挑戦状を送りたかつたんだがな。

だが、こうしてまた出会うなんて誰が予想したのか……

「久しぶりだな……島田」

俺は膝枕をしてくれる彼女の名を言った。すると彼女は

「その名で呼ぶのはやめてくれないかな？今の私は島田の看板をしょっていない。今の私はただのミカさ」

「家で何かあったのか？喧嘩でもした？」

「人には言いたくない事情っていうのもあるんだよ。それは君も同じじゃないのかな？君だって高杉から武藤に代わっているしね」

「そうだった……すまない」

顔が凶星とかいているが、ここはこれ以上彼女のことを聞くのはやめるか。あいつにもいろいろあつたんだろう

「それでなんで膝枕なんだ？」

「倒れているのを見つけてね。ちよつとした看病さ……嫌だったか……」

「いや。なんか落ち着くし、別にいいけど？」

「君はそんな人間だったかい？」

「三年間いろいろあつたんだよ。いやだったら起きるけど？」

「いや。このままでいいさ。ゆっくり休むのも悪くはない」

そう言いミカは若干顔を赤くしそう言う。そして俺はふと思いついたことがあつた

「あ、そう言えばミカ。お前の妹？多分妹にあつたぞ？」

「・・・・・・・・愛里寿に？」

愛里寿・・・・・・・・やっぱり。あの子は島田流の・・・・・・・・

「ああ。前の大洗に寄港した時、道に迷っているのを見かけて交番に連れられたらちょうどお母さんがいて、再会できたよ」

「そう・・・・・・・・二人は元気だったかい？」

「ああ。俺が見た限りではな」

「そう・・・・・・・・あの子もずいぶん大きくなったんだろうね。あの子が物心つく前に学園艦に行き、そのまま別れたから」

「会ってないのか？」

「会うことに何か意味があるのかい？」

「俺が言うのもなんだが、顔ぐらい見せてやれよ。少なからず家族なんだろう？俺には家族は生まれてすぐいなくなっちゃたから、よくはわからないけど」

「そうかい・・・・・・・・君の言いたいことはわかったけど。まだ会えない。まだその時じゃないからね」

「なるほど、心の準備がまだってことか・・・・・・・・それよりミカ。お前なんでこんなところにいるんだ？」

「風に乗って、波に運ばれて来たのさ」

「それじゃ遭難者だぞ。というより三年前もそうだが、まだ患っていたのかその口調？」

「人を重病人みたいない言いはやめてくれ義弘。これがいつもの私さ」

珍しくミカがジト目で俺を見る。いや中学のときからその流離の詩人風な口調を続けたら変にみられるだろ？大人になって同窓会とか言ったら絶対にいじられるだろ『昔はミカってあんなこと言ってたよね』とか言われて恥ずかしくするんだろうな・・・・・・・・

「なんか変なこと考えていなかっただかい？」

「いいえ、なんでも」

人の心読まないでくれ。エスパーかよ

「で、何しにここに来た？学校はどうしたんだよ？」

「学校、そんな所に大切な物はあるのかな？」

「まあ、友を作って青春を満喫できるとかじゃないか？知らねえけど。で、何しに来たんだ？家には盗まれるほど戦車は豊富にあるわけじゃないぞ？」

「久しぶりに出会って言う言葉がそれかい？人を泥棒みたいに？」

「泥棒じゃないんだつたら三年前に黒森峰から盗んだ三号突撃砲のG型返してくれないか？」

「盗んだわけじゃないよ。借りたのさ……永遠にね」

「借りるといふのは相手の同意を得て成立するものだ。それ以前に永久て言っている時点で確信犯じゃないか」

「……ここにはね、探し物があつて来たのさ……」

おい、話題を変えて誤魔化すなよ。もういいけど……

「探し物？」

「ああ。とても大切な者さ……でも風が教えてくれたおかげで見つけることができた。今私の膝の上にある」

「……俺を探していたのか？物好きだな？」

「君が自分のことをどう思っているかは知らない……でも私にとっては大切な人なんだよ」

つまり、ミカは俺に会いにここに来たらしい。でもなんで俺なんかに？

「三年前に消えて以来。私は君のことを考えていた……なぜ消えたのだろうってね……あれほど楽しい試合は初めてだった。だから今度は試合じゃなくゆつくり君と語り合いたかった……でも君はもういなかった……なぜ消えてしまったんだろうってね」

いつもの詩人みたいな口調だが、その声には少し悲しげがあった  
「お前の言葉を借りるのなら……『風の流れに任せて流れて行った』ってところだな」

「風に流された先は何処にたどり着くのかい義弘？」

「さあな……風に任せるさ」

「それが死ぬことになってもかい？」

「っ!？」

ミカの言葉に俺は驚く。まさかミカの奴おれの肺血病のことを

知っているのか？

「ミカ……それって」

「君のそばには死神が見える……何時でも君の命を取ろうとじつと傍にいる」

そう言いミカは悲しそうな表情を浮かべる

「人はいずれ死ぬ……速かれ遅かれ死ぬ……でもね君はまだ死ぬには早すぎるんじゃないかってね……」

「俺にどうしろと？」

「休むのもたまには悪くはないんじゃないかな？」

「すまないが、今の俺に休む時間はないよ。時間がないんでね」

「知ってたさ……だけど君は後悔しないのかい？君の婚約者だった西住流のあの子を置いて逝くのは……」

ミカの言葉に俺は目を閉じる。そして瞼の裏にはみほの姿が浮かんだ。そして……

「俺は……何時も後悔しない道を選んで生きてきた。俺は……俺の心に何ら恥じることはないよ。大切な人のために戦うのはこの宇宙に不縁的な摂理さ……おれはみほの居場所を守るため……大切な人のために戦うんだ……後悔はしていない……」

「その結果が彼女を悲しませる結果になってもかい？」

「人はいずれは別れ終わるときがくる……物事に始まりがあるようにな」

「そう……」

そう言いミカは何も言わなかった。そして俺は彼女の隣に置いてあるカンテレを見る

「そう言えば、ミカ。またお前の演奏聴きたくなかったな」

俺は彼女の曲を久しぶりに聞きたくなかった……そう、昔熊本の楽器屋で聞いたあの音色をまた聞きたかった……

「誰かに言われて弾くのはあまり好きじゃないかな……でも君にならいいかな？リクエストはあるかい？」

「君の得意な奴でいいよ……」

「そう……じゃあ、私の得意なのを弾こうかな？」

「題名は？」

「曲を弾くのに題名はいらんじやないかな？でも強いて言うなら、私はこう名付ける『T・r k e i n t・ e l・m・s s・く人生の大切なこと』てね」

そう言い一呼吸入れると彼女は俺を膝枕しながら横に置いているカンテレを片手で器用に弾く。その音色とともに彼女は歌いだす

それは心安らかなになるような歌だった。

そして俺の意識はどんどん途切れるのだった。そして最後に

「お休み・・・義弘。そして・・・死なないでくれ」

と、ミカの声が聞こえるのであった

ミカ視点・・・

「どうやら寝てしまったようだね・・・」

そう呟く私は膝の上で安らかに眠っている彼を見る。三年前に比べその顔は疲れ切り、やつれ顔色も青白くまるで幽霊のような感じだった

「やっぱり、例の噂は本当のようだね・・・」

噂・・・それは彼の体の中に巣くう一種の呪いのような物だ・・・だが、私にはどうすることもできない。私はただカンテレを引くだけしかできない

私は膝の上で寝ている彼の顔を見る。そして私は片手でカンテレを引いた

「義弘・・・あなたは覚えていないかもしれないけど。私があなたにあったのは三年前じゃないのよ・・・ずっと前に私と出会って。そしてこのカンテレと引き合わせてくれた。私の一番大事な人・・・」  
そう小声で言うと、私は子供のころを思い出す。たまたま母と一緒に熊本に行ったときに、私は、大事なカンテレを無くしてしまい、見つからず泣いていた私に現れたのがそう・・・君だよ義弘。

そして君はなく私を連れ一緒に私のカンテレを探してくれた。そしてカンテレは見つかったのだけど、弦は切れ、ボロボロの状態だっ

た。

母が誕生日に買ってくれたカントレがこんな状態を見て私はまた泣いてしまった。すると君は

「大丈夫。僕が何とかするよ」

そして君は私の手を引き。ある店に連れて来てくれた。それは少し古びた楽器屋さんだった。君は店の店長に私のカントレを見せると店長さんはニコッと笑う。カントレをもって店の奥へと入っていった。不安そうにする私を彼は『大丈夫だよ』と言ってくれた。そしてしばらくして店の店長さんが戻ってきて私にまるで新品のように直ったカントレを渡してくれた

私は彼とお店の人にお礼を言い、お礼にカントレを弾いた。カントレは当時私は習ったばかりだったからあまりうまくなかったけど、それでも彼は喜んでくれたことに私は嬉しかった。

だが、彼に会ったのはそれっきりだった。あの後すぐに私は君と別れてそのまま君に会うことはなかった。

久しぶりに会ったのはその数年後・・・中学の時の練習試合でだった。

でも君は私のことは覚えていなかったみたいだ。その時は少し悲しかったことを覚えている・・・

「・・・あれ？」

そう言えば私がカントレを弾いたのは小学生の時・・・初めて君に会ったあの日だけだ。でもさつき彼は・・・

『またお前の演奏聴きたくなかったな』

また・・・もしかして彼は私がああ時の女の子だということを知っていたのかな？聞けばわかるかもしれないが今は彼を起こすのは野暮だ。私は膝の上に寝ている彼の髪をそつと撫でる。そして彼の寝顔に微笑み

「お休み・・・義弘。そして・・・死ななくてくれ。君にはまだ聞かせたい曲がたくさんあるから・・・だからお願い・・・死ななくてくれ」

私は彼に心からの言葉を贈るのだった





「(結局・・・彼を止めることはできなかつた・・・彼はきつと誰に言われても止まらずに進むだろうね・・・それが呪われた一族と言われている高杉家の悲しき運命なのだろうか・・・彼が死の呪縛から解き放たれることに私はただ無力に祈るしかない・・・)」

彼女は悲しい目で見上げカンテレを引く。その音色はまるで彼女の心を代弁するかのようによくまるで泣いているような音色であつた・・・

## 雪の中の二人

放課後、皆が家に帰っているとき俺とみほは教室に残っていた。  
理由はプラウダ戦についての作戦会議だ

「今回の準決勝は15両までが出場できるから15両対6両、それにあつちはT-34/76に85」

「それにkV2にIS2重戦車。戦力的には厳しいな」

卓上で俺とみほはプラウダがどんな車輛を出すか予想していた

俺もみほも今回の戦いでプラウダは必ずこの二輛を投入してくることを予想していた。kV2重戦車は155ミリ榴弾砲を搭載した『街道上の怪物』の異名をとる戦車であり、IS2は122ミリ砲搭載し、榴弾だけでもティーガー1の正面装甲にヒビをつけるほどの破壊力を持つ戦車だ

「特にIS2は、一撃でティーガーを仕留められるし、しかもプラウダにはサンダースのナオミと並ぶ名砲手ノンナという人がいるからな。もし彼女がIS2に乗っていると厄介だ」

「うん。それにプラウダは引いてからの反撃が強いから、ここは慎重にいかないと」

「ああ。この戦いは長期戦になるな……」

と、俺とみほは作戦を練っていた。カチユ姉……カチユーシヤらプラウダの得意とする戦法は二重包囲。敵を誘い込むようにして自分の有利な場所へ導き包囲し殲滅するのがプラウダのやり方だ。

その時俺は一つの不安があつた。それはうちのチームだ。全国大会で二回も勝利している。きつと彼女らのことだから長期戦に不満を持つ子も出るかもしれないな

「義君。この作戦内容でどうかな？」

「今のところはそれでいいかもしれない。まあ、プラウダの動きに要注意ってところだな……」

不安そうに言うみほに俺はそう答える

「ゴホッ！ゴホッ！」

急に咳が出て肺が痛み始め俺は少し屈んでしまう

「よ、義君!?!大丈夫!?!」

俺がせき込んで苦しそうな表情をみるとみほが心配な顔して俺に駆け寄る

「だ・・・大丈夫だよ」

「でも・・・きょうの昼も保健室に行ったんだよね?顔色の悪いし、もしかはどこか体の具合が悪いの?だったら今回の試合は・・・」

「大丈夫。大丈夫だから、心配しないでくれみほ。俺は大丈夫だから、ほら!」

そう言い俺はみほに心配かけさせまいと、元気に体を動かし何ともないと言う

「本当に・・・大丈夫なの?」

みほはじつと俺の目を真剣な目で俺を見る。なんか見透かされそうな鋭い眼だ。その目は姉のまほさんや母親のしほさんのように鋭かった

「大丈夫だよ。だから心配しないでくれ」

「本当に?」

「ほんとにほんとだよ。大丈夫だって」

俺は笑顔でが任してそう言うがみほは俺の顔をじつと見てやがて「・・・わかった。義君がそう言うのなら、私信じるよ」

「そうか・・・でも・・・でも?」

「無理は絶対にしないで・・・前みたいに怪我する義君。私見たくないから」

みほは真剣な表情で俺に言う。本当に俺のことを心配していつてくれているのだろう。その思いは鈍感な俺にもひしひし伝わっている

「・・・わかった。絶対とは言えないけど。約束する」

「約束だからね」

「ああ。わかったって」

俺はみほの言葉に頷いた。だが、果たして彼女の約束を守るれるのだろうか。肺を病み、いつ死ぬかわからない俺がみほと約束を守るのか・・・

「いや…守るしかないな。それに約束したもんな。みほとエリカで桜を見るって……」

「俺はまだ死ぬわけにはいかないか、とそう心に決め。窓を見ると……」

「あ、ほんとだ」

作戦会議をしている中、窓の外を見ると雪が降り始めた。まあ、試合会場が雪原だからなそこに向かえば雪も降るだろう

「この天気を見ると。もつと降ってくるな。今日の会議は……でおしまいにして帰るか？」

「うん……あつ！」

「どうした？」

「私、傘持ってくるの忘れちゃった……」

「相変わらず、そこはおつちよこちよいだな……みほは」

「むく義君の意地悪」

そんなむくれ顔で言っても怖くないぞ、みほ。むしろ可愛い……雪だし、走って帰ればそこまで濡れないかな？」

「雨と違って、スリップして転んだらどうする？試合前に怪我したら大変だぞ？仕方ない俺の傘貸してやるから」

「え？でも義君は？」

「男は風の子。このぐらいの雪我慢するさ。それにみほは隊長だろ？体調を崩したら困るだろ隊長だけに」

「義君…それはちよつと笑えないかな？」

え？結構受けれると思っただけだな……まあ、いいか。俺とみほは教室を出て傘が立ててあるところに行き、俺は自分の傘をみほに差し出す

「ほら」

「う……うん。ありがとう。義君」

そう言いみほは俺の傘を取る。みほがおずおずとしながらも上目遣いでこちらを見ながら傘を差し出してきた。

「ん？どうしたんだ？」

急な行動に俺はみほに訊くとみほは

「その……義君。一緒に、帰る？」

「いや、遠慮しなくていいよ」

「ダメだよ。そのまま帰ったら義君風邪ひいちゃうし、それに傘、まだ一人分空いているから。二人で帰ろうよ。二人一緒なら濡れないし風邪もひかないよ。……ね？」

「……」

「……」

結局俺はみほの提案に乗り、一つの傘の下……つまり……その。あれだな相合傘の状態で帰っていた。

いや、だってみほの奴、何度もいいって言っても聞かないからさ。昔から強引というか頑固というか。一度決めたらなかなか引き下がらないのがみほなんだよな

俺とみほの指す傘には、しとり、しとりと雪がふんわりと積もる。そして地面は白い絨毯のように真っ白だった

「なんか……こうすると昔を思い出すね？」

「ん？なにがだ？」

「よく中学の時雨が降って私が傘を忘れたとき、義君が傘をさして家まで送ってくれた時のこと……」

「ああ……そう言えばそんな時もあったかな？」

確かに中学の時……黒森峰中等部のとき雨がよく振ったときはみほは傘を忘れる時がたまにあった。その時はまほ姉が送ってくれたりもしたが、いないときは俺かエリカが送っていた……いや、俺が送ることが多かったな

そう言えばみほ。俺がいるときだけ傘を忘れていたような……

ま、気のせいだろ。

「懐かしいね……昔はよく。エリカさんと一緒に買い物に行ったりして」

「ああ、みほの場合はコンビニ巡りだったな。一店舗だけで一時間以上居座っていたよな？俺とエリカ。みほの気が済むまで雑誌コーナーで待ってたんだぞ？」

「むくだってコンビニ好きなんだもん」

「まあ、そこがみほらしくて俺は好きなんだけどな」

「えっ!?そ、それって……」

と、みほは顔を赤くし、下を向いてしまう。あれ・なんか変あんど言っただか俺？すると

「あれ？義君。手、震えているよ？もしかして寒いのか？」

「そんなことないさ」

実際はすごく寒いけど、男ならここは我慢しないと。俺がそう思っているともみほは俺の手を握り

「強がっちゃだめだよ！ほら、こうすれば暖かいでしょ？」

と俺の手を握り締めるみほ。その顔は若干恥ずかしそうに赤く。書くいう俺自身も少し小恥ずかしかった。鏡を見れば俺の顔もみほのように赤いのだろうか？

「……」

手をつないだまま、そのままますます雰囲気が出る。

昔はよくみほと一緒にいたが手をつないだのはこれが初めてだった。

何を話したらいいのだろうか？俺はどうすべきか考えた。

だができる限りならこの状態が続いてほしいと思う自分もいる。

そう……あの頃。俺とみほが昔みたいに……

その後、俺たちは何も話せないまま、雪の白い絨毯の上を歩いた。ただ氷を踏む音しか聞こえず。俺とみほが住む寮へと歩き出す。

だが、この時俺とみほの前に一人の来訪者が来るなんて今この時の俺とみほは知る由もなかった

## 西住流からの使者

雪が降る中、義弘とみほは一つ傘の下で自分たちの住む寮へと歩いていた。

「………」

雪の降る中、二人はしゃべらず、無言のままだった。

正直言つて気まずい雰囲気だった。それは二人も同じくなぜかもしもじしたり義弘は軽く頬を搔いたりとただ気まずさだけがあった

「あ、あの！……あ」

この状況をどうにかしたいと思った二人は話しかけるが同時に声をかけて締まり声はもつてしまう。

「みほからいいぞ」

「ううん。義君から………」

と二人は遠慮してそう言うのだが、一向に喋らず、いつそう気まずい雰囲気になってしまう。そして義弘がやつと口を開いた

「も、もうすぐ寮だな………」

「う……うん」

他に何か言うことがあるんじゃないかと誰かが突つ込みそうなくらいの短い言葉。そしてみほも軽く頷く。そして二人はこの時思った。

誰かこの状況を動かしてくれはしないかと

「……あれ？」

と、不意にみほが立ち止まった、そのせいで少し先に進んでしまい、とりあえず傘をみほに向けて俺も戻る。

「みほ。どうしたんだよ？……ん？」

みほに隣に立ち、みほの視線の先を見ると寮の前に女性が一人、傘を差して立っていた。しかも和服姿で。だが俺はこの人を知っている。

「菊代さん！」

と、みほは彼女に声をかけた。彼女は菊代さん。西住流の人であり



みほの家のお手伝いさんだ。俺も小さい頃は世話になった……いろいろな

そして菊代さんはみほに気づいたのか嬉しそうに近づき

「みほお嬢様、お久しぶりです。お部屋に居なかつたので心配しました、お元氣そうでなによりです」

「ありがとうございます、でも菊代さん、どうして大洗に？」

「ふふっ、お休みを頂きました、みほお嬢様をびっくりさせたくて内緒で来ちゃいました」

と、ニツコリと笑う菊代さん。ほんとと昔っからお茶目な人だな。すると菊代さんは俺の方を見る

「それでみほ様…、そちらの方は？……はっ！もしかして？義弘君ですか？」

「うん！そうだよ。今は同じ学校なの」

「そうですか。三年前にいなくなって心配していたのですよ。それにしても立派に成長されて……背はあまりお変わりないですが」  
「言わないでください菊代さん。気にしているんですから」

俺がジト目でそう言うも彼女はいつものように微笑んで

「そうですか……みほお嬢様と彼は同じ学校……そうですかそれでは二人の仲は……ふふ」

「いや、何想像しているかわかりますけど、俺とみほは、もう昔の関係とは少し違いますから」

「あらそうですか？今も手をつないでいますけど昔はそこまでではなかつたはずのような気がしますか？」

ニツコリと笑う菊代さん。俺とみほはいまだに手をつないでいることに築き慌てて手を放し照れた顔を見ると菊代さんはまたも微笑む

この人はいつも微笑んでいるけど、逆にそれが怖いときがある。

よく言うだろ？笑っている人ほど怖いって……

「みほお嬢様。よろしければ今夜のお夕飯。わたくしが作りましょうか？」

「本当！久しぶりの菊代さんのご飯、すごく楽しみ！」

と、みほは嬉しそうに言う。まあ菊代さんの料理は幼いころ食べたことがあるが本当においしい。一度食べたなら絶対に忘れないほどうまい。これは断言できる

「義君もどうか？菊代さんのご飯、とつても美味しいよ」

と、みほに誘われた。だが……

「いや。今日は遠慮しておくよ」

「え？でも……」

「ちよつと自室でやること思い出したし、それにみほも菊代さんと積もる話があるだろ？ありがたい話だけどまた次の機会にするよ」

もつたいないと思うが俺はその誘いを断った。別に菊代さんの料理が嫌いなわけじゃない。ただいまはみほと菊代さん二人つきりで話したいことがあるだろうし俺がいても邪魔だろう

「う……うん」

みほは残念そうに言うと菊代さんが

「……ところでみほ様は普段は自炊をしているんですか？」

「え？」

急にみほにそう質問をするとみほは少し目を泳がせて

「え!?も、もちろんだよ、菊代さん」

「本当にですか？まさか……コンビニのお弁当や冷凍食品、カップ麺で済ませている、なんて事はありませんよね？」

と、スマイルな顔でそう言う。ああ、やばいこの顔は怖いときの笑顔だ。小さいころ俺とみほが田んぼで遊んで泥んこで帰ってきた時と同じ顔だ。あの時は俺もみほも半泣きになったくらいだ

「あ！私ちよつと部屋片付けてもいいかな？ごめん、菊代さん、義君、ちよつと待ってて!!」

早口で捲し上げて伝えるとみほは慌てて部屋に向かった。いやみほ誤魔化すの下手すぎだろ。ほぼ菊代さんにはバレてるぞ  
俺はちらりと菊代さんを見ると彼女は軽くため息をつき

「……コンビニ好きは続いているみたいですね」

やっぱりバレてた……

「ですがこの頃は、カレーとかシチューなんか作ってますよ。俺もお

「すそ分けもらいましたし」

「あら？ そうなの？ それでお味の方は？」

「美味しいに決まっていますよ。何より思いがよく伝わった味だったよ」

「そうですか」

とまたも微笑む菊代さん。そして俺は

「それで……何しに来たんですか菊代叔母さん。あなたが、ただみほに会いたくて来たわけじゃないですよね？」

「ばれていましたか？」

「バレバレです。伊達にあなたの甥っ子じゃないんですから」

「甥っ子……ね。まだ私の甥っ子だと思ってくれるなんて嬉しいわね」

俺は軽くため息をつく。そう、この菊代さんは俺の母方の妹……つまり叔母に当たる人だ。と言つても菊代さんが言うには生まれてすぐに養子に出されて母さんとはあまり話すことはあまりなかったという

俺も菊代さんが俺の叔母だと知ったのは祖父ちゃんが死んだ後のことだ

「……で、みほに会いに来た理由は？ まあ、大体は予想は突いてるけどね。大方しほさんがみほさんが今回の試合で負けるようなことがあればみほと勘当……西住家から縁を切られるなんて話じゃないんですか？」

「……」

「沈黙は肯定と捉えますよ」

俺が静かに目を細めそう言うのと菊代さんは軽くため息をつき

「はあ……お姉さまに似て勘が鋭いのですね……そうですね。本来はみほお嬢様に先に言うべきですが。お答えします。ええそうです」

やはりか……みほが戦車道を始めてから……戦車倉庫で一年前のあのことを話したときから最悪なことを予想していた。だが、本当に実行するとは……

「みほお嬢様の大洗での活躍。既に奥様もご存じです。それで今回の

準決勝で負ければ西住流から勘当されます」

「それはもうみほに西住流の看板を背負わず自由に戦車道をやれという解釈でいいんですか?」

「え?」

「俺も伊達にしほさんのこと知らないわけじゃない。あの人が不器用な愛情を持つ人だということだね。大方他の古参の西住流がうるさいんだろ?みほのやり方は西住流とはかけ離れた向こうから見れば邪道なやり方。だからしほさんはみほが負ければ、流派から勘当し西住流の古い思想の連中から遠ざけ自由にやらせてあげたい。まあ彼女が勝ち続け、西住流の総本山ともいうべき黒森峰を倒せば、みほのやり方を認めさせることができる。文句を言わせなくすることができる……違いますか?」

俺は真剣な目でそう言う。しほさんは厳しく怖い表情をしているがまほ姉同様冷徹な人じゃない。人よりも何倍も情のある人であり優しい人だ。

ただ少しその表現が不器用なだけだ

俺の言葉に菊代さんは一瞬唾然とするが、すぐに笑って

「本当にあなたっていう子は、頭が切れやすい子ね……奥様が本当にそう思っているかはわかりませんが、実は少なくとも私もそう思っています。あの人はあなたのお母さん同様、学生のころから不器用でしたから」

と、ふふと笑うと、やがて真剣な顔をする

「さて、みほお嬢様の件はそれくらいにして。次から本題に入りますよう」

「本題?」

「はい。実はみほお嬢様に勘当のことを言うのはついでです。本当は義弘……あなたに言うことがあるのよ」

「俺に言うこと?」

「私が何も知らないと思っているの義弘。ロスマン先輩からすでに聞いてますよ。あなたの体のことを……肺血病についての……」

俺が黙って菊代さんを見ると菊代さんは

「義弘。これはロスマン先輩からの伝言でもあり、そして私はあなたの叔母としてあなたに忠告するわ。戦車道から身を引きなさい。これ以上戦えば本当に死んでしまうわ」

「.....」

いつもの笑みはなくなった真剣な表情で俺に言う菊代叔母さん。そして外は少しだけ雪が降るのが強くなってきているのであった

## 呪われた流派

突如現れた、西住流の女中さんであり義弘の叔母である菊代が。彼に戦車道をするなど警告する

「あなたの容体はここに来た時、永琳先生から聞きました。あなたはそれを拒否したみたいですけどね」

「……」

俺が何も言えないと、みほの部屋から足音が遠くからも聞こえた。それを聞いた菊代が

「話は後で話しましょう。それで義弘。あなたの部屋はどちらに？」

「みほの隣です」

「だったら今日はなおさら、余計な気遣いはしないでみほ様の部屋で食事をしなさい。あなただけ一人寂しく食べるんなって私は心配です」

「別に気づかいだなんて……それに俺は一人で食事くらい作れるよ」

「拒否権はありませんよ。それに私の作る料理。甥っ子にも食べてもraithたいからね。それとも私の料理は嫌いですか？」

「いいや。嫌いじゃないよ」

「なら構いませんね？」

「……」

やっぱ。俺この人には勝てない。しほさんやロスマン先生並みに怖いよこの人は……」

「後半あたり、口に出てますよ義弘」

「っ!？」

怖い笑みでそう言う叔母さんに俺はびくつとしてしまうと

「き、菊代さん、もう大丈夫だよ」

そんな話をしているとみほが階段からひよこつと顔を出した、どうやら証拠隠滅も終わったらしい、もう菊代さんにはバレバレだけど。

「それで……義君は本当に食べていけないの？」

と、そう言い俺はちらつと菊代叔母さんの顔を見るといつもの笑顔だが影が差して怖い。これはもうさつきみたいに拒否できないな

「そうだな・・・せつかくだしやつぱ食べてこうかな」

と、俺がそう言うときみほは物凄い嬉しそうな顔をした。何この笑顔目の前に天使がいるんだけど・・・

そして俺と菊代叔母さんはみほの部屋に連れていかれ。そして菊代叔母さんの作った料理をみほと二人で食べた。

料理はすごく美味しく、そして食事の最中みほは菊代さんとの思い出話をしていた。そして時は経ち俺と菊代叔母さんはみほの部屋を後にし、そして場所を俺の部屋へと変えた

「.....」

「そっけない部屋で済みませんけど。今お茶入れます」

「いいわよ。そんなに気を使わなくても。それにしても部屋の掃除はきちんとしているのね。てっきり散らかっていると思ったわ」

「祖父の言いつけでね」

そう言いながら俺は、急須にお茶の葉を入れる。お茶葉は以前ダーズリンからもらったものだ。

「どうぞ.....て、何をきよろきよろしているんですか？」

カップを叔母さんの前に置くと叔母さんはきよろきよろとあたりを見ていた

「いや。あなたのことだからエロ本とかそういう系の本とかおいているのかと思っただけ」

「何を言っているんですか彼方は？」

「いいのよ隠さなくても。男の子なんだし。叔母さん秘密にしてあげるわ」

「ないですよそんなの。菊代叔母さん。ふざけてないで本題に入りましょうよ」

「そうね.....そうだったわね」

と、素晴らしい紅茶を一口飲むと

「それで義弘。あなたのことは永琳先生から聞いたけど、本当にやめるつもりはないの？」

「中途半端は嫌いな主義なんでね」

「それが死ぬことになってもですか？」

「……………」

いつもにこやかなのとは違い怖いぐらいの真剣な表情で俺に言う。  
そして俺は

「俺の病はもう誰も治すことができない。遅くとも来年の春には終わりを迎える。それだったら何もしないでじっと死を待ち苦しむくらいだったら、好きなことをやって死んだ方がまだましですよ」

「……………」

そう言う俺に菊代叔母さんは黙ると

「あなたは武藤と名乗っていますですがやはり中身は高杉流の……翔子姉さんの子ね……高杉流。かつて流派殺しと呼ばれ恐れられた影の戦車道流派にして西住流や島田流の天敵と呼ばれ恐れられた流派。そしてその流派の受け継ぐ者は皆、謎の病で死んでいった。生まれてすぐに縁を切られ養子に出された私を除いて皆死んでいったわ」

「……………」なぜ、そんな病にかかるんでしょうね……………一種の呪いみたいだな」

「ある意味間違っていないと思うわ。高杉流はさつきも言ったように数々の戦車道流派を潰し滅ぼしてきた流派。それこそ西住流や島田流が恐れたほどにね。だがそれは恨みを生み出す結果となった。私も昔、姉さん……………あなたのお母さんから聞いた話だわ。戦時中に高杉流の当主がある流派を滅ぼしたわ……………だけどその時その流派の当主だった女性がそのことを恨み、そして高杉流に対し恨みを吐き続け最終的には自殺したそうよ。それ以来よ高杉流の物が次々と変死を遂げたり休止したりし始めたのが。そしてその死因はすべて肺からの病気だということ。そうそれが肺血病よ」

「……………」

「そのせいもあって、高杉流を受け継ぐ者は少なくなってしまう残ったのは高杉流の本家だけだったわ。そして高杉流の当主であったあなたのお母さんも肺血病でなくなったわ。次期当主になるはずのあなたを残してね……………」

「……………」

俺は黙って叔母さんの話を聞いていた。何か話しても変わらない



ことは知っていたからだ

「私は何としてでもあなたを助けたかった。それは姉さんと友人だったみほ様のお母さま……奥様も同じだったわ。そのためあなたを西住家の婿養子として高杉流から縁を切り貴女を助けようと思ったわ。そしてあなたは仲が良かったみほお嬢様と婚約関係になった……でもあなたは三年前にその婚約の話を破棄した」

「ああ、俺はみほの人生を縛りたくはなかったから。それにその頃には肺血病の症状が出ていた。仮にみほと婚約しても長くはないことをあの時悟っていたのかもしれないな……」

「……あなたはそれでよかったの義弘」

「どっちにしても死ぬ身です。もし付き合って途中で俺が死ねばみほはきつと自分を責めるでしょ。きつと「出会わなければよかった」、「自分のせいで俺は死んだ」とあいつは……いろいろと自分一人で抱え込もうとするから。最近はそうではなくなってきましたけど」

「……そう。それで義弘。あなたは……」

そう、菊代叔母さんが言いかけた時……

「ゴホっ!!ゴホっ!!ゴホっ!!」

「っ!」

急に肺が苦しみだし俺は右手で肺を抑え左手で口をふさぎ倒れる。それを見た菊代叔母さんは慌てて駆け寄り

「義弘!義弘しっかり!?大丈夫!」

顔を青ざめそう言う菊代叔母さん。そして彼女は見てしまった。彼が口を覆っていた左手から赤黒い血がしたり落ち地面に小さな血だまりができていたことを

「義弘……あなたそこまで」

悲しそうに言う彼女に俺は胸ポケットから薬を取り出し飲むと

「大丈夫……大丈夫です叔母さん……今薬飲みましたので……じきに収まります」

そう言い荒い息をしながら俺は椅子に座ると菊代叔母さんは今にも泣きだしそうな顔をしていた。本当に俺のことを心配してくれるんだな……いい叔母さんだ

「義弘……もう、いい加減にやめなさい。これ以上は本当に死んでしまうわ」

「今俺が抜けたら、大洗チームはどうなるんだよ。みほだけに背負わせる気かよ?」

「気持ちにはわかるわ。でもさつきも見たように今は自分の体を優先するべきよ。戦車道をするには死につながる。今のあなたの体は普通の人とは違うのよ!本当に……本当にこのままじゃ死んじゃうわ。私はもう自分の家族を失うのなんて見たくないのよ!」

俺のことを心配してそう言う菊代叔母さん。だが俺は

「今はまだやめるわけにはいかない……今、大洗に大変なことが起きそうな気がするんだ……このまま放つてはおけないし、途中で抜け出すことなんて絶対にできない」

菊代は義弘に対し、もう何を言っても彼は引き下がらないことを悟った。無理にでも彼を止めたい。けど彼は絶対に引き下がらないだろう。この手の戦車乗りはいくらでもいる。彼もその一人、決意や我を通すのが強いのだ。そのため師でも親でも絶対に彼を止めることはできない

「(やつぱり、この子も姉さんのように……)」

と彼女は悲しい顔をする。そして

「義弘……あなたの話は分かりました。あなたがそこまで言うのであれば、もう私から言うことはもうありません義弘……」

そう言いながらも悲しい顔をする菊代

「さて、そろそろ遅いので私はこれで失礼するわ……」

「送ろうか。菊代叔母さん?」

「いいえ。へりを待たせているので、それにあなたは少しでも体を休めて体力を温存させなさい」

「菊代叔母さん……」

「私はまだあなたが戦車道をすることは反対です。でもあなたのことですから。止めてもやるのでしょ?」

と、そう言うと彼は頷き

「じゃあ、せめてあなたの得意戦法である接近戦や格闘戦は避けなさい。やるなら後方の狙撃にしようときなさい……これが今あなたに言える忠告よ」

「ありがとう……菊代叔母さん」

「そう言い菊代は玄関口まで行く」と

「最後に一つ訊いてもいいかしら義弘」

「何ですか？」

と、そう言うとき彼女が彼に振り向き

「あなたは今もみほお嬢様のことを想っているんですか？」

「そう言うとき義弘は少し考えそしてこう言った」

「……永遠とわに」

「そう……それを聞いて安心したわ」

「そう言い彼女は家を出るのであった。」

「……」

菊代叔母さんが帰った後、俺は椅子に座っていた。すると一本の電話が鳴った。俺はそれに出る

「……もしもし？」

『ああ、義弘。俺だ赤目だ』

「ああ、赤目か。どうした？それに例の物は？」

『ああ、例の物はすまない。何せドイツにしかない貴重品だから手間がかかっている。多分準決勝後には届くと思う』

「そうか、じゃあなおさら勝たないと……で要件はそれだけか？」

『ああ、そうだった。実はな。送り先であるお前の学校調べたんだけどな……』

「……っ!?!」

俺は赤目から衝撃的な事実を知ることになった。

そして何もかも分かった。なぜいつ死んでもおかしくない状態の俺が今もこうして生きている理由を……俺がやるべき使命が何なのかも……

## 準決勝前の家元たち

菊代が弘樹に会いに行っているのと同じころ、島田流の家では

「お母様……ちよつと良い？」

「ん？……あら、愛里寿。どうしたの？」

、それなりの広さを持つ敷地に建つ家の一室に座っていた千代を、愛里寿が訪ねていた。

義弘から譲り受けたボコのぬいぐるみを、大事そうに抱いたまま部屋に入ってきた愛里寿は、千代の向かいに座って言った。

「大洗の試合、見に行きたいの」

「えっ？」

愛里寿からの頼みに、千代は呆気に取られたような返事を返した。

「急にどうしたの？前なんて興味無さげだったのに、今になって行きたいだなんて……」

「……………」

「もしかして会いに行きたいの？武藤義弘君に？」

義弘に会いたいのか訊くと愛里寿は小さく頷く

「うん……義弘お兄ちゃんにちゃんとお礼言えてなかったから……」

「そう……でも準決勝はとても寒いところよ？着れる限りの防寒着を着ても、寒いかもしれないわ」

千代はそう言うが、愛里寿は気にしないとばかりに首を横に振った。

「大丈夫……お兄ちゃんのためだから……………」

「そう、余程彼に懐いているのね……………まあ良いわ。なら、それまでに準備しておくのよ？」

「うん……ッ！」

そう言つて、愛里寿は満面の笑みを浮かべて立ち上がると、相変わらずボコのぬいぐるみを抱き締めたまま部屋を出ていった。

それを見届けた千代はスマホを取り出し、次の大洗の対戦相手や試合会場を調べ始める。

「プラウダ高校……去年の優勝校が相手なのね……それもそうだけど、あの愛里寿があんなにも懐くなんて、彼は一体、どんな魔法を使っただのかしらねえ……いえ。あの翔子さんの息子だものね……あの人もいろんな人に慕われていたから」

と首を小さく左右に振る。千代は義弘の母、高杉翔子のことを知っていた。学生時代に翔子に戦車道の試合で何度もコテンパンにされたという苦い思い出がある。

だが、西住しほと同時に戦車道を志す友人と言ってもいい間柄でもなかった。

そしてかくいう千代も愛里寿が義弘に懐くのと同時に千代もかつては翔子のことを心から崇拜し尊敬の念を持っていた。

そして愛里寿もまた過去の自分のように、彼のことを想い。家に居る時は、義弘から譲り受けたボコのぬいぐるみを四六時中抱いており、寝る時もそれを抱いて寝ていると言う。

大学の同級生(?)からも、『時々『義弘お兄ちゃんがどーだこーだ』と言ってる』とさえ言われる始末。

義弘の事について話す愛里寿は、何時もの無表情から一転して楽しそうにしていたらしく、ふざけた1人が、試しに『義弘が好きなのか』と聞いてみたところ、少し顔を赤くしながらも、あっさりと頷いたらしい。

愛里寿曰く、『義弘お兄ちゃんの傍に居ると、安心する』だそうだ。

因みに、それを聞いた彼女の同級生の内の3人は相当なショックを受けたらしく、機会があったら義弘を捕まえて、彼女との関係について詳しく問い詰める計画を立て始めたらしい。

「はあ……血は受け継ぐということね。母親と同じ人たらし……しかも自覚がないから厄介……か。でも愛里寿が懐いているんだし、あの子のお婿さんになってもいいかもしれないわね。前に西住流にとられそうになっただけ、今はその話は無しになって今はフリーみたいだし。それにあのことはちゃんとお話しできなかったから丁度いいわ」

千代はそう言いながら、テーブルに置かれたコーヒーを口に含む。

するとぴくつと動きが止まり

「あれ？ちよつと待つて？今あの子は確かロスマン先輩の弟子であり養子だったわよね……」

そう言い若干顔を青ざめる千代。

「愛里寿のお見合いをする前に、まずあの人を説得して認めてくれる方法探さないといけないわね……」

若干震えながら、ため息交じりでそう言う千代だった

そして同じころ、西住流師範であり西住まほ、みほの母である西住しほは、ファミレスである人物とあっていた

「こうして会うのは三年ぶりになるかしらね？」

「お久しぶりです。エディータ・ロスマン先輩」

中学生と見えるほどの若い銀髪の外国人の女性が、しほににっこりと笑いそう言うとしほの方は顔色変えずにお辞儀をし挨拶をする

しほが挨拶した相手はエディータ・ロスマン。戦車乗りであり、ヨーロッパ戦車道協会会長であり、理事長を務め、それ以前は戦車道教官として活躍。その教官時代では数々の優秀な生徒を生み出し、彼女の指導を受けた生徒は少なからず大きな戦果を残していると言われるほどの優秀な腕であり全世界からも注目されている。

そして西住しほの学校の一つ上の先輩でもあり、彼女に指導したこともある人である

そして義弘の養母であり戦車道の師匠でもある

「そう硬くならなくてもいいのよ？」

「いえ、これがいつもの私です先輩」

「そうかしら？高校生の時のあなたはそうじゃなかったけど？」

「私も大人になったということですよ」

「そう・・・時間が過ぎるのは早い物ね」

と、懐かしそうにそう言うロスマンは注文したコーヒーを飲む。

「それで先輩・・・わざわざドイツから日本に来た目的は・・・」

「決まっているでしょ？あのバカ弟子を連れ戻しに来たのよ」

「日本に帰国を許したのは先輩でしょ？」

「ええ、戦車道をしないという条件付きでね」

そう言いコーヒーカップを置くロスマン

「しほ・・・あなたは知っているはずよ。あの子の病気のこと・・・  
そしてなぜあの子がドイツに行ったのも・・・」

「はい。知っています。てっきりもう治ったのかと・・・」

「治るところか悪化の一途をたどっているわ。あのバカ弟子は」

少し不機嫌そうに言うロスマンにしほは

「先輩。どうにかならない者ですか？」

「あればっかりはどうしようもできないわ・・・だからあの子を連れ戻しに来たのよ。それよりも他の人よりもまずは自分のことを心配しなさい、しほ」

「え？」

「私が知らないと思っているの？去年の決勝についてよ。ドイツでも放送されていたわよ。それに菊代から聞いたわよ。あれ以来みほさんと仲がわるくなっただって・・・」

「・・・」

彼女に言われてしほは黙ってしまう。そしてしほは

「先輩だったらあの子の行動をどう見ますか？」

「そうね・・・西住流としては不合格・・・でも人としてなら合格。80点ってところね」

「残りの20点は？」

「一人で濁流に行ったことよ。みほさんの行為は褒められる行為...だけれど下手をすれば自分の流されて命を落とす危険があった。それで減点よ」

「・・・」

「それで・・・叱ったの？」



「・・・はい」

「それは流派の師範として？それとも母親として？」

「そ、それは・・・」

「あなたの表情を見る限り前者としてね・・・ちゃんと自分の気持ちを伝えないと娘には伝わらないわよ。しほ」

「分かっています・・・わかつてはいるんですけど」

「そう言い下を向き悔しそうに言うしほにロスマンは」

「あなたはそう言うところが不器用ね。素直に言えばいいのに・・・それにあなたみほさんを勘当するって言っていたらしいじゃない。それって西住流と縁を切ることであなたは自由にあなたの戦車道をしなさいってという意味でしょ？もう少し他にやり方とかないわけ？それじゃあすつかりあなたは悪者よ？」

「そう言いコーヒーを再び飲むロスマン」

「先輩は何でもお見通しですね・・・」

「伊達に長くは生きていないからね」

「先輩・・・ですが私にはそんな勇氣はありません・・・それに私は西住流の者です。ああでも言わなければ・・・」

「他の親族のメンツが立たない・・・なるほどだからあの子を大洗に移したわけね。他の親族から遠ざけるために・・・あの子を守るために」

「そ、それは・・・」

凶星だった。しほはあの一件以来、他の西住流親族がみほにきつい目線をしていることに気が付いていた。みほの行動は、西住流に反する行為だが人道的なことをしたことは変わりなく。しほは褒めたかったが家元である以上はみほを叱責した。ただそれは勝利を放棄したことだけではない。下手をすれば自分も濁流にのまれ命を失うかもしれない危険性を娘を心配する母親として伝えたかったのだが、みほには家元としての言葉しか伝わらなかった。そして彼女が天候をすると決めた時に表上は夫である常夫が手続したこととして大洗に転向させ学費や生活費も少なからずしほも出していた。ただしお金は夫が全部出したことにして

「隠さなくてもいいのよ。それにしても義弘も大洗にいるなんてこれも何かの縁なのかしらね？」

「何が言いたいのですか？」

「あら？あなたも短期転校ながら大洗にいたじゃない。西住流という重い看板を背負いたくない一心で……少しでも戦車道から逃げたいと思ったあなたが逃げ込んだあの学校に。あの時のあなたは今のみほさんと全く同じだったわね。初めて会った時もあわあわおどおどしてて、内気で人見知りで本当にかわいらしかったわ」

「そ……そうでしたっけ？き、記憶にないのですが……」

ロスマンの言葉にしほの顔は若干ひきつる

「そう？じゃあもっと思いついてあげてあげて。そうね……確かあなたあの時、よそ見していると電柱にぶつかったり、机から落としたものを拾おうとしてモノが机やら引き出しやらからばらばら落としたり……あ、そうそう。そういえば、一人でこっそりリスを捕まえて『あら、可愛いでちゅね〜』とか言っていたり……それと……もういい……もういいですからこれ以上、私の黒歴史を掘り返さないでください」

顔を赤くし、すごく困った顔で慌てて言うしほにロスマンは

「でも……そんなあなたでもいい友達に巡り合え再びその子たちと一緒に戦車道を始めた。最初に友人になったのは理髪店の好子ちゃんだったわね？その次に同じ戦車道を志す翔子さん。それに華道のお嬢様でいつもと違う花を生けたいと言っていた百合ちゃんに、成績優秀だったけどよく寝坊をしていた朝子ちゃん……」

「はい……とても懐かしいです」

そう言い二人は懐かしそうな表情をする

「それで？その子たちとは今でも会っているの？」

と、訊くとしほは首を横に振り

「私が黒森峰に帰ってからは……一度も……最後に話したのは亡くなる前の翔子とでした……」

「会いにくいの？」

「はい……あんな別れ方をしてしまったので……」

「一度でいいから、もう一度会って話しなさい。向こうもきつとそう思っているわ。しほ。これは大洗時にいた先輩からの忠告ですよ」

「心得ています……」

そう言い少しだけ静かになる二人。そしてロスマンが

「それで……見に行くの？試合に？」

「はい。先輩は？」

「無論見に行くわよ。試合相手の隊長は私の教え子の一人ですし、二人がどんな成長をしたか師としてみなきやいけないし、それに義弘が本当に危ない状態なら本気で連れて帰るつもりだからね」

ロスマンはそう言っ、その話を切り上げるのだった。

そして店の中では二人の声はなく。ただ音楽だけが鳴り響くのであった

準決勝です！

菊代さんが訪ねてから2日経ち、遂に迎えた、大洗女子学園戦車道チームvsプラウダ高校戦車道チームとで行われる、第63回戦車道全国大会準決勝当日。

此処は、その準決勝の試合会場。北緯50度を越えた、雪の降る夜の雪原地帯。

「ふう……さすがは北の地。寒いな……」

白い息を吐きながら義弘はそう言う。日が昇らない夜の試合会場。そのため気温も昼に比べてとても寒い

「祖国ロシアに比べれば、まだ温かい方ですよ武藤さん」

「まじか……ロシアはそんなに寒いのかよ」

隣でキツツキさんチームのリーダーであるエレナがそう言う。してみほたちの方かというと……

「寒ウツ!?マジで寒いんだけど!」

「北緯50度を越えてますからね……」

あまりにも試合会場が寒いからか、沙織がガタガタと震えながら言い、華も若干寒そうにしながら言う。

まあ、いつものパンツァージャケットじゃ寒いのも無理はない。というより下手したら風邪を引きそうだ

だが、寒さに関係なく一年生たちは雪合戦をし、歴女の皆さんは何か雪像を作っている

そんな時、大洗チームの待機場所に、1台の車両——自走式多連装ロケット砲《カチューシャ》——が近づいてきた。

金属音を混ぜたブレーキ音と共にカチューシャは停車すると、両方のドアが開き、其所から2人のプラウダ高校の生徒が降りてくると、そのまま大洗チームの元へと歩みを進める。

「あれは、プラウダ高校の隊長と副隊長……」

『地吹雪のカチューシャ』と、『ブリザードのノンナ』ですわね!」

近づいてくる2人を見て、みほと優花里がそう言い合う。

そんな2人の会話を他所に、カチューシャとノンナは大洗チームの

少し前で歩みを止める。

そして、カチューシャは大洗の戦車を一通り見回した。そして……  
「ぷっ、あっはっははははははははは!!」

と、大きな声で笑いだし

「このカチューシャを笑わせるために、こんな戦車用意したのよね！  
ねえ！」

明らかに大洗をバカにした発言をするカチューシャに、大洗のメン  
バーは表情をしかめる。

だがその場に義弘は彼女の態度が分かっていた。安い挑発だとい  
うことに、わざと相手を怒らせるようなことをいい挑発し相手が冷静  
な判断をできないようにする。まあ、たいていのベテラン校はその手  
には乗らないが

戦車道を始めたばかり、しかも勝ち続けの相手には有効だろう

「やあやあ、カチューシャ。私は大洗学園生徒会長、角谷だ。今日はお  
手柔らかにね」

まるで気にしていないように、何時も通りの様子で出てきた角谷が  
自己紹介しながら、若干屈んで握手を求める。

「……………」

だが、当のカチューシャは不満げに杏の手を睨み、暫くすると  
……………」

「ノンナ！」

いきなりノンナを呼びつける。すると、ノンナはカチューシャが何  
を求めたのかを悟り、カチューシャを肩車した。

「へっ?」

流石に驚いたのか、角谷達は間の抜けた声を出す。

「貴方達はね、全てがカチューシャより下なのよ！戦車も技術も身長  
もね！」

ノンナに肩車されたカチューシャは胸の前で腕を組み、見下したよ  
うな声を上げた。

「……………」

「肩車してるじゃないか……………」

その様子に角谷は言葉を失い、河嶋はボソボソと突っ込みを入れる  
「聞こえたわよ！よくもカチューシヤを侮辱したわね！しょくせいし  
てやる!!」

「それを言うなら粛清だ。チビ」

「そうだ！言葉は正しく使えよバカヤロ」

と、樋口と天野がそう突っ込むとカチューシヤは顔を真っ赤にし  
「う、うるさいわね！それにチビ言うな!!」

と顔を真っ赤にしてそう言うカチューシヤ

「(逆に挑発されてどうするんだよカチユ姉……)」

様子を見ていた義弘があきれ顔で見ていると、カチューシヤはみほ  
に気づく

「あら？あなた西住流の……そう。あなたがヨシーシヤのね……」  
「え？」

カチューシヤはみほをじつとどこか睨むような目で見る。その目  
にみほは少し驚くが

「まあ、いいわ。それよりも……ヨシーシヤはどこにいるかしら？」

「ヨシーシヤ？……武藤君のこと？」

「そうよ。どこに……」  
「どこにいるぞ」

カチューシヤが義弘がどこにいるか角谷に尋ねると義弘が前に出  
る

「あら、ヨシーシヤ。久しぶりね」

「別れてから数日だけでしょ？」

「何よ。せっかく私が話しかけているのに冷たいわね……それよ  
りヨシーシヤ。顔色さらに悪くなっていない？」

「気のせいだよ」

「そうかしら。もしかして……」

そう言うときカチューシヤは再びみほの顔を見てまたもにらむよう  
な目をする

「みほがどうかしたのか？」

「なんでもないわよ。まあいいわ。試合前にあんたの顔も見れたこと

だしね。じゃ〜ね〜、ピロシキー」

「ダスヴィダーニャ」

そう言い二人は去っていった。そして二人が去った後

「え？何？武藤。あの人と知り合い？」

武部がそう訊くと

「ああ、俺の姉だ」

「え!?カチューシャ殿って武藤殿のお姉さんだったんですか!？」

「それにしても全然似てないな？」

義弘の言葉に秋山が驚き、冷泉は似ていないというと

「正確には姉弟子だ。みほ。お前ロスマン先生は覚えているだろ？」

「う、うん・・・」

ロスマン先生という言葉にみほは若干震えてそう言う。まあ先生の指導は結構厳しいからな。俺もみほや黒森峰のみんなもそしてカチュー姉もめちやくちやスパルタされたから、思い出しただけで震えるのは無理もない

「その時の先生の弟子であり俺の先輩だ。だから姉弟子になるってわけだ」

「そう。ロスマン先生の・・・」

そう言うみほ。カチューシャがロスマン先生の弟子と知り、さらに油断はできないと思ったのだろう。

「さてと。取りあえずは作戦会議でもしよつか？」

「う、うん」

そうして、試合に向けての作戦会議が始まるのであった

一方、プラウダ陣営では……………

「それで、よかつたのですかカチユーシヤ？」

「何がノンナ？」

陣営に戻った後、ノンナはカチユ者に尋ねた

「西住流であるみほさんや大洗の選手を挑発するために去年の試合のことを引き出さなくて」

「ああ、それね。やっぱりやめにしたわ」

「なぜですか？」

ノンナがそう訊くとカチユーシヤはそっぽを向き

「ヨシーシヤに嫌われたく……………ないから。もし下手なこと言つてヨシーシヤに嫌われたらいやだったからよ」

子供っぽく頬を膨らませてそう言うカチユーシヤにノンナは

「そうですか……………またあの男が……………忌々しい人です」

「ノンナ。なんか言つた？」

「なんでもありません」

「(やっぱり始末しますか？あの男を?)」

そんな二人の様子を見たクララーが声をかけてくる、もちろんロシア語である。

「(ええ。ですが仮にも相手はあの黒狼です。そう簡単には倒せないでしょう。もしやるなら試合が終わつた後にじっくりと。そしてカチユーシヤにばれないように……………)」

「(そうですか……………でもこちらには猛獣殺しのスターリンがいます。そして何よりノンナ。あなたというハンターがいます)」

「(わかつています。必ずや仕留めて見せます豹の皮をかぶつた狼をこの手で……………ところでクララー。あなたさつき大洗の選手名簿を見ていましたが何か気になることでも?)」

「(いいえ。大したことではないのですがこのBT7の車長のロシア人どこかで見たような気がして……………多分気のせいだと思うわ)」



「あなた達！ちゃんと日本語で話なさい！ノンナ、クラーラは何を言ってたの？」

「いえ、なんでもありません、単なる試合前の確認です、カチューシャ」  
「あそつーそれならいいわ」

と、そう言いカチューシャは椅子に座る。そして考え事を始める

「(西住みほ……あいつがヨシーシャの……それにヨシーシャのあのやつれ様……まさかあいつに酷いいじめみたいなことされているのかしら？でもその割には仲かがよさそうだけど……まあ、いいわ。この試合であの西住流の子がヨシーシャにふさわしい人物か私がこの手で見極めてやるわ。)」

そう言い、いつもの子供っぽい表情からまるで氷のような鋭い視線に変わるのであった

## 準決勝の暗雲です

カチューシャが大洗の試合の前のあいさつを終えかえった後、さっそく大洗チームは作戦会議を始めた

「兎に角、相手の部隊規模や戦術に吞まれないよう、落ち着いて行動するようにしてください」

集まったメンバーの前で、真面目な面持ちのみほが作戦を伝える。

「プラウダは引いてから反撃すると言う戦法を得意としていますので、仮に此方が有利になる時があっても、そこでさらに踏み込むなどの行動は控えるようにしてください。フラッグ車を守りつつゆっくり前進して、先ずは相手の出方を見る事から始めましょう」

と、みほが提案するが

「それもいいが、ここはゆっくり進むのも確かに良いとは思いますが、此処は一気に攻めると言うのは如何だろうか？」

「えっ？」

エルヴィンがみほの考えた作戦とは全くもって対をなす発言に、みほは戸惑いを見せる。

「うむ」

「妙案だな」

「先手必勝ぜよ」

そんな中で、おりよう、左衛門佐、カエサルの3人がエルヴィンの案に賛同する声を上げる。

「ですがリスクが大きいですね」

プラウダの戦法を知っているみほがそう言うのだが、

「そんなの大丈夫ですよ！」

「私もそう思います！」

「こう言うのは勢いが大事です！」

「此処は是非、我々のクイックアタックで！」

みほの言葉を遮り、アヒルさんチームのメンバーが声を上げる

「ですが西住隊長の言葉にも一理あると思います。しかも相手は雪上戦に強いチームです。わざわざ危険を冒してまで」

黒狼チーム操縦手の服部が不安げに言うときツツキさんチームもエレーナも

「私も同じです。迂闊に踏み込んであつさりと撃破されてしまいます」

「そう言うのだが……」

「そんなの大丈夫ですってば！」

「それに私達だって、曲りなりにも準決勝までやって来られたんですし、このまま行けます！」

「うんうん！負ける気しません！」

「それに敵は、私達の事を完全にナメてましたし」

「一気に攻め込んで、ギャフンと言わせてやりましょうよ！」

紗季を除くウサギさんチームからも、そんな声上がる。丸山紗希の方はどこことなく不安そうな顔をする

「確かに勢いも大事だし、試合が長引けば相手が有利になるだけですからね……」

「ああ、私も同感だな」

「こりや、一気にやる以外に無いねえ」

おまけに、生徒会メンバーの3人も彼女等の意見に賛同しており、現在、みほの考えた作戦に賛同しているのは黒狼チームときツツキさんチーム。

「……………分かりました、一気に攻めましょう」

『『『ええっ!?!』』』』

そんな時、みほが作戦を変え、エルヴィンが提案した作戦へと変更し、それを聞いたあんこうチームらが驚いた

「みほ。大丈夫なの？。慎重に行く作戦じゃなかったの？」

「武部さんの言う通りよ。それで本当にいいのみほ？」

武部と篠原がそう言うときみほは答えを変えなかった。

「小山先輩の言う通り、この戦いが長引けば、雪上での試合に慣れてる相手側の方が有利になる……………それに、皆がこんなにも勢い付いてるんだし……………」

「それもそうだけどね……あなたはそれでいいの？」



れを学ぶのも勉強だ……ゴホッ！ゴホッ！」

義弘がそう言うのと急に義弘は咳をし始める

「ね、ねえ義弘。あんた本当に大丈夫なの？ やっぱりどこか悪いんじゃない……」

道子が心配そうにそう言うのと義弘は

「だ、大丈夫さ。いや〜さすがは雪の試合会場。本当に寒い。肺まで凍りそうだよ。さて早くパンターの中に入ろうか。このままじゃ彫刻みたいに凍ってしまう」

何やら誤魔化すみたいに笑いパンターによじ登る義弘

「……」

その義弘に道子は疑うようなまなざしをするのであった

その頃、観客席近くの小高い丘の上では……………

「この寒さに、プラウダよりも数が劣っている状態で、大洗はどうやって勝つつもりでしょうか……………」

丘の上に陣取っている聖グロリアーナの1人、オレンジペコが、エキシビジョンに映し出される大洗の様子を見て心配そうに言う。

その直ぐ横で紅茶を飲んでいたダージリンは、落ち着き払った様子で言った。

「確かに大洗は、数や練度の質ではプラウダより遥かに劣っている……でも、そんなハンデを覆してくるのが彼女等よ。それに彼女には狼がいるわ。無敗のね」

そういう紅茶を一口飲むとダージリンはモニターに映る義弘の姿を見て

「(さて…義弘さんはいったいどんな試合を見せてくれるのでしょうか？) ね？」

そう言いダージリンは微笑むのであった。

「ねえ、ミカ？こんな寒いところに見に来て意味があるの？」

「もちろん大洗の試合を見に来たんだよ、見届けにね」

ダーズリンとは別の場所で継続高校のミカとアキが試合を見ていた

「でも珍しいね？ミカが他校の試合を見に行きたいだなんて？」

「大洗にね…友達がいるんだよ。それでどんな試合を見せてくれるか興味があつてね」

「え？ミカに友達なんていたっけ？」

「…アキは私をボツチだと思つていたのかい？黒森峰の隊長じやあるまいし、私にも友達くらい入るよ…古い。古い友達がね」

アキにいたいところを突かれたのか若干ひきつった顔をするミカだったが、その心情を紛らわそうとカンテレを弾く。そしてミカは「(義弘…あなたはどうな戦いを見せてくれるのかい？いや…無事に試合を終えることを祈るよ)」

そう言いポロロ〜ンとカンテレを弾くのであつたがその音色はどことなく彼女が彼のことを心配している様な音色だった

暗闇と静寂が支配する雪原に、地響きと野太い音が響き渡る。

その雪原では、15輛の白いプラウダ校戦車が進撃していた。

T―34／85が7輛に、T―34／76が6輛、カーベ―2ことKV―2、IS―2が其々1輛ずつで編成されたプラウダ高校戦車道チームの戦車隊は、フラッグ車である1輛のT―34／76と、その後続くKV―2とIS―2を、残りのT―34／85、76で守るような形で、矢印状の隊列を組んで進撃していた。

「良い!?彼奴等にやられた車両の乗員は、全員シベリア送り25ルーブルよ!!」

「……………日の当たらない教室で、25日間の補習と言う事ですね」隣を走る同車のキューボラから上半身を乗り出したノンナが、カチューシャの言葉を要約する。

「行くわよ!敢えて相手のフラッグ車と、あのパンター戦車だけ残して、残りは皆殲滅してやる……………力の違いを見せつけてやるんだから!」

「「「Y l a p ……!!!」」」

カチューシャの言葉に、プラウダ全車両の乗員から雄叫びが上がる。

それから一行は、ロシア民謡——『カチューシャ』——を歌い出し、士気が最高潮にまで上り詰める勢いで進撃を続けるのであった。

ついに大洗とプラウダの準決勝は始まった。だが、この時、観客はおろかプラウダも大洗もそして義弘とみほもこの時は知らなかった

今この時より、死へと誘う死神の狂想曲が始まってしまったことに……………

## 雪の進軍歌

カチキューシャラプラウダが高らかに歌う中、大洗学園の方もまた進軍していた

「Ob's st·rmt oder schneit, Ob die Sonne uns lacht!!; Der Tag gl·hend hei·♪」

その進軍する戦車の中にIV号の隣を走るパンターから歌声が聞こえた

それはドイツの名行進曲であり映画バルジ大作戦で歌われた

パンツァーリートであった。

そしてその歌を歌っているのはもちろんこの男、武藤義弘であった  
パンターのキューポラから半身を出し、流暢なドイツ語で土気高らかに歌いだす

「Es braust unser Panzer!! Im Sturmwind dahin.!!♪」

黒い軍服に女性に似た中性的な顔立ち。そして軍帽から少しあふれる肩まで伸びる黒い髪が風でなびき

まるでその姿は戦女神ワルキューレのようだ

「うゝ冷える」

パンツァーリートを歌っている。義弘とは違いあんこうチームのIV号戦車の中では手袋をはめている沙織がそう呟いている

「一気に決着をつけるのは、ある意味正解かもしれませんね」

「うん……………」

華の呟きに、みほは小さく答える。

そんな時、紙コップにポットのココアを注いだ優花里が、みほにその紙コップを差し出して言った。

「ポットにココアを淹れておきました。良かったらどうぞ」

「ありがとう」



みほはそう言つて、差し出された紙コップを受け取ると、ゆっくりと口をつける。そんな中、みほは隣を走るパンターで歌を歌う義弘を見る

「どうかしたんですか西住殿？」

「え？ううん・・・義弘があんなに士気高らかに歌を歌うなんて珍しいなって・・・」

「黒森峰では歌わなかったの？」

「うん。いつもの義弘は無言なの。それに眼付も氷のように冷たくつてちよつと怖かった感じだったかな？それに・・・」

「それに・・・なに？」

「ううん・・・多分。気のせいだと思う・・・そう思いたい」

「え？」

みほの言葉に沙織は首をかしげる。そしてみほは義弘を再び見る。昔の義弘は普段は温厚で笑顔の絶やさない人間だが、戦車に乗る時はまるで拔身の刀のようにギラギラとしてそして冷静かつ戦術鬼才と言われていた。

それは大洗で再会した時も戦術については変わらなかったが、あんなにも陽気に歌を歌うことなんて一度もなかった。

そして今の義弘は何処か元氣なく、やつれているようにみほは見えた

だがみほが思ったことはそれだけじゃなかった

「（あれは・・・気のせいだったのかな？）」

先ほどみほが義弘を見た時、義弘にまるで死神のような黒い影のようなものが見えたりしているのを見た気がした。

「珍しいわね。あんたが歌を歌うだなんて、中学のあなただったら絶対にしなかったけどね」

歌を歌い終えた義弘に道子がインカムでそう訊く

「たまにはいいもんだよ。こういう大自然の中、戦車に乗って歌を歌

うのも士気向上にもなるしな」

「なんでパンツァーリートかしら？もつと他に良い歌はなかったの？」

「戦車の歌と言えばこれだろ？なんだ？ アンコウ踊りの歌か橙の幻想？音頭でも歌えばよかったか？」

「馬鹿言わないで？みんなドン引きするじゃないの。て、言うかあんな橙派だったの？」

「違う。俺はどつちかというと咲夜派だ。てか、どうでもいいだろ。そう言う道子はどうなんだよ」

「私は美鈴派よ。まあいいわ。それよりあんたがドイツ語を話せるなんて驚きだわ」

「ドイツに留学していたからな。そこで覚えた」

「なるほどね・・・それより義弘」

「なんだ？」

「あんたさつき咳もしていたし、本当に大丈夫なんだよね？顔色も悪いし」

「当たり前だ。じゃなかったら試合には出ないよ。ただ寒いのが苦手なだけだ」

「そう・・・ならいいわ。でも本当に無茶はしないでよね」

「ああ。心配してくれてありがとうな」

「仲間なんだし当たり前じゃない。それで単独偵察はしないの？」

「あの姉弟子のことだ。既に偵察を出してこちらの動きを察知しているよ。それに単独で行けばいかに足と攻撃防御の強いパンターでも雪上戦の強いやつらの思うつぼだ。囲まれてフルボッコにされるのが落ちだ。ここは相手さん自ら来るのを待つとしよう。最初は偵察車輛と見せかけて出てくるはずだからな」

「さすが、プラウダのやり方を知っているわね？」

「まあ、あの姉弟子なら最初の手はそうするだろうよ」

と義弘と道子はインカム越しでそう話していた

そんな大洗の戦車隊を、丘の上から双眼鏡越しに見つめる人影が2つ……………

『敵は全8輜、北東方面へ前進中。時速約20キロ』

それは、プラウダチームのメンバーの斥候員だった。

彼女等は稜線に伏せ、双眼鏡越しに見た大洗チームの様子をカチューシャに送っていたのだ。

「ふーん……………彼奴等、一気に決着を着けるつもりなの？それに単独偵察が好きなヨシーシャのパンターも一緒とはね…………ヨシーシャらしくはないわね？そんな博打な戦法を取るなんて…………まあ、いいわ。ノンナ！」

そんな中、1人軽食を摂っていたカチューシャは、偵察に出た2人からの報告を受け、ノンナに呼び掛ける。

「分かっています」

それに淡々とした調子で答えると、ノンナは他のチームメイト達へと視線を送る。

「Daa！」

その視線に、既にT-34/76に乗り込んで準備を済ませていた1人のメンバーが答えると、他2輜のT-34/76を引き連れ、出撃していった。

「それじゃ、私達も行動を開始するわよ。姉弟子の強さを弟分に見せつけてやるんだから」

そして軽食を食べ終えたカチューシャは残りのメンバーへと呼び掛け、彼女等の作戦を開始しようとしていた。

再び視点を移し、大洗チーム。

現在彼女等は、雪の丘を上ろうとしていた。

「服部さん。足揃われないように気を付けろよ？」

「はい。任せてください」

そう言い服部はパンターのアクセルを踏み込み、一気に丘を駆け上

る。

それに続くかのように、大洗の戦車も丘を上っていくが、そんな中で、カモさんチームのルノーb1が上手く上れず、苦戦していた。

「おい、そど子。何をしている？モタモタしている暇は無いぞ？」

それを見た桃が、みどり子のチームへと呼び掛ける。

「ゴモヨ！前に進むのよ！」

「進んでいるつもりなのよ、そど子」

上手く坂を上れず、ゴモヨは半泣きになっていた。

それを見たみほが、一旦後退するように指示を出し、b1が坂の麓へと下がる。それを見かねた冷泉がIV号を降りてb1に乗り、代わりに操縦をして助けたりもした。

「ありがとう！」

「何余計なことしているのよ！」

「……気にするな」

ゴモヨが冷泉に礼を言うがそど子は否定的に言うが冷泉は相手にせずふっと笑う。それから一行はみほの指示を受け、進撃を再開するのであった。

そして目の前に大きな雪の壁が現れると

「華さん、前の雪を榴弾で撃ってくれる？」

「分かりました」

みほの指示に華が答えると、優花里がすかさず、榴弾を装填する。

華が引き金を引くと、激しいマズルフラッシュと共に撃ち出された榴弾は、前方の雪の壁へと吸い込まれていき、一瞬、その雪の壁にめり込んだかと思えば爆発して雪の壁を粉微塵に吹き飛ばし、大洗の戦車隊が通れる程度の道が出来た。

その道から、大洗の戦車隊が進撃を続ける。

「奥様！撃ったのはお嬢ですよ！」

その様子を観客席から見ていた新三郎は興奮気味に言い、拍手を送

る。

「華を活ける手で、あんな事を………それに砲弾の無駄遣いですわ」

「え？奥様。今何と……？」

「いいえ。なんでもありませんわ」

と軽いため息をつく百合に新三郎は首をかしげる

そして他の観客席では

「さてと……二人の愛弟子……どちらも今までの教え子の中で優れた戦術の才能の持ち主だけど。どっちが勝つかしらね……」

同じく試合を見に来たカチューシャや義弘の師であるロスマンもこの試合を見に来ていた。そして空を見上げ

「これは……激しい嵐がききそうね」

と呟くのであった

## 地吹雪の罫と衝撃の告白

雪の壁を榴弾で吹き飛ばし、先へと進む一行は、景色が殆んど変わらない雪原地帯を進撃していた。

「……………ッ！敵、発見しました！」

そんな時、BT7から上半身を乗り出し、双眼鏡で前方の警戒をしていたエレーナがそう叫び、それを聞いたみほも、すかさず双眼鏡を取り出し前方を見やる。

彼女等の視線の先には、3輦のT-34／76が横1列に並んでいた。

「11時の方向に敵戦車の姿を確認、各車警戒！」

無線機に向かつてみほが叫ぶと、アヒルさんチームの八九式を守るようにして、他の戦車が展開する。

「相手は3輦だけ……………外郭防衛線かな……………？」

みほが呟いた瞬間、相手のT-34が発砲し、その砲弾が大洗の戦車の周りに着弾した。

「気づかれた！長砲身になったのを活かすのは今かも！」

みほはそう呟き、車内に引っ込む。

「華さん、左端の1輦を狙って。カバさんチームは、真ん中の1輦に攻撃してください！」

みほの指示を受け、五十鈴はスコープを覗きながら照準を合わせ、既に狙いを定めていたカバさんチームのⅢ突が砲撃を仕掛け、みほの指示通りに真ん中のT-34を撃破する。

「あんこうチームも攻撃します！」

そうしてIV号も砲撃を仕掛け、左端に居たT-34を撃破する。

「命中しました！」

「凄くいい！一気に2輦も撃破出来るなんて！」

万が一に備え、次の砲弾を取り出していた秋山が命中を告げ、武部は此方が先に、敵戦車を2輦も撃破すると言う先制点を取れた事に喜びの声を上げる。

「やった！敵の鼻を明かしてやったぞ！」

それを見ていたアヒルさんチームの磯部は、嬉しそうに言った。

「昨年度優勝校の戦車を撃破したぞ！」

「時代は我等に味方している！」

カバさんチームのエルヴィンとカエサルも、自信に満ち溢れた声を上げる。

「試合開始から、此方が先制点を取れるとは……………これは行けるかもしれない！否、絶対に行ける！」

「この勢いでG O G Oだねえ！」

カメさんチームの河嶋と角谷も歓声を上げ、自分達の優勢を確信したような表情を浮かべている。だがその反面

「んく解せぬ」

「やっぱそう思うか？なんか手ごたえが弱いなバカヤロ？」

B T 7に乗る天野と樋口は何かの違和感を感じた

「エレーナの姉貴。なんか優勝校なのに相手簡単にやられすぎじゃないっすか？なんか気味悪いですよ」

樋口がそう言うときエレーナは

「向こうもまだ本気じゃないってことですね……………」

と真剣な目でそう見て、そしてパンターの方でも

「まずいな……………このままじゃ。みんな相手の調子に乗せられている……………」

「まあ無理もないでしょう。相手は去年の全国大会での優勝校。そんな学校の戦車を、此方が先に2輜も撃破出来たんだもの。元々、戦車道初心者な彼女等からすれば、ある意味であれば、当然の反応と言った感じかしらね……………」

義弘の言葉のため息交じりに言う道子。

「ロシアのT—34を撃破出来るなんて、これは凄い事ですよ！」

秋山が興奮して言うが、みほは難しそうな表情を浮かべ、ただ黙っていた。

「……………？」

「どうしたの？」





を上げる。みほは制止を呼び掛けるが、結局はみほ達あんこうのIV号もが速度を上げていく。

「武藤さんどうします!? 私たちも追いかけますか!」

服部がそう訊くと義弘は地図を見ていた

「(この先は廃村があるな・・・なるほど釣り野伏で来るか…その廃村先に丘があるな・・・) 服部さん俺たちも追撃。ただしこの先にある丘の方に着いたら停車。いいな?」

「は、はい!!」

義弘の言葉に服部は返事をしパンターを走らせる。そして次々と現れる敵戦車を撃破し、大洗の士気はますます上がり、そして逃げ出すのを見て

「逃がすか!」

「追え追え!」

「ブリツツクリーク!」

「待てえ!」

「行け行け!」

「ぶっ潰せ!」

「ぶっ殺せ!」

「やっちまえ!」

プラウダの戦車隊が後退し始めると、先陣を切って走り出した38tを皮切りに、III突とM3リーが急発進し、プラウダの戦車隊を追い始める。

「ストレート勝ちしてやる!」

「ちよつと! 待ちなさいよ!」

それに続いて、あろうことかフラッグ車であるアヒルさんチームの八九式も走り出し、それからカモさんチームのルノーも後に続く。

「ちよ! ちよつと待つてください! ……ごめんね義君私たちも追いかけるよ」

みほも言うが、メンバーはそれすらもお構い無し。プラウダの戦車隊が逃げていった廃村へと突っ込んでいく。そしてみほもすまなさそうに言つて、みほは冷泉に指示を出してIV号を発信させ、自分達も

廃村へと向かう。

「予想はしていたけど……これはあまりにも調子に乗りすぎね」

道子が呆れた顔でそう言い、そしてそれを見た義弘は深く帽子をかぶり

「Scheisse……仕方がないとはいえこれはひどいぜ」

と小さく呟く。そして廃村が見える丘に登る直前にパンターは停車。そして追いかけているBTも

「っ！停車して!!そしてそのままバック！」

丘に登りきる直前エレーナの声に天野はブレーキをかける。BTは義弘から少し離れた場所に停車した

「どうしたんですか姉貴。追いかけないんですか？」

天野がそう言うのとエレーナはハッチを開け双眼鏡で廃村を見る。すると建物の影から白いものが見えた

「これは……そう。そう言うことね……」

「おい。なんだってんだよ姐さん！」

樋口がそう訊くとエレーナは

「下手をすれば追いかけた子たち……全滅するわ」

「え？」

一方、敵フラッグ車を追いかけて廃村へと入った洗チーム一行は、プラウダのフラッグ車への集中攻撃を仕掛けていた。

撤退していく最中、何故か単独で逃げ出したフラッグ車は、暫く廃村を逃げ回り、それからは民家の影に身を隠したり、姿を現したりして大洗チームを挑発する。

「フラッグ車さえ倒せば……」

「勝てるー！」

単独で抜け出しているため、今のプラウダのフラッグ車は孤立状態。よって、自分達の誰かがフラッグ車を撃破すれば、決勝戦進出が

決まる。

完全に自分達が優位に立っていると思いついて、大洗チーム一行は、兎に角フラッグ車を撃破しようと砲撃を続ける。

だが、それも長くは続かなかった。

みほの乗るIV号の後ろにあつた民家から、2輻のT―34／76が現れたのだ。それを丘の上で見ていた義弘が

『みほ！背後にT34!!』

「っ!？」

義弘の言葉に 反射的に、みほは後ろを向いて、現れた2輻のT―34を見て驚愕の表情を浮かべる。

「ひ、東に移動してください！急いで!!」

「ッ!?!な、何だ!?!」

突然のみほの指示に、大洗チーム一行は戸惑いを見せながらも、取り敢えずと東へ移動しようとするが、向かおうとした先にあつた民家から、今度は2輻のT―34／85が現れて行く手を遮る。

「そんな………なら、南南西に方向転換………ッ!」

東への退路が絶たれ、南南西に移動するようにと指示を出そうとしたが、今度は地下への通路か塹壕らしき所から、白いIS―2が飛び出してくる。

そうして、みほは他方向への退路を探そうと辺りを見回したものの、向かおうとした先々で、KV―2や他のT―34／76や85の集団が待ち構えており、大洗チーム一行は、プラウダの戦車隊に取り囲まれる結果となった。

「やつぱり、やられたと思つて後退し、追いかけた相手をキルゾーンに誘い込む………狡猾くてあっぱれな戦術家だよ。カチュ姉は」

双眼鏡で見ていた義弘がそう呟く。そう先ほど簡単にやられていたのはすべて敵をここにおびき寄せるための作戦であり敵を包囲して叩くのがプラウダの得意戦法なのだ

そして同じくBT7の方でも

「うわゝ囲まれてるな……行かなくてよかった」

「姉貴はこのことを知っていたんですか？」

「ロシアの戦車を持っているプラウダなら戦法もそうじゃないかと思っただけよ……」

と苦笑いしながらそう言うエレーナもまた様子を見ていた

「囲まれてる………ッ！」

「周りに居るの、全部敵だよ！」

みほが周囲を見回しながら呟くと、沙織が声を張り上げる。

「罨だったのか………」

「ええっ!？」

「そんなんっ！」

此処で漸く、自分達がプラウダの罨に掛かった事と知ると共に先ほどまでのプラウダのやり方は演技だと知る。そして次の瞬間

プラウダから激しい十字砲火が飛んでくる

絶え間無く飛んでくる砲弾は、大洗の戦車の周囲や民家に次々と着弾し、家を吹き飛ばしたり、雪の飛沫を上げたりする。

そんな中で、1発の砲弾がウサギさんチームのM3の主砲に命中し、主砲を木っ端微塵に吹き飛ばした。

『しゅ、主砲が壊されました!』

澤からの悲鳴が上がると、みほは車内のスコープから、一際目立つ教会のような建物を見つける。

「全車両、南西の大きな建物に移動してください!彼処に立て籠ります!アヒルさんチームの戦車から先に向かってください!」

その指示を受け、八九式、M3、ルノー、38tが一目散に教会へと向かい、飛び込むようにして入っていく。

続くようにIII突も避難しようとするが、何処からともなく飛んできた砲弾が右側の履帯に命中して動きを止めてしまう。

「履帯と転輪をやられました!」

エルヴィンが声を上げる中、2輦のT-34/76が砲塔をIII突へと向け、さらに攻撃を加えようとする。

する。

手前に居たT-34が発砲するが、其所へ後退してきたIV号がIII突

を守るようにして割り込み、皿突と背中合わせになる形で接触すると、相手の砲弾を、砲塔の角度を利用して弾き、反撃とばかりに発砲し撃破する。

……しかし

「砲塔故障！」

「後退！」

五十鈴が砲塔の故障を告げるが、みほは先ず、避難の方を優先させる。麻子がIV号を後退させ、履帯を破壊されて動かなくなってしまう皿突を、無理矢理押し込むようにして教会へと入っていった。

そして大洗の車輛がBTやパンターを除いて入り込んだ瞬間、砲撃が収まった

「……………？砲撃が、止んだ……………？！」

突然の静寂を不思議に思った大洗のメンバーは、自分達の乗る戦車のハッチを開けて外に出始めた。

其処へ、プラウダの生徒と思わしき2人の少女が、何故か白旗を掲げて教会に入ってくると、入り口から少しした場所で歩みを止めた。

「カチューシャ隊長の伝令を持って参りました」

その生徒の言葉に隊長の西住みほと副隊長の河嶋が前に出る。

「降伏しなさい、その条件は全員土下座する事」

「なんだと!?…ナッツ!!」

みほは目を見開き、河嶋は悔しげに悪態をつく。

「それでもう一つ。これは大洗の隊長さんに対しての伝令です」

「わたし？」

みほがカチューシャがみほ個人に対する言葉と訊くと伝令の生徒はこういった

『武藤義弘をプラウダ高校に引き渡せ。お前に大切な弟を任せることなんて絶対にできない』……とのことです」

「っ!？」

その言葉にみほは驚くが伝令の子たちは表情を変えず

「隊長は心が広いので、3時間は待ってやると仰有っています……………では、失礼します」

そう言い終えると、2人は揃って一礼をすると、これまた揃って回れ右をして出ていった。

それを見届けたメンバーの表情は、怒りで染まりきっていた。

「誰が土下座なんか!」

「全員自分よりも身長低くしたいんだな!」

磯部と河嶋がそう言うのと

「徹底抗戦だ!」

「そうですよ、戦い抜きましよう! 私達なら、未だやれます!!」

エルヴィンと梓も言葉を続けるが、みほの表情は良くなかった。

「でも、こんなに囲まれていてはもう……それに集中砲火を受けければ、怪我人が出るかもしれないし……」

戦車道の競技に使用する戦車は特殊なカーボンによって安全には配慮されてはいるが、それも絶対ではない。

そして、それを西住みほはよく知っている。

「でも……私はみんなが戦車道を続けたい、義君と一緒に最後まで……でも」

降伏を受け入れれば少なくとも怪我人の出る可能性はなくなる、だが、そうなれば義弘は強制的にプラウダへ行くことになってしまう

もしかしたら二度と会えなくなってしまう。それだけはみほは嫌だった

だが、けが人を出してまで勝っても彼は喜ぶだろうか

みほは思い悩んだ。すると……

「降伏なんかあり得ない! 勝つんだ!! 絶対に勝つんだ!!」

と河嶋が大声で怒鳴った

「で、ですが……」

「勝つんだ、絶対に勝つんだ! 勝たないと駄目なんだ!! 我々にはもう勝つ以外の選択肢は、残されていないんだツ!!」

みほは何かを言い出そうとするが、桃はそれを遮って叫ぶ。

「気持ちわかります! 私も義君やみんなと一緒に戦いたいです! でも怪我人が出れば……」

「そんなことはわかってる! だが、負ければ……負けたら

「……………負けたら我が校は……………ッ！」

「ッ!?止めて、桃ちゃん！」

「止めろ河嶋!!それ以上言うな！」

小山と角谷が、珍しく声を荒げて言うが……………

「負ければ大洗学園が廃校になる……………そう言うことだろ？」

「……………」

背後から声がし皆が振り向くと、そこにはエレーナや道子の先頭に  
いる義弘が立っていた。

そして義弘の言葉にメンバー全員表情が驚愕に染まる。

「えっ?どういうこと武藤……………?学校が……………」

「大洗学園が……………無くなる……………?」

沙織とみほが驚いてそう訊くと角谷が

「あちやく武藤君は知っていたのか……………てか何で知ってたの？」

「信用できる奴からその情報を知った」

武藤がそう言う。実はプラウダ訪問から帰った後、雪風から大洗学  
園が廃校になるという情報を得ていたのだ。

「本当なんですか会長？」

みほがそう訊くと角谷は頷き

「うん。武藤君の言う通り。この全国大会で優勝出来なかったら  
……………わが校は廃校になる」

この言葉に皆は衝撃を受けたのだった

## 廃校阻止と時間

数か月前

「廃校？」

「学園艦は維持費も運営費もかかりますので、全体数を見直し、統廃合する事に決定しました。特に成果の無い学校から解体します」

そこは『文部科学省 学園艦教育局』そこに現大洗学園生徒会の三人が呼び出された事により、全ては始まった。

そして文部省の眼鏡役員は何の感情もなく彼女たちに大洗学園を廃校にするとこう言った

「つまり：私達の学校が無くなるという事ですか？」

「納得出来ない!!」

「今納得して頂けなくても、今年度中に納得して頂ければこちらとしては結構です」

「じゃあ来年度には…」

「はい」

「急すぎる!!」

「大洗学園は近年、生徒数も激減してますし、目立った成績もありません、昔は戦車道が盛んで最後には全国大会準優勝という華々しい結果を出してはいますが…」

「んくじゃあ：戦車道、やろっか？」

文部科学省の役人から告げられた廃校宣言を前に、大洗学園、生徒会会長、角谷 杏は答える。

「ええ!？」

まさかの言葉に河嶋と小山は驚くが角谷は

「まさか優勝校を廃校にはしないよね？」

と、役人にそう言うのであった

現在



「それで戦車道を始めたんですか……」

「それを聞くと角谷会長が必修選択科目であんな無理な特典を付けてまで戦車道を進めた理由が納得できたわ」

「……私も驚きです」

理由を聞いたみほと道子とエレーナは納得したように呟く。

「そう。戦車道をやれば、助成金も出るって聞いてたし、何よりも、学園艦の運営費にも回せるからね」

「じゃあ、世界大会がどうか言うのは嘘だったんですか!？」

「そ、それは本当だ。嘘ではない」

澤が驚いてそう訊くと河嶋が答える

「でも、そんなのでいきなり優勝しろとか無理ですよお!」

河嶋が答えると、澤が声を上げる。

「いやあく、昔は結構盛んだったらしいから、もうちよつと良さそうな戦車があるかと思ってたんだけど………予算が無くて、良いのは皆売っちゃったらしいんだよねえ」

角谷からの衝撃的発言に、一同が一瞬押し黙る。

「じゃあ、今此処にあるのは!？」

「そう、全部売れ残ったヤツ。まあパンターが残っていたのが唯一の救いだっただね」

磯部が訊ねると、角谷はしれつとした調子で答える。

「それでは優勝など到底不可能では……」

「だが、そうするしか無かったんだ………古くて何の実績も無い、平凡な学校が生き残るには………」

エルヴィンが言うのと、桃が肩を落として言う。

「無謀だったかもしれないけどさあ………後1年、泣いて学校生活を送るよりも、希望を持ちたかったんだよ」

河嶋に続いて、角谷も弱々しい笑みを浮かべながら言う。

「皆………黙ってて、ごめんなさい」

そう言って、小山が頭を下げた。

「そんな………じゃあ、西住殿や武藤殿を勧誘したのって……」  
「うん。少しでも優勝できる可能性を……廃校を回避できる可能性

を大きくしたかったんだよ……西住ちゃん。武藤君。ごめんね……」  
と角谷が申し訳なさそうに言う。その言葉を聞いてみほは複雑そ  
うな顔をするが武藤はただ黙っていた

「バレー部復活どころか……学校が無くなるなんて」

「無条件降伏……」

「この学校が無くなったら私達、バラバラになるんでしょうか……」

「そんなのやだよ!!」

五十鈴の漏らした言葉に武部が声を上げて答える、俺達は学生だ、  
廃校になればおそらく、各高校に編入する事になるだろう。

だが、全員が全員、都合良く同じ高校に編入するのは無理だろう、少  
なくとも大洗学園戦車道チームは確実に無くなる。

「単位習得は夢のまた夢……か」

と冷泉が空を仰いでそう呟き、皆の表情は絶望に満ちた顔をし、う  
さぎさんチームの子たちは泣いていた。そんな中、

「諦めるにはまだ早いぞ」

と義弘が声を出す

「確かに厳しい条件だが、今現在。うちのチームで撃破された車輛は  
いないし、ちよいと修理すればすぐに戦える程度だ。それにこっちは  
畏にはまったとはいえ数輜敵戦車を撃破している」

「義弘……」

「義君……」

「しかも相手は時間をくれた、なら反撃できる対策は十分できる。ま  
だこの試合は終わっちゃいねえんだ。今泣いても仕方ねえ。廃校を  
回避するには優勝するしかない。なら勝てばいい。諦めたらそれで  
終わりだ。絶望をするのはすべての勝負を捨てた愚か者のすること  
だ。泣くときは学校が完全に閉鎖するまで……学園艦が完全に解体さ  
れるまで絶対に勝負を捨てるな。諦めるな。なぜなら少ない確率だ  
が、希望はまだあるからだ。みんなが諦めさえしなければな」

壁に靠れながら義弘はそう言った。その目は完全に勝負を諦めて  
なく赤い瞳が炎のように爛々と輝いていた。彼はまだ勝負を捨てて  
はいなかった。彼が勝負を捨てるときはすべてが完全に終わったと

き、そう自分で決めていたのだ

そしてみほも

「義君の言う通り、未だ、試合は終わっていません。まだ、負けた訳じゃありませんから、だったら…頑張るしかないです」

「西住ちゃん…」

「だって、来年もまたこの学校で戦車道をやりたいから…、みんなと」  
みほが言うと、メンバーの雰囲気は微量ながら、明るさが戻り始める

「私も…、私も同じ気持ちです！西住殿!!」

「そうだよ…とことんやろうよ！諦めたら終わりじゃん、戦車も恋も!!」

「せっかくここまで来たんですから、最後まで戦いましょう」

「うん」

西住の言葉にあんこうチームの秋山も、武部も、五十鈴も、冷泉も答えた。

他の戦車道チームのメンバーも顔を上げる、その表情に先ほどまであった暗いものはない。

「降伏はしません。最後まで戦いぬきます。ただしみんなが怪我をしないよう冷静に判断しながら」

みほがそう言うと角谷は頷き

「修理を続けて下さい、皿突は足周り、M3は副砲、寒さでエンジンのかかりが悪くなっている車両はエンジンルームを暖めて下さい、時間はありませんが落ち着いて」

みほは各チームに修理の指示を出す、そして河嶋は涙を拭き

「…我々は作戦会議だ!!」

と、すぐに作戦会議を始めるのであった

「(大洗の廃校…、雪風にそのことを聞かされた時俺が合点がいった…、なぜ俺がまだ生きて…いや生かされているのかを)」

壁に靠れつつ義弘は考えていた。数日前に雪風に電話で大洗学園が廃校になるという連絡のことを思い出し、そして今は自分の体の中に巣くう病のことも考えていた

「三年前に主治医の永琳先生に容体を見てもらった時、俺の命は三年も持たないと言われた。だが日本に帰国して大洗に住んでその余命の三年はとっくに過ぎていたはずなのに俺はまだ生きている。数日前に見て俺の体が死んでもおかしくない……普通にゃないと言われているのに、こうして普通に歩ける……普通にみんなと会話ができる……だがそれもすべて納得した」

義弘は永琳先生の言葉を思い出した。義弘の体はもういつ死んでもおかしくない衰弱しきった体。ふつうにあるけることも……ましてはこうして戦車に乗ることすらできない体なのになぜ動くことができるのか

義弘はその理由が分かった気がした

「俺が生きている理由……それは大洗学園の廃校を阻止するため……みほやみんなの居場所を守るため……俺はまだ生かされている……そう言うことなのか？……」ゴホツゴホツ

急にせき込み義弘は手で口を覆う。そして咳がやみ手を離すと手のひらは若干、赤黒い血がついていた

「……ちつ。カチユ姉はチームのみんなに時間をくれたが、どうやら死神はあまり俺には時間はくれないみたいだな……」

ひとり呟く義弘。そして暗れていた夜空が曇ってくるのだった

## 雪上のタイムリミット

カチューシャの策略によって包囲された大洗チーム。その様子を観客席の丘陵エリアではダーズリンたちが見守っていた

「完全に囲まれてますわね……………それなのに、何故プラウダは攻撃しないのでしょうか？言って良い事なのかはさておき、大洗を殲滅するなら今がチャンスなのに」

オレンジペコがそう言うと、ダーズリン溜め息をついて言った。

「カチューシャは、この状況を楽しんでいるのよ。相手から彼是と搾取するのが好きだもの」

そして、また溜め息を一つつくと、ダーズリンは紅茶を飲もうと、マグカップを口に近づけ試合を見守る

「さて…みほさんと武藤さんはこの状況をどう打開するのかしら？」

一方、別の場所では西住しほとまほが観戦していた

「…：帰るわ。こんな試合を見るのは時間の無駄よ」

そう言い立ち上がるしほ。この言葉を見るにただ冷たいように感じる人もいる。だが、彼女の本音はこれ以上、みほが包囲され、みほ自身が苦しい顔を見るのが辛いから。すると

「待ってください」

「まほ？」

「まだ試合は終わっていません」

まほは真剣な顔でしほに言うと

「そうね…：まだ試合が終わってないのに帰るなんて。しほ。あなたは戦車乗りとしてまだまだ未熟ね」

「っ!？」

背後から声がし二人が振り向くとそこには14, 5歳くらいの少女

が立っていた。その少女を見たまほは

「……………ロスマン先生」

まほは少し驚いた表情で彼女の名を言う。そう二人に声をかけたのは同じく試合を観戦しに来た義弘の師、エディータ・ロスマンであった

「お久しぶりねまほさん。中学校の時以来かしら？」

「は…はいかれこれ三年ぶりです」

ニコツと笑うロスマンにまほは思わず直立不動の姿勢を取り挨拶をすると

「そんなに緊張しなくてもいいのよ？」

「い、いえ。これが私の普通の姿です」

と、強張った表情でそう返事するまほ。なぜ彼女がロスマンに対し緊張した態度をとるか？中学の恩師ということもあるが、中学時代にめっちゃやくちヤスパルタされたのと、思い出したくない黒歴史を彼女に握られているからである。だがそれは、まほだけでなく彼女の指導を受けた生徒みんながそうである。

そしてロスマンはしほの隣に立ち、小声で

「さて、しほさん。まほさんの言う通り試合はまだ終わっていないわよ？最後まで見届けてあげなさい」

「ですが先輩……………」

「たしかに今の状況は、バカ弟子やみほさん達大洗側に非常に不利となっております。ですが、だからと言って、私は彼等が簡単に負けるとは思いません……………それはあなたが20年前に経験しているでしょ？かつて大洗にいた時、今の試合のように灼熱の砂漠エリアで敵に包囲されたときも私たちは負けたかしら？」

「それは……………」

「否、みんな最後まで諦めなかったわ。一度たりとも勝負を捨てる真似をしようとはしなかった」

「ですが、あの時と同じように今のチームも同じとは……………」

「大丈夫よ。大洗戦車道部の魂は彼女たちが知らずのうちに引き継がれていると思うわ。なんとたつて昔から大洗は逆境に強かったから。

でなければここまで来ることは出来やしないわ」

『戦車道にまぐれ無し、あるのは実力のみ』……あなたから教わった言葉ですね」

「ええ。だからしほ。今は最後まであの子たちを見守ってあげなさい。母親として、そして大洗の先輩としてね……」

「分かりました」

ロスマンにそう言われ、しほは静かに座るのだった

それから場所を移し、此処はプラウダの野営地。

其所では移動用として用意されていたのである。軍用スノーモービル——RF—8——の操縦席に、毛布を被せながら座っているカチューシャがボルシチを食べていた。

「それで降伏の条件として、土下座に加えてウチの草むしりと麦踏み、ジャガイモ掘りを3ヶ月やらせましょうか？」

完全に捕虜扱いと捉えられてもおかしくないような事を言いながら、カチューシャはボルシチを口に運んでいく。

意地悪く笑みを浮かべるカチューシャにノンナは

「それでカチューシャ。武藤さんについてはどうしますか？」

「ヨシーシャ？ そうね。あの子はカチューシャの弟だし。執事として扱おうかしら？ そして頭を撫でてもらうかしら？ あ、逆にヨシーシャに膝枕をしてあげるのもよさそうね。ふふっ……ヨシーシャがプラウダに来るのが楽しみね、ねえノンナ、クラーラ」

「……………」

「ひっ！ ふ、二人共、なんか……怒ってない？」

「いえ、なんでもありませんよ、ですよ、クラーラ」

「ロシア語」『そうですね、彼がプラウダに来たらいろいろとやりやすいですから』

『ですが、下手にやるとカチューシャに嫌われる危険性があります。』

あの彼に対しての溺愛は私たちに通じるものがありますから。それに彼は見た目に反して手強そうです。ここは慎重にやる必要があります』

「だからーちゃんと日本語で会話してくれないとわからないでしょ!!」

そう怒鳴るがすぐにカチューシャは食事を終えた

「ふう、ぐ」馳走さま。食べたなら眠くなっちゃったわ」

そう言いながら、カチューシャはRF-8に寝そべり、毛布を布団代わりにかぶる。

「敵に時間を与えたのは、お腹が空いて眠かったからですよね?」

「違うわ!カチューシャの心が広いからよ!シベリア平原のようにね

!・・・それに頭を冷やさせる必要があつたしね」

「え?」

「なんでもないわよ!おやすみ」

からかうように言うノンナにそう言い返すと、カチューシャは会話を打ち切つて寝てしまう。

そんなカチューシャを微笑ましそうに見ながら、ノンナはコサツクの子守唄を歌い始めるのであつた。

場所は大洗陣営に戻り

「問題はこの包囲網をどう突破するかだな」

「敵の正確な位置がわかれば良いんだけど・・・」

西住みほと生徒会のメンバーは地図を広げて今後の作戦を練る。

「...偵察を出しましょう。でも誰を出すか・・・」

みほがだれを偵察に出すか考えると

「西住殿、偵察ならお任せ下さい!!」

だが、秋山は自分からその危険な偵察役を買って出てくれた。

「優花里さん...ありがとう、でも...一人じゃ危険かも」

「だったら私も行こう」



「エルヴィン殿、よろしいのですか？」

「もちろんだ、グデーリアン」

エルヴィンが立候補し、秋山と共にチームで偵察に出る事になった。

「この広さだともう一チーム必要ですね」

とはいえ一つのチームだけで吹雪の中を偵察に出るのは厳しい。

「だったらそど子、冷泉ちゃん行って来なよ」

「私が冷泉さん?!」

「確か二人共視力が2.0あったし、仲も良いしね」

「仲良くなってます！それとそど子って呼ばないで下さい!!」

「文句言っている暇があるなら行くぞ、そど子」

「何よ！あなたなんて冷泉麻子だから、れま子よ。れ・ま・子!!」

「はいはい。行くぞそど子」

「だからそど子って言わないで!!」

そんな冷泉とそど子のやり取りを見ながら、やっぱり仲が良いんだなあ…と西住みほは少し微笑んだ。そして二組が出て少し後、すると義弘は建物を出ようとする

「義弘どこに行くのよ?」

道子が呼び止めると

「パンターに積んであるものをここに卸してくる。気温も下がっているうえ天候も悪くなってきているから例の物を持ってこようと思っ  
てな。万が一吹雪いちまったら取りに行けないしな」

「確かに三時間この寒さをしのぐにはあれを持つてくるのはいい方法  
だけど……一人で大丈夫? 私も行こうか?」

「大丈夫だ。一人で行ける」

そう言い、彼は建物を出るのだった。

「やはり雪が積もってきているな……取りに来て正解だったな」

廃教会から出て廃村地帯を抜け、パンターを隠している地点についた義弘は大型の寸胴鍋の中に何やらいろんなものを入れその上に布をかぶる

「よし、あとは縄を使ってこれを背負いやすくなるようにするか……あ、そうだついでにこいつも……」

とそう言いかけた瞬間

「ゴホッ!!ゴホッ!!ゴホッ!!」

急に肺が締め付けられ大きな咳が出る

「(くそっ!またか……)ゴホッ!!ゴホッ!!」

肺血病の症状が出た義弘は顔をゆがませ地面にしゃがみ込み右手で口を押える。その瞬間喉から熱いものがこみ上げる。そしてそれは義弘の口から漏れ出た

それは真っ赤な鮮血だった。しかもその血の量はまるで肺が破れたかのように勢いよく飛び出し真っ白い雪を真っ赤に染め上げた。

「……………」

その血の多さを見た義弘は。以前、永琳先生との会話を思い出した『戦車道を続ければ、残り少ない命をさらに縮めることになる』

その言葉を思い出しつつ、義弘は万が一道子たちに見られないように血の付いた雪の上に白い雪をかぶせ見えないようにした。

「まだだ……まだここで終わりはないんだ。だからもう少しだけ時間をくれ……せめて大洗の廃校が阻止できたこと……優勝したのを見届けるまで」

そう小さく呟き彼は大きい荷物を持ち廃村地帯へと歩き始めるのであった

## 雪の中の演奏

義弘があるものを取りに行っている間、大洗陣営では偵察部隊が戻り、敵の状況が分かった。

だが、義弘を待つ間、降伏時間までは残り一時間を切った。修理も終わり、偵察から得た情報で作戦も組んだ大洗メンバーだがその士気は低い。

「いつまで続くのかな……この吹雪」

「寒いね……」

「うん」

「お腹すいた……」

ウサギさんチームは六人で一枚の毛布にこたつのように入りながら静かに呟き合う、そこに普段のやかましさは無い。

「やはり……これは八甲田」

「天は……我々を見放した」

「隊長、あの木に見覚えがあります!!」

カバチームは……わりと余裕がありそうに見えるもないが、八甲田をネタにしている時点でいろいろといっぱいいっぱいなのだろう。

「良いことを考えた、ビーチバレーじゃなくて、スノーバレーってどうですかね?」

「良いんじゃない……知らないけど」

まさかのあのアヒルチームでさえ、バレーをやる気力すら残っていない。

「……う、Zz」

「寝ちや駄目よ、パゾ美」

カモさんチームも三人で毛布にくるまってじっと待っている。

「そう言えば、食料はどうなっている?」

「こうなるとは流石に予想出来なかったので、非常食程度の菓子パンくらいしか無いよ……」

「それで後1時間、持つかどうか……」

沈んでいるメンバーを見ながら、桃と柚子はそんな会話を交わし、

杏は何も言わず、ただ立っているだけだった。

「そう言えば、プラウダの人達がボルシチ食べたりコサツクダンス踊ったりしてたって、さっきエレーナさんたちが言ってたよ……………」

沙織がそう言うと、あんこうチームのメンバーは、火を囲んでボルシチを食べたり、コサツクダンスを踊ったりしているプラウダの生徒を窓越しに見た。

「美味しそうだな……………食べた事は無いが」

「ええ。それに暖かそうです」

それを見た麻子と華は、そう呟いている

これが今の大洗学園の現状である、どのメンバーも士気が落ち、テンションが低い。理由としてはやはりこの寒さと残り一時間という時間だ。

三時間という猶予をくれたカチューシャではあったが、その理由は睡眠時間を取るため、そしてもう一つはこの寒さの中で三時間という時間の中で敵の士気が落ちるのを待っていたからだ。士気が落ちれば戦う意欲もなくなる。そうすれば相手はあっさりとこちらの降伏勧告に乗るという寸法だ。

そしてカチューシャの目論見は見事的中。現在の大洗の士気はかなり下がっていた。

「学校、無くなっちゃうのかな……………」

「そんなの嫌です……………私はこの学校から離れたくない！皆と一緒に戦車道やっていきたいです！」

不意に沙織が呟くと、優花里が声を張り上げる。

「そんなの、皆同じだよ……………」

「でも、どうして廃校になってしまうのでしょうか……………？此処でしか咲けない花だってあると言うのに……………」

そんな優花里に沙織が返し、華が呟くと、麻子も複雑な表情を浮かべる。

「皆、どうしたの？元氣出していきましよう！」





とみんなシチューの味に笑顔になる

「それにしてもこのシチューの材料。全部パンターに積んでいたんですか武藤殿？」

「ああ。そのせいでちよつと狭くなっただけだな」

「私なんか荷崩れしないように運転するのが大変でしたよ」

優花里の問いに義弘が答え、荷崩れしないように注意しながら運転していた静は軽く笑ってそう言う

「そう言えば義弘？その背中にしよっているのは？」

「ああ・・・これか」

武部が義弘の背中にしよっている物を指さすと、義弘はそれを武部たちに見せる

「これは・・・三味線？」

そう、それは少し古びた三味線だった

「ああ、ちよつと家から持ってきたやつなんだがな」

「武藤さんは弾けるんですか？」

「まあ、少しな」

そう言ううと義弘は三味線を弾き始めた。少し荒々しい音色だがどこことなく人を引き寄せるようなそんな音色だった

「なんだか、心に響きますわね・・・」

「ちよつと荒々しいがな」

「でも武藤殿らしい音色です」

「うんうん。でも武藤が三味線弾けるなんて意外だな」

「先輩。すごく上手い」

「まるで上杉謙信のようだな！」

「いや、三味線なら奇兵隊の高杉晋作ぜよ」

「「それだっ！」」

と、各々義弘の弾く三味線の音色を聞いていた。そして三味線を弾き終えると・・・

「すごい！すごいですよ先輩！」

「お見事です武藤殿！」

みんなが拍手をした。そしてシチューと義弘の三味線の演奏のお

かげか一応試合を続行しようと言う意思は見え始めていた。

だが、カチューシャから告げられた『3時間』のタイムリミットが迫ってくるにつれ、大洗チームに緊張の波が押し寄せてきた

戦闘が始まれば大洗の全車、両教会から出て敵の防衛網を突破しなければならぬ。

だが激しい砲撃の中潜り抜けられるのかが心配なのだ

そのみんなの不安にみほは気づいていた

「(どうしたら・・・みんなの緊張を解くことができるのだろう)」

みほはそう思っていた。そして考えに考えた末、一つの解決策を思いついた。それは聖グロリアーナに負けた時の罰ゲームとして踊る予定だったアノ踊りだった

「(皆の緊張を解くなら、アレしか無い!)」

決心を固めたみほは、義弘の方へと歩み寄る

「義君。ちよつといいかな?」

「ん?どうしたんだみほ?」

義弘は振り返りみほに訊くと

「お願いがあるんだけど、ちよつと来てくれない?」

「ああ・・・いいぜ」

そう言い三人義弘は教会の隅っこに移る

「・・・で、どうしたんだ?」

「うん、それがね……………」

そうしてみほは、義弘の耳に顔を近づけ、自分が考えた案を伝えた。みほの案を聞いた義弘は

「え?本当にアレをするつもりなのか?あんなに恥ずかしがっていたのに」

「うん。せめて、皆の緊張が少しでも解けたら、踊っても意味はあるかなって……………」

「後悔は?」

「しない。みんなを元気づけるためなら・・・だから義君にも手伝ってほしいの」

少し微笑みそう言うみほに義弘は



「……わかった。いいぜ。みほに頼まれたんじや断れないしな」

「ありがとね義君」

「ああ……お前の決心分かったよ。それでこそみほは大洗学園戦車道部村の神輿……いや軍神だな。雅楽は俺に任せろ」

「ありがとう……義君」

そう言いニコツと笑い義弘は先ほど演奏した三味線を手に持ちそう言うのであった

## 雪の戦場にあんこうたちは踊る

みほは義弘にある提案をし、義弘は頷く。そして義弘はパンターから持ってきた三味線を手に持ち、みほはみんなの前に立ち、そして義弘はみほの一步後ろに立ちしやがむ

「みぼりん?」

「みほさん?」

「西住殿?」

「西住さん・・・武藤さん。何をしているんだ?」

彼女らの前に立つ二人に皆は首をかしげる

「に、西住に武藤……………一体、何を……………?」

いきなりの事に戸惑いを隠せない河嶋が、おずおずと訊ねる。義弘は振り向くと軽く微笑み、みほの方を向いて言った。

「みほ・・・やるぞ?」

「うん。お願い義君」

義弘がそう微笑んで言うともみほは頷き返す。そして義弘は三味線を弾き始める。そしてその演奏とともにみほは踊り始めた

あんこう踊りを

「み、みぼりん!」

「あの恥ずかしがりなみほさんが、まさかあんこう躍りを……………それも、自ら……………」

引つ込み思案で、聖グロリアーナ戦でアンコウ踊りの内容を知ったとき真っ赤になって恥ずかしがっていたのとは違い、今みほは自ら率先して、しかも一人で踊っていると言う様に、沙織と華は驚愕で目を見開いている。

「西住殿、皆を盛り上げようとしているのですね……………」

「やり方は兎も角としてな……………」

優花里の眩きに麻子がツツコミを入れるが、それでも表情は優しげなものになっていた。

「良し！私達もやろう！」

「ええー！」

そうして、先ずは沙織と華が、その次には優花里と麻子が加わり、何時の間にか、大洗チームの全員があんこう躍りを踊っていた。

#### 観客席

「……………」

「お、お嬢が……………」

その頃の観客席エリアでは彼等の躍りがモニターで流れており、百合は顔を青くし頭を抱え、新三郎は驚きのあまりに言葉が出なくなっていた。

「これは……………」

「あら、懐かしいわね…あの踊りまだ続いていたのね……………ねえしほ?」

「……………」

ロスマンがしほの方を向いて微笑んでそう言うとしほは顔を青ざめモニターを見る

「もしかして……………思いましたかしら?」

「な、何のことでしょう?」

「大洗に来て初めての練習試合で聖グロリアーナに負けて、翔子たちと一緒にあんこうおど……………」

「先輩…お願いですからこれ以上何も言わないでください……………本当にお願ひします」

「そう?私にとつてはいい思い出だけどね?」

嫌な思い出でも思い出したのだろうかしほは苦い表情でロスマンに言うがロスマンは若干楽しそうな表情だった

「(お母様の過去にいったいなにが……………?)」



「ああ、カチユ姉のところの……」

河嶋の説明に義弘が納得した表情を見せるとプラウダの生徒は

「もうすぐタイムリミットです、降伏は？」

「しません、最後まで戦います」

プラウダ校の生徒の問いにみほは迷う事なく返事を返した。

「それと：カチユーシャさんに伝えて下さい」

「なんででしょう？」

「義君は：渡しません……と」

試合前のおどおどした雰囲気とはうって変わって大声で言ったみほに、プラウダの生徒は目を見開くが、直ぐに表情を戻した。

「……分かりました。では、そのように伝えておきます」

そう言つて、プラウダの生徒がプラウダの野営地に戻ろうとした時だった。

「ああ。君ちよつといいかな？」

「な、なんですか？」

「カチユ姉……プラウダの隊長さんに伝えたいことがあるんだがついでに良いか？」

「は、はあ……まあ、お伝えしておきましょう」

「よか。俺からは『雪の上で常に白熊が勝つとは限らない。せいぜい狼にその喉を噛み切られないように注意しろ』……そう伝えておいてくれ」

「分かりました」

その意味が何なのかわからずプラウダの生徒は首をかしげながらプラウダの野営地に戻つていった

プラウダ陣営

「……で、土下座？」

そろそろ降伏勧告から三時間、睡眠をとっていたカチユーシャはノンナに起こされまだ少し寝ぼけている。

「いえ、降伏はしないそうです」

「ふーん…そう、待ったかいないわね」

だがノンナからのその報告に面白くなさそうに目をこするとすぐに気持ちを切り替えた。

「なら、さっさと片付けてお家に帰るわよ」

「では…」

「ちゃんとあいつらにも伝えたはずよ、降伏しなければ今度は容赦しないって」

プラウダ側からすれば勝てた状況であえて見逃してあげたのだ、これ以上はあのフラッグ車以外を全滅させる宣言を守る必要はない。

「さっさとフラッグ車やつつけて終わりにしてやるんだから」

ならばここからは本気だ、大洗のフラッグ車を狙い撃ちにしてやる。

「向こうは我々を偵察していたようですが編成に変更は？」

「必要ないわ、あえて包囲網の中に緩い所作ってあげたんだから、奴等はきつとそこをついてくる」

この三時間の間に大洗がこちらを偵察にくる事くらいはカチューシャも予想していた、その為の罠は最初から用意してある。

「ついたら挟んでおしまいね」

「上手くいけばいいんですが」

「カチューシャの立てた作戦が失敗する訳ないじゃない！それに第2の策でフラッグ車狙いに来ても隠れてるかーべーたんがちゃんと始末してくれる」

フラッグ車の護衛にはKV-2を設置した、先ほどたった一発の砲撃で大洗を窮地へと追いやった重戦車だ。

「用意周到な偉大なるカチューシャ戦術を前にして、敵の泣きべそかく姿が目には浮かぶわ」

意地悪く微笑むカチューシャだがふと気になったのかノンナに尋ねた。

「そう言えばヨシーシャのことはどうなの？」

弟分をこちらに引き渡すかどうかの要求についてノンナに訊くと



「どうしたんですか角谷さん？」

「ありがとね。こんな私達を信じてくれて……………それから、ゴメンね。利用するような事しちゃって」

何時ものような、掴み所の分からない大物感が引っ込み、若干しおらしさを感じさせるような声色で言って、頭を下げる。それを見た義弘は

「謝る必要はありませんよ。それどころか感謝しているくらいですよ」

「え？」

「あなたのおかげで俺はまた戦車道をする事ができた……みほと再会してこうして戦車道をする事ができた。だから俺は心の底からあなたに感謝しているんですよ」

「武藤君……」

「ですからここまで来たからには優勝しましょうや。みんな優勝旗を掲げて……ゴホッ!!ゴホッ!!ゴホッ!!」

そう言いかけた時、武藤は苦しそうに咳をしハンカチで口を押える

「武藤君。大丈夫？」

それを見た角谷が少し驚いて彼に訊くと……

「だ……大丈夫です……では俺はそろそろ戻ります。試合後また話しましょう」

そう言い義弘は教会を出て行った。すると彼のポケットから先ほど口を覆っていたハンカチが落ちる

「武藤君、落としたよ」

そう言うが武藤は彼女の声が聞こえなかったのか、そのまま行ってしまった角谷は試合が終わったら返そうと思い、地面に落ちた彼のハンカチを拾う。

「……………っ!？」

だが角谷は見てしまった。そのハンカチが血で赤く染まっていたことに、そして角谷は再び義弘のいた方を向き

「武藤君……君ってもしかして……………」



その後、試合が再開されることになった。だがそれは再び死の狂騒曲が再び演奏されることになるとはまだ誰も知らない……

ところてん作戦です

みほが考案したところ作戦とはこうだ

まず、偵察に出た2チームからの情報を纏めた結果、プラウダの包囲網には1ヶ所だけ、防御が緩くなっている場所が存在している事が分かったのだ。

だが、それは戦力不足などの理由ではなく、『大洗チームを嵌めるための罠』なのだ。

それからの展開を予測すると、その防御が緩くなっている場所から脱出しようとした場合、別の場所で待機していた予備戦力が駆けつけて攻撃を仕掛けてくる。そうすれば、足止めを喰らっている内に本隊が到着し、再び包囲されると言う結末を辿る。

早めに決着を着けようと、フラッグ車を叩きに向かっても、恐らく同じ結果が待っている事だろう。

そのため、防御が緩くなっているその場所には行かず、敢えて、包囲網の中では最も戦力が集まっている、敵の本隊………つまり、カチューシャやノンナが居る本陣へと突撃し、それに戸惑っている間に強行突破するのである。

その後、大洗側の戦車数輦で敵の気を引いている間に主力が反転して廃村地帯へと舞い戻り、プラウダのフラッグ車を撃破するという作戦である。

だが、義弘達の戦車はこの場には無いため、彼等は基本的に独立行動する事になった

そして廃村の用途にある丘で待機している義弘のパンターGとエレナのBT7はいつでも動けるようにエンジンを始動し、みほたちが動くのを待っていた

「にしても分厚いところからの包囲網の突破か……さながら『島津の退き口』だな……」

「それで義弘。プラウダの方はどうかしらね？聞けば冷泉たちの偵察

班がプラウダの連中に見つかったって聞いたけど、陣形が変わっている可能性は…」

「それはないだろうな……」

「なんでかしら?」

「あの人の性格上、自分の作戦には絶対な自信を持つ癖があるからな。たとえ偵察されたとしても、自分の作戦が失敗するなんて思わないだろうな。きつと今頃『用意周到且つ偉大なカチューシャ作戦が失敗するはずがない!』とか言っているんだろうよ」

「なんか、言いそうね?」

「だろ?」

義弘と篠原はカチューシャが自身の作戦が見事成功することに自信を持って笑っている姿を想像する。実際カチューシャは自分の作戦が失敗することなんてありえないと思っていた。その自信家ぶりに彼女の指導をしたエディータ・ロスマンからも「威勢がいいのは長所だが、その自信家ぶりゆえに不注意が多い」と耳にタコができるほど注意されていた

「ゴホツ!!ゴホツ!!」

義弘が急に激しい咳をし始めそれを見た道子が

「ちよつと義弘。さつきより咳がひどくなっているわよ?」

「だ……大丈夫だ」

「大丈夫なもんか!以前も様子がおかしかったし、もしかして肺をやられているんじゃないわよね?」

道子が、心配そうに言う。アンツイオ戦以来、どこか義弘の様子がおかしかったのを見て、道子はもしかしたら何か悪い病気にでもかかっているんじゃないかと思っていたからだ。

「だ、大丈夫だよ。まあこの寒さでちよつと風邪気味かな?」

義弘が軽く笑ってそう言うが、道子は

「……試合終わったら、病院に行った方がいいわよ?あんたの大丈夫はなんか信用ならないわ……三年前、私たちの前から消えるときもその笑顔だったわ」

「……」

三年前。義弘が黒森峰を去ったときのことだ。あの時も義弘は黒森峰を去る直前、道子たちに今とおんなじ軽く笑っていた

そのことに道子は不安を感じていたのだ

「…分かった。試合が終わったら行くよ」

「本当ね？」

「ああ。だから今は試合に集中しようや」

「……わかったわ」

そう言い道子は試合に集中することにした。だが彼女の義弘に対する不安は消えなかったのである

一方、教会内ではみほたちが「ところてん作戦」を開始しようとしていた

全車両のエンジン音が響く中

「西住ちゃん！」

「え？」

IV号に乗る西住に角谷が話しかけた

「私をここまで連れてきてくれてありがとうね」

と、今まで見せたこともない優しい笑みでそう言う角谷すると角谷は

「ところで西住ちゃん。訊きたいことがあるんだけど？武藤君についてなんだけど？」

「義君に？」

「うん……彼って何か肺とかの病気みたいなの患ってたりする？」

「え？」

角谷はみほにそう訊く。あの血で染まったハンカチを見た角谷はもしかしたら義弘が肺を病んでいるんじゃないかと感じ、彼の幼馴染であるみほに訊いたのだ

角谷の言葉にみほは少し驚く。義弘が肺を病んでいる？確かにこの頃義弘顔色が悪いし、元気がなさそうに見えたが……

だが、もし本当なら……

「いえ……会長。義君に何かあつたんですか？」

嫌な予感を感じ、心配してみほが角谷にそう訊くと角谷は首を横に振り

「いいや……ちよつと気になっただけ。どうやら私の勘違いみたいだね。変なこと訊いてごめんね」

「は……はい」

そう言い、この会話はここで終わりとなった。みほは角谷の言葉に疑問を感じたが、考える時間はなくすぐに作戦開始の時間となった

「小山、行くぞ」

「はいっ！」

角谷が言うのと、柚子はゆつくりと38tを前進させ、他の戦車も後に続き、ゆつくりと前進する。

そして、出口が目前に迫った時………！！

「突撃ー！」

角谷の掛け声と共に柚子はギアを入れて速度を上げ、教会から勢い良く飛び出す。

その途端、包囲していたプラウダの戦車隊からの集中攻撃が始まる。

容赦ない砲撃に晒されながらも、大洗チームは防御の薄い地点へと向かう

「フンっ！やはり其所に向かったわね。流石は私」

自分の作戦が成功したと思っているカチューシャは、得意気に自画自賛するが………

「……………ん？」

なんと、防御が緩くなっている場所へと向かっていた大洗チームは突然方向転換し、フラッグ車である八九式を隊列の真ん中に配置して守るような陣を組むと、自分達が居る場所………つまり、一番戦力が集中している場所へと突っ込んできたのだ！

「此方!?馬鹿じゃないの彼奴等!?敢えて分厚いトコに向かってくるな

んて!!」

大洗チームが自分の考えた作戦に乗らず予想外の行動に驚き、そんな事を眩きながら、カチューシヤはヘルメットを被る。

その瞬間、今までの仕返しとばかりに大洗からの砲撃が始まる。

「このっ！返り討ちよ！」

そう叫ぶと、カチューシヤは直ぐ様車内に引込み、撃ち返す

「河嶋、砲手代われ。私がやる」

「はっ！」

そんな中、角谷は河嶋に、砲手を代われと言い出し、河嶋は席を空けて装填手へと移る。

角谷は砲手の席に座り、スコープを覗く。

「やつぱ38tの37mmじゃ、まともに撃ち合っても勝ち目って殆ど無いんだよねえ。小山！ちよつと危ないけどギリまで近づいちゃって！」

「はい！」

角谷の指示を受けた柚子は38tの速度を上げ、向かってくるプラウダの戦車に突っ込んでいった。

すると、1輦のT-34/85が砲塔を38tへと向ける。

砲身がゆっくり下ろされ、38tへと狙いを定めた時  
……………ッ！

「来るぞ！」

その言葉と同時に、柚子は38tを左へ流して砲弾を避け、相手が怯んでいる内に接近すると、角谷が相手の砲塔目掛けて発砲し、行動不能にする。

その隙に、大洗の戦車が次々と向かってくると、プラウダの防衛ラインを突破する。

「やったな！後続、何が何でも阻止しなさい！」

頭に血が上り冷静さを失ったカチューシヤは段々遠ざかっていく大洗の戦車を睨みながら、カチューシヤはインカムに向かってそう叫ぶのであった。

「前方敵4輦！」

IV号のキューボラから前方を見ていたみほが叫ぶ。

すると、最後尾で後ろの様子を見ていたそど子から通信が入った。

『此方は最後尾！後方からも4輜来ています！それ以上かもしれません！』

「了解しました。挟まれないよう、10時の方向に転回します！」

みほがそう言うのと、今度は角谷から通信が入った。

『んじゃ、正面の4輜は私等が引き受けたよ！上手くいったら、後で合流するね！西住ちゃんたちはそのまま転回して！』

「分かりました、気を付けて！」

『あいよ、ソッチもね〜！』

そう言いみほたちは展開するが38tは前から来ている4輜目掛けて突っ込んでいき、その様子を、みほは心配そうに見ていた。

「T-34/76に85、そしてスターリンか……………固そうで参っちゃうなあ……………でもゼロ距離ならなんとか出来るかな……………よし、行くぞ！」

そう呟きながらも、角谷は自分の相方達に指示を飛ばした。

「小山！ねちっこくへばりついて！」

「はいっ！」

「河嶋！装填は早めにね！」

「了解です！」

角谷の言葉に二人は返事をし、その言葉を合図に、38tが4輜のプラウダ戦車に襲い掛かった。

1輜のT-34/76が砲撃を仕掛けてくるが、小回りの効く軽戦車ならではの特性を生かして難なく避けると、逆に至近距離からの砲撃を喰らわせて撃破する。

今度はIS-2を標的に定めて引き金を引くものの、自分も相手も動いていたためか、狙いが逸れ、後部のフェンダーに弾かれてしまう。

「おっと失敗……………気を取り直してもう一丁！」

「はいっ！」

すると今度は、他のT-34/76を標的とした角谷に河嶋が次の砲弾を装填し終えた直後、狙いを定めて引き金を引き、片方のマフ

ラーを吹き飛ばす。

「よっしゃ、もう一丁!」

「はいっ!」

「もうイツチヨ!!」

河嶋が素早く装填を終え、小山が巧みに操縦桿を動かし車体を回転させて相手からの砲撃を避け、そして角谷が次々と攻撃を仕掛けていく。

あるT-34は履帯と転輪を吹き飛ばされ、さらに止めとばかりに砲塔基部に喰らって撃破され、またあるT-34は、両方の履帯と転輪を吹き飛ばされ、悪足掻きとばかりに攻撃するものの、小山の操縦で避けられた後、至近距離からの砲撃を喰らって撃破される。まさに三人の息があつてないときない芸当だった

そして、カメさんチームは、敵戦車4輦中、T-34を2輦撃破したのだ。

「よし、こんなモンで良いだろ、撤収う〜♪」

「お見事です!」

大洗チーム本隊に合流しようと、その場を離れようとした瞬間、突如として横から砲撃を受け、38tは粉々に吹き飛ばされた履帯と転輪の破片をぶちまけながら派手に吹っ飛ばされると、逆さになって動きを止める。

そして底部から、行動不能を示す白旗が飛び出した。

角谷の38tを撃破したのはノンナの乗るT-34/85だった

角谷達は彼女の狙撃により撃破されたのだ。

「……………動ける車両は、速やかに合流しなさい」

『Da!』

ノンナの指示に、生き残っていたプラウダ戦車の車長は返事を返し、本隊に合流しようと動き出すのであった。

だが、プラウダの包囲網を脱出する『ところてん作戦』の第一作戦は大洗チームは無事に包囲網を脱出し、さらに38tの獅子奮迅の活躍により無事に成功したのだった



「あら、これはなかなかね。戦車での格闘戦は義弘の十八番だと思っ  
ていたけど。あの38tの乗員いい腕をしているわね」

観客席で試合を見ていたロスマンはそう言う

「でも、それに比べて、カチューシャは……いつも注意しているの  
に」

と逆にカチューシャの行動に少しため息をつく。包囲網を作ると  
ころまではよかったが、自分の作戦に自画自賛し、突破されて頭に血  
が上ったカチューシャをモニターで見たロスマンは

「これは……一から修業をさせた方がいいかしらね？……ふふ  
ふっ……」

怖い笑みでそう言うロスマンだった

「ううっ……なんか悪寒が」

その時、大洗チームを追っていたカチューシャが急に寒気を感じた  
ことはまた別の話……

絶体絶命です！

生徒会チームの獅子奮迅の活躍により無事に敵の包囲網を突破した大洗チーム。しかし一両で敵に立ち向かった生徒会チームの38は撃破されてしまった

『いやあく、ゴメンね。2輛しかやつつけられなかった上にやられちゃった。後頼むね』

その頃、反転するための場所へと移動している大洗本隊、あんこうチームには、角谷からの通信が入っていた。

「分かりました、ありがとうございます」

『後は頼んだぞ、西住！』

『お願いね！』

みほが礼を言うのと、桃と柚子からの激励も入った。

「此処を脱出します！全車、あんこうについてきてください！」

『『『『『はいっ!!』』』』』』

みほの指示に、その場に居る全チームからの返事が返され、速度を上げていった。

「麻子さん、2時が手薄になっています！一気に振り切って、この低地を抜け出すのは可能ですか!?!」

「ああ、一応出来る。だが、かなりキツめに行くぞ……………」

みほの質問に、麻子は即座に答える。

「大丈夫です、やってください！沙織さん、他の戦車に伝えて！」

「わ、分かった！」

そう答え、武部は他の戦車に通信を入れた。

「あんこう、2時の方向に転回します！フェイント入って難易度高いです！頑張つてついてきてください！」

『了解ぜよ！』

『かなりキツいって、大丈夫なの？』

『大丈夫！やるつきや無い！』

『マツチポイントには未だ早い！気イ引き締めて行くぞ！』

『『オオーーーッ！』』』

『頑張るのよ、ゴモヨ!』

『分かっているよ、そど子』

武部の指示に、其々のチームのメンバーからの返事が次々に返され、大洗本隊は急激な方向転換を行う。

「何なのよ彼奴等? チマチマと軽戦車みたいに逃げ回って……ッ!」

その頃、追撃していたプラウダの本隊では、先頭を走るT-34/85のキューボラから様子を見ていたカチューシャが逃げる大洗の様子にイラつきながら呟いた。

「こうなったら………機銃曳光弾! 主砲は勿体無いから使っちゃ駄目!」

インカムに向かって叫ぶと、追撃していた本隊のT-34の軍団が、一斉に曳光弾を撃ちまくる。その瞬間、プラウダの戦車から激しい機銃音が鳴り響いた

「ッ!」

自分達の遙か上から飛んでいく曳光弾の軌跡を視界に捉えた。この機銃弾は戦車を撃破するのではなく曳光弾による光で大洗の戦車を目視しようとしたいわゆる照明弾として上空に向かって撃つていった

それを見たみほは、直ぐ様カモさんチームのそど子に通信を入れた。

「カモさん! 後ろから来るプラウダの戦車は何輛見えますか!」

『えっと………全部で6輛です!』

その通信に間を入れず、そど子から返事が返される。

「その中にフラッグ車は見えますか!」

『見当たりません! 恐らく、さっきの廃村に居るままだと思います!』

「了解しました。カバさん! 前方の丘を越えたら、あんこうと隠れて、敵をやり過ごしてください! 相手の主力が居ない内に、敵のフラッグ車を叩きましょう!」

『心得た!』

みほがカバさんチームに通信を入れると、エルヴィンから返事が返される。

「ウサギさんとカモさんは、アヒルさんを守りつつ逃げてください！この暗さに紛れるよう、出来るだけ撃ち返さないで！」

『『はいー』』』

作戦を伝えると、大洗の戦車は丘を上って行く。IV号とIII突は、その丘を上り終えた直後に曲がって、両サイドの影に隠れる。

残りの3輜は前進していき、後からプラウダ本隊がやって来ると、両サイドに隠れた2輜の事に気づく事無く、フラッグ車である八九式を追う。

「追え追えーッ！」

フラッグ車を追い、撃破する事に集中しているカチューシャはそう叫ぶが、違和感を覚えたノンナが声を掛けた。

「カチューシャ、敵戦車が2輜程見当たりません。それに・・・」

「そんな細かい事はどうだって良いわ！兎に角彼奴等を永久凍土の果てまで追い回すのよ！」

ノンナはあの戦車の中に一番警戒すべき義弘のパンターの姿が見えないことに気づきカチューシャに注意をしようとしたのだが、カチューシャは、完全に頭に血が昇って冷静さを失い、その忠告など意に介さず、ただフラッグ車を追い回せと叫ぶのであった。

その頃、反転して先程の廃村へと向かっているIV号とIII突では、みほがキューボラの上に立ち、周囲を見渡していたが、直ぐに車内に戻ると、秋山に声を掛けた。

「優花里さん、もう一度偵察に出てくれる？」

「はいーお任せくださいー！」

そう答えるや否や、秋山は装填手のハッチを開くと、走行中のIV号から勢いよく飛び降りて着地すると、みほ達に手を振り、廃村エリアを見渡した。

「何処か、高い所は………あ、彼処ならー！」

その時、少なくとも廃村エリア一带を見渡せそうな建物を視界に捉え、秋山はその建物へと駆け寄り、大急ぎで階段を上り始めた。

そして、大洗の3輜を追っているプラウダ本隊でも、勝負に出る準備が整いつつあった。

『遅れてすみません！IS-2、只今帰参です！』

そう、現在のプラウダ戦車隊では最も高い火力を誇り、ティーガーの前面装甲もぶち破る強力な122ミリ砲を搭載した重戦車。IS-2スターリン重戦車が本隊に合流したのだ。

「来たーッ！ノンナ！代わりなさい！」

「はい」

待ち望んでいた味方の到着に、カチューシャは歓喜の声を上げ、ノンナに搭乗車両の交代を指示する。プラウダの砲手であるノンナと破壊力のあるIS2。この両者が合わさることによりまさに最強の戦車が誕生するのだ

カチューシャの指示通り、IS-2に乗り移ったノンナは砲手の席に座ってスコープを覗くと、直ぐ様引き金を引く。

轟音と共に放たれた122mm砲弾は、八九式の直ぐ隣に着弾し、八九式は大きく揺れる。

「二！うわあああああつ！！」

その大きな振動に、車内は軽く混乱する。

「な、何なのよアレは！？反則よ！校則違反よ！」

IS-2の威力を間近に見たみどり子がそう叫ぶ。

「あわわわわわっ！！？どうしようく！！！」

その振動が伝わったのか、M3操縦手の坂口が悲鳴に近い声を上げる。

「私達の事は良いから、アヒルさんを守ろう！」

「そうだよ桂利奈ちゃん！頑張って！」

「ッ！よっしやーッ！！」

そんな桂利奈をあゆみと優希が励ますと、桂利奈は力強く答え、八九式を守るよう、自らの車体を盾にするのであった。

そんな追いかけてつこが繰り広げられている中、その様子を遠くから見ている戦車があった

「IS2か……あんなのを喰らったらひとたまりもないな」

それは義弘の乗るパンターそしてエレーナの乗るBT7だった。

「……で、篠原。お前の腕でIS2の砲弾は迎撃可能か？」

「何を変なことを言っているのよ。風の音と風向きが分かれば可能よ。しかも向こうはご丁寧なことに機銃曳光弾で明るくしてくれているおかげで見えやすいわ」

砲手レンズでIS2を見る篠原は武藤の言葉にそう答える。

「みほたちはあの廃村でフラッグ車を見つけて三突とともに撃破する……だが、その前にあのIS2にアヒルさんが撃破されたらたまらんな……篠原。久しぶりにあれをやるか？」

「あれですか……まあ狙撃に比べれば相手の集中を削ぐことができ  
るわね？それよりも本気？」

「ああ。あの伝令の子に言った通りイツチヨ暴れて白熊共の首元に噛みついてやるか？」

俺がそう言うのと篠原たちは頷く。すると

『Предположение……なら、わたしたちはIS2や傍に  
いる二両のT34／85にちよつかい出してアヒルさんが撃破  
できないようにします』

「すまないがお願いできるか？」

『Без проблем……大丈夫です。雪上の戦車戦はロシアの  
戦車乗りにとっては十八番です。奇麗に舞って見せます』

「よっしゃ。じゃあ……行くぞ」

そう言い、義弘は軍帽を深くかぶりそして、笑うのであった。

一方、あんこう、カバさんチームは廃村でプラウダのフラッグ車を発見し、それを追いかけていた。途中でフラッグ車の護衛であるKV―2重戦車に出くわしたが、五十鈴がKV―2のウィークポイントを

狙い撃ちしてこれを撃破した。あとはフラッグ車を撃破するだけだったか……

『カモチーム撃破されました！アヒルさんチームの皆さん、健闘を祈る!!』

「あとはアヒルさんだけだよ!!」

「……うん」

だが、向こうもウサギさんチームとカモさんチームがやられ、これでフラッグ車の防衛は居なくなってしまった。

「義君……」

みほが小さく呟いた瞬間。風が吹いた

「え?」

その風にみほは少し驚いた

「どうしたのみほりん?」

「ううん……なんでもない」

実はそう言い敵フラッグ車に集中する。だがみほには聞こえた。風に交じって狼の遠吠えが聞こえたのを……

「あと一つ……」

フラッグ車の盾となっていたカモチームのルノーを撃破したノンナはそのままアヒルさんチームの八九式を狙う。

ノンナだけではない、カチューシャも、クララも、プラウダの車両が次々と八九式に砲撃を放っていく。

「もうダメかもお……」

「泣くな！涙はバレー部が復活したその日の為にとっておけ!!」

そのあまりの状況に弱音をはいてしまう佐々木をキャプテンの磯辺は鼓舞する。

「大丈夫！こんな砲撃、強豪校の殺人スパイクに比べたら全然よね」

「そうね……でも今はここが私達にとっての東京体育館、あるいは代々木第一体育館!!」

「……それそれそれ!!」

再び気合いを入れ直したバレー部の彼女達はプラウダの砲撃の嵐から孤軍奮闘逃げ回る。だが、走り回る八九式をと絶えたノンナは引き金を引いたそしてはなたれた122ミリ砲は八九式の方へと飛んでいく。

だが砲弾は八九式に当たる寸前で爆発した

「「っ!」」

突然の砲弾の爆発にノンナはおろかカチューシャも驚いた

「(信管異常?・・・いや違う。何かに迎撃された?そんなはずは・・・)」

ノンナが原因考えたその瞬間、突如暴走族のラツパの音が鳴り響き、BT7が飛び出してきた

「行くわよ天野!樋口!」

「合点!!エレーナの姉貴」

「おっしやード派手に行くぜ!バカヤロツ!!」

エレーナの言葉に二人は返事をし、そして彼女の乗るBT7は早い速度でアヒルを狙っていた先頭にいるIS2と両脇にいるT34/85に向けて40ミリと機銃を撃ちあたりをぐるぐる回りながら挑発し始める

「なんなのよ!あの快速戦車!!鬱陶しいわね、払いのけなさい!!」

『(はい、カチューシャ様)』

カチューシャはすぐに周りの車両に指示を送る、真っ先に動いたクラウラが砲撃を放つがBT7はすらりすらりと躲す

「何なのよ・・・っ!?!」

カチューシャは忌々しげにBTを見るがすぐに何か気づいた

「(そう言えば、ヨシーシャがいない・・・)」

先ほどノンナが言いかけたこと、それは義弘の乗るパンターの姿が見えない。そのことを思い出しさらに義弘が言った言葉を思い出した

『雪の上で常に白熊が勝つとは限らない。せいぜい狼にその喉を噛み切られないように注意しろ』







繰り広げていた。数では圧倒にこちらが上だが、味方の撃つ砲撃は次々と躲されパンターを打ち取るどころか逆に次々と撃破されていった。

素早い砲撃と運転技術。それは車内にいる乗員たちの息がぴったりに出なきやこんなことは出来ない技術だ

「まるで侍の居合斬りね……そうまるで幕末の人斬りのような……」  
観客席で見るしほはそう呟くと隣にいるまほは

「はい。義弘は遠距離の狙撃や偵察もそうですが、一番の得意な戦法は至近距離から多数の敵を撃破する格闘戦術です。三年前の練習試合で義弘はその戦法で無傷で勝利しています」

まほは昔のことを思い出す。三年前。義弘やみほがまだ中学二年あたりだったころの話だ。西住流崇拜者の先輩たちに喧嘩を売られたときがあった。理由は西住流のやり方にそぐ合わない義弘の戦法や戦術が西住まほに気に入られているということであった。

そして彼女たちは義弘の乗る戦車一両に対し50両。しかも相手はベテランばかりであったのにもかかわらず義弘はそれを無被弾で全車両撃破したのだ。そのことは黒森峰では半ば伝説となっている。「あの子は高杉流の最期の子……そして高杉流の得意戦術は奇襲と接近戦による格闘戦術。かつて流派殺しと恐れられた高杉流の戦い方よ」

そう言いモニターを見るロスマン

「あのバカ弟子……結局無茶な戦い方をしているのね」

と彼女もまたモニターを見て弟子である義弘の試合を見ているのだった

『此方4号車！やられました！』

『5号車、右履帯を破壊され、きやあああつ!!』

圧倒的な数で向かっているにもかかわらず一両……また一両と味方の車輛が撃破されている光景にカチューシャは恐怖を感じた

「さすがヨシーシャね……敵に回すとこんなに怖いだなんて……」  
冷や汗をかきながらカチューシャは呟く。ある戦車は履帯や転輪を粉々に吹き飛ばされ、またある戦車は、横倒しになって黒煙を上げている。

次から次へと、悲鳴に近い声がインカムから響いてくる。

もし義弘と出会う前の彼女だったらあまりの恐怖で泣き叫んでいただろう。だが今の彼女はプラウダの隊長の前に義弘の姉弟子。弟弟子の前でみっともない顔はできなかった

「でも負けるわけにはいかないわ……姉弟子として弟弟子に負けるわけにはいかないんだからっ!!」

そう言いカチューシャは車内にいる操縦手や砲手らに的確な指示を出しパンターを砲撃しパンターもまた砲撃をする。ただ暗い中しかも双方最大速度で走行しているので砲弾はなかなか当たらなかつた。するとカチューシャのT34の放った砲弾がパンターのすぐそばに着弾するその時、雪の塊が大きく宙に舞うその中に、雪に交じったソフトボールくらいの石が義弘に向かっていった

「っ!？」

一方ノンナとクララーは一刻も早くフラッグ車を撃破すべくまず敵フラッグ車である八九式の護衛につきそしてこちらを挑発しているBT-7を撃破しようとしていたが、BT-7はまるでスケート選手のごとく可憐に避けていた

それはノンナの狙撃でも撃破することができなかった

「あのBT-7……何者でしょう?」

不思議に思っているノンナに対しクララーは

『あの動き……前にもどこかで見たことが……』

そう思った瞬間BT-7のハッチから車長と思わしき人物が身を乗り出しそしてこちらへ振り返り笑う姿を見た

「っ!?」

暗闇の中で雪に雫に反射し見えるその姿はクララと同じくロシ  
ア人で短い銀髪の少女の姿だった

『あの人は……まさかっ!?』

クララは最初、彼女を見かけたときどこかであった気がした。そ  
して今この戦場で戦いそして笑みを見せる彼女の姿を見て彼女が何  
者か思い出したのだった

「いや／＼なかなか当たらないね……ねえ義弘?」

パンターの車内で道子がそう言うが義弘は返事をしなかった。彼  
は今キューポラから身を乗り出しているとはいえインカムで会話が  
聞こえているはずだ。そのため返事がないのに不思議に思った

「車長?どうしたんですか?」

装填手である小波がそう訊くと、

「え?……ああ大丈夫だ……」

身をかがませ頭を押さえた義弘がそう答える

「義弘?どうしたの?」

「いや。大丈夫だなんでもない。それより。次で決めるぞ。篠原頼む  
ぞ」

「ええ。わかったわ」

そう言い再び彼はキューポラから上半身を出す。そしてカチユ  
ンヤも

「次でおしまいにしてあげる!!」

次で決着をつけるためカチユンヤは全速でパンターに向かい。  
そしてパンターもT-34に向かっていくそして

「撃てえっ!!!」

両者が怒声に近い大声で言った瞬間、両社から砲弾が放たれた。そしてT―34の砲弾はパンターの砲塔のすれすれで外れ、そしてパンターの放った砲弾はT―34の砲塔の防楯の下に当たり弾かれ車体に命中。いわゆるショットトラップにより撃破された

「よしっ！敵隊長車撃破！」

道子がそう言う

「やったか……」

義弘が安心した表情をした瞬間

「ぐっ!!」

急に肺を抑え込むのだった

「大丈夫義弘？」

「ああ……大丈夫だよ問題ない」

と彼がそう返事するのだった

そして同時刻、廃村エリアでは雪に埋もれた皿突が砲口から白煙を上げ、その真ん前では、プラウダのフラッグ車であるT―34／76が黒煙を上げていた。

そして………アナウンスが鳴り響いた。

《試合終了！大洗学園の勝利!!》



そう言いまほはモニターに映るみほを見る。その目は姉としての目ではない。ライバルを見る西住流の戦車乗りとしての目であった  
「(やれやれ・・・素直じゃないわねしほは・・・さて)」

ロスマンはモニターに映る義弘を見て

「(そろそろあの子にもきちんと話をつけないとね・・・)」  
いつものにこやかな表情とは違い、厳しい顔つきをしていたのだっ  
た

一方、カチューシャはT―34のキューボラから見ていたカチュー  
シャは、未だ信じられないと言わんばかりの表情を浮かべて啞然とし  
ていた。

だが、だんだんとはつきりした

自分は負けたのだと・・・

「……………クッ……………うう……………」

その事実を知ると悔しさがこみ上げ、弟子の前では泣かないと決  
めたはずなのに、ついに我慢できずカチューシャは目尻に涙を浮かべ  
る

「どうぞ……………」

その時、何時の間にかIS―2から乗り移ってきたノンナが、ハン  
カチを差し出す。

「な、泣いてないわよー！」

そう言っただけながら、カチューシャは差し出されたハンカチで  
鼻をかむ。

「それにしても、こっ酷くやられたわね……………」

そう言っただけ、カチューシャは後ろを見やった。共に振り返ったノン  
ナも、ただ無言で頷く。

彼女等の視線の先には、クララが乗っていたT―34と、自分達  
の戦車の3輦を除いた全車両が白旗を上げていた。

その光景は、正に台風の後だった。



「本当に……強くなったんだ・ヨシーシャ」

と、ぽつりと呟く。その表情は寂しそうにも見えたが同時に嬉しそうな表情でもあった

「カチューシャ？」

「なんでもないわ！それより行くわよノンナ！」

そう言いカチューシャはノンナを連れてどこかへと向かうのだった

「なるほど……雪の中にか。すごいなみほ」

「ううん。私だけのせいじゃないよ」

大洗の集合場所に戻った一行は、試合後の挨拶を終え、今回の試合の事で盛り上がりを見せていた。

「今回の試合も、西住ちゃんと武藤君の活躍あつてのものだね。ありがとう」

杏がそう言うと、続いて桃も頭を下げる。

「フラッグ車を撃破したのはみほ達なんだ。俺はプラウダの連中に殴り込みしただけだよ」

「謙遜しちゃって〜」

笑みを浮かべながら言う義弘を杏がからかっていると、其所へ、肩車をしているからか、1つに合わさったように見える2つの人影と、独立した1つの人影が近づいてきた。

「せっかく包囲網の一部を緩くして、そこに引き付けてぶっ叩くつもりだったのに、まさか正面突破されるとは思わなかったわ」

カチューシャとノンナ、そしてクラーラだった。

「私もです」

「……え？」

「あそこで一気に攻撃されてたら……負けてたかも」

「それはどうかしら、もしかしたら……と、とにかく、あなた達、なかなか

かのもんよ。言つとくけど、悔しくなんてないんだからね！」

完全なツンデレ台詞に、大洗のメンバーは唾然とした表情を浮かべる。

「ノンナー！」

「はい……………」

それを余所に、カチューシャはノンナの肩車から降りてみほの前に立つと、無言で右手を差し出した。

「あつ……………」

その行動に、一瞬戸惑いを見せたみほだが、やがてその表情に笑みを浮かべて右手を取り、握手を交わした。

「決勝戦、私たちも見に行くわ。カチューシャをガツカリさせないでよね？優勝しなかつたら、許さないんだから」

「！はいっ！」

その激励に、みほはしつかりとした返事を返した。

「それと……ヨシーシャのことなんだけど」

「義君のこと？」

「ええ。そうよ。あの時義弘を渡していたら私はあなたのことを認めなかつたわ。でもあの戦いを見てわかつたわ……」

そう言うときカチューシャは軽く頭を下げ

「弟子のこと任せるわ……カチューシャにとっては大切な弟子なの。だから……アイツのことお願いできる？」

そのことにみほは少し驚くと

「……はい！任せてください私にとつても義君は大切な人だから」

「そう……安心したわ」

そう言い二人は再び握手をするのだった

一方、その頃

『何ですか？こんなところに呼び出して？』

BT7の車長であるエレーナがクララとロシア語で会話していた理由はクララが彼女を呼び出したのだ

『やはり…あなたでしたか……氷の妖精』

『何のことですか？』

『とぼけてもダメです。ロシア戦車でその名をとどろかせた戦車乗り……』『氷の妖精エレーナ』かつてあなたが呼ばれた名よ。あの軽快な動きそしてあの戦いに見せたあなたの顔。忘れようも忘れないわ』

クララはそう言う。どうやらクララはロシアでエレーナと面識があるみたいだ。実はエレーナは日本に来る前はそれなりにロシアでは有名な戦車乗りだったのだ。どんなに砲撃してもひらりと躲し、そして砲塔から顔を出し、その見せる笑顔に。相手からはまるで氷の妖精だと言われたため氷の妖精と仇名された。

『二年前、突如ロシアから消えたあなたがなぜ……』

それに対しエレーナは

『昔の話です。それに私は小さいころから日本が好きでね。親の仕事も都合があつて日本に引っ越してそして大洗で生活していた。ただそれだけの話です……まさか再び戦車道をするとは思いませんでしたが』

『プラウダに来る気はないかしら？あなたがこっちに来れば……』『せっかくのお誘いだけど、私はロシア風の水よりも、ああいうほのぼのした水の方が好みなのよ。それに今の学校生活も悪くないわ』

『そうですか……残念です』

エレーナの言葉にクララが残念そうに言う

『縁があればまた会いましょう……』

そう言いエレーナは仲間の方へと戻って行くのだった

「何とか勝てたな……」

場所は戻り、大洗チームでは皆が帰る準備をしていた。そして義弘は勝てたことに安心していた。今のところみほたちが廃校を回避するための道も一歩、進むことができたからだ

「あとは．．．黒森峰か」

次の相手は黒森峰。正直かなり厳しい相手だ。生半可な戦法邪倒すことができない強敵。

義弘はそう気を引き締めようとした瞬間

「ぐっ!!!」

強烈な激痛が体を走り、義弘は苦しそうに肺を押さえしやがみ込んだ

「義君！大丈夫!？」

それを見たみほたちは慌てて義弘のもとへ行き彼に言う

「ああ．．．大丈夫だ」

みほたちに心配かけないようにそう言う義弘だが、彼の今の姿に説得力はなく

「そんな風には見えないよ！」

「そうですよ！苦しそうじゃないですか！」

沙織と秋山がそう言う

「やっぱりあんたどこか具合でも悪いんだろ？早く病院に！」

「篠原さんの言う通りだ無茶はするな」

冷泉もそう言う

「みんなの言う通りだよ義君。病院へ行こう。ね？お願い義君」

みほがそう悲しそうに言い義弘を説得しようとする

「みほ．．．ぐっ！」

「義君!!」

義弘が何か言おうとした瞬間。義弘はみほの前に倒れ雪に埋もれる。

「(どうしたんだ!?体が．．．動かない!?)」

体が急に動かなくなったことに驚く義弘。そして

「ゴホッゴホッ!!」

「っ!？」

苦しそうに咳をし、そして急に額から血が流れ雪を真つ赤に染める。それを見たみほは

「義君!!」

と叫ぶ。みほが義弘を呼びかけるが義弘は答えず苦しそうな表情をし、そして真つ赤な血を吐いた

「義君!」

「武藤殿!」

「武藤!」

「武藤さん!!」

みんなが慌てる中、義弘の意識はだんだんと薄れていく

「(くそ………やっぱり時間切れかよ)」

血を吐き、体も動かない彼が最後に見たのは、泣きながら自分の名を呼ぶみほの姿であった………

## 師弟

「…君…義君!!…義君!!」

誰かが俺を呼ぶ声がする。暗い闇の中に響く凜と澄んだ声……

「……………」  
うっすら眼を開けるとそこは白い部屋……どうやら病室のよう  
だ

「義君！良かった……目を覚ました」

目を覚ました俺に涙を目に溜め安堵するみほの顔があった

「みほ……どうしたんだよ？涙目になって？」

状況が追いつかない俺はみほにそう訊くとみほは

「どうしたんじゃないよ!!」

「っ!」

いつも引っ込み思案な時とは違う大きな声でそう言うみほに俺は  
思わず驚いてしまう。

「どうしたのじゃないよ！義君、急に血を吐いて倒れるし！何度、名前  
呼んでも返事してくれなかったし……もう目を覚ましてくれな  
いと思っただから……」

泣きながらそう言うみほ。

「みほ……すまない心配かけた」

そう言い俺はみほの頭を優しくなでた。すると俺は

「そうだみほ。俺はどのくらい寝てんだ？それに……は？」

「義君が倒れてから1日ぐらいだよ。急いで近くの病院に運んだんだ  
よよ……先生が言うには脳震盪で倒れたって」

「脳震盪？」

「うん。審判の人がモニターで確認したら、義君が他のプラウダ校の  
車輛と戦っている最中にソフトボールぐらいの石が着弾の時飛んで  
義君の頭に当たっていったって……」

……あのときか

「それで先生が言うには翌日には退院できるみたい」

「そうか……」

俺はみほの言葉に少し息をつきながらそう言う。倒れたのは肺血病の症状もそうだが、大きな理由としては石が頭に当たって脳震盪を起こしていたようだな……。だがそう言うことなら俺の病気のことばばれていないということなのか？……。俺は少し肺を押さえる「義君？……」

「みほ……実は」

俺が彼女に肺血病のことを言おうとしたが、時……

「あつ！武藤良かった。目が覚めたんだ」

そこへ武部たちが入ってきた

「武藤殿大丈夫ですか？」

「秋山か……。すまない、心配かけた」

「ほんとだよつ！みんなすつごい心配してたんだよ！」

「沙織の言う通り、本当だ……。死んだかと思つたぞ」

「本当です一時はどうなるかと思いましたがよ？」

と、みんなそれぞれ心配そうに俺にそう言う。

「本当に済まないみんな……」

俺はただ謝ることしかできなかった。

「でもよかったです。武藤さん。何事もなくて……」

「ああ……。普通なら大怪我じゃすまない。下手をすれば脳挫傷を起こしてもおかしくなかった……」

「でも！武藤も武藤だよ！体の具合が悪いのにあんな無茶して、篠原さんめちやくちや心配していたよ！なんで体の具合が悪いなら悪いってばかり言わなかったの！」

「あはは……本当にごめん。後で謝りに行くよ……。それで俺は本当に脳震盪で倒れたのか？」

「医者の話によればそうだ」

「そうか……」

俺は再び、この病院の医者は俺は肺血病にかかっていることに気づかなかつたみたいだ……。その後、俺とみほたちは軽く話した後、面会時間終了の時間になり

「じゃあ、義君。また明日、学校で会おうね」

「ああ……」

そう言いみほは退室した。そしてしばらくして部屋の中で一人になった俺は

「……結局言えなかったな……」

一人でぼつりとつぶやくのだった。すると……

「それは肺血病のことかしら？」

「っ!？」

聞き覚えのある声、俺は声のする方を見ると、そこには中学生と思えるぐらいの短身で銀髪の女性が立っていた

「……先生」

そこにいたのは、戦車道での師匠である。エディータ・ロスマン先生だった。

「なんで……」

「なんでここに？かしら？決まっているでしょ？大バカ弟子の様子を見にドイツからわざわざ来たのよ。到着したのは準決勝の前日だったかしらね？」

そう言う先生だが顔は笑っていないかった。それは怒っているときの表情だということはわかる。先生は少しきつめの表情で

「義弘……私がここに来た理由……わかってるわよね？」

流暢な日本語でそう言う先生。

「はい……約束を破った俺を叱りに来たのですか？」

「最初はそのつもりで来たけど、もはやそれを通り越して呆れているわ。義弘」

と、あきれた声でそう言う先生。そして……

「……で、永琳からあなたの症状を聞いたけど……これ以上やると本当に死ぬわよ？」

厳しい目線で俺に言う先生。これはお願いでもなければ提案でもない。あの目を見てわかる。

それは「もう戦車道を辞めろ」という命令に近いものだった

「今回は診断では脳震盪という扱いだったけど。そっちも危ないけど何より肺血病の症状が出て倒れたのも一つの原因でしょ？あの医者



はあなたが肺血病だということを見抜けなかったみたいだけど。もうこれ以上は止めなさい……これは師匠としての命令よ」

「……先生。俺は」

「言っとくけど拒否権なんてあると思わないで頂戴。義弘。もう潮時よ」

「だが……今大洗は優勝しなければ廃校になる。そうなればみほやみんなの居場所がなくなる……俺が抜けるわけには」

俺は先生にそう言う……

「己惚れるな!!武藤義弘ツ!!」

「っ!」

今まで聞いたこともない怒声に義弘は驚く。いつも修行の際怒られたことは何度かはあったがここまで怒鳴られ怒られたことは一度もなかったからだ

「お前は一人だけの力で大洗を勝利に導いてきたと思っているの?お前がいなければ大洗は試合に勝つことができない弱いチームだ?思い上がるのも甚だしいわよ!!あんたが思っているほどあの子たちは弱くはないわよ」

「そうは思っていない!今までの勝利はみほの作とそしてチーム全員でなしたことだと思っている……だが、決勝の相手は黒森峰……かつて俺やみほがいた場所。そして、まほさんがいる学校だ。今までの相手とはわけが違う」

「……それで?」

「黒森峰はいわば王者の学校。そして相手がたとえ無名だとしても絶対に容赦はしない。特にみほが率いるのならなおさら……恐らく」

そう言い俺はアレの存在を先生に言う

「なるほど……確かにみほさんの戦術は黒森峰には相性が悪い……それにまほさんならそれを投入してもおかしくはないわね……20年前もそうだったし」

「え?」

「いいえ。なんでもないわ。こつちの話よ。それより話をそらさないで。なに?アレが出るかもしれないから試合に出してくれと。私が

それを許すとても?」

目を細め、厳しい言葉で俺に言う先生。

「俺は中途半端なことが嫌いな先生は知っているでしょ?」

「だったら死んでもいいの?」

「・・・先生。永琳先生から聞いているならわかるだろ?俺の命はもうすぐ尽きる。しかも症状はいつ死んでもおかしくない状況。こうして普通に話すこともおかしいぐらいのになぜ俺は生きて・・・いや生かされているのか。それは俺の命は・・・」

俺がなぜ自分が生かされているのか言おうとした時・・・

「これ以上言うのは止めなさい義弘。ここから先は聞きたくもないわ」

と俺の言葉を遮る先生。そして

「あなたの言いたいことはわかった。私がどう止めようとあなたは無理にでもやるでしょうからね・・・もう好きにきなさい。やっぱりあなたは大バカ弟子よ・・・だけどそれと同時に息子のように誇りに思ってるわ」

「先生・・・」

「でもね義弘。あなたの我儘で悲しむ人たちがいること。決して忘れてはいけないわよ?」

「・・・わかっています・・・皆に迷惑をかけることになってしまふことを。でも俺は簡単に死ぬ気はありませんよ・・・今病院で過ぐすよりも戦車に乗ってこの病を乗り越えたいと思っています」

「そう・・・本当に母親と同じね...その頑固で我を通す所はね」

「すみません先生」

「本当よ。殴って気絶させてもあなたを連れ戻そうと思ったけど、あなたのことだからすぐに逃げ出しそうだしもう諦めたわ。あなたほど困った弟子は本当にいないわ」

頭を抱え、ため息交じりに言う看護婦さんが入ってきて

「あの・・・もう面会時間は・・・」

「ああ。すみません・・・じゃあ義弘。今日のところは帰るけどさっきの話決して忘れてはダメよ」

「はい」

「そう言い先生は部屋を出ようとすると立ち止まり」

「ああそれとね・・・私はバカ弟子の命が掛かっているのに何もしいほど愚かじやないわ。明日・・・彼女たちの決意：いえ実力を試させてもらってもらうわよ」

「何をやる気ですか？」

「単純にあなた無しであの子たちがどれだけ戦えるか・・・試すだけよ。決勝までまだ時間があるみたいだしね」

「それって・・・」

「余計な心配。一切無用。あなたは決勝まで温存しておきなさい・・・永琳が言うにはあなたが試合をできるのはあと1回が限界みたいだからね・・・言いたいことわかるわね？」

「はい・・・黒森峰戦・・・それが俺の最後の戦いです・・・あとは天に任せます」

「そう・・・」

「そう言い先生は部屋を出てしまう・・・」

「・・・最後か・・・」

「俺はそう言う。もしかしたら俺は近いうちにみほとちゃんとお話し合わなければならぬのかもしれない。そう思った」



そして生徒会メンバーと隊長であるみほ。そして副隊長補佐である義弘は生徒会室に集まり作戦会議をしていた

「決勝戦は20両まで言いそうですから、おそらく相手戦車の配置は・・・ティーガー、パンター、ヤークトパンター・・・」

「他にティーガーIIやヤークトティーガーも出てくると厄介だな・・・」

「うん・・・これじゃ、あまりにも戦力の差が・・・」

みほの言葉に皆は困った表情をする。それは俺も同じだ。今の大洗の数と黒森峰の数は圧倒的に黒森峰が多い。しかも練度は間違いなく向こうが上・・・今のこの戦力でも正直言つて厳しい

「どこかで戦車たたく売りしていませんか?」

小山が困った顔でそう言う

「いろんな部活が義援金を集めて出してくれたけど、戦車は無理かもね・・・」

「その分は今ある戦車の補強・・・または改造に回すしかありませんね會長」

角谷がそう言い河嶋がそう答えると河嶋は

「そう言えば、この前見つかった88ミリはまだか?」

河嶋さんの言う88mmとは、二回戦の前に武部と一年共が船内を迷子になりながらも見つけたアレである。

「散らばったパーツを自動車部の人たちが組み立てていると思うけど・・・」

「そうか!あれさえあればこの戦況を打破できるはずだ!!」

と、河嶋さんが自信満々に言う・・・小山さんのポケットから電話が鳴り

「あつ・・・電話、はい」

小山さんはそれを受けると一言二言会話を交わして静かに電話を切ると笑顔を見せた。

「レストア!終了です!!」

「よしっ!!」

小山さんの嬉しそうな言葉に河嶋さんも嬉しそうに言う。そして義弘たちはその戦車のもとへと向かうと

「すごいー!」

「強そう!!」

現場に付くとどこから情報を仕入れたのか、すでに秋山と一年共が居た

「これ!レア戦車なんですよね!!」

秋山は嬉しそうにそう言う。確かに彼女の言う通りレストアが完了した戦車はレアというべき珍しい戦車だった。その戦車とは……

「ポルシェティーガー……」

「マニアにはたまらない一品ですよねー」

秋山が嬉しそうに言う。そうあの時発見された車輛はかの重戦車ティーガーIの試作車輛の一つであり、かのスポーツカーメーカーのポルシェ社が開発した戦車だ。

だが、秋山が嬉しそうに言うに対し河嶋は落胆した声を上げたその理由は……

「まあ、地面にめり込んだり、加熱して炎上したりと壊れやすい戦車なんですよね……」

そう、ポルシェティーガーが正式採用されなかった理由はこれであった。エンジンは当時ハイブリットだった電気モーター式。だがこれが原因でエンジンが故障、思うような性能を出すことができずに不採用になってしまったのだ

そして、今日の前に走るポルシェティーガーは秋山の説明道理に地面にめり込みしまいには小さな爆発音と共にポルシェティーガーから火災発生である。

「あちゃー、またやっちゃった。ホシノー、消火器」

ひよこつと顔を出した自動車部のナカジマさんが特に慌てる様子もなく消火作業を始めた

「戦車とは呼びたく無い戦車だよね?」

それを見た角谷は苦笑いしていた

「でも！主砲の88mm砲の威力は絶大！装甲だつて前面100mmと重戦車にふさわしいスペックですから!!」

と、秋山が弁護した。そしてそれを見た小山さんも

「もう他に戦車はないんでしようか……」

と本当に困つた表情を浮かべていた

その後も着々と決勝戦への準備が進んでいた

「とりあえず義援金でヘツツアー改造キット買ったから、これを38(t)に取り付けよう!!」

と、角谷さんが自信満々にそう言う、今の38tでは威力不足なため、駆逐戦車ヘツツアーに改造しようというのだ。まあヘツツアーも元をたどれば38t改の改造だから問題はないはずなんだが……「これって結構無理矢理よね……」

と、小山さんが苦笑する。まあ改造キットなんだからそれは仕方のない。

「あとはIV号にシユルツェンを取り付けますか？」

「いいねそれ!」

と、そう話し合つた中、義弘はというと……

「ついに間に合つたか……例の奴」

「はい。手に入れるのが大変だったと言つていましたよ」

「確かにその後で雪風に礼を言わないとな」

と、篠原と義弘は改造されたパンターを見る。そのパンターはただのパンターではなかった……

「パンターII専用砲塔……こんなのがあつたなんてね」

「初めて見るとなかなかのものだな」

そう、義弘が頼んだ者とはパンターの新型砲塔。そうパンターIIの砲塔と主砲だった。砲塔は六角形の大型の砲塔に主砲はティーガーIIと同じ71口径88ミリ砲であつた一見すればティーガーIIを小振りにしたような姿となつた

「これなら……なんとかか……行けそうだな」

「そう言い義弘はみほのもとへと向かうと

「へえー、IV号をH型仕様にしたのか」

「あんこうチームの元にやって来た義弘は、小豆色に塗装され、砲塔と履帯にシウルツェンを取り付けられたIV号戦車を見て言った。

「ええー！マークIVスペシャルですよ！」

「戦車好きの秋山が嬉しそうに言う。

「大戦時にコイツを撃破したソ連軍の人が、『ティーガー撃破だ！』とか言っただけなのに、その大半はコイツだったんだよな」

「まあ、この仕様となったIV号は、影だけ見ればティーガーにそっくりですからね」

「義弘がIV号を見ながら呟くと、秋山は苦笑を浮かべながら言う。

「そう言えば、カメさんチームの38tがヘツツアーになってたな。小山先輩曰く、『結構無理矢理な組み合わせだった』って……………」

「でも、ヘツツアーの主砲の威力は今のIV号のと同等ですから、多少無理矢理でも仕方無いとは思いますが」

「と、そう言う傍にいた角谷さんが

「ああ…そう言えば忘れてた」

「どうしたんですか会長？」

「今日、戦車道の教官が来るらしいよ」

「教官と言いますと……………蝶野教官んですか？」

「いいや。違うらしいよ。なんでもこの学校のOGだそうだよ？」

「と、角谷がそう言う中、義弘は

「……………まさか」

「昨日のことが頭をよぎった義弘は少し嫌な予感がした

「どうしたの義君？」

「ああ…みほ。実はその教官、もしかしたら俺たちの知っている人かもしれない」

「……………え？それって」

「みほが首をかしげるのだった



一人の女性が大洗学園の校門に立っていた

「……懐かしいわ……あの頃から、ちっとも変わっていないのね……」

懐かしむように校舎を見るその女性。すると……

「ちよつと、あなた誰ですか？中学生に見えるけど……他校の生徒は原則入れませんけど？」

校門にいた生徒会のそと子とその人物に気づき声をかけた。すると

「あら？ごめんなさい。久しぶりにこの学校に来たので……あら？あなた風紀員の子？まだおかつぱの伝統が続いていたのね、懐かしいわ」

「ですから何ですか？それにあなた誰ですか？」

少し疑うような目で見るそと子に対しその女性はふふつと笑い

「失礼しました。すみませんが、理事長先生か生徒会長さんと呼んで来てくださいますか？かつての卒業生である。エディータ・ロスマンがやってきたと……」

## 訪問者

整備が終わった日の翌日の朝、俺たちは戦車格納庫の前に集められた。その中に新メンバーがいたそれはポルシエティーターを操縦する自動車部ことレオポンさんチーム。

そしてもう一つはねこにやーさんたちだ。

アンツイオ戦前に俺とあった後、彼女はオンラインの仲間を集めチームを作ったそうだ。一人は百々眼帯をした子もがーさんに銀髪のぴよたんという人だそうだ。そして使用する戦車は三式中戦車「チヌ」だそうだ。なんでも駐車場にあったのを彼女たちが見つけたみたいだった

変だな・・・駐車場に三式なんて置いてあったけ？

まあ、それはともかく、彼女らの参戦で二両と言えど戦力が上がったのは事実だ。

そして格納庫に集められた俺たちはというと

「なんだろう?」

「何かあったのかな?」

みんなががやがや騒ぐ。

「静かに!!」

と、河嶋さんがそう大声で言う

「えく急にみんなを集めてもらったのは他でもない。今回の決勝についてだ。みんなも知っている通り、我々は勝たなくてはならない!負ければ・・・」

その言葉にみんなは黙り込む。彼女の言いたい言葉の先はみんな分かっていた。負ければ廃校。そうもはや後には引けない戦いだ。だ。

「そして決勝まで後1週間。そこで我々は黒森峰戦に向けて特訓をしなければならぬ。そこで今回決勝に向けて我々を指導してくれる教官がお見えになることになった」

とそう言う

「はいっ!」

と、坂口が元気に手を上げる

「教官って、蝶野教官のことですか!!」

そう言うのと河嶋は首を横に振る

「違う。今日来てくれる教官は何でもここの卒業生であり、戦車道の教官をし、数多くの優秀な戦車乗りを育てた有名な方だ。しかもわざわざドイツから来てくれたそうだ」

河嶋さんがそう言うのとみんなの反応は

「ドイツだつてすごい!!」

「しかも、この学校の卒業生だつて!!」

「じゃあ、大先輩じゃない!!」

と河嶋の言葉にみんなはどんな教官が来るのかワクワクする中

「(ぞくりっ・・・)」

みほ、義弘、道子の元黒森峰出身の三人は背筋に寒気がする感覚を感じた

「ねえ・・・みほさん。義弘。私なんだか嫌な予感がするんだけど気のせいかな?」

「え・・・と。道子さん。実は私も同じ感じがする・・・義君は?」

「ここの卒業生かどうかより、数多くの優秀な戦車乗りを育て・・・しかもドイツときたらあの人しかないよ・・・」

青い顔をする三人。その顔は昔のトラウマを思い出したかのような表情だった

だがその予感的中していた

「では・・・紹介する・・・どうぞ」

河嶋さんが言うや否や倉庫の扉の影から一人の女性が出てきた。

方まで伸びた銀髪に中学生か?と思えるくらいの若々しさに低身長・・・

「皆さん初めまして。ドイツから来ました。エディータ・ロスマンと言います。一週間の間ですがよろしくお願いします」

「ロスマン教官は、数多くの優秀な戦車乗りを輩出した名教官であり、現在はヨーロッパ戦車道連盟の理事長を務めておられる。そしてここ大洗学園の卒業生だ。今回わざわざドイツから来てもらった」

礼儀正しくお辞儀するロスマンに河嶋が説明する彼女に対し、三人は

「二(やつぱり、ロスマン先生だ・・・)三」

と、顔を少し青くした。だがみんなの反応は

「あれって?・中学生?」

「小さい・・・」

「本当に卒業生なのかな?」

「子供?」

と、みんな小声でそうひそひそという。そのことに先生のことをよく知る俺たちは苦笑する。確かに先生は小柄なうえに見た目も10代みたいな若々しい顔つき、中学生か子供と見られてもおかしくはない。

だがれっきとした成人女性である

皆の反応に先生は

「ふふっ・・・まあ、そう反応されてもしようがないわね・・・」

と、半ば諦めているのか軽く笑う。すると

「あの一!・この卒業生ってほんとですか!!」

と一年の澤がそう訊くと

「ええ本当よ。昔は日本に留学していてね。ここにはいろんな思い出があるのよ:・またここに来られるなんて思いもしなかったわ」

「昔というと・・・何年くらいですか?」

「それは秘密。強いて言うならあなたたちのお母さんと同じくらいかしらね?」

「でもお若いですね?何か若作りの秘訣とかあるんですか!!」

武部がそう言うのと、先生は嬉しそうな表情で

「あら、ありがとう。そうね:・特にないわね。私幼いころ重い病気にかかって以来、体の成長が止まってしまったの」

「じゃあ、教官はモテたことありますか!」

「そうね・・・私は特にないわね。でも私は私。貴女はあなたよ。きつと素敵な人に出会うわ」

「教官・・・」

と笑顔でそう言うと、武部は目を輝かせる。すると先生はみほを見て

「それよりも…お久しぶりねみほさん。かれこれ三年ぶりかしら？」

「あ…はい。お久しぶりです先生」

「そんなに緊張しなくてもいいわよ」

みほは少し戸惑いながらも返事をする。すると

「え？みほりん。知っている人？」

「…うん。ロスマン先生は私が中学の時の戦車道の先生だったの」

「え？黒森峰の!？」

「うん…」

「とはいっても教えていたのは基礎と座学だけだったけどね…」

「あら？もしかしてそこにいるのは」

と今度は道子を見て近づく。道子は体をびくつと震わせた

「もしかして篠原道子さん？」

「あ…えくと…どちらさまでしたっけ？」

「あら覚えていない？それにあなた髪型が変わっているけど道子さんよね？」

「ち、違いますわよ…わたくしの名前は…鈴木カトリーヌですわ」

「(苦しいよ…道子(さん))」

思わず偽名を使ってごまかそうとする道子にみほと俺は苦笑すると先生は

「あら？残念…道子さんだと思っていたけど。なら…」

『マビノギオン』と言えば何か思い出すかしら？」

「っ!？」

「確か…三年前は戦車に英霊の精霊がいるからとか、精霊と話すためのお祈りの儀式だとか『呪いを操る』、『異世界への移動法を語る』マビノギオンという魔術書を…」

「わああー!!! 恥ずかしくてから止めてください!! 思い出した! 思い出しました! ロスマン先生ですよね! 中等部の時お世話になった!!」

若干涙目顔を真っ赤にし大声でそう言う道子。

「あ〜〜思い出しました！先生。私貴女のことが大嫌いでした……本人が忘れていたような黒歴史を逐一覚えていた性格の悪さとか!!」「あら？私はあなたのこと好きよ。それに可愛い生徒の思い出を覚えるのもいい思い出だと思うけど？」

嫌そうな表情でそう言う道子に先生は気にせず笑顔でそう言う。そうロスマン先生は人の黒歴史を逐一覚えている人。それが皆が先生を恐れる理由だ。もし黒歴史を他の人にばらされたら……その後には察してくれ。

これは少し隠れた方がいいかな……俺がこっそり逃げようとする

「……どこに行くの義弘」

「っ!?」ビクッ!?

すぐに見つかってしまった

「せっかく師匠である私が久しぶりに教えに来たのよ？少しは喜びなさい」

「あはは……先生どうもまさかこんなに早く会うとは」

「武藤殿は教官のこと知っておられるのですか？」

苦笑いする中、秋山が訪ねると先生が代わりに答えた

「ええ。この子は私の弟子であり最後の弟子よ。他の子に負けず劣らずの素晴らしい才能を持っているわ……ねえ？」

「あ……はい恐縮です」

笑顔で言いながらも先生は俺に対し目で語る『また無茶していないでしょうね?』つと……昨日退院してからはしてませんよ……いやほんとですよ?」

「それで教官！今日はどのような訓練を行うのですか？」

と秋山が質問すると

「そうね……取りあえずはいつもの通りの訓練を見せてもらえるかしら?まずはあなたたちがどんなやり方をしているのか見て見たいわ」

「分かりました。西住。指揮」

「あ、はいー!」

河嶋さんの言葉に西住はチームに号令をかける。そしていつものように練習が始まった

隊列を組んでの走行や砲撃訓練。そして各車両分かれての紅白試合などをする中

「……やっぱり」

ロスマン先生は練習を見る中、真剣な表情でそう呟くのであった

練習が終わった後、皆はロスマン先生のところに集まるとロスマンは

「皆さんの訓練見させてもらいました。なるほど。数か月前まで戦車に乗ったこともなかった生徒たちが決勝まで上り詰めた実力もよくわかりました。この練度と腕があるなら黒森峰相手でも互角に戦えるでしょう」

ロスマンの言葉に皆は嬉しそうな表情をする。だが……

「ただ……それと同時に大洗には大洗ならではの致命的な弱点があります」

## 大洗の試練です

「弱点……ですか？」

「すみません、言い方が悪かったですね。正確には足りないものがあるわね」

みほの問いにロスマンがそう付け加え答えた。大洗に足りないもの……果たしてそれは何なのか？

皆が首をかしげる中

「角谷会長。確か明日は大洗に寄港でしたわね？」

「はい。そうだったよな河嶋？」

「はい。燃料補給や決勝会場へ向かうための停泊です」

「そうですね。それなら都合がいいですね。角谷さん。後で話したいことがありますけどよろしいですか？皆さんの足りないところを補うための特訓についてです」

「今ここで話すのはダメですかね？」

「それは明日のお楽しみに……では皆さん明日の特訓に向けてゆっくり休んでください」

「あ……はい」

そう言うとロスマン先生は角谷会長を連れてどこかへと去っていった

そしてその場は解散となるのだった

「……いったい何だろう？私たちに足りないものって」

「う、うん……義君は何かわかる？」

武部が首を傾げみほに訊くとみほは首を横に振り、義弘に何か知っているか訊くのだが……

「……」

生気のない。顔色でボーと立っていた。まるで幽霊のように存在が消えかかっているような感じであった

「義君？……」

みほは声をかけるが彼は返事をしない

「ちよつと武藤!!」



「武藤殿？」

「……え？」

みほに続き武部や秋山たちが声をかけて義弘はようやく気づき振り向いた

「大丈夫ですか？ボーとしておりましたが……」

「やっぱり武藤。プラウダ戦の時の怪我まだ直っていないんじゃないや……」

「大丈夫だ……少し疲れただけだから……」

そう言い義弘は立ち去ろうとすると、誰かが義弘の手を掴む。義弘は振り返るとそれはみほだった

「本当に……本当に大丈夫なの？義君？」

心配する目で彼にそう言う。その目は若干涙がたまっているのが見えた。恐らく前のプラウダ戦の時のように倒れないか心配なのだ

彼女の表情を見た義弘は彼女の手をほどき

「大丈夫だよみほ……大丈夫だから心配するな」

と、作り笑いをするのだったが、みほは義弘の赤い両目を覗き込むようにして見た後、言った。

「嘘だね」

「……………ッ！」

その言葉に、義弘は驚愕に目を見開いた

「義君。いつもそう……いつも何か大事なことを一人で抱え込むとき、いつもそういう笑顔をするもん……義君。何を隠してるの？何を抱え込んでいるの？」

みほは鋭い視線でそう言う。その目は間違いなく西住流の娘。しほやまほと同じなんでも見通すような鋭い視線だった。

「(やつぱ……みほはそう言うところ鋭いな……)」

義弘は彼女の鋭さに感心しつつ。やはり自身が肺血鋌に侵されていることを言えないという葛藤があった

「……………ごめんみほ。今は言えない……でもいずれ分かる時が来る……じゃあ」

そう言い義弘は立ち去るのだった

「……義君」

立ち去る彼にみほは

「(どうして……どうして話してくれないの……どうして……義君)」

彼女と距離を取り始める彼に彼女は複雑な気持ちを抱えるのであった

### 生徒会室

「……以上が特訓の内容よ」

「なるほどね、確かにうちには足りないところだね」

生徒会室では角谷とロスマン先生が明日の特訓についての打ち合わせをしていた

「あとは大洗の街の人に協力してもらおうように根回しを……」

「それなら心配いらないわ角谷さん。すでに町の人とは話を付けていますから」

「おや？意外と早いですね？」

「伊達にここのOGもとい生徒会長をやっていたわけではありませんから、生徒会の裏の根回しは20年前から代々続いてきたわけではなくてよ」

「それはそれは、いろんな意味で大先輩ですね教官」

「ふふっ……」

杏の苦笑に思わず笑うロスマン。すると杏は

「教官……つかぬことを聞きますが、武藤君についてどう思いますか？」

「義弘ですか……彼は私の最後の弟子です。素晴らしい才能を持っていると思います。それ以前に養子としても常に誇りに思っています。そう言う角谷さんはどうかしら？」

「そうだね〜真面目でいい子だと思いますよ。まあちよつとやんちゃだとは思いますが、いい後輩だと思ってます。西住ちゃんと一緒に私たちをここまで引っ張ってくれたんですから、感謝してもしきれないです」

「そう……………」

その言葉にロスマンはどことなく嬉しそうであつたが同時に少し悲しそうな表情をしていた。それを見た杏は

「…………教官。もう一つ、つかぬことを聞きますが…………武藤君て肺を病んでいたりとかしていますか?」

「…………彼から聞いたの?」

「いいえ。でもプラウダ戦の時彼が激しい咳をしたのを見たんです。そして彼が口をふさぐのに使用したハンカチを拾ったんですが、そのハンカチは血で染まっていました…………もし知っているのなら教えてください」

角谷はそう言うとロスマンは

「角谷さん。一つ訊きます。あなたは学園を救うため、一つの命を犠牲にすることは出来ますか?」

「…………やっぱり」

「ええ…………あと30日…………」

「え?」

「彼が生きていられるタイムリミットです…いえ、もしかしたら決勝であの子の命は……………」

「……………」

「角谷さん。もう一度訊きます。あなたは彼の命を生贄にし、学園を守ろうとする覚悟がありますか?」

その問いに角谷杏が出した返事とは……………

試練!! 大洗横断ウルトラクイズです!!

翌日、大洗の学園艦は母校である茨城県大洗港に到着した。数か月ぶりの本土上陸に学園のみんなや学園艦に住む人たちは皆ウキウキとした表情だ。

そんな中、大洗学園戦車道部は……  
ブツブツ!!

「うわっ！なんですかこのブーブーゲートは!?!」

なぜかブーブーゲートを通っていた。そしてアラームが鳴ったことに秋山は生徒会三人衆に訊くと

「船内の筆記クイズで合格点にならなかった物はブザーが鳴る仕組みだ」

河嶋が答え、次に冷泉がゲートを通ると正解を示すピンポン音が鳴り響く

「さすが冷泉さん全問正解ね」

「朝早く起こされて、雑学テストをされたのはこのためか……」

小山の言葉に冷泉は眠たそうにそうぼやく。そして次にみほが通ると、ピンポン音が鳴る

「ふう私もセーフ……」

「さすが西住殿です!!」

合格なことに安心するみほに秋山が嬉しそうにそう言う

「よおーし！一人ずつ順番に降りて来い!!」

河嶋の言葉に皆、一人ずつゲートを通るのであった。

そして全員がゲートを通り、波止場に降りると

「全員下船したわね?」

特別講師のロスマン先生がそう言う

「あの教官！なぜ私たちをここに集めたのですか?」

秋山がそう訊くとロスマンは

「今回あなた方には3つの試練を受けていただきます」  
「そう言うのがざわつく。」

「先生！まさか黒森峰時代のあの特訓をするんですか！」  
義弘がそう訊くと

「え？どういうことですか武藤先輩！」

梓がそう訊くと

「むかし、俺とみほとエリカ三人がした特訓だ！」

「ど…どんな特訓だったんですか？」

義弘の重々しい空気に皆は生唾を飲み込む

「ああ…重い亀の甲羅を背につけ、毎朝牛乳配達と昼は素手で土木工事をし、さらにはなぜか淡水なのに狂暴なサメがいる湖で遠泳されたりと…」

「違います!!」

「あいたつ!!」

ロスマンが教鞭杖で義弘の頭を軽くたたく

「確かに三人には特別な指導をしましたが、そんな特訓はい一度たりともしたことはありません！それは全くの別人です!!」

ロスマンが義弘の言葉を否定すると

「でも、重りの付いたリュックを背負わせて、黒森峰にしか生息しない熊から逃げる特訓させたのは事実でしょうが？」

「何か言ったかしら？」

「…なんでもありません」

「あはは…」

ジロリとロスマンに睨まれ義弘は黙り、それを見るみほは苦笑する。だがみほの表情から昔の彼女の指導は厳しかったのは事実みただ

「こほんっ!!それではまず第一の試練を始めます！名付けて!!」

咳ばらいをし、ロスマン先生は試練を開始する、そしてその第一試練は

「チーム対抗!!大洗横断ウルトラクイズ!!」

ロスマンと角谷が同時に発表したのだが…

「「「「はあ？」」」」」

案の定。皆は、ぽかんとした表情になる。それもそのはずだ。試練。しかも戦車道内では有名な教官であるロスマンの考えたものだからきつと厳し特訓だと思つてたのが、まさかのクイズ大会なのだ。「これから大洗4か所のチェックポイントでクイズをします。最下位の人はそのまま脱落ね」

「優勝チームには大洗店舗で使える商品券が授与される」

「せっかく久しぶりに陸に上がったのに何でクイズ大会をやらなきゃいけないの？」

小山と河嶋の説明に武部が不満そうに言う。河嶋が答えた

「会長と教官が考えた特訓だ」

「あのおく戦車道とクイズって関係がないのでは……」

秋山の言葉に皆が頷くとロスマンが

「確かに関係なさそうに見えますね……ですが、作戦指揮を西住さんに任せてばかりなのも問題があります。もし仮に敵が西住さん、あんこうチームを撃破したとしましょう。残つたあなたたちで戦闘しなければいけません」

「でもその時は武藤先輩が……」

梓がそう言う。大洗の戦車道チームではみほが隊長。副隊長が河嶋。そしてその補佐に義弘がいるのだが、事実上の副長は義弘になっている

だから、仮に西住がやられても武藤が指揮を取ればいいのではないかと主張すると

「もし、その彼もがやられたとしたらどうするのですか？」

「それは……」

ロスマンの指摘に梓は口ごもってしまう。

「万が一そうなつてしまった時、もしくは通信が途中で途切れたりしたら各自の判断で動かなければいけません。そのためには知力と臨機応変さが必要不可欠です。そのためのクイズ大会です」

「そう言うわけだから、貴様たちにはこのクイズ大会で知力を養うためクイズ大会をするのだ」

河嶋が説明すると一年生たちが

「知力の特訓なら、河嶋先輩も出た方が……」

「しれっと出題側に出ているよね？」

「おかしい！絶対におかしいよ！」

「そんなこと言っちゃだめだよ」

「だって」

と小声で言うところスマンはクスリと笑い

「安心して頂戴。河嶋さんも出てもらおうことになっているからね」

「え!？」

「あら？なんで意外そうな顔をするのかしら河嶋さん？」

「お、お言葉ですが教官、私たちは出題の準備や司会とか……」

「チーム対抗なんですよ？ならばカメさんチームも出なきやダメで  
しょう？特例は認めません」

「しかし、なんで私なんですか？」

「出題準備や司会の役は小山さんが適任ですし、角谷さんは正直言っ  
て出ても、他の皆さんに圧勝しちゃうと思うから勝負にならない  
し……それで消去法で河嶋さんしかいなかったのよ」

「で、ですが……私は……」

「つべこべ言わない！私は特別扱いはしない主義です！したがって拒  
否権はありません！いいですね！」

「は……はい」

ロスマンの鋭い視線に河嶋は頷くしかなかった。

「では、まず最初のチェックポイントに向かいます！」

「あの教官！」

「ん？なんですか磯辺さん？」

「私たちアヒルさんチームは全員ゲートでぶつぶくだったんですけど  
失格でしょうか？」

アヒルさんチームのリーダーでありバレー部のキャプテンである  
磯辺がロスマンに心配そうに訊くとロスマン先生は首を横に振ると  
「いいえ。あれはただの雰囲気づくりの物ですから、心配ありません。  
次からは本番ですから頑張ってください」

「よしっ！まだ戦えるぞ!!」

「二はいつ！キャプテン!!」

磯辺が気合よく言うの後輩である三人も力強く返事する。そんな中カバさん事、歴女チームは

「特訓とは名ばかりでクイズ大会をやりたいだけでは……」

「酔狂ぜよ……」

「生徒会にも劣らぬ歌舞伎ぶりだな……教官殿は」

「戦略的にも戦術的にも意味が見出せん……」

と、あきれたように言う

「アハハ……相変わらずだね。ロスマン先生は」

「うん……そうだなだが、無関係に見えてこういうのに意外と戦車道とかの訓練に関係あったりする者なんだよな……」

みほと義弘は苦笑いしながらそう言う

「こほっ！こほっ！」

と、義弘はまた咳をする

「義君？大丈夫？この頃、咳ばかりしてるけど……」

「ああ……心配ないよ。ほら。早く行かないと第一チェックポイントへ向かうバスに乗り遅れるぞ」

「あ！義君!!」

義弘はみほの言葉を遮り皆が乗るバスへと向かい、みほもまた彼の後を追うのであった



## 大洗横断ウルトラクイズ！第一の試練です!!

「第一チェックポイントはここです」

「そう言い、バスが止まった場所は磯崎神社へと続く長い階段であった  
神社？」

「そう、この神社で鳥居ダツシユクイズをしてもらいます」

「何ですかそれ？」

坂口が首をかしげると、ロスマン先生が

「私が問題を出します。正解が分かった子は、この階段の先にある鳥居まで行き、そしてその鳥居をくぐって先に戻ってきた子が回答権を獲得します」

「え〜クイズなのに？」

「あの石段を走って昇るんですか？」

大野と宇津木が不満そうに言う

「まあ、それはウルトラ横断クイズだから体力も必要なだよ〜」

「クイズはともかく角谷さんの言う通り、戦車乗りは体力が必要です。それを養うためも含めて行います」

角谷とロスマンがそう説明すると五十鈴が

「なるほど、理由がちゃんとあるんですね？」

と、納得したようにうなずいた。

「五十鈴殿！大丈夫ですよ！私が全力疾走します！答えなどは冷泉殿に訊けば！」

「任せろ」

「うん！チーム戦だもんね！こうなったらせめて商品券をゲットするしかないよー！」

「みんなで協力すれば何とかなるよー！」

あんこうチームの士気は高く、狼さんチームでも

「ここは断然、小波さんね。足が速いし」

「はい、お任せを」

秋山が出ることになり、そして武藤ら狼さんチームも小波が出るこ

とになり、そしてカバは左衛門佐、アヒルさんは磯辺、うさぎさんは山郷、カモさんはゴモヨ、キツツキさんは天野、新参のアリクイ、レオポンはモモガーと星野が出ることになり、カメさんはもちろん河嶋が出ることになった

「それでは第一問！」

と、ロスマンが問題用紙を読み上げた

「一般的に水は零度以下で固体。零度以上で液体……では沸点に達するとどうなりますか？」

と問題を読み上げると

「合点承知の助！」

「さすがにわかります！」

「小学校で習ったよ！」

「簡単だぜ！バカヤロ!!」

「「うおおおー！！！！」

あまりにも簡単な問題なため皆答えが分かったのか、猛ダツシュで階段を駆け上る。

それを見たあんこうたちは

「問題が簡単すぎるのでは……」

「これではただの徒競走だ……」

「ゆかりんも頑張っているけど……磯辺さんと天野さんが速すぎるよ」

「仕方ないよ。次でがんばろ？」

五十鈴と冷泉と武部が言う中みほがそう励まし、義弘たちも

「磯辺さん、天野が一位で小波さんが二位つてところか……これは回答権先にとられそうだな」

「そうですね……だけど、二問目で獲得できるんじゃない？」

「そうですね……それにしても河嶋先輩。まだ半分も登ってませんね」

「すでに息切れしているみたいだな二問目まで持つかな？」

と、そんな他愛な話をしているときに

「うおおおー！！！！」

と、ものすごい勢いで磯辺と天野が階段から降りて来て、ピンポン

ボタンを押した。結果は同時押しだった

「これは同時ね……」

「どうしますか教官？」

「そうね、では同時に言ってください。では沸点に達した水は何になりますか？」

どちらかが先にしたら揉めると考えたロスマンは、同時に答えを言うことを提案。そして二人は頷きだした答えは……

「湯気！」「水蒸気!!」

と、自信満々に答えるのだったが、  
ブツブツ!!

「えー!?」「なんですとー!?」

不正解なのに驚く二人。

「惜しいですね。正解は気体です」

とロスマンが答えを教えると

「湯気であっているのでは!？」

「湯気だよね？」

「湯気でしょ？」

「私も湯気か水蒸気であっていると思うぜ？エレーナの姐さんは？」

「二人とも間違っていないと思いますが……」

と、アヒルチームとキツツキチームが不満げに言うところロスマンは

「確かに二人の回答は当たらずとも遠からず……間違っただけではありませんが、固体、液体と言えば沸点に達した水の正式名は「気体」と言わなければなりません。答えは正確に答えないと。合格点は出せませんよ」

「物は言いようということか……」

「なるほど……」

ロスマンの説明に磯辺と天野は納得した表情をする

「よし！次の問題で挽回しよう！」

「おうよ！」

と二人は決意を固めるのだが小山が

「あ、ごめんね。お手付きと不正解は即失格なの」

「ええー!?」

本日二回目の驚きの声を上げる二人。

「一度のミスが致命傷になる。それは戦車道でも同じことです。二人ともよく頑張ったけど、ここで脱落ね」

ロスマンがニコツと笑ってそう言う二人はがつくりと崩れ

「くそっ!迂闊だった!いろいろと迂闊だった!!」

「キャプテン!来年のクイズ大会で雪辱です!!」

「そうですよ!キャプテン!」

「来年あるかはわかりませんが頑張りましょう!!」

落ち込む磯辺に後輩である。佐々木と河西と近藤が励まし

「申し訳ねえ!姐さん!樋口!」

「いいのよ、惜しかったけどね。次また会ったらがんばろ」

「そうだけ天野!お前は口が悪いけど頭が切れるからな!次こそは正解できるって!」

と互いに励まし合っていた。そしてそうこうしているうちに河嶋さんを除く他のメンバーが戻ってきた

「ああ、ゆかりん。おかえり」

息を切らしながら戻ってきた秋山に武部が労う

「はあ...はあ...すみません完全にスピード負けしてしまいました...でも二問目こそは!!」

と、次こそはつと意気込むのだが...

「はくい!第一チェックポイント終了!次行こう!次!」

「え!?ちよつと早すぎないか会長!?まだ一問目ですよ!」

突然の切り上げに義弘は思わず突っ込むと会長が

「いやもう二、三問したかったんだけどね、あれじゃくね」

「あれ?」

角谷が指さし、みほと義弘が見たものは

「.....」チーン

階段の天辺で力尽き、白目をむいた河嶋とアリクイチームのももがの姿があった

「これ以上やったら次のチェックポイントまで全滅しちゃうからね

」

「ああ……なるほど」

会長の言葉に皆が納得し、ロスマン先生は

「はあく以前やったときは4問までは持ちましたが……まあ、残り三問はしほさんと翔子のデッドヒートでしたが……」

と、小声でぼそぼそと呟いていた

「じゃあ、次のチェックポイントに行くよ」

「ほら桃ちゃん！置いてっちやうよ」

「ま……待ってよ柚子ちゃん」

と、泣きながらもがーを背負い皆が乗るバスへと向かう桃であった

大洗横断ウルトラクイズ！第二の試練！幕末少女は語ります！

第一チェックポイントを通過し次に到着した場所は……

「幕末と明治の博物館か……」

第一チェックポイントである神社から少し坂を上った地点にあるのは、幕末と明治時代の展示品や歴史が展示されている博物館であった

「なんでここに？」

「せっかくここにきたんだから、ここにちなんだ問題を出すよ」

角谷がそう言うとき大野が

「教官、これ戦車道と関係ありますか？」

と訊くと

「確かに関係なさそうに見えますが、お忘れですか？皆さんは戦車乗りと言っても高校生です。学校で習った基礎知識も受けてもらいます。それに戦車戦でも過去の戦車戦を基に戦術を考えるとときがあります。つまり歴史を知ること大切なのですよ」

「はあ……そういう物ですか？」

大野は納得していない表情をし、首を傾げた

「だが……これは好機だ幕末史でおりようの右に出る者はいない！」

「負けるわけにはいかんぜよ！」

「このチェックポイントは貰ったな！おりよう！」

「頼むぞ。おりよう」

「まかせろ……ぜよ」

得意の分野におりようは得意げな笑みを浮かべる。

「はい！では各チーム、一枚ずつフリップとサインペンを持ってね」

柚子さんの言葉に皆はフリップとサインペンを持つ。チーム代表は、あんこうは冷泉、オオカミは義弘、うさぎは阪口、アライクイはぴよたん。

自動車部ことレオポンはツチャ、そしてカメは同じく河嶋だった

そしてカバはもちろん幕末史が得意なおりようであった  
そしてロスマン先生が問題を読み上げる

「では問題を読みます。慶応4年に始まり明治二年に終わった日本の  
内戦を何と言いますか？」

問題を読み終わると皆はそれぞれフリップに答えを書き始める

「これだよね梓？」

「うん、それであっていると思う……」

阪口は梓に訊き梓は小さく頷く。その様子を見た五十鈴は

「この様子だと皆さん正解してしまいますね？」

「まあ、一問目だし……」

「次からは難しくなるのかな？」

五十鈴の言葉に沙織とみほは頷くと

「そうだろうな。ただ、教科書に載るような問題なら間違えることは  
ない」

答えを書きながら冷泉は答える

「義弘、大丈夫？わかる？」

「大丈夫だ。こんなの常識の範囲だよ」

篠原が心配そうに訊くと義弘はすらすらと答えを書く

「そこまで！ではそれぞれ答えを発表してください」

制限時間を過ぎ、ロスマンが答えを発表するように言う。皆それぞれ  
れ、フリップをだし

「戊辰戦争！」

「戊辰戦争だ」

「同じく戊辰戦争だ」

「戊辰戦争だ」

「西南戦争だつちや……」

「西南戦争です」

と、答えが割れた。だが、答えは

「答えは戊辰戦争です。アンコウ、オオカミ、うさぎさんチーム、カメ  
さんチームは正解です。アライイチーム、レオポンチームは残念なが  
ら不正解です。よって残念ですがここで失格となります」

「そんならここでゲームオーバーだっちゃ……ごめんなさい」  
「ぴよたんのせいじゃないにや！」

「そうだもも！今度は試合で頑張るモモ！」

落ち込む、ぴよたんを励ますねこにやーとももがー。

「すみません先輩。間違えてしまいました」

「まあまあ、こんな時もあるよツチャ」

「次は大丈夫さ。次こそゴールしよ」

「そうだぞツチャ」

同じくツチャを励ますレオポンたちだった。

「さて、カバさんチームは……おりようさん？なんですかその答え？」

「うわっ……細かい字でびっしり書いてる……」

カバさんチームの方を見たロスマンは少し呆気にとられ、柚子は少し引いていた。理由はクリップボードに細かい字がびっしりと書かれていたのだ

「では読むぜよ……こほん……慶応三年の大政奉還は……」

と、おりようは語り始めた

「（ああ……この人あれだ。戊辰戦争のきっかけや終結とか全部語っちゃう人だ……）」

と内心思った。ちなみに優花里も同じ分類であり、一年のころは彼女の戦車談義をよく聞いていた物だ

「これが功を奏し、討幕派に亀裂……はい。ストップ！……まだほんの触りぜよ教官」

突然止められ、不満を言うおりようだが

「いえ、ごめんなさいね。でもこれはクイズであって、歴史の講義ではないの……で、一つ質問んだけど野上さん」

「なっ！本名は止めてぜよ！」

「え？でも本名は野上武子でしょ？それともカエサルさんこと「たかちゃん」のように「たけちゃん」と呼んだ方がいい？」

「やめてぜよー！」

「なんで教官がそれ知っているんですか？」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるおりようと、なぜか自分の愛称を言



わかれて驚くカエサルに対しロスマンは

「あら？知っているわよ。なんならカバさんチームの皆さんの本名も  
言いましようか？」

「すみません！勘弁してください！」

カバさんチーム一同頭を下げ、ロスマンは「あらあら」と言ったよ  
うな表情を浮かべていた。それを見た義弘は

「始まった…先生の悪いところ…」

「ほんとね…でも」

「うん…あれが先生に勝てない理由だよ…」

ロスマンの教え子である義弘、道子、みほは苦笑いをする

「こほん…話がそれましたね。それでおりようさん、肝心の答えであ  
る『戊辰戦争』というワードは書いてあるのかしら？」

おりように訊くのだが、彼女はふつと笑い

「そんな分かり切ったこと書いて何の意味があるぜよ。鳥羽伏見の戦  
いから江戸無血開城。そして東北から函館までの戦場を語る問題  
じゃないぜよか？」

「つまり、戊辰戦争とは書いていないのね？」

「くどいぜよ…」

と鼻で笑うおりように対しロスマンは

「残念だけど。正解ワードがなければ合格は出せないわね…とい  
うことで失格です」

「なんでそうなるぜよ!？」

まさかの不合格宣言に狼狽えるおりよう

「おりよう！お前は間違っていない！」

「そうだ！だが、戦いは時に理不尽！赤軍に冬將軍が味方したような  
ものだ！」

左衛門佐やエルヴィンがフオローするがおりようはがつくりと肩  
を落とす

「我が成すことは…我のみぞ知る…出題者は知らず」

と、落ち込む。そんなおりようをよそに角谷が

「それじゃ時間もないので次のチェックポイントへ行くよ」

と、角谷達はバスへと向かう

「また自爆に助けられましたね西住殿……」

「あはは……いいのかな……それで？」

「何だろう……この虚しさは？」

秋山の言葉にみほと義弘が苦笑すると

「こほっ！こほっ！」

義弘がまた咳を込む

「義君……本当に大丈夫なの？病院に行った方が……注射が怖いなら私も一緒に行くよ？」

義弘の様子にみほは心配そうに言う。

「俺は子供か？大丈夫、大丈夫だって……今はまだな」

「え？」

「いや。なんでもない。それより行くぞ。乗り遅れたら大変だ」

そう言い義弘はバスへと向かい

「あっ！義君！」

みほは慌てて義弘を追いかけるのだった、追いかける中みほは

「(さつき……今は)って言っていたけど、どういう意味？義君……)」

義弘の言葉に疑問や違和感を感じるみほだが、答えが分からず彼を追いかけるのであった

## 大洗横断ウルトラクイズ！第三の試練！乙女の戦場です！

次にバスが止まった場所は大洗のアウトレットだった

「第三エックポイントはここです」

「アウトレットまで来てクイズとか……服買いたくない」

不満げに言う武部に角谷さんが

「買い物っぽいことは出来るよ」

「えっ!？」

その言葉に武部はおろか一年生まで目の色を変え、そして角谷さんはニヤツと笑い

「題して！『クイズ！ばつちり買いまショー!!!』」

と、ノリノリで言う小山さんが

「アウトレットの人たちに協力してもらって値札を全部外してもらってるの。商品を選んで合計金額が二万円未満で二万円に近いチームが勝ちよ」

「なんか楽しそうなクイズ！そう言うクイズなら得意だよ！」

「私たちだって得意ですよ」

「やつと見せ場が来たね」

「この店の相場なら大体わかるよ！」

張り切っている武部にうさぎさんチームも張り切ってそう言う。

彼女たちの好きな買い物だ。はしやぎたいのもわかる

「なお、勝ったチームは選んだ服やアクセサリーをそのまま持ち帰ってもいい。会長と教官の計らいだ」

「「おおお~~~~!!!」」

勝てば、服やアクセサリーなど自分が選んだものがただで手に入ると言われ皆の士気は上がり、目が輝いていた

「でも、どういう風の吹き回しですか？」

「なんか裏があるんじゃないか……」

秋山が疑問を抱き、篠原も疑いの目で見ると、角谷は

「まあ、ここまで頑張ったご褒美ってところかな？たまにはいいこともないとおまんないでしょ？」

「と、いうことで皆さん。次のステージに行くため楽しく買い物を選んでくださいね。」

角谷とロスマンがそう説明するが、義弘と篠原は

「先生……まさか、アウトレットの人たちを脅したとか……何か弱みを使って……」

「あの教官ならありえそう……」

「二人とも何か言ったかしら？」

「なんでもございませぬ」

二人の声が聞こえたのかロスマンはブラックスマイルで二人に訊くと二人は冷や汗を流し首を激しく横に振った

そして、勝利したものはその選んだ商品が無料<sup>タダ</sup>で手に入ると聞き、やる気を出していた

「負けられないクイズになったよ！みんなで四千元つつ買い物すればぴたり賞で勝てるよ！」

「じゃあ、私たち兎チームは6人だから、一人三千三百三十三円ね！」

「「うん!!」」

「(随分と細かいな……)」

計算が苦手な義弘は正確に割り出した澤の言葉に感心する。ちなみに狼チームは現在4人なので一人5千円と決まった

すると誰かが義弘の袖を引っ張った

「ん？」

「……」

相手は丸山だった。

「どうした？」

「……」

「そうか……じゃあ、俺も手加減なしでやろう。」

「……」コクコク

無言なはずの丸山に義弘はニッコリ笑って答える

「ねえ、澤ちゃん？」

「あ、はいなんですか篠原先輩？」

「あの子なんて言ったの？」

「えっとですね。紗季は『たとえば師匠でも手加減はしません。いざ尋常に勝負』……と言っていているみたいですよ」

「師匠って……そう言えば義弘。自分の後継者みたいな子ができたと嬉しそうに言っていたけど……まさか丸山さんだったのね」

篠原が紗季を見てそう言った。この頃、紗季は義弘に戦術を学びに行くことが多くなり、義弘も紗季を自身の後継者として戦術や副隊長補佐と仕事を教えていたりもした。普段弟子を取らない主義である義弘がなぜ、急に彼女を弟子にしたのかは篠原にはわからなかった。

そして一方、みほと秋山たちあんこうチームは楽しそうに話をしてる義弘と紗季を見て複雑そうな顔をし、

ロスマンは微笑ましくに見ていたそしてロスマンは手を叩き

「はいはい！おしゃべりの時間はそこまです！この勝負の制限時間は10分までです！それではスタートしてください！」

と、ロスマンが言い終えるや否や、みんなはそれぞれ服屋や雑貨屋など様々な店へと向かうのであった

そして10分後……

「はい！皆さんそれまでです！まずはあんこうチームから、選んだ商品をレジの人に渡してください」

ロスマン先生に言われ、あんこうチームの面々は籠一杯の商品をレジの人に渡す。そしてレジの人は会計を始めた

「ゆるふわガーディースカート3800円。一凛挿しガラス花瓶2900円。寝たまま本が読める読書スタンド2950円。超合金メルカバ戦車4200円……」

「すみません。私の買い物少し金額オーバーになってしまってます……秋山が申し訳なさそうに言うよ」

「でも、私と麻子さんが少し安かったのでバランスはとれてますよ」

「いい線言ってる！勝てるよこれ!!」

と、五十鈴と沙織がフォローをする。そして最後はみほの商品のだが……

「ボコぬいぐるみ右腕骨折バージョン590円……合わせて14440円になります」

「えっ!?なんでそんなに安いのか?」

みほが驚く中、店員は

「ボコシリーズは今週末まで期間限定で85パーセントオフにてご提供しております」

「(85パーセントって…破格にもほどがあるだろう……)」

店員の説明に義弘は内心突っ込んだ

「盲点だったな……」

「うう……皆…ごめんね」

麻子の言葉にみほはみんなに謝るが

「西住殿のせいではありません。さすがにセールまでは想定できません」

「ええ…それに二万円をオーバーしていませんですし、まだ勝てるチャンスはあります」

とみほを励ましていた

「次は狼さんチームです」

と、次は義弘たちの番になった。そしてレジに置くと店員さんは商品を持ち

「高校生でもうまくなる戦車の操縦術指南書上・下3900円。操縦しながらできる通信と暗号と解読の通信指南書。2500円。戦車でもできる忍術書1500円。英独製の紅茶とコーヒーセット4800円……」

「篠原……?」

「いいじゃない。私だってたまには紅茶飲みたいことあるし…あと後で妹にでも送ろうと思ってね。コーヒーの方を」

「グロリアーナにいるルクリリにコーヒー送るとか嫌がらせか?」

「失礼ね。あの子ああ見えてコーヒー派なのよ?紅茶も行けるみたい

「だけど」

「まじか。初めて知った」

「まだまだ私たち姉妹のこと知らないのね」

義弘の言葉に道子は得意げに笑う中、最後は義弘の商品となった

「世界の戦車道戦車術の歴史5500円・・・合計18200円です」

「おっ！結構いい金額じゃない：それより義弘・・・相変わらず戦術とかの本買っているのね・・・勉強熱心だ事」

「勉強に終わりはないよ・・・生きているうちはな」

「それってどういう・・・」

義弘の言葉に疑問を持つ道子。だが義弘はそれ以上は言わなかった。

その後はカメさんチームの河嶋さんだったが、結果は13900円。買ったものは干し芋や生徒会で使うであろう、文具などであった「次はうさぎさんチームです」

「「はい！」」

そして次はうさぎチームの番になり、それぞれレジに置く

「キャミソールドレス3280円。エクササイズシューズ3100

円。ノンシリコンシャンプー3095円。ハードディスク外付け用

ケース3480円。シルバー製チエーンソーストラップ3320

円・・・」

「いい感じじゃん！このままだったら行けるよ！」

「先輩たちは5000円以上マイナスしているし」

「武藤先輩と同じ金額以上だったら勝てるよね！」

「うん勝てるよ！」

「この勝負貰ったあー!!」

うさぎチームのみんなが勝利を確信した・・・しかし

「高級昆布茶300グラム。18280円・・・合計34555円になります」

「「えええーっ!!」」

まさかの金額オーバーにうさぎたちは驚愕する

「なんで、そんなとんでもない値段の昆布茶が!？」

「誰が買ったのっ!？」

「私じゃないよ!」

「私でもないよ!!」

「違うよ!？」

「私も違う……」

「私じゃないよ?……ということとは」

と皆の視線は一人の少女に向けられる。その人物は

「『紗季っ!?!』」

そう昆布茶を狩った人物は丸山であった。そして丸山は

「……」 ショボーン

誰から見てもわかるくらいに落ち込んでいた

「ああっ!?!そんなに落ち込まないで!」

「見て〜この昆布茶。金箔2グラム入りだっ〜」

「普通の昆布茶と間違えて買っちゃったんだね」

「惜しかったね紗季!」

「誰も怒っていないからね!」

とみんなで先を励ました。

「危なかった……」

武部はほつと胸をなでおろし、

「うさぎさんチーム。失格ですね……よって、あんこう、オオカミ、

カメさんチームの勝利ね。まさかここまで残れるなんて流石だわ」

ロスマンが感心したように言う中……

「惜しかったわね。あなたの弟子」

「まあ、そういう時もあるさ。今度戦術を教える際、彼女のお茶頂こうかな?」

「そう言えば義弘……あんた黒森峰時代は後輩の育成、まほさんに任されてたけど、弟子を取るなんてことなかったのにどういう吹き回しなの?」

「ん?……ただ単にそろそろ『黒狼』の後継者が欲しいかなって思っただけさ。丸山は無口だが、なかなかの素質はあるところぞ……それに」



「それに？」

「いやなんでもないさ……」

そう言い義弘は篠原のもとを去る。そして義弘は

「(死に近い俺も、何かを残し伝えたい……そんなバカな夢の一つぐらい見てもいいだろう?)」

軍帽を深くかぶりながら義弘はそう心の中で思うのであった

そして次こそ最終ステージが彼女らを待っているのであった

## 大洗横断ウルトラクイズ！ファイナルステージです

突如始まった大洗横断ウルトラクイズ。数多のチームを破り、決勝まで残ったのはみほたちあんこうチームと義弘の狼チーム。

「さあ！ウルトラクイズもついにラストステージです！そのステージは!!」

「大洗マリントワーの展望所だあー!」

ドンドン、パフパフと、ロスマン先生と角谷はパフパフ喇叭やタンバリンを鳴らして豪快に言い

「やっぱウルトラだからね〜」

「そうねファイナルステージは高いところでやるのがお約束ね!」

「イエエ〜イ!!」

ハイテンションでハイタッチをする二人を見てあんこうと狼チームは

「何か教官。ノツテきてるね・・・」

「先生：楽しくなってきたのかな？」

「ある意味似た者同士？」

と苦笑する中、

「本当はヘリで屋上に乗り付けたかつたんだけどね〜」

「さすがに予算上できないからね〜：そんなお金があるなら戦車道の予算に回した方がいいからね〜」

「ねえ〜」

と、仲良く言う二人に義弘は

「それで：ファイナルステージのお題は何ですか？問題間違えたらバンジージャンプですか？」

「大丈夫大丈夫。ファイナルは問題とか関係ないから教官」

「ええ・・・最終クイズは・・・」

ロスマンの言葉に皆はつばを飲み込むが彼女が出した問題は・・・  
「じゃんけん50本勝負です」

ズコオーーーーー!!!

ロスマンの言葉に皆、古典的な漫画みたいなずっこけをする

「え!?!じゃんけん勝負って……」

「か、会長……それは流石に……」

「もはやクイズでもなんでもないな……」

篠原、河嶋、冷泉が呆れたそぶりを見せる。そんな中、義弘はロスマンたちをジト目で見て

「先生……もしかしてネタが尽きて?」

「失礼ね・これも試練の一つよ。じゃんけんには運が必要。それは戦車戦でも同じです」

「そうそ。運も必要なんだよね」

「……で、二人の本音は?」

「やっぱウルトラクイズと言えればじゃんけん大会は必須でしょ!」

「あのな……」

二人のハモリ言葉に義弘も呆れる。そしてやっぱこの二人は何処か似ているんだな……と思ってしまうたりもした

「じゃあ……やりましょうか……」

「……そうだね」

五十鈴がそう言うときみほは頷くそして角谷がじゃんけん勝負の内容を説明した

「各チーム、全員が私とじゃんけん勝負をする。一回でも私に勝てればそのチームの優勝ね」

ぎっくりとした説明をする

「やった、それなら楽勝じゃん!早く終わらせて買い物へ行こう!」

と武部はお気楽に言うとき、角谷はニヤツと笑って

「言つとくけど私、じゃんけん強いよ!最初はどのチームがいく?」

「では、私がー!!」

勢いよく秋山が名乗り出た

「では、初めよっか」

こうして、優勝をかけたじゃんけん大会が始まるのであったのだが……

「こんなことって・・・あるんだね」

「だから私最初に言ったでしょ? 『じゃんけん、強いよ』って」

「強いとかそういう次元での問題では・・・」

「じゃんけんで・・・50連敗・・・」

「相子ですら、三回ぐらいでしたからね」

「奇跡を見た・・・」

あんなこうチームが愕然とする中、狼チームでも

「ええ・・・ここまでじゃんけん強い人初めて見たわよ。三チーム全員敗北とわね・・・」

「ですが、義弘さんだけ別格でしたね・・・」

「ええ・・・相子続きで、30回延長戦してたもんね・・・」

「でも最後、いきなり武藤先輩。せき込んで負けちゃいましたけどね・・・惜しかったな・・・」

「いや・・・多分。永遠と相子しか出なかったわよこの勝負」

篠原の言葉に小波、服部が頷く。最後の勝負は全員負け。だが、狼チームの車長である義弘だけ角谷相手に善戦をしていたのだが、突然咳を込み始め、その隙に負けてしまい、このウルトラクイズは勝者のいない結果となってしまった

「アゝハツハハ!!参ったかあゝ?」

勝者の角谷は高らかに笑いだす。すると・・・

「あの・・・教官」

「ん?なんですか秋山さん?」

「結局、このクイズ大会と戦車道・・・何の関係があったのですか?最初に説明は訊いたのですがやっぱり・・・」

腑に落ちない。そう言いたげな表情に皆は頷くとロスマンは

「そうね……港ではそれっぽいことを説明しましたが……実はこのクイズ自体、戦車道特訓とは一切関係ありません」  
「え?」

ロスマン先生のまさかの発言に角谷以外は皆目を丸くする

「強いて言うのであれば、これは息抜きのためのイベントです」

「息抜き……ですか?」

「そうです……例えばそうですね:秋山さん」

「は、はい?」

「戦車でずつと砲を撃ち続けるとどうなります?しかも連続で撃つたとなると?」

「そんなことをすれば、砲身が使えなくなってしまう」

「そうですね……では五十鈴さん?華道でもずつと休まずに練習をすることは出来ますか?」

「……いいえ。華道でも休まずに花を生け続ければ集中力が落ちてしまい奇麗に活けることが出来なくなってしまいます」

ロスマン先生の言葉に秋山と五十鈴が答えるとロスマン先生は頷き

「そう、その通りです。以前見た練習を見ましたが、みんな少し行動が硬く見えました。決勝戦や廃校阻止というプレッシャーが原因というのを見てわかりました。ですがそんな状態では気疲れして決勝で本来の力を出し切ることは出来ません」

「だから、クイズ大会を?」

「ええ……いい気晴らしになったんじゃないのかしら?」

ニツコリ笑うロスマン先生に皆はそう言えば、先ほどまでみんなは決勝戦で黒森峰に勝ち、優勝しては意向を阻止するという重いプレッシャーとのしかかっていた緊張感がほぐれた気がした。

どうやらすべて彼女の計画通りになったみたいだ

「じゃあ、これでクイズ大会終了!この後、自由時間だから楽しんでね」  
「……」

クイズ大会が終わり皆が解散しエレベーターで降りる中

「……あつ!それと武藤君はちよつと残つてくれる?」

「ん？」

急に呼び止められた義弘。そしてみんながエレベーターで降り、展望室に残っているのは角谷と義弘だけだった

「……で、俺だけ残してどうしたんですか会長？」

「いや〜どうしても武藤君と二人きりで話したいことがあつてね〜」

と少し苦笑じみた表情でそう言う角谷に対し義弘が分からないというような表情をし首をかしげると

「武藤君にはさ、西住ちゃん同様に感謝しているよ…本当に。ここまですでこれたのも奇跡だと思っっているよ」

「礼は不要ですよ。それにプラウダ戦でも言ったようにあなたのおかげで俺はまた戦車道をする事ができた…みほと再会してこうして戦車道をする事ができた。だから俺は心の底からあなたに感謝しているんですよ。ですから決勝でもみんなと協力して勝ちましょうよ」

「そっか……」

「言いたいことはそれだけなんですか？」

「いや……ここからが本題……武藤君さ」

角谷がそう言い小さく息を吸うと

「あととは私たちに任せて。武藤君は観客席で私たちの戦いを見てくれないかな？」

「……」

突然の言葉に義弘は『彼女は何を言っているんだ？』というような怪訝な目で見えるが、すぐにその理由に気づく

「……先生に……訊いたんですか？肺血病のこと……俺が長く生きられないことに」

義弘が角谷に訊くと彼女は悲しそうな表情で頷いた

「うん……それ以前におかしいと思ったのはプラウダ戦の時、義弘君私と話をしているときに激しく咳をしたでしょ？その時口を押えていたハンカチを落としたのを拾ったんだけど……そのハンカチに血がついていた……それに君は以前から顔色が悪くなっていたし、

まさかと思ったんだけど……」

「……………」

真剣な眼差しで言う角谷に義弘はふっとため息をつき、降参と言いたげに両手を上げ

「本当に会長は勘が鋭いですよね……まるでもう一人のロスマン先生のようなですよ……」

「……じゃあやっぱり」

「ええ……お察しの通りですよ会長。あと数日……いや遅くても180日……俺が生きていられる時間です」

「そう……じゃあ、武藤君」

「残念ですが、俺は戦車を降りる気はありませんよ。角谷会長。俺は最後まで戦車乗りとして最後まで戦いますよ」

「だったら、死んでもいいの?」

「本望……とまで言いません。ただ俺は中途半端なことは嫌いですので」

「西住ちゃんには?どう説明するの?」

「……心配かけたくねえ。会長だったら俺と同じ状況だったら話すんですか?小山さんや河嶋さんに?」

「……………」

その言葉に角谷は言えなかつたら、もし自分が彼と同じ状況だったら果たして親友である二人に話せただろうか?

「否」

それは出来ない。二人の悲しい表情は見たくないから。自分だけたらしきつと、今いる彼と同じ、ずっと胸の内にとまっているかもしれない

そう……今、一人で戦車戦以上の戦いをしている彼のように

「そう言うわけです……ではそろそろ行きますね……それとこれは会長が責任を感じる必要はありません。全部俺の勝手な我儘なのですから」

そう言いエレベーターに向かう義弘に角谷は

「うん……分かったよ……でもねあまり血迷ったことはしすぎないで

ね・・・西住ちゃん悲しんじゃうから」

とそう言うと、彼は振り向き寂しそうに微笑んで

「会長・・・もう俺には血迷うほど血なんて残っちゃいけませんよ・・・」

と、そう言いエレベーターに向かうのであった

「・・・」

残された角谷は

「はは・・・何が生徒会長だよ・・・私は無力だね・・・ごめんね武藤君。西住ちゃん・・・」

悲しそうな表情でそう呟く角谷であった

「・・・」

そしてその会話をひっそり聞いていた者がいた

「・・・義君が・・・死ぬ？」

それはみほであったのだった

同時刻、大洗上空に一機のヘリがやってきた

「ここが大洗学園・・・」